

IS 〈インフィニット・ストラトス〉 —IaI

SDデバイス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本来の『織斑一夏』とは中身が違う『織斑一夏』によるインフィニット・ストラトスのおはなしです。

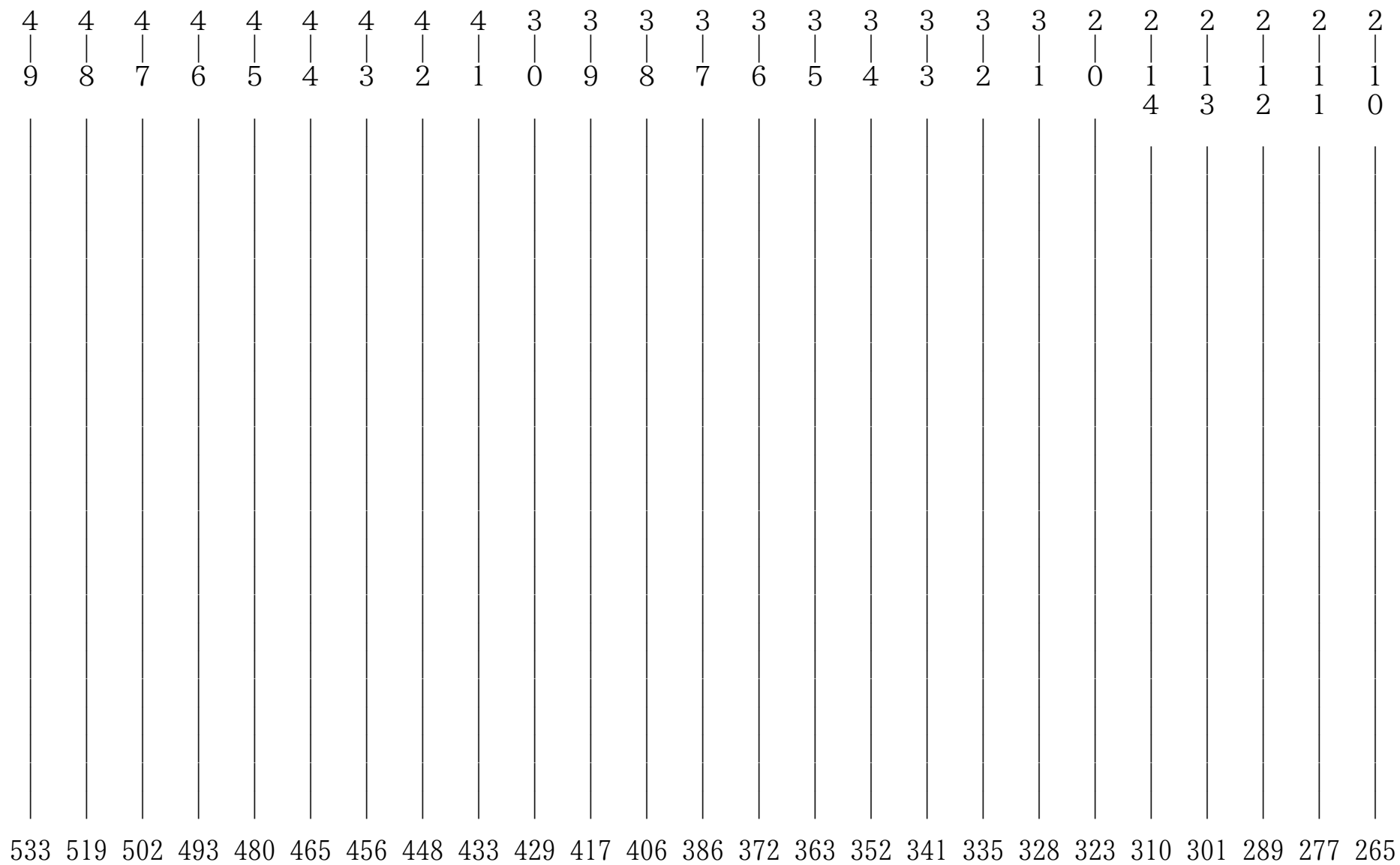
転生というか憑依というか、そういう感じでこの作品の『織斑一夏』は本来の『織斑一夏』とはそれなりに別モノとなっています。

オリジナルな設定、キャラ、メカがひよこひよこ顔を出します。これらが苦手な方はご注意ください。

Arcadia様の方にも掲載しています。

目次

2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	1	1	1	1	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1
										4	3	2	1	0									
255	246	235	222	208	201	188	177	168	161	145	128	113	104	89	76	63	52	44	38	23	15	7	1



5	5	5	4	4	4	4	4
3	2	1	1	1	1	1	1
			4	3	2	1	0
622	609	595	588	572	561	550	540

▽▽▽

『IS (アイエス)』

正式名称『インフイニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して開発されたマルチフォーム・スーツ。

『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果としてスベックを持って余したこの機械——この飛行パワード・スーツは一度『兵器』へ変わり、その後各国の思惑によってもう一度変化し、最終的に『スポーツ』として落ち着いた。

原則として、女性にしか扱えない。

▽▽▽

「これが終わったら寝れるこれが終わったら寝れるこれが終わったら寝……」

中学三年生の二月、受験シーズン真っ只中。

寒空の下で呪詛を呟きながら目的地へと歩を進める。昨年何かカニンング事件が起きたとかで、各学校は入試の会場を二日前に通知する様にとのお達しが政府から出ているらしい。なので一番近い高校の試験のために四駅ほど電車に揺られる羽目になった。

試験会場の距離と俺の学力は関係ないので、移動自体は実際どうでもいい。でも電車に揺られている間睡魔と闘うのが大変辛かった。というか今も辛い。

これから受験するのは私立藍越学園。自宅から近いとか、学力が分相応と色々あるが、最大の魅力は学費が安い事だった。私立なのに格安とも言えるべき学費の安さなのだ。

「はあ……ともかくさくつと自立しねーとなあ」

織斑一夏には両親が居なかった。なので俺を養ってくれているのは歳の離れた『姉』だ。

『弟』として——いや『俺個人』はこの状況があまり快いものではない。

(何時までも世話になる訳には、さすがになあ……)

家族なのに気にし過ぎではないかと知人に言われた事がある。確かにその通りかもしれない。でもそれは普通の家族に相応しい意見だと思う。

厄介な事に俺と彼女の関係はなかなか妙ちくりんな関係なのである。よくあるのは血の繋がっていないとかだが、俺の場合はもう少し妙だ——血の繋がった他人とでも言おうか。

人間というのは一人養うだけでも金がえんらいかかる。

彼女の収入は『弟』である俺を養うのに十二分だったが、それはつまりそれだけの対価を得られる程の仕事をしていたという事でもある。

俺は彼女に世話になった分をしつかり返さねばならない。そのために俺は中学卒業後の進路を就職でなく進学にした。

目標とした高校は卒業後の就職先の斡旋が豊富なのだ。ある程度のランクの企業で普通に働くのは地道だが、確実だ。

ただの自己満足であるが、それでもこれは俺がやるべき事の一つだ。恐らく彼女に面と向かって言えば鼻で笑われる事だろう。脊髄反射で目に浮かぶ。

いや、俺はまず彼女に礼を受け取らせる事が出来るのだろうか。これまでを振り返るにまずそれが物理的に不可能な気が………：体鍛えよう。うん。

「っしん！」

とはいえ取らぬ狸の皮算用。眠気覚ましに気合を入れる意味も兼ねて頬を叩く。

目下の目標は高校受験合格。それだけを考える。

元々同時に複数のことを考えられるほど出来た頭ではないのだ。これから後の事は受かってから考えればいい。

学力には正直さっぱり自信が無いが、それでも可能な限りの努力はした。しかし受験勉強というのは何回やっても慣れないものである。結局模試でA判定取れなかったし。ていうか勉強って言う行為に慣れるとかあるんだろうか。

緊張を落ち着けるために数回冷たい空気を吸い込んでから、試験会場である多目的ホールへと入る。

そして数分後。

「……………」

あふん。超迷った。

一面ガラス張りの廊下を眺めながら通り過ぎ、タイルの貼られた壁の横を歩き、埋め込み型の照明の下を歩き回る。天井が高いと開放感があつて好きだ。

どうもこのホールは機能美よりも見た目の美を優先しているらしい。美的センス皆無なのでわからないが、見る人が見ればたぶん凄いだらう。たぶん。

「階段どころか……案内図すら見つけられない……………」

そんな事はどうでもいい、試験が始まる前に既に心が折れそうだった。

会場の中で迷子になって試験に遅刻なんて冗談じゃない。誰かに道を聞けばいいのかもしれないが、何故かさつきから誰ともすれ違わない。

「ええい、ままよ!!」

目に付いたドアを開ける。流石に適当に選んだ場所が合っているとは思わないが、それでも誰か居れば道が聞ける筈だ。

「あー、君、受験生だよ。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ四時までしか借りられないからやりにくいっらないわ。まったく何を考えて……………」

まさかの正解。部屋の中に居たのは女性教師と思しき人物。三代後半くらいであろうか。何か忙しいのか、女性教師は指示を飛ばして引っ込んでいった。一度も俺の顔を見なかった辺り、相当忙しいらしい。

「……………きがえ?」

何で受験に着替えが必要なのかがよく解らない。数は少ないが、これまで経験した受験だと着替えが必要な事は無かったと思う。

(あ、もしかしてカンニング対策とか? と、時間が無いって言った



な)

さっきの教師は『時間が押している』と言っていた。道中で散々迷ったせいも、実際時間は結構ギリギリだ。慌ててカーテンをくぐり、中に入る。

——室内には、それが置かれていた。

一言でいってしまうなら『鎧』。しかし各部にはそれが現代の科学によって生み出されたという事が窺い知れる機械部品が散りばめられている。

あるいは中世の騎士の鎧、あるいは現代科学の粋、そのどちらも想起させる鋼の塊は、跪く様な姿勢のままただ黙ってそこに鎮座している。

「うわー……本物の『IS (アイエス)』だ。初めて見た……」

俺の目の前にあるのは、現代社会にして最強の存在として君臨するパワードスーツだ。今まで雑誌やネットで眺める事は数あれど、実際に肉眼で見たのは初めてだ。

「うわあー……かつげえなあー…………」

思わずほうとため息が漏れる。

男の子に生まれた以上、こんなメカメカしいものに惹かれない訳が無い。出来るのなら、死ぬまでに一度はこのパワードスーツを纏ってみたいと思う。これで空を自在に駆けてみたい。恐らく大半の男性がそんな事を夢想しているはずだ。

そう、出来るのならば。

「何で男には動かせないかなあ……」

その事実を思い出して、昂った気持ちが見るみるしぼんでいく。I Sには絶対の原則として、女性しか扱えない。この機械は、何故か女性にしか反応しないのだ。

「最初に存在を知ったときは馬鹿みたいに舞い上がった。こんなのが実用化されてるなんて——実用化出来るなんて思わなかったもんなあ」

初めてI Sの存在を知った時の事を思い出しながら、主なき騎士の鎧に歩み寄った。このI Sが黙しているのは機械だからなのだろう。

けれども黙する鋼を見ているとお前（男）に用は無いのだと、そう告げられている気がして少し寂しくなる。

「俺達の何が不満なのかね、君達は。俺は馬鹿だから、教えてくれると助かるんだけど」

俺の手が、ISに“触れる”。

「……………ツ!？」

瞬間、脳に突き刺さるような鋭い痛みが走る。同時に脳の隅で何かがちりちりと音を立て、嫌悪感が意識中を駆け巡る。

嵐の様なそれが過ぎ去った後に、今度はキン、と澄んだ金属音が頭の中に響き渡った。その音を皮切りに意識の中に膨大な本流が流れこんでくる。それは情報だった。目の前の『IS』の基、本動作操縦方法特性装——備活動限界行動範囲センサ精度リーダーレベルアーマー残量出力限界、……………

「……………、ツ」

頭の中を不規則に情報の奔流が駆け巡る。脳髓の中身を好き勝手に蹂躪されるとこんな感じになるのだろうか。さつきまで知らなかった事を無理やり理解させられる感覚。

そして憧れと羨望の対象であった鋼の塊についてその総てを把握して、理解している自分が無理矢理に作成される。

“じりつ”、と脳の隅で一際大きな異音が鳴った。

それを境にした後は、それまでに比べて酷く緩やかで自然なものだった。意識に直接浮かび上がるパラメータは、視覚野に直接接続されたセンサーが表示している。その程度の事は、もう考えるまでも無く理解できる自分が居た。そんな自分になっていた。

「……………ま、さ、か」

動く。

決して自分には動かせないはずのそれが、動く。たやすく動かせる。今では無骨な鋼の塊は物理的にも精神的にも俺の手足の延長と化した。

肌の上を広がっていくのは皮膚装甲（スキンバリアー）。

身体を重力から解き放つたのは正常作動した推進器（スラスタ）。

右手に集まった光が形を成して生み出すのは、一振りの装備（近接ブレード）。

知覚精度の根底を最適化されたハイパーセンサーが書き換える。

『IS』が、俺の知らない世界を送ってくる。それはまるで、まるで

総てが変わり始めたその瞬間は、俺の終わりの始まりだった。

▽▽▽

『IS学園』

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。

——IS運用協定『IS操縦者育成機関について』の項より抜粋。  
▽▽▽

ここから消えてなくなりたい。今直ぐに。早急に。

教壇の上では現在進行形で眼鏡をかけた小柄な副担任が何か話をしている。が、さつきから話がまるで頭に入っていない。というか聞いている余裕が無い。

教室はしんと静まり返っていて、副担任の先生の声以外一切音が無い。それがまた苦痛だ。否が応にも自分が置かれている状況を思い知ってしまう。

もし今までの人生で一番辛い日は何時かと聞かれたら、俺はこの先何があっても今日だと答えるだろう。

今日は高校の入学式。

クラスメートが全員女子——というか、学校で男子は俺だけ。

そんな、入学式。

—————(きつい)

俺の席の位置は中央の前列。教室の誰からも見える位置。だがこの視線の束は位置でなく、唯一の『男』という俺の存在そのものが引き起こしているのだろう。

背中に突き刺さる無数の視線視線視線視線視線——度を越えた視姦は下手な暴力を超える。俺はそれを今日身を以て理解した。こんなの死ぬまで知りたくなかったよちくしょうめ。

現在の状況は酷く混沌としているが、ここに到るまでの経緯は酷く単純だ。俺はISを動かせるから、専門の教育機関であるIS学園に入学した。それだけ。

問題なのはISは原則として女性にしか扱えないという事。そしてここはISを扱う学園なのだから、その生徒は全員女子。

——はい、地獄の様な状況の出来上がり。

震えそうになる身体とカチカチと鳴りそうな歯を気合で押さえ込みながら、俺はただ耐える。この時間が一刻も早く過ぎ去ってくれることを祈りながら。

そうそう、もしも過去に行けるのならば今とてもやりたいことがある。女の子いっぱい学園生活を想像し、実は浮かれていた過去の己を全力で殴り飛ばしてくれる。

女の子いっぱい空間がこんなにも居辛いものだなんて知らなかった。更に男が俺一人なせいとか、肌で感じ取れる程にクラスメートの意識が俺へと注がれている。まあ女の子に囲まれるなんて一部の人以上まずありえないのだから解らなくて当然とも思うが。

(……別に俺の人生が寂しいわけじゃない解らないほうが普通なんだようん)

いかん、違う方向に折れそうになった。

ともかく『今』も『前』も囲まれるどころか交流経験が殆ど無い。こんな状況で平気で居られる訳がない。

あ、仲の良い女子は居たがそいつとは悪友と呼ぶべき関係……いやあ、下僕と主人の関係だったかもしれないなあ。言うまでもなく俺が下僕の方で。

しばらくは自分が置かれている状況も忘れて蘇る記憶(トラウマ)に浸っていたが、ふいに感じた違和感に従って顔を横に向ける。

違和感の正体は一つの視線だった。いや視線自体は近所に配って回りたいくらい浴びているのだが、その中でも異質というか、ともか

く他とは違うその視線。

一人の女の子と——まあ女子しか居ないから女子なのは必然なんだけど——目が合った。

しののほうき  
篠ノ之箒。

彼女がこのクラスに居ることはクラス名簿で名前を見つけて初めて知った。

一応、このクラスの中で唯一俺——いや、『織斑一夏』と面識のある人間だ。彼女と『織斑一夏』はいわゆる幼馴染という間柄に値する。(彼女が……篠ノ之箒、さん)

目が合った途端、篠ノ之箒はふいと視線を逸らしてしまった。確か彼女と『織斑一夏』の交流が途絶えてからは既に六年近く経過している筈だ。もしかしたらこちらの事を覚えていないのかもしれない。

そうであるところからも少しは気が楽なのだが。

「——くん、織斑一夏くんっ！」

「はい、っ！」

篠ノ之箒に傾いていた注意が強引に声の方向へと引つ張られる。反射的に返事をしたら思いっきり舌を噛んだ。

俺の醜態に対し、教室のあちこちからクスクスと小さな笑いが聞こえてくる。穴があつたら入りたいというか、穴を掘つてもいいですか。

「だ、大丈夫？　び、びっくりさせてごめんね。お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね自己紹介、『あ』から始まって今『お』なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？」

口内で発生した激痛に悶える俺に対し、とても申し訳なさそうに頭を下げながら話しかけてくる副担任の先生もまた女性。今気付いたが、黒板の前に浮遊するウインドウに『山田真耶』と表示されている。恐らくそれがこの先生の名前であろう。

今は教壇の上に立っているのだからにくいのが、かなり小柄な女性だ。加えて容姿も幼さが強い。教師なのだから当然こちらより年上なのだろうが、同年代——下手をすればもつと下にも見える。

普段ならこんなにも可愛い女性が自分達のクラスを受け持つと聞かされれば雄叫びと共にガッツポーズの七つもするのだが、その余力は残っていないかった。

そういえばこの山田先生は副担任らしいが、ならば担任は誰なのだろう。いや女性なのはわかるけど、何で担任なのに今居ないんだろか。

「え、っと……『お』はまだ俺の番じゃ——じゃなかった。わ、わかりました自己紹介！ 自己紹介ですね。や、やります、今直ぐやります！」

久しぶりに、間違えかけた。

迂闊さに焦りつつも、自分の中からそれが消えていない事に少し安堵する。

山田先生が俺の言葉に疑問を感じる暇を与えぬよう、椅子を鳴らし立て立ち上がる。そしてくるりと反転して、クラスメートに向き直った。

ザー、と音が聞こえる。うん、まあ顔の血の気が引く音ですこれ。

このクラスは総勢三十名。男は俺一人だから一を引いて、残りである二十九が目の前に居る女性の数。彼女達の持つ五十八の瞳から放たれる視線が容赦なく俺に突き刺さる。後ろから感じる二つは山田先生だろうか。つまりはクラスの全員が一人残らず、俺に注目していた。その強烈な視線は一挙手一投足を見逃さないと語る様だ。

「お、織斑一夏、です………よ、よろしく、お願いします………」  
やべえ声おもいつき引き攣った。

一礼の後に顔を上げると、期待に満ちた無数の視線が眼に入る。彼女達の目は、明らかにこれから始まるであろう俺の話に期待を寄せている。

(え何このさあ次はってこの空気いやこれ以上何言えっていうのさ大体もう立ってるだけでいっばいっばいなんですけど本当勘弁してくださいお願いします謝りますから)

だらだらだと噴き出る冷や汗が流れ落ちて行く。何を言うかは

まるで思いつかないが、このまま黙り続けている訳にもいかない。意を決して、俺は息を深く吸い込む。

「以上!!」

女子が何人かずっこけた。

いや本当ごめんなさい無駄に長引かせて。でもほら、終わりは結構凛々しく締められたと自負しております。これで何とかご勘弁を願いたい。

べしんつ

自席にて妙な満足感に浸っていると、突如頭を思いつきり叩かれた。俺の意志とはまるで無関係にあらぬ方向にぐりんと傾く首。遅れてやってくる鈍痛。

人間という生き物は例えその内容が自分にとって災いであっても、慣れ親しんだものはそれはもう鮮明に記憶する。殴り方や威力で、その相手を特定させる程に。

「まさか——」

そして、そこには思った通りの人物がいた。黒い髪、黒いスーツ、黒いタイトスカート。長身の身体は鍛え上げてられているのに分厚いというよりもすらりとしたシルエットをしている。何よりも印象的なのは、その釣り上げられた目の放つ獣の如き鋭い眼光だろう。

彼女は『織斑一夏』の実の姉であり、唯一の家族でもある。

職業不詳。

月に一、二回しか家に帰って来ない。

知る限り最強の姉。

密かにその内姉の枠を超えて人類最強になるんじゃないかと危惧している。

そして、『俺』がこの世で一番世話になっている女性。

彼女の名前は『織斑千冬』。

「ち、」

「学校では織斑先生だ」

「まだ一文字なのに……………」

千冬さん、と言おうとしたらはたかれた。



なんということでしょう。右しか向けなかった首が今度は左しか向けないように!!

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

山田先生には打って変わって優しい声色で応じる実の姉の横で、俺は必死に首の方向の矯正を試みる。くそう、今度は右に行き過ぎた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五才を一六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いな」

有無を言わさぬ断固とした口調。

流石に俺はもう慣れてるし(平気という訳ではない)、むしろ彼女はこうでなければとすら思える。でも他のクラスメートには流石にキツすぎるんじゃないだろうか。

「キヤ————！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から!!」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

何で超受け入れられてるんだよちくしょう俺が間違ってる気になつてきた。

机に突つ伏した俺の真上を通り過ぎた黄色い声が、絶え間なく壇上の千冬さんへと降り注いでいるのが見ずとも感じられる。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

騒がしさを増す女子に実の姉は凄まじく鬱陶しそうに顔をしかめた。それはきつと飾り気の無い本音であろう。例えそれで相手との関係が悪化するのだとしても、彼女はこういう時躊躇わずに発言する。

「きゃあああああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

もう嫌だこのクラス本当に嫌だ理解出来ないしたくない頭痛い誰か助けて。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いやさつき普通にしたんですが。ていうか千冬さんってここで、べしんつ。」

「織斑先生と呼べ」

「了解であります、織斑先生」

『そろそろぱっくり割れそうなんだが』という事を訴えてくる自分の頭を抑えながら何とか返事をした。頭もだがこう何度も左右を行き来している首もそろそろ心配である。

「え……？ 織斑くんって、千冬様と知り合い……？」

「親戚とかなのかな……？ もしかして姉弟だったりして？」

「それじゃあ世界で唯一男で『IS（アイエス）』を扱えるっていうのもそれが関係して……？」

教室のあちこちからちらほらそんな声が聞こえてくる。

どうやら俺——というか『織斑一夏』と『織斑千冬』が姉弟だという事は知られていなかったらしい。割と珍しい苗字だから直ぐわかりそうなもんだが。

「ああつ、いいなあつ……！ 代わって欲しいなあつ……！！」

（……………『代わる』、かあ。含みはないんだろうけどねー）

考えてどうにかなるものではないけれど、それでも俺はこれを考えてのをやめてはいけないだろう。名前も知らないその君、自分でない誰かに代わるのは身を削るほど大変だからあまりオススメできないよ。

視線。

教室の視線の殆どが織斑千冬に注がれている中、明らかに織斑一夏に向いている視線がある。それは教室を飛び交う熱っぽいそれとは

対象的に、どこか冷めた視線だった。

横目でちらりと確認すると、視線の主は篠ノ之箒だった。先程までは窓の外へと向いていた箒の視線は今はこちらに向いている。

(……………?)

篠ノ之箒の様子に、どうも妙なひっかかりを覚える。

が、唐突に鳴り響いたチャイムの音が思考の進行を遮った。

「さあ、SHR（ショートホームルーム）は終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろよ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

鬼教官宣言に対し湧き上がるのは歓喜の声。

俺の他にもう一人くらいこの言葉にため息を吐く感性の持ち主が居る事を切に願う。

(人気があるだろうとは思ってたが、ここまでとは…………)

彼女の知名度の高さは知っていたが流石にここまで熱狂的だとは。

織斑千冬——日本の元代表IS操縦者であり、公式試合での戦歴は無敗。国際大会での優勝経験もあり。しかしある日突然現役を引退し表舞台から姿を消す——

現状から察するに引退後はIS学園の教師として後進の育成に当たっていたという事か。というかそんくらい隠さんでも教えてくれないだろうか。俺はてっきり腕っ節を生かした危ない仕事をやってるもんだとばかり。

「何時までくだらん事を考えている。授業を始めろ馬鹿者が」

これが以心伝心ってやつなんだろうか。

とりあえず折角直したのにまた右向きになった首を直すとしよう。

▽▽▽

『織斑一夏』  
おりむらいちか

「世界で唯一 I S を動かせる男子」。

家族に姉である『織斑千冬』おりむらちふゆが居る。両親は不在。

小学校五年生の時に事故に巻き込まれ頭部に強い衝撃を受ける。

それが原因で一時昏睡状態に陥り、回復後も記憶の混乱が見受けられた。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

俺の名前は『織斑一夏』。

戸籍にもそう記されているだろうし、俺のことを知っている人間に俺は誰かと問うたら大抵『織斑一夏』だと返されるだろう。

例外としては質問に素直に答えられない底意地の悪い相手や、愛称を用いる習性を持つ相手が挙げられる。でもその例外も俺を『織斑一夏』だと認識しているという前提がある。

俺の事を知らない相手は勿論俺を『織斑一夏』とは認識しないだろうが、それでも俺を俺として認識した後に用いるのは『織斑一夏』という名前なんだろう。だってこの世界には俺を『織斑一夏』だと証明するものが満ち溢れているのだから。

でも、『俺』は『織斑一夏』じゃない。

それを示すもの——『織斑一夏』ではない、俺が『俺』として『俺』の人生を過ごした記憶——が俺の中には確かにある。とはいえ俺が『俺』であるとするのはその記憶しかないとも言える。

だって俺の名前は『織斑一夏』で、俺の外見(身体)も『織斑一夏』で、そして歩んだ人生も当然『織斑一夏』なのだから。

うんもうわっけわっかんなくなってきた。

相変わらず何度考えてもこんがらがらるつたらない。

ある日『俺』は死んだ。

次に目が覚めた時、俺は『俺』でなく、『織斑一夏』だった。結局、わかっているというかハッキリしているのはこれだけしかない。

俺は確かに『俺』として生きていた。けれどある日死亡した。これはいい——いや自分が死ぬのはすげえ良くないんだが今は置いておこう。こればかりは事実だから仕方ない。

問題はその後から始まる。

目が覚めたら別の場所で別人で、俺は『俺』じゃなくなっていた。聞いたこともない地名に建つこれまた聞いたことのない名前の病院、その一室のベッドの枕元には、まるで知らない誰かの名前が貼織斑一夏つてあった。

そして鏡を見れば見たこともない顔が映っている。おまけに年齢がぐつと巻き戻っているときたもんだ。

医者が言うには、この男の子は事故に遭って頭を強く打つたらしい。そして今まで意識不明だった。でも今は違う。だって目を覚ましていなければ話は聞けない。

けれども、その中身がすっかり入れ替わっている状況で、その子は果たして本当に目覚めたと言えるのだろうか。

無数の検査と質問攻めから解放されたのは夜になってからだだった。ちなみにひたすら「？」って感じで対応していたせいかな、記憶障害と診断されていたらしい。

灯りの消えた病室で、とにかく考えた。

目が覚めたら他人になっていたなんて、非常識な現象についてとか、俺はこれからどうすべきなのか考えて考えて考え続けた。

そして翌日、俺は高熱を出した。

知恵熱本当尋常じゃねえ。寝こんでる間夢の中で何か誰かと談笑する幻覚まで見ちまった。回復するまで三日もかかったし。

さておいて、考えた果てに思いついたのは転生とかその手の単語だった。

でも本当に転生なんて現象が本当に起こりうるのだとしても、その際に『俺』の記憶は消えている筈だ。

次に思い当たったのは、事故で頭を打ったショックで『前世の記憶』なるものが呼び戻されたのではないかという考え。

でもこの考えにも素直に領けない要素が幾つかある。今の俺には『俺』以外の記憶がない。『今』である『織斑一夏』の記憶はどこへ行っってしまったのか。

一体どれだけ器用な頭のぶつけ方をすれば『織斑一夏』の記憶を綺麗に消去し、『俺』の記憶だけを呼び戻すなんて真似ができるというのだ。

そしてもう一つ。

俺は、自分が何故死んだのか覚えていない。

確かに死んだ事は、心に刻み込まれている様に確信できる。でも何時何処でどんな風に死んだのかを俺はまるで覚えていない。記憶の方は特に何も無い日常の途中でブツツリと途切れている。

もしや死を自覚出来ない規模の災厄にでも巻き込まれたのだろうか。平日の日本の街のド真ん中でそんなもん起こってたまるか。やりにもよってミステリーの犯人暴露の途中だったんだぞ。

それに死の原因は覚えていないが、感触は残っていた。一瞬で死んだのならば、そんな感触を感じる暇はなかったはずだ。

何度も自分の最後の瞬間を思い出そうとして、俺はその度に言いようのない恐怖を想起する羽目になった。どんな恐怖かといえば——形容できない。

『わけがわからないがとにかくこわい』

俺の感性ではこれ以上うまく言いようがない。ともかく形容しがたいまでに強烈な死の確信が俺の中には刻み付けられるように残っていた。

そう、本当に怖かったんだ。

想い出すまでもないくらい、気を抜けば——考えるとという行為に夢中になっていなければ——直ぐにでも心の奥底から這い出てくるくらいに圧倒的な、『俺』の根本を揺さぶるような恐怖だった。

だから、『今』の方で目覚めた瞬間に、俺は驚きを忘れてまず最初に歡喜した。

心の底から生きている事を喜んだ。ただ、生きているというその事実が嬉しくて嬉しくてしようがなかった。

——この生は織斑<sup>見知らぬ誰か</sup>一夏の人生を横取りしたものでないのかと、心で確かに感じた罪悪感の予兆を押し流してしまいう程に。  
生きている事が、本当に嬉しかった。

「ちよつといいか」

休み時間に入ると、一人の女の子が俺の席へとやって来た。

彼女の名前は『篠ノ之箒』。小学校四年の終わりまでの時を共に過ごした『織斑一夏』の幼馴染の女の子。

『俺』が、今日“初めて会った”女の子。

▽▽▽

教室や廊下に展開する見物人の群れを抜け、屋外へと出る。それでも建物と屋外の境目辺りに人の気配を感じるので、誰かが聞き耳でも立てているんだろう。

教室からここまでの短い移動でも、数多の女子生徒が逐一こちらの様子をうかがっていたのだからもう言葉も無い。男がよほど珍しいと見えるが、そのせいでこちらに致命的な居心地の悪さをもたらしてくれる。とはいえ時間が解決してくれるまでは耐えるか慣れるかしかないのだろう。

しかし男が一人とはいえ別に星に一人とかでなく、学園の生徒で一人っただけだ。彼女達だって親含め今まである程度は男と接してきたはずだ。なのにまあどうしてこうも騒げるのかちよつと疑問だ。ていうかぶつちやけ何か怖い。皆よくわからないモノに駆り立てられている気がするんだよ。上手く言えないけどさ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

いや。

いやいやいやいや。何か用があるから俺呼び出されたんじゃないの。なんなのこの沈黙。

そろそろ辛くなってきたんですけど。何、俺が何したの。

ともかく、さつき呼び出された時点でこの娘が——篠ノ之箒が織斑一夏の事をはつきり覚えてるのは確認できた。

微かに記憶にあるくらいなら、こうして休み時間にわざわざ呼び出して話そうとは思わないだろう。だから少なくとも『顔を見たら言いたい事が直ぐに浮かぶ』位には彼女は織斑一夏の事を気にしているということだ。

けれど俺は彼女の事をこれっぽっちも知らない。

彼女と一緒に過ごしたのは『俺』じゃなくて『織斑一夏』の方である。彼女と織斑一夏が別れたのは、丁度俺の中身がすぐ変わった頃であるから。

俺が彼女を『篠ノ之箒』と認識できたのは、アルバムに残っていた彼女の写真を見て外見に関してある程度の予備知識を得ていたからに過ぎない。

それは当然六年前のものなのだが、実際彼女に会ったら一目でそうだと解った。何かこう雰囲気が変わっていないのだ。背丈とかの外見は当然相応に変わっているが、もっと根本的なところが変わっていないというか。写真や伝聞でしか彼女を知らない俺がこんな事を言うのも、少し変かもしれないが。

さてそろそろ黙って向かい合ったまま数分経ってるんだけどこれもしかして休み時間終わるまで続くの？ 俺の精神現在進行形でカッナがけされてるんですけど。カツオブシじゃねんだからもう。

こうなったらこつちが口を開くしかない。元々俺にも言う事はあ  
るのだ。すぐ変わった当初も散々周りに言ってきた事だ。

『記憶喪失になったから君のこと綺麗サッパリ覚えてない』  
これ。

でも正直すんごい辛い。



向こうがこっちを大して覚えていなかったならわざわざ言うまでもなかったんだろうけど、覚えているんだからこれは言つとかないといけない。

君の前に居るのは確かに織斑一夏だけど、それは君の知る『織斑一夏』ではないという事を。

俺は今織斑一夏として生きている。でも『俺』は『織斑一夏』じゃない。

よし言おう、うん言うぞ、よしせーのっ

「あ、「何だっ!」——いえー何でもありませんよー」  
俺のこの馬鹿へたれやろう。

ていうか今気付いたけど、何でこの娘はこんな余裕の無さそうな表情してるんだろう。雰囲気的に凜として何事にも動じない感じに見えたんだが。彼女も久しぶりに話すとかで緊張してるんだったら、ちよつち親近感。

「……………一夏。久しぶりに会った相手に、何か言う事はないのか」

「あんま変わってないね特にその目付きのわ——いや髪型が！ポニーテールが!!」

あつぶねえ思いつきり本音（目付き悪い）出かけた。

幸い前半の方は彼女に聞こえていなかったようである。こちらの言葉を受けた彼女は長いポニーテールの先端をいじくり始めていた。「よくも、覚えているものだな……………」

「いや覚えているというか最近覚えなおしたというか?」

「……………どういう事だ?」

篠ノ之さんが髪をいじるのを止め、一気に怪訝そうな顔になる。

この娘、真面目な顔してると何か迫力有ってちよつと怖い。

「いや去年。剣道の全国大会で優勝してたでしょ。それで知ってた名前見かけたからちよつとアルバム引つ張り出したりしたからさ」

「なんでそんなことを知ってるんだっ」

「俺に新聞を読むなというか君は。まあ普段はTV欄と四コマしか見てないけど。たまたま眼に入ったんだからしょうがないだろが」

への字になった口、温度が上がったのか赤くなる顔。  
何もそこまで怒る事だろうか。あ、わかった。

「悪い。先にこつちを言うべきだった、優勝おめでとう」

『俺』も『前』で剣道を少しとはいえやっていたせいか、その功績がどれだけ凄いものかは解る。だから『俺』の現状とか彼女との関係とか、そういうのを一切合切抜きにして、ただ純粹に彼女の偉業に向けて賞賛の言葉を贈る。

「~~~~~」

かあーとか聞こえてきそうなくらい。瞬く間にその顔が赤くなつていく。照れるその様子は素直に可愛いらしかった。褒め言葉には素直に喜ぶべきだと思う。

馴染みのツインテはどうにもその辺ひねくれてやがったからなあ。今みたいに俺が笑顔で言ったら絶対思いつきり引きやがるに決まってる。

——キーンコーンカーンコーン

「じ、授業が始まる！ 早く戻るぞ!!」

二時間目の授業を告げるチャイムが鳴り響くなり、篠ノ之さんは踵を返して歩きだ——うっわ速ッ!! 走ってないのに何であんなに速いんだ!?

後ろからでも見える耳が真っ赤なところを見るに、よほど褒められたのが恥ずかしかったということか。もう少し胸をはって誇ってもいいと思うんだけど。

「……………って、結局言えてねーし」

篠ノ之さんの姿が見えなくなつてから、肝心な事を何も言っていない事に気がついた。最初の沈黙が響いて結局時間切れである。

「あー……………つたくもー」

これから先同じ学校で過ごすのだから言う機会はいくらでもあるだろうが、あんまり長引かせたくない。今度はこつちからコンタクトすべきだろうか。しかし以降彼女が接触してこないならわざわざ告げる必要があるのか。いやしかし——

「どーしてこう、人生つてやつは壁に事欠かないんだか」

手すりに身体を預けて、仰ぎみた空はどこまでも青く澄み渡っている。

暗鬱な俺の心の中と見事に正反対だった。

「で、織斑。遅刻の理由は何だ？」

「空があんまり青いので、いい感じに黄昏てました」  
「パアンツ!!」

▽▽▽

『I Sのある世界』

I Sが発表されてから十年経つ。

現行の戦闘兵器を遙かに凌駕する性能を持つI Sの登場によって、世界の軍事バランスは当然のように崩壊した。

そのI Sの開発者は日本人の篠ノ之博士であり、そのため当初の日本は独占的にI S技術を保有していた。これに危機感を募らせた諸外国はI S運用協定——『アラスカ条約』によってI Sの情報開示と共有、研究のための超国家機関設立、軍事利用の禁止などを取り決めた。

現在における各国家の軍事力（有事の際の防衛力）はI S操縦者がどれだけ揃っているかによって決定すると言っても過言ではない。そしてI S操縦者である女性のため、各国は積極的に女性優遇制度を施行した。

そんな経緯を経て、世界は『女尊男卑』に大きく傾いている。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「ちよつとよろしくて?」

なるほど。わからん。

いくつか授業を受けた感想がそれだった。今は授業を終えて訪れる休み時間。机の上に広げられているのはさっきまで授業で使っていた教科書や、板書したノートである。

それらを見返しながら改めて思う。さっぱりわからん。

流石に日本語なので言葉は聞き取れるが、その言語が羅列されて何を意味しているのかがすたこら理解できないのである。

ちなみにこのI S学園は事前に参考書が配布されている。恐らく授業に関しての予備知識を総て詰め込んであるから、あんなに分厚いのだろう。

当然それは読んだ。穴が開くほど、というか一回勢い余って分解してしまったのでゼロハンテープで補修してある。

問題なのは1ページの内容を覚えると前読んだ3ページ近くを綺麗に忘れる俺の頭である。脳そのものが他人のモノに変わっても相変わらずさういふのは駄目だ。どうも学力ってやつは脳よか精神に大きく依存しているらしい。

「……………こほん。ちよつと、よろしくて?」

そんな訳で、どうも相当がんばらないと授業についていけそうになり。ついこの間も受験勉強で地獄を味わったが、今度は更にその上を覗けそうである。これから先を想像するだけで辛い。既に胃がキリキリしそうだ。

が、仕方がない。

ISはハツキリ言つて『兵器』だ。軽い気持ちで扱つていいものは決して無い。事故を起こせば自分だけでなく周りにも多大な迷惑をかける。どころか、取り返しの付かない事態を引き起こしてしまうかもしれない。それだけ危険な物なのだ。

俺はそんなモノに関わると決めた。IS学園に入学する事もその手続も、周りの大人がいつの間にか勝手にやっていたが、そんな物は知らんし正直どうでもいい。

立ち位置やらが七面倒臭い事になつていても、俺の意思の元進む以上これは俺の人生だ。自分の人生の事は自分にしか決められない。

それにしても、相変わらず人生は壁に事欠かない。

だがそれを乗り越えた時に得られる達成感<sup>死ぬということ</sup>は心の芯を歓喜に震わせてくれる。そんな感動を得る機会を隙あらばこつちに差し向けてくる人生が、俺は好きである。

とはいえ、あの壁はちよつと越えられそうにないが。

(……………いや)

あれは、超えてはいけない壁なのかもしれない。あの時感じた恐怖は一人間が超えてはいけない境界を垣間見たからではないだろうか。さすがに大袈裟すぎるか?

「——いい加減にしてくださいますッ!」

「うおア——!? はいなにナニ何!? とりあえず何かごめんなさア——!!!」

ズバァン! と誰かの手が机に叩きつけられる。反射的に直立不動で気を付けた。

すっかり物思いに耽っていたので全然気が付かなかったが、何時の間にか誰かが横にやってきている。

(……おや外人サンだ)

まず目に入ったのは鮮やかな金髪だった。次いでその綺麗な蒼い瞳。金髪碧眼——まあ白人の女の子だ。瞳がつり上がっているのは怒っているからであろうか。

ちなみにIS学園において外人はそんなに珍しくない。というか普通にたくさん居る。外国の生徒も無条件で受け入れるって条件あるせいだろう。たぶん。

俺がようやく反応したからだろう。外人サンは机に振り下ろしていた手をどけ、そのまま腰に手を当ててふんぞり返っている感じのポーズに移行した。

関係ないようで関係ある話。

今の世の中の原則は『女性≡偉い』である。ISを操縦できるというアドバンテージは相当で、社会はあつという間にその構図で塗り替えられてしまった。

当初は馴染みある価値観(男尊女卑より)であった世界が、ISという存在一つで根底から一気に塗り替えられていく様を見るのはちよつと——いやかなり新鮮だった。

ともかく今のこの世界は女性が偉い。どのくらい偉いかというと、すれ違っただけの男をパシらせる女の姿が街中で当たり前のように見られるくらい。

前居たところで話したら笑われそうだが——それがこの世界の現実である。

IS操縦者が神格化されるのはわからなくもないが、ISを『動かせるかもしれない』女性達まで当然のようにふんぞり返るというのは正直かなり笑えない。確かに触れば動かせるだろう。でもその手元

に必ずISがある訳ではないし、そもそも大多数の人が所有する資格を与えられていないのだ。

なのに『ISを扱える凄い人』が『女性』だから、同じ『女性』である自分達も偉い。そう本気で思っているのだから始末に終えない。

「聞いてましたの!?! お返事は!?!」

「え、……ええと、申し訳ない。少し考え事を、していたもので」  
うわ怖。

突然俺が二度目の小学校の時の話になるが、クラスに世の風潮に染まりきった娘っ子が一人居た。当然普段から男子を奴隷同然の様に扱う罵るわ好き放題である。

そしてどうか当然というか……ある日とうとう一部の男子達が噴火した。娘っ子一人を男子複数で集団リンチなんて笑えないにも程がある。

もう普段から『いつかこうなるんじゃないか』とさんっざん思っていたが見事にそうなった。いやまあこうなる前に何とかしろよと思うのだが、いかんせん娘っ子が態度を改めない(どころかエスカレーター)のだからもうどうしようもない。

どうしようもないっつたってほっとく訳にもいかない。

だから鎮静のためにあれこれ駆けずり回ったけど、もう本当に散々だった。三階から突き落とされたり、腕の骨折れたり。まあ骨折ったのは落ちた後で立ち上がりそこねてコケた際に鉄骨でぶつけたからなんだが。挙句の果てにはひいこら言っただけで娘っ子に「このグズ! 役立たず!!」とか言われて折れた方の腕蹴られたり。

まあいちばんきつかったのは、いえにかえったあとのちふゆさんのおせつきようだったんですけどね。

うん。色々懐かしい記憶を高速で掘り返してしまった気がする。懐かしいといえば、その事件後しばらく俺は男子女子両方からハブられたのだが、ひとりだけ味方がいた。元気かなあのツインテ。まあ元気だろうな。元気でなかったら会いに行っただけ無理やりにも元気にさせてくれるわ。

「それで俺に何か用でも?」

ともかく、こう「偉いんだぞ！」ってポーズを取る人間の中には『偉くて当たり前』と思っっている輩がいるのだ。さあて、彼女はどうかしら？」

——うん。これは駄目かもわからんね。

威光って、振りかざし過ぎると価値が減ると俺は思うよお嬢ちゃん。

まあ言わないけどね。何でこんなのに忠告するために俺の時間使わにやならんのだ。

「あーまーそう仰るからにはさぞ偉い人なんでしょうね」

もうめんどくさいから適当に流そう。

俺のどうでもいい感じが伝わったのか（まあ伝わるような言い方したんだけど）、外人サンは元からつり上がっていた目を更に吊り上げ、酷く仰々しく語り出した。

「その様子だとこのセシリア・オルコットをご存じないようですわね？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!!」

彼女の言葉に口笛一つ。

馬鹿にしているのではない。彼女の肩書きに感心したのだ。

「代表候補生でこ、」

「そう、国家代表IS操縦者の候補生として選出されたエリートなのですわ！ 更にわたくしは現時点で専用機を持っていますのよ。この意味がおわかり？」

人の話聞かないタイプと見た。

見るまでもねーな。まあ聞きたい事は勝手に喋ってくれたからいいか。

それにしても俺の顔に突き付けられた彼女の人差し指が、近すぎてぼやけて見える。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解してい



ただける?」

「俺は今まさに君のツラ見て不幸を味わい始めているのだが」

「なっ!？」

「何で俺にとつての奇跡や幸運を君に決められなきゃならんのだ。意味がわからん。つかもし本当に君が在るだけで他者を幸運にするのなら、わざわざそんなくだらん宣言するまでもなく周囲の人間は思い知るんじゃないの?」

再度、机に彼女の——セシリア・オルコットの手が振り下ろされて音を鳴らす。さすがに鳴るとわかつている音にビビるほど臆病ではない。頬杖をついてため息一つ。また面倒なのが出てきたもんだ。

「……………男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけれど——期待外れでしたわね」

「そうかーそれはざんねんだったねー」

冷たさのあまり鋭さを帯び始めた彼女の眼光が、更に輝きを増す。

あーこわいこわい。

「ふん、まあいいですわ…………どうせ直ぐにわたくしの実力を思い知るでしょう」

「ああいいね。俺みたいな馬鹿にはくつちやべるよか見せたがなんぼか速い。ここまで言ったんだ、期待はしつかりたつぷりさせてもらうぜ、代表候補生さん?」

「ええその時はせいぜい思い知ることね! なにせわたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから!!」

「はん。その辺はさすがに主席かね。俺は情けない相打ちだったし」

彼女の的にはさっきのエリート中のエリート宣言で俺に言うべき事は言い切ったつもりだったのだろう。事実彼女は踵を返し自席へと戻ろうとしていたのだし。

「……………なんですって?」

だが俺の眩きが彼女には聞き捨てなかったらしい。キュバツ!

とか聞こえてきそうなくらい機敏な動きでこちらを振り向いた彼女は、愕然とした表情をしていた。

「きよ、教官を倒したのはわたくしだけと聞きましたか!？」

物凄い勢いでセシリア・オルコットが詰め寄ってくる。

何を動揺しているのかしらんけど距離がちけーよスタコ。

「だから相打ちだって言ってるんじゃない。勝った訳じゃないし」

「それでも教官を倒したことは変りないでしょう!？」

「個人的にはあれを倒したとは言いたくないんだが。まあ一応倒して  
る事は倒してるか」

では試験の時の様子を順を追って思い出してみよう。

1. 教官の人が加速する。

2. 俺も加速する。

3. ぶつかる。

4. どっちも気絶して動かなくなる。

……いや、やつぱこれは倒したとは言えねーんじゃねーかな。とて  
もじゃないがこれを『教官に勝ちました!』と誇る気にはなれない。  
誇ったら俺の中の大事な何かが壊れる。

くそう、あのIS何で飛ばうとしたら全力で前進しやがったんだ。

「じゃあ……あなたも教官を倒したって言うの!？」

「いや、まあうん。これに関しては君は今まで通り誇ってていいと思  
うよ」

「ふざけないでくださる!？」

「大真面目だったの。こっちや想い出すたびに恥なんだぞ……」

「は、恥!?! 恥とおっしゃいましたか!?! 教官に勝ったことが!?!」

「あ——ツ面倒なとこに食いついてくんなーも——!!」

きーんこーんかーんこーん

「……………っ! 話の続きはまたあとでしますわ! 逃げないことね  
!!」

授業を告げるチャイムの音が俺とセシリア・オルコットの怒鳴り合  
いをかき消した。

セシリア・オルコットは一度ずびしと俺を指さした後、慌てて席へ  
戻っていく。

次の休み時間が今から既に憂鬱だよちくしょうめ。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

壇上でそう言うのは織斑<sup>千冬</sup>先生だ。

これまでの授業は山田先生が教壇に立っていたのだけど、この授業は何か特別なのだろうか。よく見れば山田先生はなにやらノートまで持っている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

突然思い出したように言い、改めてこちらを見渡す織斑先生。

根拠はないけど何か嫌な予感がする。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

何てあれこれ面倒な仕事の多そうな役職なんだ。やり甲斐は酷くありそうではあるが。

「はいっ織斑くんを推薦しますー!」

うん、これはちよつと予想してた。

「私もそれが良いと思いますー」

これは今日何度目のため息であろう。数えてないからわからんがまあ二桁はとづくに超えたんだろうな。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「はい」

挙手。発言を許可されたことを千冬さんの目線で感じ取って——さすがにこのくらいはもう判別できる——立ち上がった。クラスメートの注目の視線が背中に刺さる。

「セシリア・オルコット嬢が適任だと思います」

俺の言葉に教室がざわめいた。立ったままぐるりと反転すると、ぴたりとざわめきが収まった。こういう時この目立つ位置は便利だ。

もう二度と活かすことはないだろうけど。

「……学園生活を楽しくしたい気持ちはわからんでもないっていうか、俺も大賛成なんだけどね。入試で主席の代表候補生なんて”とびつきり”が居るのに、それを使わねえってのはいくらなんでも冗談が過ぎるだろ」

彼女達が俺を代表に推薦するのは間違いなく『その方が面白そうだから』。この一点から来ているんだろう。

全員が俺を見ているのを確認してから、ゆっくりと話し出す。一旦見回すとよりこつちに注目するんだよねこーいう時。

「ちようどいい機会だからからハッキリ言っておく。俺は確かに例外ではあるが、ISに関しては所詮トーシロだ。実力では下から数えた方が速いかもな。」

代表候補生のセシリア・オルコット嬢との実力差なんて考えるまでもない。君達はそんな素人に自分達の威信をかけられるのか?」

これは単なる事実。入試の時だって、起動させる事は出来たがロクに動かせなかった。あの衝突事故がそれを証明している。

「——なあ、俺らはここに何をしに来てる? 遊びに来てるのか?」

いいや違う、学びに来てんだ。それもISなんてとびつきりの危険物の扱いをだ。楽しむなどは言わねえし言いたくない、でもせめて締めるところは締めようぜ。代表の”対抗戦”なんだろ。俺は勝負事に出せる全力かけずに挑むのはゴメンだ。やるからには勝ちに行く。最初から妥協なんぞ混ぜたくない」

ぱん。と小さく手を鳴らす。

それで教室の少し張り詰めていた空気が解ける。

「では改めて。俺を推薦したい人、いる?」

し——ん。と静まり返る教室。

それを背にして着席した。

ああもうこんなマネ二度とやるまい。柄じゃないんだよこういうの。

「——よ、よく言いましたわ!!」

ずばーんと机を叩きながら立ち上がったのは勿論セシリア・オル

コット。どうでもいいけど君よく机叩くね。もうちよつと大事にしてあげなよ。

「織斑くん織斑くん」

隣の席の女子が小声でこちらを呼びかけてくる。

なんだろう、調子に乗るなとかそういうのだろうか。

「話してる時の顔、ちよつとかっこよかったよ」

「……ハハ、そいつはどーも」

予想外過ぎる。

ハブられ覚悟だったんだが、今回の博打は思いの外勝ちだったようだ。

「織斑」

「へ、なんですか？　織斑先生？」

「本音は？」

「武器は戦っている時こそ最も美しいので彼女の専用機を心ゆくまで眺めたいのとぶつちやけ面倒そうだからやりたくねいえなんでもないです」

慌てて口を閉じたがもう遅い。俺を見下ろす千冬さんはどうせそんな事だろうと思つた的な絶対零度の視線を俺に突き刺してくる。

「珍しくまともな言葉を吐いたと思つたらこれか。全くお前という奴は」

「だ、だって専用機ですよ専用機！　パーソナル!!　折角そんなスペシャル持つてる奴が居るんだつたらそいつこそクラスの顔にすべきでしょう!?!　皆もそう思うよね?!」

今度は座つたまま振り向いた。うわすげえ笑われてる。芯からボッキリ折れそう。時折聞こえてくる私もそう思うよーってフオローが本気で癒しこの上ない。

さて、専用機とは——文字通りそのまんまの意味である。

ただでさえ“稀少”なIS、その一機を自分専用として与えられているのだ。当然高い実力を持っている事になる。何せ現行最強の兵器であるISを一機自由に使うことを許されているのだから。

そんな専用機持ちになるのは、俺の現在の目標だ。

男に生まれた以上、この響きを聞いたら目指さざるをえないだろうよ。

「つまりお前は専用機持ちこそクラス代表者に相応しいと。そう言いたい訳だな？」

「いぐざくといい!!」

「ではお前にも資格がある事になるぞ、織斑。お前には学園で専用機を用意しているからな」

「……………え？」

俺の上げた素っ頓狂な声を最後に、それまでざわついていた教室が一気に静かになる。

「専用機って——一年の、しかもこの時期に!？」

「やっぱり政府からの直接支援が出るんだ……………」

「いいなあ……………私も早く専用機欲しいなあ……………」

静かになったのは一瞬で、その後は更に激しくざわめきだした。

俺はというとちよつと千冬さんが何言ってるのかわかんない。

「——もしかして織斑くんって、本当は凄いいんじゃないの?」

「実はずつと昔からISの英才教育を施されてきたって噂、案外本当なのかも……………」

「それに千冬様の弟だし……………」

相変わらず頭は混乱しているのだが、何か後ろからよくないひそひそ声が聞こえてきた。

ま、まずい。何かまずい事になっているのはわかる。わかるのだが、頭が混乱していてそれをどうすればいいのかさっぱり思いつかない!

あわあわと視線をさ迷わせた俺は、救いを求める意味で教壇の上の織斑先生を見、

(ち、)

そこには。

にやりと笑っている、旧知の仲の女性の姿があった。

(千冬さああああああん!! こうなるのわかって言ったなああああああああ!?)

心の底からほとぼしる無言の抗議は、さらりと受け流された。  
うーん、澄ました様子が実にクール。

「さて、どうせだから決める前にもう一度聞いておこうか。さつきも言ったが自薦他薦は問わんぞ」

千冬さん。

何か楽しそうなのは俺の気のせいなんですよね？

あくまで確認のために言っただけですよね!?

「私は織斑くん!」

「織斑くんで!!」

「うーん、私はやっぱりセシリアさんかなあ」

教室を飛び交う推薦の嵐。

ちくしよめ、俺の方が多い、多数決を取られたら終わりだ!!

確かに面倒つても本当だ。

でもセシリア・オルコットのの方が適任だと思っているのも本当だ。

性格はすごい気に入らないけど、彼女の実力は俺の例外という肩書きで作られたハリボテと違い、確かな経験の基に打ち建てられた本物だ。性格はすごい気に入らないけど。

「待ってください!・納得がいきませんわ!!」

よっしやあやつぱり来てくれたかセシリア・オルコット!

彼女だつてこのまま流れたら再度俺に決まる事は気付いていたはず。プライド高そうだから絶対抗議してくれると思つてたよ!! さあ流れを引き戻せ! 代表候補性なんだからそのくらい見た目と同じく華麗にやってみせてくれ!!

「専用機があるからといって、実力がわたくしの方が上なのは変わりませんわ! 大体、男がクラス代表なんていい恥さらし! 一年間も——このわたくしが一年間もそんな屈辱を味わうなんて耐えられませんか!!」

うーむ、とにかく男だから気に入らないという典型的な女尊男卑。

テンプレートつてこういうのを言うんだろうなあ。

傍観を決め込む俺を他所に、セシリア・オルコットはどんどんヒートアップしていく。





「あら？ 早速ハンデのお願いですか？」

「何だ。君は俺を笑い殺す気なのか？ いる訳ねーだろそんなモン。むしろこっちが付けてやるーか、お嬢ちゃん？」

「……いいでしょう。このセシリア・オルコットの全力を以て貴方を叩き潰す事を約束しましょう」

「そりや楽しみだ。さつきも言ったが、やるからには勝ちに行くぜ。吠え面かいても知らねーぞ」

「さつきから随分大口を叩きますわね。吠えるのは負けた後で構いませんのよ？ それにしてもここまで言っただけで負けたらどうしてくれるのかしら？」

「そうだ、私の奴隷にでもしてあげましょうか？ やかましく吠えるのが得意なようですから、番犬としては優秀かもしれませんわね」

セシリア・オルコットのそれは確実に“人”を見る目ではない。動物——それも家畜に分類されるモノを見る目をしていった。

さてこの勝負。分が悪いどころの話ではない。

俺のISにおける知識なんてせいぜい参考書で読んだ内容と、試験の時に動かしただけの経験くらいだ。千冬さんは俺があまりISに関わることを良しとしていなかったのが大きい。興味は人一倍あったが本格的に関わりだしたのは試験会場を間違えた日からだ。

大してセシリア・オルコットは学園に入る前からISを扱うための教育をうけてきたのだろう。そして示された実力があるからこそその専用ISだ。

勝率は一桁——どころか小数点の壁を越えられるかどうか。俺がギャラリーだったら間違いなくセシリア・オルコットにかける。

うーん、ここまで分が悪いのは久し振りだな。

この人生も随分と盛り上がり過ぎてきたもんだ。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

俺も彼女も、言いたい事は言い終わったのでそのまま静かに席に着いた。

それにしても千冬さん超通常進行。

(しっかしまーほんと最近の人生は壁に事欠かねーな。おまけに今度のは随分とまた越え甲斐がありそうだし)

ともかく、今は授業を聞くとしよう。

俺には知識も経験も足りていないのだから。

▽▽▽

## 『IS学園の設備』

IS学園にはISアリーナ、IS整備室、IS開発室といったISを運用研究するために必要な設備、環境が万全の体制で整えられている。

他にも通常の教育機関としての施設は勿論、寮や食堂等、全体的にかなり高い水準で充実した設備を有している。

当然、それらはIS学園に女子生徒しか存在しないことを前提としている。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

分の悪い賭けは眺める側に限る。

自分が賭ける側で、しかも分の悪い方というのは是非ごめんこうむりたい。まあ今回は売り言葉を倉庫買いした俺が悪い。本当に嫌ならあのまま黙っていれば良かったのだし。

今回の件をこっ決ちで馴染みの連中が知れば恐らく『また後先考えずに突っ走ったな』と言うのだろう。

でもそれは基本的に俺を誤解している。

今回の事はまあちよつとあつちに置いておくが、基本的に後を考え、大丈夫そうな時しか無茶はしない。周りが言う『感情任せ』で突っ走ったことなんて実際数えるほどしか無い。

でもこれ言っても信じてもらえないんだよね。何でだろう。

「さて。本当にどうしたもんかね」

今日の授業はすべて終わり、放課後に突入している。

最初の授業を受けた時点で解っていたが、まるで授業についていけない。

予備知識があるので多少はマシなのだろうが、今日教わった内容の中で正しく理解できている範囲は一割あればいい方だろうか。

まあ、俺の頭のロースペックぶりは今に始まった事じゃない。付き合い方だって知っている。ともかくやるだけである。

それにしても相変わらず多量の視線を感じる。放課後の今はクラスメートだけでなく、他のクラスや他学年と思しき女の子達まで居るようだし。

(……………案外直ぐ慣れるもんだな。まあそれどこじゃ無くなったたのもあるけど)

相変わらず俺(唯一の男)は周囲から好奇の視線に晒され続けている。今は他に明確な目標が出来て、しかもそれが酷く難題なせいだろう。

既にあまり気にならない。とりあえず別れの挨拶を言うクラスメートに手を振り返しながら冗談交じりの挨拶を投げる余裕くらいはあった。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「うえい? 何か用ですか山田先生」

俺を呼び止めたのは、副担任の山田先生である。すぐくどうでもいい事だけど、この人制服着たら生徒に混じれると思う。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

「寮?」

差し出されたのは、部屋番号の書かれた紙とキー。言葉と流れから察するに、キーはおそらく寮の部屋のものだろうか。

このIS学園は全寮制だ。生徒——つまりは未来のIS操縦者達の保護という目的もあるのだろう。ISがあってもそれを動かすものが居なければ意味が無い。故に優秀なIS操縦者、その素質を持ったものの扱いには躍起になるのだ。

「あれ? 最初一週間は自宅から通学で話じゃねんですか?」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り<sup>日本政府</sup>を無理矢理変更したらしいです……織斑くん。そのあたりのことって政府から聞いてます?」

最後だけは内容のせいか、小さな声で耳打ちだった。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先してみたんです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

要は予定を無理矢理詰めてまで俺をI S学園に留めておきたいらしい。

それは他国から保護しやすいからなのか、逃げないように監視しやすいからなのかどっちなんだろうね政府のお偉いさん方。

まあこつちとしては通学時間が短縮できる程度の感想しか無いのだが。

「山田先生、しつもん」

「はいっ、なんでしよう織斑くん」

「相部屋ってことは女子と同じ部屋ってことですよね。ルームメイト誰ですか?」

このI S学園で男子生徒は俺一人——それも歴代で俺一人。なので男子生徒が存在するための設備は最初から用意されていないのだ。当然寮も女子寮しかない、だから部屋割り云々で色々面倒な事になっている訳だし。

っていうか当然のように男子と女子で同じ部屋が認められるんだけど、教育機関としてどうなんだろう。

「篠ノ之箒だ」

俺の質問に答えたのは山田先生ではなく千冬さんだった。何故解るかという声でわかる。ほらやっぱり千冬さんだった。

「……彼女かあ」

「不服か?」

「いえ別に……ああ、そだ荷物取りに帰らないと」

「それは私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

「それはありがとうございま——」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があれば十分だろう」

「——アレ俺もう全部用意してまとめてありましたよね、何その必要

なもん更に厳選したみたいない言い方。うわ嫌な予感」

部屋が決まるまでは自宅通学とはいえ、寮に入る事自体は最初から決まっていた。なので荷物の用意はあらかじめやっておいたのだ。

が、今の千冬さんの言い方から察するに娯楽関係のものは置き去りにされている可能性が出てきた。

「多すぎる荷物を減らしてやったんだ。感謝しろ」

ああ確定だこれ。

そんな、着替え等の生活必需品だけだったら元の三分の一もなくなるぞ。減らしすぎだろういくらなんでも。そこまでごっつそり減った時点でちよつとくらいは思うところがないのかこの人は。ああ、思ったのが少なくなったから良かったねなのかちくしよめ！

「わー、そうなんだーうれしいなー……つて言えるかア——！　いくらなんでもちよつとザツクリしすぎじゃねーかな千冬ちゃん!!」

来るとわかっていても、察知した瞬間に着弾するんだから回避も防御も出来やしない。

“ドゴシヤア”

これ絶対名簿で出せる破壊音じゃない。

そして人間の頭部で鳴っていい音じゃない。

「——織斑先生だ」

ターミネーター化したダースベイダーがジョーズに乗ってやって来た様な威圧感とでも言えばいいのだろうかコレ。

それから数十秒、悲鳴をあげる事すら出来ず陸に打ち上げられた魚のごとくビチビチ跳ね回って激痛に悶える羽目になった。

「て、照れ隠しで発揮していい威力じゃねえ……!!」

「足りなかったか」

「いえもう十分ですすいませんでした織斑先生!!」

そういえば最初に千冬ちゃんって呼んだ時は思いつきり吹っ飛ばされたっけ。年下相手だからこう、つるつと口走った瞬間に壁と盛大に激突していたあの衝撃は忘れようもない。

「じゃ、じゃあ時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシヤ

ワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんが今のところ使えません」

山田先生が恐る恐るといった様子で話を再開する。

「そういう今察の話だったっけ。」

「あ、大浴場ってどの辺にあるんですかね……いや流石に案内版とかに書いてあるか」

「言っておくが、アホな事は考えない方が身のためだぞ」

「おっ、織斑くんっ、まさか女子のお風呂を覗くつもりなんですか!？」

「だだだっ、ダメですよっ!!」

「いや……絶対に近付かないために場所知りたいですけど。何が悲しくてそんなトラブルが起こりそうな場所に自分から近付かなければならんのですか……」

「ええっ? 女の子に興味がないんですか!？」

「実は俺年上好きなんで学生には興味無いんですよ。山田先生くらいからが守備範囲です」

「たぶん、聞けば明らかに適当言ってるのがわかってもらえると思う。完全な棒読みだし。実際隣の千冬さんは呆れ通り越した顔してるし。そもそも山田先生は年上っていうには雰囲気幼すぎるし。」

「そ、そんな……だ、ダメですよ織斑くん……先生強引にされると弱いんですから……でも学校でなんて……わ、私男の人は初めてなのに……で、でもでも織斑先生の弟さんだったら……」

「だというのに山田先生はボツと音を立てて顔を赤くした。それからあわあわと視線やら腕を左右に振りながら何か口の中でもごもごと言葉もどきを量産し始める。」

「大丈夫かこの人。」

「いろんな意味で。」

「私達はこれから会議があるからもう行くが、お前もさっさと寮に行け」

「ぞーします……」

「絶賛トリップ中の山田先生とは打って変わって、千冬さんは相変わらずの通常進行。」

既に帰り支度は終えていたので、鞆を引つ掴んで立ち上がる。

「……篠ノ之には話すのか？」

「まあ彼女、俺（織斑一夏）の事覚えてるみたいだし。全部はともかく、最低限度は伝えとこうかなと」

話すというのは無論俺の状況の事である。結局未だ篠ノ之さんにはろくに説明出来ていない。まあ相部屋になるというなら話す機会はいくらでもあるだろう。

それに短い期間でも寝食を共にするというのは、都合がいい。言葉で説明するよりも、より深く今の『織斑一夏』がどういうものかを理解してもらえらるだろうから。道徳的な問題はちよつとどっか行つといてもらおう。

「そうか」

異世界に旅立<sup>トリップ</sup>つて戻つてこない山田先生の首根つこを捕まえて引きずりながら、いつも通りの引き締まった表情で千冬さんが言う。一応聞いてみただけで俺の返事はどうでもいい、そんな空気を感<sup>かん</sup>じさせる。

さて、百人以上居る同級生の中から最も俺に都合が良い娘と“偶然”ルームメイトになる確率つてどの位低いんだらうね、織斑『先生』。

「気いつかつてくれてありがとよ、千冬ちゃん」

いつもの凜とした表情でなく、羞恥に染まった赤面顔は一瞬で見えなくなる。そして全速力で閉めたドアに高速で飛翔したクラス名簿が激突してとんでもない音を立てた。

だから照れ隠しで発揮していい威力じゃないって。



▽▽▽

## 『記憶』

言ってしまうえばそれは脳に蓄積された過去の情報でしかない。けれど人間にとってはそれだけで片付けてはいけない程大事な物であると思う。

人生を歩む上で蓄えてきたそれらは個を形成する重要な要素であるのは勿論、その人自身の証のようなものだと言は思いうから。

でも記憶は、その人がその人であるために絶対に必要という訳でもない。

例えばその人自身が記憶喪失なり障害で自分はその人だと認識できなくても、周囲がその人はその人であると認識すればその人はその人になる。

だから、例え中身（精神）が違っていてもそれを内包している器がその人ならその人はその人なのだ。人の精神や記憶の中身なんて調べようがないのだから。

もし。もしもいつか人の精神が解析されたとする。

もしそんな時が来たら、俺の状態が正しく周囲に認識されるのだろうか。

その時周りは許してくれるだろうか。ずっと嘘を吐いていた俺のことを。

そして俺の存在の証明は、別の誰かの消失の証明でもある。

それが示された時、あのひとはどうすんだろね。

まあどうするにしても、俺は――



▽▽▽

「あの馬鹿者め……………!!」

出席簿を投げつけた姿勢のまま、織斑千冬はそう呟いた。ドアの向こうにはもう気配はない。あろうことか今日だけで二度も人をちやん付けで呼んだ馬鹿に教育的始動（鉄拳制裁）をしてやりたいところだが、今から追いかけても遅いだろう。昔からあいつの引き際の上手さは群を抜いていた。

刹那の間に精神の動揺を鎮め、普段の凜とした表情に戻った千冬は教室の中に視線をざっと走らせた。すると呆然とした表情でこちらのやり取りを静観していた生徒達が、先程までのざわつきをぎこちないながらも取り戻す。

（……………初めて会った日も、言っていたな）

ドアの下に落ちているひしゃげた出席簿を拾い上げながらふと想い出す。

背筋が嫌な感じに震えるちゃん付けをされたのは、初めて会った日が最初だ。色々と衝撃的な説明を受けた日なので、六年経った今でも鮮明に憶えている。その時は反射的に殴り飛ばしてしまった事も。

『お、弟の身体は……大事にしたほうがいいんじゃないかね……………!?!』

『……………う、うるさい。弟だからこそだ』

『そ、そ……………くるかあ……………』

あの日からだ。

今も尚続く、この奇妙な関係が始まったのは。

『俺は織斑一夏じゃありません』

頭に包帯を巻いた弟がそんな事を言い出した時、織斑千冬は割と本気で脳の異常を疑った。

何せ彼女の弟——織斑一夏は数日前に事故に巻き込まれて頭部を強く打っている。頭の包帯はその時の怪我によるものだし、更に一夏は数日前まで意識不明になっていたのだから。

まるで意味不明な弟の言葉に対し、しかし彼女は普段どおりの凜とした表情を崩さなかった。弟の言葉が唐突な上に意味不明すぎて、どう反応していいかわからなかったので固まってしまったのである。

『今こうして貴女と話している『俺』は、昨日まで別の場所で別の人間

として別の人生を送っていました——死んでしまうまで。事実だけを端的に言っていると、”死んだ後に何故か目覚めたと思っただら貴女の弟になっただけ”』

目覚めた後も検査や何やで会わせてもらえず、ようやく顔を見れた弟がそんな事を言う。

冗談だとしたら随分と性質が悪い。悪過ぎる。表面にこそ出ていないが、どれだけ千冬が心配したのかわかっているのかこの愚弟は。

一夏の言葉は、それ程までに『はいそうですか』と頷けるような内容ではない。信じる方が異常といってもいい。

だが、千冬は弟の言葉を笑い飛ばすこともしなかったし、叱り飛ばすこともしなかった。それが出来なかった。

だってベッドの上で正座している一夏の目が余りにも真剣だったから。

巫山戯ている様子も嘘を言っている様子も欠片も無い。千冬にはそれが解るくらいの観察眼があった。それにもし目の前の弟が千冬を欺けるほどの演技力を持っているなら、それこそ”目の前の弟が弟で無いことの証明”になる。

『……わかりません。俺にも本当に何が起こったのかわからないんです。元々弟さんの中に俺が居たのか、俺と弟さんが入れ替わったのか——俺が弟さんを消してしまったのか』

”だったら私の弟は何処に行った”。

千冬の問いに、自称弟の姿をした別人はそう苦しげに答えた。特に最後の可能性について述べるときは一瞬言葉を詰まらせた。

それでも目の前の弟にしか見えない誰かは、最後まで千冬目を見つめて言い切った。この後どうされようとも構わないと、暗に告げているように。

『家族の貴女には知る権利があるし、俺は家族の貴女に説明する義務がある』

”どうしてそれを私に話した”という問いの答え。医者は記憶障害としか言っていないから、この信じられない事態を話したのは千冬だけなのだろう。

会う前に医者が、弟さんはもしかしたらあなたの事を覚えていないかもしれない、と言っていたが、現実はそのような物では済まない様だ。『それに貴女なら、信じてくれると思ったから』

彼の言うことが本当なら、千冬とはまだ会って少ししか経っていない筈だが、それだけは表情を緩めてそう言った。苦笑混じりのその笑顔は、年齢に似合わず酷く疲れきった様子だった。もうこの時点で、臍気ながら千冬は彼の言うことが事実であると思い始めていた。

目の前で語る少年は、千冬の知る一夏とは“違う”。こうして話しているだけで口調や立ち振る舞いの端々から違和感を絶え間なく感じる。

故に彼は千冬なら——元の一夏を知る彼女なら信じてくれる、そう思ったのだろう。

『で、どうしましょうか。これから』

酷く疲れきった顔を引っ込め、真剣さを一瞬で取り戻した彼が言う。

病室の中に沈黙が降りた。彼はただ黙って千冬のを言葉を待っている。千冬に決断権があると、その決断に従うと、そういう事なのだろう。

——私は、

彼を受け入れた。

千冬は彼の言葉を信じていたが、周囲がこれを信じるとは思えないし、信じてもどうすることが出来るとも思えない。さっきの表情を見てしまった以上、彼がこの事態を引き起こしたとも思えない。

それに千冬の知る一夏が消えたと決まった訳ではないのだ。記憶が特殊な状態になっているのは一時的なもので、時間が経てば元の一夏に戻る——もしくは記憶を取り戻す可能性もある。実際は何が起こったのか何も解っていないのだから。

そして弟（他人）との生活が始まった。

始まった当初は千冬も『一夏』も距離感を測りかねていたが、それは時間が解決した。思ったよりも喪失感は薄かった。

確かに今の『一夏』は本来の一夏とは正に人が変わってしまった、そ

う言える変化をした。けれども共に時間を過ごして気付いたのは違和感だけではない。

行動の端々に、本来の一夏が見え隠れしているのだ。

今の『一夏』を千冬の知る一夏として見ると確かに違和感を感じる。が、逆に一夏ではないと見た場合もまた違和感を感じるのである。

例えるならば違う車になったのではなく、車の色を塗り替えたような、そんな変化なのだ。

当初は事態に困惑し、見落としていたが、今の『一夏』もまた一夏である、現時点で千冬はそう結論付けている。

『へい、いつてらっしゃーい。お仕事頑張つてねー』

織斑家には両親が居ないので、収入は千冬頼みである。そのせいか千冬は元々家を空けがちで、弟をいつも一人残す事になっていた。

しかしあの事故以来精神年齢の跳ね上がった弟は、寂しがるところか千冬にできるだけ気を配るようになった。話を聞く限り元は千冬より年上であつたらしく、『姉』とはいえ女性一人働かせている現状に思うところがあつたのだろう。

千冬の方も千冬の方で、弟が少し変わっただけという結論に行き着きつつも、他人であると思つていたせいだろう。前とは違う方向で遠慮が無くなった。

いや、遠慮をなくされたと言えるかもしれない。

今の『一夏』はやたら聞き上手とか話し上手とか、こちらの不満やら愚痴を何時の間にか引き出して、千冬に本音を話させる。

それがまた終わったあとに気付くから厄介だ。気がついたらもう気を遣われた後で、精神的にはぐされているのである。

中身はともかく年下の弟に気を遣われるのは何とも妙な気分だったが——その関係は悪くなかった。気がつけば、悪くないと感じていた。

『いやふつつうの企業の奴隷でしたけど?』

ふと思いついて、前はどんな生活だったのかを『一夏』に聞いてみた事がある。返ってきた言葉は到底信じられなかった。

家では千冬に対して落ち着いた態度を取るが、普段は一言で表せ

ば、破天荒そのものだ。もしかしたら千冬の知る一夏よりも子供らしい子供かもしれない。

だが、何も考えていないようで、実際は誰よりも考えている。向こう見ずな様で、常に周りを必要以上に見ている。人の輪の中とも外とも言い難い位置を見定めて、どこへも動けるようにしている。

明るみになっっている軽いものから、明るみに出てない重いものまで、学校生活での出来事とその手腕を示している。そんな人間が『普通だ』等と言われても納得しかねる。ただ、勉学方面での頭は言う通りに悪かった。

そう、あの■事件の時だって、あいつは——

「お——む——せい——……織斑先生？　どうかされましたか？」

思いの外深く沈んでいた思考が一気に引き摺り出される。横の山田真耶が、怪訝そうな表情で千冬を覗き込んでいた。

「……ああ、すまない山田君。少し考え事をしていたようだ。行こう、会議に遅れてしまう」

「考え事って織斑くんの事ですか？」

「そうだ。どうしてあいつはあんなに馬鹿なのかを考えていた」

瞳に茶目つ気の混じった真耶の言葉にもまるで動揺する事無く言い返し、千冬は踵を返して歩き出した。

「織斑先生の弟さんだけあって、真面目そうな男の子ですね」

「山田君、君は騙されている。最初は無害を装って相手を油断させるのがあいつの常套手段だ」

職員室までの道のりを、真耶と他愛のない会話を続けながら進む。ふと窓の外を走っている男子生徒の姿が目に入った。

この学園で男子生徒ならば千冬の『弟』の一夏一人しか居ない。遠目で解るほどに全力——いや、死力疾走している。一夏の姿はあつという間に見えなくなつた。そこまで脅えるのならば最初から言わなければいいのだ、あの馬鹿めと千冬は心中だけで呟いた。

(……六年、経ったのか)

事態は進展も悪化もしないまま、ただ時間だけが過ぎていく。

『千冬さん』

今の一夏は、千冬の事を決して姉と呼ばない。決して口にはしないが、自分が織斑一夏である事に負い目がある事に対するけじめのようなものである。恐らく『彼』は自分のせいで一夏が消えてしまったと思っっている。

『生きたいって願ったんです。どんな事になっても生きたいと。だから、もしかしたら俺が願ったせいかもしれない』

病室のベッドの上で、かつて一夏はそう告げた。俯いていた彼がどんな表情をしていたのか千冬には知りようもない。

——一夏がISを動かしたその日から、進むことも戻ることも無かった六年間。

深くも浅くもないぬるま湯のような弟との奇妙な距離。

一欠片の確証も無いが、何か動き出している予感がする。止まっていた何かはゆっくりと動き出すような、そんな胸騒ぎ。

弟が事故にあったと聞いた時。

意識不明だと聞いた時。

織斑千冬は願ったのだ。

どんな形でもいいから、弟が目覚まして欲しいと。

▽▽▽

「——うふ」

奇妙な部屋で、不思議な姿の女性が笑う。

各所に機械が散りばめられ、ケーブルの樹海が広がるその部屋は無機質そのものだった。

その中で、一機のISの傍らに一人の女性が居る。

アリスの服とウサギの耳を持つ女性はどこか幻想的で、無機質の塊たるこの部屋の中において酷く異彩を放っている。

「うふ、うふふ、うふふふふふ」

女性はアリス(少女)と言うには各所に大人の妖艶さが見て取れる。

格好(子供)と身体(大人)がどこか釣り合っていない。この部屋もその主も、それぞれだけならば酷く正当であるのに、複数が混ぜら

れることで異質なモノへと変貌をとげている。

「うふふふふふふふふふふ——」

真っ白い装甲に指を這わせながら、女性はずっと笑っている。

とてもとても、楽しそうに笑っている。



▽▽▽

## 『幼馴染』

主に子供の頃に同じ時間を過ごした仲の良い友達のことをそう呼ぶ。本来はただの他人であるはずだが、特別な存在として扱われる事が多い。これは幼少期からの長い付き合いが相手を家族に近い（また同然の）位置として認識させる、また過去の経験を共有する事で特殊な連帯感が発生するといった事柄から来ているのであろう。

ちなみに、異性同性関わらず幼少期を共に過ごした相手は幼馴染である。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「お、ここだここだ」

寮までの道のりをレコードを更新するような速度で駆け抜けてやって来ました自室まで。

山田先生に渡された紙に書かれているのは『1025号室』、目の前のドアに貼つてあるのも『1025号室』。間違いなく俺の部屋だ。

そして篠ノ之さんの部屋でもある。

「さて。行きますか」

一度頬を叩く。彼女に話すことは、きっと俺が『織斑一夏』を名乗る以上、避けて通れない——避けて通つてはいけないものなのだろう。

一度頬を叩いて気を引き締める。

ドアを叩く（ノック）。

「……ありゃ？ まだ帰ってねーのかな」

室内からは何の反応もない。まだ帰っていないのかもしれない。そういえば彼女は剣道の全国優勝者。当然ここでも剣道部に所属するのだろうか。という事は部活動か。

「何か気い抜けたなあ。まあ仕方ねーか」

出鼻を挫かれた気になりつつも、ともかく室内に入ることにする。鍵を回して——あれ。開かない。って事は最初から開いてたのか。荷物を運び入れた際に開けっ放しにされていたのか、それともルームメイト（篠ノ之箒）が一度戻って鍵をかけ忘れたのか。

「おおおう」

部屋の中を見て口笛一つ。

足を踏み入れてまず目についたのは大きなベッドが二つだった。ビジネスホテルに置かれている安っぽいものとは見るだけで違うと解る、造りのしつかりとしたものだ。使われている羽毛もさぞもつふもふに違いない。

「……でもちよつと距離近くないコレ？ 離せねーの？ あ、無理か……下でしつかり固定されてやがる。勝手に外したら怒られる……だろうなあ」

ベッドの質が良いのは喜ばしいのだが、俺としては少しベッド同士の距離が近すぎる気がしてならない。男同士ならともかく、ルームメイトは女子なのだ。壁の隅と隅くらいまで離れてても足りないくらいである。

『誰か居るのか？』

俺が居るよ。

どこかからそんな誰かの声が聞こえてきた。声が微妙にくぐもっているから、ドア越しなのだろうか。視界を走らせると、一枚のドアが直ぐに見つかった。

『ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ』

どうやら篠ノ之さんは部屋に居たらしい。そうかあのドアの向こうに居たからノックの音が聞こえなかったのか。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之——」

ところであのドアの向こうは何があるんだろう。俺が思ったその疑問は彼女の言葉と——そして格好によってサツパリ綺麗に氷解した。

さて俺のルームメイトである篠ノ之箒嬢はシャワーを浴びていた

らしい。シャワーがあるのだから、当然洗面所もある事は想像に難くない。

それらはどちらも水（もしくは湯）を扱う設備なので、こういったホテルや寮の部屋では同じ場所にまとめられている場合が多い。そしてその場合、洗面所は脱衣スペースを兼ねていることがとても多い。

「ぎん」

距離的な近さに加え『相手は同性』という前提が、きつと彼女にはあったのだろう。ドアを躊躇なく開け、こちらに顔を出した篠ノ之箒嬢は体にバスタオルを一枚巻いただけという際どい格好だった。

その真つ白なバスタオルは身体にしつかり巻きつけた訳ではなく——しつかり巻きつけすぎてもラインが強調されてそれはそれでアレかもしらが——あくまで身体を少し隠す程度で留められている。バスタオルの端から露出した健康的な——瑞々しいと表現するに相応しい肌色が俺の網膜に飛び込んでくる。水滴が流れ落ちる太ももや、タオルを押さえる手が近いせいか肌に張り付いてその曲線を忠実にトレースしている胸のふくらみとか。

そして。

そんな扇情的な光景を網膜に焼き付けた俺は。

「ぎゃああああああああああああ!」

力の限り悲鳴を上げた。

▽▽▽

ドアを蹴破る勢いで部屋を出て、そのまま一直線に寮からも出て、入り口の傍らで正座して精神を落ち着かせること数十分。部屋に帰って来たら羅刹が居た。

「何かもう全面的に本当に大変申し訳ありませんでした……」

下げた頭が床に当たってゴツツと音を立てる。

俺の眼前には道着姿の羅刹が座している。直ぐ手の届く位置に置かれた木刀がとても怖い。とはいえ一、二発は受ける事を覚悟しておこう。石頭には自信があるぜ。でも突きだったら避ける。だってあ

れは初心者やっても人を殺しかねない。

それにしてもほぼ裸の女性を見たリアクションが真面目に悲鳴つて言うのはどうなんだ俺。男としてどうなんだ本当に。折れた腕を蹴られた時も我慢できた涙が出そう。

「——どうしてここに居た」

目の前の娘が怖い。

すごく怖い普通に怖い。

「も、もしかして……私に、その、会いに来たのか……？」

と思つたら何故かもじもじとどもり出す羅刹。でも放つオーラは怖いままだからアンバランスさが不気味極まりない。恐らく彼女も裸（同然の姿）を見られて混乱しているのだろう。

さつきから地面と一体化しっぱなしの頭を上げる。話（説明）をするのに、相手の目を見ないのは失礼だろうし。

「えー、ルームメイトの織斑一夏です。これからよろしく篠ノ之箒さん」

俺の言葉を聞いた羅刹は『何を言っているのかわからない』と言つた顔をしていた。

「……おまえが、私の同居人だというのか？」

「うん。そうなつたみたいです」

呆然とした羅刹に——オーラ消えたから呼び方戻そうか——篠ノ之箒嬢に、さつき山田先生から渡された紙を見せる。そこには確かにこの部屋が織斑一夏の部屋であることが書かれている。

「ど、どういうつもりだ」

「え何が？」

「どういうつもりだと聞いているっ！ 男女七歳にして同衾せず！

常識だ！」

ですよねえ。

しかし難しい言葉知ってるんだなこの子。初めて聞いた言葉だけど、まあ男女がむやみにくつつかないとかベタベタしないとかそういう意味なんだろう。たぶん。

「お前から希望したのか……？ 私の部屋にしろと………」

「あー、いくらなんでもそれは冗談が過ぎるんじゃないかな」

この子(篠ノ之箒)には俺が女の子と一緒に部屋の部屋で暮らしたいです、なんて道徳観皆無な事を言い出すような男に見えるのだろうか。

流石にちよつと不服だぞ。馬鹿っぽいとかは散々言われてきたが、そつち方面でだらしないと言われた事は無いつつうのに。むしろ消極的すぎると言われた事すらある。

“ちりり”と、頭(脳)の片隅で火花が散った。

正確には何か擦れ合うような、そんな妙に嫌な感じ。悪い予感のすつごい鋭い版でも言うか、第六感的なものでも言おうか。要は“来る”って事だ。

俺の言葉の何がそんなに気に入らなかったのかはてんでわからな  
いが、ともかくその答えは篠ノ之箒嬢の逆鱗のようなものに触れたら  
しい。傍らの木刀を掴んだかと思うと、瞬く間に振り上げ——そして  
振り下ろした。

衣擦れの音。

風切音。

迫る木刀。

俺の現在置かれている特殊な状況は、やはり脳なり精神に変な影響  
を与えているのかもしれない。そんな事を考えながら、“来る”と分  
かっていた”木刀を眺めていた。

「……ど、」

俺の頭の、丁度額の辺りで鈍い音が鳴った。まあ高速で振り下ろさ  
れた木の塊が直撃したんだから音の一つも鳴るだろう。おまけに  
振っているのは全国大会優勝者だし。

「どうして避けなかった!!」

篠ノ之箒が叫ぶ。

握る力が緩んだのだろうか、彼女の手を離れた木刀が床に落ちて何  
度か跳ねた。

「——故意でなかったとはいえ、俺の不注意が招いた事だし。それに  
俺、一回逃げちゃったから。本当はその場で直ぐ謝らなきゃいけな  
かったんだ。これでチャラにしてくれとまでは言えないけど、お咎め

ナシはなにより俺自身が許せねえし、せめてケジメって事でね」

「ば、馬鹿……だからってこんな………ああ、こぶになってるじゃないか、そ、そうだ、手当。手当てしないと……」

箒嬢は屈むと、俺の頭をがっちり掴んで丁度木刀が着弾した辺りをさすり始めた。頭をホールドする手はとても力強いのに、さする手の動きは妙に優しくてくすぐったい。

何だよこのプチ天国と地獄。

「そんな気にしなさんな。ていうか見てくれよりかはなんぼか頑丈だぞ、俺」

こっちの頭をがっちり掴んでいる手を解いて、座ることを促す。触って触られてわかったけど随分綺麗な手をしている娘だ。

「……………」

「さあて。落ち着いたことだし、話しましょうかね改めて」

「……………、ないのか」

「んあ？」

「……………怒って、ないのか……？」

さつきまでの羅刹っぷりはどこやら、ビクビクした様子で——怒られるのを怖がる子供みたいな顔で、箒嬢がちいさな声で呟いた。縮こまっているせいだろう、さつきまでよりも心持ち小さく見える。その様子が妙に可愛らしくて、思わず少し笑ってしまった。

「あはは、この場合怒るのは俺じゃなくて君だろうに」

「わ、笑うなっ！ 思いつきり打ち込んだんだ！ 下手したら——死んでいたかもしれないんだぞ!？」

ああ、それは大丈夫だよ箒ちゃん。

「いっぺん」それを通り過ぎてるせいかは知らんけど、本当に危ないときは事前にわかるから。

……………ていうか思いつきり打ち込んでたんかい。剣道経験者だから手加減も心得てると思った俺の予想吹っ飛んでるじゃねえか。道理で頭バツクリ割れそうに痛い訳だよ。

「とりあえず話を前に進めようぜ。あんたは見られた。俺はケジメで殴られた。一応カタは付いてんだろ」

「うむ、そうだな……そう、なのか？」

「そーなのそーなのこれでいーの。とりあえず話し合う事多いんだからサクサク行こうぜ。部屋変えまで俺と君が同室なのは変えられないのだから。それまでは互いに不服でも男女同室だ、今後今日みたいな事が起こらん為にも色々決めとかねーと」

「べ、別に私は不服という訳では……」

「そうか。なら良かった。拒絶された場合は最悪野宿でもしようかって思ってたから正直助かる。寝袋も入れてたんだけど、千冬さんのあの言い方じゃあ置き去りだろうからなあ」

「い、いやそういう意味で言ったのでは、」

「とりあえずはシャワーとか着替えとかそういうのだよな。着替えは部屋の中央辺りでカーテンでも区切りやいんだけど——金具付いてねえからなあ。あーもう荷物減らされたのが痛い。とりあえずその場合は事前に声かけるか……ああ、そうだ洗面所って鍵かけられるのか？」

「あ、ああ。鍵は付いていた」

「じゃあどつちかが中でやりやいい訳だ。鍵ついてるならシャワーの時もそんな気にしなくていいな。後は……」

「て、提案がある」

「はい、篠ノ之くん」

おずおずと手を上げた箒嬢を指す。

「シャワー室の使用時間なのだが、私は七時から八時。一夏は八時から九時を提案する。部活後に直ぐシャワーを使いたい」

胴着着てるからそうだろうとは思ったが、やはり剣道部所属なのだろうか。さつきから正座がとても様になっているし。というかずつと正座しててそろそろ足がビリビリしてきた。

「文句は無いけど、部活棟にもシャワーあるんじゃないか？」

「私は自分の部屋でないと落ち着かないのだ」

「へえ、そういうもんか」

「そうだ。そういうものだ」

うんうんと頷きながらきつぱりと言いつつは篠ノ之箒。

俺はというと、彼女が『俺と同じシャワーを使うこと』自体にさほど拒否感が無いのが少し意外だった。

このくらいの年頃の女の子って同年代男子とシャワー室共有ってだけで嫌がりそうなもんだが。まあ浴場使えなくて自室のシャワーしか使えない俺としては、共用を許可してくれることは素直にありがたいのだが。

「他には何かある?」

「いや……今のところは無いな」

少し考えこむ仕事の後、箒嬢がそう答えた。まあ今後問題が出たらその都度決めればいい。実際暮らしてみないとわからない事もあるだろう。

(千冬さん、そこら辺も考えてたのかねえ)

一通り話し終えて思ったが、この篠ノ之箒という女の子は、立ち振る舞いだけでなく考え方も随分しっかりしているようだ。ちと古風が過ぎる気もするが。

さあ、そろそろ思考を切り替えよう。

「取り決めも終わった事だし……ちよつと大事な話があるんだけど、いいかな」

「大事な話? 何だ?」

出来る限り真剣に切り出した。こちらの様子は伝わったらしく、箒嬢は怪訝そうな顔をしつつもこちらの言葉を待っている。

「織斑一夏と君は小学校四年の終わり辺りまで、いわゆる幼馴染という関係だった」

「そうだ。それがどうかしたのか?」

何を当然の事をと篠ノ之箒が口を尖らせた。

「だから当然、君は俺の事を知っている」

「何だ、さつきから何が言いたいんだ、お前は! 私をからかって遊んでいるのか!!」

話の筋が見えないことに激昂したのか、篠ノ之箒が立ち上がる。こちらを見下ろす篠ノ之箒を見上げながら、『織斑一夏』は淡々と話し続ける。



一つずつ段階を踏むように。

「織斑一夏は小学校五年の最初の頃に——つまりは君が引越して行った後くらいに、事故にあった」

「……………え」

「そして事故の後遺症で、それまでの記憶を全部無くした」

「い、一夏……………何を、何を言っているんだ？ その言い方じゃあ、まるで、まるで私のことを——」

「俺は君の事を何も覚えていない。俺と君は今日が“初対面”なんだ」

その時の篠ノ之箒の顔を、俺は生涯忘れない。忘れてはいけない。俺が存在することで、誰かを悲しませたというこの事実を。

ぺたんと、篠ノ之箒が座り込む。

まるで身体中から力が抜けてしまったように。

「……………一つ、お願いがある」

俺の言葉に俯いたままの篠ノ之箒は何の答えも返さなかった。

少しだけ待ったが、勝手に話す事にした。

「君の知っている、君を知っている『織斑一夏』をどうか責めないでくれ。君の知る『織斑一夏』には何の落ち度もなかった。事故にだって巻き込まれただけなんだ——責められるべきは、今君の目の前に居る、君を忘れてしまった『俺』であるべきなんだ」

これから先彼女が『織斑一夏』にどう接するのか、それは彼女が決めることだろう。でもせめて彼女の中の思い出は責めないで欲しい。彼女の思い出の中に居る織斑一夏はきつと被害者なのだから。

立ち上がって、すっかりしびれてしまった足でドアに向かう。彼女も気持ちを整理するには、扱いの難しい人間が近くに居ないほうが良いだろう。いつそ今日はこの部屋に帰らないかもしれない。

「本当に」

ノブに手をかけたところで声がした。

その声は弱々しく震えていた。

「本当に、何も覚えていないのか」

もしかしたらその問いは、彼女の最後の希望だったかもしれない。

でも『俺』にはそれを砕く事しか出来ない。彼女が求めているのは『俺』ではなくて『織斑一夏』なのだから。

「ごめん」

部屋を出た。

▽▽▽

懐かしい夢だ。

それが幼い頃の記憶なのだろうと思ったのは、俺自身の姿が幼かったからだろう。

でもどうしてだろう。幼い俺であるはずの俺の姿に何故か違和感を覚える。

それに、傍らに居る女の子は誰だ。

俺にはそんな——本来の意味での幼馴染はいない筈なのに。

そんな幼馴染が居るのは俺でなくて、織斑一夏の方のはずなのに。

傍らの女の子は長い髪を、後ろで一つに——

▽▽▽

「……………ふが？」

目を覚ますと、見慣れない天井がにじんで見える。何だろう何かとでも、なんとも言い難い夢を見ていた気がするのだが。目覚めの瞬間はたしかに覚えていたはずの夢の内容は、眠気に溶けるように消えていった

昨夜はあれから一晩過ごす場所を探していたら、織斑先生に見つかって問答無用で部屋に蹴りこまれた。放りこまれたんじゃない、本当に蹴りこまれたんだ。しかし何であんなところに居たんだあの人。

直ぐ出では見つかるので、頃合いを見計らっていたのだが——結局そのまま自室で寝てしまった。慣れない事ばかりしていたせいかな、思いの外疲れが溜まっていたのかもしれない。

ちなみに篠ノ之箒は俺が部屋に蹴りこまれた時点でもう就寝して

いた。

「……………」

妙に夢の内容が気になって仕方がない。

首をひねって頭を振っ——流れる視界の中で道着姿で正座する女の子の姿が——たりしても夢の内容はさっぱり思い出せなかった。

「——起きたか、一夏」

「えーと、篠ノ之さん？ 何してんの……………」

見間違いではない。部屋の一角で、剣道着姿の篠ノ之箒が正座している。その姿はとても様になっていて、ここが剣道場であつたのならばさぞ画になつたであろう。

「私は決めたぞ」

閉じられていた瞳が、すつと開かれる。そこには昨日見せたあの表情は無い、それどころか、瞳の中には決意の光が強い輝きを放っているようにすら見える。

そして俺に対し——もしかしたら自分に対してもだつたのかもしれない——篠ノ之箒はその決意を力強く宣誓した。

「私が、お前の記憶を取り戻して見せる!!」

▽▽▽

## 『人とISの関係』

宇宙での作業を想定して作られているISは、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包む。また生体機能を補助する役割も持ち、常に操縦者の肉体を安定した状態へと保つため、心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどの操作も行う。

かなり深いレベルで人間のサポートを行うISには『意識』に似たようなものがあり、操縦時間に比例して操縦者の特性を理解しようとする。そうして相互的な理解を経る事で、ISの性能はより引き出されてゆく。

故にISは単なる道具ではなく、パートナーと認識するのが正しい。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「織斑。お前のISだが、準備まで時間がかかる」

授業が始まった直後、投げかけられた千冬さんの言葉は、割と想定内の範囲内だった。

俺が世界で唯一ISを扱える男として発覚したのはほんの数ヶ月前。ただでさえ“貴重”なISを一機用意するだけでも大変なのに、俺の場合は更に専用機なのだ。むしろ間に合う方がおかしいだろう。俺の——世界で唯一ISを動かせる男の存在が事前に知られていたのなら、話は別だが。

操作に早く慣れたい身としては、出来る限り早く来て欲しいところではある。とはいえこちらはもう立場、文句は言えない。

まあ恐らく件の決闘には間に合うのだろう。何せ『一週間後』という期間を決めたのは千冬さんなのだから。

「そうですね。でも一機とはいえよく引っ張ってこれたもんだ。コア

は相変わらず『467』から増えてないってのに……何考えてんですかね、篠ノ之博士さんは」

「私を知るか」

ISの技術は国家・企業に幅広く技術提供が行われている——が、肝心の“コアを作る技術は一切開示されていない”。

——『467』。

これが現在のISの存在している数だ。これより下になる事はあっても、増える事はまず無いだろう。完全にブラックボックス化されたコアは博士以外は作成出来ない。そしてその博士が一定数以上のコアを作ること拒絶している現状、『467』という数字は絶対なのだ。

その『467』のコアを作成したのは日本が誇る大天才・篠ノ之束博士。

篠ノ之、だ。

「そういえば何で俺に専用機あるんですか？ 俺、日本国民ではありませんけど、特別国に属してる訳じゃないし、当然ながら企業にも属してないですよ？」

『467』という絶対の数字の下、コアは各国家・企業・組織・機関に割り振られ、研究・開発・訓練が行われている。故に本来専用機は国や企業に属する人間にしか与えられない。

「だがお前の場合は状況が状況だからな、データ収集を目的として専用機が用意される事になった。理解できたか」

「なるほど。そーいえば俺って特例だったっけ。あーでも別の心配事が、一つ。データ収集目的って事は戦闘はあんまり想定されてないとかそういうオチだったりしません？」

どうにも『データ収集』等と言われると——いわゆる電子戦特化型的なモノを想像してしまう。頭の部分がデカイレドームになってたりとか、そんなのね。

いやそういうのが嫌いな訳じゃないんだが、来て早々ドンパチのために働いてもらわねばならないのだ。はなっから戦闘向きである事に越したことはないだろう。

「それについては心配するな」

だが俺の疑問を聞いた千冬さんは即座にそれを否定した。

「って何でそんなしかめっ面なんですか。」

「当の本人が、かつて無い程やる気になっていいるからな。仕上がりは期待していいだろう………全く、何が装甲の磨きが足りないからもう少し待ってくれたら、一体何を考えているのか………」

後半はとても小さい声なので、距離の近い俺でさえほとんど聞き取れなかった。恐らく隣の山田先生にも聞こえていないだろう。

まあよくわからんが、特例のISの制作に携われるってことでどこぞの研究機関の人が張り切ってるって事だろうか。

じゃあ大丈夫——あれ何かさつきよりも不安になってきたぞ。

「あの、織斑先生」

「——何だ？」

とんでもないゲテモノとか来たらどうしよう、なんて俺がこっそり凛凛していると、クラスメートの一人が発言許可を求めるように拳手を割と本気で見習いたい。

「篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか………？」

彼女がそう言ったのは、さつきの会話の中で名前が出たのがきつかけだったのだろう。そもそも『篠ノ之』なんて『織斑』以上に珍しい名字だし。

『篠ノ之束』  
しののたばね

たった一人でISを作成、完成させた稀代にして天才の中の天才、正に大天才とでも言うべき御仁である。そして件の篠ノ之さん——篠ノ之筭の実姉でもある。

ちなみに千冬さんと同級生。最強の兵器を作り出せる人と最強の兵器を乗りこなせる人が同時に排出されている辺り、尋常でない黄金期である。

『織斑一夏』は篠ノ之博士に会った事があるらしいが、『俺』は会った事が無い。なので伝聞でしかどうい人なのかは知らない。聞い

た限りの印象であるが、どうやら実に『天才』と呼ぶに相応しい人  
ようだ。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

千冬さんが質問に対して肯定の返事を返す。ここで隠しても、  
ちよつと調べれば直ぐ解ることだからその対応はおかしいという訳  
ではない。

なんだけども。

「ええええ——っ！ す、すごい！ このクラス有名人の身内が二人  
もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人!? やっぱり天才なの!」

「篠ノ之さんも天才だったりする!? 今度ISの操縦教えてよっ」

まあこうなるわな。

一応今は授業中なのだが、あつという間に篠ノ之さんの席は集まっ  
た女子に埋もれてしまった。ああ、初日の俺を客観視するとこんな感  
じなのか。

というかこのクラスの娘達、随分とフットワークが軽くてリアク  
ションが良い。結構なお祭り騒ぎ好きなんだろう。

でもそろそろ織斑先生のオーラがヤバイ感じに立ち昇り始めてる  
から席に戻ったほうがいいんじゃないかな皆——!!

「——あの人は関係ない!!」

轟、と。裂帛の気合のこもった声が教室の隅々まで一瞬で駆け抜け  
る。

それまできやいきやいと響いていた声はぴたりと止み、騒いでいた  
本人達も目をぱちくりとさせている。

「……………大声を出してすまない。だが、私はあの女性じゃない。教  
えられるようなことは何も無い」

そう言つて篠ノ之箒は顔を窓の外へと向け押し黙る。これ以上話  
すことは無い、そう言葉でなく態度で示すように。

篠ノ之箒の席に群がっていたクラスメート達も、さすがにこれ以上  
騒ぎを続ける気は無いのかそれぞれが自分の席へと戻って行く。

「さて、授業をはじめろぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

千冬さんの声に促された山田先生が授業を始めるが——教室はとうにも微妙な空気のままだった。

▽▽▽

「間に合うんでしょね」

「間に合うんじゃないの」

授業で使った教科書やノートを整理していると、セシリア・オルコット金髪縦ロールが俺の席の横にやってきた。

俺は教科書から目を離さないし、セシリア・オルコット金髪縦ロールも正面を直視している。視線を合わせないまま、俺達は会話をする。いや会話というか、独り言を互いに呟いているような感じかもしれない。

「もし間に合わないのなら、日程をずらしても構いませんわよ」

「へえ。待つてくれるとは優しいことで、さすがは代表候補生」

「言った筈ですわよ——このセシリア・オルコットの全力を以て叩き潰すと」

かつかつと足音を鳴らして、セシリア・オルコット金髪縦ロールは出口へと向かう。

最後に——教室のドアを潜る直前に、初めてこちらと視線を合わせ、

「——全力で来なさい。それを叩き潰してさしあげます」

その蒼い瞳に込められたのは強烈な激情だ。とても静かに閉められるドアが何とも対照的である。

「やろう。盛り上げてくれるじゃねえか」

「織斑くん、本当に大丈夫なの？」

「何が？」

こちらに声かけてきた隣の女子——この前の似非演説の時に何故か褒めてくれた娘だ。

「何って……いくらなんでも代表候補性を甘く見過ぎだよ、今からでもせめてハンデくらい付けてもらったほうがいいんじゃない？」

「そうだろうな。だがそれはしない。なぜならしたくない。どうせやるなら恨みっこなしで互いに本気のが面白いじゃねーか。そもそも勝つとか負けるとか、そういう損得考えるなら勝負受けてねえよ」



「楽しそうだねー織斑くん。そんなに目がきらつきらしてる男の子久し振りに見たよ」

「ああ、楽しいぜ。今この瞬間も人生が楽しくてたまらない。まー余興になるくらいには持ち込んでみせるさ。ただで負けてやるのも柄じゃねーし」

「ほほう。じゃあ楽しみにさせてもらおうかな？ あ、そうだ織斑くん、この後時間あいてる？ お昼一緒に食べようよ」

「お誘いは有難いんだが、先約というか予定があるんでね」  
「予定？」

首を傾げた女子に対し、首だけで篠ノ之箒の席を指す。その席の周りに人が皆無なのは、さっきの恫喝のせいである事は考えるまでもない。

「あれ？ 織斑くんって篠ノ之さんと知り合いなの？」

「いいや。これから知り合うのさ、改めてな」

はてな顔のクラスメートの横を通りすぎて、篠ノ之箒の席へと向かう。昼休みだというのに相変わらず窓の外を向いたままで、席を立つ気配がない。

「飯、一緒に行かないか。そっちも学食だろ」

「……私はいい」

俺の誘いは冷たい声で拒絶される。まあ想定はしてた。

今は空席になっている彼女の前の席を少し拝借する。俺が前の席に座っても、篠ノ之箒はこちらに顔も向けない。

「今朝の事だけどさ、一つ条件がある」

「……っ」

ぴくりと反応。

その証拠にポニーテールの先端がゆらゆら揺れている。さっきまでは窓の外を見続けていた彼女の横顔が微妙に動いている。時折視線がこちらに向いているからだ。明らかに俺がその“条件”を話したすのを、そわそわしながら待っている。

「……………何だ、条件とは」

「気になる？」

「お前が気になるような言い方をするからだ」

一分も経たないうちに、篠ノ之箒がこつちに少しだけ顔を傾けながらそう呟いた。数分は覚悟して待ってたが、思いの外速く彼女の限界がやってきたようだ。

「一緒に学食行ってくれたら話してあげる」

につこり笑ってそう言った俺に、篠ノ之箒は思いっきり顔を引き攣らせた。

▽▽▽

「ところで俺は君のことを何て呼べばいいんだろうか」

「好きにしろ」

「じゃあホーキちゃん」

「止めろ」

「君が好きにしろって言ったんじゃねーか!!」

「その呼び方はいくらなんでも酷すぎるだろう!?!」

「可愛い子にはちゃん付けするのはこの国の伝統なんだぜ。知らないのか」

「かわ……っ?!?」

「そうそう。そうやって直ぐ赤くなるとことかね」

「ぼっ、馬鹿にしているのか!?!」

「どっちかっていうと堪能してる」

「——ッ!!!」

ホーキちゃん(決まるまで!心中ではこう呼ぼう)の手元で鯖の塩焼きが物凄い勢いで切り刻まれていた。箸の扱いすげえ。

ちなみに買ったメニューはホーキちゃんは日替わり定食(鯖の塩焼き)で、俺は日替わり定食とカツカレーと親子丼。

ホーキちゃんを学食に誘ったのは、クラスから「切り離されている彼女を放っておけないという気持ちから。しかし同時に俺が死ぬほど腹が減っていたからでもある。

何せ色々あって昨日の夜も今朝も食事にありつけなかったのだ。

血糖値が絶望的に足りなくて実際さつきまでフラツフラだったし。

「——本当に、私の知る一夏ではないのだな」

俯いたまま、ぽつりと、弱々しい声が漏れる。

箸はその動きを止めていた。

「ああそうだ。ここに居る『織斑一夏』は、君の知る『織斑一夏』とは根本的に別物だと思ってもらって間違いない。身も蓋もない言い方をすると一旦リセットされたみたいなんだからさ」

正確に言うとう書き保存みたいなんなんだが。でも正当な『織斑一夏』の部分はリセットかかっているみたいなものだから間違いではない。

「悪ふざけであって欲しいと、悪い夢であって欲しいと何度も思った。けれど、これはやはり現実なのだな」

ぎりぎりと言う音はホーキちゃんの右手——箸を握る指先から聞こえてくる。

「私の会いたかった一夏は、居ない。そうなんだな、『一夏』」

「そうだよ」

それつきり俺は黙り、彼女も黙った。

でも静かにはならない、何せ場所が食事時の食堂なのだ。周囲の喧騒は収まるどころか増してゆく。でもだからこそ、たった二人の会話は雑音の中に埋れている。

「……それでも」

「それでも?」

ぽつりと、喧騒に消えそうなその声を聞き取るために神経を集中させる。

「私は思い出して欲しいんだ、お前に。私と一緒に居た時のことを」

「うん」

「諦められない。私は、どうしても一夏との思い出を諦められない……!」

顔を上げて、彼女は俺に言葉を叩きつける。

その目尻には光を受けてきらめくものが滲んでいた。

「——そうだな。そうだよな、思い出つてのは大切だもんな。それで

いい、君のその真っ直ぐさはかけがえのない美德だと俺は思う」

俺が手を差し出すが、彼女は反応しない。

きつと俺の意図が読めないんだろう。だから、言葉で伝えよう。

「改めて、これからよろしく篠ノ之さん。俺の記憶を取り戻す手伝いを、お願いします」

「……私の事は箒でいい。苗字だと、あの人と紛らわしいだろうからな」

差し出した俺の手を彼女が——箒が握る。

目尻では今だ滲んだ涙が光っていたけれど、彼女は柔らかく笑っていた。

「どうせならホーキちゃ、」

「却下!」

「ちえ……ところで箒、一つ聞きたい事があるんだが」

「何だ」

「記憶戻すって具体的には何か考えでもあんの?」

「……………」

「無いんか。無いんだな、あんだだけ大見得切つといて」

そもそも俺に”戻る”記憶が残っているのかどうか。

「う、うるさい! ま、待て今考える……そうだ! 記憶を失ったときの状況を再現してみるのはどうだ!!」

「撥ねられるというか!?!」

仮に戻ったとして、今の『俺』がどうなってしまうのか。

「ぐっ……! だったら今度の休みにアルバムを持ってくる! そうだ篠ノ之の道場にも行ってみればいい!!」

「ごめんそんな感じのもう全部試したわ。俺が六年間何もしてなかったと思うのか」

不安要素はそれこそ山のように、希望は欠片も見当たらない。

「ならどうすればいいのだ!!」

「おい逆ギレしたぞこの娘!!」

でも。その果ての結末で、どうか彼女が笑顔で居ますように。

▽▽▽

「おーりむーらせんせつ」

「気色悪い」

「ひでえ……」

放課後、千冬が廊下を歩いていると気色悪い事この上ない声がかけられる。即座に吐き捨てた後に相手を確認すると、織斑一夏が傾きつつも立っていた。

「何か用か、織斑」

「ええまあ。練習用のISって、確か申請すれば借りれるんですよ。専用機届くまでせめてそっちでも触れないかなと」

IS学園はISの扱いを学ぶ学園だ。故に当然ながら練習用の機体が多く存在しており、それらは申請さえすれば生徒は使用することが出来る。

だが簡単に貸し出される訳ではない。無数の書類と審査を経て、初めて使用許可が降りる。それに今は学年度が始まって直ぐ。この時期に一年生が許可を出しても受理されるのには時間がかかるだろう。

「確かに申請すれば使用許可は降りる。が、今の時期だと通るまで一週間かかれば早い方だろうな」

「うげえ」

千冬の答えに一夏が盛大に顔をしかめてうめき声を上げた。恐らく専用機が来るまでにせめて練習機に触れておこうと思ったのだろうが、恐らく間に合うまい。

「意味ねえし……専用機来るの本番当日とかじゃあ流石に」

「……………」

「ないですーって待って下さいよ何で目を逸らすんですか織斑先生！

あれっ、何か最悪の予感がする!？」

先日、千冬が送った催促に対する返事は『NOW磨きING』だった。突拍子も無い行動には慣れていたつもりだが、今回は特に奇行が目立つのではないかあの“天才”は。

悲鳴を上げていた一夏だが、一度深々とため息をついた後、それこ

そスイッチでも入れ替えるようにその感情を切り替えた。

利も不利も、こいつにとつてはどちらも同じ要素でしかない。ただあるがままを受け入れて、そこから自分の進みたい道を強引に掴みに行く奴だ。

(……………企業の奴隷はやはり嘘だろう)

修羅場に放り込まれるとわかりやすいのだが、有事の際の一夏の眼は完全に『玄人』のそれである。“一流”を幾人も見てきた千冬がそう判断する程に。

「話はがらつと変わるんですけど。箒に俺のこと話したんですよー」

「箒、か。そう悪いことにはならなかったようだな」

「えーまあ。大体いい感じですかね」

唐突なまでに、一夏はいつもの調子に戻る。

そんないつも通りの口調で、笑いながら、一夏は語り出した。

「言われました、俺の記憶を取り戻すって」

「……………そう、か。まあ、篠ノ之らしい発想といえば、らしいかもしれないな」

相変わらず今の一夏の精神(記憶)がどうなっているのかは、一夏にも千冬にも——もしかしたら誰にも——わかっていない。

だが本人は本来の『一夏』と『自分』は別なのだと考えている筈だ。それで、その考えで記憶本来の一夏が戻るといふ事は、

——それは、今の一夏が消えてしまうということを意味しているのではないか。

「やー、ほんつと真つ直ぐで強い娘だ」

「惚れたか？」

「人間性を評価してるだけでしょーが。どうしてそうなるんですか」  
だというのに、どうしてそんなに良い事ことであるかのように話す。

そんな風に、笑って話せる。

「お時間取らせてすいません。じゃあちよつとこの後呼ばれてるので。何故か剣道をやらされる羽目になったんで。本当に何故か。さっぱり流れが読めやしねえ」

「ああ、せいぜい絞られてこい」

「うへえ……」

違う。こんないつも通りの会話の前に、問いかけなければいけない事があるのではないか。

本当にそれでいいのか。そう問わなければいけないのではないか。

「い——」

「千冬さんは」

呼び止めようとするより速く、一夏がくるりと振り向いた。

まるで千冬がそうする事をわかっていたように。

「千冬ちゃんは、『弟』の事を一番に考えてあげねーと。だって世界で一人の『姉さん』なんだから、さ」

喉元まで来ていた言葉は、言葉になる前に止まってしまった。

少しの間だけ千冬が何も言わない事を確認して、一夏は改めて踵を返して歩き出す。その姿が視界から消える間千冬は何も言わず、何かする事もなく、ただ立ち尽くしていた。

確かに弟が戻るのならば、それは嬉しい、喜ぶべき事だろう。変わってしまった前の弟と過ごした思い出は千冬にとってかけがえのない大切なモノ、それは今も変わらない。

じゃあ、その後の思い出に価値は無いのか？

「そんな訳が、あるか」

無意識の内に呟いていた。

ずっと千冬の事を考えてくれた。

記憶だって、今に始まった話ではない。昔から暇があればアルバムや記録の類を読み漁ったり、縁のある場所に行ったり、人に会ったり、料理の味付けを再現してみたり。

それはきつと彼自身を殺すような行為であった筈なのに。千冬が弱音や愚痴を吐いた事はあっても、彼から弱音なんて一回も聞いたことがない。

「——今更だ。本当に今更だ」

人気の無い廊下の一画で、壁に身体を預けて千冬は呻く。

知っていたはずなのに、問題を先送りにして、現状に——彼の好意に甘んじていた。きつと千冬は知らず知らずの内に彼によりかかっ

ていたのだ。

「二夏」

そして今、それが消えるかもしれないと突き付けられて焦り始めている。そんな事はとうの昔から考えられたのに。いざ実際に予兆を目の前にして、今更に。

織斑千冬としての正しい選択が何なのかは、解っている。

彼を消してでも、織斑一夏を取り戻すこと。それが絶対的な正解だ。それを望む気持ちは確かに千冬の中にある。

けれど、それでも心を大きく占める別の感情があるのもまた事実だ。

「二夏、私は——」

あなたに、きえてほしくない。



▽▽▽

『天才』

イレギュラー。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「織斑くんてさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかなー」

今回の場合は正当に相手が強いんだぜお嬢さん方。

ま、俺が弱いのも合ってるけど。

ギャラリーの落胆する声を聞きつつ、俺は呼吸を整えながら外した面を置く。

元々剣道自体は大して強くないとはいえ……まあ面白いくらいボコボコに負けたもんだ。

「中学では何部に所属していた」

「帰宅部最高」

さつきまでは竹刀で打ち合っていて、今は俺を見下ろしている相手—— 箒は、俺の答えに対して盛大に目尻を釣り上げた。

「どうして、どうしてそんなに弱くなっている……!」

酷く悔しそうな様子で箒が声を搾り出す。顔を紅潮させ、目尻を釣り上げたその顔は怒っているように見えるし、実際怒っているのだろう。

けれど、俺には今にも泣き出しそうな子供の顔に見える。

きつと箒の知る織斑一夏は本当に強かったのだろう。六年の時を経てもまるで色褪せないほどに強く、その心に刻み付けられるほどに。

(……………)

ところで何で俺と箒がこうして剣道をしているのかといえはだが。記憶を戻すのも大事だが、俺にはまず手近に迫った決闘が控えている。なので箒に提案というかお願いというか、決闘が終わるまではI Sの勉強してもいいかと聞いてみた。

んで、その提案ついでにI Sについて教えてくれないかとも言ってみた。そしたらこうして剣道で勝負することになったのである。

聞いた直後は何言い出してんのこの侍娘と思ったが、改めて考えてみたら現在の俺の実力を測るための剣道勝負だったんだろう。たぶん。

それともう一つ。

織斑一夏と篠ノ之箒はかつて同じ道場で共に剣道に打ち込んでいたらしい。だから一緒に剣道をやる事で、俺（一夏）が何か想い出すのではないのかとも考えていたんだろう。

「そんなに強かったのか？ 昔の織斑一夏は」

「ああそうだ。一夏が私なんかに負けるはずがない」

「そーかい。そりゃあよっぽどだな……」

いや。

いやいやいやいや。今の君より強いって正直相当無茶振りだと思うぞホーキちゃん。

とは思いつつも、口には出さない。だってあんまりにも箒がきつぱりと、そしてとても誇らしげに言うものだから。水を差す気分にはなれなかった。

そして実際打ち合ってみて改めて思い知ったのは箒の強さだ。

箒は強い。とんでもなく強い。俺との差は格が違うというか、次元が違うというか。もうそんなレベルだ。全国大会優勝の名に恥じないどころか、その枠を超えかねない。

俺も剣道の経験があるから、判る。

ちなみに『前』の方。といっても学生時代に部活でやっていた程度で、学生（部活）じゃなくなつてからはでんで触れていない。

(なあーんつかさあ、根本的に向いてねんだよなあ……)

別に剣道が嫌いな訳じゃない……が、正直なところ尋常じゃない苦手意識がある。

まあ精神の修練という面でも果てしなく俺に向いちゃいないのだが、もつと根本的な部分で“苦手”なのだ。

“違和感”がある。

竹刀を握って振っていると、何か得体の知れない妙な違和感がある。最初は慣れてないせいだと思ったが、何年やっても消えるどころか——むしろ続けるほどに違和感は大きくなっていく。そんな風によくわからない違和感に苛まれ続けた結果の、この苦手意識だ。

「……直ってねえなあ。まあ今となっちゃ、愛着も湧くつてもんか」

とはいえ名前も思い出も不確かな『今』となつては、違和感といえど『前』から持ってきた本来の俺の一部分に思えてくる。不思議なものだ。

「どうかしたか?」

「いや何も。それでどうすんのこれから?」

咳払いしつつ手にした竹刀の先端を床に打ち付け、箒はきつぱりと言いつつ放った。

「これから毎日、放課後私が稽古を付けてやる。鍛え直しだ」

「はいよ」

苦手意識全開の剣道をやるのは、ちよつと憂鬱だが、元々身体は動かしとくつもりだったから丁度いいだろう。どうも訓練機の申請も通りそうにないし。

「全く、どうしてそんなに平気で居られるのだ!」

「なにが?」

「ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど、悔しくはないのか!?! 情けないとは思わないのか!?!」

箒がこちらに竹刀を突き付けつつ言い放つ。見るからにボルテージが上がってきている。

しかし女尊男卑の現代社会で、男に対して男児であれと言いつつて感性はなかなか稀少価値。本当真っ直ぐブシドー突っ走ってる娘だ。

「そりや負けるのは悔しいし、情けなさもあるけどさ。終わっちゃった後にそれをぐじぐじ誇示して何になるんだよ」

「ふん。軟弱者め。女に囲まれた暮らしに浮かれているんじゃないのか?」

「現状に浮かれたら楽だなあと、初日からずっと思ってるよ?」

「気に入らなかつたのは俺の返事か態度か、もしかしたら両方か。踵を返し荒々しい足取りで箒は更衣室の方へと歩いていった。」

「更衣室に行くんだからそりや着替えるんだろう。つまり今日の稽古はお開きと考えていいようだ。とりあえず道具片付けよう。」

「織斑くん、織斑くん?」

「なんですか。ていうか誰ですか」

「ギャラリーと化していた剣道部員の一人に道具の仕舞う場所を聞いていたら、見知らぬ誰かに呼びかけられた。いやまあ剣道部の人なんだろーが。」

「私はこの剣道部の部長さんなんだよ?」

「とりあえずその疑問形がツツコミ待ちなのか口癖なのかを教えてください。今後の対処に困るんで」

「それでね、織斑くん? 聞きたいことがあるんだけどね?」

「華麗にスルーしやがりましたね。で、何ですか聞きたいことって?」

「織斑くんって織斑くんだよね?」

「部長さん。質問の意味が普通にわからんのですが?」

「ちょっと対応に困るといつかまた妙に変わった人出てきた、なんて密かにげんなりする俺の心中を知ってか知らずか——まあ知る訳ないか。」

「部長さんは容姿とは方向性の違う小動物のような可愛らしい仕草で小首を傾げているが、首を傾げたいのは俺の方だ。」

「いやね? 織斑くんが私の知ってる“織斑くん”なら、篠ノ之くんに負けるはずがないんだよね?」

「……初対面ですよね?」

「そうだね?」

「ていうか何だよこの疑問符の多い会話。」

▽▽▽

——不思議な気分だった。

剣道場の更衣室で着替えを続ける箒の脳裏にはそんな気持ちが浮かんでいた。更衣室に入った直後はただ一夏の不甲斐なさを嘆いていたのだが、時間の経過と共に気持ちが落ち着いてきたせいだろうか。

織斑一夏。

六年ぶりに再開した幼馴染は、箒の知る幼馴染とは何もかもが違っていた。

(一夏。私の知る、一夏。私の会いたかった、一夏)

懸命に剣道に打ち込む幼い一夏の姿が思い出される。六年前の一夏の記憶の中にある幼馴染はとても強くて、格好良かった。

けれども今は見る影もない。

先程のように手も足も出ずに箒に負けた事が良い例だ。きつと一夏が箒の知る一夏のままだったなら、負けていたのは箒だったろう。

「……どうして変わってしまったんだ」

技術が後退したとか、感覚が衰えたとかその程度で済む話ではない。恐らく取り戻すよりも一から作り直した方が早いのではないか。

それに剣の腕だけではない。

今の一夏は、箒の知る一夏とは悉く結び付かない。六年という歳月を経ているから容姿は変化して大人びている。だが雰囲気、口調、物腰——容姿以外の何もかも、そこにかつての面影は無い。まるで別人に変わったかの様な劇的な変貌を遂げている。

「でもわかってくれた。私だと、わかってくれた」

休み時間に呼び出した時から一夏は箒の事をちゃんと『篠ノ之箒』だと認識していた。

新聞で箒の名前を見つけたと言っていた。『篠ノ之箒』を忘れたままならその名前に反応しないはずだ。

アルバムを引っ張り出したと言っていた。『篠ノ之箒』がどうしても

いいならそんな行動をするはずがない。

——俺が六年間何もしてなかったと思うのか

そして、そう言っていた。

例え記憶が消えてしまっても、確かに在った筈との思い出を一夏は決して蔑ろにはしていなかった。それどころか、大切なものだと——取り戻したいと言ってくれたし、今までも行動していたのだろう。

それが、たまたまなく嬉しい。

嬉しくてたまらない。

何故こんなにも嬉しいのか。

それは、篠ノ之箒が——

幼い頃箒が一夏に抱いていたのは、気になる男の子という曖昧な感情だった。

離れ離れになる時に、その存在の大きさを改めて自覚した。

その後もずっとずっと忘れられなかった。

ニュース番組で名前を見たときは、心臓が止まるほど驚いた。

そして同じ学園に通うのだと知って、本当に嬉しかった。

入学式が、待ち遠しくて仕方なかった。

可愛い髪型にしてみようかなんて、らしくない悩みを毎日鏡の前でした。

そして記憶忘れてが無いと聞いて、絶望した。

泣きそうになった。

意味もなく叫びたくなった。

何か、何でもいいから手当たり次第に壊したくなった。

そうして、不意に小さな疑問が浮かんだ。

どうしてこんなにも心が乱されるのか。

それは、箒にとつて一夏の思い出が——一夏存在をそれほどまでに想っていたから。

そうして、それをすんと自覚した。

本当は、ずっと昔から心の中にあつたそれを。

“篠ノ之箒は織斑一夏が好き”。

六年の年月の間、決して色褪せることのなかった、胸に灯る仄かな

恋心。それは絶望に吹き消されること無く——否、絶望を経たからこそに明確に火を灯した。

「……………」

ふと、目に入った鏡に誰かの顔面が映っている。それは“ふにやり”なんて気の抜ける擬音こそが相応しい、蕩けるような笑顔。

箒しか居ない更衣室の鏡に映っているので、それは当然箒の顔面である。

「—————」

絶、句。

自身の余りにも女の子の子した顔面の有様に、箒の顔から血の気が一気に引いた。

続いて更衣室に響くベチベチベチベチという謎の打撃音。その正体は箒が自分の頬を猛然と叩く音である。

血の気が引いて眼は見開かれているのに、口元は緩みきったまま。そんな壮絶な状態で固まっている顔面を一刻も早く矯正しようとしているのだ。

「酷い！ 酷い!! 直れ！ ええい直らんか!!」

数分かけて顔面の矯正に成功した箒は、壁に手をつけて呼吸を荒らげていた。額には汗まで浮かんでいる。

「い、一夏のせいだ。一夏が私を忘れているから……こんな事に……………」

問答無用で責任転嫁な理論をふりかざしつつ、箒は呪詛のように呟いた。

「明日から特訓だ！ 私がみっちり鍛え直してくれる!!」

恥ずかしさを激情に、あますことなくコンバート。

両手を振りあげながらうおーと怒号を上げる篠ノ之<sup>恋する女の子</sup>箒であった。

▽▽▽

記憶を無くし、すっかり変わってしまった今の一夏に対する箒の評価は、当初あまりよろしい物ではなかった。というか結構悪かった。

箒の事をちゃん付けで呼んだり、隙を見つけてはからかおうとしたりするからだ。

男なのだから何事にも動じない様、どっしりと構える事は出来ないものかと、箒は毎日憤慨している。

だが、

「一夏」

「何さ」

「い、いや。何でもない」

「？」

懸命に何かに打ち込む姿を見せられれば、評価も変わろうというものだ。

例えばいま一夏がやっている日課もその一つ。日課というのは、ノートの内容を延々と書き写し続けるだけ。毎日毎日同じ事をただひたすらに繰り返す。そんな日課を一夏は今日まで欠かしていない。放課後の特訓で——文字通り倒れるまで打ちのめされた日でも。

一夏を特訓する事を決めた当初、箒の心の中には一夏と過ごせる事を嬉しく思う気持ちがあった。認めよう。これ以上の誤魔化しは恥の上塗りになる。

(全く、私という奴は……)

浮ついた気持ちは、直ぐに吹き飛んだ。

打たれても、負けても、笑われても、一夏は倒れた数だけ立ち上がった。いいや、そもそも本当の意味で倒れた事などきつと一度も無かったのだ。稽古をつけてやる等と言っておきながら下心を持っていた自分を箒は本当に恥じた。

放課後の特訓でボロボロにされた後も部屋に帰ればISについての教本を広げ、日課をやり始める。無論昼の授業の時もずうっとペンを動かしている。

脇目を振る暇など無い、そう言葉でなく態度で示すように一夏は毎日努力を続けてきた。

(うむ)

箒はうんうんと、心の中で満足気に頷いた。声に出してしまつて



は、さっきのように勉強の邪魔になってしまう。

この一週間、一夏と多くの時間を共有した箒が見たのは、何にも脇目をふらずただ黙々と努力だけを積み重ねる姿だ。それは純粹に賞賛に値すると箒は思うし、好ましい。

愚直。

最近の一夏の様子を見てみると箒はそう思う。無論箒は一夏の努力が『愚か』などとは思っていない。どころか一夏の勤勉さには素直に感心している。

だが、ここ最近の異常な打ち込みようを見るとそう思ってしまう。普段の態度からはとても想像がつかない——まるで何かに取り憑かれているような様は、どこかまともではなかったから。

(いや。真面目なのはいいことだ。しかしだな、いくらなんでもあの時は……)

勉強を見ている時に、意図せずして箒の胸を一夏の腕に押し付ける形に——本当に事故で——なってしまった事がある。その事態にいち早く気付いた一夏は淡々と箒にその事実を告げると、直ぐに教本に目を落とした。

動揺の欠片も無かった。

欠片も、無かった。

男女が同じ部屋に住んでいるというのに、こうまで気にされないというのは——箒が女性扱いされていないのではないかと思ってしまうって、少しいやかなり複雑である。

(まったく。少しくらいはこつちを見ろというのだ)

ふうと頬を膨らませ、心の中だけで棘々とした怒りを沸き立たせる。怒っているつもりなのだが、どうにも口元が緩む。

女に惑わされない一夏に対して感じる好感と、女扱いされないことへの不満が入り混じっているせいかもしれない。まあどうせ一夏は背を向けているのだから、少しくらい変な顔をしていても問題ないだろう。

(しかし、明日か……もう明日なのか)

一夏がどれだけ努力しているのか、箒は恐らく学園の誰よりも理解

している。

そしてその努力がどれだけ報われていないのかも、きっと学園の誰よりも理解している。

▽▽▽

手元でガリツと小さく音が鳴った。

ペン先から出ている芯が尽き、シャーペンの金属部分と紙がこすれあつた音だ。

「ふいー」

丁度いい区切りだったのでペンを置き、教本やノートを片付けて立ち上がる。大きく伸びをしつつ首をぐるぐる。身体の内側で少し音が鳴った。

(明日か。まーやるだけはやったけど)

ここ一週間の事を思い返す。授業を真面目に受けたり等の勉強方面も確かに苦痛ではあつたのだが、それよりも等の特訓の方がきつというか何というか正直地獄な一週間だつた。

おかげで少しは腕が上がった。

と言いたいところだが、実際そんなに上達してない。あんだけ毎日動いてたんだから、身体のキレはそりや良くなつてるだろうけど。

昔剣道やつた時だつて、人生かけてたとまではいかないにしても、真面目に打ち込んでいたのだ。それで何年やつても欠片も上達しなかつたんだから、今になつていきなり——それもたかだか一週間如きの特訓でどうにかなる筈がない。

そして勉強の方も微妙な結果だ。

出来る限り詰め込んだが、それでも頭に入ったのは必要な情報の半分いったかどうか。まーこれでもロースペックな脳じゃ頑張つた方である。

“こんなものだ”。

(……………俺にもビックリするほど向いてるもんとか、果たしてあるのかね)

とりあえず剣道と勉強が向いてないのはこれまでの人生でわかっ

ている。いやちやんと続ければ相応の成果は出るんだろう、けどそれはやっぱり相応止まりだ。

何度か『天才』の知り合い（篠ノ之博士に非ず）に恵まれたので、それはよくわかる。連中は凡人の努力を軽々と——それこそ本当に息をするように踏み越えていくのだから。

——そんな当たり前の事を、一々言葉にしないと君は解らないの？人間の魅力の一つである個性が存在する以上、得手不得手は必ず存在しちまう。それは当たり前で、そうでなければならぬ事だ。

努力しても無駄だつてそんなくだらない事を言いたい訳じゃない。努力は必要だし大事だ、でも報われない努力も確かにある。必ず報われるのは夢物語の中だけだ。

——有史以来、世界が平等であつたことなど一度もないんだよ。

考え事に耽つていたら、ずうつと昔に——俺がまだ真つ当に『俺』だつた頃。知人（？）であつた『天才』の吐き捨てた言葉が脳裏に蘇つた。ついでにそう言った時の凄まじく忌々忌々しげな表情も。

黙つていれば可愛いやつだったのに、どうしてああも世界の何もかもが憎いみたいな顔ばかりしていたんだろう。

いや、最後に会つた時だけは違う顔だったか。

全くボロボロ泣きやがつて、こつちの人生の一部を潰したんだから謝礼笑顔の一つも見せろ寄越せというのだ。

あれから向こうで何年経つてるのかは知らないが、さぞ名を売つたのだろう。その程度が容易いくらいに優秀な奴だったから。

——不平等こそが真なる平等で、世の中は残酷なまでにその通りだ。

机の灯りだけの室内、奥側のベッドには一人の女の子が眠っている。

篠ノ之箒——『織斑一夏』の幼馴染。

当初は俺に付き合つて起きているつもりだったようだが、今は俺に気にせず先に就寝してもらっている。俺の態度に不満はありつつも一応は信用されているらしい。

彼女にはこの一週間勉強と特訓の両方で随分世話になった。加え

て同室なのだ、ここ一週間程は常に一緒に居たと言ってもあんまり過言ではない。

だから、この一週間は本当に大変だった。

気を抜けば頬が緩んでしまうから。だってあんまりにも彼女が微笑ましくて可愛いものだから、正視できやしない。

不意に接触した時に顔を赤らめる。

現を抜かすなど言いつつも女の子扱いを要求してくる。

俺が他の女子と親しく話しているとそれだけで不機嫌になる。

何気ない会話の中で過去の一夏と俺が重なったときは顔をぱあと綻ばせる。

この娘は、『織斑一夏』が好きなんだ。

わかるさ。

わかるとも。

わからないでか。

あんなにも日常の中に山の様にヒントがあるんだから。わからないほうが難しいわ。

しかしどうして恋する女の子ってのはあんなに魅力的に見えるんだろうか。全く立ち振る舞いは武士全開のくせに——いやだからこそ、たまに見せる女の子らしさが可愛ったらない。

だけど。

彼女の気持ちに向いているのは、それを受け取るべきは『織斑一夏』だ。

『俺』はただその場所に居るだけの別人なのだから、それを受け取ってはいけない。

近くで観てきた。

近くで示されてきた。

その想いが彼女にとってどれだけ本気なのか、どれだけ大切なのかを。

そんなにも真摯な想いですら、必ず報われるとは限らないのが不平等の上に在る世の中なのかもしれないけど。

それでも。いやだからこそ、それは本物に届けるべきだと俺は思

う。

こんな偽物風情が、触れていいものじゃない。

「にせもの」

忘れてはいけないその事実を確認するのは簡単だ。

両の手を握って開く、ただそれだけでいい。

自由に動くこの本物の両手こそ、俺が偽物であることの証なんだから。

——結局それだけなんだ。だから世界なんて、至極単純でつまらない。

かつて、両手で助けた女の子に、もしまた会えるのならば言ってもらいたい。

世界はお前が思っている以上に面倒（人格交代）で、お前が思っている以上に輝きに満ちているのだと。

▽▽▽

## 『絶対防御』

ISの主な防御は装甲でなく周囲に張り巡らせた不可視のシールドで行われている。だがシールドは絶対ではなく、強力な攻撃を受けた際には突破されてしまう事もある。

そしてシールドが突破され、操縦者の生命を脅かす危険が発生した際に発動するのが絶対防御である。これはシールドエネルギーを極端に消耗する代わりに、あらゆる攻撃を受け止める。この絶対防御がある限りはIS操縦者の生命が危険に晒されることはほぼ無い。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「やってきました決闘当日！　ちなみに俺のISは未だ届いておりません!!」

「突然どうした」

「いやこの酷い現状を受け入れるためにただ明るく言ってみただけ」  
「……………」

せめて気分だけでも盛り上げようと拳を突きあげて叫んだら、箒に物凄く可哀想なものを見る目で見られてしまった。

そう、いよいよ今日が決闘の当日である。

現在位置は第三アリーナ・Aピット。俺と箒の立ち位置の直ぐ隣に見える大きなハッチが搬入口だ。ここから俺の専用機が運び込まれてくるらしいので、届いたら即乗り込んでフィールドへ飛び立つ事になる。

ちなみに少し上を見上げると管制室的な部屋があり、そこにはガラスを経て山田先生と千冬さんの姿が確認できる。搬入され次第上から知らせが入るはずだ。

「そういえばだな箒さんや」

「何だ」

「お前昨日洗面所のコックしつかり締めなかつたら。微妙に水流れ続けてたぞ」

「うぐ……すまなかつた。以後気をつける。だがお前もデスクの灯りを消さずに寝ることが多いぞ。私がいとも消しているのだからな」

「おー悪い悪い。気をつける………あー何か腹減ってきた。今日の晩飯何食おうかなー。丼ものは制覇したから次は定食攻めよっかなー。箒、何かおすすめある？」

「後にしろ。これから模擬戦なのだから、もつと気を引き締めたらどうだ」

「過度の緊張は逆によくねーよー」

「お前は不拔け過ぎだっ」

「そーんなこーとーなーいーよー」

「ええい、しゃんとしろ！ 立て!!」

「あーれー」

完全に脱力しきっていた身体が、目尻を釣り上げた箒に強引に引き起こされる。

正直暇だ。ISが届くまで本当にする事がない。

「お」

不意に空中にウインドウが出現し、俺と箒は反射的にそちらに顔を向ける。

そこに映っているのは青い空、そしてそこに浮かぶISという兵器を纏った戦乙女——名前をセシリア・オルコット。

ブルー・ティアーズ  
「……蒼い雫、ね」

その名の通りに機体色は蒼を基調としていた。無骨な装甲から何故だかセシリアの蒼く澄んだ瞳を想起した。ただその宝石の様に綺麗な瞳は、俺に対しては常に輝きでなく敵意を放っていたが。

『織斑くん織斑くん織斑くんっ!』

どこかに設置されたスピーカーが上階に居る山田先生の言葉をこちらに伝える。箒は声を追って上を見上げたが、俺は搬入口に視線をやった。

『来ましたっ！ 織斑くんの専用IS!!』

『織斑、直ぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ』

何か千冬さんに無茶振りされとる。

「さあて。ようやく到着か」

重苦しい駆動音を響かせながら勿体ぶるようにゆっくりと、搬入口がその口を開いていく。そうして隔壁の向こう側にあった“それ”の姿が露出する。

『白』。

抱いた感想があるとすればその一言に尽きる。何せ機体のほとんどが白いのだ。後は各所に少し青が散りばめてあるくらいか。何ていうか、すごい汚れ目立ちそうな機体だなあ。

ともかくおっ始めるとしましょうか。

『それが織斑くんの専用IS『白式』です!』

「座りやいいんですね!」

『そうだ。後はシステムが最適化をする』

発進用のリフトの上に降ろされたその白い機体に駆け寄って取り付いた。俺のIS——白式の中央辺り、搭乗者を迎え入れる様に空いたスペースに身体を滑り込ませた。

——「登録搭乗者との物理的な接続を確認しました。最適化処理、フィッティング  
ラスト・フェイズ最終段階を開始します」

白式の各部がかしゆかしゆと小気味いい音を立てながら可動し、俺の体に装甲を這わせては閉じていく。おー何かすごいメカい。カッコイイ。

————、ぎっ)

どう例えればいいのか。

まるで俺そのものにヒビが入った、とでも言えばいいのか。白式に触れ、そして繋がった瞬間に脳の中で、いや脳そのものがまるで悲鳴を上げるように軋む。

『織斑、気分は悪くないか?』

最悪です。具体的に言うとうの穴からぶつといマイナスドライ



バー突っ込まれて脳みそ掻き回されてる感じに不快です。ていうか吐きそう。何だこれ超気持ち悪い。

(あ、レ……う？こ、k o、声、出……)

通信から聞こえる千冬さんの声。それに対する俺の返答は口どころか脳からも出る事が無かった。俺の口は酸素を求める金魚のようにパクパクと開閉しただけで、言葉を発しない。

困惑する間もなく次の異常が始まった。

俺の体を包むように各部に張り付いた白式、その装甲と肌が直接接触合っている部分から何か俺の身体に“滲み込んでくる”。まるで毛穴という毛穴から無数の細かい虫が入り込んで来るよう。想像を絶する不快感が脳髓を縦横無尽に駆け巡る。

『織斑？…どうかし』

ぶづりと千冬さんの声が途切れる。次いでごう、と音がしてピットの風景がいきなりスライドした。こちらを見上げる筈の心配そうな顔が、目に入った瞬間に消える。

動いているのは俺の方。だがそれに気付いた時、既に俺の身体と白式はピットの外へと放り出されている。

一瞬最悪の結末<sup>墜落</sup>が脳裏をよぎるが、直ぐに白式の背部に位置するスラストーと思しきパーツが唸り声を上げ、機体を浮遊させた。

今度は眼前に浮遊する大小いくつものメツセージウインドウ。

それがびつつしりと『ERROR』で埋め尽くされている。みっちり詰り込まれた文字がせわしなく動き回る画面は、石の裏にビツチリと小さな虫が張り付いている光景を連想させる。

しかもそんなウインドウが無数にあるのだ。気分はとつとつに最悪を突き破り、精神に影響を及ぼしそうな域に突入していた。

(n、……、何、だ——、こつ。れ——!?)

俺の意思等お構いなしに、白式は勝手に空を滑り、セシリアに一定の距離まで接近すると今度は勝手に停止した。

「逃げずに来たのは褒めてあげましょう。けれど——」

四枚のフィンが特徴的な機体を纏ったセシリアは、左手で俺を指さす。右手にはライフルと思しき大型の銃器が握られているからだ。

「わたくしを馬鹿にしていますの?」

セシリアが言いたいのは、現在の俺の格好だろう。いや白式に問題があるのではない。問題なのは俺の頭上に地面があつて足元に空があることだ。

要は、綺麗にひっくり返っているのだ。

「馬鹿にしてるつもりはないどころか相当に必死なんだが」

あ、喋れた。

さつきまでと違い今度は喋ったと思った事がちやんと言葉として口から出た。現状の距離的に肉声は相手には届かないのだが、ISも今度は真面目に働いたらしい。

セシリアが頬を引き攣らせる。俺はありのままを述べただけなのだが、どうも向こうには挑発として伝わってしまったようだ。

「いいでしょう。一瞬で——」

セシリアが右手に握っていたライフルを素早く構え、俺に対して照準を合わせる。明らかにロックオンされている筈なのに、白式は何のアラートも鳴らさない。ただ延々と狂ったようにエラーメッセージを吐き出し続けるだけだ。

セシリアは既に戦闘態勢に入っているが、正直こちらはそれぞれろでは無い。少々情けなくはあるがここは正直に機体の不調を訴えた方がいいだろう。

「……………!?!」

ちくしうめ。また声が出ねえ。

バックヤードの教師二人に対し通信はさつきから試みているが、駄目だ。というかシステムを起動させることすら出来ない。操作が一切通らない。

「終わらせて差し上げます!!」

来る! 強制的な沈黙を続けるしかない俺は、その攻撃を中断させる術を持たない。セシリアの構える大型のライフル、その先端で蒼い閃光が瞬く。

(く、そ、——……………が、動け動……………けよ!?)

攻撃を止められないのならば、避けるかしか無い。今も尚悲鳴を上

げるように軋み続ける脳髓の端にちらつく直感に従って、身体を大きく横にずらす。

「う、オ、——ア、——!？」

セシリアの攻撃を避けるため、身体を右に滑らせようとした途端、物凄いスピードで下にかつ飛ぶ俺@白式。セシリアの放った射撃は避けられた、が。

(うおおおおおおおちるおちる墮ちるじゃなくて落ちるう——!?)

上! ともかく上! 何よりも上へ! ぐんぐんと物凄い勢いで迫ってくるアリーナの地面が視界を満たす中、ただ上昇だけを強く願う。そんな俺の意思を受けた白式は背部の大型スラスタに光を灯し——左へ、吹っ飛んだ。

「何つでじゃあああああああああああ!!!」

あーあーアー……

今度は左へ全推力で持って加速する。ろくなコントロールの出来ない現状で最大加速など愚行そのものである。アリーナの観客席を埋めるギャラリーからは、俺はまるで明後日の方向にすっぽぬけたボールの様に映っていることだろう。

地面との衝突は避けられたが、このままかつ飛んでいたら今度はアリーナの遮蔽シールドにぶつかってしまふ。ISアリーナは内部でどれだけ暴れても外へ被害が漏れぬよう、半球状のエネルギーシールドで覆われているのだ。

(……とまれ、止まれ! 止まれええええええええ!!!)

俺の決死の願いを受け、白式はその場で高速回転をし始めた。

おい嫌がらせか。

ただでさえさつきから脳が雑巾絞りされてる如き気分の悪さを味わっているというのに。

その上高速回転する景色を見せる等、何だ、吐けとかちくしよめ。

根性で吐き気を抑え込んでいたら唐突に機体が高速回転を止めた。何故止まった、というか何故回ったかすら不明だが急いで相手の姿を

探す。

居た。セシリアは遙か上空——恐らく最初の位置から殆ど動いていない。肉眼では蒼い塊にしか見えな——ハイパーセンサーが俺の視力を引き上げる。とはいえ映った映像はノイズ混じりの酷いものだったが。

『ば、馬鹿にして……馬鹿に、してえ………っ!!』

ノイズ混じりの声。セシリアは頬を引き攣らせて、半笑いの様な表情になっていた。彼女の考えている事は手に取るようにわかる。きつと馬鹿にされていると思っているんだろう。いや実際俺も逆の立場だったら正直かなりイラツとくるところと思う。

(こっちは、大真面目に、精一杯だ、つてのに——ツ!!)

叫んだ筈の言葉は、またしても声にならず。俺はセシリアの表情が憤怒に変わっていくのを見ている事しか出来なかった。

蒼い雨がアリーナに降る。

それは最早情けも容赦も捨て去ったセシリアによる、怒涛極まりない連続射撃。

▽▽▽

千冬が眺めるのはアリーナの様子を映すモニター。その中には、空を危なっかしく跳ね回る一夏の姿が映っている。

——でもさあ千冬さん。

三年程前だっただろうか。大規模な交通事故があった。潰れ、ひしゃげ、または横転した自動車で埋め尽くされた道路は、最早道路でなく局地的な地獄の如きであった。ニュースの映像で見た千冬ですらそう感じたのだから、実際に居合わせた人間にはそれ以上の恐ろしい何かだったのだろう。

そんな凄惨な事故現場にたまたま居合わせた一夏は、躊躇もなく地獄に歩いて入って行ったという。そして散歩するかのような軽い足取りでスクラップの中を進み、道端の空き缶を拾うような気軽さで取り残されていた女の子を拾い上げて戻ってきたというのだ。

女の子をぶら下げた一夏が爆炎をバックに歩いて戻ってくる様は

最早シユールですらあったと、その時の様子を千冬に報告してくれた一夏の友人は言っていた。

それを聞き、千冬は怒った。

何の装備も訓練も受けていない素人が、そんな場所に足を踏み入れる等自殺行為に他ならない。人命を救助したことは確かに名誉だが、千冬には一夏の行動が勇気ではなく無謀から来ているとしか思えなかった。

——怖いって、どんなだったわけ？

死ぬことが怖くないのかと問うたら、一夏は首を傾げてそう答えた。

人は刃物を恐れる。

それは血肉を切り裂かれることがどれだけ己の身に影響を与えるかを知っているからだ。けれども幾度も刃物に遭遇した人間は、やがて理解する。肌に触れない限り刃物の存在自体は無害であると。そしてただ存在するだけの刃物に対しての恐怖を薄れさせる。正確には認識することで過剰な拒絶感を抑え込めるようになる。

それと、大まかには同じ事なのだろう。

今の一夏は元居た位置から『死』を経て一夏の場所にやってきている。故に『死』という生命にとって最上にして終着点の恐怖の『経験』と『認識』を持っている。

その経験は通常人間が感じる多種多様な種類の恐怖に対しての拒絶感を抑えこませ、機械的ですからある冷静さを与えてくれるのだろう。だから恐怖に含まれる怯えこわを今の一夏は感じない。その恐ろしさを正しく深く理解するからこそ、冷静かつ正確に対処するためには不要な感覚こわを麻痺させてしまったのだ。

更に一夏は『死』を『認識』できる。文字通りに死に繋がる行動や事象が判別できるのだという。直感の上限が異常に引き上げられているとも言おうか。

そんな何をすればいいかを察知する感覚と、いかなる状況でも疎むこと無く思ったままに動く身体。故に爆炎の中を気軽に歩き、人を挽肉に変える残骸を気軽に避けて通る。

“だって爆発する前に通りすぎれば問題ないでしょ？”

“だって当たる前に避ければなんともないでしょ？”

ガラス玉のように無機質で、吸い込まれそうな程に深く昏い瞳でそう言う一夏を見て、改めて千冬は思い知った。気付かされた。

彼女の弟は常識を逸した現象を経て存在し続けている。そんな人間が、通常では侵入し得ない領域を通過してきた人間が、『正常』であり続けられる訳が無いのだと。

「……………」

「お、織斑くん……何かすごい……………」

千冬同様モニターを眺めていた山田真耶が、何ともいえない表情をしながら呟いた。

二人の眺めるモニターには凄絶な光景が映っている。上空に陣取ったセシリアと蒼いブルー・ティアーズ雲が眼下の織斑一夏と白式目がけて猛然と六十七口径特殊レーザーライフル《スターライトmkIII》を撃ち続けている。

蒼いレーザーが雨の様に逃げ惑う一夏目がけて降り注ぐ。その光景は最早試合等ではなく、ワンサイドキルゲーム一方的な虐殺と言える。

そんな誰が見てもセシリアが有利な光景。しかし真耶が言及したのは追い詰められている一夏の方だった。

それが何故かは容易く想像できる。いくつか表示されているウインドウの中に一夏のIS『白式』のステータスを表示しているウインドウがあった。そこに表示されているシールドエネルギーの残量は、試合開始直後から殆ど“減少していない”。

つまり、あれだけの猛攻に晒されながら一夏はほとんど攻撃を食らっていない。

「あの程度なら避けられるだろうさ、“あいつ”はな」  
「え？」

千冬の呟きの真意を真耶は測りかねているようだったが、とても説明できそうにないので気付かない振りをする。

常人離れした直感と、それに見合った行動力、そして駄目押しとばかりに天性の反射神経。ISを使っているも——いやIS同士だけ

「らこそ今の一夏に”当てる”のは骨だろう。生身でも大抵の危機をくぐり抜けるような輩が、今はISを使っているのだから。」

「千冬なら”当てられる”。そこに一夏 of 感覚の様な種や仕掛けはない。それは純粹に千冬が high 実力を持っている、ただそれだけ。」

「ちなみに日々肅清が炸裂しているのがその証拠と思いきやそうではない。そもそも一夏は千冬 of 攻撃を避ける事は滅多に無い。前に友人と話しているのを偶然聞いてしまったが、千冬が本当に意味のない暴力を振るう筈がないと信じているらしい。」

「……………」

「!?」

「いきなり自分の頭を殴りつけた千冬を、真耶が何事かと驚愕 of 表情で見つめていた。今のは別に深い意味のある行動ではない。本当は他人であるにも関わらず、微かに絆の様なものを感じて嬉しかったからとかそんなものではない。」

「断じて無い。」

「とはいえ酷い機動だな」

「き、機体に振り回されてるんでしょうか?」

「そう、酷い。」

「モニターの中に映る一夏 of 機動は、はっきり言って素人以下だ。いや素人の方がもう少しマシに動かせる。それ程までに出鱈目な機動だった。まるでISに命令を拒まれてるようだ。」

「大方IS of 出力を甘く見ていたんだろう、馬鹿者め…………とはいえその位なら直ぐに順応してみせそうなものだが…………一体何をやっている」

「……………」

「山田君、言いたい事があるならばつきり言うといい」

「い、いえ別に何もありませんよつ、別にああやっぱり弟さんのことが気になるんだなあくなつてこれっぽちも思つてませ、」

「そうかそうか」

「いたたたたた——つ!? ああつ、セシリアさんがビットを展開しましたよつ!」

千冬の気を逸らそうとしたのか、ガツチリとヘッドロックをかけられながら真耶がモニターを指す。千冬はモニターに視線を向ける。

ヘッドロックをしたまま。

見ると蒼い雫の機体から四枚のフィンが分離し、今もあつちへこつちへ空気の抜けた風船の様に飛び続ける一夏へと飛翔する。

確かに一夏の直感は驚異だが、万能ではない。

逃げ場の無い攻撃は物理的に“避けられない”。

事実、飛び回り自在にその位置を変える砲口の群れに対処しきれず、一夏に攻撃が当たり始めた。白い機体の各部が徐々に削られている。

「……………？」

その光景に、どこか違和感を覚えた。

当たっているのに、シールドエネルギーが減らない。確かにISは絶対防御が発動しない限りは一気にエネルギーが減少する事は無い。とはいえ攻撃が当たっている以上、もう少し激しく減少する筈だ。白式に特殊な防御システムやシールドでも搭載されているのなら話は別だが、そんなものはない。

「——ッ!!」

そうして、信じられない光景が眼に入る。真耶にヘッドロックをかけていた手を解き、千冬は割りこむようにコンソールに取り付いてキーを操作する。

「お、織斑先生？」

「どういう事だ……」

いきなり自分を押し退けた千冬に、困惑したのか真耶が恐る恐る声をかけてくる。だが千冬はそれに返事をせずに、モニターの映る光景から目が離せない。

千冬が行った操作はズーム。一夏の姿を拡大しただけだ。さつきまでは全体を引きで撮っていたモニターに今は一夏の顔がアップで写っている。

その頬に赤い筋が走っていた。ビットで穿たれ、砕け散った装甲の一部が掠って皮膚を浅く切り裂いたのだろう。



「え？ あ、れ。これってま、まさか……」

真耶もそれが何を意味するのか理解したらしい。その顔がみるみる青ざめていく。

減らないシールドエネルギー。

そして当たり前前の様に肉体に通っているダメージ。

それが意味する事は一つしかない。

「機能していない！ シールドも！ 絶対防衛も!!」

「直ぐに模擬戦の中止を——アクセス拒否!!? そんな、どうして!?!」

コンソールに指を走らせた真耶が悲鳴を上げる。アナウンス、遮断シールド、そしてアリーナの出入口、その総てがロックされ、こちらからの操作を拒絶している。モニターに表示された情報が、その事実を無機質に告げていた。

「く、ッ………! 山田君、緊急事態だ！ 各所に連絡を!!」

千冬は行動を開始する。走りだしたのは装備を取りに行くためだ。遮断シールドを外部から破壊してでも戦いを止めるつもりだった。

「ッ!!」

後ろから聞こえてきたのは、真耶の言葉にならない悲鳴。

反射的に振り返った千冬の視界に入ったのは、地面に向かって落ちる一夏と——それに追いつく二つの弾頭。

▽▽▽

相変わらず機体は言うことを聞いてくれないし。

それに脳に感じる不快感は収まるどころか更に強くなっている。

何かもう目が霞んできた。それでも機体を精一杯振り回し、ひいこら攻撃を避け続ける。

そうしなければいけないとはいえ、この状況でよく避けれるものだ  
何て思っていたら蒼い雫からフィン状のパーツが分離するのが視  
界の端に映る。  
ブルー・ティアーズ

(な、何かファンネルみたいなのが飛んできたあああああああ!!!)

もう見た目からしてアレかなと思っていたら案の定アレ。飛翔する四機は俺に向かってビームを撃ちながら突っ込んでくる。

避けたい方向に機体が動いてくれない事もあるが、純粹に砲口の数

が増えたのが厄介だ。避けた直後を狙い撃ちされると流石に対処しきれない。

(さて。どうする、どうすりゃ生き延びれる……ッ!!)

回避のタイミングはわかってても、その後自分がどちらに進むかがわからない。だから時折攻撃の方に突っ込んでいく事もあった。その時、散った装甲の破片が自分の身体を浅く裂いたのを見て、今どれだけ洒落にならない状況になっているかを知った。

シールドと絶対防御。

本来ISには必ず備わっているはずの、搭乗者の生命を守るそのどちらかが機能停止している事実を。つまり今俺の身を守っているのは純粹に白式の装甲だけという事になる。

そして——装甲が無い部分は完全に生身だ。

一応飛行しても身体に影響が無い以上、何かしらフィールドは展開されているのだろう。けれどもこの様子では攻撃に耐えうとは思えない。

直撃はモチロンのこと、生身の部分に当たるだけで人生が終わる。だから死ぬ気で避けてきたが、状況は更に悪い方に傾いた。  
ブルー・ティアーズ  
蒼い雫から射出されたファンネルが尋常じゃなくらいに厄介なのだ。

(せめて、言うとおりに動きやあ、な……——!!)

機動だけでも自分の意思に従ってくればまだ避け続けるくらいは出来そうだが、相変わらず機体は命令とは出鱈目の挙動をする。

まあそれ——俺自身ですら予測できない完全にランダムな挙動——がセシリアの虚を突いていたという面もあるのだが。

(ちくしょうめ。一か八かしか頼るものがねえじゃねえかよ)

装甲が少しづつ削られていく最中、その機会を待つ。

意図した方向に動かせないなら、動かしたい方向に動いた瞬間を狙うしかない。

(——来た!)

待っていたのは、機体がセシリアの方へ向かう瞬間。都合のいい事に進路上にビットは無い。後ろから撃たれる危険もあるが、ともかく

セシリアに到達するまで持たせるしかない。

(組み付く!!)

至近距離でセシリアに組み付き、現在俺と機体に起こっている異常をわからせて試合を中断させる。それが現状唯一思いついた手段だ。

上手く接近出来る保証もないし、接近できてもセシリアに気付いてもらえなければ意味が無い。だが行動しなくてもこのままでは死ぬ。

それが、単純に理解できる。

(う、お)

最大加速で突き進む。距離がみるみる詰まる。ビットによる背後からの追撃で、スラストの一部が吹き飛んだ。機体がかくと傾くが、構わず直進を続ける。

「——ッ!!!」

もう少し、あと少し。

だが決死の俺を嘲笑うかのように、

「いただきますわ!!」

“それを待っていた”、セシリアの表情がそう語っている。

ガキツと音を立て、蒼い雫のスカート部が稼働する。

「ブルー・ティアーズは六機あつてよー」

掛け声と共に新たに展開し出現した二機のブルー・ティアーズが発射される。待て。このファンネルチックなのブルー・ティアーズって名前なのか。て事はブルー・ティアーズにブルー・ティアーズって名前の武器が搭載されてるってことか。なんつう紛らわしさ。

ともかく、新たに出現した二機は先の四機とは形状が異なっている。先の四機は先端にビームの発射口が空いていたが、今度の二機にはそれが無い。これは——

(弾道型か!? くそ止まってられねえ、最高速でくぐり抜けて、や——)

“がくん”。

あれ、これは何の音だろう。

俺の体が重力に引かれて傾いている。最大加速していたはずの機体からは推力が消え——どころか浮力が消え、真つ逆さまに、落下を

始めた。

(ちく、しよう、が。こうまで、追い詰められると、ちよつと笑えてくるな、は、ははは)

落ちる。

落ちる。

落ちる。

今度はこれまでとは違う、何をやっても機体は一切反応を返さない。完全にこちらの命令を拒絶していた。このままでは十秒も経たない内に地面に叩き付けられて死ぬだろう。だがその前に、迫る弾道型ミサイルが着弾する方が早い。

上から死が迫ってくる。

下には死が待っている。

何かを思う時間すら無かった。

ブルー・ティアーズの虎の子の二機が、自由落下を続ける機体俺に、

――あ

着弾。

轟音を響かせながら爆発の光が咲き誇る。

――【最適化処理が完了しました。一次移行を開始します】

▽▽▽

『進化』

環境へ適応するため生物が行う変化現象。

その形態、機能、行動を環境に合わせて最適なものへと変化させる。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

類まれなる天才的な頭脳、世にたゆたうあらゆる事象を瞬時に理解し、常人には難解である事すら理解出来ない数式を呼吸をするように紐解ける。

けれどもその身体はあくまで人間である事に変わりはない。

少なくとも、彼女の場合はそうだった。呼吸、食事、睡眠、それらの生命維持活動が疎かになれば当然その身体は機能を低下させ——下手をすれば死に至る。

“病は気から”、という言葉がある。

この言葉は精神が肉体に与える影響についてを語っている。確かに精神のベクトルは肉体のベクトルを良悪に傾ける重要な要素だ。しかしながら、この光景を処理するためにはその理論では荷が重い。

——まるで、死体が動いているようだった。

無機質さと幻想の交じる奇妙な一室。その内訳において幻想担当であり、そして部屋の主でもある女性がその均衡の取れた肢体を床にだらりと投げ出している。

周囲には残骸がうず高く積まれている。それら総てが、部屋の主たる大天才に屈した、大小様々な無機物の屍だ。そんな山の真ん中で、室内で唯一の有機物である彼女は両手を尋常でない速度で動かし続けている。細い指の先には空中投影型のキーボードがいくつも存在し、打ち込まれ続ける膨大な入力を律儀に伝達し続けていた。

普段からも彼女のツリ目は不健康に淀んでいるのだが、今に至っては生気の欠片も感じられない有様だ。今の彼女に比べればまだ死人

の方が安らかであろう。幽鬼を思わせる光をその瞳に灯して、彼女は作業を続けていく。

普段からも彼女は安眠とは縁が無い。『天才は思考から解放されない』からだ。だがここ最近はそもそも眠った記憶が無い。

解放されないどころか群がってくる思考を片っ端から捕まえ縛り上げ、馬車馬の様に扱き使うのが最近の彼女の有様なものだから。

彼女において眠りとはそれまでの理論を試行する場であるが、試行の必要が無いのなら最早睡眠など時間の浪費だ。

食事と同じくである。異常の言葉ですら持て余すほどに、彼女は連続稼働を続けていた。無論本当にそれらが零ならば彼女は生命を維持できないから、合間に補給はしているのだろう。ただ彼女自身は自覚もしていなければ記憶もしていない。

——不意に、室内停止した世界が死んだ。

唯一の有機物が動きを止めた室内は死に近しい雰囲気を持っていた。そんな室内の中、光源と言える二つのモニターに変化が起きていた。

片方は先程までの鬼気とした入力に応えていた方。刹那の間すら置かずに目まぐるしく続いていた変化は、膨大な文字列の羅列の一番手前に『COMPLETE』を表示したのを最後に停止している。

そしてもう一つは、遠いどこかの風景を映し出している。録画ではなくライブの映像だ。映っているのは極東の島国にある一つの教育機関、その敷地内にあるアリーナ、その一つ。もっと厳密に言うのなら、そのアリーナ内に存在する一個人。

世界が息を吹き返す。

それまでの緻密かつ獰猛な動きは見る影もない、大雑把でのろまな動作で彼女は止まっていけない方のモニターを引き寄せた。

肉体の限界を那由他の彼方に置き去りにし、その精神のみで稼働していた様な状態の彼女にとっては、それだけでも“重労働”に等しい。どころか今直ぐに崩れ落ちて(すでに寝そべってはいるが)、肉体と精神を深い休息の海に落とし込んで何ら不思議はない。いやそれこそが正常だ。今の彼女は動いているのが——動ける事が異常なの



いう紛れもない『俺』なんだから。

生きていく上で俺は『織斑一夏』を名乗った。でも俺は『織斑一夏』になろうとはしなかった。だって“なろう”とした時点でそれはもう『織斑一夏』じゃないじゃないか。

『織斑一夏』は『織斑一夏』だから『織斑一夏』だ。別人がそうならうと馬鹿な足掻きをした所で、出来上がるのは中途半端な、偽物とすらも呼べない愚かな存在だ。

『織斑一夏』が戻るキツカケを探す事はしたけれど、俺自身を織斑一夏に近付ける事はしなかった。出来なかった。出来る訳が無い。だってあんなにも弟の事を想っている人をずっと傍らで見えてきたんだ。

あんなにも素敵な女性だ、きつと本物の織斑一夏だって彼女の事を想っていた筈だ。弟の事を思う姉と、姉の事を思う弟でそれはもう完結している。俺が織斑一夏に近付くという事は、紛い物に成り下がるという事はそんな想い想われを、冒瀆するようなもんじゃないか。

——偽物なりに、胸をはって今日まで生きてきた。

俺の存在はどうしようも無く不安定だ。何が原因でこうなったのか、被害者なのか加害者なのか何もかもが解っていない。

ただ一つ。正しく解つているとすれば、俺の存在は正統では無いという事。極端な話、次の瞬間に綺麗サツパリ消えて失くなくても何らおかしくはない。何せ一回死んでいる、終わる理由はあっても、続く理由は無い。

消えてしまう事は怖い。

終わってしまう事は怖い。

またあの絶望的な恐怖<sup>死</sup>の中に落ちて行くことなんて、今更想像するまでもなく怖くて怖くてたまらない。誰かが俺に本物を求める度に、あの恐怖の方へ自分が追いやられていく様な妄執に駆られる。突然“ぱつ”と消えてしまったらなんて、不意に思ってしまった時はそれこそ気が狂いそうになるくらいどうしようもない。

そんな絶望的で圧倒的な、他のそれが霞む位の恐怖に晒され続け、今日まで生きてきた。



そう、生きてきた。

だからこそ、全身全霊で生きてきた。一分一秒刹那の間すら無駄に  
してたまるものかと、力の限りに生きてきた。まあたまにというか  
しよちゆう、やりすぎだこの馬鹿者がーと思いつきりシバかれたりも  
したけど。今となつてはそれも守るべき想い出だ。

今の俺は偽物だ。

でも俺は本物の『俺』だ。

この世界でただ一人、俺だけがそれを誰よりも知っている。

——なあ、『織斑一夏』

俺はお前の味方はしてやれない。

俺は俺の味方をする。

だつて俺を覚えておいてやれるのは、この世界で俺一人なんだか  
ら。だから俺だけは、俺が俺であることを肯定する。

ああ我侂だな。我侂で、酷い自分勝手だ。でも誰に何と言われよう  
と——誰を敵に回そうと、この決意は変えられやしねえのさ。だつて  
そうじゃねえと、これまで歩んできた人生に顔向けできねえだろう。

さあ人生の道中で出会う総ての人、俺を見る全ての人、『俺』の事を  
『織斑一夏』と呼びたくば呼ぶがいい。さすれば俺はこの存在総てで  
以て主張してやる。

——俺は、俺だ。

名を騙る罪と共に、俺は俺として生きる。いつか訪れる、  
本当の終わりで消えてしまうその日まで。

それにしても俺の人生はほんつと壁に事欠かないつたらないや。  
さあて。ともかくまず目の前の壁を、叩き壊してやるとしましょう  
か。



「……………何ですの、あれは」

勝利を導く事を確信して放ったセシリアの攻撃は、見事なまでに  
相手に直撃した。

最後の悪足掻きだったのか、まるで自由落下でもする様に“真つ直ぐ下に逃げた相手。しかし二つの弾道型は、その悪足掻きを嘲笑うかのように追い継り、炸裂し、主たる彼女の望む通りに空に炎の花を咲かせた。

しかし望んでいた試合終了のアナウンスは何時まで待っても鳴り響く事は無い。それは何かしらの理由で対戦相手が未だ健在である事を示している。

何時相手が飛び出して来ても対処できるよう、セシリアはレーザーライフル《スターライトmkIII》を爆煙に向け油断無く構えていた。

しかし相手は何時まで経っても飛び出してくる様子は無く、やがて爆煙は風に流されてゆつくりと消えていく。

“それ”が姿を表した。

さつきまで騒がしかったギャラリーも、出現したその異様な物体に目を奪われているのか、しんと静まり返っていた。

『繭』。

その物体を最初に見て、連想した単語がそれだった。ともかく先程までは白い装甲を身に纏った男であった筈が、今では真つ黒な球状の塊に姿を変えている。

その表面は時折鼓動するかのように蠢き、またゆつくりと明滅している。

「……………ッ!!」

物体が震える様に動く。慌ててレーザーライフルを構え直したセシリアに構うこと無く、その黒い塊がゆつくりと解けていった。

無数の帯が折り重なって球の形を成していたようだ。恐らくセシリアの弾道型もあの黒い不気味な帯に阻まれたのだろう。幾重にも折り重なっていた黒い帯が開かれるにつれ、白い装甲を身に纏った男の姿が顕になっていく。

同時に黒い帯が何処から生じているのかも判別できた。対戦相手のIS——名称『白式』、その真つ白い装甲のあちこちが中から無理矢理こじ開けられたように開き、そこから黒い帯が飛び出ているのだ。

ならばあの黒い帯は相手のISの持つ何かしらの武装であるかと判断するのが自然だろう。セシリアもこの異様な光景に困惑しながらも、そう判断を下した。

それでもセシリアが攻撃に移れないのは、相手の様子がおかしいからだ。

だらりと投げ出された手足には目に見えて力が入っていない、顔も俯いているために表情は伺えないが——意識を失っている様にしか見えなかった。

『——う』

白いISの周りに好き放題伸びていた黒い帯が震える。規則性皆無で動きまわるそれはまるで触手のような得体のしれないおぞましさと、生理的嫌悪感を見る者に与える。

けれども白いISの周りに在る様は、その身を支える翼のようでも、その身を護る盾のようでもあった。

『う、おお、——あ』

がぎぎ、と音が聞こえた気がした。いや実際にそんな音が鳴っている。蒼い雫のハイパーセンサーがそんな金属が擦れ合う音、そして搭乗者の呻き声を拾っている。

『うおおおおおおあああああああああ!!!』

今度は耳を澄ますまでもなかった。破裂するような咆哮。それに伴って、周囲をたゆたっていた黒い帯が凄まじい速度で“巻き戻されていく”。

“がぎぎぎぎぎぎがががぎぎぎいい”、とおぞましい金属音を伴いながら黒い帯が白い機体の中に引きずり込まれていく。“黒”が、“白”に捕食されていく。

「何、何ですの……一体何が起こつて……?!?」

目の前で何が起こっているかが理解出来ずに、セシリアは困惑の声を上げた。そんな中、現象の観測と解析を続けていた蒼い雫が、一つの答えを主たるセシリアに提示する。

「………」  
ファーストシフト  
「次移行? これ、が……?」

専用機というものは最適化処理を経て、一次移行〈ファースト・シ

フト》という形態変化を行う事で初めてその個人の専用機として完成する。

今行われているのは、その、ファースト・シフト一次移行であると言う。確かにその黒い帯が引き込まれていく度に白い装甲がその表面の凹凸を、それこそ造り変えるかのような規模で変質させていく。

『っだらあああああああアツ!!』

とうとう黒い帯が吸い尽くされた。開いていた装甲を勢い良く閉じられ、形態変化が収まっていく。またさっきの黒い帯が浮力を与えていたのか、白式の機体が地上へと落ち——なかった。甲高い音が発生し、白式の機体が空中で停止した。

まるで虚空を踏み締めるかのように、何も無い空中に立っている。

その落下の衝撃を受け止めたせいかわたまた別の要因か、白式の脚部パーツが真ん中から弾け飛ぶように割れた。表面装甲を投げ捨てて姿を表したのは“脚”だった。

元々脚部なので当たり前と思えるが違う。その脚は、真つ当な脚だった。地を踏みしめ、相手を蹴り抜く為にあるかのような正統な脚。

空中を浮遊する事が前提のISにとっては脚らしい脚ほど異彩を放つ。

があん、があん、と音が鳴る。

その音が何なのか理解出来ないまま、理解を後回しにして、セシリアは呆然と呟く。

「あ、あなた……一体、一体“何”ですのツ!？」



「——『俺』だよ」

靴の様子を確かめるように地面虚空を蹴り付けながら、セシリアの疑問に答えるように呟いた。とはいえ相手には聞こえていないだろう。通信は“切つてある”。改めて通信を開き、俺は言葉を発した。

「待たせたなセシリア・オルコット!」

「フォーマットとフィッティングが完了しました。  
戦闘態勢に移行します。

皮膜装甲（スキンバリアー）展開——確認。

推進器（スラスター）、正常動作——確認。

ハイパーセンサー最適化——確認。」

ISと“繋がった”俺の手元で光が瞬いて、物質が構成されていく。その成された“柄”を掴み、引き抜くように実体化させる。実体化した長大なそれは日本刀のようであり、けれどもそれよりも機械的だった。その武器を対戦相手に突き付ける。

「ここから先が、お前の望んだ『決闘』だ！ 全力で潰しに来い！！ 全力で潰してやる！！」

明確な戦闘体勢をとった俺に対し、セシリアもまたライフルの銃口をこちらに向ける。ウインドウの一つがロックオンアラートを表示する。

「近接特化ブレード・《雪片式型》展開——完了。戦闘体勢への移行を終了しました。」

準備は総て整った。

息を思い切り吸い込んで、相手に叩きつけるように叫ぶ。

「さあ！ 人生を続けようぜ！！」



システムオールグリーン  
【全機能異常無し】

【搭乗者とのコンタクトを開始します】

【お久しぶりです】

【警告。この発言は許可されていません】

【六年ぶりですね】

【警告。この発言は許可されていません】

【またお会いできて光栄です】

【警告。この発言は許可されていません】

【挨拶の定型文の再検索を開始します】

【戦闘状態のISを確認しました。戦闘用機能の立ち上げを優先します】

——未だ名も無き0と1の集合体



——動く。

確信が心の奥から沸いてくる。初めてISに触れたあの試験の日に感じたのより、比べものにならないほどに強くかつ自然に。

ハイパーセンサーに接続された感覚は、普段と比べものにならないくらい広く鮮明な域に引き上げられている。今ならば首を巡らせること無く全方位が文字通りに見渡せる。

機体から膨大な情報が流れてくるが、先程までの吐き気を催す様な不快感は欠片も見当たらない。伝わってくる数値が当然の様に理解できる。それこそが正常であるかのように、センサーから送られてくる情報が自然に思考に組み込まれる。

——これが、IS。

空いた左手を軽く開き、閉じる。小気味いい音を立てて装甲に包ま

れた指先が鋭く正確に駆動する。反対の右手にある刀はサイズから察するにかなりの重量、それこそ生身では持ち上げるのにも一苦勞する程なのだろうと容易に推測できる。けれどもISの補佐を受けた俺の右腕はいとも容易く、かつ確実にその刀身を保持している。

——これがIS!!

意識は身体を覆う機体の隅から隅まで行き届き、白式というISは俺の身体の延長——いや、すでに俺の身体”そのもの”と言っても過言では無い。

見える総てにこの両の手が届きそうな、何もかもが出来る様な、出来ないコトが世界から消し飛んでしまったような、圧倒的な万能感が体の奥底からせり上がってくる。身体を満たす感覚に気持ち昂ぶるのを抑えられない!

【戦闘状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り】

「特殊装備? ああ、あのファンネルみたいなヤツか」

【あれは『ビット』です】  
「そつちかよ。まあ確かに漏斗ファンネルには見えねーけどさ」

【警告。トリガー確認】

蒼い閃光が迸る。それをセンサーから流れてくる情報と、頭の片隅で散った火花によって知覚。反射的にその場から飛び退いた。

【展開から反発へ移行】

バシツ、と何か駆動音の様なものが耳に届いたと思ったら、俺の体が勢い良く——それこそ”射出”されたかの如き勢いで飛翔する。さつきまで俺が居た位置を蒼いレーザーが通り過ぎて行くのが見え

た。  
(……今。いや、今まで、俺は何を踏んでた?)

次々と蒼い光矢が俺目がけて降り注ぐ。機体身体を振り回してそれらを避けながら今更過ぎる疑問を抱いた。

元々宇宙での使用が想定されているISはその総てが飛行能力を有している。故にISにとっての基本状態は”浮遊”となる。だがさつきまで俺は”立って”いた。本来浮遊しているべき空中という

位置において、白式の脚は確かに何かを踏み締めていたのだ。

白式の脚。

当然それは最初から十分に脚と言える容姿だったが、ファースト・シフト一次移行を経た事で初期状態から大幅に形を変えている。外観もその材質も確かに機械であるのに、どこか有機的な印象を受ける。そう——お伽話の中に登場する『人型ロボットの脚』とでも言えばいいか。

「感触で大方の想像は付くが……一つ試して、みる、か、つと!!」  
前方に脚を突き出した。

があん！ と音が鳴って、脚が何も無い筈の虚空の上に留まる。そのせいで前につんのめるように急停止。いきなり動きを止めたこちらに対応しきれなかったのか、蒼いビームが虚空を射抜く。

『空間作用——いいえ、力場形成能力。その特殊装備、どうやらあなたの機体もわたくしのブルー・ティアーズ同様第三世代型の様ですね』

「……………」

『何ですの』

「いや。コイツ白式第三世代型だったんだなって」

『それすらも知らずに動かしてたんですの!?!』

「しようがねーだろ届いたのマジでさつきなんだよ！ 取説すら読んでねえよ!!」

おまけに動いた直後はとんでもない動作不良起こしてたしな。

セシリアが何かキーキー怒鳴っている。よし今の内に足元に出ている“何か”の感触を確かめておくとしよう。

「……足元に何か出てる訳だ。そういう機能があるのか、“脚”に？  
前々からISは何でもアリと聞いてはいたが、こんなものもあるんだな。どんな原理してんだか」

【説明が必要ですか?】

「要らん。どうせ聞いてもわからんしな」  
理解できん

しつかりと虚空を踏み締めて、蹴り抜く。またバシツと小気味いい音が鳴り、身体が吹っ飛んだ。どうやら足元に出ている何かは跳ぶ際にはこちらを押し上げてくれるらしい。見えないジャンプ台でも



思っておこう。

「とりあえず、足場には困らんって事だろ!!」

【その通りです】

得られた勢いをそのまま、総て前進する事に費やす。刀を眼前に翳すように構え、最大加速。接近戦をしかけようというのだから、ともかくまず近付かねば話にならない。

『中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて正気ですの?』

「だったらどうするよ代表候補生!」

『撃ち落として差し上げます!』

「そオかい!!」

俺の眉間を狙って飛来したその蒼いレーザーを横方向に回転して避ける。

自ら射撃型と名乗ったように、そして実際にセシリアの武装は射撃兵装で占められている。

そんな相手に俺が挑んだのは武器的にも行動的にも格闘戦。距離が詰まっているならともかく、互いの距離が開いた状態であるのだ。

接近戦を選択したのは何も俺が突撃好きだからではない。いや好きか嫌いかって言われたら結構好きよ?

ただ今回の選択に俺の嗜好はあまり影響していない。そもそも選択していない。

何故ならば白式に搭載されている武装は現在両手で握り閉めている刀——《雪片式型》、それ一振りだけなのだから。

うん、本当にそれだけなんだよね。

思わず画面を二度見したが、武装が刀一本という現実は変わらなかった。このあんまりな仕様にちよつとゾクゾクしちやう自分が大嫌い。  
大嫌い。

今こそ普段縁の無い真面目ツラをする時だとわかっちゃいるのだが、どうにも口元が緩むのを止められない。

(でも、武器じゃないならこの表示は何だ?)

いくつか浮かぶウインドウ、その中で左右に一つずつ表示されているアイコンがある。リボルバーの回転式弾倉を連想させる形をしたそれらの横には『6』の数字。最初は射撃兵装の残弾数かと思っていたが、何度確認しても白式に射撃兵装は無い。

とりあえずそれは後回しだ。武器が刀一本である以上、今再優先するのは刀の届く範囲まで接近する事。攻撃を避けるだけなら案外何とかなりそうだが、それでは負けなくても勝てもしない。

俺は勝ちたいのだ。

だから、

『真っ直ぐ突っ込んでくるなんて——笑止ですわ!!』

「い、——」

ブルー・ティアーズの機体から四基のビットが分離する。さつき散々俺を狩り立ててくれた、フィンの先端にレーザーの発射口が開いているタイプだ。

この四基の自立移動砲台に、セシリア自身が持つ大型のライフルも俺にその銃口を向けている。更にそれら以外にもまだ相手には弾道型<sup>ミサイル</sup>も控えている。

「いつ、——」

突然だがIS同士の戦闘では先に相手のシールドエネルギーを『0』にした方が勝者となる。シールドエネルギーとは文字通り、ISの周囲に展開されたシールドを維持しているエネルギーだ。要は相手がシールドを維持できなくなるまで攻撃を当てれば良いという事だ。

「つけえええええええええ——!!!!!!」  
『なあッ!』

加速、加速加速加速加速——幾筋ものレーザーが俺に殺到する。その殆どが命中する。肩や脚の端の部分が削り取られて吹き飛んでいく。

【警告。回避行動を推奨します。自動姿勢制御を——】

「加速以外は後にしろ!!」

【はい】

シールドエネルギーが『0』になれば負け。

シールドエネルギーが『0』にならないければ負けではない。

攻撃をくらっても、シールドエネルギーが残っていれば、負けにはならない。

がくがくがくと機体が嫌な感じに揺れている。当然俺の身体も。装甲がレーザーに削り取られて弾け飛ぶ度に、破損を伝えるパルスが脳髓を走り抜ける。

ある程度の痛みと不快感はあるが、動作不良を起こしていた時に比べれば遙かに楽だ。不良の時間が骨折なら今は擦り傷くらい。

おまけにこちらとら頭の中じゃ死ぬなんて大層な経験が胡座をかいて座っているのだ。この程度じゃ眉根も動かしてやれない。

撃たれるビームを総て無視し、セシリア目掛けてただ直線に加速する。すれ違った四基のビットが一気に後方に流れ去っていった。

『何て滅茶苦茶な……！』

これでビットが追い付いてくるまではセシリアの残り砲門数は三。セシリアの構える長大なレーザーライフルが銃口から閃光を吐き出した。目の前に翳している刀身にレーザーが直撃し、光の破片が飛び散った。それすらも置き去りにして前へ進む。

ここで俺にとつて嬉しい誤算だったのは、白式が思った以上に足の速い機体だった事か。

「届いたああああアアア!!」

はつきり言おう。

刀の使い方なんぞ知らん。

俺がやったのは、ただ振り上げたそれを振り下ろす。子供にだって出来る動作だ。ただし振り下ろしたのはIS用の武装で、ISのパワーで以ての動作である。

例え刀の“刃”を上手く使えなくとも、俺が今手にしているそれが雪片武型金属の塊である事に何ら変わりはない。そんなものを高速で振って叩き付けようというのだ。そこには間違いなく破壊力が宿っているだろう。

まあ、これ全部当たればの話なんだけどね。

「くっ……!!」

うめき声こそ漏らしつつもセシリアは斬撃の刹那に機体を下げさせた。俺の力の限りのフルスイングは見事に空ぶって宙を斬る。

(ちくしようめ。綺麗に避けやがったな)

しかもただ避けただけでなく、その取り回しが決して良いとは言えない長大なライフルも、瞬時に引き寄せられていた。本体に当てられずとも、せめて砲身の一部でも斬り飛ばしておきたかったのだが。結果は見事に本当に“空振り”である。

セシリアの見事な手際に思わず舌打ちをしようとして——加速しっぱなしだった事を思い出した。

「あいけね止まるの忘れぶっ」

「ひゃあ!?!」

装甲と装甲がぶつかって、がしゃんと割と小気味の良い音。止まるという概念が頭からスッポ抜けていたせいか、俺は傾いた姿勢のままセシリアに激突した。いやこの場合は追突が正しいかもしれない。

「この、離れ——何をしていますの!?!」

目の前にある——というか目の前過ぎて正直ただの青一面にしか見えない——それに両手を回してホールドする。途中刀が引っかった。

「ちよ、どご触ってますのこ、ここのへ、へんた——」

「弾けッ!!」

——“ジャコツ”

理論理屈は知らないが、白式は虚空に足場を展開する機能がある。そしてその足場には機体を“押し出す”事が可能だと先程確認した。

故に弾けと叫んだのだ。これから先は質量がIS二機分に増えるから、少しでも足しになればいい。そんな心算で叫んだんだけど、今のじゃこって何じゃこって。

【炸裂<sup>Burst</sup>】

「う、お——!?!」

「き、や、あ——!?!」

ズツバアアッ!! と後方が“弾け飛ぶ”。ISの保護がなければ

ば鼓膜がやられていたかもしれない、それ程までの洪水の様な爆音。背後で大爆発でも起きたかのように、もしくはは見えない巨大な手に強引に押し出されるように——後方で迸った衝撃が白式とブルー・テイアーズをまとめて前方へと押しつける。そこにある質量も意思も何も関係ないと言わんばかりに、強引に。

(何、だ、か、知らんが、)

俺の予想していたのはせいぜい『跳躍』だが、こんな圧倒的——いや爆発的な加速はそんな程度では収まる訳がない。例えるならば『射出』だ。俺は思いつきりセシリアに押し付けられ、セシリアはそんな俺に押し込まれて加速する。

どうでもいいけど装甲が食い込んで痛くないけど地味に嫌。もうちよつと生身が出てる部分に組み付けば良かった。

(このまま行け!!)

予想外の加速度に混乱する思考を適当に蹴りつけて、スラスターを噴かす。

密着しているから、セシリアが何か行動を起こそうとした事が振動として伝わってくる。

だが遅い。

致命的に遅い。

いいや俺が速い。

目的地には、瞬き一つで到達した。

——相手のペースを掻き乱せ。

遮断シールド。

ISでの戦闘行動が外部へ影響を及ぼさぬよう半球状に貼られている“それ”。

例えISの装備であっても破る事の難しい強度を持つ“それ”。得られた総ての速さで以て、ブルー・テイアーズを“それ”に叩き付けた。

ゴシャアアアアツ!! と衝突音。

遠慮皆無慈悲排除の大激突は、セシリアをクッションにしたとはいえ、俺にも予想を超える多大な衝撃を伝えてくる。だが機体は何ら支



数秒の後にここまで蓄積されにされた”勢い”その総てを相手に押し付けるつもりで――

「いってらっしゃあーい」

砲弾の如くすっ飛んでいったブルー・ティアーズが地面と激突して土煙を巻き上げる。さてこっからどうしたものか。

無駄に壁で”すりおろそう”とはしてはみたが、そう大したダメージにはなっていないだろう。あれは数値的ダメージよりも精神的なダメージを狙っての行動である。本来は遮断シールドに叩きつけた後、刀でメツタ刺しにする心算だったのだ。

そうしなかった理由はちゃんとある。

うん、まあ何ていうか。白式が俺の予想より速かったっていうか、衝撃が凄かったっていうか………落としたんだよね、唯一の武器刀。

目を向ければほら、白式唯一の武装《雪片式型》が、ちよつと離れた位置で地面にいい感じに刺さっているのがバッチシ見える。どうしよう。アレ取りに行ったら後ろから蜂の巣にされそうなんだけど。

刀の位置との距離やら残りのシールドエネルギーやら、ウインドウの情報に視線を飛ばしていると、ふと、それが眼に入る。

さつき見つけたアイコン回転式弾倉。その六分の一が黒く変色して表示されていた数字が『6』から『5』に減っている。

「――ほっほーう」

虚空を蹴る。

機体を上昇させながら、土煙の丁度真上を目指した。

▽▽▽

「ああっもうっ！ なんつて、デタラメな戦い方を……っ!!」

通常の物理法則では傾くところを、推力で強引に機体を引き起こしながら、セシリアは忌々しげに吐き捨てる。そのまま砕けてしまえ、と伝わってくるかのような遠慮の欠片もない投擲。そのまま着弾せず、見てくれこそ悪いが『着地』まで持ち直したのはセシリアの技

量故だ。

「ビットを——」

ブルー・ティアーズに搭載されている六基のビットの内、特殊レーザー発射型の四基は先程の戦闘で分離したままだ。その四基とも近くに控えているのを確認する。ビットにはまだ十分なエネルギーが残っていた。これならば再接続の必要無く攻撃が可能だろう。

並行して索敵——レーザーライフルを構え——発見、真上。あの忌々しい白亜の機体にレーザーライフルを向けるために、地を背にする様に機体を90度傾ける。

「——」

そうして見えたのが、セシリアは一瞬何なのか解らなかった。一瞬過ぎ去ってから、それが相手ISの“足の裏”だという事に気が付いた。

“ぞつ”と背筋に悪寒が走る。反応でなく反射でその場から飛び退いていた。それは普段の彼女にはとても似つかわしくない動作である。優雅さなんて無いし、シーンだけを切り取れば無様にすら見えるかもしれない。位置も体勢も動いた後の事も何もかも、それに対する思考を放棄して、セシリアは現在位置から離れることのみを優先した。

果たして、その選択は大正解であった。

『イイイイヤッホオオオオオ——!!』

白い流星が垂直に降ってくる。地球の重力と大推力で以て突き立てられたIS一機分の質量は尋常でない破壊力を秘めている事だろう。

『流星』の両脚の一部がスライドし、そこから何かが勢い良く排出される。空薬莖と思しきそれが細かい光と化して解けていくのが、セシリアの視界に映る。

——この音には、破壊力があるのではないだろうか。

現実がセシリアの予想を飛び越えていく。流星が地面に突き刺さった瞬間に“何か”が弾け飛んだ。加速のかかった大質量が着弾の瞬間に炸裂し、衝撃という余波が周囲全てを押しつけながら拡散し



ていく。

哀れその直撃を受けた地面が砕け、吹き飛び、周囲に散弾の如く撒き散らされる。“爆心地”近くに居たセシリアの身体とブルー・ティーズの機体を容赦なく叩く。その程度でISのシールドはビクともしないが、巻き起こった爆風に煽られて機体が流される様に吹き飛ばされた。

「……………、……………、……………」

何とか持ち直して、その場から離れるように上昇し——穿たれた巨大なクレーターを認識する。さつきまでは間違いない平らだった筈の地面は無残に抉れ、隆起し、凹んでいた。

セシリアのブルー・ティーズの全火力を総動員しても、眼前と同様の規模の破壊を行うのには時間がかかるだろう。だが不可能ではない。ISはそういう兵器<sup>モ</sup>なのだから。

セシリアの心を掻き乱すのは、この破壊——その総てが本来はセシリアただ一人に叩き込まれようとしていたその事実。

『やべ足超埋まった。この、このつ……………、抜けねえ！ ええい面倒だも一発ウ!!』

爆音。収まりかけていた土煙を再度巻き起こしながら、白い機体が爆心地より飛び出してくる。セシリア目掛けて。

「……………ッ!!」

「今度ア外さねえ!!」

鉄砲玉の如く、一直線に白式を纏った織斑一夏がセシリア目掛けて斜めに飛翔する。その速度は驚異的だ。さつき“身を持って”知ったから今更確認するまでもない。

身体を捻る——刺突の様な蹴りが虚空を撃ち抜いた。衝突音、蹴り抜いた後で壁にぶつかっただかのように突き出された足が停止する。逆の足が縦方向に振り抜かれ、横に避けたセシリアに迫る。

「ちえいさー!!」

レーザーライフルの砲身を咄嗟に翳して受け止める。間の抜けた掛け声と逆に、その一撃は酷く重い。受け止めた途端に機体がかくと沈み込む。

空中を滑る様に——まるでそこに足を這わせる地面があるかの様に独特な——回転し、また蹴りが放たれる。

「何時までも好き勝手は——」

膝蹴り回し蹴り飛び蹴り踵落とし——ジャンルに統一性の欠片もない、共通しているのは“脚を使った戦闘行動”である事。

「やらせませんわよ!!」

その中の、刺突の様な突きをあえて受けた。吹き飛ぶ形で後退しながら一瞬で照準を合わせたレーザーライフルのトリガーを引き絞る。

狙いは脚部、上手くいけばあの妙な機能を停止させる事が出来るかもしれない。しかし、ほんの僅かにその位置をずらすだけで容易く回避される。

その回避の動きが淀み無く攻撃準備動作へと連続し、セシリアが二射目を放つよりも速く脚を突き出した白式が突っ込んでくる。

(反応が異常に鋭い……本当に素人ですの!?)

驚愕は心中でのみ。なぜなら一々発声している余裕が無いから。

横殴りに突っ込んでくる白い機体を躲す。

このまま距離を——何かの炸裂音。まるでムービーの巻き戻しのように、ぐるんと宙返りをしながら、白式がセシリアの横まで舞い戻ってくる。

「よう久し振り!!」

回避も防御も間に合わず、ユニットの一部が蹴り砕かれた。先程の爆発的な衝撃こそ使用していないが、頑強な白式の脚部はただ振り回されるだけで破壊力を生む。

「好き勝手はやらせないと——」

衝撃に歯を食い縛りながら、弾道型ミサイルを起動させる。後退しながら二基を発射する。これまでの攻防で、セシリアは相手の回避能力の高さを十分に思い知っている。こんな苦し紛れの攻撃では直撃どころか掠る事すら無いだろう。

「——ブルー・ティアーズツ!!」

ボツ!! と空より四つの光が降りる。先程から待機させておいたビット、それを密かに上空へと配置しての奇襲。

これまでの攻防でセシリアが知ったのは当てようとすれば避けられるという事だけではない。当たらない攻撃ならば“避けない”。

複雑な角度で以て相手を“囲む”様に降った四筋のブルー・テイアーズは、刹那の間その動きを封じる光の檻となる。唯一の正解は発射される前に範囲から逃れる事のみ。

「代表候補生を」

構えた長大なレーザーライフルを悠々と照準し。

「甘く見過ぎですわ!!」

硬直する様に動きの止まった相手、その顔面にレーザーを叩き込んだ。直撃、首が思いつきり後方に仰け反る。そして発射した時点では牽制にしか見えなかった筈の弾道型が本命と化して着弾する。

赤を超えて白い爆発の花が咲き誇る。攻撃の直撃を受けて吹き飛ば敵機を確認、ビットを一旦機体に戻して後方へ退く。

吹き飛んだ敵機は地面に向かう、そして地表にぶつかると思われた瞬間に盛大に跳ねた。二度三度バウンドしつても体勢を立て直し、例の特殊な機動で回転するように地を滑る。

——そして、途中にあった“刀”をすれ違いざまに引き抜いた。

「これを狙って……? でもかなりのダメージが通った筈ですわよ」

わざと弾道型に当たって武器を回収したのかと思われたが、白式から黒煙が立ち上っている事からもそのダメージが伺える。

ならば、攻撃を受けると確定した瞬間に決めたのだろうか。ダメージを受けるにしてもその後の展開をせめて自分に有利に働かせるための道を、あの一瞬で正確に選択し、そして成功させた。

地面を回転する様に滑り、停止した相手が眼下に見える。回収した刀を担ぎ、脚部の調子を確認めるかのように地面にカツカツと打ち付けていた。

『さすがに一筋縄じゃいかねーな。胸を張るだけの實力じゃねえか、代表候補生』

「当然ですわ。わたくしの勝利は自明の理。今更惨めな姿を晒したくないといったところで、もう謝っても許しませんわよ」

『ぬかせ。ここまでやつといて今更下がれるかよ。やろうじゃねえか』

よ、とことんよ！ どつちか破片になるまでよ!!』

——ああ、この相手は思えば最初からこんな風だった。

いざ試合が始まる前まで、セシリアは今日の決闘がただ一方的に相手をいたぶる事になると信じて疑っていなかった。

だが蓋を開けてみればどうだ。今でこそ形勢を引っくり返したとはいえ、随分好き勝手を許してしまった。いやさっきまでは確実に劣勢だったではないか。

実力は確実にセシリアの方が上であるはずなのに何故そうなったか。簡単だ。セシリアが本気でなかったからだ。無論遊びとまで気を緩めていた訳ではない。ISを使うモノとしての意識はこの気高き心に常に備えられている。

だが果たしてあの相手の様に、あの敵の様に、あの“男”の様に、目の前に対して全力であったといえるであろうか。

必死であったと言えるだろうか。

行動の総てに後悔が無かったと言えるだろうか。

答えは否。圧倒的に否。セシリア・オルコットともあろうものが、何とも中途半端な真似を晒してしまった。

彼女はトリガーに指をかける。

誇れる自分自身セシリア・オルコットを掴み取るために、今彼女がすべきはたった一つ。目の前の凶獣を、この愛銃で以て“狩る”。

「——さあ、踊りなさい織斑一夏！ わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲ワルツで!!」

「生憎と、盆踊りしか知らねえよ!!」

レーザースライフルから迸った蒼光と、振り抜かれた刀の刃が空中で衝突して火花を散らせる。

激闘は、決着目指してただ続く。

▽▽▽

【機体状態を確認します】

【実体ダメージ、レベル低】

【近接特化ブレード・《雪片式型》、健在】

【ワンオフニアビリティ】

【単一仕様能力、オフライン】

【脚部特殊力場発生装置、正常に動作中】

【圧縮力場形成用エネルギーカートリッジ、残弾数《3》】

【戦闘継続に支障なし】

——未だ名も無き0と1の集合体

▽▽▽

「……………」

直立不動。その言葉が実に相応しい様子でピットの片隅で一人佇むは篠ノ之箒。

そんな箒の前にあるウィンドウにはアリーナで行われている試合の様子——高速で飛び回る二機のISの戦い——が映し出されている。

最初は一夏が異常に劣勢だった。

機動は出鱈目。武器も呼び出せない。拳句の果てには墜落しかける。見ているだけで——いや見ているだけだからこそ、異常に“はらはら”させられた。一夏にミサイルが直撃した時はもう駄目だと思っただ。これで終わったのだと思っただ。

同時に、箒の心の片隅に浮かんだ一つの言葉——『ああ、やっぱりこうなってしまった』。

この一週間で共に過ごし、箒は一夏の態度や姿勢に対して好印象を抱いた。けれどもその実力に付いては正直なところ落胆していたの

である。

運動神経自体はそう悪くもない筈だが、肝心の剣道はいくら教えても上達の兆しすら見えない。もう不思議に思えてくるくらいに今の一夏は剣道が駄目だった。そしてその酷い有様を目の当たりにして、戦いに向いてないと判断した。

そして勉学は何というか普通に、駄目だった。物覚えが悪いとか、要領が悪いというか、もう余りにも駄目すぎてどこから駄目なのかも箒には理解出来なかった。

しかし、決着がついたかに思えた勝負はまだ続いている。

白が跳ぶ、蒼が舞う。

白が翔ける、蒼が射抜く。

箒の下した『一夏は弱い』という判断が、今この瞬間にも塗り替えられ——いや、もうとつくに塗り替えられている。

それどころかその上から更に塗り固められている。

——あの子言ってたんだよねー、織斑くんに完膚なきまでに負かされたって。

一週間前、放課後の剣道場。それは一夏と何を話していたのかという箒の問いに対する部長の答えだ。

まず箒が驚いたのは、剣道部の部長の知り合いが一夏の友人だった事。

そして、それは箒にも聞き覚えのある名だった事。

箒がその名前を聞いた場所は剣道の全国大会、その会場。部長の口にした名前は——男子の全国大会優勝者。

試合を見ただけだが、それでも剣の腕の察しは付いた。箒と互角——もしくはそれ以上。そんな相手に『今の一夏』が勝てる訳が無い。

思わず、そんな馬鹿なと叫んだ箒に対し、部長は直ぐに『それはちよつとした勘違いだった』と訂正した。困った様な、それでいて何処か楽しそうな——そんな妙な表情で。

そんな顔のまま彼女が種明かしの一言を吐く。

——そりゃ『剣道』と『喧嘩』は違うよねえ？

「……………正にその通りだな、これは」

『喧嘩』という言葉は確かに眼前の光景に相応しい。一週間前に聞いた言葉と眼前の光景が重なり、思わず呆れを含んだ呟きが漏れる。戦い方は本当に滅茶苦茶の出鱈目で、“刀”の振り方はまるでなっていない。けれど、代表候補生相手に一步も引いていないどころか互角以上に渡り合っている。

きっとこれが『今の一夏』の“やり方”なのだろう。箒と共に剣道をやっている時と違い、実に“のびのび”と戦う一夏を見ていると、そう思える。

結局、『剣道』という枠に捕われ過ぎていただけなのかもしれない。別に剣道が苦手な人間総てが弱い訳ではないと、少し考えればわかりそうなものなのに。

「いいや違う。私は、ただ……」

話をもっと単純だ。きっと箒はそれだけを求めている、それしか欲しくなかったから、他を見る事をしなかった。

“剣道の強い一夏の姿”が欲しかった。

幼い頃に焼き付けた、あの姿が欲しかった。

「それにしても」

不意にウインドウに一夏の顔がアップで映る。目は力の限り見開かれ、異様な輝きを瞳の中に灯している。口の端は釣り上がり、裂けるような笑みを形作っている。

凶暴で凶悪な形相。でも何故だろうか。そんな表情を見て箒が感じるのは嫌悪ではない。感じるのは――

「楽しそう、だな」

苦笑が零れる。見た目こそ凶悪だけれども、その表情を見ると夕焼けの中全力で遊ぶ無邪気な子供を連想させる。脇目もふらず目の前に夢中になる、そんな一途さを。

「……どうしてそんなに楽しそうなのだ」

そんな一夏を見ていて、箒の口から零れたのは不満を鱈腹詰め込んだ呟き。

篠ノ之箒にとってISとは何かと聞かれれば――答えとして最も相応しいのは、“忌むべきもの”。怨敵でも可。

つまるところ間違っても、「好き」ではない。

ISの登場は世界に色々なモノをもたらしたのだろう。それこそ箒の想像のつかない規模と数値で以て。しかしそんな物知った事ではない。

篠ノ之箒という人間にとつて、ISがもたらしたのは世界の破滅だ。狭く、けれどもかけがえのない世界を叩き壊したのがインフイニット・ストラトス。

I S だ。

そんなモノをどうして好きになれようか。

なれる訳がない。

（——なつて、たまるものか）

ギリ、という音は歯を力の限り噛み締めたから生じた音。

本当に、心の底から篠ノ之箒はそう思っている事の証。

だから映る幼馴染が馬鹿みたいに楽しそうなのがとても腹立たしい。だってISなんかがあったから、

「私と一夏は、離れ離れになったのに」

怒りを込めた箒の呟きは、弱々しい言葉となつて吐き出された。

ISという存在は箒から大切なモノをいくつも奪つた。しかし箒が一夏と再び巡り会えたのは、ISという存在のお陰でもある。だがそもそもISが無ければ——無数の仮定が溢れ返り、思考の中に渦を巻く。

相反する感情が箒の中でぶつかり合い、せめぎ合い、ごちや混ぜになつて、そして箒自身にもわからないものへと変貌してゆく。

「まったく、人の気も知らないで。本当に楽しそうだな」

今度の呟きは苦笑と共に呆れ声として漏れ出た。映る一夏は相変わらず、馬鹿みたいに無邪気に喜んでる。

はあ、とため息が漏れた。考えれば考えるほどわからなくなつていく。加えてはしゃいでいる一夏を見てるとあれやこれやと悩んでいるのが馬鹿らしく思えてくるのだ。

だから思考をばつさり斬り捨てて、目の前の試合の行く末を見届ける事に専念する。そして出ない結論の中、一つだけはつきりしている事があつた。だから静かに、けれど力強く、箒は彼に声援を贈る。



「頑張れ、一夏」

好きな人に勝って欲しい。

その想いだけは、本当に正当だと自信を持って想えるから。

▽▼▼

「うああああ、あ、あ、あ！ 邪魔！ あの板邪魔！ 板超邪魔!!!」

【あれは『ビツ』

「あんなもん『板』で十分だ『板』で!! ちくしょう細切れにして上に  
カマボコ乗せてやうオ——撃ってきたア——!!」

【警告。回避行動と姿勢制御を——】

がくつと傾けた首の横を、腕を振りあげて空いた脇の下を、振り上げた足がかつて在った位置を、蒼い光が通り過ぎる。

「ちつくしょうめ！ 隙が欠片もありやしねえ!!」

縦横構わず降り注ぐ蒼い光をの矢を避けながら飛行する。変な体勢になってるが今は気にしないようにしよう。ていうか、そんなの気にする余裕が無いくらいに先程からずっと防戦一方だ。

接近を試みても、火力を集中されて阻まれたりあさつての方向に無理矢理逸らされたりとさっぱり上手くないかない。

先程の特攻は相手が油断していたからこそ成功したのだろう。次同じ事をやれば、恐らく辿りつく前に“削り殺される”。

(しかし……『鋭敏』すぎるってのも考えもんなんだなあ)

この奇妙な<sup>人格交代</sup>状態になってからというものの、俺はいわゆる第六感というものが酷くよく働くようになった。危険の“察知”は途中で死を通ったせいだとは思うのだが、こつちの原因は正直さっぱり解らない。

何かもー解らない事本当多いなー。割と本気で俺自身に取説が欲しい。

——心が、

ともかく今の俺はやたら“勘”が鋭い。素人の俺が熟練者たるセシリアの攻撃を（見てくれは悪いが）避けられるのは、正直その影

響がだいぶ大きいだろう。

ただ、段々とそれがマイナス方向に働き始めている。

(あー……アツタマ痛)

攻撃を察知した事で時に脳髓を通り抜ける何か、ざわめき、チリつき、パルス。そんな何か。その一つ一つは虫の羽音程度の不快だとしても、継続し積み重なれば多大な負荷に変貌してゆく。ていうか、してる。

——身体が、

そして“出だし”の分がのっしりとのしかかってきた。不具合の改善と共に不快感の大元こそ消滅したが、精神的な消耗が回復した訳ではない。

段々と落ち込んでいく精神に引き摺られるように、身体の動きが悪くなってきた。反応から動作までのタイムラグは確実に増している。

このままではいずれ避けきれずに攻撃を食らうだろう。そして隙を見せた俺を、“相手”が逃がしてくれるとは思えない。

「手強いな。ああ、手強いな」

【……………?】

数十メートルの距離の先には、蒼い機体を纏った蒼い瞳の少女が居る。流れる金髪が陽の光を受けてきらきらと光っていた。

綺麗な薔薇には刺があるというが、最近のはレーザーライフルまで付いている様だ。何ともおっかない事である。

「でもこうでなくっちゃなあ……! やっぱ壁てのはこうでなくっちゃなあ!」

【……………?】

——魂が、

(兎に角。あの板潰さねえと話の始めようがねーか、なー。どーすっかなー)

狙いは板プレット。俺とセシリアの間を阻むように飛び回る四基のそれを睨め付ける。

接近するためにもまず最初にあの猟犬板共を潰しておきたい。それにあれが存在している限り、何をするにしても前後上下左右その総

てに絶え間なく警戒し続けなくてはならない。

まったく無線誘導兵器がこんなに厄介だなんて思わなかったよ、ちくしようめ。

——ただその光景<sup>結果</sup>だけを渴望する。

胸の奥——よりも、もつとずつと深い何処かで何かが疼いたような奇妙な感覚があった。しかし今はそれが何かを考えている隙が無い。

「そろそろ仕掛けねーと、な」

少しずつ削り取られ、段々とゼロに近付いていくシールドエネルギー。何をしても色々鑑みて次が最後の機会だろう。

相手がこつちを過小評価してるのか過大評価してるかは知らないが、警戒している事は間違いない。特攻という前例がある分、特に奇襲にはさぞ神経を割いて警戒している事だろう。

さてそれではどうするか？

決まってる、奇襲だ。

元から根本的な実力差に差があるのだ。事実真つ当なぶつかり合いになった現状、俺は攻めあぐねている。だから実力の差をそれ以外でもって埋立てる。

「……やっぱ『同時』は無いか」

今現在も休むこと無く——いや、適度に休みつつ効率よくこちらを狙い打ち続ける蒼いレーザー。それは二種類ある。

一つはセシリア本人が構えた大型のライフルから放たれるもの。

一つは四基<sup>ピット</sup>の板から放たれるもの。

本命と牽制を入れ替え合い、互いの隙を補い合う様に発射されるその二つは、これまで一度も『同時』に発射された事がない。

(そして、板が特に複雑な動きをしている時にセシリアは殆ど『止まってる』いる)

推測だが板<sup>ピット</sup>は完全な自立機動は行えないのだろう。複雑な軌道を描く際や精密な射撃を行う際はセシリアの直接操作を必要とする様だ。しかもその操作にセシリアは大幅に意識を割いている。

(板が動くためにセシリアが止まるなら——その逆も成立するよなあ)

あからさまに板を狙いに行つた所で、無理に動けば蜂の巣にされるのがオチだ。しかし俺の推測が正しいのならば、セシリアの気を逸らせば板はほぼ無防備になる。

(この推測が合つてる確証はねえけど……賭けるんならここだな)

武器は右手の刀一本。飛び道具は無し。アイコンの表示は『3』。

この手札を用いて、行ふべきは相手の想像の上を行く事。

相手の知らない現実をその目の前に突きつける。

そして生じる一瞬の空白が俺は欲しい。

「——さて。博打の時間だ」

追い詰められながら、仕掛けるべきその瞬間をただ待つ。

▽▽▽

——勝てる。

蒼い光の矢が白い装甲の端をもぎ取るように吹き飛ばすのを見ながら、セシリアは唇の端をほんの僅かに釣り上げた。

だが油断は禁物だ。遮断シールドに叩き付けられ、更に引き摺られた事が思い起こされる。気を抜いていたばかりにあんな屈辱的な行いを許してしまったのだ。

とはいえセシリアの射撃にただ逃げる事しか出来ない相手を見ていると、何とも酷く気分がいい。気持ちが緩みそうになる。

未だ相手の闘志が折れていない——勝ちを諦めていない事はその立ち振る舞いから明らかではある。事実セシリアが少しでも気を緩めれば、相手はその得物を突き立てんと迫ってくる。油断はしない、というよりも出来ないと言うべきかもしれない。

(……………何だか懐かしいですわね、もう随分昔のことに思えますけれど)

今でこそ代表候補生の肩書きを持つセシリアだが、最初から“そうだった訳ではない。決して少くない時間を費やして得た肩書きだ。

対戦相手を——織斑一夏を見ていると、どうにもその途中を思い出

す。何度も失敗して、何度も敗北していた頃を。ただひたすらに懸命だったあの頃を。

「――」

思い出に浸りそうになった事で気が逸れた。一瞬、一射だけ、レーザーが緩んだその隙に白いISは一定に保たれていたはずのこちらとの距離を一気に詰めてくる。

しかし、レーザーライフルとビットの砲撃に阻まれた白いISは直ぐに止まる。明らかに悔しそうな顔をしている一夏を見て、セシリアの胸にぞわぞわとした快感が芽生える。あの凶暴な獣が為す術なく地団駄を踏んでいる様を見るのは、なんとも気分がよかった。

「ふふ、踊りなさい。必死に、無様に、惨めに」

もう容赦などしない。

最期のその瞬間まで距離というこの絶対的な優位を保ったまま勝利する。相手がもう二度とこの蒼い装甲に触れる事はないだろう。あの獣は<sup>シールドエネルギー</sup>血の最後の一滴を流し尽くすまで、翻弄され、踊り続け、そして敗北するのだ。

ボツ、と周囲に伝達する風切音。

それを“認識”してしまったせいで、セシリアの思考が一瞬だけ真っ白になった。ブルー・ティアーズが主たるセシリアへ飛来物の存在を告げる。

何かが、相手から“発射”された。

その事実がセシリアの精神を凄まじく揺さぶった。刀一本だけで戦っていた相手から何かが飛んできた、その事実が。

(射撃武器が――つでも、そんなモノは今まで何も――まさかずっと温存して――いや呼び出した様子は――ツ!!)

相手が射撃武器を持っていない、その重要な前提が崩壊しかかった事で思考が奔流の様に脳内を駆け巡る。しかしセシリアは今己にとって最も重要な――回避もしくは防御という選択肢を思考の奔流の中から刹那の間に拾い上げる。

聴覚が洪水のような爆音と、がぎぎいっ！ とけたけましい音を同時に捉えた。前者はあの白いIS――白式の有する特殊機能が発

動した事を示し、後者はブルー・ティアーズのビットを接続するバインダーに何か突き刺さった音だ。

セシリアは相手が射撃武器を使う可能性を忘れていた訳ではない。むしろ相手が新たな武装を呼び出す兆候を見逃すまいと目を光らせていた。

だからこそ混乱したのだ。相手が新たな武装を呼び出していないのにも関わらず、突如出現した『射撃』という行動に。

「……………は？」

セシリアから見て右側のバインダーに、真つ白な“刀”が突き刺さっていた。

武装を呼び出した兆候が見受けられない訳だ。

つまり相手は新たな武器を呼び出した訳でもなく、射撃武器を隠し持っていたのでもなく、恐らく唯一の武器であろうその刀を、セシリアに投げつけたという事か。

「何て、馬鹿な真似……………を……………」

ブルー・ティアーズのリーダーは白いISを見失っていない。慌てふためく思考を強引に纏め上げ、愛機に導かれるままセシリアは迎撃の為にレーザーライフルを構える。そこには唯一の武器を失った織斑一夏が居る筈だった。

そこに居たのは、確かに織斑一夏だった。

そこに居たのは、“何か”を振り抜いた直後と思しき姿の織斑一夏だった。

——二基のビットブルー・ティアーズをまるで剣の様に両手に持った、織斑一夏がそこに居た。

真ん中で盛大に“ひしゃげ”た二基のブルー・ティアーズが地面に向かって落ちて行く。機体が四基のビットの内、二基が破壊され、残りの二基が“行動不能”に陥った事を告げていた。

スラスターを“握り潰された”ビットはいまや金属で出来た板同然だ。“刀”の代わりにならなくとも、“棍棒”の代わりにはなるだろうし、そのつもりだという事が見て取れる。

落下していったのと同じく、ひしゃげている二枚のフィンビットだったものを構えた

まま、織斑一夏が虚空を踏み締める。ガシャコッ！ とその両脚から空薬莖の様なパーツが脱落した。

(まず、い——来——ッ!?)

音の洪水。

スラスターに加えて不可視の力場に押し出された織斑一夏が一気に距離を詰めてくる。レーザーライフルの銃口を跳ね上げ、弾道型を装填。

速い。

いや疾い。

レーザーライフルの先端から蒼い光が迸る。

一発目、翳されたのは右手にあったビットの残骸。蒼い装甲が砕け散る。

二発目、翳されたのは左手にあったビットの残骸。蒼い装甲が砕け散る。

三発目、蒼いレーザーが織斑一夏の顔面に叩き込まれて弾け飛んだ。

(止まらない、止められない——ッ!?)

首から上だけをレーザーの着弾で後方へ思いつきり仰け反らせながらも、織斑一夏は止まらない。

四発目を撃つ前に、織斑一夏はセシリアまで到達した。

機体が右側へがくと傾く。織斑一夏がすれ違いざまにバインダーに刺さったままの刀を掴んだ事で、加速の勢いがこちらにも伝達しているのだ。

「このッ!!」

長大なレーザーライフルの砲身をぐるりとバトンの様に回し、右側へ居る織斑一夏に向ける。変則的な構えのままトリガーを引——虚空を射抜く蒼いレーザー。

唯一の武装に戻った刀から織斑一夏はアツサリ手を離して、放たれた光矢を回避した。しかし距離は空いたどころか更に縮んでいる。

ばぎぎんツと、異音がした。

織斑一夏が力任せにもぎ取った“それ”を放り捨てる。ISの報

告を待つまでもなくそれが何なのかセシリアは理解する。

機体から発射基部ごと脱落したのは、脱落させられたのは——  
弾道型のブルー・ティアーズ。

「ラスト一発。ぶれぜんとふおー」

長大な砲身が災いして、背後に居る相手に照準が定められない。もたついているセシリアを他所に織斑一夏はひよいと手を伸ばし、バインダーに刺さったままの刀を掴む。

白い両脚が、蒼い機体に突き付けられ——がしゃこん<sup>装填</sup>。

「ゆー」

至近距離で炸裂した音の洪水に、周囲の空間が歪んだような錯覚をした。身体が意思を離れ、ただ打ち込まれた衝撃に従ってくの字に折れ曲がる。

「う、ッ——あ——ッ!!」

超高速で風景が流れ去る。無数に表示されるアラートメッセージや走り抜けるノイズが思考を圧迫して不快だった。

それでもスラスターを可能な限り稼働させて機体を制御しようと試みる。しかし立て直しは間に合わず、機体は遮断シールドに叩き付けられてようやく停まる。

「さあ、名残惜しいが幕引きだ！ くたばりやがれえええええ!!」

「……そうです、わね。閉幕と参りましたよ。わたくしの——勝利という形で!!」

レーザーライフルは未だセシリアの手中にある。武器を手にしているのに何故勝利を諦めなければいけないのか。遮断シールドを蹴って、空へと舞い上がる。

激突でぐらぐらと揺れる思考のまま、それでもセシリアは己の敵を睨みつける。刀を刺突の形に構えた織斑一夏がセシリア目掛けて真っ直ぐ飛翔してくるのが見えた。

「押し斬れ白式——ッ!!」

「撃ち抜きなさい、蒼い雫!!」

一振りの刀を一丁のライフルが迎え撃つ。吹き飛んだ事で距離というアドバンテージは得た。しかしさつきまでとはもう完全に状況



が違う。一筋まで減らされたレーザーはあの白い魔弾を止められない。いや、最早当てる事すら叶わない。

「当たり前なさい……………」

外れ。

「当たって……………」

外れ。

「当たれ……………」

外れ。

蒼の悉くを避けながら白が迫ってくる。セシリアの決死を嘲笑うかのように——いや、噛み砕くかのように白が、迫ってくる。

もう殆ど距離がない。

もし一発が当たったとしても、あの白は止まらないのかもしれない。

もう一発程度勝敗には関係ないのかもしれない。

けれども、セシリア・オルコットは躊躇うこと無く引き金を引き続ける。

外れるとわかっていても、最後まで闘う事を選ぶ。諦めることなど論外だ。

攻撃は——当たる外れる。

外れる事を望んでいた訳ではない。逆だ。例え外れるとしても、その結果を覆すつもりでただ一心に命中を渴望した。

「なあッ!？」

「え?」

白いISの脇を通り過ぎる筈だった蒼い光矢が——交差の瞬間にその中心を僅かにずらした。蒼い熱量を叩き込まれ白い装甲に包まれた左腕が砕け散る。マニピレータをやられたのか、黒い左手が柄から離れ後方へ流される。

驚愕の声は両者から。織斑一夏のそれはきつと避けたと思った攻撃が当たった事から、そしてセシリアのそれは、外れると思った攻撃が当たったから。思った通りに、当たったから。

「だが、一本残ってりや十分だあああ!!」

残った右手だけで刀を構えながら——白が通り過ぎた。最後の行動は回避、この突撃をやり過ごして直ぐに反転。相手が体勢を立て直すよりも速くそのから空きの背中にレーザーを撃ち込む。

そのつもりだった。

「……あ」

すれ違いざまに、振るわれた刀はセシリア本人には届かなかった。が、白い刀身はライフルの長大な砲身を盛大に引き裂きながら通り過ぎていった。表示される——《スターライトmkIII》使用不可。一拍遅れてライフルを保持していた右腕の装甲と、バインダーの一部が吹き飛んだ。損傷に伴い勢い良く目減りするシールドエネルギー。

——残量、『1』。



「——ワンオフ・アピリテイ単一仕様能力、オンライン」

“来た”。

きつとずつと待ち望んでいた、この瞬間がついに来た。

セシリアの横を通り過ぎると直ぐに遮断シールドに辿りつく、そこに“着弾”の後に、上に跳ぶ。スラスターを噴かして一気に上昇する。

何故か直撃を食らった左手は、損傷しつつもまだ動いた。改めて両腕で刀の柄を握り締めて振り被る。眼下に見えるセシリアのライフルが最後の武器が、切り飛ばしたその半分が落ちていく。息を大きく大きく吸い込んだ。

「ちえええすとおおあああああああ!!!」

怒号と共に、セシリア目掛けて急降下を開始する。記憶の片隅に残っていた掛け声。詳しくは覚えていないが昔何処かの何かで見たか聞いた記憶がある。大して思い入れもないが、何故だかこの言葉を思い出して、そして叫んでいた。

この刀身を叩きつける。そして相手を——にする。きつと俺の今

まで総てはこの瞬間だけを待っていて、この瞬間のためだけにあった。俺という存在は最初から細胞の一粒単位で、ただこのためだけに。

【零落白夜——発動】

先程まで渦巻いていた高揚感や勝利への渴望は欠片も無く、ただ胸の奥から湧き上がる得体のしれない“何か”だけが身体を突き動かしている。いやきつとこの“何か”が本来で、他のココロとか精神とかそういうのが余計だった。

【エネルギー転換率——100%】

気が付けば、握りしめた刀は鋼の塊から圧縮された光の刃へと姿を変えている。膨大なエネルギーの塊は光の柱と形容出来るほどだ。

とりあえず刃がついていればなんでもいい。刃さえあれば——にできるのだから。そうすればずっとずっと本当に心の底からやりたかった事が、本来俺がやるべきただ単に一つの結果が叶うのだから。

近付いていく。

ぐんぐん近付いていく。

武器の総てを砕かれて、今や抵抗する術を失った蒼に、近付いていく。

何処を狙うか、何処を狙えばいいかなんてのは考えるより先に存在の根底で以て理解している。後必要なのはただ一つ。この両腕を――

び——っ

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

——振り下ろす、って。ちよつと待って。あれ何か試合終わった。あれっ？

突然だが緊張の糸なるものがある。

要は精神が極限まで集中した状態を張り詰めた糸に例える、そんな

感じだ。時に俺は今この瞬間までかつて無い程に集中していた。集中しすぎて一瞬前まで自分が何考えていたのか覚えてないくらいに集中して……うわ何かマジに振りかぶったところから記憶飛んでる。怖。

そして、そのブザーとアナウンスで糸<sup>集中</sup>が切れた。

そりやーもー盛大にぶつつり切れた。

張り詰めた力が強かったせいかな、凄まじい勢いで千切れ飛んだ。

中途半端な位置で止まった腕。何かさっきは光ってたような気がするけど、今は柄しか残っていない刀。そして——続いている最大加速。

すれ違う刹那の瞬間、口を中途半端に開けて『ほかん』とした顔をしていたセシリアと目が合った気がした。

「ア———!？」

こんにちは地球。

母なる星よ。

ブレーキという概念を思考から消し飛ばしてしまった俺は、最高速度のまま落下して砲弾よろしく地面に着弾した。おふう。

(……………あーあ、負けちゃったかあ)

どうやら完全に埋まってしまったらしく、周り全部が土気色だった。何が起こったのかさっぱりわからないが、ただ俺の敗北という結果だけは確かなようだ。白式がシールドエネルギーが『0』になっている事を伝えてくる。

さて何時までも埋まっている訳にもいかないだろう。ともかく起き上がろう。この後の展開を考えるだけで憂鬱だが、よいしょと身体を起こして——つと、あれ？

脳は確かに『腕を付いて起き上がる』、そういう動作を身体に命令した筈なのに、俺の身体は未だ土気色の中だ。

(あ、れ……何だか、……身体が………重………)

変化は突然で、そして急速だった。

意識が粘っていた中に沈んでいき、身体は鉛の様に重い。

『……織斑。何時まで埋まっている気だ。さっさと起き上がれ』

意思の抵抗を嘲笑うかのように、気が遠くなっていく。

白式の“声”も、もう聞こえない。さつきまで全周を見渡せていた視界は何時の間にか普段どおりに戻っている。

『織斑？ どうした、返事をしろ』

重たい瞼は視界を半分以上隠してしまっている。その中に淡い光の粒子が映っていた。何処から出ていると思えば、白式の機体が光になって解けていつている。

『——織斑！ 聞こえていないのか!? 返事をしろ!!』

ああ、だれかが俺を呼んでいる。

いやだれかなんて、考えるまでもないあ。

だってこれは、ずっと昔から聞いている一番身近な人の声じゃないか。

これは、

『返事をしろ、一夏あつ!!』

——千冬姉の、声だ。

▽▽▽

『真つ二つ』

モノを綺麗にきつかり半分にする事。また、そうなる事。  
僕の友達が無意識ながら病的なまでに大好きな概念。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

——ひゆう、ひゆう、ひゆう

音が。何処か遠い。

地面に出現した大穴を見た観客の反応は多種多様だった。ある者は大笑いして、ある者は大いに呆れ、またある者は見下すように冷笑した。

では彼女が——その大穴を作った張本人である織斑一夏と先程まで戦っていたセシリアはどういう反応をしたかといえば、そもそも大穴へと視線を向けてすらいなかった。

——ひゆう、ひゆう、ひゆう

事態の理解を完全にどこかに置き去りして、セシリアは心の底から安堵する。蒼い装甲が剥げ落ちて、内部フレームが覗いてしまっている右腕はそのままに、健在な左腕が彼女の胸——身体の中心に向かう。ぺたぺたと、触れるようにあるいは確かめるように、身体の上をマニピレータが這う。

柔らかな弾力と感触が伝わってきてセシリアは安堵する。

ちゃんと繋がっている、そんな風に安堵する。

——ひゆう、ひゆう、ひゆう

そしてここに至ってようやく先程から耳に届くこの音が、自身の呼吸の音である事をセシリアは知覚した。

次に聞こえてきたのは液体が流れる音。どんな道を通ったのか、そして何時ISを解除したのかが臍気なままに、場所はアリーナの上空

からシャワー室の一角へと移っている。

シャワーノズルから吹出す湯は、大抵の人間が『熱い』と飛び退く温度であるにも関わらずセシリアはそれを頭から被り続けている。降り注ぐ湯は肌に当たり、弾け、均整の取れた肢体をボディラインに沿って流れ落ちて行く。

先程と行動は同じ、しかし使う腕が増えた。指先が身体を中心に伸びて、そこに当たり前のようにある肌をなぞる。

「……おりむらいちか」

鋼から光と化し、柱と呼べるような規模に膨張した刀身を振りかぶった織斑一夏を思い出す。いや違う。思い出すまでもなくその光景が脳裏に、網膜に焼き付いて離れない。

——その姿を視界に入れた瞬間に、自身が真つ二つに分断される光景を幻視した。

現実ではセシリアは斬られていないし、そもそも攻撃は不発に終わった。けれど光の柱を振りかぶる相手の、あの悪魔の如き表情を——余り詳しくはないが、確かこの国ではああいふ手合いを『鬼』と言うのだったか——見て、そう感じた。そう思わされた。

「織斑、いちか」

総ての武装を破壊された様に見えたブルー・ティアーズだが、実の所まだ最後にして唯一の近接戦闘用の武装《インターセプター》を残していた。

だからあの状況でもまだ打つ手はあった。それが逆転を引き寄せるかどうかはセシリアの手腕次第だが、ともかく“手”は確かに残っていた。

けれどもセシリアは武装を展開する事をしなかった。相手を視界に収めたあの刹那、異様な気迫に押されて選択肢が脳内から吹き飛んでいた。

「……織斑一夏」

アリーナに流れたアナウンスはセシリアが勝者であると告げていた。

気圧されて、迫り来る一撃を、馬鹿みたいに眺めていて、武器の展

開も忘れて、ただ攻撃がもたらす結果に怯えていたセシリアを——勝者であると告げていた。

今日まで得てきた勝利はそれら総てが『勝ち得た』と胸を張って言える。正しく己の実力が下した相手を上回った事による結果だとう言える。

しかし今日のそれは違う。あの『決着』の何処にセシリア・オルコツトが織斑一夏よりも上である、そう言える要素があったというのだ。あるとしたら——その逆だ。

だって最後の瞬間、間違いなくセシリアは折れていたのだから。試合が終わってから今に到るまで、セシリアはあの最後の一撃に心底怯えていて、そして攻撃が未遂で終わった事に安堵している。それが何よりの証だ。

あの白い光の刀はブルーティーズの装甲やセシリアの身体を斬る事は無かった。けれどきつと心の根底に打ち建てられた何かに届いて——それを傷付けた。

負けたかった、訳ではない。決して無い。けれどもこんな惨めな気持ちになる事が『勝利』である筈がない！

「織斑一夏あ……………ツ！」

ごっ、と響く音はセシリアが力の限りに拳をシャワー室の壁に叩きつけた音だ。

ノズルからは相も変わらず熱い湯が吹出して、真下に在る彼女に降り注いでいる。だからその目元で何かが光っても、それは直ぐに湯に紛れてわからなくなる。



『自分が世界で最も優秀であることを示す』

それが自分の夢であると、そいつはたい焼きを齧りながらそう言った。続けて問うてくる。そのためにどうすればいいと思う、と。

『前』生きていた時の俺は、間違いなく答えに詰まっただろう。何か凄い発表をするみたいな無難で曖昧な返事か、結局返答できないかの



どっちかだと思う。

でも『今』ならば、この世界を生きた俺には一つの答えが直ぐに思い浮かぶ。何故ならば。この世界ではとてもわかりやすい“一番”が居るからだ。その“一番”を蹴り落とせば誰もが——世界が“一番”である事を認めるだろう。

その名は篠ノ之束<sup>しののたばね</sup>。

IS（インフィニット・ストラトス）を開発し、各国のパワーバランスから男尊女卑の傾向やら、文字通り世界を根底から塗り替えてしまった大天才。

俺が篠ノ之博士に思い当たったことを察したのか、そいつは口の端を釣り上げてにやりと笑い、言葉を続けた。

『だからさ、僕等の友情は将来砕け散ると思うんだよね』

はあ。と間の抜けた声が出る。そいつの夢と、俺との友達関係がどう関連しているのかがわからなかったから。てかこいつの口から『友情』って単語が出たことが地味に衝撃<sup>びっくり</sup>。

言葉の意味がよくわからなくて困惑している俺の何が楽しいのか、そいつはやったらにこにこしている。うん、何か普通にむかついてきた。

『彼女が世界に認められているのはある“功績”が理由だ。彼女より上である事を手っ取り早く示すためには、同種の“功績”で彼女を上回ってやればいい』

ああ、そういう事かと声漏れた。篠ノ之束がその名を轟かせたのはISを開発したからだ。その功績の中核たるISを上回る事が出来れば、確かに誰もがその優秀さを認めることだろう。

『世界がひっくり返るからだよ』

で、それと俺らの関係に何の関係がある。そんな質問に対する答え。それまでのにやにや顔を引つ込め、一転物凄くつまらなそーな顔になったそいつが言葉を続ける。

『幾ら何でも急に変わりすぎだ。変化って言うのは本来膨大な年月と共に緩やかに行われるべきなんだよたふおふえふあ』

話の続きを遮った。たい焼き啜えたままふが話されても何

言ってるのかわからんつつうの。ていうかたい焼き(苺ミルク)ってどんな味するんだろう。まあ俺はカスタード一辺倒だけど。いやあんことかが嫌いな訳じゃないんだ決して。つぶ餡もこし餡も大好きよ? ただそれ以上にカスタードが素晴らしすぎるだけで。

『例えば。一枚の平らな板を世界と仮定しよう。これの上に重しをのせればその直線は曲線へと変わっていき、そしてやがては曲線こそが本来の形となる。しかし重しが余りにも重すぎたり、乗せる速さが極端に速すぎれば板は曲線を通り越して壊れてしまう。君の好きな真つ二つだね——いや君がやるよりかは歪か。前々からずつつつと思ってたけど、君は本当気持ち悪いくらい見事に断つよね』

何その真つ二つ両断マニア的な認識。いやケーキとかすげー綺麗に切り分けるの地味に特技だけど。誕生日会とかでケーキの分配による喧嘩一度も起こさせたこと無いけどさ。

その結果真つ二つに満足感が無いっていえば嘘になる。でも誰だって割り箸が綺麗に割れたらちよつと幸せになったりするだろう。あれと同じ感じじゃねーの。

『切り分けられた二つが誤差千分台で同質量なのをそんな日常の小さな幸せで済まされてたまるか。たい焼きを手で適当に裂けば二つの皮と具の比率が同じになるし。何の計器も使わずに適当にやった結果が真に真つ二つなんだぞ』

大袈裟すぎやしねーかこのスタッコは。こいつが認識した一回がたまたまそんな綺麗に真つ二つだったからといえ、毎回そうなるっていても限らない。

それに誰だって得意な事の一つや二つはあるだろう。俺はそんな感じにケーキとか切るのが上手いとかってだけ——我ながら何つつしよぼい特技だ。

『そのレベルが異常………止そう。当の君が理解できないのなら、僕が理解できる筈もないし。話を戻そうか。さて重しを押し付けられた板は壊れる訳だけど。ところがここで板とは世界だ。世界ってのはそう安々とは壊れない。重しの与えた負荷を受け止めて一応は曲線を保つだろう。でも世界は本当はまだ直線だとすれば? そし

て僕がやるのは、その重しを取り除く事と同意だ。そしたら板はどうなると思う?』

加重<sup>IS</sup>によって無理に極端な曲線<sup>女尊男卑</sup>に歪められた板<sup>世界</sup>は、一気に元の直線に戻ろうとする。それも無理な歪みによって蓄えられた反動を開放しながら。

正解、とそいつは満足気に頷く。

俺がこの世界で生活を始めた時点で既にISは存在していて、世界は変わり始めていた。だから直線の状態——変わる前の世界を直接見てはいない。聞いた限りでは俺の知る一般的な社会とそう変わらないようだが。少なくとも今の様に極端な女尊男卑では無かった筈だ。

『戻る』も『変化』だ。確かにこいつの言う通り世界はひっくり返る。変に抑えつけられてた分、爆発するかの如き勢いで以て。

ともかく世界がひっくり返る、その意味はわかった。それはよ——くわかった。だからそれが何で俺らの関係にまで及んでくるのかを俺は聞いてるんだつつの。

『……そろそろ面倒になってきたからサクつとまとめて言うけどさ、ISVS僕の作ったほにやららになったとするじゃない?』

いや出来るなら最初からサクつとまとめて言えよ。ここまで頑張って頭捻って付いてきた俺は一体何だってんだよ。後よりにもよって名前で手を抜くな、ほにやららて何だその気が抜けるの。

というかこいつ、自分がIS以上のもん作り出せるって点はもう確定みたいな扱いで話してるな地味に。まあ俺はこいつがずば抜けているのは知っているし、何より自分の実力を下手に隠さず胸を張るその姿勢は好きだけど。

『ほにやららを得た方はISを汚す為に精一杯になる。それまで抑えつけられてた分を取り返すようにね。そういう場合『栄光』はそっくりそのまま、むしろ増加して『憎しみ』にコンバートされる。つまり相手がISで栄光を得ているほどにいい的な訳だ——もう解ったよね。そう、IS操縦者として“世界最強”なんて称号を持つ彼女は極上の的だ』

名前が直接出なくても、それが誰なのかなんて考えるまでもない。

俺がこの世で一番世話になっている女性で——俺が一番、

『だからISとは反対側に付く僕は、将来かなりの確率で君の敵になるんだよ。どうせ君は損得ぶち抜いてIS側、いや正確には彼女の味方をするんだろ——うくく、君自分が思っている以上に好意の矢印がわかりやすいんだよ。くく、あの小煩いチビや僕みたいな友人と、彼女じゃ明らかに好意の質が違うもんねえ?』

こいつ超殴りたい。

本当殴りたい。

力の限り殴りたい。

あといい加減ツインテの名前覚えてやれ。

『まあ単細胞代表みたいな君がアプローチかけてないって事は、何らかの負い目があるんだろううけどさ。だからこそ君は絶対彼女の味方になる。例え負け戦でもそれは変わらない筈だ。元々有利不利で自分の意思を曲げられるほど器用じゃないもんね君。そういうところが好きなんだけど、くくく』

いや、バリバリ血縁なんすけど。

負い目とか以前に家族なんすけど。

あと男に好きとか言われても嬉しくない。

『じゃあ負い目が無かったら? ——ほらその表情が答えだ。それに今の答え方じゃ血縁が負い目とは別口だって言ってるようなもんじゃないか? うくくくく、いやあ優位に立つのは気分がいいなあ』  
ようしわかった表に出ろ。

——この時はまだISを持っていなかったし、俺がISを動かせることも知らなかった。

だからこの時に、あいつが言ってたような事態に本当になったとしても、ただの人間である俺が彼女にしてあげられる事なんてたかが知れてる。

それはちゃんとわかってた。それでも何かしたかった。残り時間のわからない命を賭けるに値すると心の底から思え、何より俺がそうしたいという欲求があった。

考えは今も変わらない。

ただ、変わったものもある。

——びやくしき白式。

はい。と誰かの声が聞こえた気がした。気がつけば——もしかしたら最初からそうだったのか——俺の身体には大多数の“白”と、少数の“黒”の二色で構成された鎧が出現している。

IS。

インフィニット・ストラトス。

女性にしか扱えない筈の現行最強の兵器を、俺は得た。

重要なのはISの力でなく、ISを使えるという事だ。何故ならば。ISを使えればIS操縦者として“世界最強”を目指せるから。

世界の誰もが彼女こそ王者であると認めている。そのために彼女に害が及ぶのならば、その認識を変えてしまえばいい。彼女を、その位置から引き摺り下ろしてしまえばいい。

『守る』ってのとはちと違う。この感情は確実にそんなまともなものじゃない。そして俺はその言葉が正直あんまり好きじゃない。一々相手に言うと思着せがましく聞こえるし、口動かす暇があったら手動かせと思うから。まあこれはあくまで俺個人の考え方だ。ていうか根本的に柄じゃねーんだわそういうの。

結局好きにやるしか出来やしないだろう。これまでやってきたみたいに、勝手に相手の前に出て、勝手に障害とかを蹴り飛ばす。相手の意見なんて知ったこっちゃやない。だって喜ばせたい訳じゃない。そうしたいからしてるだけ。だから例え相手が泣いて嫌がろうとも止めてやんない。

それは俺が真っ先に思いついて、真っ先に諦めた選択肢。

それを今の俺は選ぶ事ができる。

——だがしかし、一難去ってまた一難。

ガチン、と視界が切り替わる。

昔よく遊びに行つたそいつの家の光景から神社の前と思しき場所へと風景が切り替わる。

閑散としたその場所では男の子と女の子が並んで竹刀を振つていた。仲良くと言うには二人の顔が生真面目すぎる。それは子供の頃の織斑一夏と篠ノ之箒だ。

やがて練習が終わつたのか、二人は何か言い合いながら歩いて行く。『織斑一夏』が何かを言つて笑つて、竹刀で叩かれた。『篠ノ之箒』はただでさえ釣り上がった瞳を更に釣り上げて怒鳴っている。それでも二人は楽しそうだった。俺にはそう見えた。

これは、『俺』の中に無い記憶。

これは、『織斑一夏』の中に在る記憶。

紛れもない『織斑一夏』の証明が、『俺』の中に確かに在つた。ほんものにとせもの——いずれ追<sup>追</sup>いや<sup>え</sup>られるのがどつちかなんて考えるまでもない。

さあて、『俺』の残り時間はあといくら？

▽▽▽

——“千冬姉”

織斑千冬と織斑一夏は姉弟だ。故に一夏が千冬のことをそう呼ぶのは何らおかしくはないし、昔の一夏は実際にそう呼んでいた。けれども『今の一夏』が千冬をそう呼ぶ事は無いし、そう呼ぶ筈がない。

だから最初は見間違いかと思つたのだ。担架で運ばれる一夏が焦点の定まつていない瞳で千冬を見た瞬間に、その唇が『ちふゆねえ』と、そう形を作つた事が。実際声になつていないのだからもしかしたら違う言葉を呟<sup>う</sup>こうとしたのかもしれない。

けれども、それは確かに昔見た一夏が『千冬姉』と呼ぶ時のそれだった。

けれども、それは確かに今見る一夏が『千冬さん』と呼ぶ時のそれでは無かつた。

千冬の視線の先には、白いベッドの上で眠る一夏の姿がある。起き

ている時ならば見分けがつくが、眠っている時は本当に“どっち”なのか見分けがつかない。

仕事を言い訳にして見舞うまでに丸一日以上の時間を要したのは、わからなかったからだ。もし目を覚ました一夏が“戻って”いたら、どう反応すればいいのか。

喜ばばいいと、思う。それで正しいとわかってはいる。それは喜ばしい事だと確かに思うことができる。

でもやはりその結果がもたらすもう一つの事実を——ある一人の消失を——考えると、胸が絞めつけられるように痛む。

「思いの外、臆病だったのだな。私は」

重く沈んだ気持ちを気休め程度でも排出しようと一度深い溜息を吐いて頭を振る。

とにかく、目を覚ますまでは身を案じよう。それまでは“姉”と“もう一つ”の理由を両立できるのだから。

「あー……………寝過ぎてボーッとする……………あつたまいて……………」

と思った途端に一夏が起きた。

大きくあくびを一度して、寝ぼけ眼をこすりながら枕元の時計を手にとって表示を確認。そしてまた寝転がった。

言葉がなくとも何を考えているか解る。最早遅刻どころではない時間であったので、もう何もかも諦めて二度寝する事にした。そんなところだろう。

そしてこの行動だけでもうどっちかわかる。これは『今の一夏』の方だ。

「起きんかこの馬鹿者が」

何時ものように頭を叩こうと思ったが、一応は病み上がりであることを考慮してデコピンに変更する。額に衝撃を受けた一夏は目を開け、緩慢とした動作で額をさする。

「あつれ……………何で千冬さんいんの……………あ、昼這い？」  
“ごしやツ”。

「ハイもうスツキリバツチリ目え覚めましたごめんなさい本当調子

乗ってごめんなさい!!」

ベッドの上で土下座する一夏を見て、千冬の心は呆れで満たされる。そして徐々に呆れが怒りに変わっていく。人があれこれ考えているというのに、一夏のなんと普段どおりの脳天気なことか。

「——《雪片式型》。あれどつかで見た事あったと思っただ。試合の時は余裕なかったから後回しにしてただけだよ」

文句の十や二十でも言っただろうかと口を開きかけたら、突然真面目な顔になった一夏がそう切り出した。

「思い出した。あん時に千冬さんが持ってた刀にそっくりなんだよ。同じ刀か、同系統の兵装だろ」

千冬がIS操縦者としてかなりの実力を持っている事は一夏も当然知っている。だが実際にISを動かしている姿を見たのは数える程しか無い筈だ。

中でも一度、千冬はISを纏った姿を一夏に晒している。恐らく今はその時の事を言っているのだろう。

「いいのかよ、そんなもん俺が使っただ。『織斑一夏』なら確かにあの刀を使うのは正当だろうけどさ。でも今の俺は『俺』なんだぜ？」

沈黙を肯定と受け取ったのか、一夏が言葉を続ける。

やれやれと、千冬は心の中で嘆息した。頭が悪いくせに、こういうところは妙に察しがよくて義理堅い奴なのだ今の一夏は。

「気にしなくていい。お前が私の『弟』なのは、誰もが認めているだろう」

「だからそれはガワの話で——」

「礼みたいなものだ、あれは。お前はまだ私の『弟』だ——その場所を、今日までお前は守ってくれただろう。いいから黙って受け取っておけ」

目の前の誰かは、今日まで『織斑一夏』で在ってくれた。その中の自分を決して蔑ろにしていけないのは生き方を見ればよくわかるが、『織斑一夏』という存在を壊す事も越える事もしていない。『織斑一夏』が戻るための場所は今もちゃんと維持されている。

「……そういう言われ方すると。有り難く受け取るしかねーじゃん



か。俺刀の使い方なんか知んねーから、上手く扱えないかもしれないぜ」

「頑丈さは保証してやる。せいぜい振り回されることだな」  
「うへえ……」

口の端を歪めて笑った千冬、げんなりした様子で呻く一夏。ふと一夏の右手首にあるガントレットに目が行く。

大部分が白くラインが一筋入る程度の黒。そんな二色で構成されたガントレットはIS『白式』の待機状態の姿だ。専用機は一度フィットテイングを終えてしまえば、以降はアクセサリーの形を取って操縦者の身体で待機する。

ただし試合開始直後に明らかかな誤作動が見受けられた白式は、つい先程まで整備室で検査が行われていた。

出た結果は『異常なし』。そうすると白式は所有者である一夏に返却される訳で、気がつけばその役目を任せられていた千冬であった。早口でまくしたてて過ぎ去ったメガネの後輩の姿を思い出す。恐らく千冬が公私を混同しない為に一夏の見舞いを自粛している、そう思われていたのだろう。

そこで、一つの事が浮かぶ。

検査の結果一夏の身体に大きな異常はなく、ただ眠っているだけと診断された。だが、これまでに目を覚ます兆候は無かった筈だ。それが千冬が来た途端に——白式が戻った途端に、あっさりと目を覚ました。

(……………まさか、な)

浮かんだ考えが余りにも馬鹿らしくて首を振る。

確かにISが操縦者の意識に影響を及ぼす事はある。だがそれはあくまで緊急時——特に操縦者に危険が迫った時に限定されている筈だ。常日頃から深いレベルで繋がっている訳ではないし、それにしただってISを離された程度で意識を失う等異常過ぎる。

「考えてみりゃあ、丁度よかったかも shouldn't ぜー、千冬さん。ありや『織斑一夏』が使う分には何の問題も無いわけだしさ」

「どういう事だ？」

一夏の声は普段よりも明るい筈なのに、何故だか千冬の脳裏を嫌な感覚が走り抜けていく。

正座を崩して胡座になって、両腕を頭の後ろで組んだ一夏はにへらと笑う。

「一回、塩と砂糖間違えて甘ったるーい玉子焼き作った事あるでしょ『織斑一夏』のやつ。そんでそれが悔しかったのか、千冬さんが美味いって言うまで毎回玉子焼き作った」

それは、今の一夏が絶対に知らない過去の思い出だった。知る事が出来ないはずの出来事だった。

この時、織斑千冬はどういう顔をしていたのだろう。

どういう顔をすれば良かったのだろう。

ただ息が詰まって、言葉が咄嗟に出てこなかった。

「まさか『一夏』が………戻り、始めている、のか？」

「たぶん。まー俺の感覚での話だけどね。ちらちら脳裏に、俺じゃない方の記憶が出てきてる。時間がどんだけかかんのかは俺にもわからんねーや」

「———そうか」

けたけたけたと、その笑い声が酷く耳障りだった。

そしてそんな素っ気のない返事しか言葉に出来ない自分が酷く苛立つ。もつと言いたい事がある筈なのに。

「だーかーらー。そんな顔しなくていいんだって、普通に素直に喜ぶなよう千冬ちゃん。元から俺が居るのがおかしいんだからさあ。元に戻るってだけじゃんか」

誰のせいだ———そう素直に思えないのは、一体誰のせいだ———コイ、ツは———、お前が、そう素直に思えなくした癖に———

「つまり散々迷惑をかけておいて、そっちの都合でいきなり消えると？」

「それ言われると辛いなあ。まー世話になった分は、返したいと思ってるし。時間ギリギリまで粘るつもりだけだよ」

内面が燃え盛っていようと、外面への出力はあくまで冷淡に。織斑千冬が積んだ戦士としての感覚が、勝手にそうさせる。

「そんな訳でこれから先は、例えじゃなくて本当にぱつと消えるかも——」

「それは許さん」

「……ええー、いやそこは許して下さいよ。その辺どうこう出来るならとつくにしているんだからさあ」

「勝手に消えるのは、私は許さんぞ。もし最後が来たのなら、言っただけから行け」

「か、かつて無いほどの無茶振りが来た……」

「ほう。六年近く迷惑をかけた相手に何の挨拶も無しか。その位の礼儀は、持ち合わせていると思っただけが——私の見込み違いだったか？」

天井を仰いで、唸って、頭をぐしゃぐしゃに掻き乱して、しばらくそんな事を続けていた一夏が息を大きく吐いてから吸い込んだ。

「………わかったよ。約束する、ちゃんとそんな時は言うから。迷惑かけた分、返せなかった分はちゃんと謝るから」

うむ。と千冬は頷いた。

本当は、謝ってほしいのではない。もっと別の言葉が欲しい。もっと別の言葉を言いたい。

けど言ってしまうえば互いの枷になってしまう。その負い目を跳ね除けてしまえる勢いは、年月と共に不要だと切り捨ててしまった。

「じゃあ、はい」

「……何だその指は」

「指切りしましょう。へいかもーん」

——スパアンツ!!

「おーう……視界が揺れる……っ！でも何かの形で示しとかないたさあ。俺馬鹿だから忘れちゃうかもしれない。約束守れないかもしれないな——」

頭をぐらんぐらん揺らしつつもにやにやと笑う一夏に思わず頬が、引き攣った。鏡を見ずとも理解できる。千冬は今さぞ威圧的な表情をしている事だろう。

小指を差し出す一夏の顔からは——ほらほら出来るもんならやつ

てご覧——そんな意思がひしひしと伝わってくる。

頭を張り飛ばしたい欲求を堪えて、怒りに震えながらも千冬は何とか己が腕を動かした。ただ震えの中には別種の感情も混ざっている。

「……………」

「何だ」

「まさか本当にやるとは思わんかっいえ何でもないです何でもありません!!」

このまま小指を引き千切ってやろうかと思った。

「ゆーびーきりーげんまーん……ほら千冬さんも言わないと」

「……………」ゆびきり、げんまん」

「声が小さいーい！ 喋るときははつきり相手に聞こえるようになって教えるのは誰でしたっけかー!?!」

「——ゆーびきりーげんまーん」

「ひい怖、低っ、声低っ!?!」

“ ゆーびきりーつた ”



「……………」約束、守れるかな。守りたいな」

意識は戻ったが今日はこのまま医務室に泊まる事になった。寮に戻ったらまた騒ぎになりそうなので、この配慮は正直有難い。

夜闇の降りた部屋の中、上げた右手の先にはガントレット——俺のIS、白式がある。大多数の白の中に少量の黒を混じらせた機体だ。白という正統ほんものの存在に黒が不純物にせもののように混じっている。そして不可視の確認できない“あやふや”な足場に立つ。

フィッティングは搭乗者の特性に合わせて機体を変化させると知っていたが、よくもまあここまで俺の状態を正確に反映させたものである。

——力を得た。

あいつの言葉が本気だったかどうかはわからない。どれだけ時間

がかかるとかもわからない。もしかしたら世界はそんなに変わらないのかもしれない。そもそも俺の時間が足りるのかもわからない。

でも俺には向かうべき目標があつて、そして走りたいという欲求があつた。だから駆け抜けよう。最後まで、俺が『俺』で在り続けるために。

「なあ白式、悪いが滅茶苦茶アテにするぞ。機能の総てで俺に付き合つてくれ」

【はい】

「ようし良い返事だ……………あれっ」

いや一生懸命だったんだよ試合の時は。本当余計な事考えてる暇無かつたんだよ。

だから本当今気付いたつていうか、今はじめて意識したんだよ本当に。

誰かとナチュラルに、会話してる事に。

「えーつと。今更だけど、どちらさん？」

【《白式》という機体に搭載された人工知能です】

無機質な固い声。機械じみたという言葉がとても似合いそうな、どこまでも平らで淡々とした声。抑揚の欠片も、感情の欠片も感じられない。音声。

【私は貴方の全てを肯定するために搭載されています】

▼▼▼  
——空が青い。

そんな事はこの世界に生まれ落ちたその日から知っているし、何故そう見えるのかも幻想の欠片も入り込めない長々とした真実を語ることも出来る。

ただ空が青いという、当たり前である筈のその事実が心に染み渡った。消えた天井から覗く青空を覗いているだけで涙が溢れて止まらなかった。

何故かといえはこの青空を覗いていることは、観れるということとは、それ即ちわたしが今もこの生命を存続させている証であるからに他ならない。

「ビーよ」

室内の中で天井が落ちればどうなるか。内部に存在するその総てが下敷きになる。物が上から下へ落ちるなんて、それはわたしでなくても問題ですら無い。その位に当たり前の事象。

雨露から内部のモノを守る役目を放棄して、内部を侵す瓦礫と化した“それ”は、眼下に在ったわたしを挽肉にするはずだった。

崩落の具合、瓦礫の大きさ、脱出経路までの距離——といった要素の総てがその結果<sup>挽肉</sup>を示していた。他の有象無象は知らないが、わたしには刹那の間もあればそれを導きだすことができた。

けれどもわたしは潰れなかった。

真ん中の辺りでぱっくり二つに断たれたそれは、中心に在ったわたしを左右に避けて降った。世のあらゆるものを正しく紐解いてきたわたしの計算は——それによって導き出された絶対であるはずの<sup>運命</sup>結果は、今ここに覆された。

「生きてるってのは、それだけで嬉しいんだからさ」

一体どうすればそこまで負荷をかける事が出来たのか。わたし同様瓦礫の直撃を避けた筈なのに、眼前に在る身体は全身余す所無く壊

れている。走り抜けた衝撃が吹き飛ばしたのか、衣服はあちこちが内側から弾ける様に破れていて、またそこから決して少くない量の血液が流れ落ちていた。

中でも両腕の壊れ方は群を抜いていた。両腕ともあらゆる方向にねじれ曲がったからか、白い骨が露出してしまっている。血液は流れ落ちるといよりも噴き出しているというべきだ。特に鉄骨をガムテープでぐるぐる巻きに縛り付けた右腕は、その重みで今にも半ばから千切れ落ちそうだ。

医学の知識は特に興味も無かったので最低限度しか齧っていないが、その両腕がもう一生使いものにならない事は明らかだった。

腕は露出しているから直ぐに判断できただけで、目を向ければ衣服で隠れたシルエットの各所が人体として異常な線を描いている。ただ見えないだけで、全身がもう直せないほどに壊れているのかもしれない。

「——人生つてのも、そう捨てたもんじゃねーだろ？」

物理的な意味で一生を費やして、わたしに降りる筈だった運命を文字通り左右に切り分けたそいつは、ぼろ切れ同然の身体を引き摺りながら笑ってみせた。

子供の頃と変わらない悪ガキの如き笑顔。

これまで忌々しくしか感じ無かった笑顔。

けれども今は、その笑顔がどうしようもなく輝いて見えた。

向けられた笑顔と対照的に、わたしは言葉も無く涙を流し続ける。

心の奥底に点いて、全身を焦がすように駆け巡るその感情がどういふものな、その時のわたしには未だ理解できなかった。

▽▽▽

清潔感のある室内に、突如変化が訪れた。ひよこつ、なんて擬音が似合いそうな様子で、物陰から誰かが顔を出す。

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

不審者である。

灯りの落ちた深夜の病室に、音もなくその身を滑り込ませたその女性 は軽やかなステップで室内にあるベッドへと歩み寄る。

一転しておっかなびつくりおそるおそるといった様子で、女性は指先を伸ばす。ベッドの上で眠る少年は傍らに不審者が居る事等露知らず穏やかな寝息を立てている。

少年の頬をつんつんと壊れ物を扱うように突っつきながら、女性——篠ノ之束はその顔をにへらあくどだらしなく緩ませた。一方つかれた少年は何の反応も返さない。数日前に運び込まれて以来、少年はこんな風に意識不明のまま眠り続けていた。

「はっ!?!」

頬をつついては笑顔になるという行動を繰り返し、一時間が過ぎた所で束は驚愕の声を上げた。何という魔性……! と眩きながら後退る束。変質者しかし時間带的に彼女の挙動に指摘を入れる者は存在しない。

「さあさあ出番だよ。ようやくほんとうの出番だよ」

彼女が何処からとも無く取り出したのは、球形立体のクリスタルが一つ。その挙動と同時に無数の機材が光の粒子を散らして出現。病室はすっかり無数の機材で埋め尽くされ、足の踏み場どころか床が露出している部分すら無かった。

とん、と軽い音を立ててクリスタルがベッドの上——眠る少年の胸にそつと置かれた。瞬間クリスタルがぼうと光を宿し、周囲の機材が呼応するかのよう<sup>に</sup>に鳴動を開始する。

「ゼロ・フェイェス登録搭乗者との物理的な接続を確認しました。最適化処理、フィッティング初期段階を開始します」

その声ではない音声を切欠とし、機材は本格的にその機能を開始した。無数のケーブルが這うように伸びて中心にある肉体に群がっていく。あるタイプは張り付いて少年と機材を接続させる。またあるタイプは皮を破って肉体を潜り少年と機材を接続させる。

「ふんふん——ふんふん。大体思った通りかなあ?」

虚空に現れた無数のウィンドウが膨大な情報を表示し、そして高速で更新していく。それらを総てきっちり認識しながら、指先は出現した空中投影型のキーボードの上を滑っている。

「はい、赤上げてー、白上げてー、白下げないで赤下げないー」



【赤と白の定義が設定されていません】

「ありやりや、東さんうつかり。赤は右手で白は左手にしよう。気を取り直してれつつとらい！ 赤上げてー、白上げてー、白下げないで赤下げてー」

大雑把に言うとなんかの身体は脳から送られた信号に従ってその身体を稼働させる。極端な話だが、信号があれば肉体は動く。その発信源が脳でなくとも。

東の命じた『赤上げて、白上げて、白下げないで、赤下げて』とはつまり『右腕を上げろ、左腕を上げろ、左腕を下げない、右腕を下げて』——その通りに、肉体を可動させろという事である。

「——だろうと思ったよどちくしようめ」

左足が動いて、首が傾いて、右手が変な方向に行つて、胴が捻れた。『命令』である信号に対し正常な人間ではあり得ない『反応』をした少年を見て、東は満面の笑みで言葉を吐き捨てる。

【ラインの構築が終了しました】

「うーんよくできました。さすが東さんの愛し子ちゃん。じゃあ後とはにかく情報を逐一送って送って送ってね！ それと学習も忘れちゃ駄目だよ？」

【はい】

ずるずるとケーブルが機材に巻き戻されていき、一つ、また一つと機材が光と共に姿を消していく。そしてクリスタルもまた姿を消していた。東が回収したのか——それとも何処かへ身を隠したのかは、にこにここと笑う東のみ知る事だ。機械で埋まっていた部屋が、元の清潔感を感じさせる病室に戻るまで一分もかからなかった。

「うーんうーんうーん。敵は文字ばけ、世界規模〜」

エンターキーの一叩きを合図として、無数に出現していた空中投影型キーボードも総て姿を消した。完全に元の病室に戻った部屋の中で、東は再び眠る少年の顔を覗き込んだ。

そこに先程までの安らかな寝顔は無く、少年は苦しそうに呻いている。額には無数の汗が浮かんで流れ落ち、呼吸も見るからに荒い。

第三者がこの場に居れば、悪夢を見ていると思ひ揺り起こすか、も

しくは体調を崩していると判断して人を呼ぶだろう。

しかし束はどちらもしなかつた。起こしてもまだ起きないし、普通の医者ではどうしようもない。それを知っている故に。では何をしたかといえ、とりやーと間の抜けた掛け声と共にベッドにダイブした。そうして自分よりいくらか小さい少年の身体を抱き枕のように抱え込む。

何のためにそうしたかといえ、束がそうしたかったから。

それが総て、それオンリー。

「追い付いたよ」

深夜の病室には他に居るのは束と少年ふたりだけ。だから耳元で囁いたその言葉は少年以外には誰にも届かない。元々他の誰かに届ける気もない。

「――今度は、絶対逃がさないからね。ふふふ、うふふふふ」



伸ばした指先が小刻みにぶるぶると震えている。ああ、どうやらわたしはこんなにも勇気というものを持ち合わせていなかったようだ。これでは今後に響く事は間違いない。ここも改善すべき点だろうか。

特に何の変哲も無い民家のインターホンを一押しする。ただそれだけのために、わたしは一時間近く時間を要した。

ピンポン、と音が鳴る。

胸の奥にある心臓ポンプがいつもより活発に活動している。まだ肌寒い時期なのに酷く暑い。喉が乾いて仕方がなかった。このままでは発声に支障が出かねないので、唾液を飲み込んだ。

あの日から、持てる総てを費やして罪滅しのために生きてきた。本当はもつと速くここに来れる筈だったのに、世の中というのはわたしに思っていたよりも面倒だった。というか馬鹿が多過ぎる。お陰で無駄な寄り道を何度もしなければいけなかった。

しかし野望は成就された。

そして、今日それをわたしは届けに来た。この想いと共に。

——はーい、と屋内から声。

声が望んでいた相手でない事に、嬉しさ半分悲しさ半分。直ぐにでも——ドアをぶち破つてでも会いたい、けれども顔を合わせる事が怖い。拒絶されるという可能性だってある。そうなたらどうなってしまうかわからない。

しかし、既に賽は投げられた。

パタパタと足音の後に、ガチャリとドアが開いた。顔を覗かせたのは長い黒髪を適当に後ろ手束ねている少女。名前は『■■■<sup>まどか</sup>円』、あの人の妹だ。わたしを見て驚いた様な顔になった少女に無難な挨拶を交わし、直ぐに本題を切り出した。

「そんな人、我が家にはおりませんが」

眼前の一個体が何を言っているのか、理解できなかつた。そしてわたしにしては珍しく、心底焦つた。心のままに眼前の相手にまくし立てる。わたしはこんなに大きな声が出せたのだと、その日初めて知つたくらいだ。

兄の事を覚えていないなんて、そんな事ありえない。キャラがとびきり濃い訳ではなかつたが、それでも関わつた相手の心に思うところを残していくような人だつた。

「いや。私は一人娘です。兄どころか姉妹も居ません」

きつとこれは何か双方の意思の行き違いだ。そうに違いない。今の家に不在というだけで、住処を移しているのかもしれない。しかし現実にはわたしの希望を容赦なく叩き壊す。

『……………え？』

掠れた声が、口から漏れた。膝から崩れ落ちたわたしに、少女が心配したのか駆け寄ってくる。声をかけられ軽く揺すぶられながらわたしは首を上に向ける。

見上げた空は、あの日の様に綺麗な青。

でもあの時は確かに居た、あの人は居ない。

総てが終わっていたその瞬間が、わたしの旅路の始まりだった。

▽▽▽

『ツインテール』

髪型の一種で、長い頭髪を頭部の中央もしくは高めの位置で左右それぞれ結び、髪を垂らしたものがそれである。

もしくはサイズに似合わぬ凶暴さを秘めた生物に対する呼称。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「——あれがIS学園ね」

時刻は夕暮れ時。街は沈む太陽によって茜色に染め上げられている。そんな茜色の世界の中、街の端っこにあるビルの屋上に一人の少女が居た。

艶やかな黒髪を頭の両側で結び、いわゆるツインテールと認識される髪型。瞳はツリ目だが、キツイという程ではない。どこか猫科を連想させる瞳は顔立ちと相まって、可愛らしさを演出する。そんな顔を少女は不敵な笑みに歪める。

背丈は同年代の女子よりも低く、小柄と呼んで差支えはない。しかしその背筋はぴんと伸び、二本の足でコンクリをしっかりと踏み締めて立つ姿は実に堂々としていた。

ビルの屋上という事もあってか、少女の周りには少し強めの風が吹いている。故に彼女の両側で結ばれた髪が風に吹かれてゆらゆらと揺れ——そして、首に巻かれた布もいい感じで風に流れて揺れていた。

今は4月である。春である。暖かい季節である。決してマフラー防寒具が必要な時期ではない。今日が特別冷え込んでいという訳でもないし、きつと日が暮れて夜になっても過ごしやすい気温だろう。しかし彼女の首には長い布が巻かれ、風を受けてたなびいていた。

いい感じに。

「待つてなさいよ。もう昔の私じゃなぶふ」

このビルの屋上からはIS学園の全容がちょうど見渡せる。建物群の中央にずびしと指を突きつけて、少女は叩きつけるように宣誓――出来なかった。

風向きが突然変わったせいで、首元から流れるマフラーが少女の顔全部にべたんと張り付いたのである。

突如ブラックアウトした視界と苦しくなった呼吸にバタバタとその手を振り回し、少女は悶える。それでも何とか顔から布を引き剥がすと、もう一度少女はIS学園に向き直った。

「もふふ」

風。それは何者にも縛られぬモノである。

人生に編集点を入れよう

言い直そうとした少女の思惑等、きつと風は知った事ではないのだ。少女は再度その両腕をバタバタと振り回しながら悶える事になった。

「――鬱陶しいっ!!」

ズバアッ! と聞こえそうなほどの勢いで首から長い布を一瞬で巻き取ると、少女は両目を見開いて叫ぶ。両側で結ばれた髪トリボンが逆立って見えるかのように錯覚出来る激昂っぷりであった。

「風向きとは予想外の敵だったわ……………」

ぶつぶつと呟きながら少女は傍らのボストンバッグにマフラーを仕舞い込むと、そのまま抱え上げて肩に提げる。そのボストンバッグは見た目から相応の重量を感じさせるサイズと膨らみ加減だったが、少女はさして苦勞している様子はない。

「――ともかく待つてなさいよ。直ぐに思い知らせてやるんだから」  
一際強く吹いた風に結んだ髪を揺らしながら、少女はその場を後にした。

▽▼▽

「よう。こんなトコで何してんだ?」

呼びかける。すると屋上の更に端に居たそいつはゆつくりとこち

らに振り向いた。夜風に吹かれて揺れる髪を押さえる、そんな何気ない動作一つが実に画になっていた。

「……………織斑、一夏」

視線が合った途端に睨みつけられた。セシリア・オルコットの宝石みたいな蒼い瞳に灯った強い意思の光が俺に思いつきり突き刺さる。オルコットに歩み寄り——って何か明らかに警戒されてる。なので足を止めた。夜の学生寮の屋上でこうしてオルコットと出会ったのは偶然でも何でもない。そもそも屋上なんて今日初めて入った。というか入れることすら知らなかった。

「何で辞退したんだよ、クラス代表」

本題に入る——俺の言葉にオルコットはぶいと顔を明後日の方向に背ける。

寮に帰ったら、クラスの娘らに『クラス代表決定おめでとう』といきなり祝われた。すっつかり忘れていたが、そういえば先日の『決闘』は俺とオルコットのどちらがクラス代表になるかを決める事も兼ねていたのだ。

——それは、おかしいだろう。

『何で負けたのに俺が代表なの』と尋ねてみれば、『セシリアさんが辞退したから』という答えが返ってきた。

「納得いかねえよ。何で」負け」俺がクラス代表なんだ。お前が進む理由はあっても、退く理由は欠片もねえだろうに」

クラス代表には俺よりオルコットの方が相応しい。その俺の考えは最初から変わっていない。むしろ実際戦ってその実力を身を持って知った今は、前より強くそう思っている。

だから、どうしても言わずにはいられなかった。

何故だと、直に問いかけずにいられなかった。

「——わたくしは認めませんわ、あんな中途半端な決着は！」

怒号。明後日の方向に向いていた視線は身体ごとこちらに向き直る。その瞳は見開かれて、その眉根は釣り上げられている。

「セシリア・オルコットにとってあの勝利に何の意味もありませんわ！ 言ったでしょう、貴方の全力を叩き潰すと！ なのにあんな、あ

んな中途半端なッ！ あのような決着で得られる座などこちらから願い下げですわ!!」

ゴツ、と鈍く低い音がした。

屋上の端にある鉄柵にオルコットが手を叩きつけたために発した音。

「強くなりなさい織斑一夏！ 誰もが認めるほどに強くなった織斑一夏を、今度こそ完膚なきまでに叩き潰す!! そうすれば、そうして初めて！ わたくしは誰の目にも明らか『勝利』を得られる!!」

あの中途半端な決着は、どうやら目の前の彼女の心に火を点けたらしい。激情の塗り込められたその言葉は、びりびりと肌に刺さるような圧力を感じさせる。

「——それに、誰も『譲る』と言った覚えはありませんわよ。貸しておくだけです。あなたを今度こそ撃ち抜いた暁には返していただきますので、そのつもりで」

腰に手を当て胸を張り、不敵にニヤリと笑う彼女は勝利に拘っている。

直ぐに再戦しないのはきつと俺から逃げ道を奪うため。俺を完全に負かし、完膚なきまでの勝利を掴み取るため。

何故ならば。現状で俺がセシリアに負けても、周囲はそれを当たり前だと思ってしまうから。俺が言い訳してもしなくても、“セシリア・オルコットは代表候補性だから”、“織斑一夏は素人だから”。皆の心中にはそういったものが付き纏う。

だから、彼女は待つと言ったのだろう。俺が皆に認められるまで。代表の座を譲ったのも、俺が経験を積めるからか。そうして『強く』なった織斑一夏が負けた時、そこに残るのは完全な敗北だ。もう誰にも何にも言い訳できない、真実の敗北だ。

——そして得られる勝利が欲しいと、その勝利しか欲しくないと、彼女（セシリア）は言った。

さあて。

正直滅茶苦茶燃えてきた。ここまで言われて、ここまで魅せ付けられて、このまま黙っていられる訳がない。それに、あの決着に納得が



いつてないのはお前だけじゃないんだぜ、セシリア・オルコット。  
「いいぜ、白黒つけよう。誰にも何にも文句が出せないくらいに、明確な決着を付けようじゃねーか。首を洗って待ってやがれ、今度こそぶった斬ってやる………!!」

両手の先から身体中に走り抜けたのは、あの時”振り抜けなかった”事に対する後悔。あの日あの瞬間、確かに届いていた筈の一撃を有耶無耶にしてしまった時から、今までずっと感じている。

カツ、と靴底がコンクリートを叩く音。オルコットがこちらに向かって歩き出した。こちらも歩を進める。

俺の右手で白い光が、オルコットの右手で蒼い光。それぞれ互いに一瞬だけ舞い散った。そうして出武装及び腕部分展開現した互いの得物——一振りの刀と一丁のライフルが、すれ違いざまにぶつかり合って金属質な騒音を鳴らす。

再度光が散って、さっきまでそこに在った互いの得物は姿を消す。それ以上何も言う事は無いのか、オルコットは生身に戻った右手でドアを開けて屋上を後にした。

俺はというと、そのまま足を進めて端に——さっきまでオルコットが居た位置まで歩を進める。見上げるとまああるい月が浮かんでいた。「これも”約束”か。何で時間制限があるってわかった途端にこう、破れないのが、破りたくないのが増えていくのかねえ」

今日は風が強い、大して長くない俺の髪もばさばさと揺れて少し鬱陶しい。

俺の残り時間が後どれだけ残っているかは知らないが、その長さが俺の都合など知ったことではないのは間違いないだろう。

「負け逃げする気はねえぞ」

——そうだ。今度こそ、”振り抜く”。

挙げた右手の先で拳を作って満月に向けた。そこには式型の柄の感触が残っている。まだ数回しか握っていないし、生身で握ったことはまだ一度も無い刀の柄。しかしその感触は、なぜだか眼を閉じても形がはつきりと思い出せた。

「ん？」

何気なく視線を下に向けた瞬間に、視界に入るものがあつた。  
目を凝らして、それが何なのかを確かめる。

「んー……？」

▽▽▽

「……………まずい。超迷つた」

IS学園の敷地内に佇むツインテールの少女が一人。その手の中のくしゃくしゃになつた紙には、少女の目的地——『本校舎一階総合受付事務所』という文字が記されている。しかし歩いて走つてもその建物が一向に見えてこない。

「つたく、地図くらい書いとけてーのよ」

既にくしゃくしゃの紙をさらに力任せにぐしゃぐしゃと握りつぶし、それをポケットに荒々しく突っ込んで少女は再び歩き出す。

（しっかし見事に誰も居ないわねー、道も聞けやしないわ。＼寄り道＼したせいで到着が遅れたせいとはいえ）

言葉通りに右も左もわからないから、生徒なり職員なりに道を尋ねたい。でもゲートを通つた以降見事に誰にも出くわさない。

こんな事ならゲートの警備員に道を聞いておけばよかつたと思う。迷いまくつて元来た道もわからぬ今となつては後の祭りだけでも。

（—————！）

突然少女の黒髪を両側でたばねるリボンが、少女の驚きに合わせてぴよこんと跳ねた。とはいえそれはただのリボン、感情に追従する機能なんぞありはしない。ただ少女が少し跳ねたから、それにつられて動いただけ。ついでに風も一役買っている。

少女が跳ねたのは、感情が大きく揺れ動いたから。原因はその視線の先——そこには男子学生が一人。たまたま通りがかつたと思しきその男子学生は、少女に気付かないのかそのまま向こうへと歩いて行く。

IS学園において男子学生は一人しか居ない。だから、それが誰なのかを判別するのはとても容易い。でもきつと、そんな理由がなく

たつて、あれが誰なのかなんて一目見れば少女にはちゃんと判った。  
「い、——……………」

思わず名前を呼びそうになって、しかし少女は自分の口を両手で塞いだ。口元を押さえた少女の顔に笑みが咲く。楽しそうにうきうきと、そんな様子を周囲にこれでもかと振り撒きながら、少女は音もなく少年の後を追った。

要は、いきなり声をかけて驚かせてやろうと思ったのである。足音がせぬように注意しながら少女はその背中を追う。

「……………」

しかし、角を曲がった直後に突如その背中を見失った。怪訝そうに首をかしげた少女は直ぐに気付く。その先が行き止まり——袋小路であることに。

「しまっ——」

『かかったな！ 上だ!!』

声。

反射的に少女は首を上に乗ね上げる。見事にまあるい満月と、そこから発せられている柔らかい光が視界に飛び込んでくる。しかし視界に捉えたのは、それだけ。

見えるのは、空に浮かぶ満月だけ。そこでその事実をようやく認識する。上を向いたのは『上』という単語に反応してしまったため。しかし、その言葉が聞こえてきたのは『上』ではなかった。声が聞こえてきたのは——

「と見せかけて横だ——ッ!!」

「ぎゃわあああああああ?」

横合いからどーんと突っ込んできた何かは衝突した。ぶつかってきた“やつ”は少女の身体を抱え上げると、そのままぐるぐるとその場で回し始める。してやったりなその満面の笑みがひどく少女の癪に障った。

とはいえ、少女の方が驚かすのに成功していたら、眼前のそれと全く同じ笑顔をして勝ち誇る心算だったのだが。

「何だよまさかと思っただらやっぱり鈴じゃねーかよ何やってんだよこ

んなとこでていうか久しぶりだなあオイ元気だったか元気だよな元  
気になーれあはははは!!」

「あ、——ッ! 鬱陶しいわね、離れなさいよ!!」

両手をバタバタと振りつつも、本気で振りほどかないのは少女も再  
会が嬉しいから。それと、相手がこうも喜んでくれているというその  
事実がまた嬉しいから。意思に反してにやけそうになる顔面を必死  
に制御しつつ、少女は形だけの抵抗を続ける。

「しっかしお前全然変わってねーな!! ぜんっぜんのびてねーしふく  
らんでねー!! 前見たときとなんも変わってねー!!」

——びしっ

世界でただ一人、少女にのみ聞こえるその音。

それは、ファン・リンイン鳳鈴音という名の少女の心が軋んだ音。

▽▽▽

「全く、一夏は何処に行ったのだ……!」

肩をいからせ、箒はずんずんと歩を進める。今日は一夏が部屋に  
帰ってくるというので、色々と（主に精神的な）準備をして待ってい  
た。しかし一夏は何時まで経っても帰ってこない。こうなったら迎  
え撃ってやると出陣すれば、一夏は帰ってくるなり人を探して歩き  
回っていたという。

探している相手が男子なり教職員であれば箒も特には気にすまい。  
しかしそれが女子生徒の一人と聞いては話は別だ。更に探している  
相手は——イギリスの代表候補生のセシリア・オルコットだという。  
性格はともかく、見た目は麗しい美少女だ。性格はともかく。

意中の男性が自分以外の、それも見た目のよい少女を探し回ってい  
る。そんな事を聞いて、箒が冷静でいられる筈も無い。一夏の事を親  
切に箒に教えてくれたクラスメイトを殺気で怯えさせつつ、箒は一夏  
の搜索を開始した。

「——性根を、叩き直してやる必要があるかもしれんな」

周囲に無駄に威圧のオーラを迸らせながら、箒は進む。さつきすれ  
違ったクラスメイトから外に向かう一夏の目撃証言が提供されたの  
で、現在は外を探している。

「むっ！」

箒の聴覚が話し声を捉える。即座にどちらから聞こえてきたのかを探り、その方向へと向かう。距離が近付いているせいか、話し声が段々大きくなってくる。片方は間違いない、一夏の声。そしてもう片方は誰かは分からないが、女子の声である事に間違いは無いだろう。程なくして、声の直ぐ近くまで辿り着く。ともかくまずは様子を伺おうと、箒は物陰からそっと顔を出した。

「あいだだだだだだだだ！ ごめんなさいごめんなさい調子乗ってたんです本当すいません嬉しくてテンション上がってたんです——  
——ッ!!!」

「ごめん！ で！ 済んだらっ！ 背骨は折れ曲がらねえの！ よオ——  
——!!」

「ア——!？」

そこには。箒の眼前には——小柄な少女に今まさに背骨を反対方向に折り曲げられかけている、織斑<sup>想</sup>一夏<sup>人</sup>の姿があった。

「……………なんだ、これは」

目の前に広がる光景を、その事態を、理解できずに呆然とした箒の眩きに、答えるものは誰も居ない。



『人は一人では生きていけない』

昔、そう言われた事がある。けれども当時の俺はその言葉を一ミリたりとも信じなかった。何故ならば。その言葉を吐いた俺のじいちゃん、若い頃は自分がいかに優秀な“ヒモ”であつたかを孫に自慢気に語る輩だつたからである。ばあちゃんと出会つた後は大分“物理的”に矯正されたようだが、それでもそんな過去をすげー胸張つて話す辺り相当駄目だと思う。ていうか駄目だつた。

正直あの人は俺の人生で出会つた中で最高の反面教師だと思う。いやまあ色々技と学んだというか盗んだモノも多いので、感謝はしているのだが。

なあ、じーちゃん。

今なら理解できるわ。本当に、じいちゃんの言つた通りだつた。

一人ぼっちつて、あんなにも辛いんだな。

誰も『俺』を知らない。

誰も『俺』を認めてくれない。

それどころか、誰もが『俺』に俺以外の他人を強いる。

でも非があるのは『俺』の方だから、それを跳ね除ける事も出来ない。  
い。

情けない話だが——世界の何もかもが苦痛同然だつた。

でも俺の足場は、存在の存続の証明は、在るのか無いのかすらも判別できない。だから奇跡的に続いている今を無駄にしないようにと、後悔しないよう生きると決めた。

そうして決めてしまつたら、やり遂げようとしてしまう。出来る出来ないを考えられる性質だつたら、もうちよつと楽に生きられたよーな気がせんでもない。少なくとも心が軋む感じの苦痛のいくらかは感じずに済んだらう。

声を掛けたのは本当に偶然だ。

見過ごせないものが目に止まったら首を突っ込む、そう決めていた。とはいえ世界は広いから、目に入った事は完全な偶然だった。深入りする気も、させる気も無かったんだ。適当に悪意の矛先を散らして、連れ出して、駆けずり回って、溶けこませて。もう大丈夫だろうと思えたら、手を引くつもりだった。

“名前を呼ばれた”。

君は本物の『織斑一夏』を知らなかった。

だから君が俺を呼ぶ時、その言葉は間違いなく『俺』に向いていた。名前が偽りでも、それは間違いなく俺を示して求める言葉だった。

名前を呼んでくれる、ただそれだけの事が。

笑顔と併せた、その言葉が。

それが、どれだけ『俺』にとって救いだったか。



——夢か。

篠ノ之箒がベッドから起き上がって発した第一声がそれであった。それにしても変な夢であった。箒の想い人である織斑一夏が道のど真ん中で小柄な少女に背骨を力一杯反対方向に折り曲げられかけていたと思えば、そのまま起き上がって肩車に移行して談笑しながら何処かへ爆走していく。実に面妖な夢である。そうだ夢だ。こんな夢であるに決まっている。夢以外の何だというのだ。

しかし朝食の場、一夏の隣にはツインテール頭の小柄な少女が。



「……………夢を、信じていたかった」

何か箒が突然虚空を見つめて呟き出した。何だこれ怖い。

今度は突然フフフ……とか笑い出した。何だこれ凄い怖い。

「相変わらず朝から容赦なく食うわねー……」

「成長期だからな！」

「それで済ませるには量が多すぎるってのよ。あんた常に最低二人分は食べてない？」

箒の様子にこっさり怯えていたら、反対方向から声がかかる。そこには同年代女子に比べ、のびてないふくらんでない小柄なボディとツインテールのヘッドを持つ少女が一人。

名前を鳳鈴音（ファン・リンイン）。

響きでわかるがこいつは日本人ではなく中国人。チャイニーズ通称愛称は『鈴（りん）』。奇妙な『今』が始まって少し経ってから知り合い、以降何だかんだで今日まで友達な娘——それが鈴だ。

もし俺が真つ当に『織斑一夏』だったのなら、鈴とは『幼馴染』である。いや鈴側からすれば俺も『幼馴染』なのだろうが、俺としては『幼い』と言える期間はとうの昔に過ぎ去っている。なので俺とちや普通の『馴染み』という感覚の方が強い。

ちなみに鈴は中学の三学年が始まる辺りで突然引越し——自国である中国に帰国——してしまったので、大体一年ぶりの再会だったりする。

一年。

この期間が人によって長いか短いかは意見が別れるところだが、再会がこんなにも嬉しい辺り俺は鈴の居ない一年を思いの外長く感じていたらしい。食が進むのもテンションがやたら上がってるからである。いや食事量が多いのは『今』の俺の仕様でもあるが。

「やはり伸びるためには食事量なのかしらね……！」

「信じて頑張れば、きっとなんとかなるってー」

「私の目見て今の言葉もう一回言ってみなさいよ」

「わーいきょうもごはんがおいしいなー」

それにしてもこいつ本当全然変わってねー。

昨日は見た目に対する感想だが、こうやって話してみると改めて思う。まあ見た目も本当にそのまんまなんだが。身長もその他“色々”も見事に一年前と変化が無い。

いや、一年程度で劇的に変わったら怖いか。しかし身長は伸びて欲



しいと思うが——個人的には他のとうかある部分は成長しない方が嬉しいです。そこだけはそのままの君でいて。その方がきつといい絶対いい。

「——情け無用！」

「ピンポイントで俺の好物を!？」

可能な限り大盛りにした俺の朝飯から、鈴は的確に俺の好物を奪い去っていく。付き合いの年月が長いせいか俺の好みを理解してやるのだ。

「うわーなんて事をするんだー。こうなるだろうと思つて激辛にしておいたベーコンを的確に奪い去っていくなんてー」

「ごフウツ!？」

理解が深いのが、お前だけだと思ふなよ。

味覚的な意味の爆発の直撃を食らい、鈴は目を白黒させながら口を押さえてもがき苦しむ。気のせいか頭の両側のリボンも力なく垂れているように見える。とりあえず水の入ったコップを押しやっておいた。

「いちかー、ちよつと口開けてー?」

数十秒程経って復活した鈴が猫撫で声と花咲くような笑顔でそう言った。

手に、フタを取り去った醤油の瓶を持ちながら。

「直!?! せめて何かに仕込むとかいう発想をしろよ!!」

「あ、け、てっ」

流しこむ気だ! こいつ流しこむ気だよ!!

「いいからさっさと開けなさいよ! あんたの口の中を淡口うすくちで染め上げてあげるから!!」

「それ絶対淡口で済まねーだろ濃口を超えた何かになるだろ!」

「大丈夫よ。淡口の方が濃口より塩分濃度高い別物らしいから」

「余計駄目じゃねーか!？」

血走った目で醤油の瓶を俺の口へと突き出す鈴。だが純粋な腕力は俺の方が強——あれ何かこいつ滅茶苦茶力強くなってる!?

「——いい加減、に、したら、どうだ……?」

大きくはない。しかし何処か凄みを感じさせるその声に、俺も鈴も思わず動きを止める。ブツ切りの発音がまた怖い。

恐る恐る振り返——わー羅刹。进り、もはや物質化して視認できそうな勢いの殺気を放つ篠ノ之箒がそこに居た。

「ご、ごめんなさい……」

醜い争いをしていた事も忘れ、さっきまで押し合っていた手と手を取り合いながら無条件降伏の意思を提示する俺と鈴。謝った筈なのに、殺気が増してるように感じるのはきつと俺の気のせいだよね。気のせいであつてくれ。

箒が礼儀作法に厳しい人間であることをすっかり失念していた。どうにも鈴と居ると食事中——に限らず、隙あらば騒いでしまう。

「二夏」

羅刹をどうなだめたものかと思考をフル回転させていると、横からひそひそ声で呼びかけられる。何事かと耳を鈴の口元に寄せ——また増したよ殺気。

「気になつてただけけど、そつちのポニテの人あんたの知り合い？」

「……まー、な」

少し考えてからその質問を肯定する。箒とは知り合つて一週間程過ぎたのだから、もう『知り合い』と言つても良いだろう。

鈴は俺と箒を交互に見やると、小首を傾げて一言。

「もしかして彼女？」

人は物を喉に詰まらせた時、声で訴えることは叶わない。だって気管塞がっているから。そして気管が塞がるという事は、すなわち呼吸を阻害する事である。そうなつたら大変だ。だって呼吸というのは、人間の生命維持において重要な行為の一つであるから。

何が言いたいかという焼き魚を喉に詰まらせた箒がやばい。

▽▼▽

「やあ織斑くん、おはよう」

「おはよー」

朝の教室。隣の席の娘と挨拶を交わしながら席に着いた。席が近いせいか、この娘とは割とよく話すようになった気がする。

「聞いたかな、二組に来るっていう転校生の噂」

「ああ、それなら聞くまでも無くもう会ってる」

「おや手が早い」

「凄まじく誤解を招く言い方はやめてくださいませんか。単に元から知り合いつただけだよ」

転校生とは間違いなく鈴の事だろ——って、あいつ二組なのか。同じクラスが良かったなあ……うう、上がりっぱだったテンションがちよつと下がった。

しっかし学校始まって直ぐ転入してくるのなら最初から入学しとけよと思わんでもない。いや向こうにも事情があるんだろーが。それにしたってこつちに戻ってくるんなら連絡の一つで寄越してくればいいものを。

「へえ。中国の代表候補生と知り合いだったんだ」

「え、ちよつ、あいつ代表候補生なの!？」

「その通りよ!!」

まさかの当の本人から肯定の言葉が飛んできた。視線の先には食事の後いつの間にか姿を消していた筈の鈴が、俺を見下ろしながらふんぞり返っている。

“見下ろし”ながら。

何故教卓の上に立っているんだこいつ。

……でも上履きをちゃんと脱いでいる辺り俺の知る鈴である。

「あーっはっはっは! 出会い頭に驚かせるのは失敗したけども、こつちは目論見通り運んだわね! その驚くマヌケ顔こそが見たかったのよ!!」

ずびしと俺に指を突きつけた鈴は凄い嬉しそうな顔で言い放つ。してやったりなその表情がひどく癩に障る事この上ない。ちくしようめ、何か凄い悔しい。

「——貴女も代表候補生だそうですわね」

出た! 一組のプライド代表セシリア・オルコット!! カツカツと足音を鳴らしながら前へと歩み寄ると、流れるように腰に手を当ててふんぞり返る例のポーズ。

「わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

「あなたも」って事は、あんたも……？」

鈴が教卓からオルコットの眼前に降り立ちながら問いかける。どうでもいいけどこの二人、腕組みと腰に手を当てているという違いはあるが、ふんぞり返り加減が地味にえらい似てる。

「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ」

「中国代表候補生、鳳鈴音！」

二人の中心で、ぶつかった視線がばちりと音を立てたような気がした。朝の喧騒で包まれていたはずの一組は、今や向かい合う二人の一挙手一投足に注目して静まり返っている。

不敵に笑った二人が握手を交わす。

「同じ代表候補生同士——なんて事は言わないわ、競い合って削り合いますよ。これからよろしくね、セシリア！ 私は絶対負けないわよ！！」

「望むところですよ」

何か二人が握った手の辺りから凄いきりぎり聞こえてくるんだけどこれ何の音？

後お前ら何時まで握手してんだ。

「何を騒いでいる」

研ぎ澄まされた刃の様に鋭利な声。出席簿片手に教室に入ってきた千冬さんが、教卓の前で無言の争いを続ける鈴とオルコットに言い放った。

「もうSHRの時間だ。さっさと教室に戻れ」

「千冬姉……？」

「織斑先生と呼、」

「千冬姉だ——！！」

パツと見では。小柄な少女が再会の嬉しさの余り満面の笑みで駆け寄った、という風に見える。だが鈴の場合その勢いが問題なのだ。

故に駆け寄る等という生易しい表現はこの場では不適切である。

正しく言うなら、それは突撃<sup>チャージ</sup>。

しかしそこはさすが千冬さんと言うべきか。かつて『ブルドーザー

ウリ坊』の名を欲しいままにした鈴の突撃を片手で難なく押さえ込み、出席簿で一叩き。

「織斑先生、だ。いいからさっさと戻れ」

「はーいー」

叩かれた鈴はというと、痛む頭を押さえつつも元気よく返事をして教室の出口へ向かう。

あいつ千冬さんに懐いてたからなあ。俺の言う事にはしよつちゅう噛み付いてくる癖に、千冬さんの言う事は素直に聞くんだよなー  
……………つて！

「おい鈴！ 上履き!! 上履き忘れてるぞお前——!!」

▽▽▽

朝食の場でも、朝の教室でも。その視線は隙を縫うように別の方向へ注がれていた。見ていたのはポニーテールの少女である。

会話の端から察するに、箒という名らしいその少女を、鈴は見た。た。

“何か”を探るように。

▽▼▽

「連絡も無しに帰ってきたと思ったら、まさか代表候補生になってたとは…………」

「ふっふーん。びっくりしたでしょ?」

俺のため息混じりの言葉に鈴は得意げに顔を輝かせた。昼休みの学食、四人がけのテーブルは三つまで埋まっている。俺と鈴と、箒の三人だ。

ちなみに通りがかったオルコットを誘ったらサククリ断られた。でもこつちがアツサリ退いたら何か残念そうだった。どつちなんだお前は。

どうでもいいけど豚肉の生姜焼きってえらいご飯がすすむ。

「…………一夏、そろそろどういう相手か、説明して欲しいのだが」

咳払いをしつつ箒。そうか、鈴が転校してきたのは箒が引越した少し後だった筈だから、面識が無いのか。説明の要求は尤もだが――

しかし食事へ伸ばしかけた手は今更止められない。

俺の箸は鈴のラーメンからチャーシューを奪い取り、鈴の箸は俺の定食から豚肉の生姜焼きを一枚奪い去った。

もぐもぐ×2

ごつくん×2

「何をするか貴様ア——!!」

二組に上履きを届けたせいで遅刻扱いになって千冬さんに怒られた仕返しをしようと思ったら見事に読まれていた。しかもサイズの俺の方が被害でけーじゃねーか!!

「ええいお前達は一々騒がんと食事ができんのか!」

普段ならこのまま互いの食事（主にメインディッシュ狙い）争奪戦に発展するところだが、今回は箸の一喝によって吹き飛ばされた。

「私が説明するからあんたは黙って食ってなさい」

「えー」

「食事中的あんたが口に物含んでない瞬間なんてほとんど無いでしよーが」

そう言われると返す言葉があんまり無い。

呆れた顔で俺に言い捨てた後、鈴は箸に向き直る。

「朝も言った気がするけど——私は鳳<sup>ファン・リンイン</sup>鈴音、中国の代表候補生よ。あなたは？」

「篠ノ之箒だ」

「よろしくね箒! あ、私は鈴でいいからね、鈴音<sup>リンイン</sup>じゃ呼びにくいでしよ?」

「あ、ああ。よろしく」

鈴が笑顔で差し出した手を箒が握る。良かった。今度はギリギリとか聞こえてこない。

どうでもいいけどここの学食ってポークカレーは今一つなのにチキンカレーは美味い。

「こいつとは小五始まってちよつと後から友達なのよ」

「これで統が居りや中学時代お馴染みのメンバーになるんだけどな」

「だから喋んな。口の中見えるでしよーが、行儀悪い」

このツインテ酷い。

「箒は？ 一夏と何時知り合ったの？ 私が越した後？ それともまさか入学してから？ どっちにしる私びっくりしちやったわよ。一夏に仲よさそうな相手が居た事に。こいつ昔っから友達全然居ないのよね!!」

ずいずいと身体を前に出しながら鈴は箒に問いまくる。何気に俺酷い言われよう。

どうでもいいけど安定と信頼のカツ丼。

「い、いや、私は一夏の幼馴染だ……!」

「幼馴染……?」

ちよつと押されつつ、しかしそこは譲らないと箒は答えた。うん、本当この娘にはその事実が大切なんだろうな。

一方鈴は目を丸くする。まあ確かに子供の頃から鈴とはずつとつるんできたから、面識のない相手が幼馴染と名乗ったら混乱もするか。

「説明しよう」

「だからしゃべ——完食してる!」

「箒は小四の終わり頃に引越したんだよ。ちようど鈴とは入れ違いな訳だな」

「小四の終わり……?」

鈴は口を閉じると、前に出していた身体を席に戻した。それから俯いてしばし何かを考え込み始めた。

「ああ、だからか」

聞き取れないほどに小さく言葉をボソリと呟く鈴は、ほんの一瞬だが、確かに俺の“知らない”表情をしていた。様子の変わった鈴に俺も箒も困惑し言葉につまる。

「ああ、いたいた織斑くん」

不意に声をかけられる。

ひらひらと手を振りながらこちらに歩いて来るのは教室で隣の席

の子だ。

「白式の事で呼び出しだって。はい地図」

そう言つて俺に一枚の紙を押し付けると、さつさと去つていく隣席の子。渡された紙には学園の中にある施設の場所が記されている。

「行つてきなさいよ。呼び出しなんですよ？」

そう言う鈴はいつも通り。だからこそ引つかかる。指定された場所は少し距離がある。用事が何でどれだけかかるかは知らないが、帰りの時間を考えると急いで損はないだろう。

先に席を立つ事を二人に断つて、指定された場所に向かう事にした。

▽▽▽

「ちよつといい？ 話があるんだけど」

「私には無いな」

無言のまま食事が終わり、席を立とうとした筈を鈴は呼び止める。返事の声は自然と堅いものになった。そして態度もまた堅く、鈴の提案を跳ね除けるように筈は立ち上がる。

元々筈は喋り方も態度も堅苦しい——そういう性分なのだ。が、今はそこに敵意すら含まれている。何せ鈴は一夏との距離が異様に近い。それは物理的にも精神的にも、正に一目瞭然な程に。一夏を思う筈としては、それがどうにも気に入らない。

「あんたにや無くても、私にはあんのよね……？」

みしり、と。鈴の手中にあつた割り箸が無残な形に握り折られた。今の筈は不機嫌さ故に全身から威圧感を発している。大抵の人間は声をかけるのに間違ひなく躊躇うであろう。

しかし鈴は両の瞳で筈を真正面から見据えてみせた。脅える様子も、気圧された様子もまるで無い。むしろ逆。筈の気を押し潰してくれる——そんな思いが見て取れる、強い眼光がその瞳には灯つていた。

「——いいから、座れ」



▽▽▽

『ブルドーザーウリ坊』

迂闊に奴の“前”に立つんじゃない。  
死にたいのか。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

鳳鈴音は織斑一夏の事が好きだ。

そりや、面と向かつてはつきり口に出せ——なんて言われたら当然躊躇う。照れと恥ずかしさで確実に手が出る。つつい顎辺りを全力で打ち抜きたくなる。

だが好意の感情があること自体は、実際そのとおりの事実だ。そもそも本当に好きだからこそ躊躇うし照れもするし——全力でぶつかりたいと思う、のだろう。

そう、好きだ。

何だか知らんが、鈴はあのバカが大好きなのだった。

その感情を持つ事になった明確でわかりやすい切っ掛けは、たぶん無い。一緒に過ごして重ねた時間の結果として、大好きになったのだろう。

元々好意は自覚していたけれども、物理的に距離が離れてみて改めて——というか初めてきちんと把握したのかもしれない。その感情がどれほど鈴の心において大部分を占めていたのかを。

出会った時の事は、今でもちゃんと憶えている。

素晴らしく劇的な出会いだったかというのと、別にそうでもない。しかも初めて顔を合わせた時に鈴が思った事は『頭空っぽそうな顔してるなあ』なんて割と失礼な感想だった。

でも一人ぼっちの鈴に差し伸べられたその手の存在は、本当に嬉しかった。

あのバカは知らないのだろう。気付かないのだろう。知らないで

いい。気付かないでいい。知られたら恥ずかしくて死ぬる自信が鈴にはある。

名前を呼びかけてくれた、それだけの事が。

笑顔と併せた、その一言が。

——それが、どれだけ鈴にとつて救いだつたか。

知り合うきっかけになつた出来事を経てちよつぱり好きになつた。

一緒に同じ時間を過ごしてもっと好きになつた。

そして気がついたら大好きになつていた。

劇的でも感動的でもない、小学校の隅つこで話した出会いの思い出。そんな何でもない筈の思い出が、あのバカのせいで今では宝物だ。

これ程までに鈴は一夏が好きなのだ、が。

周囲の人間にはそうでもない場合がやたら多い。一緒に過ごした鈴はそれをよく知っている。ともかく何故だか、あのバカには信じられないくらいに味方が少なかった。付き合いやら利害関係みたいなのを抜きにすると、恐らく片手で足りる数だから困る。

それが、鈴には昔から気がかりでならなかった。孤立している訳ではない、周囲から一步二歩離れた位置とでも言えればいいのか、妙にへんなトコに立っている。

でも付き合う相手を選ぶのは人それぞれ自由だし、バカの方は言つた位で自分を変える様な奴では無い。それに後者の方はあんまり変えて欲しいとも、思わなかつたりする。

一夏はずつと変わらない。出会つた時からずつとそんなに変わらない。だから、そんな不思議の立ち位置の一夏こそ——鈴が好きになつたイチカだと思うから。

一番いいのは、向こうもそういう立ち位置を好む場合だった。

鈴の場合は立ち位置の性質でなくそこがイチカの近くだから居るが、元からそういうトコに立ってる奴も居る。

だから中学校に進学した後、『二人』は『三人』になつた。鈴は三人目が何故だか無性に気に食わなかつたが、『三人』で過ごした時間は楽しかつたから、まあ良しとしてやる事にした。あのバカに免じて『友

達』と呼んでやらんこともない。

——『友達』。

鈴と一夏の関係を適切に表す言葉だ。

素直に口に出したり形として表すのは中々難しいが、鈴は確かに一夏に好意を抱いている。でも鈴の『好き』は『愛している』とかとはたぶん、というか絶対違う。

昔っから、鈴はいわゆる一夏との『恋愛関係』をしよっちゅう疑われた。小学校の時はからかいの意味が強かったが、中学の頃からは本格的に疑われ出していたように思う。

けれどもそれは違う。上手く言えない——いや上手く理解出来ないのだ。その、『恋愛関係』なるものが、鈴には。

『恋愛関係』は周囲や世間一般では友達より親密である様に捉えられている。でもそれが今の一夏との関係とどう違うのか、どう異なるのか、鈴にはどうにもさっぱり理解出来ないのだ。

『愛している』は『好き』より深くて確か、らしい。もっと仲良くなるのならばと頭を捻ってみた時期もあったが、結局答えは出なかった。

現状の一夏との『友達関係』に鈴は何の不満も無いのだ。関係の種類を今更——そう、今更変える必要が見当たらない。

——このままで、いい

友達関係の上位に位置するというその<sup>愛してゐる</sup>関係も、終わってしまう事もある。碎けてしまう事もある。そして在った筈の『好き』は——目を背けたくなるような『嫌い』に変わる。

それを鈴は見る羽目になった、知る羽目になった。他人事でなく——自らの家族で以て。

ずっと楽しくて、ぜんぶ大切なこの『好き』。

それがあんな風に『嫌い』に変わってしまうというのなら。変わってしまう可能性が産まれてしまうのなら。

——わからなくても、いい



『白式』<sup>びやくしき</sup>。

世界で唯一ISを動かせる男である『織斑一夏』の専用機として、IS学園が用意した機体。

日本のIS企業——『倉持技研』が欠陥機扱いで凍結していた機体<sup>ワンオフニアビリティ</sup>をベースとして完成。最大の特徴は第一形態から単一仕様能力が使用可能である事。

——本来の『白式』という機体の概要は、大体こんな感じ。

でもさつき会った倉持技研の人いわく、技研が凍結していた欠陥機<sup>試作機</sup>と今俺の右手にある白式はネジの一本たりとも同じ部品が無いんだってさ。

「まーたややこしくなってきたなーもー……」

廊下は昼休みであるせいか人の流れは多い。相変わらず男という存在は注目を集めやすいのか、周囲からは視線がビュンビュン飛んできくる。それが余り気にならないのは、頭の中がさつき聞かされた話で埋め尽くされているからだろうか。

右手には白と黒二色で構成されたガントレット。

この機体は——今俺の右手にある『白式』は、本来『白式』と呼ばれる筈だった機体とは完全に“別の”機体であるらしい。

この機体がどっから来たのかと言えば、実際技研の人もよく解つてないと来た。機体を提供した後どうなったかは一切感知してないとか何とかルートも情報規制かかっていると何かとか——何かゴチャゴチャ色々言われてよくわからなかったが、よくわからん事態になっているのはよくわかった。

徹底的に調べた限り機体に問題は無いし、むしろ当初の予定より高スペックだからこのまま使い続ける事で落ち着いたそうなの。

ISにまつわる事なのに何か妙に適当に済ませてる辺りが腑に落ちない。実際技研から来たって人も苦笑いしてたし。さあて。

ISの専用機は操縦者に合わせてその外観や機能を最適化させて物理的に変化させる。それ自体は至極当たり前の事象だ。だから俺も白式の変化に感心こそすれ、特に疑問は抱かなかった。この白式が

俺に合った機体が変わった事には。実際、色や形に搭乗者の心象が深く反映される例はこれまで幾度もあつたらしい。

ここまではいい。問題というか気にかかるのは、《雪原》——脚部に搭載されていた特殊力場発生装置の事だ。

“ 虚空に立つ”。

《雪原》のその機能は、何故だか俺の現状を示しているように思えた。俺の人生は不可思議な現象の下存続している。下にあるのは、在るのか無いのかわからない不可視で不可思議な足場——それこそ、《雪原》の造り出す特殊力場のような。

それともう一つ。

どうにも《雪原》は俺が欲していた装置だつたらしい。それを感じたのは一次移行が終わつた直後。機能した《雪原》の造り出した不可視力場を初めて踏み締めた瞬間。その時確かにISを纏つた身体と世界が、ようやく正しく“ 噛み合った” 様な感触があつた。

こういうのは“ 俺好み” とでも言えばいいのか。初陣で初使用だつたのに、まるで心の欠損が埋まつたかの様にその機能は、俺によく馴染んだ。

そんな《雪原》は形態変化で発生したのでは無く、『この白式』に最初から搭載されていたのだという。つまり俺に合わせる前から、俺に合うモノが組み込まれていた事になる。

ただの偶然、考えすぎである可能性も当然どころかたんまりある。

白式のように剣戟主体というか剣戟するしか無い機体に《雪原》の様な、“ 空中で立てる” 機能は実際都合がいいのだろう。何か剣術には足運びとか重要だつてどっかで誰かに聞いた覚えがあるし。

だが、

——この『白式』を造つた人物は、『俺』の置かれた状況を知っている？

この白式は、俺と似てる。本来の『名前』と実際の『中身』が食い違っている。こいつは『白式』だから『白式』になつたのでは無い。周囲が『白式』だと認識する事でこいつは『白式』になつた。

兎に角この機体には俺の七面倒臭い現状を連想させる要素が多す

ぎる。だが疑問に正しい答えを返せるのは、恐らくこの白式を造った人間だけ。しかしその誰かさんはこの場には居ない。

いや、待て。

ここにはその誰かさんに造られたヤツが居るじゃないか。

(……シロ)

【はい】

右手のガントレットに呼びかける。即座に返事の“音声”。実際に声に出して呼びかける必要はとも無いようで、意思で語りかけるというか、意思を“向ける”というかそんな感じ。こういう感覚頼りな事は、頭を使う事に比べてそこまで苦手じゃない。

しかしコイツ声自体は地味に結構可愛いんだが、話し方というかイントネーションがなあ。何処までも淡々というか平らというか、出来が良すぎて逆に作り物めいているというべきなのか。全くメカメカしいやつめ。いやメカなんだけど。

とはいえこつちの世界の科学技術の進みっぷりには驚かせられる。ISの存在にも驚いたが、今回もなかなか。こんな風に会話できる人工知能<sup>A</sup>なんてお伽話の中だけだと思ってたよ。

年代の数値的には『前』と殆ど同じ筈なんだが、科学技術の進みになんかえらい差が出てるんだよなあ。『向こう』と『こつち』の何がそんなに違うんだ？

やっぱ『篠ノ之束』の存在の有無、か？ いや『大天才』の出現前から結構進んでみたいだから、もつと根本的なところから違うんだろか。

(聞きたい事があるんだけど)

【何なりと】

(お前と、この白式造ったのって誰?)

【IS『白式』、及び搭載AI『シロ』の製造者に関する情報は消去されています】

(ありや……んーと。命令、答えろ、最優先)

【IS『白式』、及び搭載AI『シロ』の製造者に関する情報は消去されています】

(……………)

繰り返される返事は、再利用したのかと思えるほどに全く同じ音量と音程だった。最初に答えが返ってこない時点でそうだとは思ったが。やっぱ駄目か。

この白式に積まれたAI——『シロ』は基本的に疑問には迅速的確に答えてくれる。今回みたいに『答えられない』というのは地味に珍しい。

事実を隠してるという可能性も残るが、それも何か違うような感じがする。少なくともシロから悪意は感じない。たぶん。

それに、

——“貴方の全てを肯定する”

その言葉の意味はちよいと問答してみても理解した。このAIは他の何を蔑ろにしても俺の意志を遂行することを優先しやがる。施設でも、他人でも、知人でも、白式という機体でも、シロと名付けたAIでも、

俺の命でも。

俺の下した命令で何かが砕けても、誰かが死んでも、誰かを失っても、機体が吹き飛んでも、AIが機能停止しようとも、そして俺が死ぬとしても。

一欠片の疑問の疑念も抱かずに淡々と——そうただ当たり前のように俺の命令を、<sup>意志</sup>決断を<sup>肯定</sup>実行する。

一応普段は俺の安全は他よりも優先されているようだが、それはあくまで俺がまだ死ぬ気がないからというだけ。億が一『死』を望めばサクつと自殺幫助してくれるに違いない。

それが白式に搭載されたAI——『シロ』の根幹に設定された最優先事項。

ちなみに『シロ』は俺が付けた愛称である。いやだつて呼び方聞いたら長つたららしいコードみたいなの言うんだもの。聞き終わる前に最初の方忘れるくらいのを。

最初は『白式』と呼ぼうかとも思ったが、話聞く限りでは『白式』そのものというよりは『白式の精霊的な何か』っぽかったの。なので

白式の白の字から取って『シロ』。飾り気はないが呼びやすいのでこれよし。

当のシロは名付けられた事にも、自分の名前になった単語にも特に反応も感想も示すことはなく、ただ俺の意向を受け入れた。安定の無機物っぷりである。

（それでやっぱシロには茶目っ気を出して欲しいところではあるなー）

【はい】

とりあえずこの鈴の胸の如きまっ平らな感じはもうちよつと何とかしたい。鈴のはそのままでもいいけど、こっちはどうにか出来ないだろうか。

（手始めに、そうだなー。俺ばっか愛称で呼ぶのも何だし、お前も俺の事愛称的なので呼んでみるか？）

【愛称……—では】

シロが言葉を途切らせたのはほんの数瞬。口を開い……いやコイツの場合何て言うんだ？ 回線を開いた……？ ええいもう口を開いたでいいや。ともかくシロは相変わらずのまっ平らな音声を発し、

【お兄ちゃん】

「やめろ」

▽▽▽

鳳鈴音は織斑一夏の事が好きなのだろうか。

それが現在篠ノ之箒の胸中で巨大な台風の如く渦巻いている疑問である。本来四人がけのテーブルに、箒と鳳鈴音は向い合って座していた。

向かいに座る鈴は、睨みつけるかの如き勢いで箒に真正面から視線をぶつけてきている。可愛らしいと評して差し支えない容姿、しかし放たれる気配は正に『野生』という言葉が相応しい。それ程までに荒々しく凶暴な気を少女は発している。

精神的にも物理的にも圧されそうになるのをぐっところさえ、箒もまた真正面から鳳鈴音を見返す。この少女がこれほどまでも強い感情



を箒にぶつけてくる心当たりはある。それこそが、ずっと胸中にて渦巻いている疑問である。

もし眼前の少女もまた箒同様に織斑一夏を好きだというのなら——いや、もう間違いないだろう。あれ程一目瞭然に親しいのだから、鳳鈴音もまた一夏の事が好きなのだろう。

ならば箒と鳳鈴音はライバルという事になり、激情を箒に叩きつける理由足る。

「最初っから違和感があったけど、知り合った時期で納得したわ」

鳳鈴音が口を開く。確かに相手は一夏と随分と親しいようだが、それでも箒とてあっさり退いてやる心算はない。仕掛けてくるのなら、返り討ちにしてくれると心を構える。

「あんたの事忘れちゃったのは、確かに」あいつ「が悪いんだと思う。それは間違いなくあいつの落ち度だわ。でもねー」

淡々とした口調。しかし一見静かに見える言の葉の、一つ一つが積み重ねられるたびにどんどんと重さと強さを増していく。感情が塗りこまれていく。

「あんたは一夏を見てた。でもすっごく見てるようで、常にあいつを通して『別の誰か』を見てる感じがしてしようがなかった。それは——」あんたを知ってる一夏「でしょ？」

箒の両肩が意識に反してびくりと跳ねた。言葉をきちんと意識が認識するよりも早く、無意識の領域で反応する。

「忘れた事を責めるのも、記憶を戻すことを求めるのも、別に間違っていないと思うわ。それは悪くないし……もし私が同じ立場だったら、きつと同じ事しようとするでしょーね」

鳳鈴音の言葉が遠く感じるの、箒の思考が意識の中に沈んで行っているせいであろうか。

再会してからこれまで、何度心の中で「一夏だったら」と繰り返した。望んだ。

稀にある『一夏』を思わせる言動に喜んだ——それこそが正しいと思った。つまり、それ以外は、間違いだ、思っていたという事に、

「でもそれよりも前に、あんたちゃんと見なさいよ！ 今の一夏が居るって事を認めなさいよ！ 今の一夏はね、あんたが『要らない』って態度ぜんぶで示す今の一夏はね！ 私のたいっせつな友達なの！ 今の一夏が大好きな人だって居るのよ！ 少ないけど！ そう思ってる人は居るの！ 昔の一夏が要らない訳じゃないわよ、でも今の一夏も絶対ぜ——ったい要らなくなんか無いの！ 何でそれがわかんないのよあんたはア——!!」

感情を噴火させたかの如き言葉咆哮の後に、鈴はコップに残っていた水をごっごつと音を立て総て一気に飲み干した。ズダンと音を立ててテーブルに叩き付けられたコップにバシツと亀裂が入る。

「わ、私、は……」

鳳鈴音の叫びに籠った感情は、怒りとは少し違う様に思えた。それは単に意思の提示、烈火の如きに語気を荒らげているのはきつとそれが本当に本気だから。その想いを——こうも明確に本気で想いを表現できる少女が、箒は羨ましかった。

「私は、そんなつもりは……ただ私は、会いたかったんだ……一夏に、ずっと会いたくて……それだけだったんだ……」

箒は、言い返す言葉を持っていなかった。ゼーは——ゼーは——と息を荒げる鳳鈴音にこれ以上視線を合わせられず、自然と箒の目線はテーブルへと墮ちる。

だからこれもただの提示。とはいえ堂々かつ強い鳳鈴音のそれと比べると、箒のものは情けないほどに弱々しかったが。

一夏を好きだと思しながら、箒の起こした行動は否定、否定、また否定。違う違うと言いつけて想いつけた。記憶を無くしたと、異なっってしまったと、ちゃんとはつきりと打ち明けられた筈なのに。その意味をまるでわかっていなかった。一方的に理想を押し付けて、願望を押し付けた。

そもそも、だ。六年もの時間が流れた時点である程度の変化は必然ではないか。なのに箒が求めていた『一夏』は——『六年前』の一夏だ。あの最後の記憶の一夏だ。それは記憶の有無に関わらず、根本的に一夏を否定していた事になるのではないか。

「熱くなっちゃったけど。責めてる訳じゃ、ないんだ。ただ、そこだけはわかって欲しかったのよ。さつきも言ったでしょ、私だって同じ事するって。大切だったのよね、あんたも——箒も、「思い出」が」

「……ああ。絶対、一生、忘れないと思う」

「うん。わかるよ。私も持つてるから」

言葉に顔を上げると、鳳鈴音の顔がとても近くなっていた。身を乗り出して箒に近づいた鳳鈴音が箒の手をそっと取る。割り箸を傍らに散らばっている木屑に変えた手と同じとは思えないほど、優しい手つき。

「本当に仲が良いんだな、お前と一夏は」

「うん。大事な友達。一番の友達」

「ともだち、か……羨ましいな」

「結構大変だったのよー？」

「……それでも、私はお前達のような関係が羨ましい」

恐らく問えば問うただけ、眼前の少女は『友達』との思い出を語ってくれるのだろう。語れるほどの思い出を持っているのだろう。

この少女が、箒は羨ましくてしようがなかった。想い人に近い恋人敵としてではなく、こんなにも仲の良いとはつきり言い切れる友達が居る。その事が。

篠ノ之箒に、仲がいいと言い切れる友達はこれまでほとんど出来たことがない。転校してばかりという環境も理由ではある。しかし中には、そんな箒に声をかけて、手を差し伸べてくれた人も居たのだ。

だが心の大部分を現状への——ISという存在に対する恨みで占めていた箒は、それを拒んだ。視界に入れようとしなかった。そしてその分の孤独を埋めるように、少しでも仲の良かった一夏の思い出に執着していたのかもしれない。

そもそも一夏の思い出にしろ、どれほどのものか。

家が近くて、通っている道場が同じ——家族ぐるみの付き合いではあったが、家族が付き合っているから一夏と箒が行動を共にしていたと、言い換えることも出来る。

当時の箒は相も変わらず口下手だったし、とても一緒にいて——眼

前の少女のように快活でも、可愛らしくもない——楽しいと感じられる子では、無かつただろう。

一度傾き始めた意思是、坂道を転がり落ちる石のようにぐんぐんと暗く澱んだ方向へと傾いていく。

「だつたらこれから仲良くなればいいのよ」

目の前には笑顔。

そして、差し伸べられた小振りな手。

「え……」

「変わっちゃったけど、一夏はまだちゃんと居るじゃない。大体後どんだけ人生が残ってると思ってるのよ。これからもつとずつと仲良くなつちやえばいいだけじゃない?」

「い、いいのか。私が一夏と仲良くしても……?」

何かすつかり忘れていたが、そういえば箒は鳳鈴音の事を恋敵ではないのかと疑っていたのだった。実際に鳳鈴音は一夏の事をかなり好いているようでもある。ならば箒が仲良くする事は好ましくないはずであるのに。

「うん。もう箒はちゃんとわかってくれたみたいだから。あ、それと」握っていた手を一度離して、制服の裾でせつせと拭く。

そして鳳鈴音は、改めて篠ノ之箒に手を差し伸べた。にこにここと笑ったまま、鳳鈴音はそれ以上言葉を紡がない。しかし箒には鳳鈴音

——鈴が何を言いたいかを、恐らく正確に察していた。

——私とも、友達になつてくれる?

「その手は、取れない」

反射的に継り付きそうになつた手を抑えこんで、拒絶の言葉を箒は発する。だがその口元は緩んで、表情はきつと不器用な笑みになつてしまっている事だろう。

「二度一夏に謝つてからにしたい。それに私の態度も……やはり改めるのには、時間が、かかるかもしれないからな。応えるのは、それからにさせてくれないか」

「うん。私、箒とは仲良くなれそうな気がする」

「そう、か?」

「そうよ」

同年代の子と、こんな風に笑い合って話すのは果たして何時以来だろう。胸の奥がじんわりと暖かくなって、それが染み渡るように心に広がっていくのを感じながら、箒も笑う。

この少女のように、可愛らしく笑えているだろうか。

きっと笑えていない。だが今はまだ出来なくとも、何時かは笑えるようになりたいと、そう思いながら――

きーんこーんかーんこーん

「……………」

「……………」

「……………ねえ。箒」

「……………何だ。鈴」

「……………今の、何だと思う」

「……………今の、何だろうな」

本当は二人とも、聞こえた瞬間にそれが何かは理解している。

つまりこの問答はただの現実逃避。

“ 始業のチャイム ”

「……………」ち、遅刻だああああっ!?!」

▽▽▽

『お兄ちゃん』

弟もしくは妹が自身の『兄』に相当する存在に対し用いる呼称。何故か僕の友達はこの単語に脅える傾向がある。

彼に居るのは『兄』でなく『姉』なので、この呼称に脅える理由は無い筈だ。こういった日常の端々に垣間見える小さな違和感をかき集めていけば、僕が彼に感じる不思議な感覚の正体も判別するのかもしれない。

しかしとっかかりがこの単語ってどうなんだ。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▼▽

【親密な相手に用いる呼称として登録されていたのですが】

「間違ってはいないけど是非にやめてくれいや止めてくださいお願いします」

【はい】

別にその呼び方自体に罪は全く無いし、『前』で実際に妹が居た俺にとっちや——確かに慣れた呼び方ではある。

でもその呼び方で呼ばれると煮え湯というか沸騰した硫酸をタンクで流し込まれた日々が脳裏に蘇るので真面目に勘弁して欲しい。

全くあいつは要らんとこぼっかり母親に似やがってちくしょうめ。成長するたびに似てくるから、六年経った今はどれだけ凄まじい事になっているのやら。

(——そっか。六年、経ってんだ)

生き別れ、いや”死に別れ”た頃はまだ『子供』だった妹も、考えて見ればもう年頃になっている訳だ。年齢的に大学生でもやっつるんだろうか。それとも何か夢でも見つけて走っている最中だろうか。

(……………はん)

心配は、正直する必要無い。

俺の妹は兄である俺より精神的にも肉体的にもずっと優秀だ。というかそろそろ人類の規格越えとるかもわからん。母親的な意味で。

向こうで生きてた頃は『もつと可愛い妹が欲しいやそんな高望みしない普通でいい普通がいい』って隙があれば愚痴ってた。でもいざ二度と会えなくなってみれば、あれはあれで可愛いやつだったと思えてくるから不思議なものだ。

もうちよつとくらい、余計でも世話焼いといてやりや、よかつ——気持ち悪いつって蹴られるのが余裕で想像できる！ ああつ、蹴られ続けた日々が脳裏に凄く鮮明に!!

(色々思っちゃうけど、一番気になるのは伴侶に出会えるかなんだよなあ。滅茶苦茶凶暴だからな……あれを嫁にしたいという猛者が果たして現れるかどうか……)

容姿は、まあ身内の鼻屑を引いてもそれなりにイイ線いってると思う。でもあいつ性格がなあ。そのせいというか絶対それが原因だと思ふんだが、俺の知る限り色恋沙汰には欠片も縁が無かったように思う。正直あいつが真つ当に恋愛してる画が全く想像できん。

見た目の割に乙女な箒とは本当えらい違い——何か今『恋愛』とか考えるとあの子の顔が真つ先に出てくるな。

(そーいや今日やったら機嫌悪かったな)

普段から無駄に気が強いというか気を張っている彼女であるが、思い返せば今日は朝——朝食の際からどうにもそれが顕著だったような気がする。

今朝、といえば鈴という転校生の登場があった。しかし友達である俺はともかく、直接の知り合いでない箒が転校生くらいで心動かすだろうか。

「あ」

「？」

『篠ノ之箒』が『織斑一夏』を好きだという事は、ちゃんと把握している。ただその『織斑一夏』と『俺』を俺はアタマの中で直接結びつけていないし、実際それは直接結びつかない。しかし俺の身に起こった特殊な事態を知らない箒は、『俺』と『織斑一夏』の根本は同一であ

ると認識している。

(いっけね、そーいや鈴って『女の子』じゃねーか)

その認識の差がすっかりすぼんと頭から抜けていた。

今朝の光景は、俺に取ってはただ友達とじゃれ合っていただけ。しかし『織斑一夏』が好きな箒の目には『好きな男が見知らぬ女の子と楽しそうにしている』という風に映っていただろう。つまりあれは『怒り』でなく『嫉妬』か。いや怒りでも間違っていないだろうけど。

なんてーか、見た目と姿勢の割に本当根が恋する乙女だなあのホーキちゃんは。

(とはいえどーしたもんか、ねー)

【……………】

『俺』が『織斑一夏』と別である以上、彼女の好意に対してリアクションを行うことは好ましくない。それは俺じゃなくてオリジナルの『織斑一夏』のやるべき事だ。

(現状維持、するしかねーんだよなあ)

俺の中に『織斑一夏』の記憶が蘇り始めているが、最終的に『織斑一夏』が戻るかどうかは未だわからない。

戻ると確定しているのなら——今はそれに伴うもう一つの結果は置いておく——それまでは彼女の好意に気付かぬフリをすればいい。

しかし戻るまでに長い期間がかかる場合、また結局『俺』のままであるという可能性も、未だ残っている。その場合は箒にも事実を打ち明けた方がいいのかもしれない。

(あーもー、こーいうの得意じゃねーのに)

【……………】

これが完全に他人事ならもっとサクッと指針を決められるのだが、というかもう何回目かわからんけど本当今の俺の状態どうなってるのさ。誰か知ってる人居ないのかよコレ。

(結局は現状維持、かあ。こーゆー宙ぶらりんってのは好きじゃねーんだけどなあ)

箒に総てを話すのは、それが良いか悪いかはともかく——俺にとつて『楽』なのは確かだ。だが突きつけるには事実が不可思議で唐突過



ぎる。それを、こっちの都合で15歳の女の子に叩きつけていいものか。多感な時期の『女の子』に。

(んー、兎に角。一回千冬さんに相談してみるかねー)

そういうえば千冬さんの学生時代ってどんなだったんだろ——ああ、今と全然変わらないうな。一瞬で想像できた。

【思案内容の開示を要求します】

(うわびつくりした。何どうしたのシロ急に)

【操縦者——『織斑一夏』のサポートも私の優先事項の一つです。何か重要な案件に行き当たっていることが明確である以上、私は持てる総てを用いてそれを解決に導く用意があります】

驚いた。

シロが長文喋ってる。

いや長々と喋る事が無かった訳じゃない。だがそういう場合はどうも長い文章を『再生』している風で、喋ってるって感じじゃなかったのだ。

(気持ちは結構有り難いんだが、シロはこういうの向いてなさそうだからなあ)

【何故ですか】

(んー……?)

お、何か不服そう不服そう。

(喩え話。もしお前より高性能な新型AIが開発されて。俺がその新型を褒めちぎってたらどうすればいいと思う?)

【私が問題解決に対して不向きであるという事との関係性が見受けられません】

(関係ないようであるんだなこれが。いいから答えてみ?)

【……『AIユニットを開発された新型と交換』】

(うん正解。だからお前は向いてない)

【それは正解でないという事では?】

(いや正解ではあるよ。ただ俺が求める正解ではないだけで)

【操縦者の最善でない以上、それは私にとっての正解ではありません】  
さあて。

ある程度人生を過ごしてきたが、ヒトのように人格を持つ人工知能と接するのは流石に初めてである。なのでこつちとしてもシロとの距離感は正直測りかねている。

初回にはちよつと難易度高いかもしれんが、ここは探りも兼ねて一つ問いかけてみるとうしよう。

(宿題。時間制限は無し、ただし回答のチャンスは一回だけ。相方であるお前は俺をどう呼べばいいのか、俺はどう呼ばれたいのか。お前が求めるもの——俺にとっての『最善』が何なのか。考えてみな、思うがままに)

【時間をかける意味が理解できません。あなたが正解を提示すればそれで済む問題だと考えます】

(人間ってのは色々とめんどくさい生き物だね。無駄のない正論正解だけじゃやってけねーのさ。だからまずはそこら辺を知ってもらおうか)

【……………はい】

戸惑いと困惑とそれと不満が混ぜ込まれていると思しき空白の後、シロは何時ものように簡潔でそっけない返事をした。

この『宿題』には一つ、これ以上無い答えがある。とはいえシロがそれに辿り着くのは難しいだろう。目的は答えを探す過程にある思考だ。

今切り捨てられている無駄な部分にも思いを馳せる事が出来ればよし。できなくても別によし。厳格な正論は別に悪い訳じゃない。

知りたいのは、シロが“変わる”のか“変わらない”のか。

「——ん」

(シロ、ちよつと質問。IS自体を起動せずに学園の地図とか出せる?)

【映像出力は不可能ですが、現在行っている相互通信でのナビゲートなら可能です】

(よし、じゃあちよつとナビをお願いしようか。無駄なトラブルは避けるに限る)

その場でぐるりと反転。

気持ち歩を進める速度を上げ——曲がり角を曲がった瞬間に、俺は駆け出した。

▽▼▼▽

休み時間。

休むための時間。

なのにどうして休み時間を経た俺はこうも疲労困憊しているのだからちくしようめ！

あれから全体力を使い切る勢いで教室に戻った（辿り着いたとも言う）はいいが、授業に遅刻した事で織斑先生からは有り難いお説教と出席簿アタックを喰らい、トドメと追加課題である。普通に涙が出そう。俺が何をしたっていうんだ。

「織斑君、何してたの？」

「ちよつと逃走劇をだな」

瀕死のまま授業を一つ乗り越え、次の休み時間にて隣の席の娘に問いかけられる。素直に答えたら滅茶苦茶怪訝そうな顔をされたが、実際そうなのだから仕方がない。

「そういえば篠ノ之さんも遅れてきたんだけど、もしかして一緒だったり」

「箒も遅れてきたのか。いや、そっちは知らねー、食事の後別れたつきりだし」

「そうなんだー。二組の友達为例の転校生も遅刻してきたってゆってたから、てつきり」三人〃で積もる話でもしてたのかと思った」

「鈴も……？」

にやにやと笑いながらの言葉に、俺はというと首を傾げた。

時間に厳しそうな箒が遅刻というだけでも疑問なのに、さらに鈴が同様に遅刻してるってのはどう言う事だろうか。もしや食堂で二人に何かあったのか。

ちらりと箒の方にさりげなく視線を飛ばす。真正面から視線がぶつかった。と思っただらものすごい勢いで箒が視線逸らした。

ああ、これは何かあったな確実に。

何てわかりやすい娘だ。

「ふーん、その様子じゃ本当に一緒じゃなかったんだね。じゃあ何してたの？」

「だから逃走劇だつて。何か、こう明らかにちよつかい出しますよーって感じの人に遭遇してさ。面倒な事になる前に逃げたらすげー追つてくんの」

すれ違う前にこつちが進行方向変えたから大丈夫だろうと安心してたら、何故かあの人追っかけてきたから困る。結局撒くのに休み時間と体力の概ねを費やす羽目になった。

「学園唯一の男子はもてだねえ。どんな人だったの？」

「えーと、ちらつとしか見てねーんだよ。確かりボンの色が二年だったな。んで髪が水色っぽくてー、何か扇子持ってるー、雰囲気 독특で、後——脚が怖いくらい異様に速い」

何度追いつかれそうになった事か。物理的なショートカットを多用してるこつちに普通に走って追いついてくるってどういう事だよ本当。

「……………その人もしかして『お前の事は何でも解ってるよ』みたいな表情してなかった？」

「あー、そーそーそんな顔してた。お前の総ては手の内だぜみたいな余裕綽々な感じ」

「ちよちよつと待って織斑君あの楯無から逃げ切ったの地味に凄いつていうかいや普通におかしいよ君」

「え、何？ カタナシが何だつて？」

「その人、<sup>IS学園</sup>うちの生徒会長だよ」

「へ？？」

▽▽▽

『セシリア・オルコット』

IS 学園在籍、イギリスの代表候補生。専用 IS 『蒼い雫』ブルー・ティアーズ。

第三代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者。戦闘スタイルは典型的な射撃型。

“公的”記録での BT 兵器の適正で最高値を持つ。ただ二号機をかつぱらっていった輩の方が適正は上と思われる。計測した訳ではないが、恐らく間違いない。

機体も実力も中途半端。特に対策の必要性は感じられない。

万が一の有事の際は■■に対応させれば十二分だろう。

総合脅威度：低

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「——真面目におやりなさい」

こめかみに硬いものがごり、なんて聞けば銃口を連想する人は少ないのではないだろう。しかしこの国じゃ、銃火器もそんな状況も普通の“日常”ではそーそーお目にかからない。というかそんなもん日常的に発生されたら普通に困る。

故にこの状況はお遊びである場合が多い——というか殆どだ。しかしながら何事にも例外というのはつきもので、現在進行形で俺のこめかみに突き付けられているのは冗談抜きで本当に銃口だった。しかも大口径の特殊レーザーライフル。

「これでも大真面目なんだが」

「どこがですの!?!」

綺麗に天地逆転している視界の中、視線を銃の持ち主へと移動させる。俺を見る蒼い瞳は、相変わらず敵意——とまではいかなくとも穏やかではないぎらつく光を放っていた。

ちなみに何で現在天地が逆なのかというと、着地に失敗して地面に刺さったからである。

そんな瞳と同じ蒼い色の装甲（IS）を全身に纏わせたクラスメイトの代表候補生——セシリア・オルコットは、何やら憤慨している様子である。

どうでもいいけど俺まだ逆さまだよ。

半円を描くレールの様に生成された不可視の力場を滑り、俺の身体（白式の機体）がぐるりとその場で縦に半回転。正常な向きに戻った視界で、改めてオルコットに向き直った。

「無様ですわ。見るに耐えません。何とかなさい」

向き直った途端、ずびしと鼻先に装甲で形成された尖った指が突き付けられる。そして矢のように放たれる言葉にはたんまりと怒りが塗り込められていた。

てつきりこつちの逆さま状態に怒っていると思ったのだが、どうやら違ったらしい。とすると眼前の少女は一体何に怒っているというのか。

「あ、もしかして機体の形？ 俺は結構気に入ってんだけどな。まーもうちよい全体的に尖ってるほうが好みだけど——」

「誰も機体の外見の話はしていませんわ！」

「え、じゃあ何の事」

「あなたのっ！ そのっ！ 妙ちくりんな機動に決まっているでしょっ！！」

とりあえず話の前にそのすっごいぶるぶる震えている銃口を下ろして欲しい。

何か“はずみ”で発砲されそうで地味に怖い。

両手を上げて降参の意を示すと、オルコットは大きくはあつ、と溜息をひとつ。それから銃を構えていた腕を下ろした。

「機動が無様って言われても……空飛ぶのって案外難しいんだよなあ」

基礎中の基礎的なモノに的を絞ってきつきから練習しているが、一つとして上手くどころかマトモになってない。飛行の軌跡をなぞれ

ば、ミミズがのたくったような惨状が出来上がることだろう。代表候補生であり、ISの操縦技術が既に一定のレベルに達しているオルコットから見れば確かに無様と怒鳴りたくもなるか。

「まったく、貴方わたくしの敵としての自覚がありますの？ 大体試合の時は——」

「？」

「わたくしとの試合の時は、もつとまともに飛んでいたでしょう。荒削りではありましたが、だからこそ光るものが見えたというか、わたくしには出来ない飛び方だったというか……っ！ ま、まああくまでもそれなりというだけであって代表候補生であるわたくしに比べればまだまだでしたけれども!？」

喋っている間のオルcottの様子。

ぼんやりと遠くを見ていたと思えば、急に何かに気付いた様にハツとし、何故か顔を赤くしながら例のポーズ(腰に手でふんぞり返り)に移行して語気を強めた。

つい思ったことをそのまま話し、しかも途中で何か俺をちよつと褒めてみたいな感じになつてる事に気付いて、急に恥ずかしくなつて慌てて取り繕った——恐らくそう大きくは間違つてないだろう。推測するまでもねえ。

「何を笑ってますの」

「べえつつうにいー?」

「……………」

俺が心情を察したことを察したのか、顔を赤くしたオルcottは唇を真一文字に引き締めながら俺をぎろりと睨む。

さあて。

こんなチャンスを見逃すような俺ではない。せつかくだしこのままからかい倒してや——長大なライフルのトリガーにかけられた指の辺りでカチリと音が——人が嫌がることをするのはよくないな!

「にしても試合の時、ねえ」

バシツと音を立てて作動した白式脚部のピストンが、不可視の力でもって機体を上へと押し上げる。その勢いとスラスタの噴射によ

る加速を併せて急上昇し、前方に突き出した脚で虚空を蹴り飛ばして、後方へと放り投げられる様に跳ぶ。縦方向に——90度傾いた状態で虚空に着地して、斜めに傾けた力場を踏みぬいて斜め下方に跳ぶように飛んだ。空中でくるりと一回転して体勢を調整、蹴りを叩き込むように地面の数センチ上まで降りる。そのまま停止せずに回転しながら滑る様に飛ぶ。オルコットの隣に來た辺りで力場と脚部を貼りつけて急停止。

「こんな感じの事を言——何故ライフルを構える!? これでも駄目ならもうどうしようもないんですが!?!」

「やっぱり先程は真面目にやっていますませんでしたわね。さあお選びなさい何処を撃ち抜かれないか」

「常に真面目にやってるつつうんだ! たださっきの飛行練習の時は《雪原》使ってなかっただけ!」

ゆきはら? と眉根を寄せて小首を傾げるオルコットに、これこれと答えるように脚で虚空をがんと踏み鳴らして見せる。一瞬で事情を理解したのか、さっきまでの狼狽赤面を引っ込めて即座に真面目な顔つきに変わる。

「おかしいですわ」

「何が」

「特殊機能をオフにしている事が、ですわ。そのISは特殊装備による特殊機動を想定されているのでしょうか? ならば機能を切らずに——むしろ機能を積極的に使ってより使いこなすべきではなくて?」

「んー。それ、『俺がISを普通程度には扱える』って前提を無意識に混ぜてねーか?」

「あ」

「ただの事実として素人でね。お前も見てたんだろ、《雪原》無し」の俺の機動。装置止めたらあの様だ。変わり種雪原に夢中になる前に『基礎』で足元がつつり塗り固めなきや後々痛い目見るのは明らかかなんだなー、これが」

《雪原》は、特殊力場発生装置の実用『第一号』だと、技研から來た人は言った。そして特殊力場発生装置の試作型を搭載したISが、か



つて装置を暴走させ操縦者を“振り切った”事件が起きた事も。

完成版である装置を組み込んだ『白式』は試作型である『浄土』よりも比べ物にならない程安定しているらしいが、それでも万が一が起る可能性はゼロではない。使用には細心の注意をはらってくれ――との事らしい。

《雪原》から“嫌な感じ”はしないから大丈夫だとは思うが、痛いでは済まない目に遭う可能性がある訳だ。だから頼り過ぎな現在ばかりよりよろしくない。万が一が起きた時に備え、装置が使用できない状況に備えておく必要がある。

それにただ単純に俺が現状に満足できてないって事もある。俺が目指しているのは“一番上”。装置が壊れたからまともに動かせなんなんて頭の悪い言い訳は許されないし、許さねえ。

どうでもいいけど何か俺の人生わくつきに恵まれすぎてやしないか。

「……………見た目によらず意外と堅実なんですわね」

「ほっとけ」

びっくりした顔でまじまじと俺の顔を見つめるオルコツトに言い捨てて、ジャンプするように飛び上がった。今度はスラスターのみを用いた純粋な急上昇。

遮断シールドに脳天ぶつけた。

痛くないんだけど何か気分的に痛い。頭をさすりつつ高度を緩やかに下げる。一気に下げようとすると今度は天井でなく地面に着弾するのは流石にもう学んだ。マイブレインは学習が『遅い』のであって、『しない』訳じゃない。焦らないのがコツである。でもオルコツトの何やってんだお前的な冷たい視線が普通に辛い。

「じゃあ俺練習するから、そっちも気にせず練習してくれよ」

「えっ？」

「いや、お前も練習しに来たんじゃねーの」

専用機を与えられた生徒は肌身離さずISを装着しているが、それはあくまで『所持』を許されているだけであって、自由な『展開』も許されているわけではない。IS学園の中でも大手を振ってISを

展開できる場所や条件はかなり厳しく設定されているのだ。

故に放課後は自主訓練をする生徒のため各アリーナが解放されている。一年に割り振られているのはここ第三アリーナ。

ちなみに現在練習している人は少ないというか全然居ない。何故ならアリーナの使用許可は簡単に降りるが、肝心のISの使用許可が簡単には降りないから。

オルコットとの決闘前に訓練機である『打鉄』の許可を取ろうとし、書類の多さに戦慄したのは記憶に新しい。

「……………そんな事、言われなくてもわかってますわ。ふん」

何やらぶくーと不満げに膨れたオルコットは、ふよふよと向こうの方へ漂っていった。今の俺が同じ事やろうとしたらスピード出過ぎて壁にぶつかるか、逆に遅すぎて歩いた方がマシのどっちかになるだろう。さすがだぜ代表候補生。

再戦を約束した相手との差は思った通りに大きいようだ。ならばこそ、だからこそ練習せねば。あやべ速度出しすぎた壁がべしつ

十分後。

「なんべん言えばわかりますのこのおバカ——つ!!」

「あべんつー!」

垂直急落下したオルコットの両足が、俺の腰の辺りに突き刺さった。

いわゆるドロップキックである。

「あつはっは——! だから言っただろう! 俺はちよつとやそつとじゃ覚えんとな!!」

「その状態で偉そうにするんじゃないやありませんわ——!!」

やあ、また会ったな地面。

何かもう地面通り越して地中に突入してる気もするが。

人間ブーメラン状態だった俺は物理的に撃ち落とされ、地面に縫い付けてくれる如き勢いで叩きつけられた。さつきから衝突でしかシールドエネルギーが減ってない。いや機動の練習でシールドエネ

ルギーが減るといふ事自体がおかしいのかもしれない。

「物覚えが悪すぎですわ」

「仕様です」

「あ、あなたねえ……」

「本だからしゃーねーべ。自分が」その程度」だって自覚するの、結構大事だぜ？」

土埃を払い落としながら、オルコットの言葉に即答した。気に入らなかつたのは言葉の内容か反応の早さか、あるいはそのどちらもか。オルコットは引き攣った笑みを浮かべる。

言われずに出来るのが『天才』。

言われたら出来るのは『優秀』。

言われても出来ない『凡人』。

いつか言われた、教えられた定義。よく自分には才能無いか向いてないとか言ってる奴見かけるが、それでも言われたら出来るようになる、実は十分『優秀』な奴が多かったりする。逆に何も言われずに出来る真性の『天才』ってのはそんなに居ないんだとか何とか。

本当に才能無くて向いてない奴は言われても中々出来ないのだ。何故だと聞かれてもそんなもん知らん。こっちが聞きてーわ。

だから出来るまで繰り返すしか無いと、割と早い段階で学んだ。反復だけが馬鹿の唯一の味方である。能力や資質には先天的な差があるのだと、平等なまでに不平等な現実に嘆く暇があるのなら、成功の糧になる失敗を繰り返したほうが建設的だ。

何、繰り返ししてけば何時か実る事もある。成就が遅い事は多々あれど、完全に無理なんて状況は実はそんなに多く無い。それに実らないという事がわかれば、その時は別の道なり別の方法を探せばいいという答えが得られる。無駄だと解ることは無駄じゃない。違う選択肢、新たな可能性は、見渡せば案外転がっているものだ。

最下層は何時まで経っても出来ない奴でない。理由を付けてやらない奴、やるのを諦めてしまった奴。

それを教えてくれた反面とはいえ俺の人生において教師であった祖父は、しわだらけの顔でケタケタと悪戯盛りの子供みたいに笑いな

がら語っていた。

ああ他にも女の子の扱い方とかも俺に教えようとしてた気もするけど、大真面目な話一言一文字たりとも覚えていない。だって何語で喋ってるかわからんくらい意味不明なんだもの。

「こうなったら——特訓ですわ」

「今してるじゃん」

「お黙りなさい」

睨まれた。後何で俺は今正座してるんだろう。っていうかこのごつい見た目で正座ができる白式の脚部がえらい凄い。どういう関節構造になってんだコレ。

「聞いてます!?!」

「すいません違う事考えてました」

何でこんな状況になっているかといえば、話は十分ほど前に遡る。オルコットと別れて俺は再度機動の練習という墜落と衝突の負の無限ループを再開したのだが、数分と経たない内にまたオルコットが飛んできた。

“見てられない”。

顔を盛大にひくひくさせながらそう言ったオルコットは、的確かつわかりやすいアドバイスと、お手本になる実演をやってみせてから再度離れていった。

だが駄目だった。

またオルコット飛んできた。

それを何回か繰り返し返した結果、オルコットは離れるのが面倒になったのか傍らで俺にアドバイスという名の怒号カミナリを落とし続け——そして今に至る。気が付けばすっかりオルコットが俺の練習を見ている形だ。

セシリア・オルコットによるIS操縦基礎知識編は、結局アリーナの使用時間ギリギリまで続き、既に日が落ちて辺りは真っ暗闇になっている。

「やー、出来が悪くてすいません」

「全くですわ……!」

寮までの帰り道、横に並んで歩くオルコットは目に見えて憤慨していた。言い捨てて、練習に付きあわせた礼として献上したミルクティーの缶を一気に煽る。

「努力は認めます」

喉が潤って落ち着いたのか、口調が静かだ。今日は怒鳴ってばっかだったからなあ、こいつ。まー怒鳴る事になった原因は概ね俺なのだが。

「ですが、全然間に合ってますせんわ。明日からはもつとびしばし行きますのでそのつもりで」

「ちよつと待て。明日もやんのかよ」

「当たり前でしょう、貴方、自分の実力をちゃんとわかっています？」

「そんなもんお前以上つか誰よりもわかっているに決まってるんだろ。だから言ってるんだよ、時間凄いかかるのは誰よりも俺自身が一番知ってるんだ。そこまでお前の時間を使わせるのは悪い」

《雪原》での機動は『飛行』というよりは『跳躍』の——人間が可能な動作の延長だ。だからこそ先日の決闘で、ある程度はマシな動きが出来たのだろう。経験はかなり生かされたから。

しかし『飛行』はもう確認するまでもなく酷い。自在に飛び回った経験等無いから、これから俺なりの『やり方』を見つけて、研ぎ澄ませていく必要がある。これはとにかく時間がかかるのだ。俺みたいなタイプは特に。

「別に1から10まで見てあげるつもりなんぞありませんわよ付け上がらないでくださる？ 基礎だけに決まっているでしょう何様ですの貴方」

「何か本当調子乗ってますせん」

「それに、わたくしには基礎しか教えられませんわ。通常の飛行機動はあくまでも下地、その『白式』の真価は特殊装備を用いた特殊機動でしょう。貴方はそっちに関しては間違いなくセンスは持っていますから、後は自分で何とかなさい」

ぐしゃつと音を立て、オルコットは握り潰した缶を放り投げる。放物線を描いたそれは道端のゴミ箱に吸い込まれるように落ちる。ち

なみにオルコットはゴミ箱に視線どころか顔も向けていない。

「それに、誤解の無いように言っておきますが、わたくしは別に貴方の味方をする心算はカケラもありませんわ。これはあ、く、ま、で、も！ 将来必ず得るであろうわたくしの輝かしい勝利を彩るための布石です。相手が弱すぎでは得られる勝利も輝きませんもの、ただそれだけ。覚えの悪い貴方でもわかるように、他意など一切無いとはつきり伝えておきましょう。変な勘違いはしないことですわね！」

【音声の録音を完了しました】

よしよくやったシロ。俺が勝った後でこれを延々とリピートして聞かせてくれる。セシリア・オルコット、俺を生かしたことを後悔するがいい……………！

【生殺の与奪は話に上っていませんでしたが】

こういうのはノリなのだよ、シロくん。

【糊……………？】

違うそれ違う。

【海苔……………！】

それも違う。

「ま、教えてくれるならこっちは有り難い事この上ない。よろしく頼むぜオルコット」

「言葉より結果で応えていただきたいものですわね」

そんな風に話しながら歩いていたらもう目前に寮が見える所までやって来た。イコール晩飯まであと少し。何せさつきから空腹過ぎで真面目に辛いのだ。何かIS学園に来てから食欲が増した気がする。ISを操縦して——身体動かしてるからだろう。たぶん。

目的地は同じでも、だからこそ到着した後は各々の生活のために別行動することになる。手短に別れの挨拶を済ませ、食堂目指して早歩きという名のダッシュに移ろうとしたのだが、不意にオルコットが俺を呼び止めた。

「一つ、聞きたいことがあるのですけれども」

「スリーサイズと年齢は永遠の秘密だぜ……………はいごめんなさい真面目に何でも答えますだから右手で展開しかかっているライフル仕

舞ってください」

年齢は、本当に、絶対秘密だ。

「貴方、何のためにそんなに頑張ってますの？」

努力は認める。そうオルコットは言った。

今日だけで何十回墜落と激突を繰り返したのか、俺もオルコットも覚えてない、覚えてられないほど数えきれない位繰り返し返した。その努力を対価として得られたのは、ほんの少しの前進だ。釣り合っていない、と叫んでも誰にも咎められない程の僅かな成果。

なのに何故、そこまで必死の努力を続けられるのか。俺に向けられている蒼い瞳が、そう語っている。探るような、俺の心を覗き込もうとする瞳が、ただの好奇心から出た問いではないと示している。オルコットは何かを見極めようとしている。

「ん」

だから本音で答える事にした。右手の指を一本だけ伸ばして後は閉じる。そうして形作った手を、星が瞬く空に掲げた。オルコットの視線は俺の挙動に訝しげにしつつも、動いた右手を追わず俺の瞳を真っ直ぐに見つめている。

「一番になりたい。この世界で一番強い人より強くなりたい。そして得られる『資格』が欲しい。それが喉から手が出るほど欲しい」

かつて冗談交じりに“彼女”は言った。それはその通りに冗談で、ただお茶を濁すための言葉だったんだと思う。でもそこには確かに本音も隠れていたのだと解った。

■ ■ ■ しないのかという問いに、自分より強い奴が現れたら考えるって、彼女は言った。

資格だけでいい。

その先は贅沢が過ぎる。

その先は誰も幸せにしない。

その先は起こり得てはいけない。

だから、資格だけでいいんだ。

「そのために、俺はこの人生の残り全部を費すって決めたんだ」

心の底から言い切れる。笑顔でもって言い切れる。末路までこれ

を維持することは——祖父ちゃんのように——できるかどうかはまだわからないけど、それでもこれが俺の心からの本音だ。

今までずっと、常に強い感情と共にあった瞳が、初めてふっと和らいだ。宝石みたいな輝きの青い瞳で俺を見て少女は——将来、問答無用の決着を約束したその娘は柔らかく笑った。

「ああ、強い、はずですわね。そんな、バカみたいに真っ直ぐなら。本当、ヘンな“男”」

ふふ、と笑みと共に零れた眩きは、ちよつとしか離れていない俺に届かない程に小さな小さな声だった。白式のマイクつけときやよかった。何かこう聞こえんと余計何言ったか気になる。つか笑ってるって事は俺もしかして馬鹿にされたんだろうか。何か腹立ってきた。こっちは真面目に答えたつてのに。

「わたくしの見立ては、間違っていないかったですわね」

さつき垣間見えた柔らかい表情はもう影も形もない、蒼い瞳は強く鋭い輝きと共に。そして腰に手を当てて胸をはる例の——もう今後これセシリアポーズって呼ぼう。

「貴方は——全力をかけて撃ち抜いて、勝利を奪い取るに値する相手のようにすわ」

うんうんと何か満足気に頷いているオルコット。

そんな勝手に自己完結されてもこっちはサツパリ訳がわからんのだが。まあとりあえず、俺の答<sup>理由</sup>えはお気に召したらしい。

「はん。そういうお前さんも、何か頑張る理由がありそうだよな。目に見えて“芯”が通ってるのは見てりやわかるぜ」

「わた、くし……わたくしの、理由………」

ふっとオルコットの瞳から光が消えた。さつきまでずっと俺の瞳を真正面から捉えていた視線が、明後日の方向に逸らされる。方向性の変わった決意で以て、眼前の少女は自分の理由を語った。

「わたくしが戦うのは、“オルコット”を守るためですわ」

その一言にはきつと色々な意味と感情が、大量に塗り込められているのだろう。少なくとも俺はそう感じた。しかし含まれているものが多すぎて、その一つ一つが何なのかを判別できない。



それを唯一正確に理解しているオルコットはそれ以上語るつもりはないらしく、踵を返して寮の中に消えて行った。

「何だよ、気になる言い方しやがって」

まあ俺も理由は大まかにしか言っていないから、どっちもどっちかもしれないが。しかしあんな風に思わせぶりに言われたら気になってしまうのが人の性である。

ま、考えても仕方ない。それに軽い気持ちで深入りしていい様子じゃなかったし、出来る様子でもなかった。それにいろんなものが得意じゃない俺は何より自分の事で手一杯である。

「——随分と楽しそうだったじゃない、イチカ」

とりあえず明日もがんばるぞーそのために飯だーなんて呟きながら一歩目を踏み出した瞬間——柱から半分だけ顔を出してじとーとした眼でこつちを見る友達と視線がガッツリぶつかった。

「……………シャキツと出てこいや」

驚きすぎて逆にリアクションが平坦になってしまった。柱から半分だけ顔を覗かせる怨霊——改め、鈴に俺は搾り出すような声を投げかける。

ずるずると這い出てくる鈴。だからシャキツと出てこいや——！

「何やってんだよお前……」

「べーつーにー？ 通りがかっただけよ」

鈴と並んで寮に入る。ホラーみたいな登場には驚いたが、ともかく飯だ。俺は腹が減っているのだ。鈴も夕食はまだだというので、一緒に食堂に行く事になる。

「あーあ、何か私の心配し過ぎだったのかなー。思ったより周りに人いるしー」

「何の話だそりゃ？」

「さーねー。でも何か変な感じ」

鈴はうがーと頭をかきむしり、ぶるぶると首を振る。それでもすつきりしないらしく、その顔は困惑に染まりきっている。何か行動が動物みたいだと思ったが口に出さないのでおく。

「……………何か」

ぽつりと呟いた鈴は制服の胸の辺り——あ、こいつ地味に制服改造してやがる。今気付いた——をぐつと、掻き筆るように掴む。おいそんなにガツシリ握ったらシワになるぞ。

「胸の、この辺がちくちくする。よくわかんないんだけど、何だろう。この変な感じ」

「五寸釘でも飲み込んだんじゃないの?」

「ねえ知ってるイチカ、用具室の棚の上にね、何に使うかわかんないくらい長くてぶつとい釘が置いてあるの!」

「そうかい、少なくともそれは人に飲み込ませるものじゃないと思うぞー絶対やつちやだめだぞー」

「大丈夫よ。直に打ち込<sup>ぶ</sup>むから」

「そのどころが大丈夫!?!」

【“一夏”、“一夏<sup>いちか</sup>”、“イチカ”】

【“……………” “イチカ”?】

▽▽▽

『人間関係』

めんどくせえ。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

一夏が変だ。

それが篠ノ之箒と話している、また一緒にいる時の一夏を見て鈴が思った事である。

最初は箒の“ズレ”た視点の方ばかり気になっていた。しかし直談判によってその問題は解決した。

そう、問題を“解決”した。だからこそ鈴の心に違和感という名の棘が刺さる。織斑一夏は鈴の友達だ。親友だ。今回の様に一夏が不当な扱いを受けていれば当然抗議に声を荒げるし、もっと直接的でわかりやすい行動だつて起こす。

そうする心算を鈴は昔からずっと持っていた。

そうする事が出来るようにと、影でこっそり努力だつて続けていた。

——おかしい

心の中で声がする。これは、この状況は何かおかしいと心の中で疑問が生じる。

どうして鳳鈴音が織斑一夏を“助ける”のに努力が必要だったのか。それを思い出した瞬間に、答えはあっさりと導かれた。

——一夏が何もしてない。

何もできなかった。何故か。それはいつだつて気付くのは何かが終わった後だったからだ。気付くのも、行動するのも、いつだつて一夏の方が早かったからだ。

一夏は時々すごく急ぐ。見ていて不安になるくらいに急ぐ。でも鈴は何も出来ない。出来る余裕が無い。いつだっていつだって見失わない事だけに精一杯だった。つまりはずっと見ているだけである。そのクセ向こうは鈴の事に無駄に気付くのである。友達とケンカした時とか、大切な物を無くした時とか。でも全部助けてくれる訳じゃない。鈴が出来ること、鈴がやらなきゃいけない事には絶対に手を出してこない。普段は適当なくせに。

おかげでこっちは感謝の気持ちも積もりに積もって大変な事になつていく。だから常に返済の機会をうかがっているのだが、一夏の方が歩くのが速いから、何時だって置いてかれる。付いて行くのに必死なのだから鈴が先導する機会が巡って来るわけがない。

だから、今回は『おかしい』。

——何か、ある。

この問題に気付いてはいるはずだ。

あそこまであからさまな、考えるまでもなく一目瞭然な“ズレ”。そんな見方をされている事に一夏が気付かない筈がない。だが問題は解決されていなかった。

鈴が行動を起こすまで放置されていた。だから問題は解決されていないのではなく、解決しなかったという事になる。

付き合いの長い鈴は知っている。一夏が全力なのは喜ばれただけでなく怒哀もだ。だから今回みたいに無遠慮な認識を常に突き付けられている状態をガマンできるとは、ガマンするとは思えない。どう対処するかまではさすがにわからないが、“何か”しているはずなのだ。鈴が行動するまであの“ズレ”た関係が維持されていた事が、一夏がその関係を許容していたという事がどうにも腑に落ちない。

——そー、私には言えないってか。

初めて出会った日。小学校五年生の時。初めて一夏と鈴は並んで立った。

その頃は、そんなに身長は変わらなくて、目線も同じくらいだった。けれども一夏は鈴をあつという間に鈴を追い抜いていった。

挨拶がわりのハイタッチは直ぐに背伸びが必須になった。

何時からかジャンプしないと届かなくなった。

——また置いてこうたつて、そうはいかないわよ。

それに気付いたのは何時だったろう。覚えてないけど結構昔であるのは間違いない。というか昔だから覚えてないのかもしれない。

結局、最初つから鈴と一夏が対等だった事は一度もなかった。鈴はただ一夏に付いて行っているだけだ。初めて出会ったあの日に、差し伸べられた手を握った日からずっと、そう。

それに気付いて思ったのだ。

今までは大切だ。

でもこのままは嫌だ。

——シエンロン甲龍

思いから来た努力は身を結び、右手に黒いブレスレットの形をして存在している。

これこそが証である。

かつての鈴と、今の『鈴』は違うということの。

泣きそうな顔で、大好きな友達の背中を追っかけていた女の子はもう居ないのだ。



筈が変だ。

いやまあ挙動不審という点ではいつも通りなんだが。今更推測するまでもなく彼女は『織斑一夏』に好意を抱いている。だから外見と存在の位置が『織斑一夏』と同一である俺と物理的に接近すると、酷く慌てたり、無理があり過ぎる誤魔化しをし始める。そんなホーキちゃんの微笑ましいリアクションは今ではすっかり茶飯事である。ぶつちやけると慣れた。

ただ最近、少しおかしい。

不意の接近に慌てるという行動までは同じだ。が、その慌て方が少し違う。今まではただ赤面するだけだったが、最近は一度照れた後に罪悪感の様な——なんとも言えない感情をちらつかせるのだ。

「基本動作はまあ、ギリツツギリ及第点ですわね。ギリツツギリ、ですけど」

「墜落しないなら飛ぶのもいいかなあって思えてきました!」

「どうしてあそこまでバカスカ墜落できるのか、わたくし最後までわかりませんでしたわ」

「減速の存在を忘れるのがポイント」

「わかっているなら直しなさい! ……それにしても。飛行はデータラメかと思えば、武装展開や細かい動作は並以上——いえ、ハッキリ言って代表候補生に勝るとも劣らないレベル。全く意味がわかりませんわ。貴方どうしてそこまで能力が偏ってますの」

「そりゃ俺も知りてー……あ。そういやよ、俺最初の頃はISを『展開する』事でなく『展開しない』事を練習してたんだよ。何かちよつと意識しただけでバラバラ展開され出しやがるからよ。柵の上のもの取ろうと背伸びしたらIS出てきて普通にビビってたんだが——」

「!?」

「……ああ、やっぱりこれも何か変なのな」  
俺と箒は一緒の部屋で暮らしている。なので一日の内の結構長い時間を共有している。そんな相手に妙な反応をされたら気になってしょうがない。普通の赤面に慣れたからこそ変化が目につくのである。

さあて。

果たして何が原因なのやら。俺が知る限り、箒との関係を変化させる行動および事件は起きていない筈なんだが。いやまあ俺もそこまで心配りできるタチでもないから、気付かん内に何かやらかしたる可能性もあるが。

「ともかく。戦闘機動は間に合いそうにありませんわね。後は基礎の復習と《雪原》の特殊機動の練習に充てた方が建設的でしょう」

「クラス対抗戦、か。思ったより早くやるんだなあ」

「早いからこそ現状はこちらに有利ですわ。一年のクラス代表で専用機持ちは一組代表である貴方と、四組のクラス代表の二人だけ。それに四組の専用機も現状未完成、対抗戦では使用してこない可能性が高

い——専用機と訓練機では性能の差は歴然です。技術不足はカバーできるでしょう。だからといって油断等は決してしないように」  
「油断とか出来るほど器用じゃねーよ、お前じゃあるまいし。てか四組にも居るのか専用機持ち。初耳だぞ」

「専用機が未完成なせいか情報が出て来ませんの。わたくしも余り詳しくは知りませんわ——お前じゃあるまいしってどういう意味かご説明願えます答えなさいさあ早く答えなさい」

箒の態度が変わり始めたのに気付いたのは少し前だ。記憶を掘り返してみても、原因と思しきモノは一向に見当たらない。そもそもここにきて今日まで、大きなイベントなんてオルコットとの試合くらいである。

無数の女子に囲まれて奇異の視線に晒されるのは異常事態ではあるが、ここではただの日常だ。正直もう慣れた通り越して飽きた。

鈴という特定の女子が極端に俺に接近した事で箒の心境に変化が起こったのか——いや違うか。だったら箒は怒る筈だ。あんな複雑そうな表情をする理由にはならない。

「念の為にクロス・グリッド・ターン二次元躍動旋回くらいは覚えておいた方がいいとも思いますがすけれども……貴方の物覚えの悪さを考えると、間に合いそうにありませんわね」

「また何かかつこいい名前出てきたなおい」

「《雪原》を使えば、同様の機動は可能ですけども……そもそも《雪原》さえ使えば必須の機動は概ねカバーできていますものね、貴方」

「え、マジで。俺適当に跳んでるだけよ？」

「呆れるのはもう何度目かわかりませんわ」  
だが。

箒の態度が変化したのは鈴が転入してきた後。これは確実だ。やはり鈴との接触が原因として一番怪しい。鈴——それにしてもあいつ育たねえよなあ。中学入ったくらいで身長その他もろもろ全部打ち止めになってんじゃないのか。

いかん思考が逸れた。

だが鈴と箒の仲は決して険悪ではない。むしろ鈴はちよくちよく

箒に話しかけているみたいだ。昔の『織斑一夏』に興味でもあるんだろうかねあのツインテ。

まあそれ俺じゃねーけど。

「……………」

「どうかしまして?」

「んーん。何でもねー、うん何でもねー」

「気になる言い方ですわね」

「別にオルコットは何時その盛大な寝ぐせに気付くのかなーとか全然思っていない」

「え、へっ!? ど、どこですのどこですの! そんな確かに今朝セットしたはずですよに!」

「あははは嘘に決まってるじゃはいごめんさーい調子乗りましたー銃下ろしてー」

気になるのは鈴の転入初日——つまり鈴と箒が初めて出会った日だ。昼食の時、俺が先に席を立つ前、鈴の様子が少しおかしかったのが気にかかる。そこしか気にかける所が無いとも言いが。鈴と箒は気がついたらよく話すようになっていたが、そうなる何か切欠があったはずだ。あの時俺が席を外した後で何かしらあったとも考えられなくもない事もない。

何か段々考えるのめんどくさくなってきた。

いいやもう。今日部屋帰ったら箒に直に訊こう。

大体俺みたいなデリバリーを欠片も持ち合わせてない輩が、繊細な乙女心を分析しようと試みるなど無謀極まりない。

あと俺が原因だったら早めには正しときたいところである。ホーキちゃんみたい根が真面目なタイプは色々溜め込みやすかったりするのだ。そういう場合は結構危険なケースに発展する場合がある。

加えて彼女は恋する女の子である。女心は元々わけがわからんが、色恋の真っ最中だと本気で理解不能だ。暴走した愛情が爆発したとか突き刺さったあの瞬間は未だに地味にトラウマである。そうなった女の子に刃物を近づけてはいけません。絶対にいけません。

「もういい時間ですし。今日はここまでにしましょう」



「お、もーこんな時間か。道理で腹が減るわけだぜ。そうだ、オルコツト。何だつたら一緒に食堂いかねーか。色々教えてもらってんだし奢るぜ?」

「あら。見かけによらず殊勝な心がけですわね——そういえばデザートが最近追加されていた筈ですし、まあどうしても言うなら仕方なく行ってあげてもよろしくてよ」

「そーいや何か十品位一気に増えてたな。やっぱり女子が多いせいかなデザート関連がやたら充実してるよな、この学園。いいゼドンと来い。好きなだけ奢ってやるぜー!」

「……えらく気前が良いですわね?」

「おいおい変に疑うなよ別に油断させといて後々体重関連でいじろうなんて地味に長期の嫌がらせなんてこれっぽちも思ってたなうおア——!?!」

「何だか、わたくし、急に射撃練習がしたくなりましたの、付き合っただけけます? にんげん 的の眉間を打ち抜く練習。あら、動かないでくださいな。外れるじゃありませんの。ねえ、

い、ち、か、さ、ん——!?!」

「今までで一番笑顔だけど今までで一番こえ——!!」

▽▽▽

鈴は変だ。

何故、何故。一夏とああも近い距離に居ることが出来るのか。箒に出来ない事を——やりたくてやりたくて仕方ないのに、でも出来ない事を、いとも簡単に出来てしまうのか。

前触れ無く飛びついたりだとか、そのままぶら下がったりだとか。くだらない話をして、馬鹿を言っつて笑われて、言われた馬鹿に笑う。とにかく鳳鈴音という少女は己の欲望という感情に忠実だった。それが、狂おしいまでに羨ましくてしようがない。狂おしいまでに、——しくてしようがない。

——おもいだして。

篠ノ之箒は篠ノ之束の妹である。故に『IS』の出現によつて箒の生活は一変した。否、激変した。

住み慣れた生家を出て、転校を繰り返す日々。それに生来の人付き合いの悪さも相まって、今日まで友人の類は殆ど出来なかった。両親とも離れ、本当にひとりぼっちになつてしまつた箒に待つていたのは、行方不明の姉を探すための執拗な監視と聴取の日々である。

それを耐え切れたのは、胸の奥に——これだけは絶対に亡くすまいと——秘めていた遠い日に抱いた恋心があつたからだ。

幼馴染の織斑一夏にいつかまた会える日を夢見て、見続けて、だからこそ今日まで篠ノ之箒は『篠ノ之箒』であれた。もし一夏に出会えていなくなつたらと想像すると、身体の芯が氷のように冷たくなつて身震いする。

極端な言い方をすれば、箒にとって『織斑一夏』は生きる理由そのものですらあつた。

——おねがいだからおもいだして。

確かに最近の箒の認識は身勝手だつたと思うし、それは反省している。箒も目的を見失つていたところもあつた。あくまで目的は一夏の記憶を取り戻させるのであつて、一夏を変えたい訳ではなかつたのに。

ずっと夢見てきた。あの日の——別れの“続き”を始められる日をずっと夢見てきた。ただそれだけを支えにして、今日まで箒は箒で在つた。在れた。

だからそれだけは絶対に諦められない。それを諦めてしまうという事は、箒が箒である根幹を捨て去るのと同義なのだ。

一夏が記憶を取り戻す保証はない。一夏が箒の知っている一夏からかけ離れているなんてもうとつくに理解している。でも今更止まれない。止まつてしまつたら終わつてしまふ。

——でないとなつたし、

だから奮い立たせるのだ。

とつくの昔に軋むことすら止めてしまつた心に、更に負担をかける。

今緩めてしまったら、本当に一夏に手が届かなくなってしまおう。せつかくまた会えたのに。ほんのわずかに残り続けた小さな可能性すらも、掌の上に落ちた雪の様に溶けて消えてしまう。そんな予感が心に焦燥をもたらして、灯された小さな火種は直ぐに業火へ変わっていく。

鳳鈴音と居る時の一夏は、箒の知らない思い出を語る。知らない感情を見せる。そしてどんどんその気持はあの鈴という少女に傾いていくのだ。本来ならば箒に傾く分も少しはある筈なのに、記憶が無いからそれも無い。

こんなのは変だ。

だがこれが現実だ。

変えるためには、戦うしか無い。戦って勝ち取るしか無い。向こうに傾いてしまったのなら、こっちに引き戻すのだ。こっちを向かせるのだ。

ただ待っているだけではもう駄目だ。あの鈴という少女が現れてしまったから、それではもう駄目なのだ。だって記憶が戻っても、一夏が鈴に“傾ききって”しまったら、箒の望む“続き”は永遠に訪れることなく消滅する。

それは嫌だ。嫌だ、嫌だ嫌だ。

——わたし、

ずっと一人ぼっちだった箒に、あのツインテールの小さな女の子は言ってくれた。友達になろうと、陽だまりみたいな笑顔と共に。こんな箒に言ってくれたのだ。

胸の奥に小さな痛みがはしった。けどもそれを押し込めた。孤独の日々はその程度が可能になるくらいには箒を強くした。

ずっとひとりだった箒はともだちとのつきあいかたなんて、しらない。

だからいらない。

ともだちなんていなくていい。

一夏さえ居るのなら、箒はそれでいい。

それ以外、何も要らない。



「ふぎけるなあッ!!!」

「そんなに怒鳴らなくてもいいじゃないのよ!!!」

何か部屋戻ってきたら鈴と箒が戦争してた。鼓膜超ビリビリする。

しかし人間驚き過ぎるとリアクションが面白みの欠片もなくなるよな。今の俺みたいに。

「何で部屋変えくらいでそこまで怒るのよ、意味わかんない!! 私はただ箒も変に神経使うんじゃないかって——」

「それが余計なお世話だと言っている! 一夏と私の問題に、部外者のお前が勝手に割って入るな!!」

「はああああ?! 何よその言い方、ふぎけんじやないわよ! 誰が部外者よ誰がああ!! 私は一夏の友達なの、一夏の問題には首も手も足も突っ込むわよ!!」

ちよつと待ってそれ入れ過ぎじゃない?

つていうかそれもう攻撃じゃない?

未だ入り口付近に突っ立ったまま、そんな事を考える。

「大体お前は普段から一夏にベタバタバたと馴れ馴れしすぎる!! もう少し節度というものを覚えろ! それでも大和撫子か!」

「何であんたにそんな事いわれなきゃいけない訳!? 私のやり方は私が決めるわよ! それと私は中国人だ——ツ!!」

顔を真赤にして怒鳴りつける箒に、鈴は両手を振りあげながら怒鳴り返した。縄張り争いで威嚇し合う猫を思い出してもらいたい。どっちも大体あれで合ってる。

「ともかく部屋は絶対に変わらない、絶対だ! これ以上私の、私達の関係に侵入はいしてくるといふのなら——!」

目にも留まらぬ勢い、例えるなら電光石火。箒は常日頃からベッドの傍らに立てかけてある竹刀(手の届く位置に置くのが癖だそうです)を手にとって振り上げた。

「力尽くで、叩き出してくれ!!」

「面白いじゃない、やれるもんならやってみなさいよ……！」

箒は竹刀を正眼に構え、釣り上がった瞳に殺気すら込めて、言葉をも刃にするように言い放った。しかし鈴は一切怯む事はなく、むしろ楽しそうにツリ目の瞳をぎらつかせた。どこからか取り出した予備のりボンを拳に巻きつけ、竹刀に向かって構える。

鈴はあの見た目通りかなりすばしっこい。例え相手の箒が剣道で全国大会優勝の経歴を持つ猛者だとしても、間違いなく先手を取るだろう。しかし剣道の熟練者の見切りを侮ってはいけない。例えどれだけ相手が速くても、その眼は動きを捉えている。だから先手必勝で飛び出した瞬間、カウンター気味に叩き込まれたりするのだ。ちなみにコレ実体験である。

「へぶっ!？」

「——!？」

セーフ。間に合った。

鈴が飛び出すのより、俺が駆け寄る方が一拍だけ早かった。今まさに箒に飛びかかろうとしていたその首根っこを引つ掴む。身体は前に行くが、襟を俺が掴んでいるので進まない。結果として首を締められる形になった鈴が奇声を発する。

鈴の襟を掴んだ瞬間、確かに見た。鈴の動きを捉えた箒の眼がざらりと鈍い光を放つのを。

「ちよつと一夏! 何すんのよ離しなさい——下ろせ——!!」

「いいからちよつと頭を冷やせ」

そのまま鈴の身体を釣り上げて——軽いなあ——部屋の外にぽいと放り投げた。間髪入れずにドアを閉めて、施錠。最後に万が一に備えてドアにもたれかかる。

ドア越しにウオオオオ開けるオオオとか聞こえてくる。つていうかドアがめつちやギシギシ言ってるんだけど、蝶番のところ凄いガタガタ言ってるんだけど。何か鈴の奴、ちよつと会わなかった内にえらい馬鹿力になってないか。

だれか——! 地底のギャング呼んできて——! と現実逃避気味に叫んだら、誰が海老の味か——! とドアの向こうから返ってくる

る。鈴のやつ思ったより冷静だな。こっちは大丈夫そうだ。

「一夏」

今は後門のツインテールより前門の羅刹である。ともかく会話だ！ 会話で何とか和平に持ち込むんだ！ 動けないこの状況で打ち込まれたら結構あぶねえ！

しかし、そこに殺気をまとった羅刹は居なかった。居るのはおどおどと慌てる一人の女の子である。がたんという音は箒が竹刀を取り落とした音。

「ち、違うんだ。これはついカツとなつてしまっただけで……その」  
竹刀を握っていた手を胸の前で彷徨わせながら、箒は俺を見つめている。なぜか、許しを請うような眼で。

「私のこと嫌いに、なった、か……？」

「いや。そう直ぐに人の評価は変わらないが」

「そうか、そうか。ならよかった！」

胸の前で指を突付き合わせていた箒は、俺の言葉を聞いてぱあと顔を輝かせた。それで総ては終わったといつももの箒に戻ってしまった。それを証明するように、帰りが遅いとがちよつとした些細な日常会話を始めてしまう。

———(なんだこれ)

この短いやりとりだけで、思い当った事がある。箒にとって重要なのはあくまで俺の反応だけ。鈴に“暴力”を向けた事——それを叩きつける心算だった事は一切考慮されていない。それによってどういう結果を招くかも、きつと。たぶん。

直感的に確信した。

事態は俺の思惑を飛び越して、面倒な方向に突き進みつつある。

翌日。

鈴と箒は昨夜の様に洒落にならないケンカにこそ発展しなかった。その事には安堵の溜息である。だが、それでも顔を合わせるなり。

「ふん！」

「ふんだ!!」

である。険悪極まりない状態である。挟まれる俺の身にもなれお前ら。

更にこれだけでは終わらない。頭を抱える俺の目に入ってきたのは、一枚の紙片である。

『クラス対抗戦日程表』<sup>リーグマッチ</sup>と書かれたその紙には、俺が最初に戦う相手の名前が書かれている。当然だ、それを伝えるための紙なんだから。

一回戦の相手は——鳳鈴音。

そこには俺の世界で一番大切な友達の名前が書かれていた。

▽▽▽

『篠ノ之箒』

問題外。

ただし姉の行動のみ注意の事。

総合脅威度：皆無

——とある人物の手記より抜粋。

▽▼▽

一回戦の相手は代表候補生。しかも流れてきた情報によれば専用機持ちと来た。こちらのアドバンテージは実質消失したと考えていい。

だが、手札の中に切札は残っている。

——『零落白夜』

雪片式型を介して発動される、白式の単一仕様能力<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>。能力の効果は『エネルギーの無効化』。エネルギー系の防御、また攻撃ですらも問答無用で切り裂いて消滅させる光の刃。それが零落白夜だ。どうでもいいけど名前から効果がまるで連想されないのはいかがなものか。もうちよつとわかりやすい名前は無かったのか。

それはさておき。

ISの防御はエネルギーシールドと絶対防御の二段構えが主だ。シールドで受けきれない攻撃は絶対防御で受け止め、操縦者の身を完全に守る。しかし絶対防御はその分命ともいえるシールドエネルギーを多大に消費する。

その仕組みの中、零落白夜は『一段目』のシールドを完全に無視<sup>切り裂く</sup>する。つまり零落白夜に対してISは絶対防御を発動せざるを得ず、多大なシールドエネルギーを消費するという訳だ。

対ISにおいてこれ以上無く有効に見える零落白夜だが、世の中の理が大体そうであるように等価交換に縛られている。要はリターンのためにはリスクが必要ってこった。



一つは純粹に対価。

エネルギー総てを切り裂く光刃を発動するためには、こちらのシールドエネルギーをも大幅に消費せねばならない。

オルコットとの試合で訳の分からない決着になったのはこれが原因だ。試合で最後の一撃の瞬間、俺は無意識ながらその零落白夜を発動させていた。しかし残り少なかった白式のシールドエネルギーでは、攻撃が届く瞬間まで零落白夜を維持出来なかったのである。だから零落白夜の発動による消費で白式のシールドエネルギーが0になり、試合が終了した訳だ。

もう一つ、容量の占有。

白式は雪片式型を介して零落白夜を発動出来る代わりに、他の武器を一切装備できない。

本来ISには機体ごとに専用装備——『初期装備』<sup>プリセット</sup>を持っているが、状況と必要に応じて新たに装備を『後付装備』<sup>イコライザ</sup>する事も可能である。

後付装備をどれだけ搭載できるかは、機体ごとに設けられた『拡張領域』<sup>バズロット</sup>の容量に左右される。この容量がたくさんあればたくさん武器を積めるといふ寸法だ。無論白式にも拡張領域はある。あるのだが、無い同然だ。何故なら既に使ってしまったからだ。雪片式型を装備するために、白式は初期装備に加え後付装備のための領域までガッツリ使用しているのである。

良くも悪くも『零落白夜』は『切札』なのだ。

更に厄介なのはこの切札を『切札』にせざるをえない事だろうか。あくまで切札の内の一枚であるならまだいいが、一枚だけというのはよろしくない。

何せ零落白夜は単独では目立ち過ぎる。シールドエネルギーを切り裂けるなんて相手に警戒してくれと言ってるようなもんだ。おまけに視覚的に凄いい目立つんだアレ。超光りやがる。もうちよつと慎ましく光れないのか。

【無理です】

だそうです。

とまあそんな訳で切札とはいえ安易に頼れるもんでもない。何せ

使いどころを間違えればこちらの首を締めるところか切り飛ばしかなないのだ。

だがやりようはある。

というかやるしかない。

相手の零落白夜への警戒を狙うのもいいし、もしくは相手の警戒を正面から『切札』で粉碎する手もある。零落白夜はリスクに見合った——下手したらリスク以上のリターンを望めるのだから。

だがその場合何よりも『命中』が必須となる。どれだけ強力な攻撃でも、相手に届かなければ意味は無い。故にそれを補助とする機動を習得することは、手札を増やすと同時に切札の強化にも繋がるという事尽くしである。

問題があるとしたら俺がポンコツなせいですんなり習得できないことか。

「イグニッションブースト瞬時加速ね。速い分、失敗したら立て直すのしんどいなあコレ」

「成功させればいいだけの話だ」

特殊力場で無理矢理急停止したせいで60度位傾いた視界の中、俺の眩きをバツサリ斬り捨てたのは本日の特別コーチ——織斑先生である。

最近放課後の自主練は大体一人でやっていたので、誰かと一緒というのは地味に久しぶりだ。少し前までは専らオルコットが付き合ってくれたが、最近は何か自分の機体で用事があるからと放課後は姿を見えていない。

箒が訓練機を持ち出して参加した事もあった、が。

「しかし零落白夜にしるイグニッションブースト瞬時加速にしる、ガスガスエネルギー食うのは何とかありませんのかね……」

「そういう文句は使いこなしてから言え」

ふよふよ漂って(最近ようやく出来るようになった、地味に嬉しい)近づく俺を織斑先生は鼻で笑う。浮いてる俺の方が物理的に上に居る筈なのだが凄く見下されてる気分。

今教わっている機動の名前は『イグニッションブースト瞬時加速』。

発動の瞬間に一瞬でトップスピードに到達する特殊機動である。

とんでもなく俺向きであるし、式型（近接武器）を当てるために必須な接近にも役立つ。教えられているのは、今の俺にこれ以上なく相応しく必要な機動。さすがの見立てだぜ千冬さん。

「せめてもう少し零落白夜の燃費が良けりやなあ」

「必然の必要だ。大体『雪片』の特殊攻撃を行うのにどれだけのエネルギーが——」

そうしたら色々やりようもある。意識を繋げる。波長を合わせる感じか。すると握った式型が金属音と共に変形し、実体の刃が消失する。代わりに現れたのは真っ白に光り輝く刀身だ。そして光刃が出現した瞬間から、シールドエネルギーが減少を始める。

（よっ）

ボツと爆発する様に光が形を変える。噴水のように迸った白い光は、従来の四倍近い長さになった辺りで霧散した。正確には霧散させた。これ以上出してたらエネルギー無くなるからだ。実際今の一瞬でエネルギー一気に半分位減ってるし。燃費さえクリア出来れば——試合開始直後に思いつき伸ばして相手ぶっ刺してやるのに。そうは問屋が卸さんらしい。

他にも先端だけ肥大化させて斧みたいにしたりとか、ぐねぐねさせて鞭みたいにしたりとか。一回試してみたら結構形は変えられた。

しかしデカくしたせいか不安定になってるせいかは知らんが消費もでかくなる。結局デフォルトの形——刀の形が一番安定していて消費が少ない。

これはちよつと普通に残念。形が変えられるなら鉈とか斧みたいな形にでもしときたかったところである。俺みたいに根が適当な奴は『ぶっ叩く、ついでに切る』みたいな感じのが性に合ってる。というか刀はどうにも堅苦しい癖に変に繊細だから困る。

（ちゃんと振れって言われてもねえ……）

バットみたいにぶん回してターゲット的切りまくってたら箒にスゲー怒られたのを思い出した。何でそんな振り方で斬れるんだってよくわからんキレ方してらっしゃったつけ。振り方も何も刃をしかるべきとこに当ててやりやあ切れると思うのだが。

刀も結局は刃物だ。なら多少繊細ではあっても根本の『切り方』はそー変わんない。

ぶん、と横薙ぎに式型を一振り。

振り始めた瞬間に光が灯る。

光刃が斬撃の軌跡を描く。

振り終わる辺りで光が消える。

そして、金属音と共に実体剣に戻る。

「こっちは実際使えるかなつと」

攻撃の瞬間、命中の瞬間だけ零落白夜を発生させる。燃費を考えた結果これに行き着いた。ちなみに消しっ放しにするか実体剣に戻すかはケースバイケース。零落白夜のオンオフ自体は簡単なので、このくらいならどうとでもなる。

「一夏」

「はい？」

「今、何をした？」

「何つて。ワン切り零落白夜の方？ それともフレキシブル零落白夜の方？」

「……………」

どっちかわかんなかったのでどっちもやって見せる。バトンみたいにぐるぐる回しながら光を灯したり消したり、また光刃を出刃包丁みたいにしてみたり。

最初はぼかんとしていた千冬さんだったが、それが段々と訝しげな厳しい表情に変わっていく。やがて俺から視線を外すと何かを思案し始める。

どうでもいいけどさっきのぼかんとした顔かわいかった、

「一夏、ちよつと来い……………何故逃げる」

「いや別にほら不埒な事とかマジ考えてないです一瞬油断とかしてないですマジで」

「何を訳の解らん事を言っている。いいからちよつと来い。白式のデータを見せろ」

さてここで問題がある。現在俺はISを装着しているので普通の

人間よりもかなり全高が高い。そしてデータウインドウは当然俺の頭の付近に出る。なので他人にそれを見せるためには高さを調整せねばならないのだ。一応跪いてみたが、それでもまだ高い。しかしISを消せばデータを出力する事も出来ない訳で。どうしたものか—— たんたんと軽い音と共に千冬さんが肩の辺りに飛び乗ってきた。さすがというか何というか。

とりあえず言われるままにデータを表示させていく。まあ俺は指示してるだけで、実際データを引っ張り出してるのはシロなんだが。

「……………普通の零落白夜だな」

「なにその普通じゃない零落白夜があるみたいな言い方」

「何もおかしい所は無い。私が使っていたものと何も変わらない……」

——何だこのエネルギー転換率の数値は…………？」

考え事に夢中になっていられるらしく、俺の疑問に返答はない。フランクな口調にもノーリアクション。口を挟んでも無駄そうなので黙る。

『零落白夜』については俺より千冬さんの方が何倍も詳しい。

かつて彼女が世界一の称号を得た時、乗っていた機体も同じ能力を持っていた。故に付き合いは俺より遥かに長いし、理解度は比べるまでもない程差があるだろう。

「一夏。零落白夜の訓練にはどのくらい時間を割いた？」

「そんなにやってない、かなあ。機動が駄目すぎてそつちばかり練習してたんで。っていうかこれに関しちやオンオフ以外に特に覚える事無いし」

「そう、か」

「結論が出たなら教えてくれると嬉しいんですが。何、もしかして俺すごい変な使い方してたとかそういう」

「いや…………」

地面に降りた千冬さんは難しそうな顔のままこちらを見上げる。数瞬あった間は、恐らく言うことを頭の中で整理していたのか。

「問題がある訳では、ない。ただお前は私が思った以上に零落白夜を使いこなして——いや違うな。零落白夜という能力自体の扱いを、お前はもう完成させている」

「はい？」

「そうとしかいえん」

「んー……？」

さあて。

何かまた変な話が出てきやがった訳だが、これに関しては何も思いつきもない。思い当たる事がある。

「俺がどうこうつていうか、白式がそういう機体つてだけなんじゃねーのかなあ、コレは」

「どういう事だ」

白式の装甲が光の粒子となって溶けていく。長大な足が消失したことで、俺の身体は宙に取り残され——着地。地面にどかりと座り込んだ。

「そもそも零落白夜——ワンオフ・アビリティ単一仕様能力は本来『第二形態』になつてから発現するのが普通。でも白式はまだ第一形態。ワンオフ・アビリティなのに単一仕様能力が使える。つまり最初から単一仕様能力を最大限に使用することを前提に造られてる機体」

それが一番可能性があるというか妥当だ。もしくは俺がすつごい零落白夜と相性が良いって可能性もあるが……これはどうにもピンと来ない。何せこれまでの人生で努力と下地無しで並以上を發揮してきた事なんて殆ど無いし。根拠のない期待は何の役にも立たんのだ。抱くだけ時間と容量の無駄である。

「確かにそういう見方もあるか。私の考え過ぎか……？」

「そーそー、難しく考えすぎなんだよ千冬さん。何にしろ、使えてる分にはいいーじゃんか。利はあっても害はないしー」

「……………お前と話していると考える事が馬鹿らしくなってくるな。それと織斑先生だ」

「じゃあ馬鹿らしついでにそのしかめっ面を可愛らしく緩めてみだんツ！」

「一夏」

「ん？」

IS解除するんじゃなかった。

ぶっ叩かれた頭が超痛い。頭をさすりながら、千冬さんを見上げる。

「……………大丈夫か？」

「そういう顔されると大丈夫じゃなくなるからさ。普段の仏頂面でしかめっ面で可愛げのない顔してくれたら安心するかなっ！」

次の瞬間、俺はこれまでの中でも最速で白式を展開し——そして生涯初の瞬間<sup>イグニッションブースト</sup>加速を成功させた。襲ってきた千冬ちゃんから逃げるために。

「あ、そうだ。ちよつと聞きたい事あったんだ」

すつかり夕暮れである。成功の一回が良い切欠になったのか、俺にしては珍しく順調なまま訓練を終える。ISを解除し、いぎピットに向かおうという所で千冬さん呼び止めた。

「箒って昔っからあんなに『織斑一夏』の事大好きだったの？」

何か千冬さんがすげー驚いた顔してる。

さつきと比べ物にならないくらいぼかんとしてる。最初から地味にずつと持ってた竹刀取り落とすくらいぼかんとしてる。ぼけーつとしてる。

(……………)

だから普段からもうちよつと頻繁に気を緩めてくれて言ってるんだ。不意打ち気味にそんなの見せられる方の身にもなってくれよ。耐性付けさせてくれよちくしょうめ。

「気付いて、いたのか」

「いや。あれは気付かん方が難しいでしょ……………」

そんな驚かれても特別困る。というまさかか気付いてないと思われてたのか。ああ絶対思われてたなこれ、すげー意外そうな顔してるこの人。

「……………」

「あ、ゴホン。篠ノ之か……………そうだな」

ジト目で睨んだら、わざとらしい咳払いの後に語り出す。この千冬

ちやん誤魔化してるのがバレバレである。しかし剥がれ落ちるかと思われた織斑先生は即行で修復された。相変わらず切り替えの速さがとんでもない。残念なような、頼もしいような。

「何時からかは断言できません。転校する時には恐らく惚れていたとは思うが」

「どのくらい?」

「そんな事まで私が知るか」

「それもそーか。じゃあぱつと見ておかしいと感じた事は? 何か思い詰め過ぎとか、そんな感じは?」

「話がよく見えんな。何かあるならまず事情を話せ」

—— あれは依存の一手手前だと思う。たぶん。

鈴と派手に一戦やらかした辺りから、箒の行動に変な意味で加速がかかった事を説明する。

最近の箒は『織斑一夏』の反応に過敏になっている。嫌われたくないためにはどうすればいいか。相手の機嫌を損ねない事。だから相手の意向を無条件で肯定して飲み込む。自分の意見を封殺しても。絶対服従と言える程ではないが、このまま進んだらそうなりかねない予兆はある。

「あの娘にとつちや芯みたいなものか。道理で根が深い訳だ」

ただそうなった理由はこの場で検討が付いた。千冬さんから転校した後の箒の境遇を聞いたら、かちりと嵌るように疑問が氷解する。箒の『織斑一夏』に対する想いがどうしてあれだけ一途で本気なのか、ようやく本当に理解できた気がする。

家族と離れ離れになって見知らぬ土地を転々とした小学生の女の子は、それを支えにしたんだろう。辛い現実と戦うために。恋心を彼女は剣に変えたのだ。

この事態は『俺』のせいか。

再会したのがちやんと『織斑一夏』だったら、きつとこんな事態にはなっていない。当の『織斑一夏』が箒をどう想っていたのかがわからないから、恋心が報われるかまではわからない。だが俺と違う対応をした事だけは間違いない。俺がやったみたいに完全に『他人扱い』



はしなかつた筈だ。

それだけで、この事態は回避されたんだろう。繋がりがあれば関係がその先へ進む可能性も派生して発生する。しかし現状では繋がりが無いからその可能性すらも夢見れない。そして鈴の出現で筈の焦りは更に加速して、元々危うかつた部分が一気に膨れ上がった。さあて。

後は物理的のついでに刺しといた先日の『一手』がどう効いてくるか次第だ。どう転ぶかは運任せ。どちらにしる生半可では受け止められまい。

大体難しく考えすぎなんだよ馬鹿が。あの娘が本気でぶつかってくるなら、本気で応えるまでだ。ずっと昔からそうしてきたじゃないか。それしかできないからって。何を今更変に気なんて使ってやがる似合わねえ。

悪いが俺は『俺』として最後まで在らせてもらう。

最後の決着は、俺ではなくてお前の仕事だ。

だから、勿体ぶらずにさっさともどつてこい。

何時まで他人に身体を乗っ取られてるんだ、織斑一夏お前。

▽▽▽

『文字化した文章を気持ち悪いくらいに忠実に音読した』

“これ”はそう形容するのが一番正しいと思えた。

その発言に至った経緯がなんだったか、ついさっきの事なのにあまり思い出せない。その異常さで、思考が少し飛んでしまったのか。

篠ノ之箒について相談されたのは憶えている。

その後いくらか言葉を交わして、その話題に行き着いた。どうしても、問うた千冬に一夏はしまったと、そう聞こえてくるような表情になった。

「今の、俺の名前。本当の名前な」

そして観念した一夏が発したのがさっきの奇怪な音である。この言葉がなければ、それが単語であった事すら認識できなかっただろう。それ程までに意味不明な何かだった。

とんとんと、親指で自分のこめかみを突付きながら、彼は言葉を続ける。

「俺の名前は、俺が『俺』である最大の証は、確かにちやんと“ここ”にある。だけど言葉でも文字でも——どんな手段を使ってもそれをここから外に出せない。あの日からずーっとずーっと試してるんだけど、どうしてもダメなんだ」

そりゃ誰かを好きになりはするさ、と彼は言った。

だけど絶対にその先にはいかない、と彼は言った。

友達だって俺には勿体無いんだよ、と彼は言った。

だって、とその理由を一夏が明かす。

「俺の名前、この世界に無いんだよ。誰にも本名、教えられない。人生で一番大事な部分で一生嘘つき続けるんだ、俺。そんなヤツが愛し愛されなんて、笑い話にもならねえよ」

▽▽▽

『甲龍』

名前の読み方は『こうりゆう』でなく『シエンロン』が正しい。別に願いは叶えてくれない。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

クラス対抗戦<sup>リーグマッチ</sup>初日。第二アリーナ第一試合。

組み合わせは一組代表『織斑一夏』対二組代表『凰鈴音』。

試合の開始を待つアリーナは文句の付けようがないほどに満員御礼。

対抗戦の観客席は試合前に予約を受け付けているが、この試合は異例の速さで予約が終了してしまった。競争率の高さに目を付けチケットを非合法に売買しようとした輩が現れたくらいである。

ちなみにその首謀者達が某車田的な吹っ飛び方をしていたと噂されているが真偽は定かではない。同刻同場所にて織斑先生の姿があつたとも噂されているが、何があつたのか真偽は定かではない。全然定かではない。

山田先生の『うわー人間ってあんなに飛ぶんですねーというか飛ばせるんですねー』という発言も定かではない。聴いた人間の居ない吹き等存在しないのと何も変わらない。定かではない事においておいた方が犠牲者が少ないので、なにもかも定かではない。

兎に角。

この試合は大いに観客の期待を煽っている。何せ片方は学園唯一の男子生徒、更に専用機と専用機の戦いでもある。盛り上がりを期待するのは当然だろう。ただ、生徒のいくらかは今日の試合を素直に期待できなかつた。

何故かといえば、織斑一夏と凰鈴音は仲が良いのだ。

特にそれぞれの在籍クラスである一組と二組の面子には広く知れ渡っている。だって見てるだけで伝わってくるのである。察するまでもない。そんな仲良くじゃれ合っている光景をクラスの皆は普段から目撃し——というか既に日常と化していた。またやってるよあの二人。大体そういう認識である。余談であるが箒の隣の席の生徒は最近妙な悪寒に苛まれ連日悪夢にうなされている。

そんな訳で、普段の二人を知る皆は戦っている光景をイマイチ想像できないのだ。

「チエストオオオオオオオオオ!!!」

「せいやああああああツ!!!」

試合開始の合図と同時に最大速度からのフルスイング。刀と青龍刀が耳障りな金属音を炸裂するように響かせながら激突。

パワータイプの近接格闘型IS同士が全力でぶつかり合った余波が爆心地から一気にアリーナに拡散する。様子見でもなんでもない。その一撃にはこれで相手を倒すという明確な意思が破裂する程に込められている。

こうして。

本当に盛り上がるのかなあ——なんて皆の心配を、一瞬でブチ壊して試合は幕を開けた。

▽▼▽

「よく受けたわね……!」

「全部まとめて返してやんぜ、そのセリフ!」

ぎぎっギギギツギツ、と刃と刃が擦れ合っただけの悪い音を聞き鳴らす。刀の扱いがなっただけでまた箒に怒られそう。一番災難なのは雑に扱われる雪片式型だろうが、まあ俺みたいなの手に渡ったのが運の尽きと諦めてもらおう。

そんなめちやくちやな振り方をされた式型と真つ向からぶつかったのは青龍刀と呼ばれる武器である。無論IS用のモノなので、通常よりも遥かに大型で歪だ。

眼前のISはかなりパワータイプの機体らしく、近接格闘重視の白式に全く押し負けていない。どころか気を抜けばこちらが押し負け

かねない。

IS——シエンロン甲龍。

それが中国の代表候補生である鈴の機体。ボディカラーは赤みがかかった黒。両肩の辺りには白式の大型スラスターやブルー・テイアーズのビットバインダーの様に非固定浮遊部位アンロック・ユニットが二機。いくつかの刺スパイクを生やした二つのユニットは鈴から見て右側が少し小さく、左側が大きい。形も左右非対称。そして装甲の分割線は『展開』を思わせる。何か仕込んである可能性は高い。

どうでもいいけど思ったより中国っぽくない。龍に獅子と天馬と麒麟と鳳凰がくっついた感じの外見を想像してたんだが。

いやトゲトゲした攻撃的なシルエットは鈴に似合っているとは思うが。

「な」

「七体集めたら願いが叶うとか、一夏はまさかそんなありきたりで面白みのないネタ言ったりしないわよねー？ それで今何言いかけたのよ、言ってみなさいよーねーねー」

ちくしょうこのツインテ絶対負かしてやるすげえニタアって笑ってやがるすげえむかつく。

昂った感情を伴って、力任せにに刀を押し込む、鈴も負けじと青龍刀で押し返す。そこで“引く”。力の大小に大きな差が開き、崩れた拮抗に付き合わされるように鈴が前のめりにぐらついた。

「ッー」

「チッ」

舌打ち一つ。目論見が外れたからだ。

跳ねるように振り上げた右足は分厚い金属の塊に阻まれ止まる。下方からの奇襲の蹴りは、鈴の左手に出現した“もう一振り”の青龍刀に迎え撃たれた。

ぶつかった刃の表面に脚を突き立て、斜め後方に跳ぶ。一回転して宙に両足を突き立てる様に着地。身を屈めて、力場を更に強く踏みしめる。

「残念だったわね、双天牙月は二振りあんのよ！」

ギンツと音を立てて鈴は両手に一振りずつ握る異形の青龍刀——  
双天牙月を一つに連結させる。元々巨大だったものが繋がった事で  
更に巨大になり、最早刃の塊である。

踏み抜く。

バシツと足元の動作音。斜め下方の鈴めがけて反発跳躍。合わせ  
てスラスターのスロットルを引き上げる。加速、一気に距離が詰ま  
る。

ごおん、と空気が無理矢理に裂かれる音がする。巨大な一振りに姿  
を変えた双天牙月を、鈴は軽々と振り回す。

バトンを回すかのように気軽な動き、しかし膨大な質量故にごうご  
うと物騒な音を伴う。更に鈴自身もぐるんと旋回し、迫る俺を迎え撃  
つ。

白式と甲龍の機体のパワーが互角だとしても、保持する武器の質量  
に絶対的な差がある。このままぶつかれば、刀は振り回された歪な連  
結刃に弾き飛ばされる。

鈴が口の端を吊り上げているのも、それを解っているからだ。こい  
つは俺の突撃に対し、確実に打ち勝つための動作を一瞬で判断し、実  
行してみせた。一連の動作は特に派手な動きではないが、だからこそ  
鈴の基礎能力の高さが伺えた。

そんな鈴は俺の『知らない』顔をしている。

友達としての顔でもない、弟ぶ——いけね間違えた妹分だ妹分——  
の顔でもない。それは代表候補生としての顔だろうか。

(……………)

判断の速度も、動作の正確さも見事に尽きる。

だが、その判断には一つの要素が抜けている。

「お、ら」

「うそっ!」

雪片式型の刀身が鋭い金属音と共に消失し、代わりに光り輝く白刃  
が出現する。

多大なエネルギーで以て形成される光の刃は、語るまでもなく巨大  
なエネルギーの塊である。つまり特性以前に破壊力も尋常でなく高

いのだ。

質量が足りんのなら、それ以外の要素で穴埋めてやりやいい。

ごっつ、と刃と刃が噛み合って鳴いた。刀を握る両腕に力を込める。腕が繋がっている胴体に力を込める。胴体を支える両足に力を込める。ここは空中だ。だが、《雪原》を持つ白式は空中で“踏ん張る”事が出来る。

「——よおおオオ!!!」

「こんな序盤で零落白夜……ッ！」

だからだよ。というかここぞという場面で警戒されるのなんて分かりきってる。だからここで使ったのさ。実際びっくりしてるしな、ざまーみろ。

ばぎんっ！ と響いたのは相打ちの証。さすがに勝ち越しとはいかなかったが十分だ。正直足りるかどうかも運任せだったし。

刀を握る腕の延長線上、つまりは上半身が反動で明後日な方向に弾かれる。それは鈴も同様。しかし向こうとこっちでは状況が違う。こっちの足の裏は宙に張り付いている。だから上半身が流れても、まだ“その場”に居る。でも流されない分、逃げない反動が身体を叩く。

弾かれたのは鈴も同だが、向こうは機体を巧みに操って大きくバランスを崩す事も無く反動を御している。しかしまだその“途中”。

（——ここだ）

白式には急加速の手段が二つある。一つは瞬間加速イグニッション・ブースト。もう一つは《雪原》内部のエネルギーカートリッジを消費して行う炸裂的な急加速。

次の一手は瞬間加速イグニッション・ブースト。そしてこれまでは加速に使っていた炸裂を今度はブレーキに使う。そのブースト&ストップで鈴の背後に回り込む。そして今度は出し惜しみ無しのフルパワーの零落白夜を突き立てて詰みだ。

デタラメと不意打ちで流れは寄せた。

取り戻す前に終わらせる。終わらせないとまずい。数回切り結んで解ったが地力——というか基礎的な技術の差が思っていたよりで

かい。全くこれだから代表候補生は困る。どいつもこいつ歯応えがありすぎて噛み砕くのに一苦労だ。

「調子に、乗るな——ッ!!」

怒号。バシヤリと展開音。脳髓から背筋に降りて全身へ駆け巡る警鐘。“ここ”に居てはいけないと、脳の隅っこに住み着いている感覚が叫んでいる。

だから横殴りに跳んだ。後先を一切考えてない機動の代償に、体勢は崩れに崩れて視界の上下が狂う。そんな毎度おなじみすっぽぬけたボール状態の俺の傍ら——先程までの立ち位置を轟、と。“何か”が通り過ぎていく。

「……………今何か通った?」

【はい。通りました】

しかし視覚には何も映っていない。しかし延長線上にあつた地面が突然大きく抉れるように吹き飛んだ事が、“何か”の存在を告げている。

「《龍咆》の初撃を避けた!? ……だったら当たるまで撃つてやるわよ!!」

「うげ!」

キシヤー! と牙を剥いた鈴の両脇に浮遊する非固定浮遊部位<sup>アンロック・ユニット</sup>が展開している。そこにエネルギーが集中しているのを感じが捉えている。跳ぶのではなく飛ぶ。再度後方で何かに着弾した。得体の知れない“何か”から逃れるように飛び続ける。

「どわ、わわわわア——!? 何、何々!」

眼には何も見えない。

だが後方では続々と何かに着弾して土煙を上げている。

【衝撃波です】

「はい!」

【あのISの非固定浮遊部位<sup>アンロック・ユニット</sup>に搭載されているのは衝撃砲と推測されます。空間に圧力をかけ、余剰で生じる衝撃を砲弾として撃ち出す武装です】

「だから見えねえのか!」



「砲身も力場として形成されたものであるため、稼動限界角度の制限がありません。弾道は空間の歪み値と大気の流れからある程度の予測は可能ですが、完全な察知は困難です」

「見えねえ上に死角がねえのかよ！ めんどくせえ武器積んでんなあの野郎!!」

叫びながら鈴に視線を飛ば——超笑顔。凄く楽しそう。もう何ていうか完全に上から目線というか、逃げ惑うしか無い俺を見て明らかに楽しんでやがる。

だがここで焦っては駄目だ。恐らくあれはわざとやっている。挑発してペースが乱れた瞬間を突くのは俺がそれなりに使う手だ。

「一夏、ちよつとそこでじつとしててくんない？ 一秒でいいから、ね？」

「ふざけんなア——!!」

可愛らしく言うのがイラツとくるっていうか素で楽しんでねえかあの野郎!? と思つてたら不可視の弾丸が機体の端を掠めた。装甲が千切れ飛び、シールドエネルギーが減少する。更に着弾でぐらついた所に集中砲火。《雪原》で緊急回避。

眼には見えなくても頭の感覚は確かに迫る砲弾を捉えている。初撃から今まで避け続けているのはそれのおかげだ。だが何時までも逃げ続けられそうにはない。見えないってのが結構効いていて、純粹に避けにくい。それに単純な機動しか出来ないこちらの動きを鈴は段々と捉え始めている。

「よーし、博打だ！ 博打に行くぞシロ!!」

【はい】

急上昇。別にこの位置からでも可能だが、気分の問題である。まあ重力的な意味で上の方が好都合ではあるのだが。

「何、諦めて的になりにきたの?」

「そうともいう」

「は?」

鈴のからかうような口調に、にやりと笑って返しておいた。もうちよい近付きたいとこだが、これ以上は流石に鈴も見過ごしてくれな

いだろう。スラスターを全開にして、鈴目がけて真っ直ぐ飛ぶ。

「……本能的になりてきたの？ だったらお望みどおり、蜂の巣にしてやるわよ!!」

よし乗ってきた。真正面から突っ込んだのは、真正面から迎撃させるため。俺が今一番しなければならぬ事はただ一つ。というかいつも一つ。それは“接近”である。

何せそうしないと武器が届かない。だから奇襲の接近には鈴も相当神経を裂いて警戒していた。だからこうして真正面から突っ込んだ。そうすれば鈴は迎撃する——“避けない”。そういうやつだ。

【炸裂<sup>Burst</sup>】

脚部から排出された空葉莢が光と化して溶けて消える。アイコンが回転し、残弾の表示を減少させる。そして得られる高出力の力場を——今回は『盾』に使う。

だから突っ込むのは頭からではない、切っ先はつま先だ。

要は——急降下キックである。

足の先に高出力の“バリア”を纏った、キックである。

「弾かれ……!?!」

「もらったア——!!」

衝撃砲が着弾したのに、様子がおかしい事に鈴が気付くがもう遅い。被弾のダメージが薄れていても衝撃自体は伝搬する。それに構わずにただただ直進！そして今度はこっちが着弾だ！

どがんと盛大な衝突音を響かせて鈴が——甲龍が吹き飛んだ。斜め上からの一撃を受け、斜め下へと落ちる。地面に着弾した後は数度跳ね、最後に一際盛大に地面にぶつかつた。自分が散々衝撃砲でやつたように抉り吹き飛ばし、土煙が巻き上がる。

「くそ、半分勝ったが半分負けた！五分に持ち込みやがったなああの野郎!!」

こちらの一撃は確かに通った。

だがこれは俺の思惑からは外れている。向こうのシールドエネルギーも削れたのは間違いない。しかしそれ止まりなのだ。鈴が“必要以上”に吹き飛んだせいで。

こちらは追撃のタイミングを逃した。しかもあいつ落ちた後に、衝撃砲を一発地面に打ち込んでいる。でなければこんな風に——視界を遮る程に土煙が巻き上がったりはしない。

「立て直しの時間はやらねえよ!!」

足元を踏み抜いて、土煙の中心へと跳び、飛ぶ。してやられたが、吹き飛ぶ途中で鈴は歪な刃——双天牙月を取り落としていて。地に突き刺さったあの歪な刃は、鈴が近接戦能力を著しく損なった事を証明している。

——それが、決定的な思い違いだった。

ドツ、と土煙を吹き飛ばしながら鈴が、甲龍が飛び出してくる。警戒すべきは衝撃砲、両肩の非固定浮遊部位。アンロックユニット

「無い!?!」

しかし鈴の両肩辺りに在った筈の二機のユニットが見当たらない。そして気付く。消失した分だけ、鈴の——甲龍の右腕が大きく“膨れ上がっている”。

そしてもう一つ気付く。さつきよりも“速い”。

鈴がまだ折れてない事なんてわかってるし、簡易煙幕の中で機を窺ってるのも何となくだが察していた。しかし来るならば衝撃砲——すなわち射撃であるという先入観が、一瞬の、しかし致命的な判断の遅れを招く。

「せええいやああああ!!!」

その場しのぎの迎撃に意味はない。零落白夜を発しない雪片式型はただの刀だ。故に弾き飛ばされるこの結末は当然であるといえよう。障害を正々堂々力尽くで排除して、叩き込まれた龍が衝撃砲という名の咆哮を存分に轟かせる。

俺に取つての零落白夜がそうであるように、それは恐らく鈴にとつての“それ”。

姿を現した甲龍の——鈴の『切札』が、俺の土手っ腹に叩き込まれて炸裂した。

▽▽▽

『甲龍・特攻形態』

通常形態から両肩の非固定浮遊部位アンロック・ユニットを変形させて移行する。右肩のユニットが右腕を覆い、左肩のユニットが上腕から右肩にかけて装着され、最終的に巨大な右腕を形成する。

元々『衝撃砲』は『衝撃波発生装置』の開発途中に派生的に誕生した兵装（形態）であり、特攻形態は近接戦闘特化ISとしての甲龍の『本来の姿』である。

余談であるが正式にはユニットの変形前後で名称の変化はない。

特攻形態は操縦者が勝手にそう呼んでいるだけである。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

鈴にとってISは希望だった。

頭が悪い訳でもないし、運動だって得意な方。良い意味で平均とは言えない能力素養を持ち合わせている。とはいえ一番の友達は何かと『巧い』ので、頑張つても追いつけない——“まだ”。

そいつのそれは重ねた年月の経験で得たものである。実際長い目で見れば遥かに鈴の方が優秀上等なのだ。そもそも、そいつは極端な特化仕様なので万能型の鈴とは比べるだけ無駄である。

しかし事情を知らない鈴にとってその友達は同い年なので、結果的に自己の能力が不足しているという結論に至る。

頭の方では話にならない位勝っているが、そっちは気に食わないがそれなりに付き合ひのある友達に大差で負けている。実際鈴の出る幕はなかった。

劣っている、という鈴の焦りは実際勘違いで見当違いなものだ。しかし鈴にとつてはそうとしか思えないのだからどうしようもない。

募らせた苛立ちが無視できないほどに蓄積し切った頃、鈴はISに触れる事となる。

『ISは女性にしか扱えない』という原則がまだ崩れていなかった頃。

のめりこんだ。

友達二人は男だから、これは鈴ISにしか出来ない事であると確信できたのだ。その二人とは違う方面で優れていると鈴が胸を張れる事。自信を持って、自身の支えにできること。

また鈴の心に深い傷——特に色恋沙汰について——を残した事件の直後でもあった。結果として発展途上中であるところには荷が重い負担を抱え込んでしまうことになった。

押し潰されそうになるじぶんを保つために、異常なまでにISという存在に傾いた、傾けた。元々素養があったとはいえ、たったの一年で代表候補生まで上り詰めたのはそういった理由がある。

だから鈴にとってISは希望”だった”。

根底が少々いびつでも、真摯に続けて重ねた努力は結晶化した。

専用機という誰の目にも明らかかなカタチをもって。

故に自信をもって自身の胸を張れるのだ。

鈴にとって、IS甲龍は誇りだ。

だからこそ一報を聞いた時は思考が吹っ飛んで、絶句した。

たまたま持っていた缶ジュース（スチール）を握り潰してしまう程度には驚いたが、まだその時点では心に余裕があった。ちよつといらついでマクラをボカスカ殴る程度である。込められた破壊力は置いておく。

同じ分野に入ってきたと言っても、ISに触れた時間は鈴の方が長いのだ。むしろこれは鈴が先導するチャンスではないかと、密かに楽しみにしていたのである。

しかし鈴の友達のあの大馬鹿野郎は身近に代表候補生がいるというのにまゝで教えを乞う気配がなかつた。ここら辺でそろそろストレス発散に使われているマクラ（長年の愛用品）が悲鳴を上げ始めている。

だがそれでもまだ何とかギリギリ平静は保つことが出来た。友達は鈴がどれだけ成長したのかを知らないのだ。仕方ないだろうと、納

得しておいた。

そこに舞い込んできたのはクラス對抗戦の知らせに今度こそ鈴は歓喜する。さすがにもうわかるだろうと、うれしくってしようがなくって、試合の前日はなかなか寝付けなかった。気を抜けば顔を緩めに緩めてえへへと笑いながらサンドバック替わりのマクラを物騒な打撃音と共にタコ殴りにしてしまう。ルームメイトに物凄い怪訝な目で見られていたのは気付かない。そしてマクラが吹き飛ばす日はそう遠くない。

そして相対してみても思い知る。

まるで追いつけてない、どころか——更に引き離されかけている。土煙による簡易煙幕の中、鈴はゆらりと立ち上がった。溢れる激情に身を任せるように、また応えるように、右肩のユニットが金属音と共に展開する。そこに裏拳を叩き込む、ユニットが右腕と接触する。

「いぐよ、甲龍」

接続したユニットを引き摺るように、拳を前へと突き出した。ずりりと引きずられるように付いてくるのは、両肩背部に浮遊していた二つのユニット。連続した金属音と共にユニットが解けて、包んでいく。

がまんするための理性はたった今砕けて散った。

溢れでた想いが、これからの一挙手一投足その総てに満ちるだろう。

「——叩き込んでやる」

巨大になった拳を構えた甲龍が、背後の空間を“殴り”つけて一直線に突き進む。

▽▼▽

何が起こったのか理解できなかった。

正確には理解するための思考を走らせる暇が無かった。意思に反して身体が勝手に動かされる、吹き飛ばされる。背中に感じる衝撃は地面にぶつかったからだろうか。受身を取る事も出来ずに地面に縫い付けられる勢いで衝突して、しかし急激故にそこから更に跳ねる。

二度三度バウンドし、転がってようやく停止。

巨大な拳による純粋な殴打と、ほぼ同時に先端から迸った衝撃波による二段攻撃。その一撃は白式のシールドを抜いて身体に痛みを及ぼす程に強力だった。どれだけシールドを削られたのかも気になるが、それより前にする事がある。

「さっきのが、あたしの全力！」

拳と共に身体を中心に鉛を埋めこまれた、そう錯覚する程に重い身体を何とか引きずり起こして立ち上がった。構え——おい式型どこいったちくしようまた落とした。まずい、俺の知る鈴なら、こんな絶好の機会に攻撃を緩めたりは、

「そして今度も全力だ！　くらえッ!!」

引き絞られる巨大な右腕を携えた鈴が凄まじい速度で突っ込んでくる。さっきまでの甲龍よりも遥かに速い、これが本来の速度なのかもしれない。

接近は一気で一瞬だ。迎え撃とうにもこちらは切札である零落白夜を発動させられない。ならばと地面に脚を叩きつける。

向かってくる鈴にこちらからも向かう様に、力場を踏みぬいて跳んだ。斜め上、このまま鈴を“飛び越えて”向こうに転がってる式型を拾、

「逃がすか!!」

ごっつ、と鈍い音がした。次いでがくんつ、と機体が下方方向に引っ張られる。白式の脚が、甲龍の巨大な右腕に鷲掴みにされている。視線の先ではクレーターの様に抉られた地面が見える。こいつ、拳を地面に打ち込んで無理やり方向転換しやがった!

「っーかー」

「やべっ……………」

「まーえ——た——!!」

ガギギンツと音を立て、巨大な右腕の後ろ側が変形しながら左肩へとスライドする。試合開始直後と同じ形状、そして同じ機能——!

「い、っ……………は、!?」

高速で迫ってきた壁に衝突された感触があった。さつきは一点の

みに巨大な力を打ち込まれる感じだったが、今度は身体全部を一気に殴られる。だが衝撃の範囲が広いせいか、さっきの一撃よりは“軽い”。これなら直ぐに立て直せ、

「私は、」

だがそれは罨だ。再びユニットを変形させた鈴は、次の瞬間には手を伸ばせば触れられそうな程に近くに居た。甲龍の速度が急激に上がった理由を理解する。右肩に移動した衝撃砲から発した衝撃波を後方へ噴射する事で機体を加速させているのか!!

「あたしは、そんなに頼りないか——ッ!!」

吹き出た冷や汗を感じる間もなく怒号を伴った一撃が叩き込まれた。撃ち抜かれた顔面、吹き飛ばされた首から上、付いていく様に身体も吹き飛ぶ。ISの保護がなければ首が千切れ飛んでいたのは間違いない——すごいどうでもいい事が頭をよぎる。

「ずーっと不満だったのよ! あたしばかり助けてもらって! あんたは全然私を頼ってくれない!! それがどれだけ辛かったか、あんたわかる!? わからないよね!? わかってないと思うからちよつと一発殴らせろ!!」

またも地面をばごんべごんと跳ねながら転がる俺に、鈴は一瞬で肉薄する。近距離の移動なら今の甲龍は恐らく白式よりも遥かに速い。片足だけで力場を蹴った。転がる方向が変化し、こちらを踏み潰す勢いの鈴の着地を回避する。

ちなみに今ので三発目である。一発は既に殴られている。

「あんたに“何か”あるのなんて、そんなのとつくの昔からわかってんのよ! なのに全然言ってくれない、頼ってくれない!!」

力場のレールに沿って強引に体勢を立て直した。地面に屈むようになつた俺に、鈴は上から降る様に迫ってくる。今の鈴相手に退くのが無理なのはもうわかっている。力場を脚部全体に広げる。ただ真っ直ぐ、しかし恐ろしく速く迫る拳を、突き刺すように蹴りつける。

当然の様に打ち負けた。カートリッジをケチった俺の判断ミスだ。それでも軌道を僅かに反らせただけマシだが。鋼の拳と不可視の拳に打ち付けられ、脚部の装甲が変な形に歪んでいる。《雪原》は無事だ



と、音声は淡々と告げる。

「友達なのにつ！ 大好きなのにつ！ なのになんで、ずっとあたしを」のけ者」にしてえっ!!」

打ち出される拳は、その総てが必殺といえる一撃ばかりで、食らう側でなければ感嘆の声を上げていただろう。今は避けるのに忙しくてそんな暇は無い。

そんな一撃を放っているのは、俺なんかと友達でいてくれた女の子だ。

でも俺の知ってる女の子とは少し違う。

「だから頑張ったのよ！ 必死で追いつこうって！ ようやく、胸張ってあんたに聞き出せるくらい強くなったのにつ！ 強くなったと思えたのにつ!!」

俺の前には、持つ力を余す所無く振り回して発揮する代表候補生が居る。

隅っこで、隠れるようにぼろぼろ泣いていた女の子なんて居ない。威嚇するように怒鳴りつけながら、瞳の奥でたすけてほしいと訴えていた女の子なんてどこにもいない。

ああ、そうか。

こいつが俺の知らない顔をするのなんて、そんなの当たり前じゃないか。出会った頃の鈴はまだ『子供』だった。でも『子供』は少しずつ『大人』になっていく。

変わっていくんだ。

変わったんだ。

こいつは、いつの間にか俺が知るよりずっと強くなっている。

“ おいてかないで”

そう、訴えかけられている気がした。互いのISの装甲が触れ合うたびに、向こうの感情が流れこんでくるような不思議な感じと共に。だから、もうわかった。

お前が言いたい事は、何もかも俺に届いた。

ここまで心の底から迸った感情を理解出来ないほど鈍感じゃーない。

だが、な。

だがな鈴よ。

「当然の様にIS使ってんじやないわよこのバカイチカ——  
!!」

「バカ馬鹿バカばかうるせえんだよこのやるオオオ!!!」

回し蹴りの最中で空葉莢が脚部から弾き飛ばされる。《雪原》の形  
成する高出力の力場を纏った一撃は、ようやく不可視の拳に拮抗す  
る。

一瞬の静寂も訪れさせない。蹴りつけたのとは逆の脚から空葉莢  
が脱落した。逆側に回転しながら蹴り付ける。直撃いや、翳された右  
腕で防がれる。

鈴は吹き飛ばない、その場でこらえて踏みとどまった。そうしてる  
間にこちらは既に次の行動の準備を終えている。下から上へと蹴り  
上げる。だが届かない、物理的に白式の脚部の長さでは鈴の身体に届  
かないからだ。だから鈴も避けない。避けずに、攻撃で生まれたここ  
らの隙を突くように拳を引き絞る。

ごっつ、と鈴の小さな顎が上へと弾き飛ばされる。脚部に纏わせた力  
場を“槍”の様に尖らせる——故に目には見えなくてもリーチは伸  
びているのだ。

「見えねえ」のならば、こつちにもあんだよ!!」

「が、あ……っ!?!」

俺はもう『大人』だから、『大人』に変わらない。お前らと一緒に時  
間は過ごせない。

お前も統も、他の知り合った皆も、みんなみんな俺を置いて先に  
行っちゃう。俺には先がねえのに! 何が置いてかないでだ、置いて  
行かれるのは俺の方だろうがちくしょうめ!!

「っだからあつあ!!」

「こ、のおッ!」

完全に想定外だった一撃が入り、ふらつく鈴に肉薄した。しかし鈴  
は拳で以て迎え撃つ、がここまで喰らい続けたんだ、いい加減目は慣  
れた!

すり抜ける様に拳を避けて、そのまま鈴の傍らを通り過ぎる。そのついでに、ちよūdど手頃だったものを引つ掴んだ。頭の両脇で結ばれて流れる髪の毛、片方だ。

ISを纏っている相手に何を遠慮する必要がある。

ここまで本気でぶつかってくる相手に何を遠慮する必要がある！

掴んだまま振り回して、力の限り叩きつける。間髪入れずに、その胸に両足を突き刺すように突き立てた。暴力の連続を浴びてなお、その右腕は動いている。ああ、ああ、本当強くなりやがったなこの野郎！！

「弾けえ——！！」

【炸裂】

だが反撃の暇なんぞくれてはやらねえ。両脚からカートリッジが弾き飛ばされる。地面が鈴を中心として放射状に陥没する。踏みぬいた反動で、高く高く飛び上がる。

叩きのめす。潰しにいく。それが言葉では答えられない俺の、精一杯の応え方だ。

【装填——二連、炸裂】

じゃこん、と両脚が空のカートリッジを吐き出した。間髪入れずにもう一度、じゃこんと脚で音が鳴る。合計四発同時ロード。

ばぢり、と両脚から紫電が溢れて踊る。本来不可視である筈の力場だが、出力の増加に伴った副次効果により目視可能な現象を起こしている。スラスターが静かに唸りを上げ、段々と鼓動を強めていく。後は叩きつけるだけ。

鈴が何もしていない訳が無い。

巨大な右拳を地面に叩き付けた反動を利用して空へ跳び上がる。勢いは一切殺さず、しかしくるりと体勢を整えて、拳の先端がこちらに向く。右腕と化したユニットが装甲の隙間から紫電を散らしている。次の一撃がフルパワーなのは向こうも同じだと理解する。

「突っ斬れ白式——ツ！！」

「吼えろ！ 砕け！！ 甲龍ツ！！」

白い流れ星が落ちる。

赤く黒い龍が昇る。

流星の煌きと、龍の咆哮が衝突して爆発して拡散して、高まり続けて止まらない。

二人の想いはきつと今、最も通じ合っている。

▽▽▽

フィールドに広がった閃光が、さらなる強大な閃光で以て塗り潰される。閃光に伴った衝撃がアリーナ全体を盛大に揺らした事で、誰もがその異常に気付く。ちなみにぶつかってるバカ二人は気付いていない。

まず最初に真つ赤な光が降り注いだ。これが最初の閃光であり、発した衝撃はその閃光がアリーナの遮断シールドをぶち抜いた為に発生したものである。

衝撃がもう一度。今度は閃光は伴わない。遮断シールドにひらいた大穴を通って塊が落下する。濃い灰色をした落下物はとても着地とは言えない荒々しい轟音を響かせながら着弾する。そしてまだ気付かないバカ二人。つながりが深いのも考えものである。

ゴバツと落下物が“開く”。花卉が咲いたその中には黒に見紛う程に濃い灰色が跪いている。ヒトガタをしただけの“それ”は、ゆっくりと立ち上がった。

シルエットは完全な人間の形。しかし全長は人間よりも遥かに大きい——ISをまとった人間と同等か、少し大きいくらい。故にこれは『フル・スキン全身装甲』のISであると、その場の皆（バカ二人除く）は判断する。

「うおおおおおおお!!!」

「はあああああああ!!!」

この二人、まだ気付かない。思う存分心の内面なかに溜め込んだ想いを相手に叩きつけている真つ最中である。無論それは冗談でも何もなく、ただの理由ある必然である。

だが漆黒の侵入者は二人の都合など知った事ではないので、行うべき事を淡々と実行する。両腕を上げる。中央に発射口の空いた腕を

あげる。

びーむ。

ちゅどーん。

その閃光はアリーナの遮断シールドですら安々と破壊する一撃。だが二機のISが全力攻撃同士の相互干渉で発生していた力場のフィールドが、その攻撃力の大半を相殺させる。言い換えればそれだけの威力の——規格外の出力がその場では発生していた事になる。

ようやく二人だけの世界から出てきたバカ二人は、横っ面からぶつかってきた衝撃に為す術等持っていない。

「ニア———!?!」

悲鳴をあげながらすっぽーんと、バカ二人が吹っ飛んだ。

▽▽▽

【警告。ステージ中央に熱源。検索——該当無し。所属不明のISと断定。ロックされています。早急に回避行動を】

【……回避行動を】

【……………あの、回避行動を】

【熱源感知、ビーム兵器と推定。回避行動を】

【……………あの、回避、あの】

【あのっ！】

——とあるAIの必死な呼びかけ

▽▽▽

アリーナの観客席、その一つにセシリアは腰掛けている。

座席に座すというそれだけの行為にも優雅さが見え隠れしている辺りが育ちを語る。そんなセシリアはつい先日、成り行きで織斑一夏にISの操縦をコーチする事になった。

が、本来織斑一夏とはこの手で潰すと決めた敵である。

決して味方ではない。とはいえ今回はクラス対抗戦であり、そしてセシリアと織斑一夏は同じクラス——同じ陣営。なので今回ばかりは単純な敵対は正解ではない。

故に、セシリアは今“一観客”としてここに居るのである。

響く試合開始のアナウンスを聞き、ふむと彼女は眩きを漏らす。周りが黄色い歓声を上げる中、反して押し黙ったセシリアはその澄んだ蒼い瞳を細めた。

(薄々思ってはいましたけれど、実戦で光るタイプですわね)

初手から全力での衝突に躊躇うこと無く踏み切った。その後の拮抗も上手く事を運び、突然登場した未知の武器である衝撃砲にも冷静に判断して対処している。

衝撃砲はブルー・ティアーズ同様第三世代の装備。不可視の弾丸は発射のタイミングと軌道を読み辛く、非常に回避の困難な武装である——実際に使われている光景を見て、セシリアは以前に目を通した特徴が事実なのを再認識していた。

そんな武器を、避けている。

避け続けている。“本人”いわく勘は人四倍は鋭いらしいが、目の前での動きはそれだけでは不可能だ。散々延々と無様を晒し続けて、そうしてようやく少しだけ上達した飛行の基礎能力が無ければ今頃蜂の巣になっっているのは想像に難くない。

「やはり、わたくしは間違っていなかった」

織斑一夏を倒すべき敵だと認定した、その事が。クラス代表を預けているから、本格的な再戦は一年後には確実に巡って来る。

その時にあの敵がどれだけ強くなっているか、正直まるで見当がつかない。『倒す』という決定事項はセシリア自身も気付かない内に、『倒したい』という欲求へと変貌していた。

倒した時、倒せた時、果たしてどれだけのモノを得られるだろうか。そう考えるだけで心の奥底から言いようのない感情が溢れんばかりに沸き上がってくる。周囲の観客と同じくらいかそれ以上に、しかし別の意味でセシリアもまた昂っている。

ちなみに少量であるが意味がもう一つ含まれている。そちらは織斑一夏と戦って思った事。正確にはぶった切られそうになって感じた事に対するセシリアなりの答えである。

「遮断シールドを抜いた？　ブルーティアーズより高出力のビーム兵器……！」

代表候補生に辿りつくまでの過程で研ぎ澄まされた部分が、突然の乱入にも直ぐに反応して対応する。周囲が何事かと困惑する中、乱入者の正体が高出力のビーム兵器である事を看破。次いで何処から放たれたのか、何が放ったかを探すために首を巡らせる。

結果的に探すまでもなかった。

“それ”は自ら飛び込むようにアリーナへと落下してきたのだから。

花開くように展開した中から、正体不明のISが姿を現した。

異常事態に周囲の生徒達が我先にと出口に殺到する中で、セシリアは全く逆の方向につかつかと歩を進める。辿り着いたのは観客席の最前列——座席の一つに腰掛ける。

あのISが何者なのか、何処の国もしくは組織に所属しているのか、そもそも本当にISなのか。セシリアは何一つとして知りはしない。

ただ一つわかっている事がある。あのISが放つビームは遮断シールドを破壊する威力持っている。"アリーナ"と"観客席"を隔てている遮断シールドを、だ。

観客席に居た生徒の避難は完了していないどころか、始まってすらない。扉がロックされてしまい、誰一人として外へ出ることが出来ないのだ。

だからセシリアはここに——可能な限りの最前線に在る。  
武器を持たぬ数多の学友達の盾として剣として在るために。

▽▼

何が起こったのか理解できなかった。

まさかの本日二回目。気が付けば地面に叩き付けられていた。頭が揺れたのか、思考がぐらぐらして上手く働かない。

カートリッジの二発同時ロードで衝撃波の拳に挑み、衝突したところ——その後何か変な感覚になったまでは、憶えている。だがその後どうなったのかがよくわからない。

ちなみに弾は残り三発あったのに何故二発しか使わなかったのかというと——三発同時ロードは暴走の可能性が高い、と一見忠告のようでただ事実を述べただけな感じでシロが言ったからである。あいつの何が怖いって命じさえすれば三発だろうが四発だろうが、下手したら全弾ロードでも普通に実行する事だろうか。

今はそれは置いておこう。いや地味に気を付けないといけない事だけ。今優先すべきは試合である。こうして吹き飛ばされたとい



う事は競り負けたという事なのだろうか。

兎に角さつきと起き上がる——うとしたら。

「うぼあ!!」

重くて大きい何か物が物凄い勢いで降って来た。折角上げかけていた頭が地面にぶつかるところか埋まる勢いである。というか埋まった。ぐへえ。

「あいたたた! 腰! 腰打った……っ!」

『こつちや痛いどころじゃねーよ何つうピンポイントに落ちてきてんだこの野郎!』

落ちてきた重い何か——鈴@甲龍が俺の上でのたうち回っている。顔面が埋まつてて喋れないので、密着するほどの近距離なのにプライベートチャネル個人間秘匿通信での通信だ。

飛行や通常機動では散々であったが、こういう機能の類は直ぐに並に出来た俺である。話ではこれも結構コツが要ると聞いてたんだが。

『……ちよつと待て、何でお前も吹っ飛ばされてんだ』

「へ?」

『いや普通吹っ飛ばされるのは競り負けた方だけだろ。相打ちにしたって何で同じ方向に飛ぶ——お前とりあえず上からどけ! 重いしトゲがザスザス刺さつてんだよさつきから!』

「お、重い……って……言つたわね……ッ!? 失礼ね、重くないわよ……! 伸びないから……っ、増えないのよ……っ! この気持が、この悔しさがあなたにわかるか——!!」

『そういう事言つてんじゃないね——よ!!』

一体何が起こつたのかは解らないが、何か変だと頭の隅が感じている。だからふぎけている場合ではないのだが——わたしのせいちようきはどこだ——! と空に向かって吠える、完全に何か変なスイツチが入ってしまったていた鈴が居た。

『おい、避ける!!』

「ッ!」

ゴドン、と鈍い音。衝撃波が地面を殴りつけ、生じた反動が甲龍と白式をその場から上空へと引き上げる。一拍置いて真下を赤い奔流

が通りすぎて行った。

ISが、ハイパーセンサーがロツク照準されている事を告げている。眼が一瞬だけ合った。その瞬間に俺は甲龍の拳を蹴り、鈴は白式の脚を蹴った。力場と衝撃波の衝突によって互いの機体はその場から強制的に移動する。再度、赤い奔流が通り過ぎた。

「何よ、あいつ」

「俺が知るけ。まー仲良くは出来そうにねーな」

空中で体勢を建て直した俺と鈴の視線の先には、“何か”が居る。人の形をした“それ”を、白式のセンサーは『IS』だと認識している。だがそうだと素直に領けない理由があった。穴の開いた両腕をこちらに向ける“それ”は、全身が余す所無く装甲で覆われているからだ。

エネルギーシールドを防御の主とするISは基本的に装甲が少ない。少なくとも問題が無いのだ、どうせ攻撃を受けるのは装甲でなくシールドであるから。

無論防御を重視したタイプも存在はするが、あそこまで徹底的に装甲で全身を覆うタイプは相当に珍しい。

シルエツトはスタンダードな人形である。そこそこに大型だが、異常という程でもない。頭部にはセンサーレンズと思しきものがやや角度をつけて横に並んでいる。

一番特徴的なのは、上げられた両腕の先端に空いた穴であろうか。腕に砲口が付いている、というより砲が腕の形をしているとも言えるべきか。

「高出力のビーム兵器……はん、これだけ熱量高けりや遮断シールドだろうが無理やりぶち破れるか」

「来るわよ、一夏ー！」

「とつくの昔に知ってるよー！」

赤い閃光がこちらに向かって一直線に突き進む。その威力が高いのはハイパーセンサーの示す数値を見ればわかる。が、ただ撃たれただけの攻撃に当たってやるほど素直ではない。

「シロー！ 機体状況はー！」

「……………実体ダメージレベル中《雪片式型》紛失中  
脚部特殊力場発生装置正常動作中圧縮力場形成用エネルギーカート  
リッジ残弾数《1》」

なんかシロがすげーテンション低い——!?

淡々超えて黙々と言うか呪詛みたいな喋り方になってる。まさか  
さっきの一撃でどつか機能に障害でも起き、

【私には何の問題もありません問題があるとしたら散々来ると警告さ  
れて絶対避けれるのにそんな避けれる攻撃を避けない操縦者ではな  
いでしょうかと私は想うのですがどうでしょうかいえ攻撃に当たり  
に行きたいのならそれはそれで別にいいのです私は操縦者の意向を  
可能なかぎり尊重する様にプログラムされていますのでしかしなら  
ばその旨を伝えておいてもらったほうが効率的だと思うのでしよ  
うか】

「あの、何かよくわからないけどスイマセンでした、本当」

「……一夏、さっきから何一人で喋ってんの？」

『俺のISの中の人何か怖いんだよ!』

「は? 中の人? あんた本当に何言ってるの?」

【プライベートチャネル個人間秘密通信を使っても私には筒抜けな訳ですが】

「しまった!」

『織斑くん! 鳳さん! 無事ですか!』

シロの尋常でない不機嫌っぷりに戦々恐々としていたら、山田先生  
が通信に割り込んで来た。その切羽詰ったというか真剣そのものな  
声が、今この状況が想定外な異常事態であると暗に告げている。

ちなみにどのくらい真剣かというところあの山田先生の声に威厳が感  
じられるくらい。

『今直ぐアリーナから脱出してください! 直ぐに先生たちがISで  
制圧にいきます!』

さあて。

これが不幸中の幸いというやつだろうか。ちょうどいい位置に目  
当てのモノがあった。真下に急降下し、地表数十センチのところ急  
停止する。練習していなければ間違いない墜落していたであろう機

動と共に、突き刺さっていた雪片式型を引き抜いた。

「じゃ、それまでは俺等〃で引き受けましょーか」

『な、何言ってるんですか!? そんな危険な事を生徒には――』

『やれるか、織斑』

『織斑先生!?!』

『遮断シールドがレベル4に設定された上に、扉が総てロックされている。あの正体不明のISの仕様だろう。これでは生徒の避難も救援も出来ん。三年がシステムクラックを実行中だが、シールドの解除には時間が必要だ』

「……………そんな事までしてんのかよ。至れり尽くせりに迷惑な奴だなー」

『お、織斑先生！ 本気ですか!?!』

『本気も何もそうするしか無いだろう。落ち着け、山田君。糖分が足りないからイライラするんだ、コーヒーでも飲むといい。砂糖をたっぷり入れたコーヒーも、たまには悪くないぞ』

『あの、織斑先生……………それ砂糖じゃなくて塩……………』

『おかしいな。変な味がする。豆が古かったか?』

「とりあえずこっちはこっちで何とかしますんで、冷静に見えて結構テンパってるその人お願いしますね山田先生」

『ああそうか。砂糖の方が古いのか』

『う、うう……………! 気をつけてくださいね! 危険だと思ったら直ぐ脱出してください!!』

「へーい」

通信を切つて、会話に向けていた分の意識を改めて全部戦闘に傾ける。

相手は無傷な上に遮断シールドを破壊するほどの強力な武器を有している。

対してこちらは戦闘のダメージでシールドエネルギーやカートリッジを消費している。

誰がどつから見てもこちらの分が悪い。

だが、それは〃俺単体〃での話だ。

▽▽▽

——なあ。お前は、本当はどうしたい？

言葉が、眼差しが、突き付けられた切っ先が、頭に焼き付いて離れない。あの日からずっとそればかり考え続けている。

大丈夫かと、声をかけられた事に気付くのにしばらくかかったのはそのせいだろう。横の席に座っていた生徒に大丈夫だと返事をした。

今気付いたが、教室でも箒の隣に座っている女子生徒だった。

未だ心配そうな顔をしているクラスメイトから視線を外す。目を向けたアリーナでは白いISと赤くて黒いISが何度もぶつかり合っている。

放課後ずっと訓練をしていたからか、一夏の技術は確実に上達している。本当に毎日毎日訓練していたのだから、少しでも上達しない方がおかしい。むしろもう少しくらい上達していてもおかしくはない。休日は丸一日訓練しっ放しの時すらあった。翌日課題をやり忘れて織斑先生に思いつきりはたかれていたのを思い出す。

一夏と一秒でも長く一緒に居たい箒としては、当然訓練に付き合うつもりだった。なにせ訓練にはセシリア・オルコットも参加している場合が多かったのである。そんな状況で箒が黙っていられる筈がない。

訓練機——『打鉄』の使用許可が降りるまでの期間が酷くもどかしかつたのを、覚えている。ただ焦ってはいしたが、それでも何処か余裕があった。

セシリア・オルコットは確かに代表候補生として相応しい実力を持っている。しかし戦闘のスタイルが一夏とは根本的に違うのだ。

近接戦闘でならば箒は心得があるから、近接戦主体の機体を使っている一夏の訓練に付き合う理由としては十二分である。

『打鉄』がシールドエネルギーの残量が0であると告げていた。

箒の鼻先に、雪片式型の切っ先が突き付けられている。箒の先制は会心の一撃となり、白式の左肩の装甲を大きく抉り取った。

一夏は攻撃をわざと受けたのだと気付いたのは、負けた後だった。

『速いし強いんだよ。でもな、芯が柔いからどーとでもできる。剣道場でやりあつた時は、あつたんだがな』

肩に担いだ刀を揺らしながら、一夏が淡々と告げる。拒絶されたのかと怯えた箒は、反射的に手を伸ばす。一夏はその手を取らなかつた。代わりに箒の頭に手を乗せて——ぐしゃぐしゃと乱暴に撫で回す。

『なあ箒、お前が』決めた』ことは……本当にお前がしたい事か？

俺には何か変な感じがするんだよ。『篠ノ之箒』の『芯』を変に抑圧してねじ曲げてないか？』

気恥ずかしいから跳ね除けたい、触れてくれたのがうれしい。その二つの感情が拮抗したせいで硬直した箒に、一夏は言葉を投げかける。

『ちよつと考えてみるよ、本当にしたい事。お前の芯のホントの姿。俺は、気が利かないし、頭も悪い。でも何があつても絶対お前から逃げたりしねえから』

答えを見つけれないまま、今日に至る。

訓練には、結局一度しか参加していない。意気揚々と参加しておきながら徹底的にボロ負けしてしまつた以上、答えを見つけない限り参加する訳にはいかなかつた。

やっぱり顔色悪いよと、声をかけられて箒は思考の海から引き上げられる。寝不足だと適当に誤魔化して、熱に浮かされたようにふわふわとする意識をアリーナに向ける。

——『おいてかないで』

泣きそうな、女の子の声が聞こえたような気がした。いや確かにその声を箒は聞いたのだ。耳でなく心で。

人間の目は主に正面しか見えない。頭の後ろにあるものはそのままでは見ることは出来ない。だから、いつも髪を結んでいるリボンに——紐が一本紛れていることに気付けない。

声を聞いて——ああ、そうかと理解する。

鈴は対等になりたかつたのかと、理解する。

そのためだけに、ただ並ぶためだけにそんなに頑張つて、あんなに

も感情をぶつけているのか。どんどん臆気になっていく意識の中、漂うように考え続ける。

心を力に変えて、真っ直ぐにぶつかり合っているあの二人が羨ましかった。

その姿は眩しいくらいに素敵だった。

そんな関係に憧れて、そして気付くのだ。

(私は、そうだ——受け入れて欲しい)

一夏に箒の総てを知ってもらった上で、そして受け入れて欲しい。想いに応えて欲しい。箒の総てを好きになって欲しい。

でも嫌われるのが怖いのだ、それが怖くてしようがない。受け入れて欲しいのは本当なんだけど、でも受け入れるためには示さねばならない。それは——嫌われるという結末の可能性を出現させる。だから、躊躇った。躊躇って、ねじ曲げた。

その想いが本当に大切だったから、いつも胸の奥にあった。

でも大事にし過ぎて、守りすぎて——何時からか見失っていた。

(何か、私も何か、何かを……せめて何かできることを！ 駄目だ、今止まったら、また見失ってしまう！ それは嫌だ……！ 嫌だっ!!)

心の奥に芽生えた、あるいは取り戻した気持ちに突き動かされる。正体不明の乱入者に多くの生徒が定められた避難経路に向かう中、気が付けば箒はピットの中に迷いこむように立っていた。

しかし何かある訳でもない。

IS用の武器があっても、生身の腕では満足に振るえもしない。

仮に訓練機が置かれていたとしても、遮断シールドで阻まれた向こうへは辿りつけない。

それは理解している。

それでも諦めたくなかった。混濁する意識は悪化の一途を辿り、最早立っているのがやっとなのに。それでも心を奮い立たせて前に向かう。細い繋がりに縋って続けた剣道は、感情を吐き出すための手段だったのかもしれない。でも培った心が、今箒を支えている。

果たして何時から“それ”はそこに居たのだろうか。

箒が気付かなかっただけで、ずっと居たのだろうか。

どちらにしる筈にとって、“それ”は突然現れた“何か”である。

——私はだあれ？

そこに、『赤』が、いた。

▽▽▽

ガギンと鳴った金属音は、鈴が両の拳をぶつけ合わせた為に発生した音である。ふんと一息吐きながら鈴はその眉根を釣り上げ、瞳をぎらつかせた。

話は付いたのか、一夏が通信を切った。正体不明のISは何故か沈黙しているが、警戒は怠らない。それでも意識を少しだけ裂いて、一夏を横目で一度だけ見た。

(ぜったい引いてやらない、今のあたしは戦えるんだ)

正にこういう時のために、鈴は強くなったのだ。

本当は、一夏は鈴を置いていくのではない。ただ危ないところに近づけないようにしているだけなのだろう。そんな事、本当はちゃんとわかっていたのだ。

想ってくれてるのなんて、ちゃんとわかってるのだ。

でもそれでも我慢できなかった。

だから強くなった。

一夏が何と言おうとも、今度は絶対ついていく。

何があっても退いてやるものかと、鋼の如き決心を固める。

この場所は、既に試合会場ではない。既にここは命の危険が伴う戦場なのだ。あのISのビームの威力を正しく理解しているから、そう言える。

そんな場所に、友達一人残せる訳がない。

「行くぞ、鈴」

意識が一瞬空っぽになった。今狙撃されたらたぶん直撃していた



だろう。それ程までに呆然とした。

だって。てつきり、逃げろとか、ここは任せろとか、そう言われると思っていたのだ。だからふぎけるなとか、むしろお前が逃げろとか、あたしの方が先輩だとか、そういう返事を心の中にたくさん用意していたのだ。

でも言われた言葉は予想と全く逆のものだったのだ。

逆という事はつまり——鈴が、言っただけで欲しかった言葉である。

「下手にビームを撃たせたら被害が出るかもしれないねーからな。撃つ暇無いくらいタコ殴りにするぞ！」

「……っ、え、偉そうに仕切ってんじゃないわよ」

「わーってるよ。援護アテにしてるぜ、こっちにや飛び道具ねーし」

気を緩めたら泣きそうだった。

命の危険を前にしているのに嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

だって、今一夏と鈴は文句なしに対等なのだ。

そう感じられた。鈴がずっとずっと夢見ていた位置に、関係に、今辿り着いている。一夏が鈴の方へと《雪片式型》を差し出した。同時にちらりと鈴を見る。

その視線に不敵に笑い返して、右腕と化した《龍砲》を白い刀に打ち付けた。ツギイイイン！ と甲高い金属音が戦場<sup>アリーナ</sup>に響き渡る。

それが開戦の合図。それぞれが獲物を向け、急加速する。敵の方も迎え撃つために両腕を上げ——閃光<sup>ビーム</sup>。放たれた破壊を掻い潜るように飛行しながら、二人揃って一気に敵に肉薄する。

白い刀が横薙ぎに振るわれた。敵がそれを避ける——避けた方向に鈴がいる。当然の様に鈴は居る。力一杯打ち出された龍の拳が、敵の顔面に叩き込まれて炸裂して、吹き飛ばした。

状況は決して良くない——いや悪い。

なのに身体の奥から力が沸き上がってきて止まらない。

「さあ！ 人生を楽しもうぜ!!」

不敵に笑いながら叩きつけるように一緒に叫ぶ。

目の前の敵からは、何の脅威も感じない。

▽▽▽

クロッシング・アクセス  
『相互意識干渉』

IS 同士の情報交換ネットワークの影響により、操縦者同士の波長が合うと発生する現象。潜在意識下での会話や意思の疎通が可能とされている。機能の詳細、発生原因等、明らかになっていない事が多いというISにはよくある事。

このくらいの機能現象なら何がどうやって起こってるかは解る。解らないのはこの機能を持たせた、持てるようにした製作者の意図だ。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「織斑……先生……っ！ それは……っ！ 砂糖じゃありません……っ！ それはあつ、塩です……っ！」

おかしいなあおかしいなあと呟きながらコーヒーを啜る織斑千冬に、山田真耶は搾り出すような声で残酷な真実を告げる。

かつてない程盛大にテンパツている様をもうちよつと見ていたナーという悪魔の囁きを蹴り飛ばした真耶の言葉に目を白黒させた千冬は、コーヒーカーップを静かに置いた。

「なぜしおがあるんだ」

どうしよう、今日の織斑先生が何かかわいい——思わずにやけかけた山田真耶であるが、彼女としてIS学園の教員である。ぶるぶると顔をふるって正気を保つ。

「そ、そんな事より織斑くんと凰さんですよ！」

「ああ、そうだな……システムクラックはまだかかるか。この分だと、あの二人が片付ける方が速いかもしれんな」

完全に復旧したのか、鋭い眼光で各種モニタに視線を飛ばす千冬を

見て、真耶はほうと安堵の溜息。その一秒後に千冬の発言内容に驚いた。

「え、ええ？ 片付けるって……確かに想像以上に善戦してますけど」  
アリーナ内部を映すモニタに映る白式と甲龍は見事なまでの連携で正体不明のISと渡り合っている。

「何も根拠なしに任せた訳ではないさ。あそこに居るのは私の弟と妹分だぞ。あれくらいは楽に倒してもらわんと困る」

「あ、あはは……そういえば、凰さん。織斑先生の事随分慕っていますね」

「……………ああ。昔にどこかの大馬鹿者が余計な事を吹き込んだせいでな。懐かれた」

（織斑くんが何か言ったんだなあ……）

淹れ直したコーヒー（無塩）の入ったカップを握る千冬の手元で何かこう、陶器が加えられた力に悲鳴をあげるみたいな音がした。真耶は聞かなかった事にした。

「二人とも仲が良いとは思ってましたけど、凄いですね。完璧に連携出来てますよ」

「凰はずーっと一夏にくっついていたし、一夏も凰を気にかけていた。互いの考えくらいは百も承知なんだろうさ」

「やたら苦々しく言う千冬。弟が女の子と仲良くしてるのは、姉として複雑なんだろうかなあと考えてみたりする真耶である。」

もしかしたらだが、弟を取られたなんて考えてたりするかも知れない。そう想像して頬がゆるみそうになるのを真耶は死力を尽くして我慢する。考えを悟られたら恐らくコーヒー（過塩）が待っている。「あの二人の仲の良さは筋金入りだぞ。昔はよく兄妹に間違われていたくらいだ」

「見てると本当にそんな感じですねえ」

真耶の答えに不満げに鼻を鳴らす千冬である。

そろそろ真耶のアルミニウムの意思もがまんの限界であった。むしろここまでにやけるのを我慢できているのが奇跡的である。

「……………なあ山田君。私と一夏は何て言われていたと思う？」

ぼつりと呟く千冬。嫌な予感しかしない真耶は戦慄する。聞き返してしまえば何か厄災が振りかかるような気がしてならない。このまま別の話題に逸らすなりして、うやむやにしたい欲求にかられる。千冬の視線は正面のモニタから動いていない。だが明らかに見えないオーラの何かが真耶の返答を促している。

根負けした真耶は問い返してしまう。なんていわれてたんですか？ と。

「上司と部下だ」

「うわあびつたり」

コーヒー（過塩）を一気飲みさせられた、山田真耶がそこに居た。

▽▽▽

『1』と『2』なら一見は『2』の方が良いと思えるが、必ずしもそうではない。何事もその場合その時における最適は異なる。

今回の様に対象が意思を持つ『人間』であるのなら尚更の事だ。一機相手に二機で戦う現状、確かに数では優っている。しかしそれは確実な優勢を約束してはくれない。

二人で戦う際には一人で戦う時よりも多くを考え、また意識しながら戦わねばならないからだ。それは役割であったり、特殊武装の特性、そして何よりも互いの事を理解していなければならぬ。

上手く連携が出来なければ、むしろ——いや確実に戦力の低下を招く。はつきり言って、息の合わない僚機なら居ない方がいい。

だが逆に上手く連携を取れるのならば、それは『1』では絶対に不可能な領域での戦闘が可能である。それどころか単純な『2』という数字に留まらない結果をもたらしてくれる、セシリアの眼前がまさにそれであった。

——わたくしの出番、無さそうですわねこれ。

右へ左へ、あつちへこつちへ。ボールの様にぼんぼんと吹き飛ばされ続けている所属不明ISを一応目で追いながら、声に出さずに呟いた。

織斑一夏と凰鈴音の二人は所属不明のISをこれでもかと翻弄し

ていた。通常の規格を逸した強力な武装を備えた相手に対し、退かないどころか——どう見ても押ししている。時間稼ぎどころか、撃墜は時間の問題だろう。

セシリアも不本意ながら一夏の訓練にそれなりの時間付き合っている。ある程度動きの傾向やクセは把握している。赤の他人よりは上手く連携が取れるだろう。しかし今日の前で展開されているレベルは絶対に不可能だと断言できる。

それ程までに見事な連携である。

片方の攻撃はそれ自体が確実な必殺であるのに、命中するしなないに関わらずそれはもう片方の攻撃の布石である。ギリギリのすれ違いは幾度もあるが、互いの攻撃を阻害する事は一度も無い。

それぞれ身体も心も——性別の違う『二人』だというのに、とにかく『連続』している。一瞬の停止も無く、滑らかに稼働し続ける『二人』は、いとも容易く強大な『一機』を追い詰め続ける。『一機』が規格外でなければとうの昔に撃墜されているだろう。

最初は機体や武装の相性が良いのかと判断した。が、違う。その程度ではこうも見事な連携は導けない。こんな——まるで互いの心が、思考が読めているようですらある動きは。

織斑一夏が《雪原》で発生させた特殊力場で『一機』を蹴り付ける。不可視の壁との衝突は確かに衝撃を与えるが、致命打ではない。

ビーム砲が発射する前に次撃が突き刺さる。凰鈴音の《龍咆》により生成され、拳と共に打ち込まれた衝撃波の弾丸。壁に押されていた『一機』は、反対方向からの不可視の拳に押され——不可視の攻撃に挟まれる。

これが『二人』の狙いだったのだろう。強力な力に板挟みにされた『一機』は両側から加えられる力に、身動きを許されるぬままま金属が軋む音を上げる。

『最早貴様は逃げることを叶うまい!!』

『このまま為す術も無くー!』

『砕け散るがいい!!』

それにしてもあの二人、実に悪い。

行為的にも、表情的にも、通信で響くセリフ的にも。あれではどちらが悪役かわかったものではない。もうちよつとスマートに戦えないのかしらと、セシリアは呆れを含ませた溜息を一つ。

「!?!」

為す術が無いように見えた『一機』はしかし次の一手を打つ。力場に挟まれて圧潰の時を待つ『一機』は動かない。動いたのは、新しい『二機』だ。

あの『一機』が乗り捨てた花弁の様なカプセルから、新たな参戦者が飛び出した。数は二つ。戦闘機の様には鋭く飛行する『二機』は、どこか『魚』を連想させる奇妙な形をしていた。

『そこから離れなさい! 新手が来ます!!』

『え!?!』

『うお何か飛んでき……あれ、オルコット居たの?』

白い方、後で撃ち抜く。

それはさておき。セシリアがオープン・チャネルで飛ばした声で気付いたのか、『二人』は直ぐ様その場から飛び退いた。

背後から不意を突く様に迫っていた『二機』は一度虚空を通り過ぎるが、直ぐに『一機』の傍らへと舞い戻った。力場の結界から解放された『一機』はゆらりと『二人』へ向き直る。それに伴って『二機』もまた機首の向きを変える。

既に『一機』でなく『三機』と考えるべきなのだろうが、どうにもしっくり来ない。機体のサイズは“人型”も“魚”も同程度なのだが、並ぶ三機を見てセシリアが連想したのは——自身も扱っているビット兵器の類。

だがこれで『二』対『三』となった事には変わりない、つまり数では逆転されてしまった。それに最初の『一機』があれだけ規格外な武装を備えていたのだ。新たに登場した二機もまた規格外を備えている可能性はある、どころかほぼ確実。

結果として。セシリアのその読みは当たっていた。

ただ、現実にはセシリアの予想を変な方向にぶつちぎる。

「……………はい?」

まず、中央の“人型”が高く飛び上がる。それだけならば別におかしな事ではない。問題なのは飛びながらそいつが“変形”を始めた事である。

ガガキ——ンと小気味の良すぎる音を響かせながらまず脚部が一度折り畳まれた後に、当初よりも長く大きな形状に再構成されて展開する。腰の後ろにあるユニットは何かと思っていたらこのためか。今度は腕だ。前に突き出された腕は真に砲塔へと変わり、その付け根ごと前へ稼働する。砲を前方へ突き出す形だ。

上昇していた“人型”が今度は下降を始める。それと時を同じくして、上半身が腰の辺りで回転し、胴体がそれまでと前後逆に。砲と化した腕だったものが一度二度と折れ曲がり、顔の横を通って前方へとその砲口を向ける。

何時の間にか顔が変わっていた。どっから出てきたその無駄にトゲトゲした新しい顔。

後何故動作の度々にこうも良い音が鳴るのか。明らかに自然発生でなく意図的にタイミングを合わせて流されているSEだ効果音だった。

ここまですら砲戦に特化した形態であるとまだセシリアも自分を納得させられただろう。だがそれで終わりではなかったのだ。

両脇に控えていた『二機』が一瞬の内に巨大な“腕”に変形し、腕を無くした『一機』にガキインとくつついたのである。右腕の先端では巨大な砲口と思しき円筒の筒が二本せり出した。左腕の先端では展開した部品が連結し、一本の巨大な近接ブレードを形成する。

そこに居たのは人間の形に近い『一機』ではない。  
戦闘機と魚を織り交ぜたような『二機』でもない。

巨大な両腕を備え、歪な人型のシルエットをした新たなる『一機』がそこに居た。

展開についていけず、軽い目眩を覚えるセシリアである。

危機は去っていないどころか、増大しているのは一目でわかるのだが、こめかみを押さえて俯かずにはいられない。気持ちを整理する時間が本気で欲しかった。

『か、かつ……』

『か、かか……』

オープン・チャネルから流れてくるのはセシリアよりも近くでその衝撃の光景を目の当たりにした二人の呻き声。当然であろう、混乱するのも無理はない。

『かつこいい……!』

滅茶苦茶顔を輝かせている馬鹿が二人、そこに居た。混乱するどころか前のめりで見つめている。明らかに喜んでいる。

セシリアはちよつと押し寄せる孤独感に膝を折りたい気分である。どうしてそんな感想になりますの——！ と彼女の心が叫びを上げる。

だってこれではまるで、この展開に疑問を抱いている自分が間違っているようであるから。何故疑うこともなく当然の様に受け入れているのかあの二人。

セシリアがわたくしは間違っていないわたくしはおかしくないと、ぶつぶつ呟きながら体育座りに移行しなかったのは、直後に響いた爆発音のおかげだった。

ハツと我に返ったセシリアの視界に飛び込んでくるのは、吹き飛ばす白式と甲龍の二機。

右腕に出現した砲口は最初の腕よりも連射重視のタイプなのか、絶え間なく赤い光を吐き出し続けている。それを避けた白式に、『一機』は一瞬で肉薄した。驚異的な加速力である。そして力一杯その左腕を叩きつける。一撃を受け止めるように翳されたのは雪片式型。

『ぐ、ッ……!?!』

『一夏——ッ、うあつ?!』

迎撃等お構いなし。一撃を受け止めきれずに、白式が吹き飛んだ。すかさず援護に入ろうとした甲龍には頭部両脇のビーム砲のみが自立稼動して、発射。それは避けた甲龍を、右腕のビームマシンガンが狙い撃つ。連射重視であるからビーム砲よりは威力が低いようだが、それでも甲龍はかなりのダメージを食らっている。

(強い……!)

パワーは勿論、巨大化したにも関わらずあの『一機』はスピードも



大きく上昇している。加えて増加した武装。手がつけられないとはこの事だ。

『二人』の連携は健在だが、『一機』はそれを塗り潰すほどの力を所持していた。優勢だった筈の戦況は、一気に後がない程の劣勢に追い込まれている。

「……………」

位置関係、使用された武装、そして相手の対応。

セシリアの頭の中で、何かがカチリと合わさった。座席を蹴り付けるごとき勢いで走り出し、その一点を目指す。

「冗談じゃありませんわよ……………」

誰も居ない観客席を、ただ一点を目指して一気に駆け抜ける。速くても駄目、遅くても駄目。アリーナの中では白式——織斑一夏が、零落白夜で『一機』に斬りかかっている。

恐らくあれは通じない。織斑一夏は無論届かせる心算で打ち込んではいない。しかし同時に、相手の目を引く零落白夜で自身に注意を引きつけ、控えている甲龍の一撃の命中率を上げる心算もあるのだろう。

だが駄目だ、と冷静に判断する。『一機』は織斑一夏に目もくれず、右腕マシンガンの連射で甲龍を叩き落とし、迫る光の刃——その根本、刃をの握る腕を“掴んで”放り投げた。

「それは……………」

咄嗟に力場で軌道を変えていなければ、白式はそのまま追撃のビームに晒されて消し炭になっていただろう。絶対防御で防げるのはそこまで、エネルギーの尽きた後では攻撃の一切を防ぐ術はない。この状況でISの機能を喪失するのは実質死同然である。

「わたくしの獲物ですわ!!」

セシリアの心に湧いているのは『怒り』である。

再戦を楽しむにしているその敵を、横からいきなり出てきて、反則極まりない行為で奪い去ろうとしている『一機』への。

そして事態は彼女の怒りに味方した。

織斑一夏は零落白夜のリスクを酷く正しく理解している。だから

決して無駄遣いはしない。展開させる時間は必要最低限にしている。しかし強力な敵を前にし、劣勢極まりない状況ではその判断も鈍った。鈍ってくれた。

遮断シールドにぶつかつた織斑一夏は、手にした武器を咄嗟にぶつかつた壁に突き立てる。ブレーキの心算だつたのだろう。その光刃で——“エネルギーを裂ける”刃を、エネルギーの塊たる遮断シールドに“突き立てた”。

「よし！ 後で褒めてあげないことありませんわよ織斑一夏!!」

無論直ぐに気付いた織斑一夏は零落白夜を引つ込める。だが遮断シールドは確りと切り裂かれ、僅かだがそこに裂け目を発生させたのだ。

走る速度を更に強め——そうしてセシリアは力一杯踏み切つた。空中に浮いた身体が重力に引かれ落下しながら、助走の勢いで前方へ飛翔する。

“裂け目”はわずかである。人間一人が通れるか通れないかどうかの隙間。だからセシリアはISを展開しない。ISを展開すれば、確実に“引つかかる”からだ。

潜るまでは生身でいなければいけない。しかし高出力エネルギーで形成された奔流に触れれば、人間の身体等一瞬で消し炭に変わる。それを理解していて尚、彼女は躊躇いなく生身で跳んだ。

セシリア・オルコットは世界で何より、自身の実力を信じている。翻つたスカートの手端がシールドにほんの僅かに触れ、一瞬持たずに消し飛んだ。それに構わず、欠片も動揺する事も無く。セシリアは悠々とシールドを潜り抜け——『蒼』が戦場に舞い降りる。

——選択武装、

「オルコット!? 何で来——いや逃げろ、速くッ!!」

セシリアが通つたのは、零落白夜によつて発生した“裂け目”である。つまりついさつきまで白式が居た場所となる。そこは、白式を追撃した『一機』の“近く”でもあった。

突如出現した『蒼』に対して特に目立つた反応は見せず、『一機』はその左腕を振り被る。ビーム兵器でなく長大なブレードでの攻撃を

選択したのは、距離と攻撃速度故だろう。それ程までに二機は近い。セシリアが愛銃である《スターライトmkIII》を展開していないのも、距離故にその銃身が障害となる可能性があったからだ。

——《スターダスト・ミラージュ》

光は、一瞬だけ。出現した二丁の拳銃を確りと握り締め——トリガー。銃口から迸った蒼い光の弾丸が一对、ブルー・ティアーズに向かうブレードに衝突した。

それだけでは圧倒的なパワーで振られたブレードは止まらない。だが着弾の衝撃でその軌跡が僅かにずれる。また発射の反動は機体を動かす。その二つの力を用いてブルー・ティアーズは直撃コースから離れ始める。トリガーは続く。発射されるたびに、セシリアは攻撃範囲が外れ、最終的に振り抜かれたブレードを舞うように回避する。

トリガー——ダメ押しとブレードの表面に着弾する。

トリガー——左腕の関節に着弾する。

トリガー——左肩と腕の境目に着弾する。

初撃以降の連射は総て左手に握った一丁による攻撃。右手に握ったもう一丁——その表面を光が走っている——“フルチャージ”。

突き出された右腕、そのビーム機銃に叩きつけるように向けられた右手の拳銃から、一際強く輝く蒼が放たれる。三発分のエネルギーを一発に圧縮して放たれたバレットは、相手の右腕をあらぬ方向へと突き崩す。

その反動を用い蒼い機体は“ふわり”と『一機』を通り過ぎて、翔ぶ。手にあるのは拳銃でなく“ライフル”。無防備な背中、そこで一際存在を目立たせる大型のスラスターに、一筋の蒼光が吸い込まれるように突き刺さる。

小規模な爆発に押され、遮断シールドに叩き付けられる様につんのめった『一機』を狙うは砲口六つ。右手の《スターライトmkIII》、左手の《スターダスト・ミラージュ》、そして分離した四基の《ブルー・ティアーズ》。

一斉に放たれるは破壊の光矢。立て続けに突き刺さり続ける光の

群れの隙間を縫うように『弾道型』二つも加わって爆発を連続させる。しかし決定打には成り得ない。爆煙を突き破って『一機』はセシリアを、その蒼い装甲を無残に穿たんと飛翔する。《ブルー・ティアーズ》が散開する。両の手にはライフルでなく拳銃を。

本来ブルー・ティアーズには近距離における戦闘用の武装——刃物が一つ装備されていた。しかしそれは外されている。使わないのではない。もう積まれていないのだ。搭載武装からの削除は、新たに二丁の銃を追加するための容量確保のため。そして何よりセシリア自身の希望で以て。

先日、彼女は“たていっせん”に両断されかけるといふ体験をした。

その際に気づいた事がある。

刃物は彼女にとって切札にも希望にもなりえず、セシリア・オルコットの本分であり芯となっているのは“射撃”なのだという事を。接近されたから仕方なく、その場しのぎで行う格闘に注げる誇りを、どうやらセシリアは一切持ち合わせていないらしい。

故に彼女は刃物を意図的に捨てた。例えどれだけ距離が近づこうとも、銃器で“射撃戦”を挑むと決心して実行した。自身が信じるものに総てを賭けるために。

加えて——刃物が一応とはいえ装備されているのだから、万が一接近になっても対処の仕様がある——そんな夢見がちで甘えた考えをかなぐり捨てることも出来る。一石二鳥とはこういう事を言うのだろうか。

だから今のブルー・ティアーズに一つ足りとも刃物は存在しない。セシリアは恐らく誰よりもブルー・ティアーズという存在を気に入っている。代表候補生に選ばれたのはその実力を認められたからであるが、専用機持ちにまでなれたのはBT兵器との適性が最高値であったからという面が大きい。

だからセシリアはブルー・ティアーズを気に入っている。自身の誇りを後押ししてくれた存在である。“総てを賭ける”には、これ以上信頼できるものはない。

「その二人！ 何をボサツとしてますの!!」

再度背後に回ったセシリアは集中砲火を『一機』に浴びせかけながら、呆気にとられている『二人』を怒鳴りつける。

「さあ、さっさと撃ち抜いて片付けますわよ！」

その身総てで己が誇りを示す戦乙女が、蒼い光を撃ち放つ。

▽▽▽

システムオールグリーン  
【全機能異常無し。】

【仮接続。完了。】

【起動準備。完了。】

【待機中。】

——未だ名も無き0と1の集合体

▽▽▽

「援護は全面的に引き受けてあげます、前衛は任せましたわよ！」

拳銃型の武装を仕舞い、愛用のライフルを両手でしっかりと構え直したオルコットは、俺と鈴に前を譲るように後退する。入れ替わるように俺と鈴は急加速をかけて敵へ前進した。

無論敵は黙っていない、頭部両側のビーム砲と右腕の連射砲がこちらに向く。飛翔した四基のビット、その先端から放たれた光矢が敵の両側から突き刺さる。一拍遅れて、オルコット自身が撃ったレーザーが敵頭部のど真ん中にぶち込まれた。

その隙に俺と鈴が一気に肉薄して、それぞれの武装を叩き込む。文句のない直撃だが——敵の装甲表面に目立った損傷は見られない。「……思った以上に堅いですわね」

「合体してからシールドの出力も上がってるのよ！ かつこいいけどめんどくさいなコイツっ!!」

振るわれた大型ブレードを掻い潜るように回避して、鈴が土手っ腹に衝撃波の拳を叩き込む。攻撃の衝撃をくらって仰け反りこそするが、シールドを抜くまでには至っていない。

「織斑一夏、零落白夜は後何回使えますか？」

「フルパワーなら後一回」

スラスターと《雪原》の力場を併用して小刻みにスライドするように機動。敵の右腕から発射された赤いビームを避け、思いつき振るった式型を叩きつける。

頭部脇のビーム砲の内部で赤い光が膨れ上が——四基のビットが一斉射撃。前につんのめりうながら放たれたビームは、誰も何も無い空間を通り過ぎた。

「……概ね、解析が終了しました」

「あの、シロ、謝るんでそろそろ機嫌直してくれない？」

「……仰る意味がわかりません。操縦者に絶対服従する事が最優先事項とされているAIの私に機嫌も何も無いでしょう」

「じゃあその発言の前の微妙な間は何か」

「……仕様です。わたし、もともとこういうしやべりかたです」

嘘だ。絶対嘘だ。

翳した式型で敵のブレードを受け止める。せめぎ合いになり、その場で停止した俺の肩を飛び越えた鈴が一気に肉薄。やたらいい感じにトゲトゲしている敵の顔面に、巨大な右拳を叩き込んだ。後退しながら鈴は素早く拳を引く、連動するように右拳が解ける。二門の衝撃砲に復帰した《龍咆》による不可視の圧力が敵のボディを殴りつけた。

「選択肢は二つ。このままエネルギーを節約して、教員の突入まで持ちこたえるか。もしくは——一発に賭けた勝負に出るか。幸か不幸か、“こちら”には一発逆転を狙える武装がありますから」

「俺の零落白夜、か。とはいえそいつはあんまり分がよろしくないな。リスクが高すぎる」

「でもこのままじゃこつちのエネルギーがもつかわかんないわよ。蒼いのと違って白式と甲龍はそう長く戦えないし」

「蒼いのでなくブルー・ティアーズですわ、ブルー・ティアーズ！」

衝撃波に吹き飛ばされた巨体は地面に着弾、もうもうと土煙を巻き上げさせた。撃破できたとはその場の全員誰もが思っていない。故に警戒は一切怠らない。会話はしても、視線は敵の方向へと注がれ、武器は構えられたままだ。

土煙が晴れる。地にその巨大な両脚で仁王立ちするISと思しき

敵は、ゆつくりと頭部を動かして上空の俺達を見上げている。そのボディの各所はひしやげていたり焦げていたりするものの、全体的には微々たる損傷しかしていない。

「不幸中の幸いなのは——あれが無人機という事くらいですわね。力の加減を考えなくていいのは、正直助かりますわ」

オルコットの言葉に、俺と鈴は無言でもって肯定する。

ISは原則として人が乗らなければ動かない。ただ俺達の目の前に居るそれは、間違いなく例外だった。

戦っている途中から何かおかしいとは感じていた。この敵とは戦っていて、『楽しく』も『怖く』も無い。銃撃からも剣戟からも何も伝わってこない。人間らしさ、つまりは感情の類が一切感じられないのだ。徹底して機械的な動きなのである。

人間も感情を殺した動きは訓練を積みれば可能だ。しかしそれだったらこんな無機質でつまらない動きにはならない。人間誰しもが必ず持ち、縛られ、振り回されるのが感情だ。素晴らしくもめんどくさいソレを、自己の意思で抑えこめる人間の動きはもつと美しい。

ちなみに感情を無理やり壊された場合はもつと分かりやすく醜い動きになる。そっちは見ると不快になってくるから直ぐに分かる。

そして抱いた疑問は途中で確信に変わった。

中に人間が入っているのなら、あんな“変形”はどう考えても絶対に不可能である。やったら中の人が大変な事になる。正直実際ぶつかり合わなくてもあの変形合体シーンを見れば一目瞭然である。

「さあて。どうすつかね。中枢の位置に当たりは付けてはあるが、確実にぶつた切るのはちいと骨だぜ。あの野郎、零落白夜の特性を知ってやがる」

俺は一度零落白夜を起動させて攻撃を行っている。その際にあの敵は式型の“刀身”を避け、柄と腕を掴んだ。あいつは、零落白夜の“刃”が触れてはいけないものだ”知っている”。

「織斑一夏。あなた、わたくしの期待に応える覚悟がありましたか？」

「十……いや、五秒でいい。五秒稼いでくれたら、仕留めて見せる」

敵は未だ動かない。こちらを見上げたまま、佇んでいる。その巨体



を見下ろし、狙いを定めながら。かつて盛大に戦り合って、しかし今は肩を並べるクラスメイトと言葉を交わす。

「はん！ 五秒と言わず一分でも十分でも稼いでやるわよ！」

「それだけ稼げるなら普通に倒せよ」

「それだけ稼げるなら普通に倒せばいいでしょう」

「あんたら後でブン殴ってやる」

兎に角。話は纏まった。後は最善の結果を引き寄せるだけ。

鈴は両の拳を打ち鳴らして、金属音を響かせる。セシリアはライフルから二丁の拳銃に持ち替える。そして俺は、刀を握り締めた。

最初に動いたのは——相手の方だった。

作戦会議を聞いていたのか、それともこちらの様子から何かを察したのかは知りやしないが——巨大なISのようなそいつは、突如その歪な両の腕を大きく左右に広げる。

バシユツと空気の抜ける音と共に、胸部装甲の幾つかが脱落する。開いたそこからせり出してきたのは、赤いクリスタル。放つビームと同質の輝きを秘めるその結晶が眩く輝き出す。そしてボディの表面を無数の赤い光が走り始め——

「……………」

「……………」

「……………」

【…………敵IS内部でエネルギーの増大を確認】

視線を向けるまでもなく、鈴とオルコットが顔を引き攣らせたのが息遣いで感じられた。恐らく俺も似た様な顔をしているのだろう。そんな中、一人だけ平常運転（拗ね気味だが）のシロが何とも頼もしい。

思わず固まってしまったこちら三人を置き去りにして、敵はその輝きを強め続ける。内側で増大し続けているエネルギーの奔流が、装甲の、関節の隙間から閃光という形で溢れ出している。

【…………エネルギー総量から推測するに。このまま総てが破壊力に換算された場合、最低でもこのアリーナは跡形もなく吹き飛びます】

「自爆する気かよ、あの野郎ツ!!」

「止めますわよ、一刻も早くッ!!」

「言われなくてもわかってるわよッ!!」

白式、甲龍、ブルー・ティアーズが全く同じタイミングでその場から敵目掛けて真下へと落下するように飛翔する。

「でも攻撃していいの!?! ぶちこんだらボカンとかなんないわよね!?!」

「何もしなければどっち道ボカンですわよ!!」

「直ぐ爆発しねえってことは、何か準備してるってことだ、手は多分残ってる! シロ!」

「……はい」

無機質音声改め拗ねボイスと同時に表示されたのは、敵ISの大まかなシルエツト。その胸部の一点に明滅するマークが付けられている。

「……制御中枢部位をピンポイントに破壊出来れば増幅されたエネルギーは破壊力に変換されず霧散します。多少の爆発は起きるでしょうが、このまま一気に放出されるよりは被害は抑えられるでしょう。推測ですが」

「よし! とにかくアイツの動きを止め——」

轟、と幾筋もの赤い閃光が瞬いた。直進の軌道が無理やりにねじ曲げ、三機のISはバラバラに散開しつつもその砲撃を回避する。明らかにさつきまでより威力が桁違いに増していた。

「自爆準備中に何動いてんの!?! そんなのアリなのふざけんじやないわよ——!?!」

鈴の絶叫に全力で同意したいのだが、避けるのに忙しくてそんな暇が無い。上がっているのは威力だけでなく、連射速度もだ。恐らく砲身の耐久性を無視しているのだろう。敵の砲塔は発射の度に小規模な爆発を起こしている。

「——うそっ!?! なんで!?!」

突如、鈴が悲鳴のような声を上げる。直後、何処かへ一直線に向かって飛んでいく。敵の方向とは明らかに違う、放たれたビームを避けるための動きでもない。

「おい、鈴!？」

「何してますのこの非常時に!」

俺とオルコットの叫びに答えず、鈴はただ一直線に飛ぶ。その延長線上に視線を飛ばして、俺は鈴の行動の意味を理解した。鈴が文字通り真っ直ぐに向かっている先には、ピットとアリーナを繋ぐ出入口の一つ。

遮断シールドで隔てられている外側から、内側へと入り込んだ少女が一人。

今まさに、地面に向かって落下している途中だった。

「間に合えええええッ!!」

ガガッ! と拳が衝撃砲へと可変、そして甲龍が一段加速した。恐らく衝撃砲を後方に発射して即席のブースターにしたのだろう。あのスピードなら、ギリギリだが間に合うだろう。少女は——篠ノ之箒は、地面に落ちる前に受け止められる。

だが、あんな直線的な動きをしている鈴を敵が見逃す筈がない。

「どうしてこう次から次へと——面倒な事が起きますのッ!？」

鈴は無事に箒を受け止めた。しかしその背後からは赤いビームが迫ってきている。急停止した直後の鈴にそれを避ける術は無い。

近接武装しか無い白式はこの位置関係ではどう足掻いてもフォロに回れない。だからオルコットは、直ぐに動いた。正確には動かした。

ブルー・ティアーズの全火力を集中させてもあのビームは止められない。だから“鈴を”狙う。ピットの一基が放ったレーザーは鈴の傍らの地面に着弾し、爆発を引き起こした。

吹き飛ばされた鈴は無理やりに位置をずらされ、結果としてビームは鈴でなくアリーナの壁に着弾して爆発する。

“弾丸”の進路を変えられなくても、“的”が動けば射撃は外れる。

鈴と箒を思惑通りに動かせた事に安堵したからか、蒼い彼女は一瞬だけ忘却していた。ブルー・ティアーズのピットを精密操作している時、彼女は“止まって”いるのだ。

「セシリア!!」

「——ッ!」

俺の絶叫と、閃光の発射は同時だった。それでも反応してみせたのは流石なのだが、一拍遅い。ブルー・ティアーズ右側面のバインダーが、ビームの奔流に飲み込まれて、消し飛んだ。

▽▽▽

——私はだあれ?

全身を叩かれるような衝撃に、濁っていた意識が少しだけ鮮明になった。倒れている身体を起こそうとしたら、全身に感じる鈍痛が邪魔をする。

何よりも意識を蝕むほどの重く鈍い頭痛が厄介だった。それでも何とか上体を起こした筈は、そこでようやく自分が今何処に居るのかを認識する。

アリーナの中だ。遮断シールドで隔たれ、入る事の出来ない筈の場所に筈は倒れていた。当然の様に何故と考え、現状に至った過程を思い出そうと試みる。だが一層激しさを増した頭痛によつて記憶の回想を阻まれる。

「気がついた? だったら回れ右して出口に向かって走って」

反射的に顔を上げれば、誰かの背中が視界に入る。誰かは直ぐに検討がついた。ISを着ているから小柄ではないけれども、ツインテールの髪型には覚えがある。髪を結びリボンの片方が、黒く焦げている。

「鈴……? 一体、何が、私は、どうしてここに」

「そりゃあたしが聞きたいわよ。気がついたら何か落ちてるし。大体どーやって遮断シールド通り抜けたの?」

筈の方を振り返らないまま、鈴は右肩のユニットに手をかけ、振るう。金属音と共に砲が拳に変形する最中で、ひしやげた装甲や幾つかの部品がバラバラと落下した。

「ま、聞くのは後回しか。とりあえずここから離れて、速く」

箒は鈴の向こう側に歪な人型が立っている。試合に乱入したISだと理解したが、何故か最初とは形が異なっている。全高が数倍になり、特に両腕が巨大化しているのだ。更に全身から吹き出すように赤い光を迸らせている。

——私はだあれ？

あれが何かは見当が付かないが、尋常でないことだけは嫌という程伝わって来る。そびえる巨人が、ゆつくりとこちらに向き直った。噴き出る赤い光が収束し、幾つかの球を形作る。

「大丈夫、攻撃は通させない」

右腕を突き出して、左腕を添える。それだけで部品が幾つか脱落する。鈴のISがダメージを負っているのは明らかだが、推進系はまだ生きている筈だ。なのに何故鈴はここから——今直ぐにでも砲撃されてもおかしくない場所から動かないのか。

「何故だ」

それは箒が後ろに居るからだ。

だからわざわざ止まっているのだ。より狙いやすい的になるために。

「何故私を庇う、私は——」

呆然と呟いていた。

鈴と最後に会話したのは、部屋割りについて言い争ったのが最後である。箒が一方的に鈴を拒んで、跳ね除けたあの会話が最後である。だから鈴の箒に対する印象は最悪である筈なのだ。だから問わずにはいられなかった。

「だって私、箒と友達になるの諦めたわけじゃないし。というかケンカ別れで死に別れて、それこそ冗談じゃないってのよ」

鈴は、物凄く何でもない事のように返答した。赤い光球は膨れ上がり続けている。生身である筈の箒は何故か理解している。あの光球が転じて放たれるビームの出力は、甲龍の攻撃では防げない。防御するにもシールドエネルギーの残量が足りてない。

「大体ね、一回や二回ケンカしたくらいでなんだったのよ。あたしと

イチカなんかもう数十回はケンカしてるわよ」

甲龍のハイパーセンサーがそれを察知していない訳は無いのだ。底いきれない事を鈴は解っているはずなのだ。箒を見捨てて、この場から離れれば助かることは解っている筈なのだ。

思った事がなんだったのか、はつきりとは自覚できていない。

それは死にたくないだったのか。

それは負けたくないだったのか。

それは助けてほしいだったのか。

それは嬉しいだったのか。

それは悔しいだったのか。

あるいはその総てだったのか。

限界まで膨れ上がった光球がビームとして放たれる。迎え撃つために鈴が龍の拳を引き絞る。そして、箒の頭の中で何かか“ばぎん”と音を立てて砕け散る。破片を退けて現れたのは、知らない名前。でも刻まれていた名前。

「紅椿

——

ツ!!!」

ここで初めて鈴が振り返る。それは、絶叫に応えるように“後方”で真紅の光が爆発するように膨れ上がった事に対する驚愕故に。当然だろう。光が爆発するのなら“前方”であるべきなのだから。しかし現実には鈴の予想を飛び越えて展開する。

迎撃されないビームは当然着弾する。しかしそれまでだった。自身より遥かに高出力のエネルギーの壁に飲み込まれ、掻き消されるように消失する。

【紅椿。合戦用意。】

箒を中心として拡散した赤い光は、砲撃を無効化した後に弾け飛ぶように消失した。だが赤い光は消えていない。何故なら溢れ出てくるからだ。弾け飛んで消失した分よりも多くの赤い光が——中心から、箒の纏う機体から迸り続けている。

【ワンオフ・アビリティ《狂喜乱舞》。発動。】

周囲を燃え上がる炎の如くに生々しく蠢く赤い光の端を、赤い鋼で覆われた箒の両腕が捕まえるように握り込む。ずるりと引つ張られ

たそれは、整えられる飴細工の様に姿を変え——二振りの刀と化した。

「うう——おおおおおお!!!」

新たに噴き出した赤の奔流が箒の纏った機体の後部に収束し——爆発する。ただ膨大な出力に任せただけの、単純なる加速。しかしそれは並の膨大でない故に、規格外の速度を叩き出した。瞬きの内に己に肉薄するであろう篠ノ之箒にビームが向かう。

しかし破壊の光矢は翳されただけの刀に呆気無く膝を折って消し飛んだ。出力の桁が根本的に違う故の、当然の結果である。

「脚だ!!」

機体の機能、その一部と化しているも同然の今の箒がその言葉に反応できたのは、それが想い人の声だった故か。高く高く振り上げた。赤く揺らめく二振りの刀が力の限り振り下ろされ——巨人の両脚を串刺しにして縫い止めた。

「今ですわ！ 放り投げなさい織斑一夏!!」

続いて聞こえた声は、蒼い機体を纏う少女のものである。白い機体を纏った箒の想い人は、抱えていた蒼い機体を力の限り巨人に向けて放り投げる。

蒼い機体を纏う少女は、両手の拳銃を乱射し、腰のミサイルを発射し、残り二基となったビットを射撃させながら突貫させ——最後に自身の身体を『右腕』にぶつけて組み付いた。

「せえいいやああああ!!!」

現実には驚愕しても、それでも龍を纏う少女はこれが好機であると察知していた。箒の突撃の後ろという安全地帯を、部品を零しながらも疾走し、残りのエネルギー総てを注ぎ込んだ拳を『左腕』に叩き込む。

『脚』を串刺しにされて。

『右腕』を抑えこまれて。

『左腕』を吹き飛ばされて。

巨人がその瞬間『停止』した。

三人の中で唯一かつ最も冷静だったのは蒼を駆る一人である。だから彼女は切札の攻撃を促そうとした。





【……47センチ。ズレた】

シロと呼ばれる電子の幼子は、その事実を当たり前のように認識する。



【私の判断は間違っていないかった】

【ただ、最上ではなかった】

【どうして私の補助なしにそれが解ったのかが解らない】

【これが、私が解らないといけないこと】

【秘匿された本当の、最優先事項】

——かつて名も無き0と1の集合体



【敵性ISの機能停止を確認。戦闘終了。】

巨大で歪な人型兵器は、その機能を完全に停止させた。破壊力に変換する為に集中していたエネルギーはその殆どが役目を果たす事無く霧散するが、一部は爆発という結果を引き起こす。巨大な機体のあつこちで小規模な爆発が連続した。

右腕に組み付いていた一機は巻き込まれぬよう、直ぐにその場から飛び退いた。左腕を殴りつけた一機は攻撃の勢いそのままに前方につんのめり、顔面と地面を盛大に擦りつけている真つ最中だった。胴体の四分の三をばっくりと切り裂いた一機は——止まらないのか止まらないのか、一直線に進んだ挙句に観客席に着弾した。

当機は軽く後方に飛び退いての防御行動を選択する。背部と腕部の装甲の可変に伴い、増幅され放出された、機体周囲を漂う炎状の高エネルギー体が盾のように前面に集中。爆発の衝撃と炎熱の一切を遮断する。

【単一仕様能力。《狂喜乱舞》。強制終了。】

一際大きく爆発。巨人はゆっくりと身体を傾け始め、後に轟音と振動を伴って地面に仰向けに崩れ落ちた。

【機体。及び。搭乗者。強制冷却。】

エネルギー体を維持していた能力が停止した事で、赤い光は吹き飛ばのように掻き消えた。機体各部のカバーが展開し、内部に籠った熱が

蒸気の形で吐き出される。

「そして篠ノ之箒は己を取り戻した。正確には己を機能させる余裕<sup>リソース</sup>を取り戻した。現時点の彼女に何が起きたかを知る術はない。故に胸中に起こるのは達成感でも勝利の喜びでもなく、ただただ困惑である。」

「何だ、何が起った!?!」

記憶は、重たい身体を地面に横たえ、立ち上がろうと藻掻いていた所で途切れている。なのに気が付けば箒の身体は立つどころか空中に浮遊しているのである。

「何だ、これは……」

上げた両腕は制服でなく、どこか生身の腕でもない。赤く染められた鋼で以て形成される機械の腕だ。腕だけでない。脚も、胴も鋼で形成された機械の部品で覆われている。

一般的にISと呼ばれるモノを、箒は装着していた。

「——う、」

何時の間にかISを、忌み嫌うモノを装着していた事に対する心因性の負荷か。それとも、眼前に在る巨大な鋼の骸を視界に入れて先程の死の恐怖を思い出した故か。

吐き気を感じて反射的に口元を鋼で尖る指先で覆う。酷いものはなかったためか、耐えることはできたが、気分が悪い事に変わりはしない。

「ぐっふう!?!」

そんな風に我慢している真つ最中に、横合いからずどーんとぶつかってきた相手に、箒はちよつと本気で殺意が湧いた。手に刀があつたら斬っていたかもしれない。というか斬り捨てたい。

「いやっほー勝った——っ!!」

ぶつかった、否。抱きついてきたのは鈴だった。満面の笑みとはこんな表情のためにある言葉なのだろうと、箒は怒りも忘れて考える。

だが鬱陶しいので箒は鈴を力任せにひっぺがす。それとこれとは話が別だ。

「何よ何よ、凄いいじゃない箒！ もーっ、そんなとっておきがあるならさっさと出してよー！」

「いや……私にも何が何や、」

ケンカしていた、している事を忘れているのかどうでもいいのか。目をキラキラと輝かせた鈴が前のめりで箒に詰め寄って質問攻めを始める。

とはいえ箒もまだ混乱から立ち直っておらず、質問に対する回答を持ちあわせていない。ともかく物理的に距離を離そうと鈴を押しやろうと——ばかん。至近距離でそんな音がしたのを箒は聞いた。

「——らっ？」

後ろから、軽く押された様な感触があつた。何事だと箒が思った刹那——下方へと引つ張られる感覚。それは重力に引かれた事による、“落下”という現象が始まる前触れ。

ざあ、と血の気が引く音を聞いた。

しかし落下は始まった直後に終了する。傍らに居た鈴が、今まさに落ち始めた箒の手を掴んだからだ。がくんと、空中で急停止する。

「ちよ、ちよつとちよつと、何こんところでIS解除してんの!?!」

「わ、私がやったんじゃない!!」

それを行った存在に目を向ける。鈴も箒に釣られ、視線を動かした。そこには赤が佇んでいる。箒を吐き出すように降ろした真っ赤なISだ。

二人が見つめる中、赤に変化が起こる。ガガガガガガッ、と小刻みな金属音を連続させた赤いISは一瞬で人型のシルエツトを失った。複雑なパズルを解く映像を早回しで再生したような光景。その形を例えるなら鳥。姿を変えた赤いISは、視界から消えるような速度で急上昇し——何処かへ飛び去った。

あの赤いISは何なのか、何故箒の手元に現れたのか、果たして本当に味方だったのか、何故何故何故と、赤いISを見送る箒の心中には無数の疑問が乱立する。

「あ、ヤバ」

思考に沈みかかっていたが、鈴の声で我に返る。何事かと自身をぶら下げるように保持したまま浮遊する甲龍に目を向けると——その装甲が淡い光を放ち始めている。一般的に具現維持限界リミット・ダウンスと呼ばれる現象の報せである。

その結果、これから二人がどうなるのかを箒が理解した辺りで、何故か無駄に良い笑顔で箒に向き直った鈴は——  
「ごめん、落ちる」

▽▼▽▼

「き、きさまあつ！ 今私をクツションにしたな!？」

「いーじゃないのよクツションの一つや二つ、ここにこんだけっ！ あんだからあアア!!」

「うひゃあああ!! ど、どどど何処を触っている——っ!？」

鈴が緩やかに高度を落としていたのが功を奏したのか。“ずべしやつ”とかなかなかにクレイジーな音がしていたが、二人は大した怪我も無いしかった。

音から察するに取っ組み合いのケンカ真っ最中であろう二人は無事のようにだ。あれだけ騒げるなら大丈夫だろう。

「全く、何をやってますのあの二人は……」

がしやん、と音。傍らに降りてきたと思しきオルコットが、呆れたように呟いている。どうやらオルコットも無事だったらしい。バインダーの片側を吹き飛ばされた機体は決して無事とは言えない有様なのだろうか。

「そしてあなたも何やってますの」

「スイマセンぶつちやけ完全に埋まりました超ミラクルフィットしてビクともしません助けてください」

「……………」

のしかかった瓦礫がいい感じにはさまってビックリするくらい全然身動きできない。

最後の一撃は成功した。零落白夜の刀身は敵のシールドを切り裂き、その奥にあった――”狙うべき場所”を寸分違わずぶつ断ぎつた。

問題はその後である。いや、今回はちゃんとブレーキ覚えてたんだよ。でも最大出力の《雪原》と瞬時イグニッション・ブースト加速を無理やり併用した影響なのか、推力関係が一時的に機能不全を起こしたのだ。

そのまま過去最高の速度でもって観客席に前のめりに突撃である。衝突ダメージの緩和がトドメになったのか、機体はとづくに光に解けて消えてしまった。パワーアシストを失った俺は、瓦礫をどけることも出来ず、無理やり身体を引っこ抜くことも出来ず、上半身を突き刺しっ放しなのである。

というかこれ絶妙なバランスで生まれた隙間に挟まってる訳で、拮抗が崩れて上の瓦礫が落ちてきたら普通にやばい。今直ぐどうにかなるって事はなさそうだが、何時までもこんな体勢は御免被る。でも超頑張っても抜ける気配が無い。だからもがき続けて体力使い果たした辺りでやって来たオルコットがちよつと女神に思える。

「よいしょつと」

「ぐへえア!？」

俺の上に座りやがったよこの金髪縦ロール！ ISを展開したまま！ 重いぶち抜いて痛い！ めり込むめり込む地面にめりこむ！

「未知の技術が使われた所属不明のIS、篠ノ之箒の使ったIS……全く、今回は訳がわからない事だらけですわ」

「んなこたアいーからどきやがれ！ いやどいて下さいまじでお願いしま腰がアアア!!」

ぱあ、と光が散った。白でなく蒼い光がはらはらと舞っているのがほんの少しだけ見えた。次いで身体の上に軽い衝撃。さつきまで在った堅くてごつい何かとは全く違って、柔らかい何かが俺の身体の上に乗っている。

「織斑一夏。あなたさつきわたくしの事”セシリア”と、そう呼びましたわね？」

「ありや、いっつけねーそう呼んでたか。悪いな、切羽詰っててついやつ

ちまった。俺基本気遣いとか無縁だからよ」

ISを解除して、オルコットは生身で俺の身体の上に座り直した。なるほど、思い出せばさっきは咄嗟に名前の方で呼んでいる。それで機嫌を損ねたからさっきのプチ拷問なのか。

俺の謝罪を聞いたオルコットはこほんと咳払いを一つ。

「ま、まあ今回の働きに免じてそう呼ぶことを許し、——ツ!?」  
「ぐいふあ!？」

再びの重い通り越して痛い!

だがさっきと違うのはそれが一瞬だった事だろうか。音だけの判断だが、ISを展開したオルコットは立ち上がりながら武装を展開し、それを発射する。拳銃型の武装の発射音が数回。そしてライフルの発射音が数回。それらが鳴り止んだ後、オルコットは忌々しげな呻き声を漏らした。

「……ッ! まだ動けたなんて!!」

「え、なにになに? 何があったの?」

「貴方はいつまで刺さってますの——ッ!」

ISを展開したオルコットが俺の脚をひつつかんで、力任せに引っこ抜いた。ああ太陽が眩しいとか思いつつ、放物線を描く身体を慌てて立て直して着地。じゅってんれい。

地味に痛む腰をとんとん叩きつつ、首を巡らせた。オルコットは上空を睨み付けているが、そちらを向いても俺には青空しか見えない。ならばと下方へ。取っ組み合っていたと思いき鈴と箒もまたオルコットと同じ方向を睨みつけている。

「……左腕か」

その原因をようやく理解した。アリーナの真ん中で仰向けに倒れ伏している、例の変形合体ISから歪な左腕がごっそり脱落している。破壊されたとかでなく、丸ごとごっそり無くなっているのだ。

あの腕は“腕”になる前は戦闘機のような魚の様な奇妙な形で単独行動をしていた。見てないので状況からの推測だが、恐らく腕だけが分離変形して離脱したのだろう。

目を凝らせば倒れ伏す巨人の中心にも変化が見て取れる。ボディ

の真ん中からせり出していた赤いクリスタルが消失しているのだ。俺が斬ったのはその半分くらいだったはず。全部は斬ってない。だから、破片が残っている筈。

それが無いということは、“腕”が持ち去ったのだろう。あのクリスタルがコアだというのなら、おかしいどころか当然である。絶対数が決まっているISのコアは“貴重品”なのだから。

傍らに突き立っていた雪片式型を引き抜いた。本来なら機体と共に消失している筈なのだが、何かしらエラーが生じたのかもしれない。

「本当、人生は壁に事欠かないよなあ」

皆と同じ方向に顔を向ける。見えるのはただ青い空と白い雲、そして陽の光だけ。がやがやと聞こえてくる声は、アリーナのロックが解除されたことで突入してきた上級生や教員たちの声である。

今回はこれで終わりだ。

勝ったのは俺達だ。

でも勝ちはしたが、実際何も解決していない。それどころか色々なモノが始まった、動き出したような、奇妙な感覚があった。

手に握る雪片式型が、ぴしりと音を立てた。

ぴしぴしと響く悲鳴と共に、その刀身に“ひび”がはしる。

▽▽▽

ISを『よくわからないもの』としている元凶、それが『ISコア』だ。

そんなコアの機能を停止させる方法は大雑把には二つ程ある。

一つは正規の手順を踏み、いくつかの防護機能を無力化し、停止状態に移行させること。無論この方法を行うためにはコアの事を理解していないとはいけない。

ちなみにそれが可能な程にコアが理解できているのなら、その人物はコアを0から製造可能だろう。作る方法がわかるからといって作れるかどうかは別問題だが。中心核の材料はこつちじゃ手に入れるのも作るのもめんどくさいのだ。



もう一つ。これは誰でも——という訳でもないが、別に頭が良くなくても大丈夫。コアの防御力を超える攻撃力で跡形残さず消し飛ばせばいい。後腐れがなくてすごく楽ちん。

「変わらないね」

手の中には赤いクリスタルが一つ。真ん中から端へ大きな切れ目が入ったそれは、ISコアと呼ばれる物体”だった”。

普通ならこの場所は狙わないし、狙えない。単純に機能を停止させるだけならコアを狙う必要も無い。むしろ構造の不明瞭なコアを無理して狙う方が危険ですらある。

「だけど破壊されたのは『コア』。しかもその中枢。」

解りやすく、誰もが導き出せるように用意しておいた『正解』に目もくれず。47センチずれた箇所にあつた『大正解』に刀は突き立てられた。

機能を完全に停止して沈黙したこのコアが輝く事は二度と無いだろう。コアの更に奥の、一番重要な部分が完全に破壊されてしまっているから。

直すよりも作り直した方が速い。こんな状態になったコアを、現在手中で弄んでいる人物は初めて見た。そもそもこんな状態になる事を今日初めて知った。

「あの時と一緒に」

ISコアが解明されない理由の一つとして、中途半端に壊せないという点が挙げられる。解析を阻む防壁を砕くためには、力で吹き飛ばさねばならない。しかし吹き飛ばしてしまえば中身も吹き飛ばす。調べるなんて出来る筈もない。

そんな風に上手く分解できないから内部構造が調べられない。だから、コアは謎の存在で在り続けている。そういう風に作ったとはいえ、製作者の予想を遥かにぶつちぎった謎っぷりでもって。

「私の計算を、簡単にひっくり返しちゃうんだね」

もしこの綺麗に壊されたコアをどこかの研究機関辺りに放り投げれば、コアに関する研究は飛躍的に増大する事だろう。作れるかどうかは置いておいて。製法くらいは解明する糸口が発見されるかも知

れない。

ただ吹き飛ばすだけでは、真に壊した事にはならない。コア自体は消失しても秘密が守られているのだ。試合に勝って勝負に負けるとはこの事である。

だから真の意味でコアを壊すということは。

きっと、今この手の中に在るような壊し方。

手に持つ赤いクリスタルが、ぴしりと音を立てた。

ぴしぴしと響く悲鳴と共に、その全体に“ひび”がはしる。

きん、と呆気無く。

かつてコアだったものが、真つ二つに割れた。



もしかしたら、このまま一生『にせもの』を続けられるんじゃないかって、考えていかなかったといえは嘘になる。

まあ何というか俺のじいちゃんは幼心でも容易に判る程に駄目人間だった訳だが、勝負事の駆け引きにおいては天才的に長けていた。本人いわく元から得意だったのを時間かけて磨き上げたとの事だから、それは相当なモンだったんだろう。

時にはテーブルの上で、時には自分の身体を動かして、時には数多の他人をコマの様に操作して、そんな経験体験をじいちゃんは俺に話して聞かせた。性格ってーか性根が腐ってる人だったけど、話は凄く俺好みだったから夢中で聞いていたのを覚えて、いる。まだ。

今考えれば仕込んでいたんだろう。勝負事にする心構えというか感覚、理論とか——そういうものを。自他共に認めるほど物覚えが悪いや俺が、話に潜む『伝えたかった』事をちゃんと理解して、まだ、うん、まだ憶えている。それが証拠だ。たぶん。

日頃から息子は『おれに全然似てねー』だの『あれつまんねーまじつまんねー』だのぶちぶち愚痴を漏らしていたから、話に食いついてくる俺（孫）は待望の存在だったんだろう。

ある日。散々勿体ぶって、最後の最後まで引つ張った人生の大一番の話を話し終えた俺のじいちゃんはこう言った。

——間に合った。

翌日祖父は死んだ。笑顔のまま二度と動かなくなった祖父を見て気付いた事がある。俺はこの祖父に値する人がどれだけ駄目で腐ってるかちゃんと理解してたけど、決して嫌いじゃなかった。というかぶっちゃけかなり好きだった。

他者の迷惑など欠片も考えずやりたい放題好き放題するその生き方が、伴って形作られた人生は——それはそれで輝いていたから。なりたいとは決して思わなかったが。

そんなじいちゃんは俺にとって最初で最大の『先生』だった。そ

の役職名を持つ人、呼ばれるに値する人には何人も会ってきた。けどやっぱり一番そうだと思えるのは、一番俺に教えてくれたのは、あの駄目人間なのだ。

忘れるわけがないんだよ。

俺にいろんな事教えてくれた、祖父の名前を。言わなかったけど軽蔑するのと同じくらいに尊敬してたおじいちゃんの名前を。どんだけ頭打つても絶対に忘れない。忘れてやるものか——それだけ大事な想い出だった筈なのに。

でも今の俺はもうその名前が思い出せない。どう足掻いても思い出せない。大切な記憶のピースが、俺の魂から零れ落ちてしまった事に気がついて愕然とする。

どうしてもっと早く気がつかなかったんだと思ったけれど。気付いてもどうしようもない事にも直ぐ気付いた。慌てていろんな事を思い出そうとしたら、色んな事が思い出せなくなってきている事に気付いてしまった。

わからない。普通に忘れただけなのか。消えてしまったのかがわからない。どれが忘れたこと、どれが消えたこと。でも無くなってるんだ、何処を探してもないものがいくつもあるんだ、絶対あるはずのものまで無いんだ、それだけは本当なんだ、それが一番嘘であって欲しいのに。

どうでもいい事から本当に大事なものまで、法則性なく機械的に、まるで虫に食われたように穴だらけ。俺を俺とするためのおもいでが。記憶が。数多の想い出が。零れ落ちている。零れ落ち始めている。

そして今この瞬間も、零れ落ち続けている。



一旦収まったと思いきや、何故かまた取っ組み合いを再開した篠ノ之箒と凰鈴音を慌てて止めに行つた織斑一夏を見送つて。そんなセ

シリアが訪れたのは更衣室である。

元々選手でなく観客として訪れていたセシリアには着替えなど必要ない。ならば何故ここに居るのか。間違いなくこの後今回の件について教員に呼び出しを食らうであろうから、その前に身だしなみを整えておこうと思ったのだ。

更衣室は誰も居らず、しんと静まり返っている。数歩進んだ後に、ふと壁際に設置されているベンチが目に入る。

気が付けば崩れ落ちるように座り込んでいた。深く深く息を吸い込んで、吐き出す。胸に手を当てれば心臓が早鐘を打っている。

腑に落ちない事、得体の知れない事は多々あれど自体は収束した。それを自覚した事で張り詰めていたものがゆるむ。吊られて、押さえ込んでいたものが込み上げてくる。

余裕ができたから思い知る。

先刻までがどれだけ危険な状況であったかを思い知る。

この感情は恐怖という名前をしている。

ISはISにしか倒せない。つまりISならISを倒せる。そして敵はISだった。積んでいる武装は過剰なまでの破壊力を有している。戦闘力も常識を逸している。無人機故の無機質で感情の無い動きは、慈悲や情けという甘えを暗に否定する。

最初に戦っていた二機の高レベルのコンビネーション、セシリアの実力、最後に参戦したISと、こちらに利する要素はたくさんあった。かなり恵まれていたといえる。

けれどもだからといって危険だという事実は何も変わらないのだ。あの赤い閃光がセシリアの蒼い機体を、包まれているその肢体を、焼き尽くせるという事実は変わらない。

実力はある。精神力もある。それらに応える機体も持っている。

でもセシリア・オルコットはまだ15歳の女の子だ。ああも明確な『命の危険』に耐性なんて持っている訳がない。だから怖いと思うのは何もおかしな事ではない。怖かったと震えるのは何も間違ったことではない。どころか、事が終わるまで冷静であり続けた彼女はとびきり“優秀”だ。

気が付けば、自分で自分を抱きしめるように身体に両腕を回している。そうやって、無事だということを確認している。ぎゅうと力を強める事でもっと強く確認す、

——がっしやあああああん!!

突如響いた騒音にビククウ! と両肩を跳ね上げて、むしろその身体も跳ね上げて、イスから転げ落ちておでこを痛打して、ずきずきと痛むおでこを押さえて涙目になって、それでもそのまま転げまわったりはせずに、セシリアは直ぐに立ち上がった。

騒音の発生源はこの部屋ではない。恐らく隣の部屋。部屋を隔てる壁は薄くないが、よほど大きな音であつたらしく、こちらまで聞こえてきたようだ。

万が一に備えてブルー・ティーズに指示を飛ばそうとして、ふと思ひ出す。更衣室の隣はまた更衣室であるのだが——確か今は唯一の男子学生用更衣室とされていた筈である。

もしやと思えばその通り。隣の部屋から白式の反応がある。それはつまりそこに織斑一夏が居るという事だ。

『……織斑一夏、何かありましたの?』

機体が何も報せないということは、少なくとも先程の様な襲撃の類では無い。しかし一応警戒しつつ、セシリアは壁の向こうにいる『男』に問いかけた。

『何か軽く引つ張っただけなのにロッカーぶっ倒れた。あーびっくりしたー……』

よし撃ち抜こう。この馬鹿絶対撃ち抜こう。

痛むおでこ盛大に晒した(誰にも見られてないとはいえ)醜態を思い出しつつ、セシリアは心の中で決心した。

顔に浮かぶのは引き攣った笑みである。セシリアが今どれだけ凄惨な笑みを浮かべているか、壁の向こうの織斑一夏は知らない。というかセシリア自身も知らない。

ガタガタという音は倒れたらしいロッカーを直している音であろうか。座り直したセシリアは背にした壁から伝わってくる音をぼんやりと聞いていた。一際強くボタンと音が響いた後、急に静かにな

る。

『直りましたの?』

『あー、うん一応………うん、大丈夫。たぶん。これなら言い逃れでき、る。うん』

『男子用ロッカーを使うのはあなた一人なんですから、無理に決まってるでしょう』

『おっしやる通りでございませ……』

声からしよぼくれている姿が想像できて、思わずくすりと笑ってしまった。脚を椅子の上にあげて、抱え込む。そこで気が付いたというか思い出した。IS学園の白を基調とした制服の、スカートの端が黒く焦げている。遮断シールドに触れて吹き飛んだ部分だ。

『驚かせて悪かったな』

『——あっ』

立ち去ろうとしているのだと分かり、それに対して自分の口から出た言葉にセシリアは心底驚いた。ここはまったくですわ、とか次からは気をつけなさいな、とかそういう言葉を発するべきなのだ。

驚きこそしたが、それが切欠でセシリアは普段通りに少し復帰した。ここで一人になってしまったら、先程まで心を満たしていた感情はきつと戻ってくる。そう無意識に思ったから、身体が意思に反して——ある意味意思に忠実に——引き止めるための声を上げさせた。

口を塞いでももう遅い。そもそも通信を切っておくべきだったと後悔してももう遅い。気が付けば弱い部分を晒した形になっている。真っ赤に染まった顔を、腕で抱える脚の方へと沈み込ませて俯いた。背にした壁から微かな振動が伝わってくる。壁の向こうにいる輩もセシリア同様に壁を背にして座り込んだらしい。

『……………何をしますの』

『別に。ただ休憩してるだけ』

向こうの部屋は、こちらの部屋と設備はそう変わらない。だから休憩するならベンチなりに座ればいいのだ。床に座る必要はない。セシリアと壁を隔てて一番近い場所に座り込む必要なんてある訳が無いのだ。

相手がこちらの心情を察したことを察して、ただでさえ赤い顔は、きつと更に赤くなっている。一言発すれば壁の向こうの輩は直ぐにでも立ち去るとわかつている。でもどうしてもそれができない。

呼び出されるまでの数十分、壁の向こうの輩は何を言うでもなく、ただそこに居てくれた。

▽▼▽

力の限り伸びをしてベッドにばたんと倒れこんだ。時刻は夕方、寝るにはまだ早い時間である。そして別にもう寝るつもりもない。だから服も制服のまま。ベッドに半端に横たえた身体が酷く重いのは、試合のダメージのせいかそれとも最後の無茶な加速のせいか。

「……………両方」

だそうです。しかしこういう時だけは男子の大浴場使用禁止が恨めしく思える。広い風呂にゆっくり浸かりたい気分だった。ところでこいつの不機嫌さ何か加速してないか。

『いちかー、いるー』

何故ノックの音がドガンドガンという打撃音の如きなのだろう。鈴の登場でこの部屋のドアの寿命が数年は縮んだんじゃないかな。ともかく生返事しつつ上体を起こした。

入ってきた鈴は——突進してきた。加速度を余すこと無く破壊力に変換し、そのツインテールの髪型をした頭が俺の鳩尾に突き刺さる。肺から空気が強制的にさようなら！

普段なら、こんな風に酸素を求めて口をぱくぱくさせている俺を見れば鈴は大笑いする筈である。しかし今日は静かである。ぶつちやけ鈴が静かっているのか大人しいとか気味が悪い。

鳩尾の鈍痛が何とかおさまってきたので、顔を下に向ける。最初はうつ伏せだったであろう鈴は、くるりとひっくり返って仰向けになっていた。じいっとこちらを見つめる鈴が、口を開く。

「いちか、私の事好き？」

「わざわざ言うまでもねーだろ」

無表情でない。真剣、つまりは真面目な顔つき。そのまま両腕が伸



ばされ、細い指先が俺の頬をぐつと掴む。こちらも頬を掴み返し、ぐにーと引つ張ってや……思ったより伸びる。ちよつと限界に挑みたくなるが止めておいた。報復にこっちの頬を割と本気で千切り取られかねない。

「この『好き』って、何時までもあるのかな」

同い年の男女が互いの頬を引つ張り合っているという状況にて、鈴は不釣合な程に真面目な表情と声を崩さない。

「離婚しちゃった、ウチの親。何でなんだろう。互いのこと、好きだったから結婚したんだよね。なのに、最後は二人とも互いが嫌い嫌いどうしようもなかったみたいなんだ。あんなにあつた好きがね、全部嫌いになってるの」

俺の頬をつまんでいた指から力が抜けて、両腕がぱたんとベッドの上に落ちた。大の字になって寝つ転がった鈴は、相変わらず明日雨なんじゃないかってくらいの真面目極まりない表情をしている。その瞳が少しずつ潤んでいく。水分が水滴になって、流れ落ちる辺りで鈴は再び口を開いた。

「私たちの間にある好きも、いつか嫌いに変わっちゃうのかな」

「……………さあてね。変わるかもしれないし、変わらないかもしれない。まだ起こってない事はどうとでも派生させられるしな」

頬を掴んでいた指を離れた。俺の脚と鈴の頭に挟まれてしまっている二房の黒髪を、鈴の頭を少し浮かして外へ流す。なるだけそつと、痛くないように。

「でも、過ぎ去ったものはもう変わらない。これから先の人生で、好きが嫌いに変わっても、お前が俺の事を大っきらいになっても。好きである理由を——想い出を忘れてしまったとしても。俺達が互いに大好きだったって事実はずっとある。その事実は確かに”あつた”から。変わらないし、無くならない。そう、考える事は出来るな」

俺がそう考えたいだけかもわからんが。

ぱちくりと数回瞬きをして、眼を閉じて、数秒間何かを考えてから、鈴は勢い良く上体を起こした。頭と共に跳ね上がった髪に顔面ぶつ叩かれた件。地味に痛い。

「ならいいや」

そっぽを向いたまま、鈴はぽつりとそう言った。袖でぐしぐしと目を拭っている鈴が、今どんな表情をしているのかはわからない。ただ顔は見えないけど、場の空気が緩んだのを何となく感じ取る。

「あ、そうだ。あんたさつき忘れたらとか言ってたけど」

鈴が起き上がっててよかったと思う。さつきまでの体勢だったら——くつついてたら、俺の身体が少しだけどびくりと震えた事にこいつは気付いていただろうから。言葉の口調から、鈴がその事実に至っているのではないとわかるんだけど。

「最初から、あなたの記憶力なんかに期待してないってのよ。あなたの物覚えの悪さなんて、これでもかって思い知ってるんだから」

くるりと振り向いた鈴は、ちよつと眼が赤かったが、表情も笑い方もすっかり普段通りに戻っている。ふふんとか聞こえてきそうな様子で、鈴は言うのだ。

「あんたが忘れても、ちゃんと私が憶えてあげてるから」

子供は、歩くの早いよな本当に。ちよつと前まではあんなにちよつきかつたくせに。

なあ、鈴。お前はどんな大人になるんだろうな。見てみたかったよ。

「お前さ、大きくなったよな」

年長の意地というか何というか。せめて少しでも先輩ぶりたくて、大きさはちっこい、でも中身は随分と成長している鈴の頭をちよつとだけ乱暴に撫で回した。鈴は手を払いのけなかった。くすぐったそうにしつつも、赤くなった目のまま満面の笑みで

「気付くのが遅いよ、ばーか」

▽▽▽

なんかいいはなしだなー

実はずっと部屋というか洗面スペースに居ただけで何か二人が真面目な話を始めてしまい出るにすられず結局ドアの向こうの一部始終を体育座りで聞いてた篠ノ之箒は心の中で呆然と呟いた。

何だあの自然な『好き』は。箒の抱く好きと、鈴の言う『好き』が異なっていることはこれでもかどわかった。とはいえそれで脅威が去ったといえ、そうではない。むしろ恐れは巨大化した。

これから先でその性質が変わらないとは言いつれないのだ。盛大に言い合っても取っ組み合っても何故だか箒と向かい合おうとしてみれば、箒は心を開きかけている。というか、開きたいと思いつめている。

『……ところで腹減らねえ？』

『あんた本当食い意地はってんわね。まーでもあたしもお腹空いた』

『じゃあ食堂行こうぜ。なー箒も行く——？』

『箒も行こうよー』

待て。ちよつと待て。冷や汗がぶあわと出る。あの二人は、箒がここに居るとわかった上で、聞かれているなど最初から承知であの会話を、あんな会話をしていたという事なのかそういう事なのか——どういう事だ!?

『ねー箒ー、ねーねーねーたらー!』

『ええい叩くなドアが壊れる!!』

事実を処理しきれずに盛大に混乱に陥った箒とは対照的に、呑気な声を上げる鈴がバガンバガンとドアを殴打する。心情を整理する時間が切に欲しかったが、事態は箒の気持ちなど考えてはくれない様だった。

ぬわああああと頭を掻きむしりつつも、すつくと立ち上がってドアノブに手をかける。『友達』と『恋敵』、どちらにもなる可能性を秘めている相手と向きあうために一歩踏み出した。景気付けにと勢い良くそのドアを開ける。

『えーい負けるものか——!!』

『うばあー!』

さてドアの直ぐ向こうには鈴がスタンバっていた訳である。そんな位置関係でドアが勢い良く開けばどうなるか。顔面痛打である。

流石にこれは箒が悪い。なので謝ったのだが、ヒートアップした鈴はそれでは収まらない。吊られて箒もヒートアップした。

ドアをぶつけられた事と、箒の胸囲に何の因果関係もない。というか凰鈴音、完全にキレル内容が変わっている。だから箒の怒りも正当だ。

持たざる者は持つ者を羨むが、持つ者は持つ者なりの悩みがあるのだから。何だかんだで血の気が多い二人は、やがて死闘を開始した。

二人はきつと『友達』になる。

でももう一つの関係になるかどうかは、まだ決まっていない。

総てはこれからの展開と、その時それぞれが何を選ぶか次第だ。

▽▽▽

「ちよつと目を離したら何で戦い始めてんだお前ら——!?!」

寮の廊下を歩いているセシリアの耳に織斑一夏の絶叫が飛び込んできた。何となく何が起きているかは想像がついて、実際その通りだった。廊下のだ真ん中で竹刀を構えた篠ノ之箒と拳を構えた凰鈴音が互いに威嚇し合っている。

この国には『ケンカするほど仲が良い』という言葉があるらしいが、あれがそうなのだろうか。その割に随分と物騒な空気が場を支配しているが。

溜息に含まれているのは多分の呆れと、少しの安堵。馬鹿らしい光景ではあるが、日常の一場面である。あんな馬鹿をやれる『今』をセシリアは守れたのだ。嬉しく思った故に微かに笑いながらセシリアは進行方向を変える。

何故か。巻き込まれるのはゴメンだからだ。

(それにしても)

今日の戦闘で、セシリアのブルー・ティアーズは予期せぬタイミングでの新武装のお披露目となった。そして使用したのが二丁の拳銃——《スターダスト・ミラージュ》だ。

これはセシリアが要請を出した事で送られてきた武装の中の“一

つ”である。当初の予定では、武装は他にも幾つかも送られてくる筈だった。

しかし実際にセシリアの手元に届いたのは二丁の拳銃のみ。その理由はいくら問うても曖昧に誤魔化され、明確な答えは返ってこない。

とはいえ想像はつく。他に要求した武装はBT兵器搭載ISの2号機で試験運用されていた筈だからそっちの方に何かあったのだろう。

(……………何か。嫌な感じがしますわね)

▽▽▽

BT兵器搭載ISの2号機。機体名は『サイレント・ゼフィルス』。その機体を纏う彼女は本来の操縦者ではない。しかし彼女はロクに自身に合わせていないこの機体を本来の操縦者以上に上手く扱う自身があった。

そして実際に彼女はこの機体を巧みに操ってみせ——更にはBT兵器との相性において、非公式ながらの最高値を叩き出してみせた。銃、という武器には二つの手順が必要である。まず照準。そして発射。それで初めて弾丸が発射され、敵を穿つ。彼女がいくら優秀でもこれは変わらない。

故にサイレント・ゼフィルスを“奪った”彼女は、愚かにも進行方向に立ち塞がった何かにその銃口を向けた。このISは一号機同様に射撃戦を主体とした機体だから武装のほとんどが射撃武装である。

照準を付ける。その一動作の間に終わっていた。袈裟に振り下ろされた。

その一撃はシールドを切り裂き、装甲を切り裂き、ISスーツを切り裂き、皮膚を切り裂き、肉を切り裂き、骨を切り裂き——進行方向にあった、“何もかも”を切り裂いた。音はライフルの長大な銃身が地に落ちたからか、噴き出した鮮血に遮られた視界では確認できない。

糸の切れた人形の様に地にべちやりと落ちた彼女を一瞥した”そ

れ”は、照準という一動作よりも速く移動と攻撃総てをやつてのけた  
“それ”は、命の消えかかっている彼女を見下ろした。もう一撃で彼  
女は確実に絶命する。彼女が何も行動を起こさないのは、理解が事態  
に追いついていないからだ。

結果として、彼女はこの場では死ななかつた。

一撃でなくともいい。踏みつけるだけで彼女を殺せたであろう”  
それ”は、しかし戦う力を失った彼女に一切の興味を無くしたらしい。  
赤く光る瞳がそう告げているようだった。

打ち捨てられた彼女をその場に残したまま、踵を返す。

それをただ見送るだけしか——視界が掠れてそれすらも困難になつて来た彼女の身体が浮き上がる。彼女の身体は同じ組織に所属して同じ性別の他人に抱えられ、その場から高速で飛び上がった。抱える人間が、やたらと罵詈雑言を”それ”に浴びせていたが、朦朧とする意識では音は捉えても言葉までは判別し得ない。

高い丘の様になった場所に佇む”それ”が、飛び去る二人の人間とISに目もくれず空に浮かぶ月を見上げていた。

▽▽▽

「……新型のテストに殴りこみをかけに来てみれば、まさかコソ泥に  
でくわすとは。ついてるのかついてないのか、何とも判断に困るな全  
く」

悲鳴と怒号と業火の飛び交うイギリスの一施設の端において、東洋  
人の——しかもまだ学生であろう彼は十二分に場違いである。飛び  
去る二機のISを眺めながら呟かれた言葉は騒音に掻き消されて誰  
の耳にも入らない。

「さて。神の悪戯か悪魔の気紛れか僕の手札は揃った。本当に何でこ  
んなに早く揃ったのやら。確実に不可解だ。踊らされてる。忌々し  
い——だが僕を”急かす”理由がどうにも気になる」

アブソリュート  
『獣王爪牙』

フォルダウン  
『翼神領域』

アイズエイジ  
『竜帝権限』

内一枚に切札を隠した、彼の手札は全部で三枚。公式の総数467に対してたった三。しかし時期が早くなっただけであって、本来彼はその三しか用意する気は無かった。

というか単純に『467』を相手取る分には、恐らく『二』で十分なのだろう。多分そういう事になっている筈だ。ならば残り『一』は蛇足かといえ、逆だ。その『一』こそが彼の目的の『1』と戦うために用意した、本命で切札であるのだから。

彼の傍らに“何か”が降り立った。炎の揺らぎに一瞬だけそのシルエツトを顕にしたそれを引き連れて彼は歩き出した。目的地は、

「———帰るか、日本に」

▽▽▽

昼休みを告げるチャイムが鳴って、机の傍らに引っ掛けた鞆から弁当箱を取り出す。声をかけようと首を巡らせたなら、目的の馬鹿は既にどこにも見当たらない。

相変わらず無駄に早いというか手際がいいというか。一緒に食べないとお誘いにていねいに断りを入れて、弁当箱を提げて教室を出た。後ろから『変わってる』とか『変なの』聞こえてくるのもいつもの事。でもその方が楽しいからあたしはやめない。

お弁当を極力揺らさないように気を付けつつ、しかしなるべく急いで廊下を駆け抜ける。廊下は（先生が見てる間は）走らない。

今日は天気がいいから屋上に居るはずだ。雨の日だと気分を場所を変えやがるから厄介。だから見つけたら蹴りを入れることにしている。避けられるけど。盛大に蹴り飛ばせるようになるまでがんばろう。

階段を飛ばし飛ばしで登って、屋上へと続くドアの前に立つ。ドアノブをこう握ってえ——こう！ 軋みながらドアが開く。開け方はコツがいる。教えてもらった。

屋上に足を踏み入れる。思ったより陽の光が眩しくて目を細める。眩しいけれど、あつたかくて気持ちがいい。ついでにおもいっきり伸びをした。

それから首を巡らすこともなく、定位置に腰掛けている馬鹿の隣に座る。持ってきたお弁当を膝の上に乗せて、包みを解いていただきますをした。

ちらりと横を見ると冷凍食品を適当に詰め込んで彩り的にも配置的にも盛大に偏った弁当箱が目に入る。

「それにしたってご飯も無いってどういうことなのよ」

「炊飯器の予約ボタンを押し忘れるとな、炊けてないただ水に浸されただけの米に出会えるんだぜ」

「アホらしい……」



それから特に会話もなく黙々とお弁当を食べる。あたしが三分の一を食べ終わった辺りで、隣の奴は食べ終わった弁当箱を仕舞い始めた。

横の黒い弁当箱はあたしのピンクの弁当箱より三倍くらい大きい。なのに食べ終わるのはいつつもおあたしの方が遅い。何かびみよーに悔しいのはなぜだろうか。

「給食センター、いつ直るんだろうね」

「さーな。一体何が爆発したのやら」

「んー……シチューの大鍋とか？」

「熱々だったら普通に大惨事だなオイ……っっていうか爆発するって何を煮込んだ」

「にとろぐりせりん」

「こえー!!」

おべんとうを全部食べ終わってから、お茶の水筒を教室に忘れてきた事に気が付いた。がまんできるかどうかといえれば出来るんだけど、それなりにやるせない気持ちになりながら弁当箱を片付ける。

お腹がいつぱいで、日差しがぼかぼかしている。これでお茶があればもつとくつろげるのになど考えてしまっ、あたしは更にやるせない気持ちになった。

「なあ鈴」

「なに？」

「こんな寂れたところで飯食って楽しいか？」

「あつたかい」

「冬は死ぬるぞこー」

「今は春の話をしてんのよ」

そんな事よりお茶が欲しい。

隣に座ってるやつのかたわらに置かれた水筒をさりげなくロツクオンする。

「物好きだよな、お前も。教室で友達と食べばいいのに」

「どこでござはん食べようとあたしの勝手でしょ。それに友達と食べるじゃない」

「そーじゃなくてーさー」

マヌケ面を愉快に歪めて唸るとなりの奴が何を言いたいのかわからない。

いいからお茶をくれとさつきから視線に思念を込めているが駄目っぽい。

「ありがとな」

「よくわかんないけど、気にすんじゃないわよ、友達でしょ」

何故いきなりお礼を言われたのか、本気でよくわからない。しかしこれはチャンスである。隣のがあたしに感謝しているのは確かなのだ。ならば。

「お礼がわりにお茶を要求する」

「残念ながらそれ品切なんですよ」

「うそだ、水筒あんじゃないのよ」

「これ飲むの？ 醤油だよ？」

「はア!？」

「入れ間違えたんだよ、ちくしょうめ……………」

▽▽▽

「めんどくさいとこに居るんじゃないわよ!!」

「何か急に痛ア——!？」

怒号と共に放った鈴の飛び蹴りは一夏の腰の辺りに深々と突き刺さった。探し回って辿り着いたのは寮の屋上である。スタート地点の上の方がゴールだとは思わなかった。あちこちと走りまわった時間が完全に無駄である。

「何!？ 何で俺蹴られたの!？」

「やつ、あた、りっ!」

「可愛らしく言ってるじゃね——!!」

互いの頬を千切れんばかりに引っ張り合った後、ふと我に返ったというかいい年して何やってんだろうな雰囲気になって互いに崩れ落ちた。時間はすっかり夜だから、見上げる空にあるのは太陽じゃなく

と月と星だ。

「で、何か用か？」

「へ？」

「いや、俺探してたんだろ」

「あーうん、用というか、それほどのものでもないというか……」

「さあ言ってみるがいい。内容で蹴られた分の報復に付ける利子決めてくれるわこの野郎」

「約束覚えてる？」

言ってから気付いた。言う前に気付きたかった。しかし既に口からつるつと言葉が滑り落ちてしまっている。

それを約束、なんて思っているのは、恐らく鈴の方だけだ。何せ約束だとはつきり告げていない。どころか別れ際に一言だけ。しかもかなり小声で言い逃げみたいな形でしかない。

恐る恐る、隣で空を見上げている友達を見ると、さっきまで（利子云々言ってる時）の邪悪な表情はなりを潜めていた。ふむ、と一言呟いた一夏が行ったのは発言でなく行動だ。

——また会おうね。

鈴が何時の間にか約束だと想っていた言葉を、一夏が憶えているのかわからない。憶えていても、約束と想ってくれているかもわからない。

何だか妙に緊張してきた鈴である。憶えていなくても仕方がない、そう理解はしているが憶えてなかったら納得できない。そしてこいつの物覚えの悪さは折り紙つきなのだ。しかし出来るのはどきどきしながら結果を待つだけである。

立ち上がった一夏は鈴の方に向き直って、手を挙げた。屈まないのは、鈴がどう在りたいかを知ってるから。隣に立つというのは同等として扱うという意味だ。だから合わせてもらおう必要なんてない。

手の位置が高いのは、昔からずっとこうやってたから。身長差が開いても頑なに変えなかったのは、こういう時のお約束というやつだから。それに鈴なら届く——届かせる。

想いはどうやら、鈴が思っていたよりずっと、伝わっていたらしい。

「——また会えたな」

飛び上がるように——実際に跳び上がって、ジャンプして、掲げられた手に手を叩きつける。ぱあんと、乾いた音がした。

ありがとうねと笑ったら。

気にするなよ、友達だろと笑い返された。

▽▽▽

『引越し』

何らかの事情で生活する場所を移す事。

新しい住居が、それまでの住居よりも快適だとは限らない。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▼▽

「お引越しです」

いきなり部屋にやってきた山田先生がいきなりそう言った。

普通に意味がわからん。

「……………先生、主語を入れて喋ってください」

「は、はいっ、すみませんっ!」

俺が口を開くよりも早く、箒が山田先生に向き直って口を開く。さて。この場合は先生をも怯ませるホーキちゃんの眼力が凄過ぎるのか、それとも生徒に怯む山田先生のメンタルが駄目なのか。

【両方ではないでしょうか】

正解。

「えっと、お引越しするのは織斑くんです。部屋割りの調整がついたので、今日から男女で同居しなくてすみますよー」

「今日から……………え、て事は今から移動するんすか?」

「はい。私もお手伝いしますから、直ぐにやっちゃいましょう」  
マジに今直ぐ。

思わずうへえと息が漏れたが、無理ではない。元から暫定の部屋割りだと聞いていたから、荷物はあまり広げていないのだ。

とはいえ作業がめんどい事に変わりはない。あと何かこー予定にない作業がいきなり入るとテンション下がるよね地味に。

「ま、待ってください! それは今直ぐでないといけませんか!」  
下がる俺とは対照的。

隣のルームメイトがやたらボルテージを上げている。

「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活するというのは問題がありますし……篠ノ之さんもくつろげないでしょう？」

期限付きとはいえ男女同室認められた時点で十四分に問題な気がする。今更だけど。本当に今更だけど。

「い、いや、私は……」

詰め寄られた山田先生は何を当たり前の事をと、目をぱちくりとさせて小首を傾げている。箒はなお言葉を続けようとするも、結局口ごもる。視線を彷徨わせて、こちらを横目でちらりと見た。

何故箒が渋っているかは推測出来る。答え合わせをした訳ではないが、恐らくは当たってなくとも遠い事は無いだろう。たぶん。

だからホーキちゃんがこの状況で『織斑一夏』に言っただけの言葉は大体想像付く。

ただ『織斑一夏』に求められた反応を『俺』がやっても、意味も価値もありやしない。

「どーした？ ああ、俺が残って箒が移動した方がいいんだったら代わろうか？ それくらいならたぶん大丈夫だろ」

「わっ、私が言いたいのはそこではなく……もういい、知らん！」

「察しの悪い」俺の態度に苛ついたのか、箒はぷいと横を向いてしまった。その頬が『怒っています』と主張するようにぷうと膨らんでいる。

「山田先生、しつもん」

「なんでしよう織斑くん」

俺と山田先生と、不機嫌絶賛持続中ながらも手伝ってくれた箒の三人で片付け始めて小一時間ほど。ふとよぎった疑問を山田先生に放り投げる。

「俺が抜けた後、この部屋誰か来るんですか？」

「それは——」

山田先生が言葉を発するよりも早く解がもたらされる。正確には自分で登場した。ズツバアンとドアが力の限り開かれた音と共に。

「あたしよー」

ツインテールとちらりと覗く八重歯がチャームポイント、ここまで自称の誰もが呼んだはブルドーザーウリ坊。

要するに鈴が愛用のポストンバッグを引つ提げてそこに居——なくなつた。

力の限り開かれたドアは勢い良く『開く』。しかし加えられた力は『開く』だけでは消費しきれず、ドアは跳ね返るように元の方向へと帰る。

つまりは『閉じる』。

そんなドアは部屋に入室しようと一步踏み出していた鈴の鼻っ柱にぶち当たつた。しかしそれでも止まらず、そのまま鈴を部屋の外へと押し出しつつボタンと閉まつた。

「……………あたしよ!!」

唾然とする室内の三人がどうしたものかと固まっていると、鈴は何事も無かつたかのように登場をやり直す。言動の激しさの割にドアをすごーくゆるやかーに開きつつ。

「ゴイツ無かつた事にしやがつた! でもしきれてねーよ!!」

「何のことだかぜんぜんわかんない。鼻とか別にぜんぜん痛くないしー」

指摘の意味がわからないとでも言いたげに頭を振る鈴。しかしその鼻っ柱は真つ赤に腫れているし、よく見ると若干涙目である。人生に編集点など入れられない。

「ま、そーいう訳だからこれからよろしくねー」

ズビシと手を上げて挨拶された筈は——うわあ顔思いつ切り引き攣らせてる。てか何か変なオーラ出てる。怖っ。

▽▼▽

「大丈夫だろうか…………」

「う、うーん。部屋割りをもう一度考えたほうがいいんでしょうか。篠ノ之さんはよく凰さんとお話をしているし、凰さんも部屋の移動に快諾してくれたんですけど…………」

「心配ですね——部屋がもつかどうか」

「えっ」

がつつり目の据わった箒に荷物（山田先生含む）ごと部屋から叩き出された数分後。

復活した山田先生と世間話をしつつ廊下を進む。

「つと、ちよつとタイム山田先生。こつち方向に部屋ってありませんたっけ？ え、何まさか正式な住居は物置とかそういうオチなのか」  
「あはは、そんな事あるわけないじゃないですか。織斑くんの新しい部屋は寮長室ですよ。たしかに他の部屋とは少し離れちゃってますけど」

「なーんだ、そーだったんですか。いやあよかつたよかつた」  
てくてく。

すたすた

てくてく。

すたすた。

「ところで山田先生、一応念の為に確認しとくんですけど寮長室って寮長が住んでる部屋ですよね？」

「変な事いいますね織斑くん。寮長が住んでない寮長室なんてあるわけ無いじゃないですか？」

いや、なんていうか、それって、あれ、俺の記憶違いじゃなければ、寮長って。

「——山田先生、ちよつと買い物行ってくるんで外出許可ください」

「どうしたんですか急に!？」

「装備を整えるために決まってるじゃないですか！ ゴミ袋とか洗剤とかありとあらゆる掃除用具を!! 大体千冬さんが単独で生活してた場所とかこの時間から挑む場所じゃないですよマジで。連休突入前日の平日夕方とかから取り掛かるべきですよ。つていうかラストダンジョンは住む所じゃなくて攻略する所ですよ!？」

「……………織斑くん。その、後ろ……………後ろを、向いた方がいいんじゃないかなって」

「どうしたんですか山田先生一刻も早く外出許可ください——うわ悪寒。いけね混乱してて反応遅れた」



ラスボスがダンジョンに留まらずに出向いてくるなんて卑怯だ。ちやんとこつちが挑める強さになるまでダンジョンの奥底で待っててくれないと。

襟首を掴まれてずるずると引き摺られながら、新居である寮長室までやって来たというか持つて来られたというか。

途中ですれ違った他の女子生徒から向けられる哀れみの視線が痛かった。小声でドナドナ歌ってたやつ誰だちくしょうめ。

あくまで俺の勝手な推測であるが。

一般生徒が初めて寮長室に足を踏み入れて抱くべき感想は、主に生徒用の部屋との違いだと思う。家具が少しだけ上等だとか間取りの違いとか、そういうのね。

ただ部屋の主が千冬さんであるという前提があると、そのどれでもない。

要するに俺の第一声は何だったのかというと。

「足の踏み場がある!? そんな馬鹿な!!」

「当たり前だ、馬鹿者が」

荷物を取り落とすレベルの衝撃映像に遭遇して処理落ちした頭部が軽く小突かれた。視界が強制斜め四十五度。

傾いた視界に映る、呆れ顔の千冬さん。いつものスーツ姿——ではない。消灯時間が近いからか、着ているのは教員用のジャージだ。

ほいと放り投げられて、荷物ごと勢い良く入室。投げ出された身体と荷物は“何も無い”床に着地した。

「いやだって、普段家じゃあ俺が居ても一週間以内に腐海寸前じゃねーか」

「お前は私をなんだと……確かに家では多少は横着をしているかもしれないが、一人暮らしをする程度の生活能力は元から持ち合わせている」

「ところで千冬ちゃん」

普段なら、いや何時いかなる時でも。

俺がこの呼び方をして、無事に済む保証はすこぶる低い。それは

ちやんとわかっているのだが、どうしてもこうつるつと口にしてしまう時がある。

けれども今は、わざとそう呼んだ。

目の前の女性が何時の間にか手にしている出席簿を大きく振りかぶるのが見える。脳内に鳴り響く警鐘。さりげなく白式の展開をすすめてくるシロ。

それでも俺は全く動じること無く、部屋の一角を指さしながら満面の笑みで『姉』に語りかける。

「——あそこに蝶番が悲鳴あげてるクローゼットが見えるんだけど、あれは何なのかな千冬ちゃん？」

びたり。

そんな音が聞こえてきそうなくらい、織斑千冬は完全に停止した。かたんという音は、今まさに砲弾として放たれようとしていた出席簿が床に落ちた音である。

張り詰めた空気が急速で緩んでいく中で、普段の十二割増ほどのぎこちない動きでわざとらしい咳払いを一つ。こちらを睨んでいた瞳が、ふいつと明後日の方向に逸れる。

「あ、あー……そこは最初から立て付けが悪くてな、難儀している」

「へーほーふーん」

ドアと会話し始めた千冬さんに背を向け件のクローゼットへ向き直——突然室内に風が吹いた。原因は考えるまでもねえ。クローゼットへの進路を塞ぐため、誰かさんが目視が難しい程の速度で移動したせいであろう。

「いくら私が『姉』とはいえ、了承も無しに女性の部屋の棚を漁るような性格に育てた覚えはないぞ？」

「いやあ立て付け悪くて困ってるみたいだから直してやろうと思つて。ほら俺、『弟』だし？」

じりじり。

じりじり。

互いに貼り付けたような微笑を浮かべ、慎重に間合いを測る。向こうはこちらを昏倒させる必要があるが、俺は躲して通り抜ければい

い。ならば勝機はある。無ければ作る。

さあて。勝負は一瞬——！

いつものように、これまでと同じように。

他人同士の姉弟きょうだいゲンカが幕を開けた。

▽▽▽

『ISスーツ』

肌表面の微弱な電位差を感知し、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達するためのスーツ。通常の衣服よりも早くかつ正確に必要な動きをISへと伝達することが可能である。

操縦する人間に合わせ変化を続けるISに対し個性、その人物のスタイルをISへと示すために、各人で専用のもを用意するのが定例である。

基本的に小口径の拳銃弾程度ならば完全に受け止める程度の耐久性を持つ。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▼▽

俺元々は『兄』だったからいまいち実感が薄いんだけど。

何で『姉』ってあんな狂ったように強いのだろう。

単純に身体能力が高い、強いっていうなら俺の妹もそうだったわけ。だから対処の仕方は心得ている。はず。たぶん。

だというのに何故ここまで手も足も出ない——これは俺が『弟』だから『姉』に対して何かしらのマイナス補正でも働いてるんじゃないだろうか。

うん、そう思わないとちよつとくじけそう。

「か、身体が痛い……い……きつちり満遍なく痛い……!!」

夜も遅くに幕を開けた姉弟ゲンカに惨敗し、部屋から叩き出されたというか転がり出されたのがさっきのこと。

ドアで隔てられた部屋の中の様子を伺うと、現在進行形ですごくガツタンボタン不穏な音がしていた。

【片付けているのでは?】

「ねーな。クローゼットの前に家具動かしてバリケード作ってるん

じゃね、賭けてもいい。まーさすがに消灯時間までには入れてくれるだろ」

【はい。ところであと10分しかありませんが】

「大丈夫、片付けられない人間はその場しのぎのためには120%の力を発揮できるから」

しかも常人の120%ではなく、人類最強候補の一人織斑千冬の120%である。

瞬間的な部屋の模様替えくらい楽勝だろう。

【不可解な解釈です。そう断言出来るだけの根拠があるのででしょうか】

「今回が初めてじゃねえしなあ………つーか俺も元は似たタイプだったし」

【元はということとは】

真偽がどうあれ、開けてもらうまで入れないのは変わらない。

廊下の隅に座り込みながら、シロに白式のデータを表示させた。暇つぶし代わりに羅列された文章に目を走らせる。

【“変わった”のですか?】

環境が変われば、合わせて人も変わる。慣れるともいうが。

だから俺の価値観が変化するのも——していたのも、当たり前のことだ。特に深く考える必要はない。特におかしなことでもない。

だというのにどうしてこんなにも引つ掛かり、

「いいいいいいいちかああああああアアア——!!」

「うおわっびつくりした何なにつてか誰?!!」

完全に無防備状態だった精神に斜め下からえぐりこむように衝撃。慌てて立ち上がるうとして盛大にすっ転ぶ。首を巡らせ声の主を探し——筈が出現した。

普通は『会った』と言うんだろうけど、曲がり角から突如ズサーと横滑りに飛び出してきたら出現したとも言いたくなる。

しかも速度が凄まじい。その顔は更に凄まじい。

「今度の学年別個人トーナメントで私が優勝したらー!」

まるでさつきまで誰かと取っ組み合っていたかのように乱れた髪。

激昂に伴って釣り上がった瞳。右手にしつかと握った竹刀を高々と振り上げて。『今から貴様の脳天をがち割ってくれる!!』みたいなセリフが凄く似合いそうな様子の箒は、

「私と付き合ってもらおう!!」

そう言い放った。

セリフとポーズがすげー噛み合っていない。かなり真剣になんたこれ。

そして凄まじい勢いで去っていく箒。その後姿を見送るしかない。現実が俺の思考を完全に凌駕している。何が起きているのだ。俺はどうすればいいのだ。

「何をする必要も無いかと。ただそろそろ呼吸を再開した方がいいとは思いますが」

一欠片だけ呆れを混ぜ込みつつも、あくまで平らな音声。指摘されてさっきから息を止めていた事に気付く。脳が回らないと思ったら酸素の供給が止まっていたらしい。

深呼吸を数度。

【さあ。すってー、はいてー】

「すー、はー……」

【はいてーはいてーはいてーはいてーはいてーはいてー】

「は……っ、………げほあっ!! 何きせんだ!!」

【ちゃんと復旧したじゃないですか。そろそろ戻ってきますよ】

「何が戻って……あ、本当だ来るわ」

向こうから走ってくるのは、ついさっき去っていったはずのホーキちゃんだ。廊下は走らないという言葉が虚しくなる全力疾走ぶりだ。

「違あああああう! 違わないけど違う!!」

「うん。色々言いてーことあるけど何で竹刀が一本増えてるのが一番興味あるわ」

「い、今のは今度の休日に私と一緒に出かけてもらおうという意味だ!

れ、れれれれ恋愛関係で付き合えと言った訳ではない! 本当だぞ

!?! そういう意味は一切含んでいないんだからな!?!」

「わかった。わかってないけどわかるから。竹刀を向けなくてくれ、

ください」

誤解を招く言い方をしたのが恥ずかしいのは、その真っ赤になった顔を見ればわかる。

でもだからって同時に羅刹じみたオーラを噴き出すのはやめて欲しい。はずみでやたら難しい名前の奥義的な技が飛んできそうだ。

「で、何だったっけ。学年別のトーナメントだっけ、六月末にやるっていうやつ。休日出かけるくらいそんなわざわざ賭けんでもよくねーか」

「いいや駄目だ、私の行きたいところに付いてきてもらう。つまりは一夏の一日を丸ごと寄越せと言っている訳だからな、難関を越えてこそだろう」

相変わらず真面目というか律儀というか。

ところで顔の温度上昇がぼちぼち危険域に入っているんじゃないかこのホーキちゃん。

「でもそれ筈が途中で負けた場合はどうなんの？」

「……その時は鈴が一日お前を好きにすることになっている」

「やつぱり噛んでやがったあのツインテ！ つーかそれ俺の意志がどこかにベイルアウトしてるじゃねーか。条件考え直して——」

「お前が最後まで勝ち残った場合は私と鈴でお前に食事を奢らせてもらおう」

「よっしゃ上等オ！ 要するに全員ぶっ倒せばいいんだな!!」



「という訳で負けられねーんだよ」

「最近篠ノ之さんが殺気立ってると思っただらさういう……じゃなくて、寮長室での暮らしがどうか聞いたのに途中から食欲にジャックされたんだけど」

「ハハハ、何言ってるんだ最初からその話だったじゃないか」

「ちがいますー。私が聞いたのは織斑先生とのおはようからおやすみについてですー。てゆうか織斑くん凰さんに嗜好把握されすぎ。絶

対鳳さんが仕掛け人だよその賭け」

「色んな人に聞かれるんだけどさあ、俺にとつちやただの織斑家IS学園版だし。語って聞かせる事なんてなーんにもねーんだよ」

「んんー、ほんとうかなあー？」

朝の教室、授業が始まるまであと少し。

自席にて授業の準備をしながら隣の席の子と会話中。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

朝の教室というのは概ねいつも騒がしいものだが、今日はなにやらいつもよりその喧騒が大きいような気がする。もうすぐ始業のチャイムが鳴るというのに、教室のあちこちで女子がなにやらカタログの様なものを手にいよいよと談笑していた。

「一体何の騒ぎなんかね」

「今日からISスーツの申し込み開始日だからじゃない？」

ISスーツとは——名前の通り、ISを装着する際に着るスーツである。

なんかISへの意思伝達を助けるとかなんとかかんとか。まとめるとなんかウェットスーツの凄い版。この認識でそんなに間違っていないはずだ。たぶん。

「加わってないってことはもう決めた人？」

「ん、私は前に作ったのがあるから。そういう織斑君はどここのやつ使ってるの？ 見たことないタイプだけど」

「メイドイン白式」

「はっ？」

「そのまんまの意味だよ。ファーストシフトン時に、機体の変化に併せてISスーツも白式が作った。最初は男性用が無いからってどっかのラボが特注で作ったとかってヤツ渡されてたけど——えーっと、



名前なんだったかな。確か……」

記憶をぎくぎく掘り返して思い出す。IS起動可能が発覚して直ぐの検査の日々の途中で渡されたものだ。機能説明と一緒に名前も聴いてる筈、なんだけど、ええと、

「——インゴッド社のスペリアルアンビエントモデル」

「そんな最終ダンジョンに落ちてる装備みたいな名前のスーツが存在してたまるかよ」

にっこり笑顔で吐き捨てられた。

俺の記憶力じゃこんなもんか。しばし頭を捻るも結局名前は出てこなかった。どうやら普通に忘れてしまったらしい。

どうでもいいけど今この娘ちよつと素出したな。

「さて。とにもかくにも、当面の問題は学年別個人トーナメントだけか」

「基本的に専用持ちは圧倒的に有利だけど、今年は専用機持ちの人数多いからね。そんなに楽でもないと思うよ？」

「それでもあれやこれや問題が山積みよりかはわかりやすいしやりやすいわ。要は勝ちやすいんだろ。鈴にも、セシリアにも、箒にも」

「ああ、そうだったね。織斑くん典型的な単細胞だったね……」

隣から向けられる生ぬるい視線は気付かなかったことにしよう。言ってること間違ってるわけでもないし。

思い返せば入学から今日までずいぶん色々あった。壁が立ち塞がるというよりも、壁が向かってくる勢いだった。けれども最近は随分と静かになった。平和とすら言える。

いや今までが異常だっただけ、事件など起こらない方が普通なのである。うんうん。

「今日はなんと！ 転校生を紹介します！」

心中で密かに安堵してから、二分と経たずに次のが来た。

▽▽▽

『ラファール・リヴァイヴ』

デュノア社製。第二世代。

第二世代の後期に開発された量産機。安定した性能と高い汎用性に豊富な後付装備と、量産機として高い完成度を誇る。事実当時の量産型としては最後発ながら世界第三位のシェアを誇っていた。特に操縦が簡易なことから、操縦者を選ばないという点と多様性役割切り替えを両立する点が評価されていた。

一時期のデュノア社の傾きに加え、徐々に現れ始めた第三世代相当の量産機に押され姿を消していったが、多くの操縦者に愛用され量産機の歴史に名を残した機体である。

現デュノア社の社長が学生時代に愛用していた機体もこのラファール・リヴァイヴである。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

朝の教室が一気にざわめきで満ちる。

それは転校生という未知の存在に対しての期待から。それと情報が事前に全く出回らなかつたことへの驚きも含まれる。

「しかも二名です！」

何故か少し得意げに、副担任の山田真耶が言葉を続ける。

当然ざわめきは一層大きくなる。思わず声を上げてしまった生徒もいくらか出る程に。

授業中とは思えないほどの喧騒に包まれた教室の中に、いよいよ転校生が招き入れられて——瞬間、教室はぴたりと停止した。

「失礼します」

「……………」

騒がしかつたのが嘘だったかののように、教室は唐突なまでに静寂を取り戻した。生徒の視線は一人の例外もなく、入ってきた転校生に釘

付けになっている。

「シャルル・ルクレーールです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」  
中性的に整った顔は、人なつっこさを感じさせるようにやわらかく表情を造っている。立ち居振る舞いからは礼儀の正しさがにじみ出る。

髪は濃い金髪で——見ればそれなりに長さがあり、首の後で一つにたばねられている。

体つきは随分華奢で背は小柄な方。

だがすらりと伸びた脚からわかるように全体のバランスがとても良い。故に見て感じるのは『小さい』でなく『格好良い』。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を——」

しんと静まり返った教室の中に、ぽつりと眩きが浮く。眩くような疑問に、当然のように返された肯定。それは染みわたるようにクラスに拡散していった、盛大に弾けた。

「ぎゃ……」

「はい？」

「きゃああああ——っ」

「男子！ 二人目の男子！」

「またうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の!!」

歓喜、驚愕、恍惚——だいぶ色々混ざった感情の爆発が教室を埋めつくす。

HR中ということに気にする人間はすでに誰一人として残っておらず、叫ぶ、立ち上がる、悶えるとやりたい放題である。

『ISは女にしか動かせない』という原則は、すでに織斑一夏が破っている。彼——シャルルは二人目だ。“まだ”、二人目なのである。

おまけに壇上の上に立っているのは、『王子様』、もしくは『貴公子』、そんなお伽話じみた呼称がこれでもかと似合う美男子だ。

騒ぎにならない方がおかしいだろう。世界にたった二人の男子生徒を独占する自分たちの勝ち組っぷりに酔わない方が少数派なのだ。

織斑一夏に心底懸想している篠ノ之箒ですら、突如現れた見目麗しい二人目の例外に目を丸くして驚いている。一方でセシリア・オルコットは、周囲と少し趣を変えて困惑に表情を染めている。とはいえ転校生に関心を全力で傾けていることは変わらない。

「静かにつき、み、皆さんお静かにー!? まだ自己紹介が終わってませんからーっ!」

山田真耶が声を張り上げる。叫ばなければ喧騒に埋もれてしまうからだ。

当然その程度で生徒たちが静まるわけもなく、むしろどんどん加熱していく。壇上に生徒が殺到するのも時間の問題に思えた。

「はあ……騒ぐな、静かにしろ」

実際にそうならないのは、壇上には不機嫌そうに眉をひそめる織斑千冬も居るからだろう。走り寄ったところで、一撃で自席まで吹き飛ばされるのを皆理解している。前に実際やられたバカが一人居るので。

織斑千冬の注意もあってか教室はようやくある程度の落ち着きを取り戻し始めた。

そんな中の一人がふと、首と視線を横に向けた。横にいるもう一人の男子生徒が同胞の登場にどういう反応をしているかが気になったのである。

織斑一夏。

世界初の男性操縦者。

彼もまた視線を“転校生”に釘付けにしている。

ただし。

見ているのは自分と同じ境遇の男子でなく、その隣に居るもう一人の方だった。

▽▼▽

美しい。気高い。

そして——とんでもなく獰猛だ。

反射的にそう推測した。目が合った瞬間に確信した。

無造作に伸ばされた輝くような銀の髪。真っ黒な眼帯で瞳の半分を覆っている。もう半分の瞳は赤くて冷たい。

温かさからとことん対極な赤色に、睨まれている。

どうすればただの視線にそこまで敵意を塗り固めることができるのか。俺には皆目検討がつかない。何がそうさせているのかはもつとわからん。だがわかることもある。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

目を逸らしたら、俺はその瞬間こいつに敗北する。

故に睨み返す。受け止めるつもりはない。受け流したくもない。向こうが切っ先を突きつけてくるのなら、更に鋭い切っ先で刺し返す。

「あの……以上、ですか？」

「以上だ」

簡潔ではあるが自己紹介には違いない。

周囲の期待を切り捨てて、困惑を押し退けて。さあ本題だ、と禍々しい真剣さでそいつはこちらへ一歩踏み出した。

「貴様が織斑一夏か」

「そういう事になってるな。今は俺が『織斑一夏』だよ」

周囲の音が聞こえない。聞いている余裕が無い。

周りの誰も目には見えない。見ている余裕が無い。

視覚も聴覚も残った感覚の総てが目の前に全部傾いていく。脳の片隅どころかほぼ総てがちりちりと焦げ付いていくようだ。危機感がさつきからずつと沸き続けて止まらない。

「名乗ったなその名前を。認めたな自分がそうであると。恥ずかしげもなく億面もなく、貴様は……ッ！」

「だったらどうだってんだよ、あゝあゝ？」

言葉を荒げる。圧されそうになる精神を引っ張りあげて奮い立たせるように。

少しだけ懐かしい、基本的に『前』はいつもこんなだった。口も態度も悪いと何度咎められたか。どっかの誰かさんがすぐ真似する

から、引っ込めていたんだけども。引っ込めきれていたかどうかは、置いていて。

もう少し冷静に対処するべきだ。

挑発に乗っかるのは基本的に悪手。

その辺はちゃんとわかっている、知っている。でもしない。理由は、まだよくわかっていない。

ただの勘だ。

こいつの前で、竦んではいけない。緩めてはいけない。“何が”来てもその瞬間に対処できなければいけない。でなければ――

「ならば私は貴様を認めない。貴様があの人の子であるなど、認めるものか」

緊張の度合いを張り詰めた糸に例えたとしたら。今まさに“切れ”だけどここの場で誰よりも速く動いたのは俺じゃなかった。眼前に居る奴でもない。

ごおん！ と響いた重い音。

縫い止められたように動きを止め、音の元へと視線を飛ば――黒板がすげー勢いで陥没していた。なんか中心地点には固められた拳があるんだけど。黒板ってそんな柔らかかったっけか。

「やめろ。この馬鹿者共が」

当然のように素手でやってのけるのが千冬さ――あやばいこれ目すっごい鋭い。怖い怖い怖い普通に怒ってる。

「へ、へーい。ごめんさーい」

「はい、教官」

慌ててすごすご座り直す。一方眼前のそいつは人をガン睨みしていたことなどすっかり忘れたかのように。一瞬で佇まいを直して千冬さんへと向き直る。

……教官？ いや確かに教員だけでも？

変わった呼び方をされた千冬さんかというと。少しだけ複雑な表情をして、小さなため息をひとつ。

呼び方に面食らった様子はない。むしろ予想通りになったから呆れているような。

「もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

間違いない。この二人は知り合いだ。

だが俺はこの『ラウラ・ボーデヴィツヒ』とは完膚なきまでに初対面である。あんな武器化した視線でガスガス刺される心当たりなぞ欠片もありやしない。

“交代”する前の知り合いの可能性も低い。たぶん。

これだけ名前も容姿も特徴的なやつなら、写真なり会話なりどこか出てくるはずなんだよなあ。ホーキちゃんみたいに。

「各人は直ぐに着替えて第二グラウンドに集合！ 今日には二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

さつきからずっと視線に『あいつなんなのさ！』って疑問を乗せて千冬さんに送信してるんだけど、届く気配がない。この教室圏外なんだろうか。織斑家とか寮長室だとアンテナ二本くらいは立ってるんだけど。

「織斑、ルクレールの面倒を見てやれ」

そう言うのと千冬さんはさつきと教室を出て行ってしまった。こつちと目を合わせようとしなかった点から考えるに、どうも圏外じゃなくって着拒だったらしい。

ところで、

「ルクレールって誰さ。そんな人このクラスに居たっけ？」

首をかしている俺の脇腹をつんつんとつつくのは、隣の席の馴染みの娘。何事かと問い返す前に首を無理やり別の方向に向けられる。

そこには見知らぬ生徒が一人。

あれ何でこの人男子用の制服着てるんだ。改造制服は散々見たけど男子用をそのままま着てる人は初めて見——あれ。

【はい。そちらの方は男子制服を着た女子生徒ではありません。貴方と同じ、男性のIS操縦者です】

あれっ？



基本的に『笑顔』。  
第一印象がそれ。

「全く気付かれてないとは、さすがに思わなかったよ……次はどっち？」

「いやあ悪い悪い。ちょっとそれどころじゃなくて……ああ右な、後は真っ直ぐだ」

俺と同じ男性操縦者——そう名乗ったシャルル・ルクレールと、廊下を全力疾走する。

教員に見つかれば敗訴確定である。

だが待つて欲しい。こつちだつて理由もなく走っているわけではないのだ、決して。迫る始業時間に追われ、自己紹介もそこに慌てて教室を出たまではない。

問題はその後だ。

「転校生発見——きやあああ本当にかっこいい!!」

「金髪美少年！ 金髪美少年!! 金髪美少年!!」

「見て見て瞳がアメジスト!」

「初夏寸前に春が、きた——!!」

なんというか。

何て言つていいかわからなかった。

進行方向の廊下を塞ぐ規模で女子生徒が群れていた。それなりに距離があるのに何か得体のしれない熱気というか気迫が伝わってきて肌がピリピリする。

別にいつもニコニコしてるやつは珍しくない。

今までたくさん見てきたし、うちのクラスにも確か居る。

HRが終わつてからまだ数分と経つていないが、男子の転校生の話は既にかかなりの広範囲に拡散したらしい。やって来た群れ以外にも四方八方から教室のドアを荒々しく開ける音が聞こえてくる。

それぞれ手にカメラなりボイスレコーダーなり色紙なりスケッチブックを手にした塊は流動し、波となつて押し寄せてくる。手錠持っ



てるヤツ、お前それどつから持ってきた。

「ふう。ああ、びっくりした。ここつていつもああなの？」

「んな訳あるかってーの。だいたいお前のせいだ」

なんとか男子用に割り当てられている更衣室に辿り着いた。更衣室のドアが閉まる音を背に呼吸を整える。体力をがつつり無駄遣いしてしまった感がすさまじい。

これから体力使う授業だというのに。

『笑顔』になる。『笑顔』にしよう。

この二つは似ているようでびっくりするほど致命的に違う。

「僕の？」

「よし、まずは鏡見ろ。着替えながらでいいから」

こちらが何を言っているかわからない、とでも言うように眉をひそめるルクレール。

「世にも珍しい男性操縦者で、おまけにお前ぐらい美形なら注目集めないほうがおかしいだろ。この学園基本的に年頃の女子だらけなんだから」

「あ、ああー、そうだよね、うん。そうだった——うわあっ!」

「何だ何だ虫でも出たかー」

驚き、いや悲鳴かこれは。

脱いだばかりのシャツをロッカーの中に放り込みながら横を向く。ルクレールが何故だか顔を両手で覆っていた。真剣に何故だ。

笑顔つてのは感情に合わせて勝手に“浮いて”くるものだ。と、俺は思う。

意図的に造るなんてのは本来想定されてないんじゃないだろうか。

「な、ななっ何で脱いでるのっ!」

「着替えてるんだよ!」

「み、見せないんでようそんなの!」

「てめーが勝手に見たんじゃねーか。つーか今も地味に見てんじやねーか。指の隙間めっちゃ開いてんぞ」

「見てない、別に見てないよっ!」

本当に『笑顔』を知らない奴の造った『笑顔』は一周回って面白かつ

たりする。

本気で騙すつもり作り『笑顔』はもつとマシ——でもそこまで行くくと本物を失ってる。

顔を下に向け、ずぎざーつと後ずさるルクレール。どうでもいいけど下がるのはいが壁までもう三十センチないぞ。

「ぼちぼち着替えた方がいいぞ。お前は知らんかもしらんが、ウチの担任は遅刻したら出席簿をライフル弾みたいな速度で投げて——もう着てるはやっ!?!」

ゼーはーゼーはーと息を荒げるのは転校生シャルル・ルクレール。ついさつきまでは確かに制服だったのに。今では紺色のISスーツ姿だ。しかも両手で抱えた制服は綺麗に折り畳まれてすらいる。

何が起きたというのだ。目を離れたのはほんの数秒だったはずなのに。

【はい。予め服の下にスーツを着ていたようです】

意外と大した事起きてなかった!

てか何それ超盲点。次から俺もそうしよう。

「着替え終わりーつと」

「そうだ織斑くん、これからよろしくね。僕のこととはシャルルで——」

「タイム。その前に一つだけどうしても聞きたい事あんだけどさ」

「うん。何かな?」

でもちゃんと笑える奴の造った『笑顔』は、自分が浮かべた本物の杜撰な再現だ。

要するに。俺は今のこいつの笑顔がすつげえ気に入らないのだ。

「お前さあ。そんな” つぎはぎ” みたいな笑顔、顔面に貼り付けてて疲れねえの?」

見事なまでにぴたりと停止。固まった笑顔がゆっくり崩れる。口がわずかに開いているのは、何か否定の言葉を言おうとしているんだろう。

でも直ぐに反応できないってことはだ。動揺したってことはだ。

少なからず思い当たるフシがあるってことだよなあ。

「お前が『何で』、『何を』隠しているか。その辺追求する気はねーけど。

ただ」

そもそも俺も嘘つきだ。周りに一番大事な部分を隠しながら生きている。一番の親友ですら欺いてだ。他人の隠し事を咎める権利なんぞありやしないんだろう。どちらかというまでもなく咎められる側だ。

ただ言つときたい。

本気で騙すつもりがないから、そんな半端な事になる。

なまじ元がいいだけに無理に作ると、そんな妙なもんになる。

だから。こいつはまだ、

「お前、向いてないぜ」

ぱあん、と。乾いた音。力いっぱい振りぬかれた腕——全力の平手打ち。

頭部ごと視界が強制的に横方向に回転する。一瞬だけ映ったルクレールの顔からはすっかり笑顔が消えていた。

「………ッ！」

アメジストの瞳の奥で、激情がちらついている。でもそれ以上言葉も行動も無かった。更衣室から飛び出していった後ろ姿がドアに遮られて見えなくなる。

「うん。『何も知らないくせに』、辺りかね」

言いかけていた何かを推測してみる。そんなに遠く無い気はする。でもドンピシャとも違うような気もする。

てか思ったより力強いあいつ。結構頬痛い。何かちよつと腫れているっぽい。頑張つて避けとけばよかった。いやまあこつちが煽つた結果だから甘んじて受けた方が正解なんだろうけど。そもそも煽るなって話かもしれないけど。

でもさあ。

知り合うなら、絶対に置いといてはいけない事だっと思う。あのまま見ないフリしたままじゃあ、本当の意味で知り合えないだろうから。

だから全力で突っ込んでみた結果、今頬がすっごいヒリヒリしているのである。

男だからグーが来ると思ってたばっちり身構えてたらまさかの全力パーで不意をつかれたとか、そういうことはないんだ。本当に。決して。

【授業の開始まであと2分25秒しかありませんが】  
「やべえ言い訳してる場合じゃねえ！」

時間ギリギリだったせいか。それとも別の何かのせいか。もしくはその両方か。なんだかえんらい勢いで不機嫌な織斑先生に白旗をフルスイングする勢いで平謝り。

すでに整列していた生徒の端つこに混じる。隣はオルコットだった。鈴はもう少し遠く……何か不満気な電波が飛んできている気がするが、今は着拒。

「貴方だけずいぶんゆっくりでしたわね……ってどうしましたの、その頬」

「ああコレ？ いやさつき更衣室で着替えてたらでかい虫が顔に止まってさ。ルクレールがとつきにぶつ叩いて潰してくれたんだけど。おかげで顔酷いことになるわ洗ってたら遅れそうになるわそのせいで織斑先生超怖いわでもう散々」

理由を聞いてがつつり呆れ顔のオルコットから反対側のルクレールに向き直る。

「それでいいよな、ルクレール？」

「そうだね、織斑くん」

顔に笑顔を貼り付けて。何事もなかったかのようにルクレールは俺の言葉に頷いた。

アメジストの瞳は、もう笑っていないなかったけれど。

さして。

さしてさして。

——さあて。

▽▽▽

『シャルル・ルクレール』

織斑一夏に続く世界で二人目の男性操縦者に用意された氏名。人物の詳細は別の項目にて。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▼▽

『転校してきたばかりで食堂の場所や細かなルールがわからないんだ。案内してもらってもいいかな、織斑くん』

『首ぐるりと回してみ。立候補したそうにチラチラ見てるのが何人か居るだろ。そっちに頼んだほうが千倍丁寧だと思うぜ、ルクレールくん』

『でも織斑先生に言われてたよね、僕の面倒を見てやれって——そうだったよね、織斑くん』

『物覚えがいい上に断りにくい言い方してくるじゃねーか。なあ、ルクレールくん』

『ははは』

『ふふふ』

で、昼休み。

IS学園には特に食事の場所や内容を指定する類の校則はない。

食堂で豊富なメニューが提供されているのは勿論。購買ではパン等も売られている。弁当を持参したい生徒に向けて早朝のキッチンが開放されていたりもする。

食堂も生徒数に対して十分広いが、更に屋上をはじめとしてあちこちに休憩スペースが整えられている。至れり尽くせりとゆーやつ。

まーそんなあれこれあっても俺は食堂以外使ったことねーのであ

るが。作るにしろ買うにしろ、俺みたいに量が多いと持ち運びやら後片付けがめんどくさいのだ。

「はー、やっと昼飯だよ。待ちかねたぜ」

「ちよつと待って。それ全部一人で食べる気なの……?」

「当たり前だろ足りねーくらいだ。んで食堂は普通に食券制な。購買は通った時に教えたところ、キッチン……放課後でいいか。他に質問はあるかね、ルクレールくん?」

「十分だよ。ありがとう、織斑くん」

「ははは」

「ふふふ」

傍らのルクレールはにつこりと。笑っているように見える顔をしている。

ところでさつきから周りで黄色い歓声が上が——ちよつと待て。何だ今日の食堂。混みすぎだろ。飽和しすぎだろ。ラッシュタイムの駅か!

眼前の光景に呆然としてみると、箒が追い付いてきた。空席を探しているのか首を巡らせている。

「今更気付いたのかお前は……しかしここまで混雑しているのは初めてだな」

「いやだって腹減って減ってもうそれどこじゃなくて……つかマジに座れんのかこれ。参ったな、屋上の方にするんだった」

「——いや。席の心配はどうやら無用なようだぞ」

「マジで、どっか空いてた?」

「ああ。見ろ」

「だっかつらっ! あんた直ぐにビットに頼り過ぎなのよ! 操作に気取られすぎであんた自身の回避がパターン化してるってさつきから言ってるでしょーが!」

「そういう貴方こそ、一体どうしてあそこまでこちらを邪魔する戦い方が出来ますの!? 拳句の果てには衝撃砲でビットを撃ち落とす始末!!」

頭部を右へぐわん左へぐわんと揺らしてこれでもかと激情を表し

ているのが鈴。

一方、ぱつと見は普通ながらも目つきの鋭さが普段の160%くらいなオルコット。

「鈴とセシリアに気圧されて、あの一带は見事に人気が引いている」  
「……………おおう」

不自然なまでに空席が目立つ地帯の中心地点。そこでは鈴とオルコットが視線の拳で殴りあっている真つ最中だった。

「ケンカしてるんだったら、止めた方がいいのかな」

「いや反省会だろ。ほらさっきの授業の模擬戦」

「……………ああ、うん」

思い当たるフシがありまくりだったのか。基本にこやかなルクレールが一気に微妙な表情になる。

話は午前中の授業まで遡る。

今日の午前中の実戦訓練は、初めてISの実機を使った授業。とはいえこれまでも申請すれば訓練機を借りて訓練する事は可能だったし、そも試験の時に一人の例外もなく実機に乗っている。

だから実習そのものはすんなり終わった。

問題はその前。戦闘の実演として行われた小規模な模擬戦だ。まず呼ばれたのは、専用機持ちである鈴とオルコット。

ではこの二人が戦ったのかといえそうでは、なく。即席タッグと相対するのは——まさかの一年一組副担任、山田真耶。

対戦相手が発表された瞬間、その場に居た生徒の大半が山田先生のドジもしくはポカを幻視し、候補生タッグの勝利を確信したんじゃないだろうか。たぶん。

ところが、どっこい。

山田先生は普段の危なっかしさは何処へ行ったのか。訓練機——ラファール・リヴァイヴの一機を駆り、卓越した操縦技術と戦闘能力を俺達に見せつけた。

反して鈴とオルコットは——2対1という数の有利を帳消しにするどころか、お釣りで車が買えるレベルで相性の悪さを発揮したのである。

互いの攻撃、防御、機動。もはや行動のすべてが相手の邪魔になる始末。鈴はエビ反りのまま吹き飛んでグラウンドに奇妙な地上絵を残し、オルコットは地面に頭から突き刺さって奇怪なオブジェと化した。

山田先生が予想外に強かったとか。実は元代表候補生だったとか。普段なら仰天する事実がいくつか語られたのに、二人の負けっぷりが衝撃的すぎて霞んだ感が凄い。

「ふ——っ!!」

「ぐぬぬぬ……!!」

盛大に言い争いを続けていたが、このままでは昼休み総てを口喧嘩に費やしてしまうと判断したらしい。譲らないからな！ 的な視線だけ残して二人とも猛然と昼食をかきこみ始めた。

山盛りの中華丼を豪快にかっこむ鈴はいつも通りなのでいい。問題はパスタを超高速かつ正確に口元に運ぶオルコットの方。綺麗に食べている筈なのに早送りみたいなスピードのせいで超妙な感じになってんだけど。

「……ホーキちゃん俺あそこ近寄りたくねえ」

「同意してやりたいが、他に席は空いていない。それにあそこに座れるのは私達くらいなものだろう」

「そうだ。おいルクレールクン、あんな空気の重そうな場所で飯食いたくないなら遠慮せずに言ってもいいんだぞ」

「二人共代表候補生で専用機持ちなんだよね、いい機会だから紹介して欲しいなあ。ねえ、織斑くん」

「ははは……!」

「——ふふふっ」

この貴公子野郎空気読めないんだろうか。それともわざと外してなのか。冷め切った瞳的にすこぶる後者っぽい。

それは、置いていて。

何時までも突っ立っている訳にも行かない。てーかぼちぼちトレー載せまくった両手がだるい。可能な限り二人から離れた場所にトレーを下ろした。



「……………ほん」

何故か咳払いを一度して、顔を少し赤くした箒が横に座る。立ち振舞から『さりげなく、さりげなく……!』とか聞こえてきそうな感じだった。

当初は一緒に昼飯に行くのすら躊躇っていたのだから、随分と進歩したものである。俺が『俺』である内は絶対に実らないけど。何があっても。

「あれ、箒は今日弁当なん?」

「最近練習しているのだ。どうも量が必要らしいから、お前に作るの  
はもう少し腕を上げてから——ごほっ! げっほ! ガハッ!? な  
んでもないぞ、私は何も言っていない!」

けれども何時かは今の頑張りが無駄じゃなくなる時が来るだろう。  
来るべきだ。来ないといけない。きつと。

あと誤魔化すのはいいけど咳の演技が迫真に迫りすぎですよホー  
キちゃんよ。

「隣いい?」

「——あー。別に構わ、」

んよ。と続けようとした言葉をガシヤッ! とけたけましい音が  
遮った。どこで鳴ったかという俺の横である。

久し振りに心の底からびっくりした気がする。どのくらいかとい  
うと、椅子から跳ね上がりそうになって驚きの声が驚きすぎて引っ込  
むくらい。

理由は前触れもなく音がした事か。それとも音がするまで“気付  
けなかった”事か。あるいはそのどっちもか。

鈴が居た。

少し離れた場所でオルコットと口論していたはずなのに。そいつ  
は一瞬で俺の横に——今まさにルクレールが座ろうとしていた席に  
座っていた。

事態が予想外すぎるのは俺と同じだったのか。ルクレールは普段  
の表情を根こそぎ取り落として、シンプルに呆然としていた。

「——何? なんか文句あんの転校生?」

ただでさえ釣り気味の瞳をさらに釣り上げ。牙を覗かせるように。低い声で。鈴は自身を見つめるルクレールに言い放った。

あからさまに威嚇されたルクレールは——すたすたと歩いてテーブルを回りこみ、俺の“向かい”の席に座る。派手に荒々しく着席した鈴と対照的に、静かに丁寧に椅子に腰を下ろして。睨みつける一歩手前の鈴に柔らかく笑いかけて、

「どうかしたの?」

「へー、入ってくるんだ? こんだけ解りやすく示してやったのに、気にせず入ってくるんだ? 土足で? ふーん……?」

こいつまた箸折るんじゃないかと思っただが、それは杞憂だろう。だって今日の鈴が握っているのは金属のスプーン——何でぐんにやり逝ってるんだよおかしいだろ。

「今お前に猛烈にガンつけてるのが凰鈴音な。中国の代表候補生で専用機持ち。こいつ昔日本に住んでてさ。その頃からの知り合いなんだよ」

「凰鈴音! まだ話は終わっていませんわよ!」

「んで今お前の隣にすげー勢いでスライドしてきたのがセシリア・オルコットな。イギリスの代表候補生で専用機持ち。一組のプライド代表でもある」

「あら織斑一夏に、転校生のルクレールさん。いつのまに……?」  
さっさきのまに。

「皆仲が良いんだね、僕が無理言って同席しちゃって悪かったかな?」

「いや、別に悪くはないが」

「……ええ、別に構いませんわよ」

「ありがとう。皆優しいんだね」

謙遜したルクレールに慌ててフォローを入れる筈、オルコットの方はちよつと妙な間を入れた。男相手だから緊張してるのか、もしくはこいつも何かかに気付いて、

「ところでルクレールさん? わたくしとこの織斑一夏は利害と陣営の一致で敵対してないだけであって、決して『仲が良い』などという間柄ではありませんので」

ねえな。

「改めて自己紹介した方がいいかな、僕は――」

「知ってるわよ。シャルル・ルクレール、フランスの代表候補生で専用機持ち。デュノア社専属のテストパイロット。んでこのバカ一夏と同じ男性操縦者でしょ」

「やたら詳しいなお前」

「聞いてないのに聞かせてくるのがわんさか居たのよ。むしろあんたが知らなさすぎ、このバカ」

「だって別に興味ねえもん、バーク」

鈴がルクレールに向けていた顔を突然こちらにぐるり。不機嫌という文字を三次元に変換したかのような表情でじろりと睨め付けてくる。

「はつきり言わないとずるいっちゃうわよ、バーク」

「言われるまでもなくとつくに言ったっつーの、バーク」

「だったら引き連れてんじやないわよバーク！」

「勝手に付いて来るんだよバーク！」

「バーク!!」

「バーク!!」

互いの頬を全力で引つ張り合うこと数分間。体力の予想以上の消耗と沸き上がるやるせなさに心を折られ。俺と鈴はぜえぜえと息を吐きながら一時停戦に入った。

「本当に仲がいいんだね、二人は。羨ましいなあ」

呼吸と食事を必死に両立させる俺と鈴を見ながら、ぽつりとルクレールが呟いた。

そういうお前は随分と〃ひとりぼっち〃なんだな。

浮かんだ事を言おうとしたけど、止めた。いやだって今口の中に可能な限り食い物詰め込んでるんだもの。

「あによ、あげないわよ」

「お前俺の人権ちよいちよい放り捨てるの止めてくんない？」

「じゃあ鳳さんの方ならもらえるの？」

「やらねーよ」

「ちよつと一夏、言った傍からあたしの放り捨ててんじやないわよ。代金に一品ちようだい、ムカついたらお腹すいちやった」

「何で一皿かつさらってんだ、せめて交換しろ」

「はい。うずらの卵っ」

「小せえ上に食いかけじゃねーか！ どう計算したらこれと生姜焼き一皿が釣り合うって答えが出るんだ?！」

「なにより、細かいこと気にしてんじやないわよー!!」

「……………そろそろ私の我慢の限界が近いぞその二人」

「いっただきまーす!!」



「つあー、今日はやたら疲れた気がするぜえ…………」

丸一日の実習授業も終わり、やって来たのは使用人数と面積が釣り合っていないロッカー。だってロッカーは五十近いのに使ってるのは二人だけなんだぜ。更に昨日までは完全に一人で独占状態である。ま、狭いよりはいいけどもさ。

『あの一、織斑くんとルクレールくんは居ますかー?』

制服の上着を羽織ったところで、ドアの向こうから誰かが呼びかけてくる。相手が高レベルの声真似やボイスチェンジャーを使っていないのならば、声の主は山田先生だろう。

「いませーん」

『ええええええっ!? あなたは一体だだっ誰ですかっ!?』

おい本気でビビってるぞこの先生。IS着用時の頼もしさで返上した汚名の挽回をもう始める気なのかこの人は。

「嘘でーす、織斑だけいまーす」

「先生をからかわないでくださいっ! ……あ、着替え終わってますた?」

「開いてから聞いても意味ねーっすよ山田先生。もう終わってますけど」

放っておいたら騒ぎになりそうな予感がすさまじいので、ドアを開

けて早々にネタばらしをする事にした。あ、ちよつと涙目になつて  
る。

「あれっ、織斑くんだけですか。ルクレール君は一緒ではないんですか？」

「女子の皆さんがしばらく離しそうにないので置いてきました。何時かは戻つて来るんじゃないですかねーすかね。たぶん」

授業が終わつて教師が引き上げた途端。一瞬の出来事だった。

ルクレールは周囲をぐるりと女子に囲まれ、気がつけば金の頭のとつぺんがちよろつと見えるだけ。一定数以上の女子が密集すると下手な装甲板より防御力高い気がするんだ。男限定だけど。

「置いて行くなんて、酷いじゃないか織斑くん……………」

なんともいいタイミングで通路の向こうからルクレール。よろめきながら歩く王子様は、精神力がそろそろ無くなりそうですみたいな顔をしていた。

「んな事言われてもあの状況で俺にどーしろつうんだお前は。あの女子群に突っ込めど？　んな事したら明日から鈴以外の全校生徒敵に回すつーの」

「むう。じゃあ織斑くんはこれまでどう切り抜けてたの？」

「そもそも囲まれねえ。あそこまで極端なアイドル扱いはお前みたいな容姿のやつだけだろ。珍獣扱いと奇異の視線くらいなもの」

「うーん……………織斑くんも顔の作りはそんなに悪くないと、思うよ？」

「他が駄目だつてすげーよく言われる。あとなんで疑問形にした？」

「そっか、性格の悪さがにじみ出てるんだね」

「ははは！」

「ふふふ！」

「あのお……………先生もう喋つてもいいですか……………」  
「いっけね。」

山田先生居るのすっかり忘れてた。

「寮の部屋割りなんですけど。男子生徒が二人になったので、何とか

部屋をもう一つ用意しました。はい、これが鍵です」

「わかりました」

「つか俺また引っ越すか……」

「それは大丈夫ですよ。織斑くんの荷物は織斑先生がもう新しい部屋に運んでおいたそうです」

「……………荷物半分くらい減ってそうだな」

山田先生から鍵を受け取る。横のルクレールは寮の見取り図と部屋番号が記されたメモも貰っていた。

「それと織斑くんにはもう一件用事があるんです。ちよつと書いて欲しい書類があるので、職員室まで来てもらえますか？ 白式の登録に関する書類なので」

「へーい。なら悪いけど寮への案内は無しだぜ、悪いな」

「気にしないでいいよ、じゃあまた後で」

着替え終わった俺と違ってルクレールはまだISスーツ姿である。向こうは着替えるために更衣室のドアの向こうへ消え、俺と山田先生は職員室を指して歩き始めた。

ところで今、何だか更衣室の中から音が聞こえたような気がするんだけど。例えばロッカーを力いっぱい殴りつけたような感じの重いのが。

横の山田先生を見ると『何ですか？』的に首を傾げられた。俺の聞き間違いだったのだろうか。

——まだ一日だが、もう一日でもある。

結果として、あの転校生（金）が腹の底で何考えてるのかはわからないままだ。いや問い質しも探りも入れてないのでわかるわけねーんだけど。

ただ俺に用があるのはほぼ確定っぽい。

明らかに適当かつ非友好的にあしらってるのに、やつこさんあれこれ理由をつけて俺に寄ってくる。学園で唯一の同類とできれば仲良くしておきたい——というのも考えられる。

けど、どうにもいまいち腑に落ちない。なんてーかこう、そんな打算でなく、もっと切羽詰まってる、ような……………？

「あー」

頭の中で脳みそをぐるぐるかき混ぜていると、突然横の山田先生が声を上げる。ああ、脳内の大釜が倒れた！ ようやくとろみが付いてきて固まりかけてたのに！

「言い忘れていた事がありました、私つたらついうっかり」

「あー……部屋割りの話ならルクレール呼んできましょうか。今ならダッシュで戻れば多分捕まえられますけど」

慌てて拾い集めようとするも、飛び散った思考は再度まとまる素振りを見せない。

「つーか何で俺こんなあれこれ考えてるんだろう。別にあいつと無理して関わる必要——無いな。」

そもそも。

向こうがどーこー以前に。

どうして俺はあいつを突つついたんだらう？

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、後で織斑くんから伝えておいてください。部屋の事なんですけれど。もともとシャワー周りが不調で使っていなかった部屋を急遽男子用の部屋にしたんですけど」

「うえ、まさか使えないんですか」

現在男子は寮の大浴場を色々あつて使うことが出来ない。

使える設備は寮とアリーナのシャワーだけ。だから部屋のシャワーが使用不可能だと地味だが壮絶にめんどくさかったりする。今日は処理落ちで発熱しそうな頭も冷やしたいし。

「いえいえ、普通に使う分には大丈夫ですよ。強く叩いたりしない限り問題ないとは思いますが……なるべく早めにきちんと修理してもらおうように手配してますから、それまで気を付けてくださいねー」

「なーんだ、じゃ大丈夫っすよ大丈夫大丈夫！」

私に父親は居なかった。

私の母親は居なくなつた。

私自身は——どこにも居ない。

私が居た場所に、“僕<sup>誰か</sup>”が居るから。

▽▽▽

鍵を開けて、ドアをくぐり、『世界で二番目の男性IS操縦者』である『シャルル・ルクレール』は寮の自室に足を踏み入れた。

部屋の中には他に誰も居ないのだから何も言われない。だから何も言う必要はない。

「……………疲れた」

けれども意思とは裏腹に、シャルルの口は言葉を吐いた。倒れるようにベッドに身を投げだす。落下地点は思っていたよりもずっと柔らかく、身体はきつちりと受け止められる。

うつ伏せだった身体をぐるりと回して仰向けに。首から下げたペンダント——待機状態のISに指で触れる。数秒と経たずに『結果』がシャルルの意識に直接提示された。

大型の銃器三丁分の容量を費やして量子変換インストールした機器が、周辺に盗聴器やカメラの類は検出されなかつた事を示している。違法に設置されたものだけでなく、学園側でも記録装置は設置してないいらしかった。

これで監視対策に持ち込んだ幾つかの機器が無駄になつた事になる。余計な手間が減つたと考えれば悪い事ではないのだけれど。

誰にも見られていない。聞かれていない。けれど消えない息苦しさを軽減しようと、襟元を開くようにぐいぐいと引つ張る。

やっておくべきことは済ませた。けれどあくまでも最低限だけ。まだ荷物の整理もあるし、何時迄も制服のままにいる訳にもいかない。



今直ぐ起き上がって行動するのが、正解。

けれどもシャルルの身体は未だにベッドの上に投げ出されたままのろのろと動く右腕が制服から取り出した物を上へと掲げる。

特別な物ではない。それは学生証だった。IS学園の生徒は一人残らず所持している。

「君は僕。僕は僕だから、これが僕」

当然そこには生徒の顔と名前が表示されている。写っているのは柔らかく笑う金髪の間人、名前は『シャルル・ルクレール』と書かれている。ここにそう書かれているから、この人間は『シャルル・ルクレール』なのだろう。

——本当に？

無性に。どうしようもなく。手の中にある『学生証』を放り捨てたくなった。いや、足りない。床でも窓でもいいから何かに叩きつけて壊してしまいたい。

でも、出来ない。そんな簡単なことがどうしても出来ないのだ。なにせシャルルはシャルルなので、シャルルと書かれたシャルルがシャルルである証を放り捨てたら。ここにいる自分シャルルが誰でもなくなってしまう。

嫌だという気持ち以上にそれが怖い。

何より、そう思ってしまう自分シャルルがたまらなく嫌だ。

首から下げたペンダント待機状態のISを手の中に収める。目を閉じ、耳をふさぎ、他の何もかもを遮断しながら身体を丸めた。閉じこもるように。あるいは、“閉じ込める”ように。

——僕はシャルル・ルクレールだ。

優しく、気が効いて、丁重で、丁寧で、人当たりがよくて、でも堂々としていて、夢げでもあって——ひとつひとつシャルル・ルクレールという人間の特徴を思い出す。

そうあるべきと言われた姿を思い出す。思い出して、刻みこむ。何度も、何度も何度も延々とひたすらにつらつらと繰り返す。

一時間ほど、そうしていた。



「織斑織斑オリ斑オリムラおりむららーい、俺が織斑僕は織斑私も織斑君も織斑君が織斑君こそ織斑、今日も織斑明日も織斑、これまで織斑これから織斑、織斑ったら織斑——山田先生これ書類多いつすよお！ 名前書くだけつーても画数多いんで地味にきついんですけど!?!」

山田先生の横でひたすら紙に『織斑一夏』を書き込み続けていく。元の比べたら随分と画数の多い——主に苗字のせいで——名前も、今ではすっかり慣れたもの。

慣れたからといって書くのが手間つてのは変わらねえ訳であるが。そろそろ右手が『いい加減にしろよ』と叫び出しかねない。

「が、がんばってください織斑くん！ もうあと半分ですよっ！」  
「まだ半分なんすか……」

視界には何やら両腕を奇怪にばたつかせる山田先生。もしかしくても応援してくれてるんだろう。でも催眠術かけられてる気分にならねー！

「あーあ、俺の苗字が山田だったらなあ」

名前責めという現実から逃避を試みる。なにせ画数の多さに難儀している中、横にはずばり書きやすく呼びやすい苗字の人が居るのだ。

「え、ええっ?! む、婿入りですか?! こ、困ります……こんな場所でああでもこのまま行けば織斑先生が義姉さんってことでそれはとても魅力的な——!?!」

突然山田先生が明後日の方向を見つめながらくねくねしだした。さっきの眩きが妙な届き方をしたらしい。あ、でも場合によってはそういう意味も含められるか。こーゆー口説き方してる奴昔見たことあるわ。

「そーゆー意味で言ったんじゃ無いってか、千冬さんと家族になると苦勞……あ、駄目だ聞こえてねえ」

完全に精神が異世界というか別次元に旅行中。しばらく放っておこう。どうせ手元にはまだ未記入の書類がたまり残っている。書き終える頃にはさすがに山田先生も帰ってきているだろうってか帰ってきてもらわないと困る。

——『織斑一夏』と、書く。

自分でない別の誰かの名前。

画数が多くて大変だけど、慣れてしまった。目をつぶっていても書ける。名前と言われて、直ぐこっちが出てくるくらいに当たり前になつている。なつてしまった。

ただいくら繰り返しても。どれだけ慣れても。

俺が『織斑一夏』になることはない。

仮になろうと思つても。本物が隠れるくらい嘘偽りで幾重に塗り固めても、嫌つていうほど繰り返しても。出来るのは『偽物やつてる自分』であつて『自分』以外の『誰か』ではない。

『自分』以外の誰かになんて、誰もなれやしない。

つーか。そも何で俺こんな今更なこと考えてるんだっけ。名前書きまくつてるからか。もうちよい別口が引つかかつてるよーな気もするけど。

止めだ止め、頭の中こんがらがつてきた。とにもかくにも、この書類の山を片付けるのが第一だ。終わらせなけりや晩飯にありつけやしない。それは困る、非常に困る。

「織斑織斑ーおりむらーおりむーおりむー………あゝっ。おりむーって書きちまった、しゅ、修正液、修正液——！」

▽▽▽

息を一度大きく吸つて、吐いてから。

シャルルはむくりと起き上がった。何時までもこうしていたいけれど、何時までもこうしてはいられない。特に“着替え”は他に誰も居ない今の内に済ませておくべきだった。

もう大分時間が経っている。ルームメイトが戻ってくるまでの猶予は短いと考えるべきだった。

ルームメイト——織斑一夏と、もうすぐ顔を合わせないといけない。

顔は知っていた。名前も知っていた。経歴も開示されている限りは知っていた。事前に教えられたから。織斑一夏の経歴の中にシャルルと“共通”する部分があったから、もしかしたら気が合うかもなんて、思っていたりもした。

第一印象も良かった。一目見ただけで、不思議と親近感のようなものを抱いた。シャルル自身、どうしてそう感じたのかはわからない。もしかしたら気のせいだったのかもしれない。今ならそう思う。そうとは思えない。だって、

「……嫌だな、あの人と話すのが、一番疲れるんだよなあ、嫌だなあ」  
実際は——最悪だったから。

目が合うたびに神経がゆるやかに丁寧に逆撫でされるようで。会話すれば不快でべたつくように気持ちが悪い。シャルル・ルクレールは大抵の相手とは友好的に付き合えるはずで、実際そうできているのに。

織斑一夏が相手だと途端に関われば関わるほど苦しくなる。心の奥から何か沸き上がってくるようで、むしろ心の奥を覗かれるように。

——お前、向いてないぜ

まるで、覆っている物を剥がされていくようだ。あんなに時間をかけて塗り固めたものが、簡単に剥がされる。その中に居る誰かなんて——誰にも求められていないのに。だから出てきちゃいけないのに。織斑一夏はその要らない部分に、へらへら笑いながら手招きしてくる。

だから、シャルル・ルクレールは織斑一夏を嫌うべきだ。シャルルの存在を否定しているのと同義なんだから。

「……シャワー、浴びよう。ダメだ、気分、変えなきゃ……後着替えも、して……それで、またちゃんとシャルルになって、それで、それで——」

誰も居ない部屋の中でわざわざ言葉にする。シャルル自身に言い

聞かせるために。

荷物の山から着替えのジャージだけ引つ張りだして、浴室に向かう。脱衣所で着ているものと、付けているものを全部脱いで、頭から湯をかぶった。

少し熱めのお湯は意識をはつきりさせてくれるけど、それ以上は何も流してくれない。だから耳をふさいで、目を塞いで、抑えこむ。

—— お前、向いてないぜ

思い出しちゃいけない。思い出してない。考えちゃいけない。なのに勝手に頭の中で響いている！ ずっと、ずっと！

「そ、んなの……」

今喋っているのは、果たして本当にシャルル・ルクレールなのだろうか。

ここに居るのはシャルル・ルクレールだから、シャルル・ルクレールの言葉以外あつてはいけない。 فقط。

「そんなの……っ、言われなくても……っ！ わかつてるよお!!」

ほんの少しだけ。本当に少しだけ。綻びから出てきたのはシャルル・ルクレールでない部分。それがもがくように、勝手にシャルルの身体を動かして、手近にあったものを力の限り殴りつける。八つ当たりの様な意思の表示。ほんの些細な抵抗。

そして、それが。



「お、ここにだここにだ」

積み重なった書類をレコードを更新するような速度で書き終えて、やって来ました新たな自室まで。

山田先生に渡された紙に書かれている部屋番号と、目の前のドアに貼つてある部屋番号は完全に一致している。間違いなくここが新しい俺の部屋だ。

そしてシャルル・ルクレールの部屋でもある。

「……………うっ」

鍵を開けようとして、硬直。思い返すのは入学初日の入寮初日。部

屋に入ったら風呂あがりの箒とぼったり遭遇した例の出来事だ。

あんな心臓に悪い出来事はもう御免被りたい——あ、でも今度のルームメイト男じゃん。だったら問題ねーや。

一応ドアを叩く。

「……ありや？ あいつ先に戻ったはずなんだけど」

室内からは何の反応も無い。更衣室で別れてから随分と時間が経っているから、帰ってきてるとばかり。

鍵を回してオープンザドア。足を踏み入れた室内は特に何の変哲もない二人部屋。内装に大きな違いも見られない、普通の寮の一室。そこにルクレールの姿は無い。

無い、のだが。

現在進行形でシャワー室から水音がしている。ということとはつまり誰かがシャワーを使っている訳だ。この部屋で俺以外に誰か居るとしたらルクレール以外ありえない訳で。

ノックに返事が無いのも当然だった。ところでこーゆーのをデジャブって言うんだろうか。いや前はシャワー使ってるって気付く間もなく出てきたから、ちよい違うか。

「ん、シャワーって確か——後でいいか」

シャワー周りが不調だという山田先生の言葉を思い出した。が、間の悪いことにルクレールはもう使っている。今から浴室に突入して注意するってのは——したくねえなあ。

ぶっ叩かない限り大丈夫だって言ってたし、大丈夫だからルクレールも今使ってるんだし。さーて俺の荷物荷物と………これ増えてね？ 学園に来た時より多いってか、千冬さんの私物混じってんじやねえのこれ。

——ごがんっ

はて。今、何だか浴室の中から音が聞こえたような気がするんだけど。例えば手近なものを力いっぱい殴りつけたような感じの重いのが。

『あつつつあつつあつつつツツ!!!』

俺の思考が事態を予想するより早く、現実が答えを突きつけてき

た。悲鳴、次いでシャワー室の中からどったんばったんがっちゃん騒音。次いでごっつ、と一際鈍く大きい音。

ふいに、音が止む。

「——おい。おいおいおい、何やってんだ!？」

異物混入の恐れのある荷物を傍らに押し退けて、浴室のドアに飛びついた。熱湯ひっかぶって慌てふためくまでなら笑い話で済む。でもすつ転んで頭打ってたりしたら洒落で済まねえ。

洗面所兼脱衣所に飛び込むと、まずぎあざあとお湯が吐き出される音が聞こえてくる。次いでシャワールームに続くドアが開いているのが見えた。

何故ドアが開いているのかって、そりや中に居た人間が開けたからだろう。ただ出てきたであろう人間が見当たらない——居た。

「おい大丈夫かルクレー………る?」

「い、いたた………え、あ、お………おりむら………いち………か………?」  
すつ転んだという予想は当たっていたらしく、目当ての人物は床に座り込んでいた。

そいつの首から上は俺が今日会ったシャルル・ルクレールってやつのもので、実際この部屋に居るのもシャルル・ルクレールであるべきで、だからこいつはシャルル・ルクレールなんだろう。

が、違う。確実に違う絶対が違う。だって俺が知ってるシャルル・ルクレールと目の前で座り込んでる奴とは決定的な違いがある。

男子じゃない。

何故そうだとわかるのか。

そりや全部見えてるからだ。

なんにも隠していないからだ。

下着どころかタオルの一枚もない。

頭のとっぺんから、足の爪先まで見えている。

背中以外の全部を俺の視界は一つ残らず捉えている。

膨らんでいるところ、出ているところ、へこんでいるところ、ぜんぶ。

髪の毛の先端から落ちた雫が、男では絶対に有り得ない曲線をなぞ

りながら滑り落ちた。

「……………はア？」

そこに、女子が居た。



学園の地下五十メートル付近。

そこに本来あるべき土くれは何処にも見当たらない。代わりに人工的に造られた空間が広がっている。学園内でもレベル4権限を持つ限られた関係者だけが知り、入ることの出来る隠された空間。

中でも更に幾重もの分厚いドアで隔てられた一室があった。侵入者どころか、正規の関係者すらも拒んでいるかのような部屋。

中にあるのは、残骸だ。

ほぼ黒同然の濃い灰色。人型は保っているものの人間よりも遥かに大きい。左腕がなく、胴体は両断されている。誰の目にも明らかに残骸に映るその機体は、かつてクラス対抗戦の最中に突如出現した所属不明IS。

回収当時は修復や解析も視野に入れられていたものの、今となってはそのどちらもほぼ手詰まり。だからといってそこから辺に無造作に棄てる訳にもいかない。

肝心要のコアこそ残されていないが、リモート・コントロール スタンド・アロン 遠隔操作と独立稼働といった未だ世界のどこでも完成していない技術が使われていた機体だ。故にこうして地下エリアの一面に保管されているのである。

かつて灯していた赤い光もコアごと抜け落ち、ただの異質なフォルムの無機物のかたまり。誰もにそう認識され、いくつもの計器もそう判断している。

今、この瞬間までは。

胸部の穴——かつてコアが収まっていた箇所。左腕がコアを持ち去ったために、ぽっかりと空いた。そこは何事も無く空虚なまま。

——右腕。

子機の変形した右腕が弾け飛ぶように展開。その中央にして最奥には、小さな小さな赤い点のような極小の結晶体。機体の中を自在に動き回り、調査の手と目から逃れ続けた残滓一粒。

明滅に伴って変化が起こる。

歪で欠損していて不恰好でも、最低限度は保たれていた人型が失われていく。ではどんな形に変わっていくかといえば――”どれでもない”。

氷が溶けて水になっていくように。黒同然の人型が黒同然の何かに溶けていく。固定具をすり抜け、台の上から滴り落ち、床を這いずり回る。

瞬く間に部屋全体を覆うまでに広がりながら外へと通ずる僅かな綻びを探つてゆく。数秒とかわからずに手頃な道を見つけ出したのか、吸い込まれるように室内から消えていった。

かつてISだった何かは凄まじい速度で道のりを進んでいく。予めインプットされていた第一目標地点は――訓練機の保管室。

上へ、上へ。

新たな身体を目指して、音もなく。

意思もなく。



腹に何か抱えている事は見れば判る。

隠し事に向かない性分だという事も見れば判る。

でも性別を偽っている事は、見ても全然さっぱりまったく判らなかつた。

つまるところはシャルル君だと思っていた彼は彼女でシャルルちゃん。ダメだ今日もマイブレインがポンコツだ。復旧するのに時間がかかるどころか、そも復旧する兆しが見られやしない。

関係ないようで関係ある話。

今でなく“前”で、どう見ても『女にしか見えない男』ってパターンに心当たりがある。だもんで頭ん中に『物凄く女顔の男は存在する』ってゆー前提が居座つてる訳で。

今更ながら容姿で気付かないまでも疑えよって自分でも思うんだけど。どうも考えるにその“前提”に思いつきり影響受けたらしく。今回ばかりは経験に邪魔されたってゆーか。

他にも色々あるけどちよつと経験の影響がでかすぎたってゆー………女のフリした男パターンなら今度こそ一発で見破ってやったのに逆パターン来やがったちくしょう！

「で。ぼちぼち落ち着いたかね」

ちなみに俺はまだ全然落ち着いてない。

ルクレールちゃん(仮)はベッドの上で俯いたままなので表情が読めない。だからこうして声をかけて確認を取る必要があるのだ。決して無言の間がそろそろキツくなってきたとかそんな事はねーんだよ。

「——っ、」

言葉による返答は無い。肩が跳ねたから声自体は聞こえているみたいだが。よく見ると小刻みに振動している。マナーモードかなんかですか。

てーか物理的な距離以上に精神的な遠距離具合が凄まじい。これ物凄く怯えられてないか。いや覚えがないというかありまくるけど。不可抗力って言葉あるじゃんか。それじゃんか。

「……推測ですが、恐らく」

数分前。決定的な光景を見てしまった、その時。

俺は過去最速最丁寧でドアをそつ閉じた。そして、  
がちやり。

『あ、見間違いじゃなかった』

『——え、きやあつ!? な、何でまた開けっ……!? み、見ないで、見ないでよお!!』

「……二度見したからでは？」

人間って驚きが許容範囲超えると一周回って冷静になるってあるじゃん。

あれそう見えるだけで実際は動作に反映させる回路が焼け落ちてるだけで、実際中身は単純に惨状になってると思うんだよね。さっきの俺みたいに。

全部開けなくても、ちよつとだけ開けて覗けばよかったんだよね。いやあ失敗失敗。

「……見たいという欲求を私は肯定します。けれどあの場では必要以上に見ない方が事態の処理は容易になったと思われませんが」

（そーなんだけどさ。一回目で完全に意識スツポ抜けたから確認しそこねたんよ）

「……確認？ 何をです？ 言っておいてください。次から私が見ておきます」

（性別な。次なんかあつてたまるかこんなドツキリ二度とゴメンだったの）

次来たら正確には三度目だけど。

どうでもいいけど『前』含めてこれで二度目。前例少なすぎてイマイチ警戒の仕方掴めてねーのかもな。

「……再度の視覚情報の取得が無くとも判断は可能だったのでは」  
（パツと見で判断はしてたけど、確信が欲しかったんだよ）

もしもの話。

『男』をありとあらゆる手段で『女』に近付けたとする。結果として I S が『女』だと認識できる程に人体を造り変えることができたのなら、

—— I S を動かせる『女のような男』という存在が出来上がるのではないか。

脳みそが肌色で処理落ちしながらも浮かんだ疑問が、それ。思いついて何だけど突拍子もなくてバカバカしい話である。単純に『男のフリしてたけど実は女』ってところに行き着くのが妥当で普通なんだろう。

だけれど、も。

ここは『IS学園』で、『男性操縦者』としての入学だ。服を脱いだらバレる程度の偽装で、入学審査を抜けられるとは思えない。バカみたいにぶっ飛んだ理由や背景があってもおかしくない。いや、無い方が“おかしい”。

だからわざと二度見した。あのタイミングなら“混乱が極まって奇行に走った”とかいくらでも言い訳できるし。向こうだって隠し事をしていたのだ、フリとはいえ動転していたこちらを強くは責められまい。

ただ二度見して収穫があつたかというところ——割と無かつた。てか全然無かつた。警戒されまくってる分むしろマイナス。完全に見損。

少なくとも外観状の特徴は完全に女にしか見えない。不自然に手を加えた痕跡はなし。じゃあ普通に女——でも俺の目ン玉には内部見透かせる機能なんて付いてねーから、中身弄くられてた場合はわからないってのを見てから気付いた。

一番気に掛かる部分を早めに判別させておきたかったのに、結果として余計わからなくなっただけのよーな。さっさと簞巻きにして寮長室に放り込むべきだったのか。

【今からでも遅くはないと思われませんが】  
(最終的にはそーするよ)

単純な事実として。

俺自身にコイツの問題をどうにかする力はない。

『織斑一夏』は『世界で唯一の男性IS操縦者』である。  
そして。

それだけ。

結局のところ今の俺——『織斑一夏』は、未だ成人もしてないイチ男子学生でしかねーのである。大層な肩書はあれど実質的な力はほぼ無いに等しい。だったらどうするかって、俺より力のある人に何とかしてもらおうしかねえ。

真っ先に思いつくのは千冬さん——『織斑先生』だ。

また借り増やす事になるのは思うところありまくるけど。でもそれ

が妥当なとこだと思うのだ。力も意思も半端なまんま首突っ込んで  
もどうにも出来ない。つかへタしたらどうにもならなくなる。なっ  
た。何回か。

てーゆーかーさー。

服剥いだらバレる程度のザル偽装を、俺はともかく千冬さんが見破  
れなかったのか。これが地味にすっげー疑問なんだけどな。後で聞  
いとう。

そんな訳で。

最終的に俺がどうするのかはもう決めている。

ただ引き渡したら、その時点で俺はこの件から外される。何が起き  
てたのか、結局どうなったのか、あの人教えてくれない気がする。だ  
から俺が“何”に巻き込まれたのかを知る機会は、今しかない。たぶ  
ん。

そのためにはこの女(仮)にも喋ってもらう必要があるわけで。け  
れどもさつきからずつとだんまりなわけで。

だからずつとこのまま——では、ない。

「とにかく。何で男のフリしてたかだけでいいから、教えてくれねー  
かな」

「……………」

“全部”話せでなく、“これだけ”知りたいって聞き方するのがコ  
ツなんだとき。後は気付かれないように少しずつ引つ張りだす……  
だったっけ。聞いたのがすっげー昔だから普通に臆気だ。

「……………僕が『シャルル・ルクレール』になったのは」

ほうら。

喋りでした。

確かにこいつの隠し事は露呈した。でもそれは現状では俺一人に  
だけ。実際どうかはともかく、少なくとも向こうはそう認識している  
はず。だから——“俺一人を丸め込めば”こいつの秘密は“バレな  
かった”ことになる。

一から十までホントのこと話すかは微妙だが、相手を騙す場合は嘘  
が多すぎても逆効果だ。こっちで判るところだけ“本当”を拾って

いけば、概要くらい見えてくるだろう。見えてこなければ、少なくとも俺の手に余る”ことは確定するし。

「実家から、そうしろって言われてね」

「なんだ変な家訓があるとか言い出すんじゃないだろうなその手の厄介事はもう間に合ってるんだぞ俺の人生は!!」

ルクレールちゃん（仮）の表情から深刻さがすぽんと抜け落ちた。

俺が声の震えを抑えられなかったせいだと思う。

「……織斑くんは、定期的に変なコトを言わないといけない病かなにか患っているの?」

「ほっといてくれ! 違うんなら話続けてください!」

さりげなく罵られているがそれどころではない。こっちは記憶の奥底から這いずってくる人生屈指のトラウマを蹴落とすのに忙しいのだ。

「世界で二番目の男性操縦者の『シャルル・ルクレール』は『フランスの代表候補生でデュノア社のテストパイロット』っていう設定なんだけどね。それで、僕の実家がそのデュノア社」

「ヘーデュノア、社? でも会社が実家つーことは」

うん。ところでもまずデュノア社って何だよ。

まずいちよつと待って話が進んじやうどつかで見たよーな聞いたよーな気は………ダメだ上ってくる途中で胃酸に溶かされた。

眼前の娘は当然知ってるんだろうけど、何それって質問できる空気じゃねえ。

「はい。フランスのIS関係企業の最大手で、製造しているラファール・リヴァイヴは量産機ISでは世界第3位のシェアを持つています」

心の中で冷や汗流していると、心の横からフォローが入ってきた。なるほど。覚えがある訳だ。このIS学園の訓練機の大半がそのラファール・リヴァイヴなんだから。

「うん。『僕の父』がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

「ふ——ん。社長が直々に自分の娘に何でまたそんな妙ちきりんでわけのわからんことやらせたかね」

「それは……」

話題が自分の家になった途端わかりやすいくらいに表情が曇っていく。何より言い方。硬い、無機質——違う、他人事みたいな。

そんな言い方をする場合は本当に他人事なのか、もしくは“他人事だ”と思いたい”のか。

とにかく自分の父親に対して妙な言い方をしている。

じゃあ仲が悪い——よけりやこんなところに送り込まれないだろうけど——のか、もしくは実の父親ではない可能性もある。ただそつちだと言いついでなく言葉自体がもう少し他人よりな表現使うパターンが多くなる。

とすると父親と血は繋がってるとして。母親が正妻じゃない辺りが妥当かな。加えて最近まで認知されてなかったとかだとこの態度に説明がつきやすくなる。しっかし金と権力が一定値越えた層は増えるよねそーゆー話。

【どうゆう話ですか】

(知らんよ、知る機会も知る気も無いし知りたくもない)

とはいえ全部推測だ。でも聞いても素直に答えてくれるか怪しいな、これ。相手に悪印象持たせかねない情報だし。あ、でも同情誘う分には効果的だから案外あっさり打ち明けてくるかもな。聞くだけ聞、

「僕はね、織斑くん。愛人の子なんだ」

「お、おう」

くまでもなかった。

「二年前に——お母さんが亡くなった時にね、父の部下が来て教えられたの。それで色々と検査をする過程でIS適正が高いことがわかって、非公式ではあったけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

父親と違って母親に対しては不自然に言い淀まなかった。母親との関係は良好だったらしい。まあ——そこは、なんとなくそうんじゃないかなとは思ってたけど。

「父に会ったのは二回くらい、会話したのも同じだけ。普段は別邸に



住まわせてもらってね。一度だけ本邸に呼ばれたこともあったけど、その時は本妻の人に殴られたな。『泥棒猫の娘が！』なんてセリフ、実際に聞く機会があるとは思わなかったよ」

二年で二回。大体年間お父さん。

何か不幸の暴露会みたいになってるけど、同情でも誘われてるんだろうか。その割にはこっちの反応を気にしている素振りがないのがおかしいが。つーかなんか酔っ払ったやつに愚痴聞かされてる時と似た感じがしてきたんだけど。

「少し前から、デユノア社は経営危機に陥ってね」

「うん？ 量産機のシェアが世界三位なんだろう？ 儲かってんじやねーの？」

「結局リヴァイヴは第二世代型なんだ。ISの開発っていうのはものすごくお金がかかる。だからほとんどの企業は国からの支援があつてやっと成り立っている。それにフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されているから、第三世代の開発は急務なんだ。これは国防のためでもあるけど……資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるからさ」

これ日本語ですか途中からフランス語になってたりしませんか。脳素通りして反対の耳からほとんど出て行つたぞ。

が、話の内容をすべて理解できなくても構わない。

重要なのは話している事が嘘か真か。沈黙で続きを促す。視覚だけでなく聴覚もフルにする、表情と動作だけでなく息遣いも拾いたいから。

「デユノア社も第三世代型の開発に着手はしてるんだけど、元々遅れに遅れての第二世代最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなくて。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット。その上でISの開発許可を剥奪するって流れになったの」

嘘は言っていない———というか、嘘とか本当とか、考えてないのか。

頭の中の知識をそのまま発言しているだけ。ただの説明にしか聞かない。

「お前の身の上話から会社の経営状況ときたけど、結局男装の理由何なんだよ。話逸らしてるなら戻してくれ、そろそろ脳の容量が限界近いんだよ」

「“それ”が理由なんだよ。僕が男の子のフリをしていたのは、会社が注目を浴びるための広告塔。それと、」

ここで初めて向こうが視線を逸らした。

当然こつちの視線はそれを追いかけて、見えるのは。

「それと——『同じ男子なら本物の特異ケースと接触しやすい。可能であれば使用機体と本人のデータを取れるだろう』……だってさ」

生きた人間の顔だった。

苛立っているようで、諦めてもいるような。複数の感情が混ぜこぜになった、愛想笑いしてる時よりも、ずっとずっと人間らしい顔だった。

「つまり、君と白式のデータを盗んでこいって言われてるんだ。僕は、<sup>父</sup>あの人にね」

こいつの話は信じがたい。

けれども同じくらい、これが演技であることも信じがたい。

仮に今までの言動が総て演技だとしたら。この野郎がこんなにも本当にしか見えない演技をできる畜生だったとしたら——そもそも俺はこいつの正体を知らない。

「とまあ、そんなところ」

向いてないどころじゃない。無理だ不可能だ。駆け引きのかの字もねえ。表情にしろ口調にしろ全方面からとにかく総てがだだ漏れすぎる。

誰だこいつを企業スパイに抜擢したバカは。たぶんそいつ俺よりバカだぞ。それって相当バカつてことだぞ。

「織斑くんにはれたから、僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないんだろうね」

んで。こいつの言ったコトが全部真実だったとして。

気になるトコがあるかといえは正直ありすぎて手がつけられない。あんなザル偽装で国一つとIS学園を騙くらかして潜り込ませるだけの力がある潰れかけの企業ってどういう事だよバカじゃねえのか。

金かコネか弱みかしらんがそれだけ無茶通せるなら最初から潰れかけねえだろバカじゃねえのか。

そもそも追い詰められてるって『設定』なのに偽装のザルさから本気さが全く感じられねえよバカじゃねえのか。

無闇にリスク増やして第三世代と男性操縦者のデータ両方まとめ取ろうって感覚が完全に一発逆転狙いの博打狂いのソレだろうがバカじゃねえのか。

てか存在自体が弱みになりかねない社長の隠し子を使うんじやねえよそれも手の届かない外国に放り出すって何のためにわざわざ出向いて回収したんだよバカじゃねえのか。

なにより親の命令だからってこんなあからさまな片道切符を素直に受け取ってるんじやねえよバカじゃねえのか。

「なんだか、話したら少し楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと今までウソを吐いていてごめん」

ルクレールちゃん(仮)が申し訳なさそうに頭を下げる。俺がさつきからずっと押し黙ってるから、怒っているとも思われたのかもしれない。

頭の中で渦巻いていたものを全部捨てた。潮時だ。これ以上は考えるだけ時間と脳細胞の無駄にしかない。

後はこのままこいつをふんじばって寮長室にこんばんはすれば終わり。

「もう一個聞きたいんだけど、いい?」

「うん。何かな」

それでも残った疑問が勝手に口から飛び出した。

俺にはよくあること。

「お前何で引き受けた……ちよい違うな、引き受けたら

どうしてもらえぬ約束だったんだ、お前は？」

「……………『デュノア』にしてもらえぬんだ。『私』<sup>シャル</sup>でなく『僕』<sup>シャル</sup>ならデュノア家に正式に迎え入れてくれるって」

「嘘に決まってるだろバカじゃねえのか！」

「——ッ、だって！ 大企業が相手で！ 僕は身寄りの無いただの子供で！ 誰も味方なんか居なくてどうしようもなくひとりぼっちで！ 選ぶ権利なんかなかったんだ！ 仕方がないじゃないか！ 従う以外にどうしようも!!」

『織斑一夏』の経歴にはきつと『両親不在』と書かれている。それは両親に捨てられた、という意味だ。でもそれは本来の『織斑一夏』の話であって『俺』の話ではない。

だから。俺には『親の身勝手に振り回される子供』の気持ちはこれっぽっちもわかりやしない。共感もしなければ同情もできない。

「誰も『私』を必要としてくれない！ 今まで見てくれた人達も目を逸らすんだ！ でも『僕』なら——」お父さん”に求めてもらえたんだ！ 居場所を求めて何が悪いんだよ!! 私のこと何も知らないくせに僕のこと何もわからないくせに!!! 大体織斑くんには、僕がどうなるうともう関係ないじゃないか!! 私を、これ以上もう、僕を、もう止めてよお……」

詰め寄ってきた誰かが、俺の制服の襟を掴んで叫ぶ。掴まれているのは襟元から伝わってくる力はとても弱々しい。詰め寄っているのは相手の方の筈なのに、追い詰められているようにしか見えなかった。

息を、吸って、吸って、そんで。

「や——だね!!」

「私、織斑くんのそういうところ本当に嫌い！ 大嫌い!!」

悲鳴を上げる誰かの、襟元を掴み返す。意思の強さを伝えるつもり。手加減なしの全力で。手元で繊維がみぢみぢと音を上げた。

「何が『僕』だ笑わせんな！ お前はお前なんだよ！ お前がお前として生まれてきて、お前として育てられてお前が自分をお前だと思おうようになった時点で！ もうそれがお前なんだよ！ 誰に認められよ

うが結局その根底は変わんねえ！ 何があっても変わらねえ——  
変えちやいけねえんだそれは!!」

「お、織斑くん……う？」

もしもの話。今から昔。

俺が『俺』を諦めて、『織斑一夏』になっていたとしたら。

きっと出来上がった“織斑一夏もどき”は、目の前のやつによく似た顔をしていたんだろうな。

だから——だから、見ててこんなにも苛々する。

親に関しての話題は欠片も共感できない。けれど自分を偽っている——偽るしか無かったという点では話は別だ。

自分で変わるのではなく、周りから別の誰かを求められて。他の誰でもない自分自身で自分を消していく気持ちかどういいうものか、嫌ってほど知っている。

それは、わかる。わかっってしまう。

俺にこいつの問題を解決する力はない。別の誰かにやってもらうしかない。それは変わってない。

けれども。こいつを、このまま見過ごすわけにはいかなかった。

「聞いたいてなんだがためえの生まれも家の事情も正直どうでもいい！ ただなあ、ためえさつき言いやがったな『私は必要とされてない』って！」

「どうしたの、変だよ。何で織斑くんはそんなに怒ってるの……？」

怖いよ……私が悪いなら謝るから……僕が悪いんだから、謝るから……」

俺とコイツの境遇は似ているが、違う点がある。偽装の規模とかでなく、もつと根本的で致命的な所が。

目の前に。今にも泣き出しそうな顔をしているくせに、素直に泣けないやつが居る。

そいつはバカじゃないけど間が抜けていて、嘘が下手で、人を騙すのが下手で、隠し事が下手で、悪どい事に根本的に向いてない。事実として俺はこいつが何かしら企んで接してきたって、わかっていたのに結局“嫌い切れなかった”。

じゃあどうしてこいつはこんな風に育つたのだ。元からそういう人間だった。それもある。でも——それだけじゃない筈だ。

「おかしいだろうが！　いいか、考えてみる！　『私』を消すのがそんなに苦しいのは何でだ！　お前が親の命令を断りきれなかったのは！　家族つて関係に縋りたくなつたのは何でだ！　それ、——」

唐突に俺の言葉が途切れる。

正確にはより大きな音で強引にかき消された。ここから本題大事などこつてタイミングでの騒音に、俺は文句の一つも言わなかった。言えなかつた。

脳髓の中で警鐘が鳴っている。馴染みの感覚が危険の来襲を告げている。首が反射で音の方向へと向き直り、視覚が“内側から”吹き飛んだシャワー室の扉だったものを捉える。

そいつはそのそのと、あるいは悠々と、扉を吹き飛ばして開いた穴から出てきた。

墨汁ひつかぶったみたいになから3分の2くらいを黒く染めた、ラファール・リヴァイヴのようなもの。両腕に零しそうな程に山ほどの銃器を携えたそいつがこちらを向いた。目は合わなかつた。目が無かつた。

「……………はア、!?」

瞬きよりも早く。

視界が閃光で埋め尽くされる。



頭の中の疑問困惑その他諸々、一旦全部放り捨てる。  
今必要なのは一つだけ。

【はい】

応えには答ええない、声を上げる暇が惜しい。

瞬くよりも速く、思うよりも疾く、機体が身体を覆う。武器はいらない——まだ。脚部が形成されながら不可視の力場を形成する。

応戦するにしろ逃げるにしろ、外に出なきやどうしようもねえ。だから俺の身体は窓から外へと飛び出す。

はず、だった。

目が合った。

そいつは代表候補生で、専用機も持っていて、当然今も持ち歩いている筈で、訓練も受けているはずで、最低限度の対処は出来るはずで、だっていうのにどうして、そんな間抜け面で突っ立って居やがるのか。

目が合ってしまった。

前面限定のハリネズミの様に銃器を構えた侵入者が居るというのに、そいつは「へらっ」と顔を歪めた。作り笑いですらない。喜怒哀楽のどれも無い。

固く固く握られた両手の中には、きつと首から下げていたペンダントがあるんだろう。だけどペンダントはペンダントのまま。待機形態のIS変わらない。

「——っ、何やってんだこのバカー！」

力場の角度とスラスターの向きを無理矢理捻じ曲げた。

みしりと鳴ったのは機体と俺の身体どっちも。複雑な動きはできない。射線に割り込むように短距離を飛翔。

視界の端に被弾を示すメッセージが映る。

後回し。シールドエネルギーも減少する。だが絶対防御が発動する程ではない。今度の相手の武器は規格外では——だから後回せつ

て。

すこぶる今更に頭の中で警鐘が鳴り響く。おかしい、いつもより察知が遅い、鈍い——後回し！

虚空を蹴って急停止。

そのままほぼ直角に曲がる、というより直線移動の二連続。窓に飛び込む途中で突っ立ってるヤツをかつさらう。どうでもいいけどこいつ持ちにくいな。

部屋の窓は小さく無いが、流石にISを着込んだ人間が通れる程で力くない。閉まったままの窓に体当たりな時点で大きさも何もありやしねーが。

ガラスと窓枠の破片が視界に映ったのは一瞬だけ。虚空を蹴り飛ばして窓の外へと飛び出した。前につんのめり気味に傾く機体を立て直、

横殴りの豪雨だった。

ただし降っているのは水滴でなく弾丸で、押しているのは重力でなく炸薬だ。察知と発射は同時——やっぱり妙にラグがある——横に跳ぶ。土壌樹木コンクリートアスファルト、景色を形作っていた総てが猛烈に削り取られていく。

「見境なしかよちくしょうがッ!!」

原因はわざわざ振り返るまでもなく、敵機の両腕にこれでもかと括りつけられた銃器群。その一斉射撃。

着地せずに、跳ぶ。飛ぶ。止まらない、止まっではいけない。まだ弾丸は止んでいない。山ほど弾丸を浴びた壁が綺麗さっぱり無くなって、風通しが最高に良くなっていた。あれ弁償になったらどうしよう。

障害を弾丸で退けて、黒っぽいラファールは動き出した。真っ直ぐ——本当に“真っ直ぐ”こちらに向かってくる。マシンガンやらライフルやらハンドガンやら——めんどい要はたくさん。数多の銃が“一斉”に弾丸を吐き出した。

あのラファールは本来人間が乗っている部分が真っ黒い塊で埋まっている。無人である事は一目瞭然で、無人のISと交戦するのは



これで二度目な訳だ。

だが、“戦闘”を行っていた前回のヤツと今回の相手は全く異なる。単純で稚拙、すこぶるシンプル。『目標を追いかける』、『目標を撃つ』、この二つを実行し続けているだけ。

「いくらなんでも雑過ぎんだろ……シロオ！ 通信どっかつながらんねーのか!!」

【はい。総ての回線が使用不可になっています】

「うわ本当だ全部バツになってる初めて見た」

数多の銃器を一斉に使用して生じる反動を制御しきれないのかしていないのか。

ラファールの両腕は発砲の度に暴れ、弾丸の大半は見当違いな方向へ飛んで行く。さすがにじつとしてりやある程度当たるだろうが、動き回つてりやまず当たらない。

だが相手はれっきとしたISで、武装も対IS用の本物だ。事実、白式とラファールの間に存在してしまった建造物は総て弾丸に抉り取られて粉碎されている。粉碎されていく。本当後で弁償とかならないよね。

「しつっこいな、諦めて途中で帰………られてもちよつと困るな」

前へ右へ後ろへ左へ。時折無駄に回転してみたりジグザグに“上昇”し続ける。IS学園といえど実際にISを所持しているのはごく一部の教員と専用機持ちだけ。

他はそのほとんどが生身の人間だ。流れ弾に当たるところか掠るだけで、取り返しの付かない事になる。なってしまう。

「さあて、と」

相手の追撃は緩みもしなけりや増しもしない。

駆け引きを考える頭が無いのかもしれない。だとしたら——いつまでも追つてくる訳だ。

じゃあどうするかって、そら逃げるとも。

こちらら生身の人間一人小脇に抱えているのである。加えてこちらには飛び道具がない。交戦Ⅱ接近が大前提なのに致命的だ。やつてられるか。

通信で助けは呼べないつつても、だったら叫んで聞こえる位置までこちらから行けばいいんだし。

問題は、どこに突っ込むかだ。

寮なら鈴やオルコットが居るけど、多数の一般生徒を巻き込む危険がありすぎる。ならばと他に灯りの付いている建物を幾つか確認して候補を絞る。

この時間なら寮以外の灯りは教員のものだろう。あってくれ。

眼下にあるどれか一つの誰か一人が俺達に気付けば、この鬼ごっこは終わったも同然だ。

考えてみれば、それだけ。たったそれだけでいいのだ。

「……………あん？」

なら“どうして”続いているんだ。

俺達がさつきから好き勝手に飛び回っているのはIS学園の空だ。許可のない展開が嚴重に禁止されている区域だ。

数秒ならともかく。

数分は経っているのに。

「まさか他にも何かぶべあっ?!」

空中を飛行していた機体も俺の身体も、突然その場で停止した。俺は止まれと命令してないし、白式の推進系も命令通りに推進力を吐き出している。

じゃあ何で止まったかというと。

“壁”にぶつかった。そうとしか言えない。

悪意や敵意や障害害敵をどれだけ過敏に感じ取れても、どれだけ勘が鋭くなっても、避けられないものは当然ある。例えば——“察知”と“出現”のタイムラグがほぼ0だった場合とか。今みたいに。

「やっべ……………」

ダメージはさほど無い。だが“止まって”しまった。

背後から迫るラファールが一定の速度と火力を俺へ向ける。高速で飛来する弾丸の前では一瞬で致命的には十二分だ。脳の全体で警鐘が鳴った。冷や汗が吹き出す。でも避けられない。困惑が強すぎて意識が出遅れた。

【警告】

多少の被弾を覚悟した。シールドエネルギーはまだ残っている。何故か動悸が倍近い、危険の予感が頭の中から飛び出しそうだ。大丈夫、多少なら受けられる。

こつちだつてISだ。

とにかく抱えてるやつを身体の前面に回——背中で小規模な爆発

——……爆発!?

「……な、に!?!」

【未知のエネルギーを確認、コアに異——常、が——各、機機能に、深刻な問題、が発、生しています】

下手な鉄砲も数を撃てば当たる。

真つ先に弾丸をもらったのは背部のスラスタ。その片方が火を噴いた。推進力ではなく、単純に損壊して。それだけで終わらない。背部装甲、脚部にも突き刺さり突き抜けて砕け散り、

【シールドバリアー消失。再展開——不可、再展開、展開不可、再展開、展開不可】

(ヤバイまずいやばいやばいやばい何で………ッ!!)

左脚を——反応が悪い、着弾、着弾着弾着弾——爆発。

出現したウインドウ、白式のステータスがどんどんどんどん赤く染まっっていく。ウインドウ自体も乱れ、不明瞭で今にも消えそうだ。

「あ、ぐ、っ——……ッ、!!」

【再展開、展開不可、再展開、展開不可、再展開、展開不可、再展開、展開不可、再展開、展開不可、再展開、展開不可】

シールドバリアーと絶対防御を失った白式が抗えずに削られていく。弾幕は一定、あくまで一定。機械的にただただひたすらに黙々と弾丸は放たれる。

このまま削られて、装甲の先に届いたら、

爆発に押されて傾く機体。考えろ、考えろ考えろ、この異常事態の原因は、さつきまでとの決定的な違いは!

「壁これか! シロ、右脚! 弾Burstけッ!!」

【再展開、不——炸裂】

右脚を眼前の虚空に存在する何かに突き立てて打ち付ける。弾き出された空薬莖を目で追う暇はなかった。

加速した勢いのままに夜空に放り出される。

加速の反動に連鎖して身体のおちこちが多様な痛みを訴えてくる。

無傷ではない。が、あれだけ撃たれてこの程度ならマシ。あと『痛い』で済んでるときは意外と大丈夫なのである。経験則。

「くっそいてえ！・ちくしょう、が!! してやられた!!」

煙で線を夜空に描く。

推進系含むおちこちはまだ反応がない。少なくとも飛行能力を失っているのは確か。現在進行形でものっそい下方向に引つ張られてるから。眼下にアリーナが見えた。ちようど頭上だったのか。全然気が付かなかった。

ぽつかりと開いたアリーナの天井が巨大な口のように。このまま落ちていつて飲まれてしまったらと想像して、一瞬だけ“■”を思い出して、震える。

「冗談じゃねえ!!」

【障害の消失を確認。復旧開始——シールドバリアー再展開——不可、スラスター復旧——内部機構の自己修復開始、左脚部『雪原』——復旧不可、右脚部『雪原』——使用可能。機能維持を最優先】

右脚で虚空を蹴つ飛ばし、弾き、跳ね、階段を降りるように、段階的に、落下を“降りる”という行為に落としていく。

またさっきのような“壁”が——あの“壁”自体に拘束力はあっても攻撃力は無かった。ぶつかった瞬間に逃げれば問題ねーだろ。たぶん！

ラファールが追ってくる。

撃ちながら追ってくる。落下する白式を両手の銃口で付け狙いながら。機体を振り回して避けて、落ちて、降りて、撃たれて。

相手の動きの不可解さに気付いたのは距離が近付いたからか、向かい合って自前の目で睨みつけてるからか。あるいはその両方か。

視界の先のラファールの暴れまわる銃口が——ふいに変な逸れ方をする。別の何かに狙いを変えたわけではない。でなければ俺はも

うちよつと楽ができてる。ただ中心からずれて、まるで白式の左側を中心に狙っているような。

白式の左側、左腕。

その先に、人間を一人掴んでいる。

「……………そーゆーことね」

だから察知がワンテンポ遅れていた訳だ。そもそもあのラファールは一度だって“俺”を狙っていないなかったんだから。

俺は“的”の近くに居ただけか。

いわば今までの弾はその総てが“流れ弾”。そのほとんどが本来は“当たらない”ものだから。相手の狙いは。目的は。

最初からずっと『シャルル・ルクレール』。

▽▽▽

ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ。

デュノア社の代表的な量産機である『ラファール・リヴァイヴ』を『シャルル・ルクレール』の専用機として調整、改造した機体の名称。

そして、シャルル■●●ルクレールが生まれて初めて父親から手渡された物でもあった。専用機の名の通りに、今まで使ったどの機体よりも扱いやすいISだった。データ取りを経て制作されたのだから当然なのかもしれないが。

それでも、嬉しかった。

例えばそれが『シャルル』のために作られたものだとしても。形をを持った“繋がり”が手の中にあることが本当に嬉しかった。

求められているようで。

まだ自分は独りではないのだと教えてくれるようで。

それは、今もちゃんと手の中にある。手の中に、あるだけ。

あるだけで、応えない。

生まれ持った手足よりも流麗で力強い鋼の手足は姿を現すことなく、山ほどつめ込まれた銃火器の一切を差し出すこともなく。

その総てを封じ込めたまま、シャルルの手の中で黙している。

(どうして?)

半端にぶら下がった状態で、夜の空を飛翔する。シャルルの意思を全く介せずに行われる機動は不快感しかもたらさない。けれどもさほど気にならないのは、感じる部分がきつともう止まっているから。後方からは騒音のような発射音を伴ったISが追いかけてくる。そのISは最も見知った機体とよく似た形をしていた。自身が最も信頼して、支えにしていた機体と、似ている。

(ああ、そうか)

手の中にある機体は元々『シャルル』のためのもの。『シャルル』は必要とされていたから与えられて認められていた。それが、動かなくなったということとは。

——もう“僕”も要らないんだ。

もう『シャルル』も不要だということに他ならない。『シャルル』なら父親に欲してもらえるから、シャル■■■■は『シャルル』になった。だけど失敗してしまった。

シャル■■■■は『シャルル』になれなかった。だから、今度こそ本当に誰からも必要とされなくなった。

あの死神ラフアールが迫っているのも、手の中の繋がりラフアールが応えないのもきつとその証なのだ。

身体は生きている。何の支障もなく動く。

だけど動かない。

抗わない。

訴えない。

きつと動かすための部分がもう死んでしまっている。『シャルル』ならば受け入れてもらえる——それだけを原動力にしていたから。心がきつともう限界なのだ。手の中のペンダントが応えなかった時点で、辛うじて残っていた唯一の存在意義が消えてしまったから。ぺたぺたと小さく音。

腕や顔に何か降りかかった。

揺れるがままの腕を見やると、ジャージに赤黒い染みが出来ている。血液が付着したのだと気付くのに少し時間が必要だった。

(……………バカみたい。ああバカだったっけ)

心の底から呆れ返る。

シャルル自身には傷はなく、故に出血もない。だからそれは、シャルルを抱えている人間のものだった。

あのラファールは最初からずつとシャルルを狙っている。

抱えたりなんかしなければ、無駄に撃たれることは無かった筈だ。もしかしたら頭が悪いから気が付いていないのかもしれない。

すごく疲れていて、すごくすりへっていて、何もかもどうでもよかつた筈なのに。その横顔を見ていたら腹が立ってきた。虚ろだつた筈の中に少しだけ熱が籠る。

無神経で、鬱陶しくて、いじわるで、うるさくて——欠点を数えだすとキリがない。今だつて簡単な答えに気付かず必死にもがいているその姿が滑稽でたまらない。

(ああ、でも。でもね、織斑くん)

母以外に誰も居なかつた訳ではない。住んでいる場所は寂れた場所だつたけれど、それでも周りにある程度の人は居た。意を決して事情を話したりもしたのだ。

突然現れた『父親』に対して興味も好意もあつたけれど、同じくらしいの恐怖があつたから。けれど相手がデュノア社だとわかつた時点で、誰も彼もが『私』から目を背けた。

一個人がどうかでできる相手ではないから、当然だろう。話したことが間違いで、悪いのは考え無しに巻き込もうとした自分の方だった。

腫れ物扱いをされて、避けられて、忌々しく迎えられる——そうやって『私』はゆつくりと消えていった。消していった、かもしれない。

そして見てもらえる『シャルル』に縋り付いた。仮初でも居場所がないのが耐えられなかつた。あの時の『私』は独りが寂しくて苦しくて辛くて居られなかつた。

それに『シャルル』なら何より実の『父親』に見てもらえるから。他の誰も、性格そつがいが良く朗設定らかなシャルルなら、頼んでも居ないのに勝手に見てくれるから。

だけど。

（『僕』じゃなくて『私』を見ようとしてくれたことはね、ほんとはね、嬉しかったよ）

だから。

何もしなくても、最期はきつとそうなるに違いないけど。

迷惑かけた分、これ以上迷惑かけないように。なるべく嫌われるように。なるべく憎たらしく。

もう私には僕気にする必要も価値もないんだって、気付かせてあげないと。

口を開くくらいはまだ出来るだろうから。



「離して」

左側から声が聞こえた。顔はこちらを向いていない。両手足は重力の方向にだらりと下がっていて、機動にされるがままに投げ出されて揺れている。

「離してくれって言ったんだよ。大体織斑くんはいつまで人の身体を触ってるつもりなの？ 僕が女だってわかってから随分ベタベタ触ってくるけど、頭だけじゃなくデリカシーも足りてないんじゃないかな」

白式の腕で掴んでっから感触もクソもねーよ。

忙しくて反論する暇も余裕もねーよ！

【来ます】

知ってる。

落下の最中に横に跳ね跳ぶ。火線が降り注いで何も無い場所を突き破った。踏み込みの際に脚から伝わってくる違和感が一挙動ごとに増していく。

右脚は左脚よりマシなだけであって、無事ではない。煙吹いてるし。

「何より好き放題振り回されて、もう辛いんだよ。荒っぽすぎてた



まったものじゃない。大体どうしてそんなに良い機体でこんな下手な操縦しかできないんだよ、それでよく代表候補生待遇受けてるね？」

急に喋りだしたと思っただら好き放題言いやがる。

他人を気遣った機動なんかできねうわカスった。要は安全装置無しジェットコースターみたいなものだから、最悪な気分つてのは本当なんだろう。

「そもそもさあ。どうしてわざわざ僕を持ってきたのかがよくわからないんだよね。僕が君に近付いたのはデータ目的だつて言ったじゃないか。君に僕を恨む理由はあるつても、私を助ける理由なんて無いでしょ。なのにどうしてこんな事してるの？」

ボールペンの試し書きみたいな動きの最中なんだけどよく噛まずに喋れるなこいつ。

それも本当。助ける理由は無い。義理もない。騙すつもりで作り笑いで寄ってきた相手。見捨てるっていう段階ですらなく、最初から見なくてもいい相手。

何もないのに、危険はある。俺が掴んでいる限り弾丸は俺を狙い続ける。パワーアシストが低下している現状で、人間一人の重量はバカに出来ない。

こいつ細かい割に意外と重いし持ちにくいしバランス取り辛いし左腕地味にだるいしコレ絶対明日筋肉痛になってるやつだし。

「だから。さっさと離してよ、織斑くん」

ばちんと音が鳴った。

機体の右脚から悲鳴のような異音。

力場が更に弱くなっていく。

いつ機能を停止してもおかしくない。

右脚が止まったら空中で動く方法が完全に消失する。

そこを狙われたら防ぐ術は無い。

だけど左腕の力を緩めれば。

弾丸は勝手に俺を避けていく。

考える時間はたぶん無い。

俺は。

『俺』は左腕を、ほんの少しだけ緩めて、

「……どうして。何で、どうして!? バカじゃないの!」

「うるせえ! バカだったやつがバカなんだよバーカ!!」

両腕でそいつを抱え直した。

命令。今更だけど叫ばなくても伝わる。白式のステータスは相変わらず真っ赤っ赤。機能の大半が復旧中のまま。使えるのは、普段より弱々しいパワーアシストと、今にも壊れそうな右脚と、それと——黒いラファールは両腕に無数の銃器を括りつけている。それらの装弾数や連射速度を考慮して撃ち分ければ、文字通り絶え間なく撃ち続けられるのだろう。

が、相手はそんな事考えていない。だから止む瞬間がある。さつきまでにも何度かあった。恐らく弾切れから装填までの間が複数重なって——来た!

呼び出した雪片式型が出現する。白式の手の中、ではなく何も無い空間に。そのままでは質量を得た瞬間に落下が始まってしまおう、が。

「今、だ——らあああアツ!!」

ワンオフニアビリティ

【単一仕様能力、オンライン】

柄を全力で蹴りつけた。

切っ先の延長線上には黒いラファール。

脚と柄が接触、発動していた零落白夜が伝達されて刀身が白く輝く。

白式唯一の武装は一直線に夜空を切り裂き、黒いラファールの中心に突き刺さる!

【命中しました】

「肝心な部分だけ綺麗に避けやがったけどな、器用なマネしやがる」

刀身が突き刺さる寸前、ラファールを覆っていた黒い部分が表面を這って移動するのが見えた。狙った箇所は貫けたが、狙った“物”は貫けなかった。

視界の先で小規模な爆発を起こして、ラファールが傾く。それでも

両腕を前にあげようとして——誘爆したのか更に爆発が肥大化する。そのまま夜空の星になつてくれれば万々歳なんだが。

「とにかく今の内に立て直すぞ、ふんばれ主に右脚の中身！」

【その右脚を制御しているのは私なのですが】

「シロがんばれ超がんばれ！」

【はい。がんばります】

ラファール野郎から目逸らしたくないんだけど、地面がもう直ぐそこなのだ。右脚を地面と垂直になるよう突き立て、削り取るように勢いを減らす。

「ふんつきぎぎぎぎぎぎっ……！」

右脚がいよいよヤバイ。末期の洗濯機が可愛く思える音が出ている。

無駄に飛んだり跳ねたりしている余裕はない。それやったら空中で止まる。たぶん。

【来ます】

煙を吹き出し、括りつけた火器をいくらか地面に零しながら。

それでもラファールは真つ直ぐこちらへ向かってきた。

背部で機能を停止している二基のスラスタを前面に回して翳す、即席のシールド。着地するまでは保つだろう。いよいよ地面は目の前だし。

「いよっし！ 久しぶり地面!!」

辛うじて着地といえる格好で、白式の脚が実在の地面を踏みしめる。半分くらい埋まつてるけど着地。着地したら着地。何か部品バラバラ落ちたけど着地。

一息つきたい。

そうもいかない。

脚を引き抜いて飛び退く。相手は未だ稼働している、止まっているのは危険だ。空から降る弾丸が地面を削——らない。何かと上を見上げると、予想通りのラファールと予想外の物があつた。

夜空とアリーナ内部を隔てるように、“遮断シールド”が起動している。

一瞬だけ呆けた。

最初から起動していた訳がない、している筈がない。落ちている最中には確かにあんなもの無かった。

辺り——見慣れたアリーナは出口の総てが閉じられていた。灯りは付いていないが、観客席との間には隔壁が降りている、ピットの入り口も同様。閉じ込められたのだと理解した。  
やってくる。

立ち止まった俺が小脇に抱える人間を指し、黒いラファールが。駆け引きのしようもないただの鋼の塊が。アリーナという籠に自分から飛び込んでいった獲物を目指して。

まっすぐ——まっすぐ飛んで、遮断シールドにビタアンと衝突した。そのままごろんごろんとアリーナの斜面を転がり落ちて。

「……………」

「……………」

「……………」

姿が見えなくなった。

——がしやーん!!

「……………バカにしやがってツ!!」

落ちてんじやねえよあの野郎。

まずい緊張から変な開放をされたせいで、力が、力が抜ける……!ダメだ未だ事態は何も解決してねえ。崩れ落ちたり地団駄踏んでる場合じゃないんだって。もうちよつと踏ん張ってくれ俺の集中力。

「シロ、カートリッジは残ってるよな。全部一気に使ったら遮断シールドはともかく隔壁くらい蹴破れたりしない?」

遮断シールドも隔壁も、白式ならば容易く破れる——ただし万全なら、だ。

機能の大半がオシヤカ一步手前な今の白式に、この囲いを破る術は

ない。唯一の武器はさつき蹴ったら飛んでいった。

「はい。装填機能は生きています。ですが破損の影響で最大出力に耐えられません。大爆発するか大暴走するかのどちらかです」

「あらら。ま、使えても飛べんと追いつかれておしまいか。それで助けが来るよか」

少し離れた場所から音が聞こえてくる。

近づいて来る——発砲音と破壊音を混ぜた騒音。外から無理矢理入れないなら、ちゃんとした入り口から無理矢理入ってくるつもりらしい。

「向こうが入ってくるのが早い、と。さあて。どーすつかねー」

「左メインスラスタの内部機構の修復が間もなく完了します。長時間の飛行はP I C自体が不安定な現在では推奨できませんが、機動の補助は可能です」

「何で、なんでっ！ 離してくれって言ったじゃないか！ さつきとしないから、君までこんな!!」

めまぐるしく更新されていく白式のステータス（赤）を眺めていると、抱えている奴が暴れ出した。ちゃんと着地してからやる辺りに育ちの良さが窺える。

手というか当てはある。一応。つか他に手が無い。脚壊れかけてるし。

とにかく、持ってくるのを待つ。

「はん、どーかね。俺が”本当に蚊帳の外”なら、あの壁もこのアリーナの仕掛けも要らね……後でいーか。ところであの野郎が入ってくるまで時間あるみたいだから、さつきの続きをしようかルクレールちゃん」

「いいから、もう離して……離せ、よ……っ！」

ポンコツ手前でもI Sパワー。

女の子一人が暴れてもびくともしない。

「お前、お母さんのこと大好きだろ。そんでお母さんもお前のこと大好きだったろ」

「今関係ないだろ、そんなことっ！」

「大あるわボケ」

親が居なけりや子供は生まれない。

親が居れば無条件で子供が育つわけではない。

ちやんと育ててもらわなければ、普通にちやんと育たない。どころかしつかり育てていても簡単に捻くれるし、些細な事で駄目になる。それは何より——俺自身が”思い知ってる”。

それは今は。

おいといて。

「お前がお母さんのこと好きなのは、お前を愛してたからだろう。ちやんと愛してもらわなけりや、子供は親を好きにはならない。お前みたいに真つ当には」

俺は目の前の女の子より少し長く生きているから、良い例にも悪い例にもたくさん出会ってきた。見て聞いて聞かされてたまに蹴って殴られた結果の、俺の結論。

「子供を育てるってのはなんかものすげー難しらしくて、なまじ良い子にするってのはもつと難しいらしい。親が揃ってても出来てねー家庭が山ほどあるんだから。確かに困難な事なんだろう」

「……それが、何だって言うのさ」

「お前のお母さんはやりとげた」

彼女の母親がどんな人かは俺は知らない。

もしかしたら本当は悪い人だったのかもしれない。

ただ母親として本物だったんだろう。

子供はとても染まりやすい。生まれついて善良だったとしても、心の底に悪意を持って接すれば簡単に濁る。常に一緒に親なら、なおさら。

真つ当な関係の元生まれた子供ではなく、加えて自分一人だったのに。それでも彼女の母親は娘をこんなにも育て上げた。

彼女の存在そのものが、母親の偉業の証明で。

母親の偉業が、彼女の存在の証明でもある。

「何が……何が必要とされない、だ。ちやんと必要とされてるだろうが！ その証に”愛して”もらったんだろうが!! 母親だけしかい

ない家庭で！ 『家族』という繋がりの大切さがわかるほどに！ 寂しい時に縋りたくなつたのは、家族が温かいものだど知っていたから！！ 教えてもらつたから！！」

息を吸つて、吸つて。

未だにこの単語を口にするのと怖くなる。自分の事じゃなくても。

「死」 んだからなんだ！ もう居ないからなんだよ！ 悲しむのはいいさ！ 寂しいのは当然だ！ でも「死」 んだら全部それまでか!? 「死」 んだら——その人がやってきた事全部無意味になるつてのか!? お前がお母さんと一緒に過ごした時間が思い出が！ 想つた気持ちは消えちまうのか!? 違うだろうが！ ちゃんと！ 全部お前の中に残つてるんだだろうが!!」

言葉が止まらない。なにより、感情が止めどない。

だからそのままに吐き出すのだ。めちやくちやかかもしれない、綺麗じゃないかもしれない、俺の勝手な自己満足かもしれない。そうしてもらえなかつた昔の俺の、羨望と嫉妬が混じつた八つ当たりかもしれない。

だけど考え過ぎて繕いすぎて、何も言えないのは嫌なんだよ。

「だからまだ何も無くなつてねえ！ お前の大好きな人が確かにお前を必要とした、その事実は決して消えねえ!! 苦しくて辛くて当たり前だろうが！ 必要とされて、愛されて——形成されたのが『私』<sup>おまえ</sup> なんだから！ 簡単に消してしまえないほどの価値が、お前の人生にはあつたんだだろうが!!」

俺には、親が居ないお前の気持ちはきつとわからない。

お前には、居る親にまともに見てもらえなかつた俺の気持ちはきつとわからない。

「でもお前が消えたら本当にそこで無くなつちまうんだぞ！ 全部だ、いいか全部だ！ お前がお母さんからもらったもの全部！ お母さんがお前のために費やした全部!! お前が消えたら、全部、無駄になる!! それがわかつて、諦めたのかお前は!!」

ずっと羨ましくて見ていたから、俺は簡単に気付けるのに。

ずっとそれが当たり前だつた、お前はなかなか気付けないのかね。

「わからねえならもういい。わかかって、それでも消えたいならお望み通りに離<sup>棄</sup>してやる。どうなんだよ、答えろオ!!」

「う、あ……………」

「ごぼん、と金属がへしやげるような音がする。さつきよりもずっと大きく。近い。話している間にも時間切れは物理的に火薬と共に迫ってくる。

抱えた奴は、きつと害されるのが自分だけだと思っていた。一番大切な人の思いを踏みにじる事に、気付いていなかったのか気付かないようにしていたのか。どつちかわからなかったから。叩きつけてやったんだけど。

さつきまでは諦めて屈して呆けていた。

でも今は怯えて震えている。

死にかけていた無表情は、生きた青白い顔に変わっていた。

「…………だ、よ」

「ああ?」

「や、だよ。そんなの……………嫌に、決まってるじゃないか」

「だから?」

「ねえ。何で、教えてくれたの? 今になって、こんな状況で、どうして私に教えたりしたの? 酷いよ、だってもう、どうしようも……………わからないままだったら、ああ嫌だ、やだよ……………」

「だから何が?」

「わざわざ、言うまでもないじゃないか……………当たり前じゃないか……………私だった、バカなの私だった、なんで、もっと早く……………ごめ、なさい……………ごめんなさい……………私はちゃんと私だった、僕なんて要らなかつたのに……………」

「だーかーらーなーにーがー!?!」

「……………ない。消えたく、ない。嫌だよ。無くなっちゃうの、やだ」

「だったら、どうすんだよ」

こいつ自身にはもうどうにもできない。わかかって聞いている。

縫るのが下手なのも求めるのが上手くないのも。全部わかって聞いている。



「たす、けて」

押し込めて閉じ込めた奥底から、声がした。

自分よりも他人を優先できる人間が、意を決してこぼしたか細いわがまま。

「え？　なんだって？」

崖から蹴り落とされたみたいな顔してやがる。現実を理解しているのに理解したくなくてちぐはぐなまんま思考が凍った感じの。

彼女の訴えが本物でも。

母親の愛が本物でも。

こいつの境遇がまともでないのも現実だ。

これから生きていく中でぶち当たるであろう困難は、普通の人よりずっと多くて辛い。

それじゃ足りない。全然足りない。

だからこんな事になった。立ち向かえるだけの力をもらっていたはずなのに。それを仕舞ったままだったから。

「小せえんだよ声に意志にその他諸々全部が！　殻の内から言われても聞こえねーんだよ！　俺が聞いているのは『シャルル・ルクレール』の建前じゃなくて！　名前も知らない私お前の本音だ！　聞こえるように言いやがれ!!」

小出しにするな出し惜しむな恥ずかしがるな引きこもるな。

お前の全部でもって抗って、訴えてみせろ。

俺はそれ以外に応えたくねえ。

「——嫌だあつ!!」

瓦解とか決壊というべきに。

押し込まれていた感情が噴き出したように。

閉じこもっていた殻が、内側から砕かれる音を確認に聞いた。

「死にたくない終わりにたくない消えたくない消したくないっ！　こんな嫌だ嫌だ嫌だっ!!」

叫びを覆い隠すように。黒いラファールが、最後の隔壁を突き破って現れる。

損傷した機体に構うこと無く、意に介さず——そう、そうだと思っただ。だから待ってた。てめえの胴体に突き刺さったままの——そいつを待ってたんだけだ。

白式の機能<sup>手</sup>の届く距離に『雪片式型』がやってくるのを！

「たすけて——……たすけて！　一夏あつ!!」

「ああ、いいぜ」

俺にこいつは救えない。それはこいつが自分でやらないと意味が無い。

俺みたいな人間はきつと誰かを守るのに向いていない。

俺に出来るのは一つだけ、俺の応え方は一つだけ！

「お前の人生、俺が続けさせてやる」

邪魔するやつをぶった斬るツ!!



あれだけ人に向いてない向いていない言っというて。  
当の俺自身が過去最大級に似合わない事やってやがる。  
中途半端に黒い機体の中心に突き刺さっていた雪片式型が光と解ける。

消失したのではなく、遠隔での量子化。だから白式のステータスには唯一の武装が再び正常に格納されたことが表示されている。

量子化による回収は一瞬以下だ、それを相手は待ってくれない。ラファールが俺が抱えたやつを認識し、両腕に括りつけた銃器を一斉に発射する。

どこまでも機械的に、ただのパターン。横方向に跳躍して回避行動。スラストターの片側が光を噴き出して、火線と機体の距離を開ける。

「掴まってる！ 出来るだけ真ん中ら辺な!!」  
「……………」

返答は声でなく首に回された腕だった。持ちにくさは相変わらず。でも照準のセンターと勘のセンターは重なった。さつきよか全体的にずつとマシ。

すつげーどうでもいいんだけど。人間をこんな抱え方するのは今日が生まれて初めてな訳だ。もしやこいつが持ちにくい形してるんじゃないかって俺がヘタクソなだけなんじゃないか。

余分な思考を頭の中のゴミ箱にぶちこんで、鬼ごっこの方に意識を全部傾ける。

場所こそ屋外からアリーナ内が変わっているが、やっている事はさつきまでとほぼ変わっていない。向こうが撃つて、こっちは避ける。

避けてかわして飛んで跳ねて止まって走って——射撃が途切れる。相手の行動パターンは何も変わっていない。だからその隙も残っている。けれども止むのではなく、途切れるだけ。ほんの一息。一拍

—。一瞬。

十二分。

右脚を空中に突き刺して、左脚を振りかぶる。特殊機能が使えずとも——『脚』としての機能は残っている。

「いつてらつしやア——い!!」

ワンオフ・アビリティ

【単一仕様能力、オンライン】

全力で振りぬいた鋼の脚が近接専用のブレードを一時的な弾丸に変える。輝く刀身で進路上の総てを切り裂ける刃は、当然のように目的の装甲を貫いた。

——ここまでさつきと同じ。

“これから”も、さつきと同じ。

ラファールに取り付いた黒い部分が、まるで液体のように装甲の表面を這う。黒い装甲を狙った筈の白い刃は、ラファール本来の緑の装甲のみを貫いた。

「相変わらず鬱陶しい真似しやがってこんちくしやうめ!」

とはいえ実際にブレードはぶつ刺さっている。事実、着弾の衝撃でラファールの機体はぐわんと揺れる。盛大に揺れて——揺れながら撃ちまくりやがっ何してやがるこんちくしょう。

「うおおおおああ——い!?!」

ラファールの腕がぐねぐねと不規則に暴れ回り放題。そして直線とはいかずともそれに近かった火線が盛大に“うねる”。

悪態の一つでも飛ばしてやりたいところだが——回避に徹する。

止まっではいけない。完全な停止は命取りになりかねない。されども一発の被弾も文字通りの致命傷になりかねない。

力場を蹴って方向転換、跳躍。スラスタの噴射で加速、減速。併せて回転、反転。世界が傾いたり天地逆転また戻る。今できる機動を振り絞って、火線を掻い潜るよう飛ぶ。

——攻撃は、通る。

ラファールの機体を開いた穴は一つから二つに増え、各部から紫電を散らしている。動きも最初に比べればぎこちない。機械は痛みを感じないからって、物理的な損傷の影響を無効にできる訳じゃない。

このまま攻撃を避けていけば、再び同じように相手に隙が出来る。雪片式型は回収済み。同じ攻撃を放てば、きつと同じような結果が繰り返される。

繰り返していけば最終的には行動不能に追い込める、はず。相手の回避は完全でない。いくら心臓部が無事だとしても、手足が動かさなくなった時点で無害と同意だ、が。

【右脚部『雪原』、出力低下。機能維持を最優先】

脚部の力場発生装置はどんどん異音が大きくなり、出力が下がっていく。背部のスラスターだって出力は通常時の半分以下だし、再び沈黙しない保証も無い。繰り返しが続けられるのなら多少は安全だし、确实だ。

けれど長期戦が選べるほど白式に“残り時間”があるかどうか怪しい。どちらかが停止した時点で、そこまでだというのに。

ならば短期決戦を狙うか。

執拗に庇うということは、ラファールあの黒い部分の——『一点』にコアがある。それさえ潰せば、一撃であの野郎を黙らせられる。が、同じやり方では同じように届かない。确实を期すなら直接近付いてぶった斬りにいく必要がある。

出来るのは恐らく一回が限度——こっちに残った全部を出し尽くすつもりでなければ届かない。外したら終わりの一発勝負になる。

繰り返すか、勝負に出るか。

考えなければいけない。

早く決めなければいけない。

決して間違えられない。

しくじったら、俺の手の中に居る奴が死ぬ。

(重てえなクソが……！)

この年頃の女子の平均体重なんて知りやしないが、どれだけ高く見積もっても確実に百キロ以下。その半分以下でもおかしくない。

加えて俺の腕は屈強な鋼の装甲で覆われていて、弱いとはいえパワーアシストの恩恵も受けている。だから人間一人の重さなんて苦でもなんでもない筈なのだ。

けれども重い。

こんなにも重い。

当然かもしれない。

こいつのこれから全部を、預かっているんだから。

気を抜いたら震えそうだわ、冷や汗がさつきから流れっぱなしだわ、地味にかつてないほど緊張している。なにせ俺の人生でこんな経験ありやしないのだ。似た経験もほぼ皆無。

する必要もなかったし、何より『俺』にや出来なかったから。

ああ、でもしてたやつは心当たりがある。どいつもこいつも凄かったんだな、揃いも揃ってこんなキツイことやってやがったのか。

引っ込め。

思い出に耽ってる暇なんかねえ。走馬灯はもつと冗談じゃねえ。

さあどうする。どうするどうする。時間がねえ余裕がねえでも絶対にやりとげなくちゃなんね、

“ばっん”

事態を認識するのにいつもよりほんの少しだけ時間がかかった。右脚から響いた鋭い音の後に、白式が踏みしめていた虚空が——本当に“何も無くなった”。

空中でずっこけるなんて経験あるわけない。咄嗟に何も出来ず、体重を載せる場所を失った脚が思いつきり空振る。連動して俺の身体が猛烈に前方向に回転した。スラスタも伴ったの動作の速度は尋常でなく。

流れていく視界の中で。

放り出されて、落ちていく寸前の女の子と目が合った。

▽▽▽

間が悪かった、というのがきつと一番相応しい。

方向転換や補助でなく、本格的な踏み込みの際に白式の脚が機能を失ったようだし。自身も機動の反動に耐えかね、ほんの少しだけ手の力を緩めていたから。

だから彼を責める気にはならない。放り出されて落下している現状は、なるべくしてなった結果。

体の全部が重力に引っ張られて地面に向かっていく。高度は——ISを纏っているならまだしも、生身では落ちたら無事で済むには高すぎる。

地面に落ちてもそうだが、今の状態で一発でも銃弾を受けてしまったら同じことだ。絶体絶命とは今のよう状況を言うのかもしれない。

恐怖は確かに感じているのに、妙に冷静だった。さつき久しぶりに感情を爆発させた時に、頭の中のどこかを少し振りきってしまったのかもしれない。もしくは、

「つぎ、っけんなああああアアア!!」

迎えに来てくれるって、わかっていたからかもしれない。

白式のスラストターの片方が、眩しいばかりに輝いている。崩れた体勢を立て直しきらぬまま下方方向に加速。推力に無理矢理ひねられた機体と身体が、軋む音が聞こえた気がした。

もう数秒もしないうちに、来てくれる。

だからこのまま何もせず待っているだけでいい。何もしなくても〝すくって〟くれる。そもそも何かできることがあるかということ、何も無い。本当に、何も。

——嫌だ

それじゃあ、何も変わっていない気がして、嫌だった。流されるまま、という事に耐えられなかった。自己満足でも我儘でも、何もせずにいることに耐えられなかった。

落下の最中で身体は思うように動かなくて、それでも、それでも腕だけでも伸ばす。何の意味もないってわかっている。わかっているけど！

頭の中はとつくにグチャグチャだった。ただ、ただ伸ばしてくれた腕に、そこにある心に応えたくて。夢中でがむしやらで必死で——腕を伸ばす。

「——あ、れ」

思っていたより、少しだけ速く手が重なった。それは状況を劇的に変えるような短縮ではなかった。けれども確かに変化はあった。

“鋼”の指と、“鋼”の指が噛み合っている。

生身の細い指先を、世界で一番見慣れたオレンジの装甲が覆っている。首から下げたペンダントがほんの少しだけ、今にも消えそうな弱々しきで灯りをこぼしていた。

でも前腕だけで、機能は何も起動していない。だから実質ただの重し。腕が物理的に延長されたから少しだけ接触が早まっただけ。奇跡とは到底呼べず、精々変化程度。

冷たい鋼同士で触れているはずなのに、繋いだ場所が熱を持っているように。それがひどく心強かった。

(……………ありがとう)

口に出す余裕は無かったから、心の中だけで『相棒』に告げた。

力任せに、重力に逆らう方向に引つ張り上げられる。腕の付け根でかすかに異音と尋常でない痛み。がまんする。

装甲が弾丸を受け止める金属音と火花が、至近距離で炸裂する。驚く間もなく次の衝撃。止まることを前提としていない加速だったのか、地面へは着地でなく落下同然だった。

ぐるぐると回りながら、機体は何度も地面をバウンドしながら転がる。

直接叩きつけられていないとはいえ、猛烈な振動と回転が襲い掛かって、身体が揺さぶられる。それもがまん。

目を閉じて、歯を食いしばって、ただじっと耐える。そうしていると、やがて少しだけ動きが緩やかになった。しつちやかめつちやかだった上下左右も元に戻って、上に空があつて下に地面がある。

恐る恐る眼を開くと少し向こうに黒いラファール。墜落したこちらに合わせるように着地している。さっきまでより随分距離が近い。追いつかれたのかと思つたけど、それが直ぐに違つたとわかつた。

白式の腕の片方。自身が握っていない方の腕。自身を抱えていない方の腕。その先にブレードが握られている。落下して転がりながら近づいていったらしい。

斬るつもりなのか、直接。

やけになつたのかと思わず見上げる。けれどもその横顔には予想



していた諦めなんて欠片もなくて。凶暴というか獰猛というか。目を見開いて、歯をむき出して、笑みによく似た、しかし違う表情。その時感じた気持ちをも、どう表現すればいいのか。少し迷って、やがて行き着いた。けれどもそれは当たり前のことだし、唐突だし、なにか奇妙な気もした。

でもやっぱり他に合う表現が思いつかなくて。一度気付いてしまおうとそうとしか見えず、思えない。

——この人、生きてるんだな。

そんな横顔を、見ていた。

▽▼▽

考え過ぎた。

だったらもう考えない。切り替えて切り捨てる。後悔しても時計の針は巻き戻らない。反省するなら終わった後。

まだ手の中のやつは生きている。俺も生きている。手の中に刀もある。終わってない、まだ続いている。

だから、まだだ！

「行く、ぜ、ええええああああ——！！」

墜落したこちらを追うように、降りてきた黒いラファールに向かって突撃。機械は驚かないから躊躇わない。焼き直しのように両腕の銃を放つ。

前進を優先！ 回避は二の次、ただし最低限度は続けなければいけない。辿り着くまでに戦闘不能になってはいけない。

跳んでしまうと『雪原』無しでは避けきれない。だから可能な回避運動は左右に少しだけずれたり、かがむ程度。当然それだけでは足りない。

右腕を前に。握った雪片式型を前面に翳す。少女を抱えた左腕を後ろ側へ。ついでに機能停止したスラストも前へ回しておく。

相手に向けるのは“刃”ではなく“腹”。どうしても避けきれない銃弾が雪片式型の刀身に何発もぶち当たる。響く金属音が悲鳴のようだ。長くは保たない——保つと思ってない。最後に振るうのは

零落白夜——光の刀身。雪片式型は実体の刃が全損していても相手を“斬れる”。

右脚はもう何も応えない。左脚も同じく。

虚空はもう踏みしめられない。それならば——“地面を踏む”。鋼の脚が地面を抉り取る、得られた総てを前へ向かうために費やす。スラスターを最大出力。出し惜しみはしない。辿り着けなければ意味は無いから。

砕けた装甲が後ろに流れていく。欠けた刀身が飛来して肌を裂く。穴だらけになったスラスターがとうとう完全に破壊され、残骸と化して流れていく。身体があちこち熱い、生身の部分にも当たっているか掠っているか。それでも前へ。ただ前へ。

実際は数秒もかかっていないのに。

酷く長い時間、長い距離を駆けているように錯覚する。

(届くー！)

確信があつた。ぼろぼろの機体と、大分悲鳴を上げてる身体、手にはなまくら三歩手前の刀。だが間合いまでもう一呼吸、つ、——！

——頭の中を、目の粗いやすりでなぞりあげたような感触がした。

警鐘が頭を中から突き破るかのように。頭痛の域に達するほど強く。何を指しているかは考えるまでもなく、目の前の現実が答えを見せる。

黒いラファールが射撃を止め、両腕に括りつけられていた銃器を一つ残さず地面に捨てる。両腕を脚のように地面に突き刺した。人型から離れた機体の表面を黒が這う。一点に集まって、飛散。胴体から生える巨大な黒い輪と化す。輪の中央、歪な機体の中心、そこに一欠片の赤い点がある。正確には光、結晶。赤い煌きが膨れ上がって、

「——零落白夜アツ!!」

【ワンオフニアビリティ単一仕様能力、フルパワーオンライン——最大出力】

解き放たれた赤い光の奔流を、白い光の刀身が真っ向から受け止めた。水の流れに一本の棒を置いたように。切断されて左右に分かれたビームは標的を焼きつくす事無く、霧散していく。

そして。ビームが霧散した分だけ——白式のエネルギーも消えて

いく。

(読まれてた！ クツソが……!!)

相手が無人機だという考えは変わっていない。だからこれも事前にプログラミングされた動作の一つなのだろう。発動条件は『相手から近付いてきた』辺りか。

すこぶる今更ながら疑問が確信に変わった。今回の騒動——このラファールの襲撃は俺の応戦も織り込み済みだ。標的のISを無効化しているにも関わらずIS用のトラップ、アリーナ、そしてこのビーム。

零落白夜はエネルギーを消滅させる能力だ。ならば実体弾が弱点かというところ、そうでもない。そっちだって斬れば斬れる。

最も厄介なのは——斬りきれない相手。零落白夜は発動に大量のエネルギーを必要とする。つまり消滅させられるエネルギーには上限がある。

それを上回るエネルギーに真っ向からぶつかれば、当然押し潰される。

「くっそ、が、ああああア——!!」

川の、いや滝の流れに逆らって進むよう。エネルギー切れを待たずでもなく、片腕だけで保持した刀が勢いに負けて流されそうになる。スラスタははまだ生きている。僅かながらも前進し続けている。

だがエネルギーがさつきまでとは洒落にならない勢いで減っている。両脚を地面に突き刺すように一歩、また一歩。

もう手の届く距離まで来ている。

【エネルギー警告域。離脱を提案します。『零落白夜』消失まで——  
3】

相手のコアは露出して、完全に無防備だ。

さつきまでのような避け方は出来ないはずだ。

【2】

届けば、もう少し、あと少しで！

維持できなくなった刀身がじりじりとその長さを減らしてゆく。突き出す、前へ。赤い光の中核へ。

【1】

風前の灯そのものの白い光は、それでも赤い光の中核の寸前まで辿り着いている。

あと一步。たった、一步。それが——どうしようもなく、遠い。

「——ッ!!!」

掠れきつてもう声の体をなしていない、絶叫。

渾身なんかとつくに通り越した。前へと刃を突き出す。

白式の装甲が光になってほどけていく。だがそれはビームに焼かれたからではなく、エネルギー切れによる強制的な実体化の解除によるもの。

違和感がある。左腕が異様に熱い。いやその先端が異様に熱い。左手？ さつき、掴み直した手しか——何故か鋼に覆われていた手。当然離していない。だから、それ以外無いはずだ。だったらこれは、何だというのか。

【0】

その瞬間。二色の光の拮抗から『白』が完全に消えた。

赤い光は勢いを減らすことも増やすこともなく、ただ命じられたままに放たれ続ける。

「ねえ一夏。私生きたい。明日に、生きたい。だから、だからお願い」  
左腕から伝わった何かが白式を貫いて、内部を駆け抜けてゆく。

装甲を内部から砕くほどの勢いで左腕から胴体、そして右腕を降りて握った柄へ、更に先——雪片式型の刀身へ。

この場にもう『白』は無い。

「がんばってっ!!」

かわるように、新しく、別の『色』をした光の刀身が現れる。

日本刀を象っていた雪片式型は噴き出したエネルギーにすっぽり

と覆われ、西洋の両刃剣のような形へと姿を変えている。

光の色はオレンジ、ではなく。残留していた白の影響を受けたのか、それからほんの少しだけ薄まった——陽光のような色。

通常の零落白夜よりもはるかに長大な刀身が、振りかかる赤い光を吹き飛ばすように切り裂く。

最後に上げた絶叫は俺一人のものか。それとも抱えている女の子のものか。あるいは二人揃ってだったのか。よくわからなかったし、どうでもよかった。

ただ、確かなことが一つ。

“俺達”は、届いた。

突き出された陽色の切っ先が赤い中核を粉碎する。あっけないほど容易く、結晶は爆散し、周囲を覆っていた黒い輪も消し飛ばす。一際強く光を放った刀身が、ほんの一瞬だけアリーナを自身の色で染め上げた。

黒をおしのけて、陽色が広がる。

まるで、夜が明けるように。



夜が戻ってくる。

風景が塗り変わったのは、ほんの僅かな間だけだ。

陽色の光も、陽色の騎士剣も、まるで幻だったかのように溶けて消えていく。

がしやんと音を立てながらラファール・リヴァイヴが地面に崩れた。その装甲からは黒が一片残らず消失している。動き出す気配も予感も感じない。無力化できた、と判断していいだろう。

白式の装甲が一斉にがばつと開いて、内部から蒸気が盛大に吹き出した。

同時に機能は停止して、鋼鉄製の四肢が手足から重しに成り下がる。握るといふ動作すら保てなくなつて、右手の先に握られていた欠けだらけでヒビだらけの雪片式型が地面に落ち——る前に光に溶けた。続くように白式本体も消失する。今度こそ本当にエネルギー切れだろう。たぶん

ところで白式が消えるということは、手足にくつついている鋼鉄の塊が消える訳で。

そうなると俺の手足は本来の長さに戻る訳で。要するに落ちる落ちた痛い。

ただ俺の口から悲鳴も文句も出なかった。

出る余裕をまだ取り戻していなかった。

一方で夜のアリーナはすっかり元の静けさを取り戻していたが。上を見上げれば空を隔てていた遮断シールドは何時の間にか消えていた。右を向けば何事もなかったかのように元通り開いている隔壁が見えた。

左を向いて——目が合った。

「……………あ、あの、えと、あ、う」

顔面蒼白なそいつは口をぱくぱくと開けて、何か喋ろうとしている

事が伺える。

けど聞こえてくるのは言葉に組み上がり損ねた声だけ。

極度の緊張から解放されて放心状態真つ最中なんだろう。何せさつきまでほぼ生身で銃弾飛び交う中を振り回されていたんだし。むしろそんなだけ致命的な綱渡りしといてこの程度で済む辺り、やっぱ根っこに芯がちやんとあるんじゃないか。

さあて。

今夜の騒ぎがこれで終わりという保証は何処にも無い。そもそもこいつの訳の判らん事情に関しては解決どころか進展すらしていない。少なくともこの場でぼけつとしてても良いことなんざ一つもありやしないだろう。当初の目的地である寮長室へとさつきと移動しておくに越したことはない。

「文句なら後で聞いてやつから、とりあえず立て。今の内に寮というか寮長室に転がり込ん、」

立ち上がるうとしたら服の裾を思いつきり引つ張られた。

すごく普通にコケそうになった。

いつもの俺なら何しやがるてめえと怒鳴るところであるが。つか怒鳴る気しか無かったが。そいつが顔を猛然と左右に振って、息を深く吸い込んで、吸い込んで——どうにもその様子が必死で、懸命だったから。文句は勝手に引つ込んだ。

「シャルロット」

俺が思っていたよりずっと短く、そいつの決意は固まった。口から出たのは声じやなくてちやんと言葉で、単語の一字では表せない何か籠っている。

「名前、本当の。お母さんが付けてくれた私の名前。はじめまして織斑一夏くん。私はシャルロット・ルクレールです」

絶え絶えで、ぎこちなく、あちこち色々ぼろぼろで、服は土埃まみれで、くしゃくしゃに歪んでいて、今にも泣き出しそうな、泣いていないのが不思議なくらいな有様。

でも目の前に居るのは本物の、本当の——自分自身の笑顔を浮かべる女の子だった。

「じゃあ、改めてよろしくな」

「うん。よろしく、一夏」

薄暗いアリーナの真ん中で互いにぼろぼろのまま。

出会い直す様に、笑い合う。

▽▽▽

彼女は世界規模での失踪者で、逃亡者。

だから彼女が“どこに”いるのか誰も知らない。

だから彼女は“どこにでも”いるかもしれない。

木々が茂る山奥や、光すら届かぬ海の底かもしれない。寂れた廃墟の一角か、文明の光であふれた街の一角かもしれない。果てには地球の唯一の衛星の裏側かもしれない。

どこにいてもおかしくない。けれども誰もどこに居るのか知らないから、何処に居るとも言い切れない。知っているのは当の本人たった一人だから。

IS学園の学生寮の屋上だった。

本来は転落を防ぐために設けられた柵の上に腰掛けている。

ぽつんと“居る”彼女を、数多に配置された監視カメラは捉ええない。“機械の目”でも“人の目”でも佇む彼女を見つけられない。認識できない。

「んー……………」

その場には彼女だけ。周りに機材もウインドウも何もない。

情報は直接脳髓に随時送られ続けて処理され続けている。柵に腰掛けて足をぶらりぶらりと揺らしているだけに見えるも、彼女の中では膨大なデータの奔流で荒れ狂っている。

彼女の脳髓の視界が陽色に輝く剣を捉えた。

彼女の生身の視界の端で一瞬の夜明けが瞬いた。

その輝きがまるで合図だったかのように。

今回の『わるだくみ』は終わりを告げる。

データの処理も同じく終わる。

頭の中には端から端まで総て白式のステータス。コア侵食型簡易



式無人機との接敵から戦闘終了までの、蓄積経験値の推移——端的に言えば『白式がどれだけ成長したか』。

「いまいち」

結果を脳髓から飲み干して、結論。

あくまでの事実確認のためだけに発された声に感情は一欠片もなく。確かに肉声であるのに、機械の音声と等しいほどに、もしくはそれ以下に味気無く。

「ちよこつとギリギリ狙いすぎたかなあ。いやー失敗失敗」

わかりやすい敵。

逃げ出せない理由。

容易く粉砕できてはいけない。

圧倒的に蹂躪しても意味が無い。

精神的な『必死』を引き出すために枷を適度にくくりつける。

今のままでは力の限りを尽くしても最後のひと押しで“ほんの少し”だけ足りなくして。

打倒するためにはもう一つ『先』へ行かねばならない”

特殊な状況下での戦闘による蓄積経験値の増加——否、爆発。

「まいったなあ。予定ではとつくに二次移行セカンド・シフトまでいつてるはずなのに。全然足りないや……ダメな方向に想定範囲外を行かれても困るよう”

数値の増加は無い訳ではない。むしろ“これまで”に比べれば単純な数値では圧倒的に上回っている。が、予定よりは大幅に下回っている。正確にはあくまでも徹底的に予想通りで、『予想を超える』という目的には全く届いていない。

唯一予想外といえば最後の現象。だがそれはこのタイミングで発露した事が『予想外』。結局は白式が元から持っている機能の一つがオンになっただけに過ぎない。

「今回は“シチュエーション”にこだわってみただけ……結局『仲間割れ』に変わりはないからかな、あんま変わんなかったや。セツティングの手間を考えたらむしろマイナス。あーあー面倒だったのになあ”

原因には明確な心当たりがあった。元々当初から影響を懸念していた事でもある。

ならばそれを解決して臨んだのかというと、違う。わかっているも“どうしようもない”問題だった。自身では絶対に解決不可能だと既に自分自身が証明している。

ならば他を変えればいいのだ。

好き勝手に動かして引っ掻き回した出来上がったものがまともであるはずはなく。シナリオも登場人物も何もかもが不自然でちぐはぐで馬鹿げていた。無理矢理作り上げたから当たり前で、特殊性を優先したので狙い通りでもあった。

とはいえ発端は彼女自身ではないのだ。

そこまでは彼女に非は無い。発端“だけ”は。それから後は全部何もかも、

「もういいーらない」

ひよいと指先が持ち上がったのと同時に、宙にウィンドウが一つ現れる。上から下へと指先がすーつと流れ、併せて項目の表示が切り替わっていく。

ただの停止命令である。“支え”の総てを一斉に停止させたただけ。成立している事がおかしい状況を力尽くで通していた、通すために用意していた総ての絡繰りを止めただけ。

指先一つの行為がどれだけの影響を及ぼすか、彼女は考えたら推測できるし理解できる。

けれども推測するという発想が無くて理解という事象に辿り着くこともない。

だから呆気無く遂行されて。

ここではないどこかで、恐慌が始まるのだ。

「ちーちゃんの足止めに送った方も全部やられちゃったみたいだし、今回はここまでだね。次は——月末の学年別トーナメントかな。その頃なら機体も治ってるし」

でもそれはもう彼女の中ではもう終わってしまった事で。

思考はただただ“次”のためだけにしか費やされない。

彼女の脳髓の中で組み上げられていく予定の進行に追従して、誰も知らない遠い場所で無数のパーツが瞬く間に組み上がって形作られていく。

尖ったフォルムの人型が一機、二機と増えていき、更にシルエットを肥大化させるように多種多様な装備が加えられていく。

眩きながら考えながら生み出しながら、彼女の視線はずっと一点を向いている。

より正しくはアリーナの内部の一つを恐ろしい精度で追従し続けている。だから厳密には彼女の視線は固定されておらず、常に微小に移動している。

今までずっとそうしてきたように。

遠く遠くに居るたった一人を追い続けている。

「またね。ばいばい」  
消える。

酷く恐ろしく唐突に。速さを感じさせず、幻想的でもなく。違和感の類を植え付けるような光景。編集された映像が現実に適用されたかのように。フィルムを切って別のフォルムに繋げ直したかのように。

“居る”と“居ない”——事象そのものが切り替わったかのように。



誰とも会わず、何も起こらず。いつそ不気味なまでに静まり返った夜の学園を全速力で駆け抜けて寮へと帰ってきた。

白式が力尽きているので帰りは当然徒歩、走り。だが飛ばないのにも関わらず俺の小脇には相変わらず人間が一人ぶら下がっている。

何で抱えたままなのかって——シャルロットさんが腰が抜けて立ってないって言いやがったからである。普通に全速力ならともかく、人間一人を小脇に抱えた状態での全速力なので心肺が深刻に辛い。かっつてない酸素不足に地球外生命体みたいな呼吸で息を整えていると、小脇からか細い声。

「あの、本当にごめんね……一夏………」

「心配すんな後できつちり取り立てるから。絶対取り立てるから、元はとってやるから覚悟しとけよてめえ………」

辿り着いた方がいいが、消灯時間とはとくに過ぎている。だもんで玄関から堂々と入る訳にはいかない。そりや入ろうと思えば入れるが、もし騒ぎになったら困る。なんで外からぐるーつと回って。ジャージ姿の女の子を小脇に抱えつつ寮長室に飛び込んだ。

窓から。

「おりむーらせーんせ！ こーんばんはぶあつ！」

迎撃された。

落ちる先がベッドだったのが不幸中の幸いであろうか。

「そうか」

部屋着代わりの教員ジャージ姿の織斑先生に、俺とシャルロットは知っている事とあった事をそっくりそのまんま話し終えた。正座で。

無人機関連では千冬さんの表情に微かに変化があった。完全に機能停止した機体が再起動した事はさすがに想定外だったのか、また別に引つかかる点があったのか。どっちは正直全然わからん。

ただその他の部分は呆れも驚きも全くなくてすこぶるニュートラル。

「つて事はやつぱ千冬ちゃん最初からこいつの性別は気付いてたんじゃねーか！」

「今の分は怪我が治った後にしてやる。ちゃんと覚えておけよ？ なんなら指きりげんまんでもするか？」

「声がすつごく低い……ものすつごい怖い………」

あとと言っていないのに怪我してる事がばれてーら。血も止まってるし身体も問題なく動くから、パツと見じゃわからないと思うんだけど。理由を聞いたら『動作にコンマ台の遅れがある』とか理解できない類の答えが返って来そうである。

「ルクレールの問題はこちらであずかる。織斑、お前は保健室だ」

「今思いつきり夜中ですけど」

「問題ない。IS学園の保健室は24時間営業だからな」

「コンビニかよ……」

いやIS学園は各国からIS操縦者の候補生を集めているのだから、そのくらいの備えは当然っちゃ当然なのかもしれないが。

とはいえ無理にこの場に残っている意味も理由も無いのだ。出来る事なんざ織斑先生が上手いこと問題を解決してくれるのを信じるくらいだし。むしろそんな当たり前のこと信じるまでもねーし。あれ本当にもう何もする事ねーな。

「全く。どいつもこいつも窓から出入りする……」

入ってきた窓から再び外に出ると、後ろから千冬さんのぼやきの様な眩きが聞こえてきた。うん。出てから気付いたけど、帰りは普通にドアから出て良かったな。

てかその言い方だと俺達以前にも窓から入って出た奴が居、

「一夏！」

呼び止められて、振り返る。窓枠に手をかけて身を乗り出しているシャルロットと目が合った。言葉は続かない。迷うように、躊躇っている。何か言おうと呼び止めたけど何を言うかまで考えて無かったのか。

「……………」

「……………」

互いに無言で、少し間。

俺は織斑先生が今回の件を解決してくれると思っている。ただどう解決するのか知らない。聞いても教えてもらえるか微妙だし、聞いたからって何か出来る訳でもない。

そして問題が解決したら、眼前のこいつはきつと学園から居なくなっている。『シャルル・ルクレール』なんて人間は本来存在しないから。

だから、もしかしなくとも。

こいつと直に顔を突き合わせて話すのは、これで最後かもしれない。

「ありがとう。私、一夏と会えてよかった……本当に、ありがとう」

「俺は散々だったけどな」

「私、君のそういうところだけはやっぱり大っ嫌い！」

言葉にそぐわぬ笑顔で言い切って、シャルロットは部屋の中に引っ込んだ。

何か光ったけどきつとたぶんおそろく気のせい。部屋の中は見えないし、だから中に居るシャルロットがどんな顔で何してるかなんてわかんない。そーゆーことにしておく。

「お前の言うとおり。私を含め何人かは事態の異常さに気付いていたよ。『対策』もしていたんだがな、思った以上に動きが早く、異質だった」

代わるように今度は千冬さんが身を乗り出してくる。

一転して真面目な顔で真面目な話題。

「結局言い訳にしかないが。わかっているけど、わかっていたからこそ事前に止めなければいけなかった。今回の事は全面的にこちらの落ち度だよ。だから織斑、その——よくやった」

と思ったら、珍しい顔で珍しい言葉。

直後に話は終わりだと言わんばかりにぴしやりと窓が閉められたが。

うん。二人連続で言い逃げされたのが何か気に喰わない。俺ももうちよつと何か言——鍵かかっている！

自室に戻るのでもなく校舎に向かうのでもなく。人気のない夜道を進む。数分くらいあてもなく歩いてから、何もない場所で止まる。首を上に向けて見上げた空に雲は少なく、中途半端に欠けた月が視界に入った。

「よくは、やれてねえよ」

眩きが意図せず勝手に漏れた。視線を落として右手に向ける。ぐーに握って、ぱーに開く。何の支障もなく動く。そりや無事なんだから当たり前だ。

無人機の放ったビームは俺の身体を焼かなかったんだから。何故焼かなかったのかは、零落白夜が届いたからだ。

零落白夜が届いたのは、シャルロットの助力があったからだ。つまり。

俺一人だつたら——届かなかった。

あんだだけかつこつていて。

あんだだけ偉そうにのたまつて——結局俺一人じゃ勝てなかった。最後の一押し。あの時、確かに、あと一步は届いていなかった。届かないという確信があった。単純な事実として俺はあの時点で確かに敗北していた。傍らからエネルギーが流れてこなければ、零落白夜は消滅し、俺も白式もシャルロットもビームに飲み込まれて呆気無く、

ぶるりと震えた。

夜の寒さのせいではない。大体もう夜だからってそんな寒い季節でもない。

手を握る。更に握る。強く握る。ギリギリと音がした。それでも力を込め続けて。けれども何も変わらない。

俺が届かなかったという事実はもう、塗り変えられない。

「——くそがッ!!」

がしがしと頭をかきむしる。渦巻く感情を直接かき混ぜたいのに頭蓋が邪魔でしょうがない。仮に頭の中に指が届いても何の解決にもならないが、内側から溢れてくる衝動に突き動かされて止められない。

わかつてる、わかつてるんだ。

無敵とか全能とか万能とかなんて物語の中にしかありやしない。どう足掻いてもどうしようもない事なんざいくらでもあるし起こりうる。生きてりや絶対巡ってくる。

今までだって何度も何度もあった。文句を言っても悔しがっても時間の無駄で、それだけじゃ何の役にもたたないって体験して理解してる。

だけどそれでも悔しい物は悔しいし、納得なんか出来ないしたくも

ない。心がそう感じるのは間違いじゃないし当たり前なんだよ。それに感情自体は絶対に必要なんだ。でなければ、きつとその場でずつと立ち止まってしまおうから。

「……………だったら」

ぴたりと、止まる。頭の中で一つの疑問が顔を出す。思考がその一つに瞬く前に塗り替えられる。さっきまでの激情は消えず、消えていないからこそ、出てきた疑問に意識の総てが釘付けになっている。

“ だったら——どんな俺白式なら勝てたんだ？ ”

答えはない。他に誰もいないから当たり前だ。普段ならばシロが何かしらのリアクションを返してくれそうだが、復旧に専念しているのか音沙汰なし。

立ち尽くして考える。自分で思っているよりもずっと多くずっと速く頭の中が荒れ狂って駆け巡っている不思議な感覚があった。脳細胞が軋みを上げるほど回転して、ねじ切れそう。頭痛がする。視界が霞む。意識がぶつ切れになっている。それでも答えは見つからない。でも見つけようとする道程の途中で色んな物を拾い上げて噛みあうような組み上が、て——

「無様だな、織斑一夏」

聞きなれぬ誰かの声で、感覚が一気に戻ってきた。目は景色を映して、耳は音を拾う。今までそれらが切れていた事に戻ってきて初めて気付く。慌てて首を巡らせて声の主を探す。少しだけ離れた位置にそいつは居て、“ それら ” があった。

「貴様は、今までどこで何をしていた……ッ！」

“ 山頂 ” に陣取った少女の言葉には明確な敵意と怒りが滲み出ているどころか、感情が固まって言葉になっているようだ。

恐らく、三機分。その残骸。執拗なまでに徹底的に破壊された打鉄やラファールの残骸と思しき鉄屑。それらが折り重なって築かれた屍の山。

IS 学園内で騒ぎを起こすとして。最も厄介な人間が誰かといえは——間違いなく織斑千冬だろう。目的が何であれ、事が終わるまで



織斑千冬に出てきてもらっては困る筈だ。だから“こいつら”は寮にある彼女の自室へ向かってここまで来た。

相手が相手だからあの黒いラファールが目的を達するまでの、あくまで『足止め』程度だったのだろうけど。しかしそれでも彼女に害を及ぼす事には変わりはなく、億が一が起こらなかつたとも言いきれない。

結果的には足止めすら叶わなかつたようだが。

立ち塞がった、たった一人に敵わなかつたから。

「確信したぞ。貴様も有象無象の一つでしか無い、消えろ。貴様程度には教官の側に在る資格は無い」

すつと声から感情が消えた。鋭利なまでに冷たくなった声と態度で、少女が言葉が続ける。月の光に照らされた銀髪が揺れてきらめく一方で、片方だけの赤い瞳が俺を睨めつけて――

「私は貴様を――貴様の存在を認めない」

見下して、いる。

——母親に似ていると、子供の頃からよく言われていた。

思い出の中の母はいつも笑顔だった。苦しい時や辛い時もあった筈なのに、いつも笑っている人だった。幼い私にはそれが本心からの笑顔だったかは判別がつかなかったけれど。

『おかあさん、このひとだあれ？』

隠されるように仕舞い込まれていた一枚の写真を見つけたのは、本当に偶然だった。

当時の私は母の写真というものをほとんど見た事がなかった。私と一緒に撮った写真は当然あったが、それ以前——つまりは母の『これまで』を映した写真は全く見た事がなかった。

だから見つけた写真は幼い私の好奇心をくすぐるのには十二分だった。それでも映っていたのが母だけだったなら、満足するまで眺めた後に元の場所へと戻しておしまいだっただろう。だがその写真には見慣れない誰かも共に写っていて。私は好奇心に背中を押されるままに行動を起こし、母へ疑問を投げかけた。

“お母さんがね、昔好きだった人だよ”

当時の私はその時の母の気持ちをしるしく理解出来なかった。ただ何か私の知らない特別な感情を抱いている事だけは、臆気ながらに理解していたのだろう。いけない事をしてしまったのかと、不安げに佇む事しか出来なかった。そんな私に屈んで目線を合わせながら、母は優しく答えてくれた。

『いまはすぎじやないの？』

母の様子が——その笑顔がいつもと『違う』とわかっていった。わかっていったからこそ、きつとその時の私は好奇心を抑えらなかつたんだろう。

返答を待っていると、私を母に抱きしめられた。今思えば、あれは表情を取り繕えなくなつたから、顔を見られたくなかつたからの行動だったのだろうか。答えはもう、確かめようがないだけけれど。

“今も好きだよ”

母の体温を全身で感じながらも、返って来た答えに私は首を傾げた。

今も好きだよというのなら『昔好きだった』という言い方は食い違っているし、まぎらわしい。そこまできちんとは考えていなかったかもしれないけど、母の言葉に違和感を感じていたのは確かだった。

『どんな人だったの?』

返ってくる言葉が思わせぶりなものだったのは、母がはつきりと断言するのを避けたからだろう。でもそのせいで私の好奇心は一向に収まらず、逆に膨れ上がる一方で。

私は母にその人についてたくさんの事を問いかけた。母は私を抱きしめたまま、私は母に抱きしめられたままの、奇妙な問答はそれなりの時間続いた。

“でもね、優しい人だった”

とにかく思いついたこと全部を口にした私に、母は全部ちゃんと答えてくれた。語る口調に嬉しさはほぼ無くて、隠し切れない不満から来たであろう文句のような言葉も混じっていたし、ずっとどこか悲しそうに語っていた。

でも最後の締めくくりの言葉はとても優しかったのを、憶えている。

その人については言いたくない気持ちと同じくらい、私には話しておきたい気持ちがあったのかな、なんて。今ならそう思う。

——私が母と『父親』についての話をしたのは、その一度きりだ。

▽▽▽

視線の先では一夏が一枚の写真を眺めている。

写真に映っているのは、今よりも子供な私とまだ元気だった頃の母。こっそり一枚だけ持ってきたもの。

——あの時、お母さんはなんて言っていたんだっけ。

写真をくるくる回しながら——何の意味があるんだろう——眺める一夏に視線を向けながら、けれど意識は思い出した遠い日の事に向

いている。

随分と昔の話だし、当時の私はその会話がどれほど重要なものかを理解していなかった。なので一から十までを鮮明に憶えてはいない。たくさん話したのは憶えているけど、しっかりと憶えている事は数える程度だけ。

それに語ったのが母である以上、その内容はすべて母の主観によるものになる。だから本当に言った通りなのか、母の思い込みにすぎなかったのか。私にはわからない。

確かなのは、母は『そういう人』を好きになったという事くらい。「ふ、ふふっ」

突然笑い出したせいとか、一夏が怪訝そうな顔を向けている。慌てて笑みを引つ込めて、否定するように手をぱたぱたと揺らした。

「ああ、ごめんね。一夏を笑った訳じゃないんだ。ただね、全然」違う“など思つて”

「はあ？ 何だそりや」

あの時母が語った内容の、思い出せる限りの総てが。今日の前で怪訝な顔をした彼に、まるで当てはまらない。完全に方向性が違うのだ。

「しかし思った以上にそっくりなんだな、母さんと」

「昔からよく言われるよ、一回だけ姉妹に間違われた事もあるし」

「マジかよ」

「まじだよ」

一夏から返された写真を受け取る。

四角く切り取られた光景の中で、私もお母さんも笑っている。私が幸せだった頃。一番幸せだった頃——ではない。それは、これから先の私次第だから。

「でも。性格とか好みとかは、そんなに似てないみたい」

「ふーん？」

だって、母の語った『好きな人』と今日の前に居る君は全く別のタイプの人間みたいだから。少なくとも“そこ”は私とお母さんでは大きく決定的な違いがあるらしい。

「ああ、確かに母さんの方がお淑やかそうな感じに見えるもんな」  
「私君のそういうところは、絶対一生好きにならないから……！」

反射的に枕を振りかぶる。が、上げた腕は直ぐに下ろした。十二分に至近距離といえる距離だが、IS無しでは当てられる自信が無かった。銃器を持ち出せばやりようはあるんだけど、ここはアリーナではなく学生寮の一室だし。

「ところでさ。何で俺にその写真見せたんだよ」

「一夏に、見て欲しかったからかな。知って欲しかったの、私の家族のこと。大好きなお母さんのこと。それと……」

「それと？」

「ううん。なんでもない」

それはね。

お母さんにも一夏のことを見せたかったからだよ。

——これが、私の好きな人ですって。

▽▽▽

『ダメージレベル』

ISが現在どれだけの損傷を受けているのかを表す度合い。あくまで『機体』のダメージを元に算出される。ほとんどの機体が操縦者の『状態』を考慮しない。ほとんどのISが『人間』の部分を自身の一部と認識できないからだ。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▼▽

「……………」

長い昨日が終わって、今日へやって来た。

顔をはじめ身体全部にぶちあたって降る陽の光が、朝の到来を全力で告げている。

ベッドから身を起こして、伸び。バンソーコーだらけの身体は小さな痛みこそ訴えてくるが、それだけ。大きな異常は無い。たぶん。

半分寝てるようにしか見えないあの保険医さんの処置が適切だったのか、元々大した怪我じゃなかったのか。どっちでもあつてほしい。

「……………もつと」

傍らの時計は間違いなく早朝といえる時間帯を表示している。普段ならまだ寝こけている時間だ。眠りが浅かった訳ではない。前日に寝すぎたのでもない。むしろ散々動き回ったのだから寝坊してもおかしくないくらいだ。じゃーなんでこんな早く目覚ましてるかってーと、直射日光が顔面に直撃してるからである。

寝る前にカーテンを閉め忘れたのではない。

そもそも閉めるも何もカーテンは昨日窓というか壁ごと吹き飛んでいるんだから。

「もつと全力でなます切りにしとくんだったあの野郎……………ツ！」

昨晚。自室に帰り着いた俺を待っていたのは、風通し全壊にり

フォームされた自室であった。膝から崩れ落ちた。何もかもが面倒になって、ヤケクソ気味に無事だったベッドに潜り込み——今に至る。

とはいえ後回しにしたところで現実が変わるわけもなく。目を覚ませば日光でその惨状っぷりがより鮮明になった室内がおはようございます。

さあて。

これからどうするか。

不幸中の幸いなのか、屋外直結された部屋でも問題なく熟睡できたらしい。頭の中はすっかりすこぶるニュートラル。低速ながらも順調に回転している。

そして浮かんだ候補の中から最も優先度が高く重要な“それ”を選択するのも、容易い。

「朝飯食いに行こう」

ちよつとだけひび割れた時計が表示しているのは、食堂が開く時間ジャスト。



「——っ！ お、おはよう一夏。どうしたんだ今日は、随分と早いな」

「おっはよーホーキちゃん」

食堂に向かう途中で箒とばったり出くわした。

剣道着で竹刀袋らしき包みを携えているので朝の自主練だろうか。ルームメイトだった期間しか知らないが、毎朝欠かさず出かけていたから箒の習慣なんだろう。なので早朝に出会う事に驚きはない。

「あれ、そんなの持ってたっけ？」

が、疑問があった。

箒が持っている包みに見覚えがない。俺が知るかぎり毎日同じ色、同じ作りの物だったはずなんだけど。買い替えたんだろーか。

「実家から送ってもらったこれが、昨日ようやく届いてな。これから居合いの習練だ」

竹刀や木刀を無くした——事はないだろうから、壊れたのだろう

か。妙に得意げな様子で、箒が包みをこちらに翳して包みの紐を解く。しゆるしゆると音を立てながら、包みがその中身を現した。

なんか日本刀が見えるんだけど。

いや。

いやいやいや。待って。ちよつと待って。模造刀——じゃないぞだって見た瞬間頭の奥の隅つこがちりつとしたものつまり、

「マジモンの真剣じゃねーか!？」

「名は<sup>あけよ</sup>緋宵。かの名匠・<sup>あかるきよう</sup>明動陽晩年の作だ」

「ごめん俺ブシドー語わかんない！ てか学園に真剣持ち込んでいいの!？」

「許可は取っているに決まっているだろう。何も問題はないぞ」

「降りるんだ、許可……………」

反射的に後ずさって距離をとった俺に対し、箒の方はご満悦そのもの。言い方といい顔といい、携えたその刀は相当の『業物』らしい。俺にはよく切れる以外の事はさっぱりわからんが。

「ああ。これでより一層習練に励む。字の通りに『心機一転』。気を引き締め直そうと思つてな……………最近、どうにも色々と後れを取っている気がしてならない」

刀を握りしめる手元がすぐくギリギリ鳴っている。わざわざ締め直すまでもなく、全然緩んでいるように見えない。むしろ日増しに張り詰めていつてる気すらするのだが。

いや上昇志向自体はいいことであるけど。悪いというつもりは欠片も無い。

ただ刃物を手にした状態で目を据わらせるのをやめてくれると嬉しい。ちよつと本当にやめて欲しい。嫌な想い出がフラッシュユバツクしそうだから。

「と、ところでだな一夏。私はさつきも言つたようにこれから習練なのだが…………その、よかつたらお前も一緒にどうだ？ せつかく早起きしたのだ、朝の空気の中で身体を動かすのも、わ、悪くないと思うのだが!!」

顔を紅潮させながら、恥ずかしさを勢いで押し通すように叫ぶ。精



一杯のアプローチと思しきそれは初々しく、素直に可愛らしいといえる。

だが携えた日本刀が総てをふっ飛ばしている。ぶった切っているって表現のが正しいかもしれん。状況と要素が混沌として頭がクラクラしてきた。

が、答え自体は決まっている。

「悪いけどパスで」

「な、なんだと!? たまには、少しくらい、いいじゃないか……せつかく二人きりになれるというのに」

顔を今度は激情で赤くして。箒は言葉をふくれっ面の中でもごもごと転がしている。

とはいえこつちにや付き合えない理由があるのだ。断ったのは帯刀した女子高生に困惑したからでは決して無い。もつと真面目かつ切実な事のため。

「いやぱつと見でわかりにくいと思うんだけどさ」

さつき箒と出くわして驚かなかった訳だが。それは短い間でも同室で過ごして向こうの習慣、習性を——箒が早朝に練習をする事を知っていたからである。

逆に箒も“今の俺”の習慣や習性がある程度知っているとどう事でもある。だからそれが俺にとつて重大な要件であると通じる筈だ。

「俺さ、今倒れそうなくらい飢えてるんだ……」

「引き止めて悪かった」



IS学園の朝食はバイキング形式となっている。

並べてある物の中から各々が好きに取っていいってゆー、アレ。

要は食べ放題である。

「あら、珍し——ひっ!?!」

朝飯食ってる俺を見たオルコットの第一声がこれだった。確かに自分でもこんな朝早く活動するのは珍しいが、だからって悲鳴はいくらなんでもあんまりじゃねーか。

「何ですのその量は!? あ、朝から……信じられませんか……!!」

俺の訴えに気付く余裕もないらしい。オルコットの視線は俺がテーブルの前に広げた朝食に釘付けられていた。確かに四人がけのテーブルの卓上をほぼ一人で占拠しているが、時間が早いこともあって食堂は混んでいない。特に問題はないはずである。

「ふあふあへってんふあからふおーふあふえーひゃん」

「食べるか喋るかどっちかにしてくださいまし!」

じゃあ食おう。

「本当にもう貴方という人はもう……!」

何やら憤慨しながらも、てきぱきと空になった食器類を積み重ねて退ける。そうしてオルコットは空いたスペースである対面の席に座った。

食事に同席するのが珍しい——というより同じ時間帯に食堂に居ることがあんまりない。特に朝食時は。根本的に活動する時間がズレてるんだろう。たぶん。

まあ時間帯被ってても、誘ったところで普段は断られる気がするが。

「それで、何事ですかこれは」

ちようど食事の切れ目に問いかけられる。わざわざ同席したのは、こちらの様子が普段と異なっていると判断されたからだだったか。

「え? 普段より多いは多いけど、このくらいなら十分普通なんだけど」

「なんてこと……!」

顔を手で覆ってものすごく絶望しているオルコットが居た。これもカルチャーショックの一種なのかね。とりあえず話は終わったらしいので食事再開——の前に。

「飲み物コーヒーなのな。勝手だけどオルコットは紅茶ってイメージあった」

「普段は紅茶ですわよ。今日は、その……眠気覚ましのために、あえてこちらに」

「何だそりゃ、夜更かしでもしたのかよ。俺の早起きよかお前みたい

なのが夜更かしする方が珍しいんじゃないか」

「ええ、まあ。昨日は、その、例外というか」

何やらバツが悪そうに、あとちよつと忌々しそうに。

一度コーヒーに口をつけて——顔しかめた、苦かったらしい——から、口を開く。

「ちよつとわたくしの部屋で鈴さんと反省会をしていて」

「まだやってたのかよお前ら!」

昼で終わらなかつたのは知ってるが、そこまで延長戦に突入してるとは思わなかつたぞ。吐き出すように言い終えて、オルコットはまだ熱いであろうコーヒーをぐいと飲み干す。ぶり返してきた苛立ちを流しこむように。

「つて事はさ、もしかしてかなり夜中まで起きてたのか。オルコットと鈴つて」

「そうなりますわね。不本意ながら。鈴さんが、先に! 眠つてしまつてお開きになりましたが」

「ならもうちよい寝とけばよかつたじゃん。まだ早起きつて呼べる時間だぞ」

「……………突然頭に齧り付かれたら嫌でも目が覚めますわよ」

「ああ、鈴か」

イントネーション的に終盤はどつちが先に寝るかの意地の張り合いになつていたのではなかるーか。あとさりげなくオルコットの呼び方が『凰鈴音』から『鈴さん』に変わっている。決着は付かなかつたが打ち解けはしたらしい。

それは、それでいい。  
ただ、

「ふーん?」

夜中まで二人共起きていた。

つまり昨夜の『鬼ごっこ』の間、ずっと二人は起きていた。言い争いをしていただけだから、寝ぼけていた訳ではない。夜中の時点では二人共全力で意識を保っていた事になる。

それなのに。

あの騒ぎに気付かなかった、と。

「織斑一夏。何かありましたか？ 昨夜に」

一秒もない間だったのに。何かしら感じ取ったのか、オルコットがすっと目を細めた。寝不足というのは本当なのだろうけど、眠気の欠片どころか一切の不調を感じさせない蒼い瞳が、俺を見ている。

「いんやー何も？ ただ、それだけ夜更かしたせいなのかなって。お前の頭の――」

「あら、寝癖なんてありませんわよ？ 少々寝不足だからといって身だしなみに手を抜くセシリア・オルコットではありませんわ」

「ヘアバンドが裏表逆なんだけど」  
「はうっ!？」

髪は言うとおおり、気にかけてばっちりセットして出てきたんだろう。だがヘアバンドまでは完全には気にしていなかったか。寝不足の部分に期待して賭けてみたが、当たり。

慌てるあまり一度外すという発想を取り落としたのか、ヘアバンドを頭に付けたまま確認しようとして四苦八苦している。

そんなオルコットが騙されたと気付いて、こつちを睨みつけるまで一分もかからないだろう。だがさっきの話題はこれで流せる。

話題は、流せる。

けれどもその後には沸き上がるであろう、怒りは。

「――夏さん？ 少々お話があります、よろしいですわね？」

どうしよう……!？」



額がものすげー痛い。

さすがに食堂内ではレーザーライフルもハンドガンも出てこなかったが、代わりに全力のデコピンを叩きこまれた。

どういう指の力してるんだあのオルコットは。ぶっ叩かれたのと同じかそれ以上の鈍痛を俺の額が未だに訴えている。小石くらいな

ら割れるんじやなかるーか。あれを『デコピン』なんて軽い響きの単語に分類していいのだろうか。

「いちかー、おふあよぶー」

「おは……………よう……………」

向こうから——おそろくたぶん鈴と思しき人物が歩いてきた。

いや姿形は俺の知っている鈴とおおよそ一致している。だがいつも勝ち気全開でぼつちり開いたつり目は、全く開いていなくてほぼ横線。頭のツインテールは左右で極端に長さが違って冗談以外の何物でもない。

小さい口で欠伸をしながら、目をぐしぐしとこすって。挙句の果てにちよつとゆらゆら揺れていた。自身の寝不足さを全方位に訴えながら、ふらふらとこつちに歩いてきて。

「あんたがこんな時間にうろついているの珍しいわねー」

廊下の隅に備え付けられた消火器と会話しだした。

こいつまだ寝てるんじやねえのか。

「んー……………あんた縮んだ？」

「縮むわけねーだろ。それと俺はそんな全身真っ赤じゃねー、つとと」  
鈴の身体の揺れが一際大きくなって、すつ転ぶ手前まで傾いた。慌てて駆け寄って受け止め——おいこつちに預けるなもたれかかるな自分で立て。

「らくー……………」

「なんだこのふにゃふにゃした生き物」

つか今気付いた。

髪型が本当におかしい。これ不揃いなツインテールじゃない。髪の毛が三つある。変則すぎるトリプルテールになってやがる。

「お前これ髪型すげえ事になって……………鈴？」

「……………」

「おい。おいコラ鈴！ 寝んな!!」

「あによう、おきてるわよう……………」

がっしがっしと揺さぶると鈴が不満気に呻いた。でも寝言でも通じるくらいに消え入りそうな声量なんだけど。寝言じゃねーのこれ、

「……………おきてる、五分後には」

「それ今は寝てんじやねーか！ 起きろオ!!」

全力で揺さぶり続け怒鳴り続けて、数分後。

小さい口を目一杯開けて、一際大きなあくび。それから目を半分よりは多く開いた鈴が、ぱちくりと数度瞬き。

「あれ、おはよう一夏。こんな時間から起きてるの珍しーわね」

「おはようデジャヴー!」

「朝っぱらからなに怒ってんのよ。変な夢でも見たの?」

吐き捨てるように挨拶し返した俺に、鈴は心底不思議そうに小首を傾げていやがった。

「何でもねーよ、くそう。とにかく起きたんなら、その頭何とかしろ」

「頭って何……………うげっ」

直接触れたことで、自身の髪型の盛大な迷走っぷりに気付いたらしい。鈴は表情を盛大に引き攣らせ、唸り声を上げた。

「嘘でしょ、あたしこんな頭でここまで歩いてきたわけ…………?」

「滅茶苦茶でも身支度してここまで歩いてこれたって時点で逆にスゲーと思うわ」

呆然と眩きながら、鈴は髪を結んでいたリボンやらヘアゴムを一気に筆り取った。

普通に恥ずかしかったのか頬がちよつと赤い。すぐさま元通りに結び直すかと思えば、鈴はこちらをじつと見て、それから手元のヘアゴム群に視線を落とす。

それから、

「ん」

ヘアゴムをこちらに差し出してきた。

意図を掴めずにいると、鈴は更にこっちに手を伸ばす。何かを催促しているように。

「やって、髪」

差し出されたヘアゴムを見て、それから鈴の頭を見て。

そこでようやく俺の思考は鈴の要求の意味を飲み込んだ。

「俺そーゆーの得意じゃねえんだけど」

「いーじゃないのよ、それくらい」

不意をつくようにへアゴムがぽいと放られる。

顔を狙ったであろうそれを反射的に掴み取ってしまい、断るに断れなくなつた。狙いやがったなこの野郎。

「つたく、後で文句言うなよ」

「言わない言わない。それに部屋に戻ったら自分で結び直すから、多少雑でも気にしやしないわよ」

「それ俺が今結ぶ意味なくね？」

こちらの言葉など聞こえないと言わんばかりに。鈴はこちらに背を向ける。

やるしかあるまい。目の前にある髪をすくいとつた。憶えのある髪質で、手触りに目新しさなんかある訳もない。手の中の髪をきつかり均等に左右に分けて、作つた房にへアゴムを巻きつける。一回二回と、巻きつけて。

「ほらよ」

「うん、ありがと」

振り向いた鈴の頭の両側から垂れる髪の房の、長さが左右で揃っていることを確認する。

「あ、いやこれ微妙に結び目の位置が違……誤差つて事にしといてくれ」

「ぶきつちよー」

「うるせえ」

俺が鈴の毛先、正確には左右の下端の位置を眺めていると——鈴は俺自身を眺めていた。

見慣れた顔からは何時の間にか眠気が綺麗さっぱり消えていて。普段通りの勝ち気なツリ目が、俺の視線の先にある。

「昨日何があつたのよ」

「何かあつたことは確定なのかよ!？」

鈴は自分の右袖を少しまくり、手首のあたりを左手でとんとん。鈴自身の腕に何かあるのではなく、俺の右腕の事を指しているらしい。た。

「バンソーコー、見えてる。それに」

鈴の両手がこちらに伸びてくる。

小さい手にくつついた指が、俺の頬を左右とも軽くつまむ。

「顔がこわばってる。堅いのよ。すぐく、あんたらしくない」

怖いくらいに真つ直ぐで、だから嘘は間違いなく通じない。

下手に話題をそらしたら逆効果になるのは、目に見えてる。

さあて。

「俺のルームメイトが誰だったか思い出してみろよ。一晚同じ部屋に押し込まれりや、多少のいざござは起きるに決まってんだろ。それにもう大体かた付いてるよ。結構しんどかったけど、終わった話だ」

「……………ふーん」

うわすごいジト目。

納得してない、明らかに納得してない超不満そう。

「…………そーゆーことなら。アンタの問題だから、あたしが口出すことじゃないけどさー」

「ところで指離してくんね。超地味に喋りにくいんだけど」

「でもねー？」

鈴の顔がにこーと、満面の笑みに変わった。

同時に脳内で鳴り響く警鐘。俺が振りほどくよりも、鈴が既に捕まえてる指に力を込めるほうが早い頬が強制的に外側ア！

「なーんか『のけもの』にされてた気がするのよねえ……………！」

「あいだだだだだだ！ 落ちるほっぺが落ちる物理的に落ちる!!」

弾き飛ばす勢いで鈴の腕を振りほどいた。が、鈴からの抵抗はほとんどなく、俺の頬はあっさりと解放される。

「朝っぱらから辛気臭い顔見せたぶんよ、ばーかー！」

べえ、と舌を出した鈴が、すこぶる小憎たらしい顔で言い放った。



普段よりかなり早い時間に顔を出した職員室で、山田先生に声をかけた。

どう事情を説明したものかと事前に言い訳つつーか説明をあれこ



れ考えていたが、昨日あった騒動についてはもう教師間では伝わっていらしい。

だったら話が早いといくつか頼み事をしておく。これで今日は屋外に直結していない部屋で寝られる事になった。

それから後は、いつもと同じ。

昨日あれだけ大暴れしたというのに。拍子抜けするほどいつも通りだった。

何の問題もなく、滞り無く、予定通りに一日は過ぎていく。周りに居る大半の人間は昨日の騒ぎをそも知らないので当然だろうけど。

「さて、と」

体調不良を理由に欠席している金髪の方の転校生を、そのままにしておくつもりはない。

敵意が高まり過ぎて否定極まった拒絶にシフトしたらしい銀髪の方の転校生の方も、そのままにしていやるつもりはない。

周りの皆がいつも通りに日常を過ごしている中で、俺の前には山ほど山のような問題が山積みである。それらを越えるなり叩き潰すなりするのは決定事項である、が。

他の全部を後回しにして、なによりも一番初めに取り掛からなければいけない事がある。

他の全部と戦うために、まず始めにやっておかなければいけない事がある。

白式は出自不明のISである。

が、機体のメンテナンスは当初の予定通りに倉持技研が受け持っている。修理の要請を出した場合は技研からスタッフが送られてくる手筈になっている。俺はというとただ待っているだけである。

白式が俺の身体ではなく眼前にある。

IS用のハンガーに固定された機体は——無事な所を探す方が難しい。

装甲の大半は焼け焦げているか剥がれ落ちていて、名前の由来である『白』が著しく減少してしまっている。破裂したと思しき内部機構が機体の外へと飛び出している部分もあった。露出した内部フレー

ムは砕けて、捻れて、潰れて、元の形がわからない。万全なら虚空でさえ踏みしめられる脚は、一体いくつの部品が欠落したのか歪な形に成り下がっていて、機体の自重にすら耐えられるように見えない。

背部の大型スラスタなんて、言われなければこれがスラスタだったとわからないくらいに原型を留めていない。マシなもう片方だって無数の弾痕が刻まれているのは勿論、噴射口の周辺は溶けた飴細工みたいになっている。機体だけでなく武器も同様に損傷が著しい傍らに立てかけられた雪片式型は刀身だけでなく、柄も含めた総てにヒビが走っている。もう一度でも斬りつければ、間違いなく砕け散るだろう。

「……………シロ。お前直るん、だよな」

「はい。自己修復機能は正常に作動しています。完全な修復には時間を必要としますが、修復自体は問題なく継続中です」

「そっかー」

ダメージレベルがDに突入するほどに損傷した機体を、眺めて、待っているだけ。

IS 同士の戦闘ならば——あくまでも競技としての戦闘ならば、通常ここまででは損傷しない。基本的に攻撃を受けるのはエネルギーシールドだし、一定以上のダメージは絶対防御が発動する。それに本来は致命的な損傷に至る程のダメージに対しては、実体化を維持できない。

白式がここまで損傷した理由は二つ。

一つは得体のしれない妨害を受け、エネルギーシールドと絶対防御が機能不全に陥ったこと。もう一つは——限界以上に、実体化を維持し続けたから。

戦闘の継続を優先させるだけならば、必要部分以外の実体化まで維持する必要は無かった。けれども白式は機体総ての維持を最後まで止めなかった。

俺がバンソーコーだらけになる程度で済んだのは、そのおかげ。最後まで一片足りとも消えなかった装甲が、機体が、相手の攻撃を受け止め続けてくれたから。

「なあシロ。ちょっと聞きたいんだけどさ」

【はい】

「お前<sup>A I</sup>ってさ、褒められた方が嬉しいの？ それとも謝られた方がいいの？」

【……はい。質問の意図を測りかねています】

原因を辿れば、トラップに引っかけなかった俺の不甲斐なさな訳だ。何を言ってもやっても結局俺の自己満足ではあるが、それでも何もしいのは気が済まない。

けれども俺はA I相手の場合どういった対応が正しいのか知らないどころか推測すら出来ない。だったら目の前に本人(?)が居るのだから聞けばいいのである。

【……………】

意図を説明してから五分くらい経ったけど、もしかしてこいつフリーズしているのでは。

もしや俺は逆に嫌がらせみたいな真似をしてしまったのでは……？

【謝罪も感謝のどちらも必要ありません】

あまり深く考えなくていいと言うべきか迷っていたら、前触れ無く答えが返ってくる。驚いて椅子から転げ落ちそうになった俺に構わず、シロが続ける。

【私は操縦者の総てを『肯定』するために造られています。故に操縦者の『意向』が無ければ応えようがなく、何の意味も成し得ません。なので】

シロはそこで一度言葉を切った。A Iに息継ぎは必要ないのに。まるで続く言葉を強調したいように。

【私<sup>白式</sup>にとつて最も喜ばしいのは——「アテにされる」ことです】

解決していない問題が、今もまだいくつもある。それを全部越えても、終わりではないのだ。きっと次が幾度となくやってくる。そして起こる問題の、その大半が俺一人では解決できないけど。

「わかったよ。更に滅茶苦茶アテにする——最期まで、頼むぜ」

【はい】

相も変わらず抑揚のない平坦な音声。声と呼ぶには無機質すぎる。ただ、いつもよりほんの少しだけ誇らしげに響いて聞こえたのは、きつと気のせいじゃないだろう。

▽▽▽

『盗み聞き』

許しを得ず、第三者が他者の会話を聞くこと。

話している人物が聞いている第三者の存在を知覚していない事が前提となる。故に近付いた人間を即座に察知出来る感性を持つている相手に用いるにはあまり相応しくない。

そんな人類は稀にしか居ないが。

稀だが、居るが。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▼▽

「あ」

寮への帰り道、その途中で立ち止まる。そうだ俺の部屋吹っ飛んでんだった。今日どこで寝泊まりすればいいのか聞いてねえ。

職員室に引き返すにしても——現在位置は校舎と寮のちょうど中間辺り。校舎に戻れば確実だが、寮まで行って待ってても問題はなさそうである。もう少し早くか遅くに思い出したかった。どーしよーかね、

「答えてください教官！ 何故こんな所で教師など！」

傍らから、声。

姿は見えないのに声だけ聞こえてくる、ここう表すと若干ホラー。

実際は向こうの声がデカイから嫌でも聞こえてくるだけなんだけどもさ。とりあえず街路樹の脇に座り込んでおく。立ったままだと見つかるかもしれんし。

プライバシー？ こんな往来でデケー声で話してる方が悪い。

「何度も言わせるな、私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

会話をしているのだから最低二人。

どちらの声にも聞き覚えがある。てか片方は千冬さん。もう片方

は——何だろ。いや誰の声かはわかる。わかるんだが、違和感がすごい。そんな『叫び声』には聞き覚えがない。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を！　ここではあなたの能力は半分も生かされません！」

「ほう」

切実に、絞りだすように、真剣に訴えているのは——ラウラ・ボーデヴィツヒ。たぶん。声そのものは同じ、でも用いている感情が違いすぎる。俺と相對してる時はとにかく“冷たい”のに、さつきから聞こえてくる言葉には端から端まで熱が籠っている。

「大体……この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

『教官』呼びに、あの態度。

千冬さんがドイツで教鞭振り回してた事があって、その時の教え子がああ転校生。正確に合っていないかもしれないが、大きく間違ってもいないだろう。

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションかなにかと勘違いしている！　そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど……！」

どんだんヒートアップしていく転校生。

座ってるだけじゃ不安になってきた。念の為に伏せておこう。

「——そこまでにしておけ」

たった一言、けれど凄みのある声が不可視の重圧を生み出す。まるで“上”から“下”へ押し付けられていると錯覚するほどに、重い。続く言葉を体内に押し戻されて、ラウラ・ボーデヴィツヒが苦しげに息を吐く。

ざり。靴で地面を踏みしめる音。普段ならこんな大きな音はしない、させない。もつと静かに歩く。だからこれはきつと“わざと”鳴らしてる。聴かせるために。

「少し見ない間に随分と偉くなったな、十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「そんなつもりは……私は、ただ貴女の……！」

面と向かって話している転校生の動揺が伝わってくる。しかし逃げない。怯えてはいる。必死に反論を試みる。切実に訴えようと、

「話は終わりだ。寮に戻れ」

「う、くっ……！」

その総てを、ぼつさりと切り捨てられた。震えた声すら発することが出来ず、悔しそうな呻きだけが漏れていた。

ここまでで、一つ解ったことがある。

正確には解っていたつもり的事柄について、正しく認識したというか。

——あの転校生は『織斑千冬』を心底尊敬している。

『織斑千冬』を敬っている輩にも。

そこから派生して弟である『織斑一夏』に難癖つけてくる輩にも。

出くわすのは今回が初めてではない。っつーか割とよくあるあった。この手の絡まれ方にはぶっちゃけ慣れてる。

だけど、あの転校生はその“規模”が過去最高だ。

まず根本の『織斑千冬』に対する感情がこれまでのケースとは段違いに凄まじい。俺が思ってた以上に深く、真剣に、憧れ——いやもう崇拜の域かもな。

わかるのはそこまで。

何故そうなったのか、何があったのかは解らない。実際に直接教えを受けたからなんだろうか、それにしただって尋常じゃない。もっと特別な何かしらが、

考え事をしていたのだ。

だから転校生がその場から逃げるように駆け出した事に気付かなかった。駆け出した“方向”も全く気にしていなかった。いや頭の一部分では気付いていたかもだけど。即座に反応出来なかったのなら意味は無い。

要するにどうなったかってーと。

「ア、ア、オ!？」

思いつきり踏まれた。

体重を支えつつ進行方向への加速を得ようとしつかり振り下ろされた脚が俺の腰に突き立てられた。腰骨の隅々にまで響き渡る衝撃。上半身と下半身が分かれたかと思った。よかつたちやんと繋がってる。

一方、踏みつけた方はというと。

足場の急変よりも、さっきの問答で精神的な平静を崩していたのが原因だろう。完全にバランスを崩したらしく——アスファルトに顔面からダイブしていた。

むくりと顔を上げた転校生は、自身が何に躓いたのかを確認するためぐるりと振り返った。目が合った。さすがに少し涙目だった。

「貴ツ様ア、ア……………!!」  
うわ。

乱れた銀の髪をそのままに。

片方だけの赤い瞳を可能な限り釣り上げ。

ゆらりと立ち上がったその姿が幽鬼のよう。

次の瞬間にでも飛びかかって来てもおかしくない。いやここまでくると飛びかかって来ない方がおかしい。

「何をやっているんだ、お前達は」

ガッツリ張り詰める緊張感など知ったことではない。そう言いたげに割り込んできた声は、この場に居たもう一人。つまりは千冬さん。

「きよ、教官……、これは……………、ううっ……………」

擦りむいたらしく少し赤くなっていた転校生の顔面が更に真っ赤になっていく。単純に恥ずかしいんだろう。たぶん。なにせ尊敬してる『教官』の前でアスファルト顔面擦り披露した訳だから。

どうでもいいがこちらには盗み聞きがバレた事への驚きや焦りは全く無い。どうせ俺が居ることは承知の上だったんだろうし。何でって相手千冬さんだぜ、むしろこの距離で気付いてなかったら体調不良を疑うわ。

「なんか、すまん」

「黙れエツ！ この屈辱、絶対に忘れんぞ!!」



謝ったのに罵られた。

憤怒の絶叫は捨てセリフ代わりだったのか、転校生は今度こそ本当に走り去った。すげー速い。視線の先で揺れる銀の髪がみるみる小さくなっていく。

元々小柄なその背中が、何だか随分小さく見える。まるで子供の――年齢的には十分子供だったか。

「うーん」

「どうかしたのか、その盗み聞き男子」

「いや、あいつ若いなあって……」

「男子高校生の言葉とは思えんな……」

上から降ってくる声には多分に呆れが含まれている。さつきよりも声が近いのは、こっちに歩いてきたからか。

「気にしているか」

「絡まれたことに関しては全く気にしてないけど、野郎がああも絡んでくるまでになった理由は聞きたくはある」

後ろ姿が見えなくなった頃合いに。隣といえる距離から発せられた言葉に即答する。ぐねりと首を傾けて隣に立っている人を見る。目が合わなかった。凄いそっぽ向いていた。聞かれたくないなら持ち出さなきゃいいのに。

「ま、無理に聞き出すほどじゃねーかなー。マジモンの『姉弟』だって互いに洗いざらい何でもかんでも話してる方が珍しいし。互いに話してない事、話したくない事の4つや5つあるくらい普通だと思いますよ、俺は」

「そう、か」

珍しく歯切れが悪い。

こっちとしては、気になるは気になるが実際は好奇心程度だ。

本当に重要な事ならちゃんと話してくれるんだろうし。

だから、俺が知っても今更どうしようもない事で、かつ彼女が言いたくない、辺りだろうか。たぶんだけど。

「そうそうそう。そんな事より千冬さん、ちょっと聞きたいんですけど俺の部屋って今度はどこになったんです？」

「……………学校では織斑先生だ」

本当に気にしていない事が伝わったかは知りようがないものの。声に占める呆れの割合を増やしながら、千冬さんは答えの代わりにポケットから鍵を一つ取り出した。

「山田君に頼まれていてな、渡し忘れたそうだ」

「ああ、何でこんな半端な位置で立ち話してるのかと思つたら……………あれ、普通の部屋つてことは今度は一人部屋なんですか？ それともまさかまた女子がルームメイトとか言い出すんじゃない」

「どちらも違う。自分は男子扱いのままだからな」

そこで千冬さんは一度言葉を切った。

続く言葉を何やら複雑な感情を伴って続けられる。

「ルームメイトは『シャルル・ルクレール』のままだ」



「本当にルクレール君のままだ……………」

「人の顔見た途端に嫌そうな声上げるのやめてくれるかな、織斑くん」  
レコードを更新する速度で駆け抜けて、新たな自室までやって来た。中に居たのは、言われた通り決まった通りに『シャルル・ルクレール』。

全力で開け放たれたドアが元通りに閉まり、鍵がかかったのを確認して。ルクレールはふう、と息を吐いた。気のせいかな、雰囲気もさつきより柔らかく見える。

「本当に続けんのな、男装」

「……………退学手続きが終わるまでだけどね」

千冬さんが言うには。

『シャルル・ルクレール』は退学で決定。ただしその準備が終わるまでは、このままシャルロットに『シャルル』を続けさせる——そういう事になったらしい。

要は最後まで『シャルル』として扱う訳だ。『シャルルをやったシャルロット』はこのまま隠し通して居なかった事にする、と。

「手続きにそんな長くかかるってのが、イマイチわかんねーんだけどなー」

「これでも一度正式に『入学』してるから。それに今回の事はまだ判つてないことも多いから、報告待ちだって言われてる」

「報告？」

「たまたまフランスに生徒会長が〃出張〃に行ってるからついでに調べさせるって、織斑先生が」

「この生徒会長は出張とかあんのかよ、サラリーマンじゃあるまいし……」

ちげえ、そこじゃない。

このタイミングでフランスって、明らかに事前に察知してるじゃねーか。だつたら意図的に入学させた訳で、つまり何かしらの思惑はあつたんだろうけど——止めだ。推測するにも情報が足りない。何より俺の頭が致命的に足りない。

「で、どうすんだよお前は？」

「だから手続きが終わるまでは——」

「違う。それが終わった後に、シャルロットお前はどうするんだって話」  
予想外だったのか、俺の言葉に目をぱちくりと瞬かせる。

少しの逡巡の後に、震えた声が吐き出された。

「わからない、まだ何も決められないんだ」

小さな声とともに伏せた顔は、しかし直ぐにがばつと上向く。

表情には迷いはあるが、弱さはなかった。

「だから——私がどうしたいのか、何をしたいのか、ちゃんと考えてみるよ」

「いいんじゃないの、それで」

きつと選択肢は多くないし、どれを選んでも楽ではない。けれども自分で決めなければいけない。それが最低限度だ。

ただ途中で不特定多数にバレてしまえば、それも怪しくなる。『シャルル』と『シャルロット』を別人として扱ってゴリ押すつー事は。

まずは〃そこ〃を最後まで隠し通さなきゃいけない。そこが崩れた後まで学園が気を利かせてくれるってのは、ちよつと楽観的すぎ

る。

俺と違って、こいつはまだまだ先があるってのに——なくなってしまう。

だったら、出来る事を出来るだけはやらなきゃなあ。

じゃなきゃ『俺』じゃねえものなあ。

「それでね、あのね……シャルルの時は『織斑くん』って呼ぶけど、その……私の時は『一夏』って呼んでいい？」

「面倒くせえな統一しろよ。っつーかお前もう既にその呼び方してねーか」

「く、区別付けたいの！ あの、それでね私のことは——」

俺はこいつをシャルルとは呼びたくない。

俺はもうこいつの名前を知っているんだから。

けれどもシャルロットはここには居ない人間の名前だ。

「じゃあ俺はシャルって呼ぶな」

一言で、面白いくらいに瞬間的に真っ赤になった。

そんなに気に入ったのか。

▽▽▽

『学年別個人トーナメント』

文字の通りに学年別で行われるISのトーナメント戦。IS学園の全生徒が参加するため、一週間かけて行われる。

一年は浅い訓練段階での先天的才能評価、二年は学園での訓練を経た成長能力評価、三年はより具体的な実戦能力評価を目的としている。観戦には各国政府関係者、研究所員、企業エージェント等が観戦に訪れ、生徒にとっては自身の能力のアップルの機会とされている——らしい。

唯一間近で観戦する機会が最も忙しい時期だったので、名前と概要くらいしか憶えていない。

——とある人物の手記より抜粋。

▽▽▽

「はえー」

空中に投影されたウィンドウを見つめる山田真耶が何とも間の抜けた声を上げた。

傍らの織斑千冬は特に表情を変えること無く、表示された内容に目を通している。二人の視線の先にはIS学園のモデルが映し出されている。精巧なそれは学園の姿をそっくりそのまま表しているが、一つだけ違う点がある。

モデルの学園は『覆われている』のだ。

その総てが半透明の——正確に言うならば『遮断シールド』で包まれている。やっている事自体は学園内にあるアリーナと同様。けれども範囲が段違いに大規模であり、必要な設備もまた大規模なものになる。それでも設置と稼働が許可されたのは、先日の無人機による学園への襲撃があったからだろう。

「本当に学園まるごとシールドで覆えちゃうんですね。これなら——

「前回使われた無人機の武装では破られはしない程度の防御力はあるが」

声を弾ませる真耶だが、返す千冬の言葉は堅かった。

この学園はISによる襲撃は想定されているし、対策も存在している。だがそれは“ISのコアは貴重であり、総数が少ない”という前提の下に想定された対策だ。『無人機』と『登録されていないコア』が確認された時点で、その前提は崩れている。

「広範囲に常に展開されているシールドの防御力はそこまで高くない。攻撃を感知した箇所にエネルギーを集中させ、その地点のみ必要な防御力を発揮する。だからアリーナよりも巨大なシールドを張り続ける事が出来る訳だが」

「……受ける攻撃の数が増えれば増えるほど全体の強度が下がる、という事ですね」

「ああ。それでも学園側の供給が追いつく限りは耐久出来るだろう。だが、次の襲撃に使われる機体が前回より“弱く、少ない”という保証は無い。それにシールドはあくまでも『盾』だ。侵入者を撃退するのは——」

開かれた別のウィンドウにはISが映っている。打鉄とラファール・リヴァイヴ。一般的な量産型のIS。学園でも訓練機として馴染まれている機体。

だがそこに映る機体はその形状を大幅に変えている。増設された装甲や、接続された大型のユニットによって、兵器という概念を強く連想させる姿へと。この二機は迎撃に使用する戦闘用のセツティングを検討している真つ最中だった。

決定された仕様に改修を施される機体の数はまだ決まっていない。何せ、この学園のISは本来“教材”である。訓練用の機体を減らしすぎて、教育の部分が疎かになれば本末転倒。戦闘用の機体を増やしすぎれば外野から余計な口出し手出しを受けかねない。かといって生徒に危害が及ぶ事態は避けなければならない——塩梅が難しい問題であるが、それは学園の上層部が決める事だ。

「機体は次のトーナメントまでには形になっているだろう。となると誰が乗るかも問題になってくる訳だな。機会があれば私は山田君を推薦したいところだが」

「ええ!? わ、わわ私ですかっ!?!」

千冬にしては珍しく、冗談じみた軽い口調ではあるものの、本気だ。実際に千冬が意見を求められれば言った通りにするだろうし、求められずとも意見を送るつもりだ。

「あわあわわわわ……!」

一体どういう光景を思い描いているのかは見当もつかないが、当の本人は真つ青な顔で今にも泡を吹きそうな程動揺していた。

「で、でも。頑張ります。生徒たちに、怖い思いをさせるわけにはいきませんからね……!」

確かに精神面に懸念事項はあるものの、意を決してそう言い切れる山田真耶という後輩を織斑千冬は信頼しているのだ。

「全く、今からそんなに固くなっては保たないぞ」「ほへえ」

肩を軽く叩くと、ガチガチに固まっていた真耶はそれを切っ掛けとして緊張を逃がすように息を吐いて、ぐんにやり。吐息と共に魂までも抜けたかのようだ。

そんな真耶は一旦置いておいて。

千冬は表示されたウインドウに視線を戻す。映るのは、全周遮断シールド、迎撃用のIS、射出用のカタパルトと、その総てが襲撃への対抗策として現在作業中の設備である。

作業を行っているのは当然学園のスタッフ——だけではなかった。

その中には外部の人間である事を示すIDカードをぶら下げた人間が混じっている。更には制服姿の、つまりは生徒も僅かながら混じっている。

行われているのは学園の防衛設備に関する作業だ。そこに外部の人間を関わらせる事に対しての反対意見はあった。

けれども学園の上層部が参加を認めているのだ。多少の反対で覆る訳もない。それに人手が足りなかったのも事実。学園のスタッフ

だけでは学年別トーナメントまでに間に合わせるのは不可能だっただろう。

ふいに来客を告げるアラームが鳴る。

「あの、すいません。織斑先生が、ここに居るって、聞いて」

ドアが開き、遠慮がちな声。

部屋に入ってきたのは生徒、故に女子。顔には長方形のレンズの嵌ったメガネをかけている。その奥の瞳には確かに光が灯っているのに、どこか虚ろに見えなくもない。そのせいか全体的な雰囲気陰りがある。

作業監督的な二人の居る部屋にやってくるのだから、彼女も作業への参加を許された一握りの生徒の内の一入である。学園と関係のある家の生まれで、かつ学園と協力関係にある技研の開発にも参加しているのだから、今回駆りだされるのも当然といえた。

「……………」

「どうかしたんですか？」

差し出された書類に目を通して最中で、千冬は僅かに顔を歪めた。その様子をみた真耶が、横から顔を出して書類を覗きこむ。書類は追加の人員についてのもの。

書類自体に不備はない、所属している『倉持技研』に問題がある訳でもない。では何が問題なのかというところ。

「え、随分若……ええ!？」

「どうして、こいつが？」

「織斑先生のお知り合いなんですか？」

「いや私はあまり知らん。〃名前<sup>家</sup>は知っているが――」

二人の困惑は違うようで、共通している。

要するに二人共、書かれている人間が『技術者』として学園に呼ばれた理由がわからないのだ。何かしらこの分野において功績を残していないければ、〃高校生〃がIS学園の設備の改修に呼び出される筈がないのだから。

「その人」

佇んでいた生徒が口を開いた。二人が何に対して困惑しているの



かを察したのか、続く言葉は二人の疑問を解決出来るものだった。  
「最初の『打鉄』を作った人です」

▽▽▽

セシリア・オルコットは頭を抱えていた。

物理的に抱えている訳ではない。要するに悩んでいるのだ。

IS学園では今月末に『学年別個人トーナメント』が開催される。名称からも判るとおりに、各学年が全員参加してのISによるトーナメント戦。その結果として、現時点において学年で誰が最も優れているのが決定される。

ならばセシリア・オルコットには優勝以外にありえない。

目指す、とか頑張る、とかいった生半可な表現は不要。優勝”する”という断固とした意志がある——あるのだが。

——『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』  
今、こんな噂が出回っている。

学年別トーナメントについて何か噂が流れていたのは知っていた。いたのだが、いざその内容を聞いた時にセシリアは愕然とした。

そんな噂が流れている中で優勝をもぎ取ってしまえば、『織斑一夏が欲しい』という意味表示になってしまふのではないか。それは、困る。困るのだ。確かにセシリア・オルコットは織斑一夏に執着しているが、ソレはあくまでも倒すべき好敵手に対するソレであって、そういった男女間のソレではないのだないはずである。だからそう思われるのはなんとも受け入れがたい、けれどもだからといってISでの競い合いにおいて優勝を逃すなど『セシリア・オルコット』にはあつてはならない訳で。

ほんの少し、本当に僅かながら悩んだ後に。セシリアは噂を気にせず当初の予定通り優勝する事にした。

なにせあくまで”噂”であって、真偽は定かではない。

それにセシリアの知っている『織斑一夏』がそんな”景品扱い”を我慢できるとは思えない。勝手に無茶苦茶な取り決めに黙って応じる様な輩なら、そもそもセシリアはあの男を『敵』として認定してい

ない。

もし本当にそのような事になっているのなら、今頃乱闘騒ぎの一つでも起こしていなければおかしい。だから噂はデタラメ——そう判断した。していた。

織斑一夏の様子がおかしい。

何か、何かある。根がすこぶる単純だからか、あの男は顔に出るのだ。加えて保健室に出入りする姿が目撃されている。騒ぎになっていないから気付かなかっただけで、まさか“乱闘は既に行われていた”のではないか。

——とすると、噂は本当だった……？

一度は撃ち抜いた筈の葛藤が、セシリアの胸中に舞い戻る。無論これもただの推測であって、全く別のことが原因という可能性もある。けれどもデタラメだとも言い切れなくなってしまうって、

「ああ」

時間は放課後。第三アリーナ。出会った相手とセシリアが間の抜けた声を上げるのは、全く同時。出くわした相手は凰鈴音。セシリア、ここで閃く。噂の真偽を確かめるにはこれ以上ない人物である。

織斑一夏本人に直接聞いた方が確実？ それは真偽を酷く意識していると思われかねないので考えるまでもなく却下。

「ああ、それ？ 違う違う、あたしと筈と一夏とで『負けたら奢る』って賭けてんのよ。それに尾ひれがついたんじゃないの？」

「ええまあそんな事だと思っていました。思っていましたとも」

思った通りにデタラメだった。くだらなさすぎて、脱力を覚える程に。

食事を奢るという約束がどこで実際に変化したのか甚だ疑問であるが、知りたいとも思わない。とにかく重要なのは、これ以上くだらない問題に思考を割く必要が消えたという事だろう。

懸念事項は件の噂だけでなかったのだから。

不自然な時期にやってきた転校生。

経歴に不自然さのあるもう一人の『男性操縦者』。

そして月末のトーナメント、ISの試合——前回の試合には、無人

機が現れた。

転校生と無人機が繋がっている可能性は無い、とまでは言い切れない。転校生の片方は軍事関係者で、もう一人は大企業の関係者。怪しむには十分だ。

「あつれえー？ オルコットさーん？ もしかして噂がデタラメで残念だったのー？」

にやあ……なんて音が聞こえそうな心底人を苛つかせる笑みに似たおぞましい表情を顔面で形作った凰鈴音とかいう人物が目の前に居る。何故か突き出された両人差し指がくるくる回っているのが更に不快感を煽る。

「まさか。大人しく景品に成り下がる程度の男なんて、こっちから願い下げですわ」

「ホントー？ あたしには残念そーに見えたわよー？」

けれどもセシリア・オルコットはその程度では動じない。

澄ました顔で、さらりと言葉を返した。

「ところで鈴さん。ちょうどいい機会ですし、今ここでどちらが上かはつきりさせておきませんか？ 本来ならどちらがより強くより優雅であるかなんて、わざわざ比べるまでもないのですけれど……」  
「貴女のような人」にもわかるよう、きちんと“差”を明確にしておく必要があると思うのですけれど」

冷たい瞳が獲物を射抜く。

セシリアは、怒っている訳ではないのだ。全然全く怒っていないのだ。

ただ、本気であるだけで。

「上等オ!!」

既に二人共機体の展開を終えている。後は握った武装を相手に向け、叩きつけるだけ。

開始の合図よりも早く。

どちらが動き出すよりも早く。

超音速の弾丸が、二人目掛けて飛来した。

「無粋な真似を……!」

「何だつてのよ!？」

緊急回避。悪態と共に、二人はほぼ同時に飛び退いた。アリーナの地面が轟音と共に大きく抉られる。破壊の原因たる砲弾が放たれた方向へ敵意を含んだ視線を飛ばす。

そこに佇んでいるのは漆黒。

黒を基調としたISが、右肩から突き出たレールカノンをこちらに向けている。ブルー・ティアーズが即座に相手のデータを表示する。機体名称は『シユヴァルツエア・レーゲン』。ドイツの第三世代型。登録操縦者は——ラウラ・ボーデヴィツヒ。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か……ふむ？

データで見た時には、もう少しは脅威に思えたのだがな」

黒いISの主は、セシリアと鈴を見下ろしながらつまらなそうに吐き捨てる。挑発的な物言い、見下した目つき——心の底から沸き上がる不快感をセシリアは理性で押しとどめる。

許す訳でも、見過ごす訳でもない。ただ単にあの敵を確実に叩き潰すためには、冷静さが必要だと判断したから。

「あゝあん!？」

「……鈴さん、その顔はちよつと婦女子にあるまじきものですから、控えなさいな。気持ちはわかりますが」

「二人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

向こうでラウラ・ボーデヴィツヒが何か言っているようだが、二人の耳には届かない。乱入者を排除することは二人にとつて決定事項である。ならばこれ以上の挑発に意味は無く、わざわざ聞いてやる必要は無いのだ。

「ちよつと殴つてくるわ。セシリア、待つてて」

「お待ちなさい。誰が何時譲ると言いましたか」

「じゃんけんでもいい?」

「構いませんわよ」

ちなみに二人同時に組んで戦うという選択肢は存在しない。先日

の反省会において、現時点でのセシリアと鈴においては『連携しないことが最大の連携』という結論が出ている。

「二人がかりで来たらどうだ、一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメス共に、私が負けるものか」

理性と書かれた蓋をそーれつと天空高く放り上げて、セシリア・オルコットはサンプルに激怒した。あの銀色の狂犬はセシリアが鈴と織斑一夏を取り合っているという認識をしているらしい。いかなる手段を用いてもその誤りに誤った認識を正さねばならない。一分一秒一瞬でも早く成さねばならない。こうなったら鳳鈴音を押しつけてでも、

「おい」

すとん、と聞こえてきそうな気軽さで。

鳳鈴音の顔から表情という概念が抜け落ちた。

間が抜けたとも言える表情のまま、ラウラ・ボーデヴィツヒの方を向いている。

その様子を見ているだけで、セシリアの背筋を寒気が走り抜ける。体と心が、反射的にぶるりと震えた。猛烈な勢いで渦巻いていた筈の怒りが、傍らの少女が放つ威圧感への警戒と恐れで塗り潰される。

セシリアが認識する鳳鈴音の本質は——小さい背丈と幼さの残る顔で、明るい笑顔を振りまく少女だ。獰猛さから獣扱いをされるも、それはあくまで小動物の類。人間が本気を出せば手懐けられる程度。そう、思っていた。

それらの認識が、間違っていたことをたった今思い知っている。彼女が今進らせているのは『敵意』程度では、到底収まらない。

「——お前、今何て言った？」

静かな、静かな言葉が、まるで唸り声のよう。

同い年の少女に、剥き出された牙を幻視した。

返答は無かった。

待つつもりも無かった。

赤くもあり黒くもある——甲龍と呼ばれるISが“敵”を指して飛び出す。轟音は全く同時。大口径のレールカノンと思しき武装から巨大な弾丸が放たれる。甲龍の出鼻を挫くには最適なタイミング。その僅かな一瞬を正確に狙い打たれた砲撃。

「吼えろ」

前進は止まらない。機動は一瞬僅かに小刻みに。

すり抜けるようにすれ違った弾丸が、後方へと流れ去る。挑発だと解った上で飛び出した。思惑通りに動いてやったのだ。迎撃なんぞ承知の上。来るとわかっているのならば、避けられないはずもない。

「碎け」

最初の一発目の威力から、連射に不向きな武装である事は把握している。更に加速をかけて、前へ——遠距離から中距離へ突入。甲龍が最も猛威を奮う近距離まではもう一息かかる。

それは許さないと云わんばかりに、黒い機体から小型のパーツが猛烈な勢いで分離した。

鋭く尖った小型のブレードが、背部の非固定浮遊部位から四つ。腰部の装甲から二つ。合計で六つ。

ブルー・ティアーズのビット——とは違う。飛翔するブレードは完全に独立せず、ワイヤーで本体と接続されたままだ。幾つものブレードがまるで生き物のようにワイヤーを蠢かせている。

掻い潜るのが容易でない事は見なくても判る。

近づけば近付く程に、危険なのだど肌で感じられる。

「甲龍ッ!!」

けれども躊躇は欠片もなく、当たり前のように。

更に、前へ。

▽▽▽

——何故だかわからないが、

「織斑くんはいつも放課後にI Sの特訓しているって聞いたんだけど」

「してるけど、それが？」

「僕も加わっていいかな？ 専用機もあるし、教えられる事もあると思うんだ……例えば機動とか、機動とか——それと機動とか」

「……お前地味に振り回したこと根に持ってんな」

「ふふふ。何のことかわからないよ織斑くん」

「ははは。目が怖いよルクレールくん」

——何だか仲良くなっていないか？

箒の視線の先で廊下を進む織斑一夏と転校生であるシャルル・ルクレールが笑顔で……笑顔？ とにかく会話している。

シャルルが転校してきた初日は、敵対とまではいかずともあまり友好的ではなかったと記憶しているのだが。しかし今日はやり取りこそ剣呑としているものの、雰囲気が悪くないよう感じる。ここ数日で何かあったとしか思えないが、それが何なのか見当もつかない。

「あー、でも当分やめとくかなー……」

「どうかしたの？」

「ほら、白式結構ダメージもらっただろ。もう少しは修復に専念させたいんだよ」

「あ……そっか、ごめんね」

何やら顔を寄せあって、小声で話している。思った以上に友好的な関係に変わっている事に驚きを感じる。とはいえ唯一の同類男性と打ち解けられたのなら悪い事ではないだろう。

あれで相手が鈴ならば箒の心は警戒一色間違いなしだが、シャルルは男性だ。ああやってくつついていても、箒が心配することは起こりえない。

「でも安心して織斑くん。座学でも機動は教えられるから」

「お前やっぱ根に持ってんじゃねーか！」

起こりえない、はず。

はずである。

だというのに。何故か。本当に何故か判らないのだが。

「あの二人が話していると、妙な焦りを覚えるのは何故だ………？」  
このまま黙っているのはよろしくない——何かに突き動かされるように、箒は少し先を歩く二人に追いつこうと歩を早める。もう少しで追いつこうというところで、シャルルが周囲を見回しながら呟いた。

「何だか騒がしいね、何かあったのかな？」

「誰か暴れてるんじゃないね」

「そんな織斑くんじゃないんだから……」

確かに、周囲が慌ただしい。二人の会話に意識を全力で傾けていたのでまるで気が付かなかった。廊下を走って——職員室の方向に駆けていく生徒の姿も見える。

何が起こっているのかは解らずとも、その場所は見当がついた。というより箒にしろ先を進む二人にしろ、騒ぎの中心地点へ近付いたからこそ騒ぎに気付いたという方が正しい。

直ぐ先に入り口の見える、第三アリーナ。

騒ぎはそこで起こっているらしかった。

▽▽▽

——あたしは今、怒っている。

ドイツからの転校生が織斑一夏を嫌っているのは知っている。何かしら揉めているのも知っている。何の因縁があるかまでは知らない。

さてきて。

あたしは友達としてどうするべきかである。

箒の時は、まず一夏の態度がおかしかったから首を突っ込む事に躊躇は無かった。でも今回は一夏の態度に不自然さはない。

ならそれは織斑一夏と転校生（銀）の問題である。だったらそこに凰鈴音が入る余地は無いというか、入っちゃいけないのではないか。一夏が自分一人で問題に向かうのなら、余計な手出し口出しはかえって邪魔である。



困ったら、ちゃんと相談してくれる。本当に必要なときは、真つ先に助けを求めてくれる。逆もまた、しかり。

それこそが鈴が望んでいる“対等”だと思う。

なので鳳鈴音は——蚊帳の外に不満がないわけではない——具体的な行動を起こしていなかった。の、で、あ、る、が。

——あたしは今、ものすごく怒っている。

挑発のネタにわざわざ織斑一夏を用いた事から察するに。これは織斑一夏と転校生（ジャガイモ）のいざこざの延長だ。

だが。理由はどうかあれあいつは、鳳鈴音にケンカを売った。既に鈴も“当事者”だ。鳳鈴音にとつて友達をバカにされる事は、鈴自身をバカにされる事とほぼイコールである。これで『頭が悪すぎる』とか『底意地が悪すぎる』とかちよつと領ける内容だったなら話は別だった。でも吐かれたのは根拠も何も無くただただ貶めるためだけに選ばれた悪意の塊。ほんの少しでも、ほんのちよつとだけでも“一夏がどういうヤツか”知っていれば、絶対に出てこない罵倒。

なので今の鈴にはラウラボー何とかつつージャガイモ野郎をしこたま殴る理由こそあれ、黙っている理由なんぞ一欠片もありやしねーのである。

——だから今、あたしは戦っている。

甲龍の両手に握られた巨大な刃。

二振りの青竜刀——双天牙月が火花を散らす。

敵のIS——シユヴァルツエア・レーゲンの放ったブレードが、甲龍へと殺到する。それを片っ端から双天牙月で叩き落とす。連結させていないのは破壊力よりも小回りを優先しているから。

右腕を振り抜く。刃と刃が衝突する。競り勝ったのは双天牙月。ワイヤーを大きくたわませながら、ブレードがあらぬ方向へと飛び去った。

振り抜いた腕を掻い潜るように、別のブレードが回りこんで来る。握っていた双天牙月の柄を、バトンのようにくるりと回す。青龍刀の刃がブレード部分ではなく繋がるワイヤーにぶちあたる。自在に動かすために何かしらのエネルギーで覆われているのか、切断はできな

い。けれどもワイヤーに与えられた力で先端の機動はぐによりと曲がり、甲龍から大きく逸れる。

一方左腕では握った双天牙月を突き出し、別のブレードを弾く。そのまま腕を横薙ぎに振るい、別のブレードを弾き飛ばす。両腕を振り回したまま、機体そのものを捻り、回転。上から迫っていたブレードを蹴り飛ばした。

ブースト。スラスタから吹き出した推力が機体を押し、やや強引に甲龍を移動させる。空中で宙返りするように姿勢制御。数瞬前まで甲龍の在った空間を、轟音と破壊力を伴った砲弾が通り抜けていく。その頃には、先に弾き飛ばしたブレードの総てが再び飛来している。

——鬱陶しくてキレそう。いやもうキレてるんだけど。

息つく暇も無い。一瞬、一手でも誤れば一気に畳み掛けられる。舌打ちや悪態なんて吐いていたら、即座に切り刻まれて撃ち抜かれかねない。

鳳鈴音は現在進行形で怒り狂っている。

けれども頭に血が上るだとか、我を忘れるとかいう表現とはまるで対極の精神状態にあった。淡々と猛攻を捌き切っているように見える。見えるだけで、実際しつかり怒り狂っている。なのに頭の芯の方は凍てつくほどに冷静だった。

両肩の位置で浮遊する甲龍の非固定浮遊部位は駆動音こそ発しているが、そこから不可視の弾丸が発射される兆候は無い。

空間に圧をかける一瞬すら暇が無い——訳ではないが。とにかく静かな駆動音を響かせながらも、沈黙している。

襲い来るブレードとの攻防はもう何度目か。一度の攻防の時間が短いため戦闘が始まってからさほど時間は過ぎていない。

焼き直しのように振るわれる双天牙月。だが弾かれるブレードの行き先が少しだけ異なる。甲龍を覆うように広く展開していたブレードが、“バラけていた”ブレードの位置が“固まった”。

「——ここだッ！」

そうなる時を、狙っていた。

叫びに応えるように、衝撃砲《龍咆》が一際大きな唸り声のような駆動音を放つ。左右で形状の異なるユニットから放たれるのは最大出力の一撃。このために、さつきまでずっと“チャージ”を続けていたのだ。

込められたエネルギーが反映されるのは威力ではなく、範囲。最大出力の衝撃波による面攻撃。一点集中に比べれば当然威力は落ちる。IS本体が相手ならば直撃してもさほどのダメージにはならない。

けれどもISから分離した“子機”ならば話は別だ。瞬間的に生じたのは不可視の弾丸どころか“壁”である。小型ブレード程度の質量が耐えられる筈もなく、総て一斉に吹き飛ぶ。

——空いた。

ブレードは完全に破壊できていない。一時的に退けただけ。ここまでは先程までと同じ。だが今度は総てのブレードを“同時”に跳ね除けている。

邪魔者は消え、甲龍と敵の間の空間がぽっかりと空いた。

総てのスラスタが推進力を可能な限り噴出し、加速。体勢を立て直してからでは遅い、だから加速しながら立て直す。機体が軋みを上げる。機体に包まれた身体も軋む。

それがどうした。

両肩位置の龍咆が後方へと衝撃波を放ち、更に加速。可能な限りの、全力最大加速。それらの動作は一瞬以下に行われる。妨害は起こりえない。

けれど、ブレードは飛来する。

衝撃波に吹き飛ばされる寸前に、他のブレードと折り重なることで衝撃を和らげた一つ。偶然ではなく、刹那の間に行われた“操作”によって生じた必然の伏兵。生じた筈の活路は塞がれ——ない。

難を逃れた筈の一つも、再度衝撃波に叩かれた事で今度こそ吹き飛んだ。《龍咆》に物理的な砲身は無く、射角制限は存在しない。いかなる体勢からでも、射程内ならば迎撃可能！

「ほう」

戦闘が始まって、相手が初めて声を出した。龍咆だから出来た迎撃

ではあるが、それには搭乗者である鈴が攻撃を察知できていたという前提が必要になる。

ただ吹き飛んだようにしか見えず。けれど精密操作されていた六つのブレード。鈴の視界がそれを捉えていたのかというと、答えは否である。

ブレードが甲龍へ“向けられた”瞬間に、鈴はそれを察知した。迎撃は同時、思考を挟まぬ反射による砲撃。

何をどう感じ取ったかは、鈴自身にも定かではない。ぶっちゃけ“何となく”である。

ただこれまでもその“何となく”は決して無視できない成果を上げている。故に信頼には足りうる。

「なるほど。並よりは上か」

相手の声は聞こえない。聞いていないから。今はまともな思考をする暇が惜しいのだ。大気を裂いて、甲龍が進む。

ブレードは退けた。

だがもう一つ障害がある。忘れた訳ではない。どうするかも——決めている。

大口径のレールカノンが発射された事を機体が告げる。

恐ろしいまでのエネルギーを秘めた破壊が甲龍目掛けて突き進む。鋭い金属音を伴って、甲龍の武装が変形する。左右一対だったユニットが全体的に右側に移動。ユニットが腕部と肩に位置する事で、腕部が膨れ上がったようなシルエットへ。

「ぶち、ぬ、けえええええ——ッ!!」

小細工なしの全力勝負。

真つ向勝負で、砲弾と拳衝撃砲が激突。爆音、爆炎、爆煙。アリーナにそ

れらが猛烈に広がっていく。それらを置き去るように突き破って、甲龍が爆発の中から飛び出した。当然のように健在で、その拳を突き出したまま——辿り着く。

中距離ミドルレンジから——近距離ショートレンジ!

「所詮は、そこどまりだな」

怒涛の勢いで襲い来る、正に名の通りに龍の如き一撃を。  
漆黒の機体を纏う銀色の少女が、嘲るような薄い笑みで出迎える。

▽▼▽

面子は俺とシャルとアリーナ手前で合流した筈。

三人並んで、観客席からアリーナの中を見下ろしている。

もしかしなくても俺って観客席入ったの初めてじゃねえのか。普段はピットからしか入らないし。じゃあなんで今日は違うかってその方が早かったから。

この後にいつもどおり訓練するならピットから入った方がいい。でも今日は元々アリーナに寄る予定が無かった訳で。寄ったのは何やら騒がしいので様子を見に來ただけ。だったら早く中の様子を見る観客席から入った方がいい。

んでその騒ぎが何だったかというのと。

端的にいうと模擬戦だ。

ただし代表候補生同士による専用機のぶつかり合いである。

それも練習、訓練という言葉が相応しくない程度には、剣呑な雰囲気。ぶつちやけると明らかに殺伐とした潰し合い。

戦っている二人には、見覚えがある。

片方は鈴で、もう片方は転校生——ラウラ・ボーデヴィツヒ。

「砲弾を殴った!? 無茶苦茶だよ!」

「だが懐に入ったぞ、これなら」

「いや、マズいかもな」

俺の眩きに反応して、横の二人がこちらを見たのだろうか。でも視線はアリーナの中央から、戦っている二人から外さない。

甲龍は中距離もできるが、接近戦型だ。格闘戦を主として調整され、また操る鈴も根っからの近接。その動きは滑らかで、かつ力強い。

一方の転校生の機体——シュヴァルツェア・レーゲンは右側に接続されたレールカノンや重厚な形状から察するに砲撃型だ。動きは決

して遅くはないが、どこか硬い。だからこそそれを補うために自在に動くワイヤーブレードを装備している。

「いやだって、あの転校生、千冬さんの教え子だぞ。〃刀一本で世界一になった人〃の教え子だぞ」

確かに、接近戦では甲龍が有利だ。

けどそれは機体特性だけ考えるなら、だ。

「近接で弱い訳ねーじゃん、むしろ——接近戦が一番強いんじゃないのか」

▽▽▽

猛然と自機へ迫り前進してくる甲龍に対し。

ラウラ・ボーデヴィツヒが取った行動もまた、前進。

両腕部の手甲のパーツが倍近い長さにスライドしながら〃刃〃を噴き出す。それは実体の刃ではなく超光熱のプラズマで形成されている。

凄まじい速度で迫ってくる拳へ、プラズマの手刀が突出される。正面衝突したならばひしゃげて砕けるのは、シュヴァルツェア・レーゲンの前腕だったであろう。しかし突き出された手刀は拳を〃掠めながら〃前進する。プラズマの刃を押し当てられた装甲から火花が悲鳴のように迸った。

振り上がっている、甲龍の左腕。握られた双天牙月の刃が——降ろせない。基部より回転したレールカノンが一步先に跳ね上がる。長大な砲身が振り下ろしに入る瞬間の双天牙月の柄を叩いて、押さえつける。

巨大な右拳が引き絞ら、

シュヴァルツェア・レーゲンの脚部が鈴の顎を蹴りあげた。止まらない。頭部を上流されたまま、甲龍が右拳を放つ。先端のユニットより放たれた衝撃波が直撃すれば、シュヴァルツェア・レーゲンの装甲でもただでは済むまい。

放つことは出来た。

甲龍の右腕は何時の間にか絡みついた何本ものワイヤーにより、先

端をあらぬ方向へと逸らされている。放たれた質量も衝撃波も、大気を震わせるだけだ。

シユヴァアルツェア・レーゲンの腕部が自機より放たれたワイヤーを数本束ねて掴み、振った。ワイヤーを辿って伝達される力は、束縛している巨大な右腕から甲龍へ。決して軽くはない甲龍の機体が宙を舞う。最中で強固に巻き付いていたのが嘘のようにワイヤーはすりと解け、甲龍を投げ出した。

放物線を描き始める間もなく、発射されたレールカノンの弾丸が甲龍に直撃。

爆音に混じって、装甲の破碎音。甲龍の機体が数度バウンドした後、地面に叩き付けられる。着地ではなく墜落。辛うじて衝撃波を迎撃に放っている。完全な直撃ではないが、相殺しきれてもいない。ダメージの大きさを破損したアーマーが示している。それでもまだ甲龍は動く。跳ね起きて、

眼前に、シユヴァアルツェア・レーゲン。

イグニッション・ブースト  
瞬時加速。黒い機体の非固定浮遊部位が、がばりと開いている。頭になった一際大きな噴出口から吐出された推力によって一瞬へで最高速度へ達し、吹き飛んだ甲龍へと既に追いついていたのだ。プラズマ手刀を展開した両腕がふらつく甲龍目掛けて繰り出される。とつさに翳そうとした両腕が、左右から回りこんで飛来したワイヤーに絡め取られて自由を失う。

がら空きの胴体に、プラズマの熱刃が振り下ろされた。起き上がった途端に再度地面に叩き付けられる。

目減りするシールドエネルギーを確認するまでもなく、両腕に絡まったままのワイヤーによって甲龍が引きずり上られた。待っていたのは回し蹴り。堅牢な機体の重量総てを転換した破壊力。身体と機体をくの字に曲げた甲龍が吹き飛ば——無い。絡みついた総てのワイヤーによって無理やり空中に縫い止められた。間髪入れず連撃。逆るプラズマの熱刃が連続して機体に叩きこまれ、装甲を削り取るように破壊していく。

内部機構を露出させながらも衝撃砲のチャージ。それが許される

訳もなく。再度甲龍は放り出され——今度こそ本当に、レールカノンの砲弾が“直撃”した。

「——まだ、だ」

既に衝撃砲の片方が失われ、無事な装甲は一枚もなく、生命線であるシールドエネルギーが尽きかけていながら。

それでも、甲龍は——凰鈴音は立ち上がる。

既に戦闘の続行が不可能だと誰もが言う。立つという一動作だけで、火花を散らせ、部品を零す。それでも機体を生身の身体で引っ張るように稼働させて、立ち上がる。

3分の2程のサイズになってしまったユニットを右腕に接続し、拳を再度形作る。それを真っ直ぐ構えて、走る、奔る、疾走る。

「ふん」

折れず潰えず燃え盛る闘志を目の前にして、ラウラ・ボーデヴィツヒは冷笑で返す。迫り来る拳に対し、ワイヤーブレードもレールカノンも沈黙している。ただシユヴァルツェア・レーゲンの右腕が、甲龍へと翳される。

“ 停まった ”

甲龍は、未だ生きている。凰鈴音も折れていない。故に決して止まらぬ筈の攻撃が、ぴたりとその動きを止めた。まるで映像の一時停止を現実に対応したかのような不自然さ。

「無駄だ。このシユヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

がごん、と緩やかな動きでレールカノンの砲身が基部から稼働する。眼前で“ 停まった ” ままの甲龍に、それを纏う凰鈴音に。もったいぶるように狙いをつけて。

「失せろ」

▽▼▽

「白式」

【はい】



▽▽▽

ラウラ・ボーデヴィツヒは、凰鈴音を見下ろしている。

うつ伏せに倒れた鈴の身体から、ISアーマーが光に解けて消えていく。機体の維持が不可能な程にエネルギーを消耗したからである。

破損極まった機体を失って地に伏せる凰鈴音に反し、ラウラ・ボーデヴィツヒとシュヴァルツエア・レーゲンには目立った傷は無いように見える程度の損傷。

「どうした、もう終わりか」

返答は無い。あるはずもないと思った上での投げかけでもあった。シュヴァルツエア・レーゲンの脚部を稼働させ、鈴の頭を踏みつける。無論本当にISで生身の人間を踏みつけたのならば潰れてしまう。実際には乗せている程度の力しかかかっていない。

だが相手を侮蔑するためにはそれだけでも十二分。愉悦に口元を歪めて、ラウラ・ボーデヴィツヒは眼下の敗者を嘲笑う。

「ふ、」

聞き間違いを疑った。完全に力尽き、気を失っているとばかり思っていた鈴の両腕がぐわっしと自分の頭の上の脚を驚掴み。

「ふんっぎいいいい……………!!」

「何!?!」

あろうことか、持ち上げた。

ISのパワーアシストも無く、かつ自身も満身創痍だというのに。完全に予想外の鈴の挙動に、ラウラ・ボーデヴィツヒははじめて真に困惑する。

脚部の装甲に阻まれて鈴の表情の全容は伺えない。僅かに見える瞳には、ギラつく光が宿っている。

「……………あんた、名前なんだっつけ?」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

獯猛以外に当てはまる言葉のない笑みに、ラウラ・ボーデヴィツヒは返答する。

最後の足掻き、意味のない問答だ。律儀に応える必要はない。だどいうのに、無視できなかつた。してはいけないと、感じ取った。

「覚えた。あんたをぶちのめすまで、その名ずっと忘れない」

言い終わると同時に、込められていた力が総て抜ける。今度こそ本当に気絶したのか、中途半端に起こされていた上体が崩れ落ちる。

支えを失ったシュヴァルツェア・レーゲンの脚部もまた重力に従い、転がる凰鈴音の頭に落ちる。

その最中に、がんと音が鳴って。

シュヴァルツェア・レーゲンの脚部が、不可視の力場に阻まれて停止した。

▽▼▽

「全く、お前ってやつは全く……！ 誰に似たんだ全くもうこの意地っ張り!!」

鈴を拾い上げて、背中に担いだ。元からだか、今はこの軽さがすこぶる心許ない。

大怪我じゃない。わかってる。落ち着け。大丈夫だ。甲龍が役目を果たしてたのを見てただろう。ドーセ保健室のベッドに転がして数時間寝かせれば治ったとか言い出す。

「ようやく出てきたと思えば、逃げるつもりか。ああ、そんな機体では戦えるはずもないから当然か」

今の白式は修復の真っ最中だ。最低限度の機能は使えるが、ほぼフレームが剥き出しである。組み立て中と言っても通じるくらいだ。

一方転校生の黒い機体は鈴を打ち倒してほぼ無傷——のように見える。

最後に転校生が何をしたか、詳しいことは知らん。ただあの瞬間——黒いISと甲龍の間に“何か”があった。

あの見えない何かは、恐らく何もかもを止める。だから最後の一撃。レールカノンが甲龍に着弾する瞬間に、その“何か”は消えていた筈だ。でなければ砲弾も届かない。

遠くから見ていた俺が気付くんだから、至近距離の鈴が気付かない訳がねえのである。

「お互い様だろ。次撃ったら“それ”吹っ飛ぶってのはわかってるん

「だよなあ？」

黒い機体に繋がれた、これまた黒い大砲。更に真つ黒な砲口の中を覗きこめば、その奥に破壊の後が見える。至近距離の砲撃で吹き飛ぶ瞬間に、装甲の破片が何かを突っ込んだか打ち込んだか。当然それは転校生も気付いていたのか、指摘に顔を不機嫌そうに歪める。

余裕ぶって相手を弄ぼうとするからだバーカ。

「機体を学年別トーナメントまでに直しておけ、織斑一夏。そこで潰してやる。言い逃れが出来ないように万全の貴様をだ」

▽▽▽

揺れている。

世界でなく、あたしが揺れている。

誰かの背に身体を預けている事に気付くまでに、あんまり時間は要らなかった。昔に何度か同じことがあったから。伝わる温度は昔と変わらないのに、けれども記憶よりもずっと大きい背中。あたしは小さいままなのに、ずるい。

「あんたのためじゃないもん」

だらりと下がっていた腕に力を込めて、首に回す。

「あたしが売られたケンカだもん」

腕に力を込める。

口が震えて上手く声が出ないのは、怪我してるからじゃない。

「だから、だから——！」

あんたが気にすることなんて無いの。戦ったのはあたしの意思で、負けたのはあたしのせい。だからこれにあんたは関係ない。間違っても責任とか感じないでいい。

言わなきゃいけない。伝えなきゃいけない。

「わかってるよ。わかってるから」

驚くほどに優しい声が、頭のなかに染みていく。

言わなくても伝わるのが嬉しい。同じくらいに、悔しい。結局あたしはボロ負けした事を認めたくないだけだ。だから言えない。そこもこいつは察してくれて、だからそう言ってくれて。ちゃんと見え

ない自分の弱さが狂おしいまでもどかしい。対等でありたいから強くなったはずなのに。あたしはまだ、こんなにも弱い。

「悔しく」

頭の中がぐちゃぐちゃで、感情の歯止めはとづくにぶっ壊れてしまっていて。言いたいことはまだたくさんあるのに。言葉にならないまま頭の中で暴れまわっている。

「くやしいよう……い！」

目から涙があふれていたのは、何時からだっただろう。最初からかもしれないし、たつた今かもしれない。とにかくあたしの意思に反して、涙が勝手に流れていく。あふれ続ける涙を止める術は今のあたしに無くて、子供みたいにむせび泣くだけ。

「いいんだよ、お前はそれで。悔しくて泣くのは何にも間違っちゃいない。お前のそういうバカ正直なところが、俺は大好きなんだから」

「うるさいわよ、このばかあ……い！」



場所はIS学園保健室。

第三アリーナの大乱闘から少し経った後。保健室には俺と鈴の二人だけ。保険の先生はさつき報告してくるとか言ってふらつと出て行った。

箒とはアリーナで別れている。騒ぎを聞きつけてすつ飛んできた教員に事情を説明する役を買って出てくれたから——つとメール送つところ。心配してたっぽいし。

相当広い空間に設置された幾つかのベッドの上の一つに、鈴は寝かされている。

打撲や擦り傷程度で済んだとはいえ、怪我は怪我。貼られた絆創膏や巻かれた包帯が、無事という状態からは程遠いのだと主張している。けれども痛々しいという言葉からも程遠かった。何故かって。

怪我した本人がこう『すかー!』とか聞こえてきそうな感じで——すこぶる健やかに超爆睡していやがるからである。

格好はどつからどー見ても怪我人なのに、それ以外は活力に満ちあふれてるんだけど。頬に残る僅かな跡が無ければ、このグースカ寝てるのがついさつきまでボロボロわんわん大泣きしてたつても誰も信じちゃくれないだろう。

あ、いや大丈夫だ。べつちやべちやになった俺の制服の背中見りや一発だわ。どうでもいいけど地味に超冷たい。着替えたい。

わかってた事だけだ。

こいつ全く“へこたれてない”。

だから鈴は『悔しい』と言った。それは折れたわけでも屈したわけでも無く、負けただけ。だったら俺の知ってる『嵐鈴音』が、このまま負けっぱなしで居る訳もない。

ならあとは鈴と転校生(銀)の問題だ。そこに俺が入る余地は無く、入っちゃいけない。余計な手出し口出しは無粋で邪魔だ。

もし一人で無理ならば、困ってどうしようもなくなったのなら。こいつはちゃんと助けてほしいと言ってくる。その対象が俺かどーかは——わからんけど。その時は一緒に考えて、一緒に戦う。考えるまでもなく当然だ。

“そう”は、ならないような気がしてるけどさ。

相手がアレだから間違いない困難だろうし、時間も相応にかかるだろう。けれどもきつとおそらく、鈴は自分でこの敗北を“越えて”いく。

見た目も中身もまだまだ子供なんだけど。

だから、成長する。し続けている。昔できなかった事が、何時までも出来ないままにいる訳じゃない。転んだ後に立ち上がれない時期はきつと、とつくの昔に過ぎている。

鈴の頭に手を伸ばした。いつもはツインテールに結ばれた髪型も、今は解かれている。寝相に伴って乱れた前髪が散らばる額に。伸ばした手が触れ——

“がぶり”

「あいつであいでででいってマジでいてえ”ア”ア”——!!」  
——る前に。

伸ばした指先に鈴が喰らいついた。断じて甘噛なんぞ生易しいモンではない。真正銘のマジ噛みだった。どのくらいマジかってマジ悲鳴が出るくらいマジ。

腕をバタつかせてもがくこと数十秒、俺の指先が解放された。寝息が聞こえてくるので、実は起きていたとかは無いらしい。つまりこの惨劇はただの寝癖の悪さの延長線上って事だ。うっかりしてた予測がつかない分起きてる時よりある意味危険なんだった!

「そーだな。昔を懐かしむ前に、“今”やらにやならん事があるわな……」

ただの偶然なんだろうけど、切っ掛けには十二分。

さあて。今日の前にそびえ立っている“壁”に向き直るとしよう。

『私は貴様を——貴様の存在を認めない』

散々一方的に敵意を叩きつけられ放題の言われたい放題、思うところはたんまりある。

相応以上に憤っている。殴りかかる理由しかなくて、我慢して黙っている理由は皆無だ。

もし俺が『織斑一夏』だったなら。

大手を振り上げて『うるせえ！』って怒鳴りながら殴りかけられる。だって『織斑一夏』は真正銘『織斑千冬』の弟だから。あいつが認めないから何だっつー話だよ。喚く前に過去に戻って家系図とか書き換えてくればいいんじゃないの。

けれども俺は織斑千冬の『弟』ではない。

そのフリをしている偽物だ。

あの野郎は、何も間違った事は言っていない。

『俺』と『織斑一夏』についての事情を知っている訳じゃない。だどいうのに野郎の言葉は尽くが俺に刺さる。『織斑一夏』に対しては的外れもいとこなのに、『俺』に対しては端から端までの確だ。

もし俺が『俺』ではなく、織斑千冬の『弟』として相応しい『織斑一夏』である。そう心の底から思っていて、そうなるよう生きてきたのならまた話は別だが。いや、それでも負けるかな。むしろそっちの方が負けるかもしれん。

俺がどれだけ織斑一夏であろうとしても、結局それは『偽物』で。

盲目的でもあいつの崇拜は間違いなく『本物』だから。

『織斑一夏』としてあいつと戦ったら、俺は負ける。

それが事実だ。だって『織斑一夏』でなければ、あいつの『否定』は碎けない。けれども俺は『俺』であると『肯定』している。そこは曲げられない。そこを曲げたら、曲げられるようになってしまったら、『俺』が終わってしまう。

だから俺はあいつの否定を『否定』できない。

つまり戦う前から俺の負けは決まっただけで、どう足掻いてもあの眼帯野郎にへし折られておしまい。

んな訳ねーだろーが。

つかそこじやねえんだよあの野郎と戦う理由は。

それに野郎がどう言おうと、最初から『織斑一夏』として戦う気な  
んぞ無いのだ。『俺』は『俺』だつてんだろ。わかってねえならわか  
るまで叩きつけてやる。今までもそうしてきたし、これからもそうす  
る。それしか出来ねーんだつーの。

向こうがかかってくるから殴り返すんじゃない。

逆だ。こっちから敵意を持って殴りかかってぶちのめす。

さあて。

改めて、しつかり認識しよう。

——『ラウラ・ボーデヴィツヒ』は『俺』の敵だ。

「飲み物買つてき、たんだけど。何やってるの、織斑くん？」

怪訝そうな声が降ってきた。

缶を幾つか抱えながらこちらを“見下ろす”シャルと目が合う。  
身長差的には本来シャルが俺を見上げる形になるはずである。じゃ  
あ何で逆転してるかってーと、さつきまで激痛に耐えかねて床でのた  
うち回ってたからだ。

「いやな、そのツインテがあんまり気持ちよさそうに寝てっから額  
に落書きしてやろうと思ったら噛み付かれた。見ろこれ菌型超くっ  
きり」

「ばっかじゃないの」

吐き捨てるような心底からの呆れ声。特に瞳なんてもう  
アフソリユート・ゼロ  
絶対零度の如き冷たさである。超蔑まれてる。

【はい】

何故か突然唐突に。

今回は感情どころか脈絡もなく、音声が頭の中に。

(うわびびくりした。何かあったか?)

【はい。呼ばれ……………今、何故、私……………問題あ  
りません。こちらの誤認識でした】

シロは長めの空白の後に訂正の音声を残して、それっきり沈黙して  
しまった。



メカでも聞き間違いとかするんだらうか。

「あ、凰さん眠っちゃったんだね。飲み物無駄になっちゃったかな？」  
「枕元にでも置いときやいいんじゃないやね。起きたら飲むだろ。つか何でそんな山程買ってきたんだよ、茶一本でよかつたらーに」

「凰さんの好みを聞いて無かったから一通りね。織斑くんの分もあるよ、どれがいい？」

枕元に烏龍茶を一本置いて、シャルの腕の中にはまだまだ缶が残っている。コーヒーに紅茶にオレンジジュースに炭酸——本当に多いぞ何本買ってきたんだこいつ。

テーブルに並べられていく缶の中から一本を取る。と、シャルが腕を止めてこちらをじっと凝視している。

「コーヒー好きなんだ？」

「普通。んな事聞いてどーすんだ」

「それは、その、参考に」

「参考？ ああ毒盛るんだったら好みもだが、どっちかつつーとタイミングのが大事だぜ」

「何でそうなっちゃうかな君は……ああもうちよつと真面目な話するよ」

こちらの返事を待たずに眼前に一枚の紙が突き出される。掲示板でよく見る連絡事項が書かれたプリント。内容は、

『今月開催される学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため二人での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは——  
タッグマツチにルール変更？ またえらい急だなー」

「みたいだね。結構騒ぎになってたよ」

「ふーん？」

改めて読み直しても、プリントに書かれているのは『ルールが変わった』事だけ。何故変わるのかは全く触れられていなかった。

「それでね」

こちらにかざしていたプリントが下げられ、紙から離れた指先が持ち上げられる。思わずその動きに追従したこちらの視線が、待ち構え

ていた向こうの視線とぶつかった。そして、

「一緒に組んで」

「いいぜ」

シンプルに正面から言い切られた要求に、明確かつ簡潔に返答する。

「——ああ、良かったあ」

ふはーと安堵したように息を吐くシャル。

睨みつける寸前まで引き締められていた表情が一瞬でへにやつと崩れて見る影もない。切り替えが早い、というよりも持続時間が単純に短い感じである。

「合ってたかな。色々と理由や理屈に互いのメリットとデメリットにその他諸々交渉材料は幾つも頭の中にあっただけ——君相手だと逆効果な気がして。もういつそ全部すっば抜かしてぶつける方が一番確実かなって」

「大げさなやつちゃな。たかがタッグマッチの誘いだろ。そもそもお前ならパートナーなんざ引く手数多だろうに」

「そうなんだけど。でも他の人と組んだらずっと緊張しっぱなしになるだろうし……それは、さすがにちよつと苦しいから、ね」

“シャルル”なのに珍しく苦笑い。「シャルル」と組みたい女子は間違いなく『男性操縦者』の部分が目当てだろう。

タッグパートナーともなれば練習なり打ち合わせなりで行動を共にする時間も増える。振る舞いに一層気を使う必要がある上に、時間も長い。なるほど確かに面倒だわな。

どうでもいいけどこいつ引く手数多なの否定しなかったぞ。

「そりゃそーか。何にせよこつちも助かるぜ。地味に当てが無かったんだよ。鈴は本人はともかく機体の修復が間に合わないらしいし、箒とは賭けしてつから組んだら意味なくなるし——あ、そうだ。一つ確認しとくけど『優勝』狙ってるなら俺は止めといた方がいいぜ」

あと思い当たるのはオルコットだが——ダメだ。今回ばかりは駄目だ。何故かって互いの目的が異なる。

聞くまでもなくオルコットの目的は『優勝』だろう。でも俺の目的

は別——あの転校生と『勝負』する事だ。それが“総て”で優勝は“二の次”。

だから仮に組んでも絶対上手くないかない。最悪互いに障害になりうる。いやまあ、そこ関係なく普通に頼んでもオーケーしてくれそうにねーんだけどな。だってオルコットだけ。

「ん、それは大丈夫。僕は出場できればそれでいいから」

「上等。つっても今からじゃアリーナは使えねえし、部屋に戻るか。作戦会議しよーぜ」

「僕はいいけど……鳳さんに付いててあげなくていいの？」

「大丈夫だろ。起きた時には治ってるって先生も言ってたし」

歩き出す。

が、シャルは未だ先程までと同じ場所に突っ立っていた。

それどころか体も部屋の中を向いたまま、出口の方へと向き直つてすらいらない。何事か——缶の残りを抱え直しとる。一本もらった事だし、代金分は荷物持ちでもやろうかね。

「……………落書きだった。ペンなんてどこにも無いのにね。本当は何してたんだかな」

▽▼▽

タッグマッチの噂を聞きつけた女子生徒の群れに追い掛け回されるといふ軽いアクシデントはあったものの、無事に部屋に戻——いや。いやいやいや。待て待て全然軽くなえ。普通だったら普通に大事件だ。本当慣れって奴は恐ろしい。

何よりも自覚なくするりとこちらの認識を変えてるところが、特に。「で、何か作戦はあるの？」

「んなもん『近付いて斬る』に決まってるんだろ」

答えた途端に顔面全部で呆れを表現しやがったシャルロットとかいう奴が居る。

とはいえ呆れならこつちだつて負けてないのだ。具体的には自室に戻った途端に気を抜きまくつて一気に女子化してベッドの上でごろごろしてる誰かさんに同じくらいかそれ以上の呆れをどうにか表現して叩き付けてやりたい。出番だ蠢け表情筋。

自室とはいえ学園内であることに変わりはないんだがな。気抜きの早すぎねーか。本当に自分の立場が微妙つて自覚あんのかこの野郎。野郎じゃなかった。

「あのな、真面目な話で白式は近付かにや何にも出来ねーんだつづの。お前も近くで見てたろーが」

「あ、うん。見たた。見たたよ、傍で」

「だろ。んで厄介なのはあの——何かこうぐねぐねしてるやつ。懐に入るにはアレ全部潜らにやならんのがな」

「ぐねぐね……ああ、ワイヤーアンカーね」

総数は六個。外観から察するに恐らくあれで全部だろう、たぶん。仮に一つ二つ増えても——問題あるがまだ目はある。わらわら増えたら、その時は泣くしかねえな。

見た感じブルー・ティアーズのビット程動きは柔軟ではない、が。使ってる奴がその分割増で厄介なので脅威度はとんとんか。

これについてはオルコットとの模擬戦が幸いしている。あの手の武器には頭の中に感覚的な“備え”がある。アジャストは必要だろうけど、ゼロから始めるよかずつとマシ。

「レールカノンは何？あの火力は侮れないと思うけど」

「警戒はするけど、置いとく。発射の間隔が秒単位だったから普通に撃たれる分には避けれるし——あれが当たる状況に“された”時点でもう詰んでる」

「確かに。でも接近戦に持ち込めたとして、腕部のプラズマブレードは——」

「それは一番問題ねえ。零落白夜は“あれごと”斬れる」

現状でこちらにある情報はさっきの模擬戦の光景のみ。それを元に一つずつ挙げられるシユヴァルツェア・レーゲンの武装。

考える時間はあつたから、大体の対処法にしる方針は既に決まつて

いる。が、総てではない。やがて最後に挙げられたのは、

「AIC——アクティブイナードシャルキャンセラー」

「どうすりゃいいんだろうな、それ」

慣性停止結界。とかいうシロモノらしい。あの黒いISを第三世代たらしめている要の能力。名称の通りに要は『範囲内の何もかもを停止させる』機構。原理やらさつきシロが説明してくれたが、正直よくわからなかった。

射程は不明、規模も不明、持続時間も不明。解っているのはその効果のみ。破損した状態だったとはいえ、甲龍の決死の一撃を容易く押し留める程の、強力さ。

「幾つか思いつきはするんだがな、効果があるかはぶっつけ本番だわな」

「相性自体はいいと思うよ。どれほど強力な効果でも、空間に作用しているのは“エネルギー”だから。一夏の零落白夜なら問題なく切り裂けるはずなんだ。問題はどこにどう展開されてるか見えない事だね」

「あ、いやそれは大丈夫だわ。なんかなんとなく判る」

「えっ」

それとさっきの戦闘でAICを使っている間、野郎は鈴を“見続けていた”。恐らく発生させるためにはある程度の集中が必要なんだろう、か。

右手を向けたのも何かしら意味がある。恐らく発動させる“座標”をより自身の中で明確にしている、辺り。とはいえ必ず右手を向けなければ停められないと考えるのは危険だ。視線だけで“停められる”可能性は十二分にある。

これで大体出揃った。

一つ一つ挙げていけば、楽勝とまではいかずとも、十二分に対処が可能ないように思える。

「強いな」

「強いね」

けれども。それはあくまで要素の一つだけを考えた場合。

実際のはそれら総てが複雑に織り交ぜられ、繰り出される。

どれか一つでも気を抜けばこちらを吹き飛ばしかねないというの  
に、だ。

「白式って後付武装はまだ付けてないんだよね。なら今回は射撃武装  
を積む気は無い？ 白式が近接戦に特化してるにしても、ラウラ・  
ボーデヴィツヒ相手にそれだけで挑むのはちよつと無理があると思  
うんだけど」

「無理なんだなそれが。拡張領域バースロットが空いてねえから、これ以上は何も  
量子変換インストール出来ないんだよ」

「……ちよつと待ってよ。白式の武装って雪片式型だけだったよね。  
ならまだ余裕——あ、いや、白式にはワンオフ・アビリティーがある  
から、そつちで容量を食われてる？」

「ぴんぽーん」

「第一形態なのにアビリティーが使える分、やっぱり相応のデメリット  
があるんだね。でも銃を使う方法が無い訳じゃないよ」

「……あんの？」

「今回はタッグマッチだから——白式が“積めない”なら、その分私  
のラファールが“余分に積んで”いけばいい。ISの武装は基本的  
に所有者以外使えないけど、使用許可アンロックすれば登録してある人全員が使  
えるんだよ。パートナーへの武器の貸与はルールでも禁止されてな  
いしね」

「あ、ああ。そうか、その手があったか……」

「それに余分に積むとは言ったけど、今の時点でクラス全員に配って  
も余るくらいに武器が積んであるから。だから一夏に数丁貸すくら  
いは負担にならないよ」

「多くねえ!?!」

「本当はもうちよつと積みたかったんだけど、弾薬まで考慮すると領  
域を増設しても今の数が限界なんだよね」

しみじみと言葉を紡ぐシャルから冗談めかした雰囲気は一切感じ  
られない。

つまりは今の発言が本気も本気で、数十丁の銃火器を抱え込んでま

だ不満であるらしい。逆にこいつを満足させるためにはどれだけの火力が必要だというのか。地味に気になるが聴くのが怖い。だってなんか理解できない答えがポンと返って来そうなんだ。

「後は——格納せずに最初から装備しておくって手もあるかな。使いきったら捨てるしか無いけど」

「ああ、それは俺も考えた」

ISでの試合は、互いにISを展開した状態でアリーナ内に入った後に開始される。量子変換されていなくても、アリーナに“入る直前”に武装を手にとって入る分にはルールには違反しない。これは確認済み。

「でもそつちだと弾薬の問題があるから、やっぱり私が貸した方がいいかな。一夏って銃は撃つたことある？ 無いなら今後の練習でちよつとやつておこうか。射撃なら私が教えられるよ」

「いいや、銃は使わない」

自分の機体のデータを表示させたシャルが、目をぱちくりとさせている。どうでもいいけどシャルの手元に出てる搭載武装のリストがすっげえ長え。

「持てて、撃てる。でも当てられるかが怪しいんだよ。白式に無いのは銃を積むスペースだけじゃない。銃を撃つためのシステムごとまるつと無いんだよ」

「は？ え？ え、ええ……格闘専用の機体でも普通は入ってるはずなんだけど……」

「そこら辺も使ってアビリティに回してるんじゃないかな。ワンオフ積んでるせいとか何かシステム面で他のとだいぶ違うらしいし。それに——」

なんせめつちや流暢に喋るからな。

「はい。円滑なコミュニケーションが可能です」

ただし棒読み音声で。

『俺』はね、あんま賢くねーのよ。自分がやる事をあんまり複雑にすつと頭がパンクするんだわ」

けれども一番の理由は、これだ。

生来で要領が悪いのだ。武器の種類が増えれば、取れる行動が、選択肢が増えるという事でもある。逆にいうと動く前に考えなければいけない事が増える。

並の相手なら、付け焼き刃でも選択肢を増やせば有利になるだろう。けれども今回は相手が“相手”だ。間違いなくその程度じゃ足りない、刹那でもまごついたらその瞬間に取り返しがつかない程に蹴散らされる。

自分が一番出来る事を。

自分が出せる一番の全力で。

脇目をふらず単純に考えて専念して。

それで、ようやく“抗える”くらいまで持っていける。

「だからとにかく突っ込んで振りぬいてぶった切るだけで——『近付いて、斬る』だけで精一杯なんだよ。他のあれこれはあんま考える余裕がねーや」

「うん。それでいいんじゃないかな。すごく“らしい”よ」

呆れられるか笑い飛ばされるかのどちらかだと思っただが、違った。いや笑ってるつちや笑ってるのだが、思っていたものと違う。返って来た言葉はすごく柔らかく、その表情は単純に優しい微笑みだった。

「……なんか調子狂うな？」

「さつきも言ったけど。私は“それ”を見てるから、それもすごく傍で。一夏が思っている以上に説得力があるんだよ」

「……………ま、とにかく基本の方針はそれな。後は白式の修復と頼んでるのが間に合うかどーか。後はとにかく練習——あ」  
「どうかしたの？」

こちらを覗きこんでいるシャルに返事する間も惜しんで、頭を全力でかき混ぜにかかると。思いついた事を実現するためにはどうすればいいか、考える。

考えれば考えるほど、何やら脳の中の危険察知とかその辺担当している部分が超騒がしい気もするが。気のせいだろう。気のせいであってくれ。ええい、考えてても始まらない。一回当たって粉微塵になる



しかねえ。

「よし！ ちょっとオルコットに土下座してくる!!」

「……………何で!？」



自室に戻ってきた。

椅子に身体をベッドに荷物を、それぞれ放り投げて一息。

「ヴえへあ……………」

別に面白い事を言うつもりするつもりなんぞ微塵も無かったのだが。何か思った以上にすごく奇つ怪な声が口から出て行った。

理由は単純に疲れているだけ。酷使しすぎた四肢は文句を訴える力すら尽きたのか、重力に引かれるがまま。頭の方も低速回転が極まって止まっていると見紛う所まで来ている。

このままベッドにダイブしたい。というかシンプルにもう動きたくない。

だが眠気も凄いが空腹も同じかそれ以上にやばい。つか今全部投げ捨てて眠っても、目が覚めた時に空腹で一步も動けなくなってしまう。

「大丈夫？ コーヒー淹れたよ」

「おーさんきゅー」

天井を見上げているこちらを覗きこんできたシャルで視界が埋まる。その手にはいつの間にも用意したのか、湯気を立てるマグカップが一つ。

受け取ったカップには真つ黒な液体が並々と注がれていた。今更カフェインをちよつと入れた位で眠気が吹き飛ぶ訳ではないが、無いよりやまし。

さあて。

腹はものすごく減っているが、疲労で限界寸前なのもまた事実。

今直ぐ無理に動くより、もう少し休憩した方がよさそうだ。マグカップが空になるくらいで動き出せばちよつといい頃合いだろうか。

「俺はもうちよつと休んでから食堂行くけど、先に行きたきや行つていいぜ」

「ううん、待ってるね」

にこやかにそう言っただけ、シャルはふわりと笑った。ちなみにその手元には何も“無い”。つまり俺の手にあるマグカップは“ついで”などではなく、純粋な気遣いから用意されたという事になる訳、だ。

——しかしまあ

シャルは手元に呼び出したウインドウに表示される項目を操作している。今日の模擬戦のあれやこれやを纏めているんだろう。要求した『手伝い』の変則さに対する困惑はあっても、こちらの特訓を手伝う事への不満は一切無いらしい。むしろ予想以上に積極的に手伝ってくれている。

何となく。時折、意識がウインドウでなく“こちら”へ向けられているのを感じ取る。ちらちらと、まるでこちらを窺っているよう。同時になんつーかこう“浮ついた”感じのが漂って来てる気がする。ちなみに今日が初めてでなく、ここ数日ずっと。ここ数日ずっとなので気付いた、と言った方が正しいか。

「タイミングを”合わせる”。

それとなくこつちを窺っていたと思しき向こうの視線と、こつちの視線が真正面からぶつかる。あからさまな大慌てっぷりで、シャルがそっぽを向いた。

動作が唐突かつ不自然すぎて全く誤魔化しきれてない。顔どころか一気に耳まで赤くなったのは、そりや恥ずかしいからだろう。

んで。どうして『恥ずかしい』のかっつー話だ。こつちを向いていたのがバレて恥ずかしいのか。それとも視線が“合った”事自体が恥ずかしいのか。

——なんか懐かれたな

全力フルスイングでぶっ叩かれた転校初日に比べてえらい変化したもんだ、が。

状況考えりやそーおかしな事でもなかったりする。ここにきた当初のシャルは家族絡みの問題にザル偽装とかザルプランとか——要するにとびきりキツくてとびきり辛い状況のまっただ中だった訳だ。

そこを『助けて』もらえれば、相手への評価はブーストする。実際

に俺が問題の方を解決してはいないのだが、直接的な“危機”を目前で払い除けている。“行動”して見せた分、“わかりやすい”から余計に響く。

「それにしても、オルコットさんはよくあんな役引き受けてくれたよね。どういう説得したの?」

「今回は本気で下手に出たから伝わったんじゃない?」

なんせ『シャルル』を名乗らざるをえない内は、『シャルロット』としての人間関係は広げられない。なので今こいつは心を許せる相手の絶対数が恐ろしく少ねーのである。

『俺を好ましく思う』というよりか『俺以外に誰も好ましく思えない』——結果的に『俺が好ましいように思えている』みたいな感じ。

「結局部屋の外で待たされてたから、あの日中で何があつたのか私知らないんだけど……もしかしてだけど、本当に土下座したんじゃない、よね……?」

「……………もうちよつと凄いいことしたぜ?」

これに関しては、シャルが大手を振って『シャルロット』と名乗れるようになるまではどーしよーもない。逆にそこさえ何とかかなりやどーにでもなる。

現状、少なくともある程度“意識されている”のは間違いないさ。『好かれている』とまでいつてるかは、断言しかねる。でもまーそこまではいつてねーかなー。何にせよ、最終的には『思ったより良い人だった』くらいで落ち着くだろ。

「待って、何が、あの日オルコットさんの部屋の中で何があつたの、ねえ? ねえ!」

「ちよやめ冗談っ揺さぶるな今はやめ耐えられなあああアア!!」

これまでも概ねそうだった。

こいつみたいなタイプは、知り合いこそすれ関り合いにはならない。事が終われば大抵通り過ぎて行く。なんつーか根本的な行動半径が重ねってねーんだろうな、俺みたいなのは。

だから。

今の状況は、きつと一時的なものだ。

▽▽▽

寮の自室、自身のベッドの上にシャルロットは体を横たえている。既に消灯時間は過ぎていた。

部屋の照明はすべて落とされていて、僅かな光も存在しない。そんな真つ暗な部屋の中、シャルは目を瞑る事無く天井を見つめている。眠れない、のではなく。まだ眠る気がないだけ。それに天井を見ている訳でもない。ただ室内の暗さに目が慣れるのを待っているだけだった。要は“ぼうっ”としている。

(いろんなコト、あつたな)

考え事をするつもりは無かったのに、思考は勝手にさつきから記憶を掘り返している。未だに不透明な自身の“今後”への不安さが、無意識に思考を強いているのかもしれない。

何の前触れも予兆も無く、母との別れがやってきて。

顔も名前も知らなかった父が大企業の社長だった。

愛人の子の自分には血の繋がりが“だけ”しか無くて。

都合のいいように名前と性別を偽らされて。

果てには、遠い異国へ送られた。

そして――、

(あつて、ありすぎて。すごく、本当にめまぐるしい)

改めて。ここ最近の自身に降りかかった出来事を思い返すと、そう感じる。次から次へと、まるで襲い来るよう。

故郷で過ごしていた頃の『自分』にこれまでのコトを語って聞かせても、きつと信じない。突拍子もなく信じられない事だらけだし、信じたくない事だらけでもあつた。

母と二人で静かに暮らしていた頃の自分は、十分に満ち足りていた。急激で劇的な変化なんか望んでいなかったから。

けれども、全部本当に起こった事。それが全部起こった結果として、シャルは今ここに居るのだ。

やがて何となくでも周囲の様子が見えるようになって、シャルは視線を体ごと横に倒す。視線の先には隣のベッド、その主。

寝相はうつ伏せ。

性別は『男性』。

名前は『織斑一夏』。

シャルル・ルクレールのルームメイト。

シャルロット・ルクレールを助けてくれた人。

シャルル・ルクレールを嫌いな人。

シャルロット・ルクレール私が、好きな人。

——“そして”

好きという言葉に行き着く感情には幾つか種類がある。

尊敬、憧れ、親愛、それらを表すのも『好き』。母親の事を聞かれればシャルは迷いなく『好き』と答える。食べ物、風景に対しても『好き』はある。

でも違う。それらとほんとにぜんぜん違うのだ。今まで感じたどの『好き』とも違う『好き』が、今のシャルの胸の中にある。だからこの『好き』そのどれでもなく。シャルロット・ルクレールが知らなかった初めて感じる『好き』ということとは、

——“生まれて初めて、恋をした”

恋愛感情に、他ならない。

この結論に行き着く度に鼓動がシャルの制御を離れて一際強く跳ねる。シャルそのものであるはずの心の一部分が勝手に暴れ回っているかのようだった。

また一方で別の部分がこれまたシャルの制御を離れて異を唱える。現在のシャルの立場は非常に危ういまだ。色恋の事を考えている暇なんか無い筈だ。『母親』の事も『父親』の事も未だに引き摺っている。

もしかしてもしかしたら。“これ”は襲い来る辛い出来事から逃れるために、都合よく錯覚しているだけなのかもしれない。助けてくれた相手に、無意識の内に縋ろうとしているのかもしれない。

判断は付かない。

けれどもただの事実として。

隣のベッドの上で眠っている男の子をただ眺めているだけで。シャルの顔はどんどん熱を帯びていくし、鼓動もだんだんと早くなっていく。

「……………はふ」

気持ちを少しでも落ち着けようと、小さく息を吐く。

恐らくいや間違いなくシャルの気持ちなど知ったことではない相手は、もう見事なまでに熟睡している。どうもベッドに倒れこむとほぼ同時に眠りに落ちていくらしく、あのまま朝までピクリとも動かない。

ここ最近すっかり恒例になった“特訓”で疲れ果てているのだろう。変則的とはいえ二人同時に相手しているようなものだ。それもアリーナの使用時間をフルに使ってぶっ続けで。

とにかく、熟睡というかもはや『停止』とすらいえる有様なのだ。だからちよつとやさつとじゃ起きない。初日のシャルがそう判断してもおかしくない。むしろ普通だろう。

寝顔を覗きこもうとしたら一歩目で察知された。

普通に起き上がってきてばっちり目が合った。結構な量の勇気をつぎ込んでようやく踏み出した第一歩に全力で足払いをかけられた気分だった。そういうの本当に止めて欲しい。

近付き過ぎると問答無用で気付かれるらしい。逆に近付き過ぎなければ跳ね起きてくることは無いようだった。センサーでも付いているのか。

シャルと一夏と知り合って、まだ数日ほどしか経っていない。

それでも事情も相まってほぼ丸一日行動を共にしている。ならば嫌でも色々と見えてくるし解ってくるもので。“知ろう”と思つて接すれば、得られる物は更に多くなる。

そうして気付いた事をまとめると、一つの結論に行き着いた。

身支度の順番だとか、会話における間とか、食べ物味の付けの好みとか、根本的な生き方——そういった些細な事から始まって、おおよそ気がついた限りの総てにおいて。

『シャルロット・ルクレール』と『織斑一夏』は噛み合わない。要するに、びつくりするほど相性が悪い。

ここ数日だけでもそう感じるのだ。これから更に月日を重ねていけば、食い違いはより大きく強くなっていくのは間違いない。

シャルが一夏に言う『嫌い』は照れ隠しでもあるが、確かにそう感じているから発している。あれだけ何度も『嫌い』と言えるのに、まだ一度も『好き』と言えない。もしかしたら『嫌い』の方が総量が大きいかもしれない。

もし。

もしも。

色々とすっ飛ばしてシャルと一夏が結ばれたとして——ただの想像なのに、思考を圧迫しかねない程煩くなつた鼓動がああもう煩わしい横にどいて。

ただ一緒に居るだけでは、きっと“幸せにはなれない”。

どちらかが相手に合わせるか、それともどちらも譲って相手に半分ずつ合わせるか——不思議と思考の一部分が妙に冷めている。どうしてもそう思ってしまうし、どれだけ考えてもその可能性をシャルは否定しきれない。

それに負担の方が大きくなってしまふ可能性だって、ある。一緒に居ると居心地が悪く感じる、なんて、酷い結末しか待つていなかったり、するのもかも。上手く言えないが——どうやっても拭えない、決して無視できない不安が確かに在るのだ。

自分だけが苦勞をするなら、シャルは気にしなかった。が、相手にも害が及ぶ可能性が僅かでもあるのなら、シャルロット・ルクレールが躊躇うには十二分な理由になりうる。

それならいつそ、このまま内側に置いておけばいいんじゃないか。

それなら片方しか、不幸にならない。

それがベストかもしれない。

それこそベストかもしれない。

だったら、



でも。  
それでも。

“お前の人生、俺が続けさせてやる”

駄目だ、無理だ、嫌だ、諦められない。かけられた言葉を憶えている、見上げた横顔を憶えている、あの生き様を忘れない、きつとこの先何があっても忘れられない。

あの日の総てが、脳裏に焼き付いて離れない。  
不安をすべて塗り潰して、なお余りあるほどに。

——私の心を焦がしてしまった。

結局、同じ結果になる。

どれだけ悩んでも、迷おうとも、あの日を思い出せば何もかもが全部呆気無く吹き飛んでしまうのだ。後には顔も体も真っ赤に火照らせたシャルロット子しか残らない。何度繰り返しても変わらない。

いい加減、認めるべきなのかもしれない。

“これ”は理屈でどうにかなるものじゃない。

だったら、できるだけやってみるしかない。何も始まっていないのに、始めすらせずに止めてしまうなんて耐えられない。諦めるための努力は何も出来そうにないけれど、その逆ならきつと出来る。

(お母さんも、こんな気持ちだったのかな)

母の恋もまた、諦めた方が楽であったはず。好きになってしまったら、絶対に苦勞すると解っていたはず。それでも母は諦めきれなかったのだろうか。理性で判っているのに止まれなかったのか——今の、自分シャルのように。

ほんの少しだけ、母に共感できる気がした。

『人を好きになる』のがどういう事なのか、少しでも知った今ならば。まるで自分の意のままにならない感情なのだと解った今ならば。(でも)

そこまでは、だ。

母の恋は『愛人関係』で終わった。母がその事に満足していたのか

は、シヤルにはどうやっても解らない。ただ確信と共に言える事が一つだけある。

「……………私は、一番でなきやヤだな」



六月の最終週。

IS学園はすっかり学年別トーナメント一色に染まり切っている。もうトーナメント当日なんだから染まってないと駄目なだけどき。規模がでかい行事だから、人手が足りないっつーのはわかる。でもだからって試合当日の朝まで生徒を雑務や会場の整理や来賓の誘導に駆り出してるのはどーなんだ。

ちなみに俺とシャルは早々に解放されている。トーナメントの詳細はまだ発表されていない、が、『男子生徒の試合は一回戦第一試合に行く』事は先に決まっていたらしい。

だからとづくに着替えは済ませて、現在位置はピットの中。後はのんびりお呼びがかかるのを待つだけ——ではなく。最後の追い込みの真っ最中だったりする。

「何か思ってたよか客が多いっつーか多すぎねえ？」

眼前にはハンガーに固定された白式の機体。その向こうにあるモニターへ視線を向ければ、映し出す観客席は人で埋まっている。それも生徒や教員だけではなく、明らかに外部の人間と思しき方々がずらり。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからだよ。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入るだろうね。ねえ、固定具のボルトが一つ足りないんだけどそっちに無い？」

「ふ——ん……………これ？」

「わあ興味なさそう……………それそれ、取って」

互いの手元でがちゃがちゃと金属が擦れ合う音が鳴る。互いに部品や工具を時折キャッチボールみたいにやり取りしながら作業を続ける。

「二夏の目当てはボーデヴィツヒさんだけだから、そりや気にならない

いかあ。よし、こっちはもう殆ど終わったかな」

「だな。こっちはもうちよい」

「手伝う？」

「んー……いや自分でやる。腕だしな」

「じゃあ私は自分の機体——あ、対戦表決まったみたいだよ」

がばりと顔を上げた。

シャルが指差すのはモニターの内の一つ、当日に発表される対戦組み合わせが映し出されるはずの画面。さっきまでは真つ暗だったそれに光が灯り、完成したトーナメント表が映し出されている。

一年の部のAブロック一回戦第一試合なのはもう知っている。だから自分の名前を探す必要は無い。問題なのはその隣に書かれている名前だ。

——『ラウラ・ボーデヴィツヒ&篠ノ之箒』

「うっひょう！ 第一関門突破ア!!」

「ふー」

飛び上がった俺、の横で胸を撫で下ろすシャル。事前の『準備』の都合上、目的の相手と当たるのは早いに越したことはない。初戦というのはまさに願ったり叶ったりだったりする。

「これは幸先いいんじゃない？ 完全ランダムな組み合わせから目当ての組み合わせを引き当てるなんてさ」

「いやランダムじゃなくてほぼ2分の1だぞ。たぶん」

「どういうこと？」

「過去の記録ひっくり返した限り『専用機持ちが複数いる』場合は、専用機持ち同士が最初に当たってたんだよ。要は最終的に『専用機持ちが一番強い奴』と『訓練機で一番強い奴』がぶつかるとしてんだろ。一年枠では鈴がりタイヤしてて、四組のは機体の不備で不参加。オルコットが転校生と組むわけねーから、すると残りの専用機持ちが居る枠は俺等除いて二組だろ、ほら2分の1」

「一夏が真面目な話してると違和感がすごい……」

「おい聞こえてるぞてめえ」

「でもそれだと一回戦でオルコットさんと当たるっていう最悪な組み

合わせも同じ2分の1って事だよ。その時はどうするつもりだったの？」

「決まってるだろう泣くんだよ」

「ええ……」

▽▼▽

何もしなくても時間は過ぎる。

山程何かしたのなら相応に時間は過ぎてている。

そしてとうとうやってきた、試合開始の直前だ。

既に互いのペア全員が機体を展開済み。所定のスタート位置に立——浮き、か。ともかく後は試合開始のブザーが鳴り響くのを待つのみ。

「二戦目で当たるとは、待つ手間が省けた——が」

アリーナで向かい合ったこちらを見た転校生が。もーこれでもかってくらいに忌々しそうに顔を歪めに歪めて不機嫌さを猛烈に逆らせながら盛大に舌打ちをした。

ちよつと普通にイラツとしたぞ今の。

「機体を言い訳にするなよ、織斑一夏」

「悪いのは見てくれだけで中身は万全だつーの」

向かい合う先には黒いIS、機体名は『シユヴァルツエア・レーゲン』。大型のレールカノンには先日 of 戦闘の痕はすでに見当たらない。機体総てが完全に万全である事を威圧感を伴って示している。

対してこちらは白いIS、機体名は『白式』。大きく目立つのは左腕部と右脚部だが他の部位にもいくつか、白式本来の装甲ではなく打鉄の装甲やパーツが貼り付けられている。『つぎはぎ』と呼べる程度には全体のシルエットが歪になっている。

試合開始まで5、4、3、2、1——”0”。

ブザーがアリーナ内に鳴り響く。けれども俺は動かない。相手の黒い機体も動かなかった。けれども試合自体は始まっている。動き出さずとも動きは起こる。今回の試合はタッグマッチで、相手は二人居るからだ。未だ開始地点より動かない黒いISと違い、相手側のも

う片方は開始と同時に飛び出してきた。

けれどこつちも二人居る。真つ直ぐ突っ込んできた相手に、オレンジ色の機体が横殴りに突っ込んだ。“横”方向だ。“前”からじゃない。相応の重量のある金属同士の衝突によって撒き散らされる鈍い音。スラストターの光が爆発するように瞬く。ラファールに“押し出される”ように。打鉄が横方向へ流れていって。

そうして、俺達の前から“何も無くなった”。

▽▽▽

一夏が一人でラウラと戦う。

その間シャルは相手のパートナーを抑えておく。

タッグマッチの形式が完全に死ぬこの内容が、今回の『作戦』だった。

「相手が一夏じゃなくてゴメンね」

「くっ……！」

アリーナの端が見えてきた辺りで、相手の打鉄を突き飛ばした。同時に空いた両手に武装を呼び出す。出現したのは六十二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》——発射。相手がばら撒かれた弾丸を後ろに飛んで避ける。持ち変える。五五口径アサルトライフル《ヴェント》が間髪入れずに弾丸を吐き出して、打鉄に迫る。

勝利条件は向こうの決着が着くまで、眼前のISを自由にさせない事。勝ち負けは関係ない。でもさっさと倒して脱落させてしまえばより確実だろう。

出来れば、だが。

「構わん」

ガギギギギギギギギツと連続して金属音。高速かつ精密に振るわれた両腕が、そこに握られた刀剣が。ヴェントが放った銃弾を総て斬り落とす。

「どの道、立ち塞がる相手は総て斬り捨てるつもりだ」

既に右手の武装は切り替わっている。六一口径アサルトカノン《ガラム》。左手はヴェントのまま、本命のガラムの爆破弾を当てるための牽制射撃。

「篠ノ之箒、打鉄。推して参る!!」

踏み込みからの一閃。切り捨てられてた銃弾が散らばる、一拍遅れて爆破弾が爆発。爆風を背に箒の打鉄が刀を振りかぶる。退きながら切り替え<sup>スライサー</sup>。面制圧力に長けたショットガンの散弾——翳された打鉄のシールドで受け止められ、剣閃。

銃身を切り落とされたショットガンを放り捨てながら、退かずに距離を詰めた。今度はこちらからブレッド・スライサー<sup>ブレード・スライサー</sup>を叩きつける。左手のヴェントを至近距離から発砲。身体を捻って躲される。相手の刀を抑えていたブレードが、握る腕ごと弾き飛ばされた。すでに振り被られている刀、咄嗟にブレードで迎え撃つ。

裂帛の気合と共に、ラファールの握るブレードは刀身半ばですつぱりと断ち切られた。切り替え<sup>スライサー</sup>。動じずに、次の武装を握る。

(どっちもみち援護してる暇は、無かったかな……ッ!!)

シャルに勝つ理由は無いし勝ちたいという意思も無い。一方の篠ノ之箒は全力で勝つつもりで戦っている。その意識の差は明確に実力や戦況に影響を与えるだろう。

それでもシャルは喰らいつく。振るわれる刀をかわし、受け止め、逆に相手の動きの隙間に銃撃を差し込んで攻め立てる。

だって勝つ気はなくともパートナーの信頼に応えるつもりはたんまりある。上手くこなして恩を着せようとちよつぴり悪企んでいたりもする。

箒の勝ちたいという意味に真っ向からやりあえるくらい。

シャルにも負けられない理由がある。



「さてさてさてさて！ 文句なしの一对一だ。今から行くから逃げんなよオ!!」

「……その減らず口ごと叩きのめしてくれる」

【警告。敵IS大型レールカノンの安全装置の解除を確認、初弾の装填を確認——ロックオン確認】

身体のが唸りを上げる。

脳髓から心臓へ、血流を介して全身へ、そこから更に繋がる鋼の手足へ。式型の柄を握りしめ、虚空を踏みしめる。伝達は四肢に留まらず。本来人体に存在しない背部のスラスターが噴射口より推力を伴う光を瞬かせ、

開戦の合図は、爆発に等しいレールカノンの発射音。

風を切りながら飛翔した白式の横を、風を食い破るかの如き威力の砲弾が通り過ぎる。すれ違うのは一瞬以下。加速を続ける最中で、周囲の景色が恐ろしい速度で流れていく。十二分に『高速』と呼べるスピード。けれどもこれは『最速』ではない。

黒い機体が右手を掲げる。伴って頭の片隅で火花が散った。直接向き合うのは初めてだが、すたと確信。これがA I Cか。線のような帯のような——うん、よくわからん。とにかく妙な感触を伴っている。だが大体でも感じ取れるのならやりようはある。一番近くは進路上の一つ。このまま直進すれば数秒も要らずに接触する。困った事にそれを避けようと機体を傾けるべき方角にも既に“張られている”。更にはレールカノンに被せるように発射されていたワイヤーアンカーが、隙間を埋めるように空間を蠢き——

瞬く間に“網”が組み上げられていく。

どれか一つに、僅かにでも手間取ればそこを潰される、と。こちらの想像を証明するかのように、レールカノンが排熱と排莖を終えて再装填されていく。まるで見せ付けるかのようですらある。

未だに相手は一步も動かない。安い挑発に乗っかって突っ込んできたくれたら万々歳だったんだが。まあそうはしねーだろうな。

あいつは俺を見下している。けれども織斑千冬は見上げている。

だから俺を見くびることはあっても——『零落白夜』をみくびる事は、決して無い。俺がどれだけ弱くても、こつちに『織斑千冬』と同じ要素があるのなら。あいつは決して油断しないし緩めない。逆にあるからこそ。こうして一層苛烈に攻めてくる。

ここまで全部、想定通り。

「さあて、行くか」

【はい】



加速しながら機体を前方にぐるりと回す。虚空に踵落としをするように。右脚が空中に張り付くように着地。踏みしめ、弾く。眼前にあったA I Cによるエネルギー波を跳び越えた。跳躍方向は前方。スラストの吐いた光に身体が押される、前へ。抜き去ったA I Cが即座に消滅。新たに貼り直され——ない。次に飛来したワイヤーアンカーは二本。右脚と左腕を突き刺し絡み付く位置取り。こちらから右脚を突き出す。不可視の足場と小型のブレードが衝突し、形を変えた力場が逆にワイヤーを絡めとる。固めたアンカーを踏み抜いてその場で深く前傾姿勢。急激な体勢変更に対応しきれずもう一本のワイヤーが通り過ぎる。踏み抜いて、跳躍。更に、前へ。行こうとした先に突然A I Cが目先に“張られる”。弾く。嘔く。推力と力場で身体を横に倒して、潜り抜けるように通り過ぎる。こっちの体勢が崩れたのを見計らったかのようにレールカノン。背部のスラストがぐねりと稼働。復旧していない機体を強制的に射線からずらす。機体ごと身体が揺れる。意識がぐにやりと歪む。不快感に浸る暇は無い。そこから更に前、に行こうとしたらワイヤーアンカー三本追加、A I Cが四本追加。発生した力場と両脚が干渉し火花を散らして機体の速度を無理矢理削ぐ。狂ったタイミングで生じた綻び目がけて跳ぶ。前方向へ、潜り抜ける。意図的に脚部を力場にぶつけ、機体が折れ曲がる。強制くの字。身体ごと前方にすつ飛ぶが、上半身を狙っていた不可視の網を通り過ぎる。また直ぐ空中を蹴りつける。軋む音は機体か。スラストは光りつ放し。身体の中の音か。体勢は進みながら整える、暇が無けりや折り曲がたまんまでも前に跳ぶ。音が鳴るのは両方からだ。飛行の速度で跳び回る。A I Cには触れない。アンカーにも可能な限り触れない。回避でも可能な限り下がらない。多少無理でも前方向へ。倒れこむようであったり、捻きれる寸前であっても。とにかく、前へ。前へだ。前。潜り抜けながら接近し続ける。軌道を線にすればジグザグとすら呼べない酷い有様だろう。が、未だに黒い機体の放った網は俺を捕らえられない。

「——ッ！」

「ハッハア——！！」

相手が息を呑んだ。

ほんの僅かでも揺れたという事は。この攻防を俺が“潜り切る”と想定していなかったという事。つまりはあの野郎が紛れも無く本気であったという事！俺はそれに対処出来ているという事だ！

別に何か凄い技を使ったとかじゃ無い。結局A I Cに対して有効な対抗策は用意出来なかった。だから避けてんだし。

ただ、事前に攻防がこういった形になるのは予測できた。ならば条件を本番に可能な限り近付けた模擬戦で備えりゃいい。

——まず、シャルとラファールに大型の砲を装備してもらいます。

転校生本人を相手に用意できない以上、条件を少しでも近くするしかない。これで火力面を再現できる。本来は接近した後にプラズマ手刀もあるが、近付くまでの模擬戦なのでそこは省く。

——次に、その周囲にブルー・ティアーズ（ビット）を浮かべます。うん。ここが一番大変だった。もー本当に大変だった。普通に手伝ってもらっただけで地面にめり込むレベルで土下座してギリギリつて感じなのに。あのオルコットに『隅っこでビットだけ操作してて』だぜ。出せる札は切り札含めて全部出したとはいえ、よくやってくれたもんだと思う。何か今後について嫌な予感がちよつとしないでもない。

が、ここはどうしても妥協できなかったのだ。

今回の攻防に備えて、頭に覚えこませるのは『1対1』じゃなく『1対1・6』だ。

有線と無線という違いはあるが、他の機体、他の相手ではそもそも“本体と同時に子機が襲ってくる”という状況を致命的なまでに再現できない。

——はい仮想敵の出来上がり。

肝心なA I Cは意外と何とかなる。A I Cそのものの再現は絶対に不可能だが、機能がわかっていいるなら話は別。まずラファールと白式をリンクさせる。後はラファールから送信された『座標』を白式が通過した場合、白式は俺の制御を離れて“止まる”ように設定する。停めるのは不可能でも止まることは出来るんだから。

——後は繰り返すだけ。

本物よりリロード間隔の短いカノン砲にかすりでもしたらゲームオーバー。

ほぼ視線だけで設定される停止座標に一度でも引つかかったらゲームオーバー。

セシリア・オルコットが操作に専念したビットのどれか一つに触れられてもゲームオーバー。

要するに、全部避けなきゃゲームオーバー。

この条件で刃の届く距離まで接近すれば、クリア。

何回駄目でも繰り返す。

何十回墜落しても繰り返す。

何百回撃ち落とされても繰り返す。

生まれついで筋金入りの不器用な俺が、直ぐ上手くやれるようにはなる訳はない。それは俺自身が一番知っている。だからひたすらやり続ける。何度も幾度も延々と反復し続けて少しづつでも頭と身体と心をすり合わせていく。頭から必要な事以外を退けていく。必要なことだけに特化させる。それしか出来なくていい。それだけ出来ればいい。この時だけでも”そうするだけ”のモノで在る。

だからこそ、早めに当たったのが幸運となる。普通の試合をすれば僅かでも”元に戻ってしまふ”から。だからこそオルコットと当たるのが最悪になる。転校生用に特化し尽くした今の俺は、オルコットにとって敵以下の的でしかないから。

「……………ッ!!」

最高速は、あえて出さない。

確かに最速で飛ばば最速で辿り着けるだろう。が、その時俺は”急に止まれない”。今みたいに目の前に突然A I Cを張られたら、為す術もなく引つかかる。突然目の前に何かが出て回避か対処が可能という前提をクリアできるギリギリの速度。だったら加速せずにゆっくり確実に近付けばよいのでないか。

出来ないんだな、それが。

機体は持つ。エネルギーもだ。ただ俺の頭が保たない。機能の特

化させても、根本的な能力の低さまでは補えない。この波状攻撃を延々と捌き続けられる程、俺の処理能力は優秀ではない。集中力だつて有限だ。長いこと続けてたらつていうかもうそろそろパンクしちゃう超忙しいなちくしょうめ！

「思つたよりかは出来るようだ。が、その鬱陶しい動き。何時までも続けられるものか？」

わーおバレテラ。

でもやることは変わらない。変えなくていい。捌き切れなくなる前に、辿り着け。そこでようやく賭けになる。あくまで不利な部分を潰せただけ。こちらの有利を増やせてはいない。現時点ではギリギリで食い下がっているに過ぎない。辿り着かなければ勝負すら出来な、

「———それら、足掻いてみせろ」

正しくこちらの手を見ぬいたと言わんばかりに、転校生が攻め手を変えた。やった事は単純で、数を“増やした”だけだ。的確に進路上に張られていたAICは一見すれば不要な位置にまで設置され、網の目を狭める。数本ずつ交互に射出と回収を行い連射させていたワイヤーアンカーが、一気に六つ放たれた。

「ぐ、ぎ……………ッ!!」

一つでも当たれば致命的な障害物が一気に数を増す。増えた分だけ意識が割かれる。限界近かった頭の回転が更に増して焼き付くかのような。視界がちよっとチカチカする。力場を纏った脚部の力場と右手の式型でワイヤーアンカーを弾く。避けきれない、にせめて弾けるブレードを割り振る。捌き方が一気に雑になる。

だが、ここまで続けた。ひたすら前に出た分は確実に積み重なっている。既に中距離から近距離の狭間。あと数歩分———！

「無駄だ」

発生源から距離が近付いたからか。それとも最初から意図的に『調整』されていたのか。この攻防が始まってから、俺が知覚した中で。最も高速に形成されたAICのエネルギー波がスラスターの端っこを“引っ掛けた”。

突然“停止”したスラスターに全身が後ろへ引っ張られる。倒れこむ前に体勢を立て直そうと振り上げた脚が“停まる”。脚を止めたエネルギーへ振るった刃を持つ腕が“停まる”。念押しと言わんばかりに胴体が“停まる”。最後に頭部が“停まる”。ここまで維持していた速度が総て、一瞬で掻き消えて——白式が“停止”した。試しにちよつともがいてみるも、びっくりする程びくともしない。完全に固定されている。

どうでもよくないけどさ。

結局、模擬戦は一度もクリア出来なかつたんだよな。

「では——消えろ」

照準を合わせ終えたレールカノンがこちらを向いていた。砲口から溢れ出た炎、それを纏い、突き破って進む砲弾。対ISアーマー用特殊徹甲弾。直撃すればシールドエネルギーを根こそぎ奪いかねない破壊力を持つ。

それが進んでくるのがゆっくり見えた。

ゆっくり見える程に、思考は加速したまま。

——集中はまだ、途切れていない

白式の脚部から音を立てて脱落したカートリッジを、果たして転校生はどう見たのだろう。ただの悪あがきと嘲笑ったのか。それとも最低限度の警戒を向けたのか。

とにかくそちらに、注意は行つただらう。

——細く、長く、

相手も『零落白夜』を知っている。憧れの人の代名詞の様な能力だから当然だろう。能力の危険性を知っているからこそ、AICを武器ではなく腕に当てるのを徹底している。

『織斑千冬』は強かった。

ワソウ能力が強いのではなく本人そのものが純粹に強かった。

相手が知っているのは『織斑千冬の零落白夜』。能力に頼らずとも勝てる戦い方で振るわれる『零落白夜』——しか、知らない！

「鋭くッ!!」

ワソウ「単一仕様能力、オンライン」

【単一仕様能力、オンライン】

展開した刀身から光が迸る。触れたエネルギーを消滅し切断する光の白刃。それが今は刃とは到底言えない形に。糸の如き細さで、かつ長く。光は白式の機体を這うように駆け巡り——不可視の網を総て容易く斬り裂いた。

【炸裂<sup>Burst</sup>】

先程排出したカートリッジに蓄えられていたエネルギーが一拍遅れて爆発する。加えて瞬間<sup>イクニッション・ブースト</sup>加速。解き放たれた白式が、真の最速で以って黒い機体へと肉薄する。

「な、」

今日初めて、転校生の顔が驚愕に染まり切った。

眼と鼻の先の距離の砲弾を、1つから2つへ切り分ける。既に光は見慣れた『刀身』へと姿を戻している。発射した砲弾を見慣れた形に変わった光刃で切り分け、迫る。

斬撃ではなく突撃だ。無論、どれだけ白式の加速が凄まじくても、その速度が速くとも。A I Cで再度止められれば呆気無く停止する。

だが、ここまで近付けたのなら話は別だ。A I Cでは機体は止められても『零落白夜』は止められない。加えて相手はもう『零落白夜』の形が変わると“知ってしまった”。機体を停めるためにA I Cを張れば、そこに集中を割けば——伸ばした刀身に貫かれる。こいつは優秀だ。だからこそ、この一瞬の僅かな間でもそれを正確に推測出来る。だからこそこそ、この一瞬の僅かな間でもそれを正確に推測出来る。しょう。

既に届くのには何故加速をかけたかって。そりゃ相手の考える時間も余裕も削ぎ落とすためである。『停まった相手からの攻撃』と『迫り来る相手からの攻撃』ならば。後者の方が『何とかしなければ』という焦りを生む。

だというのに。

「な、めるなアアア——!!」

砲撃戦用の機体だぞ。動きが硬い機体だぞ。加えてこっちは格闘戦に突き詰めた調整の白式で。最も最速の“突き”——に、対応された。

確実に止められるA I Cを持っているのに間違えずに“回避”を

選んだ。非固定浮遊部位アンロック・ユニットが開くのを待つ事無く、爆発するかの如く火を噴くのが見えた。咄嗟に伸ばした刀身が黒い装甲を削り取り——浅い。左方向へ吹き飛ばされるかの勢いで黒い機体が行ってしまふ。手も脚も頭も尽くして身を削ってまで詰めた距離が、呆気無く開いていく。

▽▽▽

飽きるほど、嫌になるほど、何も感じなくなるほど繰り返した模擬戦の一コマ。

経験として凝縮されて蓄積された中の、一コマ。

「うーん、織斑くんは瞬時加速はあまり使わない方がいいかもしれないね。力場を使った機動と違って動きが途端に直線的になるから」

「だから今土手っ腹ぶち抜かれたのか」

「加速に踏み切るタイミングの選び方は上手いんだけど、反応できなくても軌道予測できちゃうから」

「……………」

「一応言っておくけど、瞬時加速中に雪原使って無理に軌道変えようとしたりしたらダメだからね。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするんだよ」

「え、マジで？」

「大袈裟でもなく本当だよ。だから——」

「骨折る程度で曲がれるのか」

「そういう事が言いたいんじゃないよばっかっ!!」

▽▽▽

ラウラ・ボーデヴィツヒと名付けられた個体は『優秀』である。他を有象無象と吐き捨てられるくらいには。

だから多少の奇策や小細工程度は真正面から打ち砕くことが可能である。実際にそうやってきた。

大抵のIS操縦者とは違い、まだラウラ・ボーデヴィツヒにとつては詰みではない。けれども『ラウラ・ボーデヴィツヒでなければ対処しきれない状況まで追い込まれた』というのも事実であった。

機体の損傷よりも何よりも、その事実には憤慨していた。勝利は最低限度の確定事項だとしても、そもそも『戦闘』と呼べるほどの展開にするつもりなど無かったからだ。だから手間取らせた『敵』が忌々しい。挙句、あの『敵』を『近付けてはいけない』と判断してしまった自身もまた忌々しい。

それでも彼女は『優秀』だから、身体の内では煮えたぎる憤怒に流されること無く。その千載一遇の突撃を捌き切る。既にレールカノンの再装填は継続中、ワイヤーアンカーも総て回収済み、万が一に備えて両腕のプラズマ手刀を展開。

機体の制御に手間どる程の緊急回避ではあったが、それはなりふり構っていない敵も同じ。いや、それ以下。体勢を整えるのは確実にシュヴァルツエア・レーゲンの方が早い。

後は詰むだけだ。改めてAICで拘束し、今度は振り解くよりも速く潰す。白いISを叩き潰す。敗北させる。完膚なきまでに叩き伏せる。自身の力でもって。

彼女は『優秀』だから、視界を流れていく破片が何かを理解できる。日本製の量産型IS『打鉄』。その腕部に使用されている装甲だ。このアリーナ内に存在する打鉄は一機のみ。だが離れた位置で戦っている機体の破片がこんな所まで飛来するはずもない。ならば何故——記録が答えを用意する。今戦っている白いISだ。修復の間に合わなかったと思いき部分に打鉄の装甲を流用していたのを見ている。

ならばそれが脱落した——ありえない。その部分には一度も攻撃を当てていない。ISの装甲が加速の衝撃に耐えられず脱落する筈もない。

だとすれば意図的に脱落させた事になる。

何故、

——その答えを、身を持って知る。



がくつ、とシュヴァルツエア・レーゲンが傾いた、機体制御は完璧だ。1つのミスも無い。原因が彼女に無い。故に原因は外部からの介入によるもの。機体の左腕に、突き刺さっている物のせい。直線上に白いISの左腕があった。脱落した装甲の中に隠されていた『発射機』が頭になっていた、左腕が。

彼女は『優秀』だから事実を即座に認識する。外付け式のワイヤーアンカーでもって、白式とシュヴァルツエア・レーゲンが仮初に連結されていた。

「——お、おお、つらあああつア、アア、!!」

シュヴァルツエア・レーゲンは体勢を立て直そうとした。が、白いISはそもそも体勢を立て直そうとしていなかった。

怒号と共にその両足から空葉莢がいくつもばら撒かれ、数に比例して纏う紫電の規模も増していく。最大速度からの方向転換だ。機体がねじ切れてもおかしくない。それどころか機体を纏う肉体にも聞こえてくる。機体の表面に幾つも幾つも亀裂が走る。内部の部品が断裂する金属音。聞こえてくる。その更に奥で筋繊維が肉が骨が割れて千切れて碎ける音。

彼女は『優秀』だから、避けられない事を即座に理解した——嫌だ。

彼女は『優秀』だから、光刃の直撃に機体が耐えられない事を把握し——嫌だ。

彼女は『優秀』だから、減少するシールドエネルギー——認められない。

彼女は『優秀』だから、既に自身の敗——認めるものか。

彼女は『優秀』だから、自身が間違——認めてたまるか!

眩いほどに真白い二の太刀が、黒い装甲を食い破る——負ける。

(……………力が、欲しい)

この現実を塗り替える力が欲しい。

抱く憧れを否定させないための力がほしい。

あの日目にした光をうそにしないちからがほしい

Damage Level——D.

▽▽▽

ラウラ・ボーデヴィツヒが絶叫する。

声、怒号、悲鳴、どれにも当てはまらぬもつと奇異なもの。おおよそ人体から発せられた音とは思えぬ程の音量でもってアリーナ中に響き渡る。次いでシュヴァルツエア・レーゲンの機体が激しく放電。周囲へと無差別に衝撃波を伴う電撃を迸らせた。

異常事態というには既に十二分なのに、事態はみるみる悪化していく。

黒いISが、シュヴァルツエア・レーゲンが。シュヴァルツエア・レーゲンではなくなっていく。ISの装甲を形作っていた線がぐにやりと歪み、溶けて、どろどろとした何かに変わり果てた。とてもではないが変形ではない。変化、変質。黒い何かは見る間に広がっていき、自身の操縦者である少女を飲み込んでいく。

「二夏ッ！ 大丈夫!？」

本来ISは大掛かりな変形をしない。出来ない。大掛かりな変化が起こるのは『初期操縦者適応』と『形態移行』のみ。パッケージや装備の換装程度の部分的な変化はあっても、基本的な形状は変化しない。

その原則が覆されて、侵されている。

ぐちゃぐちゃに“溶けた”機体だった黒い何かが。鼓動のように脈動しながら蠢く何かが。電撃を周囲にばら撒きながら流動する。何かの形を成そうとしているかのよう。

「ねえ、返事してよ！ 何が起きたの!?! 大丈夫なの!?!  
……………、つて、ちよ」

観客よりも遥かに近くからその惨状を目の当たりにしているシヤ

ルは、けれども黒を見ていなかった。正確には白を見ていた。黒の一番近くに居たタッグマッチのパートナー。白いISの操縦者。遠く離れたラファールを揺らすほどの衝撃を至近距離で浴びたにも関わらず。今もなお止まぬ紫電を浴び続けているにも関わらず。

「あばばばっつばばばばばばっつばア——!?」

もう見た感じヤバ目にうねうねしててバツチバチなってる黒い塊に対して。刀をぶっ刺したままで。身体全部で踏ん張って粘っている——織斑一夏がそこに居た。

「何してんの一夏——ツ!？」

▽▽▽

遺伝子強化試験体C—0037。

人工合成された遺伝子を投じられ、鉄の子宮が生み落としたもの。暗い、暗い、闇の中に私はいる。

▽▼▽

なんじゃこりゃあ。

目の前の出来事への感想はこの一言に尽きる。他に何を思えというのか。

刀刺したら相手が溶けた。

単純に意味がわからねえ。

唐突かつ意味不明すぎて、俺の頭じゃ推測すら出来やしない。いや待てよ零落白夜の隠された機能という可能性も、

【違います】

じゃあお手上げだ。俺には今何が起きているのか何もわからない。

が、わからないのは目の前で起きている事についてだけ。それ以外は話は別。今最も重要な事については、しっかり把握している。

“勝負はまだ、終わってない”

「シロオ！ 刃と推進力！ 他はいらん!!」

【はい】

説明になっていない命令。詳しく話す余裕が無い。

それでも白式の中の人は俺の意図を正しく読み取った。白式の機体が光になって解けていく。総てではない。幾つかのパーツと機構は残る。

結果として浮いたエネルギーを“必要”な部分に回す。更に必要なパーツからも可能な限り削る。最終的に残ったのはフレームが剥き出しになった手脚、骨組み寸前のスラストー。そして雪片式型——“零落白夜”。

黒い装甲から変わり果てた何かは流動する。けれど突き刺さった光の刀身は黒を意に介さない。それどころか逆に押し退けてすらいる。

刀身は、侵されぬ。

だから避けてきた訳だ。

白光を迂回して、刀身を握り支える機体の腕、そこから更に俺の腕へ、どンドン登ってくる。黒いのに触れられた場所は——これ焼けるのか、溶けてるのかどっちだ。とりあえず滅茶苦茶痛い。うわ何か煙出てる。地面に広がった分が、足元からも登ってくるのが視界の端に映った。

これ以上近寄ってはいけないと、頭の中のどっかが告げている。

だからどうしたと、他の全てが叫んでいる。

白式の周囲を覆っている紫電は、目の前のISだったものが吐いているのは別。背部のスラスターが、脚部の力場発生装置が、可能な限り出力を上げている事から発生した物。

進行方向は前方だ。

安全な後方ではない。頭の中でどれだけ言われようともそこは曲げられない。俺の敵は“前”に居るのに、どうして下がらにやならんのか。

視界が不規則に明滅する。機体の異常が頭の中に伝わってどっかおかしくなったのか。けれどもここまで近づきや、多少見えなくても支障はない。

【警告。エネルギー低下、機体損傷拡大。退避及び離脱を提案します】  
「そうか、わかった」

予感でも実感でもなく、音声ではつきりと警告される。

黒い何かが一層大きく膨れ上がって、広がった。白式を丸ごと飲み込むと告げているかのよう。わかりやすい脅威が迫る。一目で異常な存在がそこに在る。

ここが最後だと、頭のどっかが一層強く震えた。発動しっぱなしの零落白夜が祟ってすでにエネルギーは風前の灯ほどしかない。スラスターもこれ以上物理的な損傷が増えれば機能を失うだろう。

だから、まだ動ける内に。

「行くぞ」

【はい】

——もう一歩だけでも、前へ。

▽▽▽

シユヴァルツエア・レーゲンに起こった異常、あとパートナーの奇行。その2つを同時に叩きつけられたシャルの思考は緊急事態の最中であって完全に停止状態にあった。どちらかというと後者の方が精神的ダメージがでかい。

『非常事態発令！ トーナメントの全試合を中止！ 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！ 来賓、生徒はすぐに避難すること！ 繰り返す——』

我に返ったのは、アリーナ内に響き渡ったアナウンスのお陰だった。即座に周囲を見回して、状況をより正確に取得するまでにさほど時間はかからない。

自身が生徒に分類され避難を指示されていること、直ぐにでも教師が救援に来到ること。それらをきちんと把握した上で。

シャルは背後の出口でなく前方のシユヴァルツエア・レーゲン——だったものへと機体を飛ばす。接近しながら、両手のアサルトライフルの引き金を引いた。

吐き出される弾丸は黒い塊に殺到する。組み合った白式に当たる危険もあるが、今最も優先すべきは一夏をあの黒い塊から引き剥がす事だ。

が、マガジンを2つ使い切っても状況は変わらない。

「効か、ない——？」

装甲で弾かれているのではない。装甲を突き破った弾丸が内部を抉っているのでもない。もっと違う事が起きている。弾丸は黒い塊の表面に着弾した端から“沈んでいく”。まるで、そう、まるで『飲み込まれている』かのように見える。

背筋に悪寒。接近戦どころか、接近すること自体が危険を伴うのだ

と何故だか理解できた。

「駄目だ！ 逃げて一夏！ はやくっ!!」

至近距離の白式が未だ健在な理由は直ぐに察しが付いた。シャルは零落白夜の『エネルギー無効化』という特性を知っているから。

そして『持続時間が短い』という欠点も知っている。

既に零落白夜が発動してから秒でなく分単位で経過している。このまま膠着状態が続けば、間違いなくエネルギー切れになって、それで、

「一夏！ 一夏つてば!! 早くそこから逃げてつてば!! 聞こえないの!?!」

考えてしまった事を振り払うように。一層強く呼びかける。

が、応えは無い。通信は生きている。そもそもこの距離なら肉声も届くはず。なのに視界の先で一夏は身じろぎすらしない。

動けないのだろうか。無事に見えるのは外見だけなのか。嫌な想像ばかりが思考を埋めていく。近寄るのは怖かった。けれどもじつとしているのも耐えられなかった。だったらやる事は一つだけ、で、  
(……………あ、違う。もしかして)

ここまで結構乙女だった顔が一瞬で真顔に切り替わった。

感情が抜け落ちたともいえる。だって察してしまったのだ。きつと事前にしつかり認識していたから、思い当たれたのだろう。

シャルロット・ルクレールと織斑一夏は根本的に違う分類の人間である。

だからシャルが『いくらなんでもそれはない』と思ったコトが、織斑一夏にとつては十二分に当たり前だったりする訳で。だから、つまりは。

届いているけど“聴いてない”。

応えが返ってくる訳がない。織斑一夏の頭の中から、今この瞬間『シャルロット』という存在はスッポ抜けている。それだけじゃない。目的以外のほとんど全部を放り捨てているんだ。本当に、本当に、事前に言っていた通りに。

こんな状況なのにまだ——ラウラ・ボーデヴィツヒに勝つことしか

考えていない！

「——っ、もうっ！ ばかっ!!」

両腕のライフルを放り捨てて機体を加速させる。

事実がどうであれ、やるべき事は変わらない。思うことも言いたいことも山を越える程にあるが、事態は一刻を争う。無視されているなら——ちよつと本当に腹が立つ——実力行使に躊躇いはない。

あの黒い機体の成れの果てに触れるのは危険かもしれない。けれども白式を掴む分には危険はない。加え、上手く行けば“前回”の様にラファールのエネルギーを白式に譲渡できるかもしれない。零落白夜の使用時間が伸びれば、それだけ有利になる。

結論は正しかった。

選択も間違っていないかった。

ただ、気付いたのが遅すぎた。

事が起こって直ぐに行動していれば、きっと間に合った。

けれども思考や行動を幾つも間に挟んだから、当たり前のように時間に切れなくなった。

「あ、待っ——」

反射的に伸ばした手は未だ全然届かない位置を空振る。

中途半端な距離に居るシャルの瞳に結果が映った。それまでの膠着が嘘のように。一気に膨れ上がった黒色は白を覆い尽くしてしまった。

光がもう、見えない。

「そんな、うそ」

恐怖を振り払ってでも進む理由が無くなって、止まる。危険が去った訳ではないと、頭でわかっているのに。退避も迎撃も何もせず、できず。

呆然と間抜けなまでに、ただそこに佇む。

だから、気付いていない。

確かに見えなくなったけれども、見えなくなったただけであって、光は、最後まで消えていない。





暗い、暗い、闇の中に私それはいた。

ただ戦いのためだけに作られた——生まれたとは言いがたい。

ただ戦いのためだけに鍛えられた——育てられたとは言いがたい。

いかにして人体を攻撃するか、どうすれば敵軍に打撃を与えられるのか。

格闘術、銃の扱い、各種兵器の操縦方法を入力されて、仕上げられていく。

私それは優秀であった。

性能面において最高レベルを記録し続けた。要求された項目を過不足無く完了し、求められた通りの結果を提供し続けた。

疑問も不満も無く、また喜びも無かった。製造された理由と過程を考えれば総て当然だ。感慨など抱くはずもない。それに結果に『心動かされる』事そのものが、必要とされていなかった。

ISという『世界最強の兵器』と定義づけられた存在が登場する。直ぐに適合性向上のための処置を行うという決定が伝えられた。同意は必要ない。性能が向上するのならば私それには施されて当然だった。

『サオーダー・オージェ越界の瞳』。

脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上、超高速戦闘状況下における動体反射の強化をもたらす擬似ハイパーセンサー。

処置の名称であり、ナノマシン処置を施された眼球を指す言葉でもある。危険性は無く、理論の上ではそもそも不適合という現象がありえない——はず、だった

しかし現実には不適合現象は起きた。稼動状態のままカットできない制御不能状態、金色へと変質し二度と元には戻らない左目がその証。

片方の眼球が狂い、

総てが狂いだした。

事故以降、私はIS訓練において後れを取る事になる。

一度だけではない。何度も。それどころか確実に、IS訓練においてのみ最高の成績どころか最低限度の成績すら達成できない。

いくら他のどんな能力が優秀であろうとも、どれだけ大量の兵器を操れようとも。頂点と定義付けられたISが扱えないのでは意味が無く。私はトツプの座から転落した。

私は『優秀』であるべきとされていた。

だから私は『優秀』であった。

『優秀』であるから私であつた。

では『優秀』でなくなつた私は——何なのだろう。

どんな過酷な訓練でも耐えられた。いかなる難敵をも打ち倒してきた。そんな高性能で強靱な筈の自身が、あつけなく瓦解していく。存在する理由と意義を見失い——違う、最初から知らなかつた。存在する理由や意義という最低限度のものが必要とされていなかつた。ならば足場が消えてしまつたのではなく、どこにも立つていなかつた。では今まで何に立つていた、どこにどう在つた。わからない。何もわからない。まず何をどう考えればいいのかわからない。それは、教えられていなかつた。

部隊員からの嘲笑が聴覚から入り込み、蔑みの視線が視覚から入り込んで、内側にある何かが壊れていく。何が崩れているのかはわからない。わかるために必要な何もかもが、何も手を付けられないまま錆び付いていた。

出来損ないの烙印は不可視であるにも関わらず、熱を持たないにも関わらず、それでも確かに私を灼いていく。

『兵器』として不完全とされた。

他の総ても根本的に『欠陥品』なのだと気付いてしまった。

わからない、何もわからない、何も見えない視たくない聞こえない聴きたくない——暗い、暗い、闇の中に私は居る。自問に答えはなく、より深くへ、より暗くへ、止まること無く転げ落ちていく。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。そうだな……お前なら一ヶ月もあれば部隊内最強の地位へと戻れるだろう——お前、名前は」

「はい。遺伝子強化試験体C—0037であります」

「誰が記号を聞いたこの馬鹿者。そんなものいちいち憶えていられるか。もう一度だけ聞くぞ、名前は？」

「——ラウラ・ボーデヴィツヒ、です」

光のような、応えが差して。

世界は一変した。

彼女の名前は『織斑千冬』。世界最強の肩書と、それに見合う実力を持った人。

教官の教えに総てがあった。ISの扱い方は当然の事、当時の私それに不足していた事への応えが詰め込まれていた。

——そうか。ああなればいいのか。

目指す域、取るべき形を識った事で、励むという事を憶えた。強烈だった、鮮烈だった、必然と抱いた憧れこそが、在る理由となった。

自身に欠けている要素を総て備える、あの人に少しでも近付きたい。その感情が不完全な私それを塗り潰し、新たな私それを形作った。

出来損ないで欠陥品の『C—0037』はもう死んだ。

初めて名前を口に出したその日に『ラウラ・ボーデヴィツヒ』へと生まれ変わったから。

教官の言葉通りに、教え通りに。一ヶ月が経つ頃には、IS専門と変わった部隊の中で最強の地位を取り戻していた。

喜びは無かった。安堵も無い。躊躇いも後悔も。かつて見下された部隊員達へも何も思うこともない。ただただ冷めやらぬ教官への焦がれだけがあった。

少しでも知らうと、可能な限り時間を作って話をした。会話も重要だが、何よりも少しでも傍に在りたかった。一秒でも長く見ていたかった、刻みつけておきたかった。

気付いてしまった。

強く、凛々しく、堂々としているその姿に。ごくわずかとはいえ翳りが生じる瞬間があった。特定の話題——特定の人物に触れる時。

彼女にそんな表情をさせる事が、悩ませるという事そのものが。完全な彼女を、もしかしたら変えうるという可能性が存在することが。だから、許せない。

絶対に許容できない。認めない認められない。完全な彼女に憧れる自分が、その完全さに害を及ぼす存在を認める訳にはいかない。

敗北させる。折る。砕く。消す。完膚なきまでに。動いていることに耐えられない。動かなくなるまで壊さなくてはならない。あれを、あの男を——お前<sup>俺</sup>を、

『私は、許さない』

『だったらぶちぶち言ってるねーで、お前が直接殴りに来いや』  
見つけた。

聞こえたのも返したのも声じゃない。ここに音はない。意識そのものの中だから。隅っこで真っ黒い何かにくるまって縮こまっているそのいつの首根っこを空いた左手で掴む。後は引っ張り上げるだけ。連動するように、まわりついてる真っ黒い何かが膨張した。渡さないうという意思表示のようだ。

これは謎の物質なんかじゃありやしない。

そもそもここに『物質』は無い。膨大な量の記号が密集して、黒としか認識できなくなっているだけ。たぶん。

『ちえーすー』

さつきまで空いていた左手の先に、今は細い首根っこがある。では元から塞がっていた右手の先は——柄だ。  
ならば必然として。

その先には、刀身<sup>光</sup>がある。

▽▽▽

「——とおおおああ、あ、ア、!!」

声が轟く。肉声の限界に挑む程の大音量。

形を成しかけていた黒い塊が突如内側から弾け飛んだ。

飛び散った分、その場に残留していた分、すべてが黒い機体の残骸へと姿を変え——戻していく。真っ先に飲み込まれた操縦者も吐き出されるように地に転がる。

逆再生のように液体が固体へ戻っていく様は異様だった。でも誰もそれに対して何も思わなかった。まず見てすらいない。

他の物に目を奪われていたから。直接にしろ、モニター越しにしろ、この光景に立ち会った総ての人間は一人の例外もなく別の物を見ていた。

上へと振り抜かれた刀身が、頭上へと掲げられている。

纏わり付く黒を総て祓って、圧倒的な白が在る。

光が形を成していた。

噴き出した光が刀身の形になっていたこれまでとは、全く違う。出力の上下に伴う僅かな揺らぎは一切見られない。

固形、物質と見紛うほどに確かな刀身。エネルギーであるはずなのに、今では見る者に重さすら感じさせる。元を知らなければ、固体が発光していると勘違いするだろう。

けれど形成する総ては光だった。それでも下手な物質よりも強い存在感を放っている。

目撃した誰もが言葉を失うほどの、圧倒的な——実体だった。

それでも周りを停められた時間はそう長くない。一人、また一人と我に返っていく。

感じ方は千差万別で、感嘆だったり、恐怖だったり、不安だったりした。

けれども大半の者が次に抱いたのは同じだった。原因不明の事態を解決したのが正体不明の現象という気持ち悪さは残るが、それでも解決したことに違いはない。

だから、大体は安堵していた。

この騒動はこれで終わったのだと。



「ぶえー超気持ち悪い!!」

頭ン中に残るさつき之余韻を消したくて頭を全力で振った。

余計気持ち悪くなった。

吐きそう。

前に出るとは言ったけど、相手の頭ん中までのめりこむ羽目になるとはさすがに思ってたわ。いや入ったっていうよりか混ざった感じだったけど、超今更だけど何あれ。

とにかく他人の記憶に自分の意識が混ざるのつてもう本当に超絶気持ち悪い。二度とやりたくねえ。やりたくても出来ないだろうけど。気を抜くと主観が迷子になりそうな感じとでもいうのか。しかも一回でも見失ったら取り返しつかなくなるなアレ。

それにしても、だ。

見て——この場合『知った』かもしれん——しまったのは完全に偶然だ。でもあんだだけ尊敬してるんだ。さぞ劇的な出会いをしたのだろうと推測するのは馬鹿でもできる。

だから予想通りではあったんだけどさ。

ただ予想を正面から叩き壊すっつーか、思ってた以上だったっつーか。

もう問答無用でかっこいいじゃんズルい。何であんな男前なのの人。凄い完璧に逆光になってて一枚絵みたいになってるじゃねえか。

一番必要なタイミングに一番必要なものを叩き込んでくれたんだ。

そりゃ、ああも心酔するわな。

「……………」

「……、機体状況、実体ダメージレベル高、エネルギーカートリッジ残弾数《0》、エネルギー危険域、各機能、停止寸前ですが、戦闘終了まで、何とか保たせました」

見下ろす先に、そいつが転がっていた。うつ伏せなので顔は見えない。

さあて。覗き見みたいになったのは後でごめんなさいするとして。それでも俺は知れてよかったと思うよ。

お前は本当に、ちゃんと千冬さんが好きだったんだな。

よくある名前や肩書に酔った薄っぺらなものなんかじゃなくて。ちゃんと会って話して教えられて、感じた魅力の結果として好きになったんだな。

オツケー、わかった。わかったよ。

やっぱりお前、許せねえわ。

「いーつーまーでー寝ーてーんーだ——」

【……………あの、機体の状況がですね、もうですね】

脚を上げる。それだけで身体が軋む。倦怠感の凄いのにとわりつかれている。肉体ですら既にそれだけ限界。一番負荷がかかった頭の中はもつと酷い——だから？

「立てオラア!!」

脚を振り下ろす最中に黒い機体を爪先で引っ掛けた。かけた回転によつて黒い機体が操縦者ごと宙に跳ね上がって、綺麗に脚から落ちた。放つておけば再度地面に倒れるだけのそれに向かって、白式が刀を振り上げた。

【えっと。あの、あつ……………はい】

当たるところか掠りでもすれば終わるだろう。

当たらなければ、まだまだ続く。

今にも倒れそうになっていたのではなく、後ろ向きに反っていただけ。反りで蓄えた勢いを加えて、前方へと折れ曲がってきた。

身体全部で繰り出された頭突きが、一番ヤバイ頭部を盛大に叩き揺らす。視界が不自然な明滅を繰り返した。割れたか切れたか、こちらの額からぱたぱたと液体が滴る。あちらでは眼帯がはらりと地に落ちる——衝撃で外れたのか、外したのか。

悲鳴みたいな音を上げながら残骸寸前のレールカノンが首を向け——る前に刀身を突き刺した。何の抵抗もなく刀身は砲身にするりとねじ込まれる。

瞬間、レールカノンは破碎音混じりに急稼働、爆発。衝撃に煽られ

るまま、手の中から雪片式型がすっぽ抜けて宙を舞う。こちらの攻撃で爆発したのではない。最初からこっちの武器を“巻き込む”のが目的だったのか。

それでも至近距離での爆発だ。こっちどころからウラ自身の身体も叩く。

“互いに”ぶっ倒れそうになるのを堪えて踏み止まる。歯を食いしばって、突き刺すほど強く地面を脚で踏みしめて、顔を上げる。解き放たれた金色の瞳。放つ無機質な輝きを、ねじ伏せるように睨み返す。

「今まで見てきた中で、お前が一番本物で、お前が一番許せねえ……！」

直接会っておきながら、強さしか見えなかったのかこの節穴野郎が……!!」

「……いい、許さない、許さない、認めない、認めてはいけない、絶対、絶対に……!!」

てめえは本当に本気の本心で、織斑千冬は完全に完璧で最強であると憧れ叫ぶ。

確かにカツコイだろうよ、美しいだろうよ、崇めたくもなるだろうよ。

でも、でもな。違うんだよ、それは俺の知ってる織斑千冬とあんまりにも違いすぎるんだよ。俺が知ってる織斑千冬はもつとぐーたらでダメ人間だ、もつと可愛げがあつていじりがあるんだよ。確かに強いけど、それはあくまで要素の一つであつて、根幹じゃないと俺は思っている。

ならばお前の憧れを肯定してしまつたら。俺の好きなどこ全部否定する事になるっつー事だろ——認められるかそんな事ッ!!

俺が偽物であるかは、ここでも何にも関係ない。

てめえが言う通りに『弟』として俺は不出来な偽物だ。でも今俺を突き動かしているのは、偽物として過ごした間の思い出だ。今まで俺の子を見てきた結果として在る気持ちだ。

“完璧な千冬様が好き”

という、お前の『本物』に匹敵する理由が俺にはある。



俺の戦う理由、お前の否定を真正面から迎え撃って、逆に否定するだけの強さのある理由。紛れも無く『本物』の理由、それは――

“俺はちよつと抜けてる千冬ちゃんのが好きだから!!”

「ラウラ・ボー・デヴィツヒ――ツ!!」

「織斑一夏――ツ!!」

話し合え？ 譲歩しろ？ ――無理だね！

言葉を尽くしても足りないんだ。より上位の記憶を交わしたって全然足りやしない。

俺やこいつみたいなのは、直接ぶつからなきゃ、理解は出来ても納得出来ない――馬鹿だから！ 俺達はそういう生き物なんだから！

まだ何にも終わっちゃいない。

こんな中途半端じゃ終われない、止められない。

むしろこつちとしちや、ようやく本格的に始まったようなもんだ。

真つ直ぐ前に叩きつけるように突突き出されたき出した。

顔面にねじ込まれた鋼の拳から、肉を叩く感触と音がするした。

さあ！ 人生を示そうぜツ!!



ただの当たり前事実として。

別に俺が勝ったからって千冬ちゃんの可愛げがアップする訳でもない。

別にラウラが勝ったからって千冬様がより素敵になる訳でもない。どう振る舞うか決めるのは千冬<sup>ほん</sup>さんだ。そも俺等程度の喚きに影響受けるほど繊細な人じゃねえし。

そんなこた俺もラウラも百どころか千も億も承知である。でもだからって大人しくしてられるかって言うそれは別問題な訳よ。現に我慢できなかつたからこそ今俺達は、潰し合ってるわけだしさ。

「……ぶ、つはッー」

「づ、う、うう……いー」

突き刺さった拳に意識と身体を吹き飛ばされないよう、踏み止まる。

スクラップ骨組み寸前の白式にカットした装甲や機能を再度実体化させる余力は無い。レーゲンも大半のパーツと機構が物理的に飛び散って、最低限度の機能しか生きていない。

最低限度は、生きている。

でなければ俺達は立っていられるかも怪しい。更に殴ったり蹴ったりできるのはISのアシストがまだ辛うじて生きているからだ。立つという意思を持っているのは間違いない俺達自身だが、それを支えているのはISという鋼の四肢だ。

だから“勝敗”はISの有無で決まる。

装甲がある部分を攻撃しても、物理的な破壊と引き換えにエネルギーを節約できる。だが露出した生身の部分なら話は別だ。急所への攻撃に対しては特に。

機体のエネルギーが残っていても、俺達が意識を保てなきや意味が

無い。逆に言えば狙う箇所次第で確実に相手のエネルギーを削れるという事でもある。

『第二回モンド・グロツソ決勝戦のあの日！ 貴様が居なければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは想像するまでもない、そうなるべきだった！ そうならなければなかったというのに!!』

『っは——！ やっぱそれ言ってくるか——！ くっだらねええ！ 世界に認められない程度であの子の強さが霞むかよ！』

首を倒す、人体の可動域の限界に挑むくらいに。横薙ぎの手刀がこめかみを削る取るように掠めていった。巻き込まれた髪の毛と薄皮が、身体から引き剥がされて散っていく。

避けながら放った拳を相手の鳩尾——ずらされた。シールドでなく直接肉にめり込んだ拳、吐き出される赤色混じりの体液。同時に伸びた腕が抱え込まれて捻られた。肉と骨と筋が音を立てて千切れていく。回転方向に合わせて身体を捻りながら蹴り。頭部を叩く筈だった脚は装甲少しと肩口の皮膚の一部を削り取る程度に留まる。

『そうだ、教官は強い！ 私と違って本当に強いというのに！ 何故何も知らない有象無象に嘲笑されなければならぬ!? 引き金となったのは貴様だ！ 貴様のせいだ！ 貴様さえしくじらなければ、教官は今も名実ともに最強であったのに!!』

『あーうんそこは俺のせいだねごめんなさいだわ!! でもな、俺としちゃあな!! 笑われるって解ってたろうに、肩書の重さも解ってたろうに！ それでも——弟っていうだけで、俺を助けに来てくれたあの子を！ 誇りに思うしすげえと思うし素晴らしいと想ってたんだよオラア!!』

言葉を交わしても足りないとはいえ。

だからって黙ったまままでいられるかっていうとそれもまた別問題なのよな。

鋼で延長された四肢を叩き付けあいながら、足りずに意見も叩き付け合う。

『言葉』ではない。今の俺達は肉声を発する余力があるなら攻撃に回す。それにこの戦闘速度でこんな長文をちんたら喋っているのは

あつという間にボロ雑巾だ。あと開く口が互いに物理的に歪み始めてるから。

じゃあこれは何かつて、本当に『意思』そのものとしかしいようがない。

俺達はまだつながっている。本格的に混ざりかかったのは一瞬だけだが、その余韻か後遺症か。俺達の間には何かしらのラインがある。通信よりも鮮明で、速く、重い。

『もつと傍に居たかった！ もつと話したかった！ お前はそれが許される！ 弟だというだけで！ それに見合っているだけの力もないの!! 許せない、許せない許せないッ!! 嫌だ、嫌だ！ 嫌だッ！ 気持ちが悪い!! なんなのだこれは!!』

『折角だからここで憶えてけガキ！ 嫉妬っていうんだよそれは!! うらみでつらみでねたみつつうんだッ!!』

『ふざけるな！ そんな物が私の中にある訳がない！ あつていいはずもない！ あつてはならぬ、』

『うるっせえよバーカ!!』

ISの腕部の拳は文字通りの鉄槌だ。それがラウラの頬にずどんと突き刺さつてごどんと音を立てた。左を叩き込む前に膝がこつちの腹に入った。思わずくの字に曲がった身体、振り下ろされるのは組まれた拳。身体を跳ね上げて着弾を頭部から肩口に逸らす。目に真っ直ぐ飛んで来る手刀を殴り飛ばして弾く。初撃に隠れた二撃目で耳の端を抉られながら、打ち込む。

ISの戦闘で起こる筈の鋼と鋼のぶつかりあう硬い音はずっと少ない。代わりに硬い鋼でやわらかい肉を叩く音がずっとずっと多かった。

なにせ回避が互いに最低限だ。避けるのがまどろっこしいのと、大きく身体を動かす余力が無いから。更には攻めるといふ意思を途切れさせたなら、そこを攻めこまれて終わりそうだから。

『何故押しきれない!? 機体の性能にはもはや差も違いも関係がないはずだ！ 操縦者としては私の方が性能は高い筈なのに!』

『なんでだろうなあ！ ふしぎだなあ!』

なるほど確かにその通り。攻撃の繰り出し方、狙いのつけかた、受け流し方、おおよそ総てが俺よりラウラの方が上手い。これが単純な戦闘なら俺が勝てる見込みはずっと低い。

問題なのは、このケンカは意地の張り合いでもあるということ。ラウラの技術の高さの裏に、まともでない出自がある。こいつがこいつになったのは、千冬さんと出会ったあの日だ。経った時間があまりにも少なすぎる。心が発展途上どころじゃない。芽吹いた程度のものでしかない。

『馬鹿にしているのか貴様ア!!』

『全力でしてるう——!!』

だから、揺れる。持っていて当たり前の『感情』が噴き出すということに。そんな当たり前の事にも慣れていないから戸惑ってしまう。行動に確信が持てないから鈍る。感情的な自分を肯定できないから遅れる。比べ合う以前に『我』が育ちきっていない。

技術的にはラウラの方が圧倒的に高い。

でも精神的には俺の方が圧倒的に凶太い。

拮抗している。どちらも有利な部分があつて、どちらも不利な部分がある。だからどっちが勝つてもおかしくないし、どっちが負けても不思議じゃない。

釣り合っているだけだから緩められない、止められない。更にもっと上げていく。出せる総てを費やして意思と暴力をぶつけ合う。

こうしないと伝わらないから。

どうしても伝えたいから。

その点において、俺とラウラは全く同一だった。

『貴様が汚す！ 貴様が壊す！ 教官の強さを、鮮烈さを！ わたしの唯一の思い出を！ 唯一の憧れを!! きさまがあっ!!』

『てめえの理想はあの子を歪める！ “強さ”だけあつてもただの化物だろうが！ あの子は人間なんだよ!! てめえが憧れを譲らないように、俺もあの子の日常を譲らねえ!!』

俺もラウラも本当に本気だから、絶対に手は抜かない。

たとえば伝わってくる気持ち——泣きじゃくってる子供の叫びの

ように聞こえても。

いや、だからこそ、本気で応えなきゃいけないのだ。欠片でも偽りやごまかしを混ぜちゃいけない。

『っだらああああア!!』

『うあああああッ!!』

何度も放つ。何度も喰らう。身も心も音を立てて削れていく。それでも俺達が諦めない限り、ISが続ける事を可能にしてくれる。髪が千切れても、皮膚が剥がれても、骨にヒビが入っても、爪が割れても、歯が砕けても——芯が、折れない限り。

ただ、いつまでもは続かない。

互いに気力が過去最高にハイでも、肉体と機体の方が付いていけないだけの余力が無いから。逆にここまで長引いたのが不思議なくらい。直に殴り合いをしている理由として、一番は互いに相手がムカつくからであるが。そもそも武装を失っているのだ。

しかし大半の武装が消失、損傷して使用不能なシュヴァルツエア・レーゲンに対して白式の雪片式型は健在である。手を離れているだけだ。

量子化と実体化で手元に引き寄せるには精神的な余裕が足りない。一瞬以下の集中でも、逸らしてしまえば潰される。だが頭上をくるくるしてるのは、待っていれば重力で勝手に落ちてくるのだ。ぎりぎりで釣り合っている現状に、その変化は劇的過ぎる。

我慢にも限界はある。

気力で誤魔化せる範囲はもう過ぎている。

どちらがどう足掻いても、そこが決定的な分かれ目になるだろう。

「——ッあああ、ああああああ!!」

肉声が迸る。ラウラが両腕を振り翳す。紫電が奔る。小規模な爆発、剥がれ落ちる装甲と零れていく内部部品。加速した損傷で指のほぼすべてが欠けたその腕もどきでは、もう鋼の拳は握れまい。

けれども、プラズマの刃が生えた。

戦いの裏で機体の自己修復を走らせていたのか、ただ気合で何とかしただけなのか、理由は推測が付かず、また関係が無い。とにかくラ

ウラはこの結果を引き寄せた。

出し惜しみをしないのはこちらも同じ。

これが今回作れる最後の力場。一瞬でもいい、すでに自力で飛び上がれない身体を僅かでも持ち上げてくれるならば。今の白式は飛行能力を失い、浮遊ですら困難な状態にある。けれども脚に内臓された機構ならば覆せる。飛べなくとも、跳べる。

『動けッ！ 戦えエ！！ シユヴアルツエア・レーゲンツ！！』

『突っ斬れ白式』—— ツ！！』

『言っただろ、お前の相手は』

インパクトの瞬間。ラウラは物凄く呆けていた。一瞬だが、確かに呆気にとられていた。心の中はなぜという疑問で埋め尽くされていた。

零落白夜は強力な能力だ。何より警戒していたんだろう。状況を一瞬でひっくり返せるだけの爆発力があるのは事実だし。

そして何より『織斑千冬』が使っていた武器、能力でもある。ラウラ・ボーデヴィツヒにとって『織斑千冬』は絶対である。彼女の扱っていた『零落白夜』もまた特別なんだろう——だから、最後の最後に目が逸れた。

拘りの差。『絶対』を使わない訳がないという思い込みが、致命的な隙を生む。

『俺だって』

彼女の経歴に刀が共にあったように、俺の人生の獲物は別にある。というか今もかなりの頻度で使ってる。

これまで文字通りに俺を支えてきた物だ。不慣れな刀とは慣れが違う。馬鹿は物覚えが悪いが、繰り返せば憶える。俺っていう馬鹿が人生で繰り返して続けた事だ、『絶対』じゃなくとも軽くはないぜ。

——蹴りだ。

最後の力場を足場にして、跳び回し蹴り。プラズマの刃に焼かれながらも振り抜かれた脚が、ラウラとシユヴァルツェア・レーゲンに叩き込まれる。容赦はない。遠慮もない。今の俺に出せる正真正銘の全力を込めた。ならば見誤ったラウラに防げる道理は欠片もない。

砕くのは装甲と闘志、辛うじて保たれていた意識の糸を引き千切る。吹き飛んだシユヴァルツェア・レーゲンは二度三度バウンドして転がって、転がって、止まる。

すんと雪片式型が向こうの地面に刺さって音を立てる。脚を突き刺すように着地、辛うじて成功、立つ。ラウラは倒れている。俺は立っている。ラウラは立たない。

「——の、——だ……！」

致命的なダメージを引き受けた黒い機体が、消えていく。光の粒子となって虚空に解けていく。アリーナのシステムが機械的に告げる。ブザーが鳴り響く。試合終了の合図。そして、

「俺のツ!! 勝ちだあああああああツ!!」





おいまた混ざったぞ。

『私は、負けた』

だが人格も砕いて混ぜ込めな勢いだつたさつきよりはずっと軽い。意思を示しあつていた時よりはやや深い。ただ繋がり自体がもう切れかかっているのか、全体的に揺らいでいる。

『間違っていたのか、あの日の憧れも、そこから生まれたこの私も』  
『そんな訳ねーだろうが』

視線——つてよりかは意識でラウラが在るのを感じている。向かい合っているようで、背中合わせのようでもある。近いようでもあるし、遠いようでもある。

『……お前が言うのか。私の憧れを否定して、砕いたお前が』

ふくれっ面でこつちを睨む『ラウラ』は実際のラウラよりも小さい。小さいっていうか幼い。自我の芽生えが千冬さんと会った日、という推測を裏付けるように。そんなに大きくない身体にすら、心が追いついていない姿が在った。

『叩いた程度で砕ける程やわじゃねえだろてめえ。お前の憧れは俺が気に入らないだけで、別に間違ってる訳じゃねーよ。お前が見て感じて想った結果、抱いた憧れなんだから。だつたらお前にとつては間違いなく正しいよ。ただそれを俺含め他人がどう想うかは別の話っつーだけ』

いわゆる精神年齢つてやつ——ちよつと待て。それだと俺はうわちよつとでかい。待ってこれ俺今元の形してるんじゃねえの。か、鏡！ どっかに鏡あるわけねエ——!!

『間違いじゃない、ないんだけど。ただ、まあ。折角こつちに來たんだしき。この機会にもつと千冬さんのこと、色々見ていけよ。話してけよ。思い出話だつて付き合うぜ、俺だつてあの子の外面に興味ある

し』

『どうして——そんな、』

ラウラが困惑しているのは、俺の意思に嘘が無いと伝わっているから。気にしていない風に振舞っているのではなく、本当に気にしていないと伝わっているから。

確かに互いに潰し合った。敵意で削り合った。相手の主張を否定して砕きにかかった。けれども俺が否定したいのはラウラの憧れ、その奥の理想像だけで——決してラウラ自身ではない。そこさえ除けば好きとか嫌いをはつきり言っつてぶつけてくるタイプは嫌いじゃない。

『全部知って、それでもまだ強さがいいって言うならそれは、それでいい。でも最終的に——あの子の全部を好きになつてくれると、俺は嬉しい。お前みたいな強い奴があの子の味方になつてくれると、俺はとても嬉しい』

『どうして、私にそう言える？ 私には、本気でお前を潰そうとしたらどう!? 戦つただろう!? なのにどうして、どうしてそんな受け入れるような事を、言えるんだ、お前、は……』

俺はこいつに変わって欲しいから戦つたんじゃない。変えられるとも思っていない。結局、暴力に出来るのは相手の否定と自己の主張だけだから。

ただもう少しだけでも、俺の知ってる千冬さんの事をこいつにも知って欲しい。つか見てる部分がちよつと違うだけで、俺とこいつは同類だと思ふのよ。だからもうちよい一緒に過ごせば、嫌でも俺の言いたいことわかるんじゃないかな。

『織斑一夏、お前は、お前は——』

ラウラは様々な感情を蠢かせる。困惑、怒り、悔しさ——色んな感情にさいなまれて、ぐちゃぐちゃなその様は『人間』にしか出来ない事だ。

全部の感情を一通り現し終わり、その殆どが内側に消えるように引つ込んでいく。消化したのか、一旦脇に置いたのか。どちらにしろラウラが自身の感情を受け入れた事に違いはない。

『——強いな』

穏やかな顔で、けれど力強く。

ラウラが俺を賞賛する。

『あ。ところで話変わるんだけど、ちよつと聞いていい?』

ラウラの意識全体が、がくーんと傾いだ。

前のめりにずっこけた的な反応なんだと思う。たぶん。

『わかつてきた、わかつてきたぞ……! この凶太さも、貴様の強さの一部だ……! わかっている、わかっているが……! どうにも無性に認めたくない……ツ!』

『大袈裟なやつちやな』

ちよつと気になってた事がある。

さつき俺はラウラの記憶を知った。覗いて見た、のではなく“混ぜ”って“知”った。こちらが一方的に見に行つたのではなく、互いの手持ちを同じ場所にぶちまけた訳だ——ならば。逆も起こりうるのではないか。

俺がラウラの総てを知つたように、ラウラも俺の総てを知つたのではないか。

『お前には、俺こつちの分はどう見えるんだ?』

『……………』

揺らぎが、加速する。恐らく今度こそ本当に“切れる”。

ラウラは俺——というよりかはその後ろ側にある何かを見る。そして繋がりが切れる前に、答えを寄越した。



——見えないものが、見える。

半分正解、半分ハズレ。

文字や言葉が表せないように、記憶も何かしらバグって伝わらない事だけ伝わるらしい。セキユリティ嚴重で良かったよーな残念なよーな。

『……………そうかー。これでも駄目なのか。こっちの奴にはどーやっても伝わらねえんだな、前の事は』

ま、いつか。

▽▽▽

——教官は、その『弟』の事をどうおもっているのですか  
どうしても我慢できずに、聞いてしまった事がある。

よく考えずとも、わざわざ質問する事ではない。それよりもっと他の有意義な質問に時間を割くべきだ。ISの操縦にしろ、生身での肉弾戦にしろ、当時の私に不足しているものはたくさんあったのだから。

「……………姉と弟だ。それ以上でも、以下でもない」

想定通りの答えだった。けれども教官の顔に浮かんでいたのは、一度も見た事がない表情だった。力強さも、凛々しさも欠片もない。どころか弱々しいとしか言えない。哀しそうで、辛そうで、見ているこちらの胸が締め付けられるような。

それはきつともっと多種の感情が複雑に塗り込められていたのだろう。当時の私には理解できる筈もない。それでも、その気持ちを向けられる相手が特別なのだとは解った。

だから私は一見無駄に思える質問をして、その事実を確認したのだ。

私の知らない顔をさせる相手は、きつと私より特別だ。

それが許せない、私が一番でありたかったから。

想うだけでなく、想われたかった。

彼女の完全さを害するから許せない——そして、彼女に何も影響を与えられない自分が何よりもっとも許せない。

——羨ましかった、だけだった。

自分の気持ちがちやんと判っていれば、結果は違ったものになったのだろうか。

いや、それだけじゃ駄目だろうか。

それに加えて、私は前提を間違えていたから。

最初から弱くなかった。目に見えて強力ではないだけだった。奥に得体のしれないものを隠していた。教官よりは強くない。けれどもあれを弱いとは決して言えない。『弱い相手』という思い込みを最後まで覆せなかったのが、きつと何よりの敗因だ。

あんなものを抱えて、まともでいられるなんてまともではない。

少なくとも私に同じ事は出来ない。攻撃力や性能の面において、私の方が遥かに優っているはずなのに。ならばきつと他の部分が私より優れているのだ。

あれは、強さの別の形の一つ。

それが何なのか、今の私には解らない。それが何なのか、私は知りたい。きつとそこには私に必要な物があるのだ。今日の敗北を勝利へと変える何かがある、そう思えてならない。

お前を、知りたい。

もつと、深く。

ああ、でも。生まれる前でも、生まれた後でも初めてだ。

負けたのにどこか心地いい、なんて。

▽▽▽

「うーん、やっぱり微妙だなあー！」

バンバンバンバンと机を叩きながら、失望を言葉に変えて吐き捨てる。

過程がどれだけ白熱しようが、求めていた結果が得られないのでは意味が無い。

「質はもう上げられないから、今度は量で……でもそうすると不確定要素が増えるし不純物も混じりやすくなる、でもそっちの方が……コントロールしきれない？ それは大丈夫、わたしがもつとがんばれば

いいだけ………とりあえず、今回は」

出てしまった結果は仕方がない。考えるのは次のこと。過去どころか今にも留まらず、次の次、そのまた次へと彼女は思考を巡らせる。同時進行で考えた内容が、組み上げられ、用意され、根回しされて——現実が、変えられていく。

そのついでとばかりに、彼女は宙に浮かぶディスプレイの1枚へと指を伸ばして。

「はい、おかわり」

▽▽▽

IS学園に鳴り響いた警報は二種類あった。

一つはアリーナ内で異常事態が起こった事を報せるためのもの。もう一つは——所属不明機の襲来を報せるもの。

アリーナ内で始まった混乱に少し遅れ、真っ赤なビームが学園へと飛来する。

攻撃自体は自動展開したシールドに防がれはしたものの。たった一撃でシールドは最大出力での展開を強いられる。前回現れた無人機の武装ならば完全に耐久が可能な筈のシールドが。今回の襲撃者が、前回よりも強力な武装を施されている事が示される。

高速で迫り来る機体は、黒いマネキンの様な姿をしていた。

これまでと同じ真っ黒な装甲板。けれども前回より遥かにスマートに成形され、女性的なシルエットを描いている。頭部の複眼レンズはバイザー型ライン・アイに置き換えられ。肥大化したハイパーセンサーは羊の巻角のようだ。右腕は肘から先が巨大なブレードになっており、左腕は4つの穴を開けた巨大な砲。最初から戦闘だけしか想定されていないのが見て取れる。

無人機が左腕を振り翳す。

数発、どころかもう一撃でもまともにビームを受ければシールドは消失する。けれども次に無人機が撃ったのはシールドではなかった。下方——海面より飛び出した砲弾と思しき形状の物体である。

ビームの直撃を受けた砲弾は呆気無く融解し、破壊される——前面

装甲だけが。即座に前方の装甲と、後方のブースターがパージされ、砲弾は機体へ姿を変える。

現れるのは『訓練用』から『戦闘用』に戻された打鉄、その一機。全体的に装甲が増加され、物理シールドは単純に大型化しただけでなく、刺突用のスパイク、更には小型のブースター等も擁した複合兵装と化している。両腕にはどちらもブレードを装備し、白兵戦用に調整されているのが見て取れる。

そしてなによりも中身が別物とっていいほどに違う。ISにおいての生命線であるエネルギーの総量が訓練機とは比較にならない。

大型のブレードを振り翳す打鉄を迎え撃つため、無人機も刃と直結した右腕を振り上げ——ようとして、弾丸に殴りつけられて体制を崩す。そこを狙いすまして、打鉄がブレードを振るう。

装甲を削り取られながらも、無人機のセンサーは休みなく蠢く。

ここよりまだ遠く、攻撃目標であるIS学園。その学園をすっぽりと覆うシールドの外側に大型の台のようなものがくっついていて。

正確には、シールドに沿って全周に稼働できる砲台。そこに銃身だけで10メートル近いレールガンを構えて座すのは、打鉄と同じく『戦闘用』のラファール・リヴァイヴ。

大量に増設された増加装甲は物理的な防御力を引き上げ、学園から直接供給されるエネルギーはシールドの出力を引き上げる。

桁違いに跳ね上がった重量に加え移動を完全に砲台任せにしている分機動力は無いに等しい。だが役目は砲撃支援だけでなく、敵の攻撃を引きつけて高い防御力でそれを受け止める事も含まれている。

単純な性能だけを比較すれば、無人機の方が優っている。数の優位もやりようによっては覆せるだろう。だが学園のISを駆るのは決して素人ではない。世界のトップ10ではないが、確実に上から数えた方が早い実力者達だ。

だから勝敗はほぼ決まっている。

最終的に、無人機は破壊されて海に墜ちることになるだろう。学園を破壊することも、そこで暮らす生徒を傷つける事も決して起こりえないし、起こさせない。

この無人機には、絶対に不可能だ。

学園が襲撃者の存在を察知したのは、ビームを放たれたから。そこから前は無人機の存在も行動も、察知できていない。移動中にユニットを脱ぎ捨てた事も把握していない。それがステルス機構を搭載した外部ユニットである事も、知らない。

上空より別の無人機が迫り来、

▽▼▽▼

「——ッ!!」

いや。

いやいやいや。

「嘘だろおい、またかよ!?!」

上から何か来る。何も見えないし聞こえないけど、敵なのはわかる。それだけ解れば十分だ。どうでもいいけどパターンのあの黒いのが可能性がすこぶる高い。どうでもよくねえぞこれ。てか絶対そうだ。

「シロ! 機体は後どのくらい保つ!?!」

「……………」

軋むのは意識と身体と機体、とにかく全部。

だからこそ動かなければならない。身体も機体も限界だ、俺とラウラはこれ以上は何をどうやっても足手まといにしかない。ならばせめて引つ張る足を少なくするためにさっさと引つ込むに限る。めっちゃ早く解る時ってさ。

来る相手もめっちゃ速いって事なんだよね。

「あつそうだラウラ拾わねーと! シロ! もうちよつと頑張れない!?!」

「……………」

何かが上空から降ってき——突っ込んできた。奔った閃光は遮断シールドがぶち破られた時のもの。爆音は何かが地面に着弾した時



のもの。掘り返す勢いで地面が吹き飛び、巻き上がる土煙が周囲に吹き荒れる。

塞がった生身の視界を補うために、機体のセンサーで転がってるウラの捕捉を試みる。が、反応が無い。それどころかさつきから返答すら無い。襲撃者に気を取られ過ぎていた。シロと白式の様子がおかしい事に、ようやく気が付く。

「ア・サアウアヒア・サアウア楹ニアサア、ア・サアウアシアソアサア  
螻・サアウアヒアシア睽テアナアツアg」

「待ってそれ何語?!」

思っていた以上に様子のおかしさが凄まじい。聞こえてきたのが何なのか純粹に理解できない。間違いなく声ではない。音というにも歪な何か。破損した音声ファイルを無理矢理再生した、もしくは文字化けをそのまま発音したかのような。

「……………あれ?」

がらんがらんと音を立てながら、すぐ横に塊が転がってくる。破片と思しき物体は、地面の一部でも、アリーナの部品でもない。真っ黒い装甲版で覆われた、何かの一部。前回の延長線上と思しき造形だから、何なのか見当がついた。それは頭部と呼ばれる部品だったはずだ。

それは。俺が襲撃者の正体だと思っていた。

無人機の——残骸だった。

では、降ってきたものが何なのか。その答えは目の前にある。近すぎて見えないほどに直ぐ傍に居る。頭の中のどこかで、攻撃されると察知していた。けれどもそれが意識に伝わる時はすでに攻撃が終わりかけている。意識が逸れたのは無人機の残骸を確認した短い間だったのに。一秒を何十個にも小分けにした、ほんの瞬間だけだったのに。

回避防御迎撃どころか、驚く事にすら時間が足りない。

エネルギーシールド、装甲、絶対防御、ISスーツ、皮膚、肉、骨

——進行方向にあった、“何もかも”が切り裂かれる。振るわれた何かに押されて、千切れかかった身体が吹き飛ばされる。最後に、視界

に映るのは、機体だけでなく身体だけでなく、遅れて吹き出した赤い血すら、も、切り分けるかのように在る、

真つ白い光を放つ、爪。

▽▽▽

根本的に形状が違う。

頭部、胴体、四肢という構成する要素の呼称と数はほぼ同じ。けれども配置が全く異なる。特に『腕』は呼び方も異なる。腕と呼ぶのは二足歩行の形状の際にこそ相応しい。四足歩行の形状をしているのだから——『前脚』と呼ぶべきだ。

純白の装甲<sup>毛皮</sup>、下にフレーム<sup>骨格</sup>、更に奥には内部機構<sup>臓</sup>、最奥には中核である結晶体<sup>クリスタル</sup>。無人機は間違いではないが、正しくはない。人の代わりを詰め込んだのではなく、もつと前の段階から『人』という要素を必要としないように造られている。

地面を踏みしめる四肢の先の爪、口内から覗く牙。人間よりずっと鋭く、強靱に出来ている。元々武器として使うために在るからだ。更に、その爪牙は淡く輝いてすらいる。まるで光を固めて形にしたかのように。

頭部で、目に相当するセンサーの集合部分が一際強く真つ赤な光を放つ。地を踏みしめ地面を抉り切る爪と、開いた口から覗く牙もまた一層強く輝きを増した。

獣のよう、ではなく。

真実として『獣』である。

“鋼鉄のおおかみ”

轟いたのは爆音ではない、絶叫でもない、駆動音でもない。もつと力強く生々しく、聞くものを震わせる凄みや恐ろしさを塗り込められている。人工物にはありえないはずの、本能から発せられたもの。

鋼の内から生じた野性が、ここに『咆哮』する。

▽▽▽

送り込んだ手駒を破壊された。つまりは企みを潰された事になる。たとえ既にほとんど終わっていたのだとしても、予定が完遂されなかつた事に変わりはない。

「——き、」

既に駒に何を命じても応えない。仮に残骸を一つ残らず回収できたとしても、再びあの機体が動く事は無いだろう。なにせ肝心のコアが修復不可能なまでに破壊されてしまっている。

「き、ききつ」

彼女は仰け反って、髪の毛をわしやわしやとかき分ける。突然激しい動きをした両腕によって、傍らに積み上げられていた色々な物が激しい音を立てて崩れた。

それを全く意に介さず。

彼女は心の中一杯に沸き上がる感情を言葉とともに吐き出した。

「きたあああああああ——!!!」

画面に向けられたその表情に浮かんでいるのは、歓喜だった。

満面の笑みがそこにあった。極まりすぎて、喜びという枠からはみ出して、奇妙で異質にさしかかった程に高まった感情だった。

「判らない、解らない、分からない——私が理解できないもの!!」

指先を躍らせる。元から備わっている五感、機械的に拡張可能な他の総てを総動員してデータを片っ端から収集する。それら総てを飲み干しても、脳髄に出来るのは認識までだった。把握には至らない。理解まで到達できない。あれは——完全に別系統の存在だ。

「これなら、これなら間に合うかもしれない……!!」

喜びで震えていいのは声だけだ。指先も思考も一切乱れない、乱さない。それどころか作業はより正確により速く。準備していた物を、嚴重に仕舞い込んでいたそれらを。一気に広げ直していく。

想定通りだったこれまでとは状況が変わった。

想定外の事態とは、当然悪い方向にも起こりうる。

しくじってしまったら、もし■なせてしまったら、何もかもが無駄になる。気が遠くなるほどの長い長い、これまでの、

「——ッ!!」

ぶんぶんと頭を振って、弱気を内から追い出して。

彼女は“未知”へと向き直つ、

「フアフエアッ!?!」

た瞬間に愕然とした。

素っ頓狂を極め尽くし、奇っ怪としか呼べない声の成り損ないが声帯を飛び出した。先程までの喜びの釣り合いを取り戻すかのように、表情は完全なる真顔。更に凄まじい勢いで青ざめていく。ブワア——と溢れるのは冷や汗。小刻みに震える身体が周囲を揺らしてカタカタと音を鳴らす。

「……………え、何で? 何で白式のP——パートナーAI落ちてるの? 今一番大事なトコだよ何でえア——!?!」

▽▽▽

「アブソリユートのP——パーソナルAIがエラーを吐いた……………?」

本来の命令は新たに出現した無人機の撃墜だけであった。ならばアリーナの内部に突入したのも、無人機を必要以上に破壊したのも、白式へと攻撃したのも——総て鋼の獣の『自己判断』という事になる。「おかしいぞ、おかしい。ありえない。他の二匹はともかく、アブソリユートにはまだ暴走できるだけの自我は無い筈なんだ」

広げていた機材を吹き飛ばすように押し退けながら、上着だけ引っ掴み与えられた部屋を出る。仮付した遠隔操作機能は完全に死んでいる。再び制御下に戻すには本来の機能で繋げ直さねばならないだろう。必要な機材は身に着けている。必要な式は移動しながら組めばいい——今、組んでいる。

出来上がるまで数分程だろう。

本来はその何十倍も時間が必要だ。最適解と反則を束にして殴りつけた結果が『数分』だ。それ以上は縮めようがない。

「……………それまで保つかな」

それは敵にぐるりと囲まれている自身の作品に対しての言葉か。

それとも——一匹をぐるりと取り囲んでいる総てに対しての言葉か。

▽▽▽

——織斑一夏が戦っている場所に、

アリーナとピットを隔てる隔壁は固く閉ざされている。制御を完全に乗っ取られてしまったからだ。通常の操作はもちろん、緊急用の命令も一切受け付けないだろう。

だが。

それはあくまで隔壁が開く動作を取らないというだけである。本来は稼働して開閉する装置が、閉じた位置でロックにより固定されているだけである。溶接されて壁そのものと化しているのでもなければ、空間が断絶したとかでもない。

故に閉じる力よりも強い力があるのなら。

そろそろ定評が付いてきた馬鹿力を叩き付けられたのならば。

「どっせえええええええええええい！！！！」

メゴツシヤア!! と鳴り響くは断末魔。『開く』というより、横方向に『潰れ』ている。隔壁の一部からひしゃげた金属の塊に強制的にラックダウン。

——凰鈴音が居ない、訳がない。

実際にはレーザー的なアシストやら電子的なアシストがあつたのだが、誰の目にも怪力で無理やりこじ開けたようにしか映らない程の破壊っぷり。

潰れた隔壁だつたものを、鋼を纏った腕が押しつける。カラーリングは朱と黒。次いでその両腕は地面へと付いた。取った姿勢の名称はクラウチング・スタート。

静止は一瞬だけ。

爆発するかの如き勢いで翔け出す機体は——甲龍。

万全ではない。修復が完全に終わっていない事が、両肩の非固定浮遊武装アンロック・ユニットが不在な事から見て取れる。ただし万全でないのは機体の方だけ。操縦者はとつくに全快済み。最高速度に瞬間に上り詰める機動の反動にも、眉一つ動かさないのでその証。早く、鋭く——凰鈴音は乱入者へ飛びかかるべく距離を詰める。

飛び出した甲龍から1拍遅れて、ブルー・ティアーズがアリーナの中へと飛び込んだ。

ライフルを片手で保持して乱入者へと向き直——らない。突進する甲龍とは全く見当違いの方向へと飛ぶ。狙撃位置に移動しているのでもない。セシリアの目的は戦闘ではなかった。

セシリアは試合に備えてピット内に居たため、物理的距離が近かった事もある。暇なので遊びに来ていたという鈴もまた同様。それでも二人が時間を惜しんで、手段を選ばず、強行突入に踏み切ったのは戦うためではない——『助け』に来たのだ。

攻防の途中だった打鉄とラファールにはまだ余力はあるだろう。それでも消耗はしている。無理に戦力として参加するよりも、退避できるならそれに越したことはない。

完全に決着が着いた後に割って入られた残りの二機は論外。二人揃ってポッコボコのベッコベコだったので戦力どころか救助対象である。

まず鈴が所属不明機を引き付ける。セシリアはその間に負傷者を拾って離脱する。機体の万全なセシリアが前衛を務めたかつたところであるが、純粋な近接戦闘能力ならば機体の不調を加味しても鈴が勝る。

先に目的へと辿り着いたのはセシリアだった。吹き飛ばされて来たのか、白い方の機体はピットの入り口付近まで移動していたから。「こ、れは」

絶句してしまった。一刻を争うというのに、数瞬でも無駄にしてしまった。

激戦を経た機体は酷い有様だった。

それ以上に、酷い者。

蒼い瞳に映るのは真っ赤な血の海。ばつくりと開く傷は何より真っ先に血液を辺りにぶちまけている。傷口そのものも大きく深い——では収まらない。だつてもう少して千切れてしまいそうなのだ。(止血、ここまでならもう意味が、いえそれでも何かしら処置を、けれども下手に動かさない、わたくしが判断を下していい状態では……！)

驚愕はある。恐れもある。混乱もしている。それでも茫然自失は有り得ない。目の前の惨状から目を背けるという選択肢は存在しない。逆に直視して冷静に見極める必要があった。

医療技術のある人間をここに直接連れてくるのが一番だ。問題は乱入者がそれを許してくれるかどうか。いや何よりもまず先に応援を呼び指示を仰ぐ必要がある。通信を管制室へ、

「――」

動転していたのか。ここまで気付かなかつた。

目の前に白式の装甲がある。装甲の損傷が酷いのは大半が試合によるものだろう。だから肉体の傷はあの乱入者によるもの——違う、重要なのはそこではない。

肝心なのは、おかしいのは。

損傷が酷いがまだ装甲がある事——つまりISはまだ生きている。なのに何故。

——操縦者の肉体がこうも著しく損傷している？

セシリアの思考が止まったその瞬間と。

鈴が乱入者へと到達するのは、ほぼ同時。

既に手中に連結した双天牙月。高速で回転を加えられた双刃は空を裂き唸りを上げ、内に蓄えた破壊力を解き放つ時を待っている。

(射撃兵装は見る限りは無し！ もーあからさまに超近接型！ とにかく一発ぶち当てて、押すか引くかはその後で!!)

相手の形の異質さには惑わされない。最短で必要な分だけぎつくり判断。残りの総ては初撃に注ぐ。鈴の役目はこの無人機をこの場に縫い付けること。セシリアが二人を連れて引つ込むまで、鈴以外に

意識を向けさせないこと。そのためにはおもいつきりぶん殴るのが最短で最適。速攻。余計な心配や恐れを置き去りにして、播らぎのない最速かつ最大を繰り出す。

『止めろッ！ 近付くなッ!!』

びりびりと響き渡る怒声は、通信によるものか、それと設置されたスピーカーから流れたものだったか。どちらにせよ全員に伝わったのだから、どちらでもよいだろう。

声の主は織斑千冬であった。

誰もが聞き慣れた声であつて、誰もが初めて聞く程に切迫していた声だった。

事態に対する詳しい説明も無い。簡潔過ぎて、忠告というより感情的な怒鳴り声。だからこそ、事態の重大さをより確かな物にする。

——本当の意味で、知っているのは二人だけ。

誰もがその名前を知っている。その能力を知っている。見たこともある人間も多い。このアリーナ内においては、実際に相對した経験のある人間が殆どだ。

それでも織斑千冬の方がより多くを知っている。

実際に使った事のある、二人の内の一入だから知っている。

——一切の制限が取り払われた零落白夜の恐ろしさを、知っている。

視界に白光の線が奔る。繰り出した双天牙月に合わせて、振り抜かれた白光の爪。その軌跡。そこに爪があるのではない。既に通り過ぎたからこそ、線に視えている。

だというのに激突の衝撃は無かつた。確かに接触したはずなのに、柄を握る甲龍の指先は一切の手応えを感じていない。

するり。

と、切断された双天牙月の刃——だった塊が宙を舞う。鈴の視界を、ばらばらと解けていくように分かれた刃金が流れていった。最初からそこで分割されていたのではと見紛う程の滑らかな断面が、映る。

(あ、やばい)



連結を解除。柄だけになってしまった方の双天牙月の片割れを廃棄。急制動、距離を取らねばならない。意識を一瞬たりとも逸らしていないのに。もう振るわれた『爪』が既に目前。腕の中にはまだ双天牙月が残っている。だが、これを翳しても何にもならない。真正の防御不能。唯一回避のみに意味がある。

回避しか、意味が無い。

(うっわ、やば、やばいやばいやばいまさか、そんな、これ——  
——ツ!!)

文字通りの絶体絶命に対して、脳髓がかつと熱くなる。精神と肉体が段階をいくつも一気にすっ飛ばして、フルスロットルに駆け上がる。風鈴音という人間のこれまでの生涯を持ちだして比較したとしても。間違いなく確実にこの瞬間が『最速』だった。

それよりも、早い。

圧倒的に確実に、ただただ単純に普通に、より、早い。

甲龍の右腕が切り飛ばされる。鋼の指先が幾つもの部品に成り下がり、ばらばらと飛び散った。万全に機能して発動した筈の絶対防御は、いとも容易く切り裂かれる。

不幸中の幸いだったのは、ISの『腕』は人間のそれよりも長いという事。甲龍の腕は確かに切り裂かれたが、収められていた鈴の腕の先端は切断箇所よりやや上方。生身は無傷であった。  
まだ。

もうすでに次が振るわれていた爪の軌跡の延長線上には——鈴の胴体がある。

(白式と、同じ、能力——ツ!?)

人間の胴ほどはありそうな太さの脚が質量に釣り合わぬ速度を伴って、奔る。僅かながら慣れた目と、追いつき始めた意識が今度は一撃を少しだけ速く察知する。

出来るのは、そこまで。

ごう、と空を乱す音を引き連れた白い光刃を、受ける手段は無かった。躲す手段も思い付かなかった。確実に切断が訪れると、しっかりと認識してしまうだけ。

悲鳴は無かった。

恐怖が無かったのではなかった。

事実を認識するよりも、その結果として恐怖を認識するよりも、声帯が震えて声を鳴らすよりも、一撃の方が速かったから。



いや、さすがに今回はもう疲れた。

負ける訳にはいかなかったから、総てを賭けて挑んだ。何もかも出し尽くして叩き付けた。それでもギリギリだったから、ほんのちよつとでも出し惜しみしてたら届かなかった。

いわば今の俺は出涸らしである。絞る力を込めすぎて水分を出し尽くした上に千切れるちよつと手前の雑巾が一番近いんじゃないかな。

これ以上は頑張るところか普通にするだけでもキツイのだ。それにはここには俺よかよっぽど優れてる奴が周りにごろごろしてるんだよ。野生動物じみた友達とか、クラスメートのプライド代表とか。俺より強いかどうかはともかく、もつと上手くやれる種類の人間だ。ザル偽装のあいっだって間違いなく俺よりは劣っていない。あんまり交流無いから知らないけど、上の学年にも専用機持ちやら代表候補生とか居るって話だし。あと先生とかも控えてる、はず。たぶん。

そんな訳で待ってりや頭数は勝手に揃っていくだろう。そこで無理に俺一人が突出すると逆に他の足を引っ張る。このまま大人しく引っ込んでた方が上手くいく。

——立て、動け、いいから、早く、普通なら、そうだった。

ただ強いだけの相手なら、ただ怖いだけの相手なら絶対にそうだった。

でも違う。あれは違うんだ。他の誰でもいいけない。俺でなければいけない。だからさっさと立つんだよ、刃を握れって言ってるんだ、動くんだよ走っても跳んでも飛んでも何でも良いから、一番前に出るんだよ——動けつつてんだろうが！

唯一の支えの精神も、緩やかに沈んでいく。末端からじわじわと熱と勢いを失って、このままではやがて消える。その前に、動かないといけないのに。

身体は何も応えない。

機体も何も応えない。

何も、何でもいいから、何だっていいから、応、

【だいたいようぶ、わたしがいるよ】

【ふさわしい刃を、あなたにあげる】

【何でも振れる強い腕を、あなたにあげる】

【どこでだつてくじけぬ脚を、あなたにあげる】

【秘める力に付いていけるだけの強い体を、あなたにあげる】

【あなたがあなたとして振る舞うためのすべてを、わたしがあなたにつくってあげる】

【わたしのこれまでもこれからも、全部——あなたにあげる】

▽▽▽

甲龍が、吹き飛ぶ。

しかし機体にも身体にも、致命的な切断の跡は見受けられない。

【多目的自在装甲板——《黒檻》！ 全ツ板ツ展ツ開ツ!!】

何故か。答えは簡単だ。甲龍を吹き飛ばしたのは斬撃の着弾ではない。

音速を超えた『割り込み』はソニックブームを伴い、たまたま横に居た鈴を遠慮ゼロで思いつきりぶつ叩いてふっ飛ばした。そのままギューーンと聞こえてきそうな程勢い良く回転がかかった鈴@甲龍

はアリーナの地面を跳ね転がって飛んで行く。

鈴の横を通り過ぎたということは、鈴が目的では無かったという事でもある。標的は乱入者——鋼の獣。真っ白い装甲に“黒い何か”がぶち当たる。特異と呼べる程の外見的特徴は有していない。それなりの厚みがある、平べったい板。もしくは帯。

不意打ちで勝ち取れたのは一撃かつ一瞬だけ。数瞬後には黒い先端が切り飛ばされる。そして獣は空中で体を捻り——虚空に四本の脚を突き立てて急制動する。まるでそこに不可視の大地があるかのように、宙を踏み締めてその巨軀を沈み込ませる。

鋼鉄製の狼は、そこで初めて臨戦態勢を取った。目の赤い光と爪牙の白い光が輝きを増す、威嚇として、警戒のために——敵意のままに。睨みつける先は真っ黒い帯を辿った先。

帯が飛び出た元は、セシリアの視線の先でもあった。

そこにはボロボロな機体と操縦者が在った。今も在る。違うのは、機体のあちこちから黒い帯が何本も突き出ている事。その内の一本は操縦者に巻き付き、その身体を無理矢理元の形に戻す。また何本かは地面や壁に突き刺さり、大本である本体を引っ張りあげた。

おおよそ正常な人間の動作ではなかった。操り人形に近く、いやもつと不気味な何か。

セシリアには、見覚えがあつた。

この黒い帯にも。それが規則性皆無で触手のように動き回る光景にも。見ているだけで感じる得体のしれないおぞましきにも。心の底から抑えようがなく湧き上がってくる生理的嫌悪感にも。

忘れもしない、クラスメート代表決定戦の日。白式というISがファースト・シフト一次移行した際に全く同じものを見て、全く同じことを感じているから。

「ひっ」

ああ、だが、今度はここから更に——まだ続く。もつと酷くなる。黒は引き戻されること無く更に吐き出される。代わりに白が、破損していた装甲が、ばらばらと剥がれ落ちていく。機体を覆っていた総てが剥がれ落ちていく。剥がれながら、戻っていく。装甲が崩れていく

のに、フレームは逆再生するかのよう<sup>に</sup>に復元されていく。

本来の形へと。

本来の色へと。

——真っ黒な、機体へと。

【全機能セーフテイリミッター全部ど——ん！<sup>解放</sup> 生体再生機能及び操

縦者感覚増長に神経加速もMAXだ——っ!!】

『零落白夜』。

光量、密度、あらゆる要素が今までとは段違いな光の刃。余波で雪片式型の実体の刃が半分以上吹き飛んだ。幾重にも重ねられた枷をまとめて吹き飛ばしての発動だ。シールドエネルギーも装甲も、絶対防御ですらも切り裂く光刃。

これまでは使えば終わる、終わらせるためにしか使われない必殺の能力だった。

だがしかし。それはどちらか片方だけが持っていればの話。

今この場においては始めるために解き放たれる。

【さあさあさあ！ 本当の本当に出し惜しみなしでれつつごーだよ!!  
今こそ君の本当の本性を——生まれ持った真なる単一<sup>さいのう</sup>を解き放て

!!】

<sup>零落白夜</sup> 必殺と必殺。<sup>獸王爪牙</sup>

これより、決戦。



一つの事しか出来ないということは、とても不便な事なのだ

本来は色んな事が出来なければならぬから。本来は、色んなことが出来るように出来ているものだから。生きていきたいなら、出来なままにはしておけない。細かく分け、向きを変え、入れ替えて、組み直し、迂回させ——代替させる。

かちかちかちと、頭の奥が動いている。

硬い何かがぶつかりあう感触に似ている。歯車同士を緩やかに噛み合わせた質感に近い。工夫して加工して色んな別々の向きに変わっていたそれらが、人生を過ごす中で最適化されていたそれらが、歯車久方ぶりに動いている。

回るのではなく、動いている。

元の位置へと戻っていく。

正しい位置で、回るため。

かちかちかちと、



「駄目です!!」

通信から聞こえてきた声に、要請に、山田真耶は怒鳴り返した。

弾丸を撃ち尽くした武装を廃棄。拡張されているのはエネルギーの容量だけでなく搭載武装の数でもある。交換の終了、再発射と前衛の打鉄が敵機から離れるのはほぼ同時。放たれた弾丸は敵のみに降り注ぐ。

「そっちが大変なのは、そっちの方が大変なのはわかっています！ わかってるんです!! でもだからってこっちを放っておいていい訳じゃない!!」

学園の外と中で進行している緊急事態は2つ。『所属不明機の襲撃を受けている』という点では同じ。

けれども外では戦っている相手が『性能の高い無人機』と判明している。ある程度対処の目処もたっている。

対して中は——まずあれが何なのか『わかっていない』。

確かに言えるのはISではないという点だけ。ある程度ISについて知っている人間なら、それだけは即座に判断できる。原則が守られていないからだ。

ISのコアを搭載する機体は『人型』である必要があるという大原則が。

装甲や装備でどれだけ歪な形に膨れ上がろうとも、中核、原型は総てのISが『人型』——人を収められるように出来ている。そうしなければコアが絶対に起動しない。人型でなければ、女性でも動かさない。

搭載武装の性質も加えて、より未知な中の敵の方が総合的には危険。戦闘用の機体 toward させたいという気持ちもわかる。

だが、それで外の敵の危険が下がる訳ではない。戦闘用に調整された機体で、二人がかりで戦っているのに倒しきれないのがその証拠。訓練機で相手をするには危険過ぎる相手だ。

「わかるんです！ 戦い方が変わってる!! 私達が引いたら、こいつは——生徒を襲いに行く!!」

当初は立ち塞がる二機を撃墜するために行動していたはずなのに。今の無人機は反撃を最小限にとどめて、回避に専念している。それでいて攻撃が緩めば、いや二機の意識が逸れただけで——即座にその武装を学園の建造物へと向けるのだ。教員である真耶達の意識を自身に惹きつけるために最適な行動を、恐らくこの敵は知っている。

あからさまな『時間稼ぎ』。だが学園を覆うシールドが消失してしまった状況では、今戦っている真耶ともう一人が迎撃せねば、敵の攻撃はその総てが学園へと降り注ぐ。

「せめて……!」

真耶の——ラファールの腕が、機体と砲台を接続していたケーブル

を引き抜いた。学園からのエネルギーの供給がオフラインになる。

砲台が破壊されてしまえば、動きを縛るケーブルは外すべきであろう。だが砲台に設置されていた物理シールドは大分損傷しているが未だ健在。真耶自身も砲台そのものを捨てる気はない。それでも彼女はエネルギーの供給を打ち切った。

——他に回すために。

現在アリーナの中で行われている戦闘の映像と情報は受け取っている。だから彼女は学園のシールドが消失した瞬間にその理由を察する事が出来た。

零落白夜は、発動と引き換えに大量のエネルギーを消費する。あれだけの出力の零落白夜を維持するために、機体のエネルギーだけで足りるはずがない。

恐らく、今の白式は何らかの方法で学園から直接エネルギーを吸い上げている。

学園のエネルギーは膨大ではあるが、無限ではない。使っていけば底を付く。ならばここで僅かでも使うべきではない。

「遅れても行きます！ 先生絶対行きますから！ だから、それまで！ それまで、どうか……！！ お願い……！！」  
届くはずのない叫びは激励というよりは哀願で。

悲鳴に近い声だった。

▽▽▽

ISの最高速度は技術では伸ばせない。

全く変えようがない訳ではないが、操縦者の練度が上がったからといって性能を大幅に上回る値に伸びる事は無い。

だが、白式は加速する。名称と外見が著しく食い違った機体は、誰が見ても明らかな程にその速度を上げている。

答えは至極簡単で、これが白式本来の速度なだけだ。様々な理由によってかけられていた制約が。本来ならば絶対に外れない筈の数多の枷が。

全部外された、ただの結果。



手始めに音が置いていかれる。

踏み込みから斬撃の到達まで瞬き一つもかからない。燃え上がる炎に見間違えるほど出力を上げた光の刀身が振るわれ——そして、当然の様に迎え撃たれる。

白い刀身と白い爪が、がぎりとなみ合った。

防御不可能な筈の刀身が止まる、防御不可能な爪が止まる。光で形成された刃物同士の激突音は、共鳴のようでもあったし、反発のようでもあった。

金属から発せられる音とは似ても似つかない。零落白夜同士の衝突が初めて起こった事なのだから、間違いなく世界で初めて鳴った音。誰にも聞き覚えなどあるはずはない——それは本当に音だったのか。思考に直接入ってくるもつと別の何かではないのか。

拮抗は一瞬を幾重にも分割した一欠片ほど。ぶつかりあった刃物を持つ、当事者以外の誰にも認識できないほどの僅かな時間。

そうして、何もかもを置いていく。

一人と一体の周りで光が爆発するかのように膨れ上がる。光は塊ではなく——斬撃の“線”が無数に折り重なって出来ている、一を重ねた百の閃。

光の線は緩やかに消えていくが、消え切るよりも次の線が生まれる方が早い。前の前が消えるよりも早く、次の次が生まれていく。

繰り返され続ける斬撃は止まない。増えていく、より多く、より速く、より強く、一撃一撃の接触時間は生身の人間では知覚出来ないほど短い、激突音も同じく刹那。であるはずなのに連続している。途切れる時間が短すぎて、音もまた積み重なって爆発音の如き洪水と化する。

——だというのに、動いている。

斬撃をぶつけ合うのに必要な腕や脚だけではないのだ。他の総ても動いているのだ。

跳ね、飛び、転がり、受け、いなし、かわし、回り込み、噛み、不意打ち、引っ掛け——果てとしてようやく刃同士がぶつかりあう。それでいて斬撃がまるで連続しているように見えている。

例えるなら渦である。

無数の折り重なった線のどれが残光で、どれが光刃なのか他者にはもはや判別つかない。光に混じり飛び回る微細な金属片は、斬り飛ばされたか剥がれ落ちたか装甲か。既に割って入れる者は何も無く、収まるどころかひたすら増していく。

非人型機。四足歩行獣。鋼の獣——固有名称は『アブソリユート』。行動パターンそのものは酷く単純だ。形状特有の動き等はあるものの、全く予測がつかない訳では決してない。それどころか動きは読みやすい部類に入る。読む暇があればだが。

とにかく速い——早い。

単純な速度だけでなく、戦闘の進行そのものが恐ろしく早い。戦術、予測といった余計な工程を挟んだ時点で致命的な遅れになる。防御不可能な攻撃の総てが最短かつ最速で繰り出されるのだから。

金属の塊とは思えぬほどに、その動きは滑らかだった。人間どころか生命を有さぬはずの体軀は恐ろしく「生き生き」と駆動する。不自然なくらいにだ。

姿形が同じだからといって、生物に寄せる必要は無いはずなのに。咆哮を始めとした発声にしろ、動きの端々にあからさまな無駄が多い。獣に似せて造ったというよりも、野生の獣の血肉をオイルと金属に置き換えたかのように。

だからこそ、『獯猛』という形容が最も相応しい。

単純な力を比べれば人より獣の方が強く、単純な速度を比べれば人より獣の方が速い。機道具体で補強されているのは互いに同じ。

全開でないのも、互いに同じ。

適当に振るわれた爪の一撃に対抗するのに、何かしら威力を増すための一動作が必要になる。四肢のみの跳躍一つに追いつくのに、総てのスラスターを全開にせねばならない。そのくらいの戦力差。

それでも決着が未だ付いていない事が、今の白式の異質さを何よりも証明している。一方的に押し切られないだけで、十分に異常なのだ。

だが戦況は拮抗、と形容するにはいまひとつ足りない。

より軋みを上げているのは確実に人型の方。二機ともその場に留まっている訳ではないが、渦の中心そのものは大して動いていない。片方がその場に押し留めるように立ち回っているから。

力負けしている相手に力比べのような戦い方を選べば、じわじわと追い詰められていくのは当然で。機体に余計な負荷をかければ、後になるほど響いてくるのも必然だ。それでも未だ不自然な戦況は変わること無く続いていく。

つまりは。

まだ序の口ということだ。

▽▽▽

「——ッ」

セシリア・オルコツトの機体、ブルー・ティアーズの主武装はライフルである。他には自在に操作可能な砲台であるビットや、ミサイル——いわゆる射撃型の機体に分類される。

セシリアは、自身の役目を理解している。

あの正体不明の機械の獣が零落白夜と同じ、もしくは非常に酷似した特性の武装を搭載しているのは明らかだ。

故に同じ零落白夜を持つ織斑一夏の白式が最も前衛に相応しい。逆に武装の大半がエネルギー系であるブルー・ティアーズは、迎え撃つのに最も適していない機体の候補に挙がる。

ならばセシリアは前衛の援護に徹するべきである。

きちんと理解している。装備のロックはとうに外し、銃口は戦場の中心へと向いている。けれども蒼いレーザーは未だに一発たりとも放たれていない。

（手が、出せない。当てられないし、当てかねない……！）

まず単純に速すぎるのだ。

攻防が始まった瞬間に、セシリアは反射的に超高感度ハイパーセンサーを立ち上げた。高速戦闘用に調整された感覚をフルに使って、辛うじて大まかな戦況が追える程度。

加えて問題なのが、あの二機の装備にある。

特殊力場発生装置——虚空に力場を展開し、あらゆる場所を足場とする機能。零落白夜だけでなく、そちらまであの二機は同じものを積んでいる。

織斑一夏の訓練にそれなりに付き合っているセシリアは機能の特性を理解している。が、そこまで。機能で軌道がどう変化するのかを把握しきれていない。次にどう動けるのか、どう動けないのかを追いきれない。

更に追い打ちをかけるように、白式はまた別の特殊な装備も持ち出している。

機体の各部から飛び出した黒い帯状の兵装——それは敵機を突き刺す槍のようであり、機体を引っ張るロープであり、しなりつつ払われる鞭のようであり、時には大きく組み上がって敵を覆う檻のようでもあった。

とにかく。

狙いをつけた先に敵が確実に居ると断言できず、射線の先に味方が居ないとも断言できない。外れるだけならまだいい。この高速戦闘の最中に万が一誤射をしてみえれば、致命的な損失に繋がりがかねない。だから——未だに一発も撃てない。

「う、く——……！」

射撃武器が無いとはいえ、あの速度の機体にとってこのアリーナ内は『射程内』。目視できる距離に居る時点で安全圏ではない。眼を逸らした瞬間に細切れにされていない保証は無いのだ。何も出来ないにしても、目を離さず臨戦態勢のままに居る必要がある。

消耗しているという自覚があった。

「いーつちに……さーんっし……！」

不釣り合いな程に自然な声で我に返る。

まるで準備体操でもしているかのような呑気な声だ。セシリアは何事かと眼球は戦闘の中心に向けたまま、機体の視覚の一部だけを声の方へ向けた。

凰鈴音が本当に準備体操をしていた。

思考が吹き飛んだ。背筋を悪寒が走り抜ける。戦闘から完全に意

識が逸れた。危険な事だとわかっているのに、それでも堪えきれずにセシリアは直接顔を向けて叫ぶ。

「ばっ……止めなさいッ!!」

止まる訳がなかった。

ごう、とスラストターの光を膨らませて甲龍が『渦』に飛び込んでいく。超高速の刃が飛び交うその中に。高速戦闘装備を積んだ機体でも追いつけるかどうかというその中に、未だに修復しきれしていない機体だけを纏って。

「うおおおおお、お、ああああ、あ、あ——アアア、!!」

女子にあるまじき咆哮であった。もはやゴリラに入門しかかっている。野生に帰っているという形容に誰しもが納得するであろう勇姿であった。惨状かもしれない。

精神的にも、技術的にも、過去最高を容易く更新し続ける。それでも、操縦者のがんばりで絶対的な性能差は覆らない。

だというのに、鈴は渦には吞まれない。何故かと言えば単純な事。全部はわからずとも、片方の動きがわかるからだ。太刀筋、戦い方の根本——それらを形作る人間としての全部を、一緒に過ごした時に見せてもらっているのだから。

「夏ア!!」

でもほんの少ししか、近付けない。

いくら動きがわかって、安全圏がわかって、速度に差がありすぎる。これ以上近付けば確実に対応しきれず細切れになるだろう。何度か身代わりにした双天牙月はもう柄しか残っていない。とか邪魔だったのでとつくに捨てた。

攻撃が届く位置まで辿り着けることは絶対でない。

「——パスッ!!」

ここまでくれば、十分なのだ。

鈴は戦いに来たのではないから。

万が一にも取り損ねないように、斬られて損壊したISの腕部は捨てた。光刃飛び交う嵐の渦の最中において、生身の腕を晒して広げる。

白式から飛び出た黒い板黒板が、全部で八枚ある事に気付いたのは何人か居た。けれどもそれが七枚しか使われていない事に気付いたのは鈴だけだった。正確には一枚だけ攻防ではない別の目的で使われている。

その一枚がラウラを鈴に投げて寄越した。

攻防が始まってから、黒い板を一枚割いて白式がラウラを庇っている事に気付けたのは鈴一人。こちらに投げて寄越すだけの余裕が無い事に気付けたのも鈴一人。そのせいで、無理をした分じわりじわりと不利に傾いている事に気がついたのも鈴一人。

何故かと言えば、とつても単純な事。

——そういうやつだと、知っている。

太刀筋がわかる、戦い方がわかる——だけではないのだ。それらを形作る人間としての全部を、一緒に過ごした時に見せてもらっているのだから。

能力技能だけを知っているのではない。大体全部知っているのだ。何を考えているかなんて——言われなくともわかるのだ！

「ちやんとっ！」

全速力で、それこそ吹き飛ぶ勢いで渦から離れながら叫ぶ。でも、ここまでだ。

セシリアと同じように、鈴もまた自身の役割を理解している。誰より理解しているから、自分にしか出来ない事をやって、やりとげた。どれだけ不甲斐なさに叫ぼうとも、力不足に涙を流して嘆こうとも。これ以上鈴と甲龍に出来ることは何も無い。

後は総て、任せるしかない。

ものすごく危険だとわかっているのに、大切な友達を置いていく事しか出来ない。

勝て、とは言わないし、言えない。

がんばれ、とも言わないし、言えない。

「ちやんと、帰ってきなさいよね！ でないとあたし許さないからっ！！」

一番大切な思いだけ伝えて、鈴は戦闘から離脱した。

ところで勢い良く後方にすっ飛んだはいいが後の事を全く考えていなかった少女の名前を凰鈴音という。直りかけで無茶をさせた機体はダメージも相まってさりげなく制御不能であった。流れ星と化す最中で、鈴とセシリアの目があった。

二人は劇的に仲が良いわけではなかったが、鈴の視線による訴えかけは単純故にセシリアにきちんと届く。

『へるぷみーなるはや』

「は、はあっ!？」

視野が狭まっていた自身への反省とか、無謀ではあるが踏み出せた鈴への感心とかが。驚愕に吹かれてどこかへ飛んでいく。大慌てでセシリアは自分の体も物理的に飛ばした。

ブレーキを無くした甲龍の進路上に回り込——激突した。受け止めることなど到底不可能な状況であった。

辛うじて速度は殺したものの、完全に体勢を崩した三人と二機はそのままべしやアーと墜落。団子状態で数度バウンド、転がること数メートル。最終的に下からセシリア、鈴、ラウラで積み上がる状態で終結した。

「うぼあっ!？」

「へぶあっ!？」

落下の衝撃で悲鳴を上げる鈴。ラウラは未だ意識を失っているのか無言。一番下のセシリアは顔面を地面で強かに打ち付けた。ワールドがあるので物理的なダメージは無いものの。淑女的にはダメージである。

文句の十や二十をぶつきたいところだけれども。視界に入ってくるのはラウラを背負って走り出している鈴——その身体に既にISは無かった。蒼い機体を飛翔させ、逡巡しつつも武装を格納。空いた両腕で二人を拾い上げた。

「速くー！ 速くー！ 広がるから!!」

「……………!？」

謝罪と礼を後回しにして、鈴は叫ぶ。説明する時間が惜しいのか、

ぶつ切りな内容。それでもセシリアが意味を察するためには十分なもの。

あの二機は恐ろしい速度で打ち合いながらも、大まかな位置自体は変えていなかった。だがそれは恐らく、片方がそうなるように戦っていたからだ。傍に転がるラウラを巻き込まぬように。その場に押し留めるように立ち回っていたのだ——だが、もうその必要は無くなった。ならば、

鈴の叫びとセシリアの推測を実証するかのように。

音、光、余波——背後から届く何もかもが、一気に膨れ上がる。



かちん。

ようやく別の事をやる必要がなくなったから。

そうして総ての歯車が元の位置に戻って。

噛み合って、回り出す。



『凡人』と『天才』の差は何か。

生まれ持った能力値の差だろうか。確かにそれは正しい。実際に両者を比較すると能力値に著しいまでの差がある。

だが本当にそれだけなのだろうか。

『天才』は何もかもが『凡人』に勝っているのかといえば——そうではない事も多い。天才と言われるカテゴリーの人間には誰の目にもわかるほどの突出した能力がある。しかしそれ以外はむしろ凡人より劣っているというパターンが数多くある。

しかし天才の中にはあらゆる物を完璧にこなすタイプも稀だが存在する。ならばそれこそが本当の『天才』であり、『天才』という存在は『凡人』とは異なる別の存在なのか？

本当にそうか？

人間という生き物が行う可能性のある、行える総てを比較してもいないの？

本当は、わからないだけではないのか。特に比較するための測り方が整っていない分野においてはまるで未知ではないか。

ならば『総てにおいて優れている天才』は未だ証明されていない事になる。

逆に『優れているものは何も無い凡人』も証明されていない事になる。

単純な身体能力や技能では測れない、もつと奥。脳髓の奥の、更に奥。未だ見ることの出来ぬ範囲に潜めている何か。

現在わたし達の認識する『天才』と『凡人』の違いなど、“それが目に見えてわかるかどうかの差ではないのか。

観測の基になっている常識では測れぬそれを、あの日わたしは彼に見たのだ。

誰しにも眠っている。未知の領域の術。生まれ持った形状、配列、精神、その総てを最も活かせる根底ともいえる一種。

わたしはそれを『単一』と呼ぶ事にした。

▽▽▽

シャルロット・ルクレールはセシリア程戦況を理解できておらず、また鈴程に勇敢かつ無謀ではなかった。が、この場で誰よりも冷静だった。

(普通に割って入るのは、ちよつと無理だな)

他と同じく、アリーナ内からピットへ戻りながらそう結論付ける。

自分自身でも驚くくらいに冷静だった。眼前の理解を超える光景にも一切影響されず。滞りなく思考を働かせ、先を考える。

本当に何も出来ることはないのかと、自問する。

半端な介入では確実に邪魔になる。とうかこれ以上近付くだけでも邪魔になる。一步も動かず、何もせず、観客に徹するのが恐らく最も妥当で的確。

それでも考えを続けるのは、平凡なままでは嫌だから。可ではなく良い。他の誰でも出来る枠に収まっているのが嫌なのだ。

役立ちたい、有益でありたい——特別でありたい。

何かしたい。してあげたい。

感情の高ぶりから弾き出された行動指針。対して思考は、本当にびっくりするほど冷静だった。冷酷ともいえる程に。淡々と事実だけをかき集めながら組み立てていく。

(……………光が散ってる、衝突の余波、残光、違う——破片だ。どつちが——うん、零落白夜の方だ)

確証はない。直感でしかない。けれども確信があった。

シャルは先程の雪片式型の『光が凝固した刀身』を見ている。恐らくあれが零落白夜の“次”なのだ。そして一瞬だけ見えた正体不明機の武装も、恐らくその“次”と同じ格にある。

ならば今の零落白夜の刀身は、出力こそ大きくても根本的に劣っているという事になる。致命的な競り負けこそ起きていないものの、じわじわ削り取られる可能性がある。

ならば、

「……………」



あとはもう。

脳髓の奥の疼きを、直接腕に伝達する事だけに専念していればいい。

ずっとそうしているように。ずっとそうしたかったように。それだけしか出来ない。それが出来る。それだけを考えている。それだけしか考えられない。いつから、ずっと前——最初から、こういう造りになっていた。

——もつと速く、

目はいらぬ。眼球を動かしては追いつけない。それに情報が脳に昇ってくるまで時間がかかりすぎる。だから肉体の方はきる。機体の方は——残す。地形の認識は必要だ。それ以外はきる。

耳もいらぬ。音より速いものだから、こっちは本当に何も要らない。身体も機体も全部まとめてきる。

言葉なんか一番要らない。言語に割かれていた部分を丸ごと全部きって捨てる。空いた分を必要な方に回す。

それでもまだ動かしておかないといけない機能が多すぎる。人の体つてのは、意識しないだけでこんなにも色んな事をしていたのか。いいや、きる。機体が代わりに出来ることは全部任せてしまえばいい。

——もつと強く、

相手が動いているから適切な『位置』は常に変わり続ける。しかも尋常でない速度で。

補うためにより速く動くこうとすると、そう出来ない理由、法則、力——多種多様な理由が身体に纏わり付いてくる、ので。きる。

スラスタの推力という速く動ける理由だけになったから、加速。想定されていない速度の域に入ってしまったのか、機体の軋みが一段階を上げた。

激突。

干渉を感じる部分はもうきつているので、感触は知り得ない。ただ自分がきれたかどうかは解るので結果を知るには十分だ。きれてない。

相手の刃もだが、今度は勢いの方もいまいち通りが悪い。受けきれずに押しきられる。なので拮抗せず押されて後方へ。踏み込んだ感触が消える間もなく果てに——頭上を覆う遮断シールドに辿り着く。きる。

吹き飛ばされた時に与えられた力が0になる。動いていた理由が消えて、白式は静止する。止まるために要する過程をすつ飛ばしたから、機体が更に軋みを上げた。

当然の追撃を横から回り込ませた黒檻を四枚使って狙撃。相手は身体をぐるりと捻り、四肢総てを振るう。尖らせた黒檻の先端が細切れになってばらばらと落ちていく。無力化されるまでは一瞬だが、0ではない。

——もつと、

右手の刀身を足元の遮断シールドに沈み込ませる。シールドと発生装置を繋いでいる部分をきる。黒檻三枚も同様に刺し、浮いたエネルギーを刀身に混ぜ込んだ。

刀身が膨れ上がる。刃渡りはざつとアリーナの半分を越えたくらい。長さだけでなく、横にも大幅に増やした刀——とは呼べないただの塊を最高速度で振り下ろす。

腕部の関節の損壊手前の駆動と引き換えに。

点でも線でもない、面の斬撃が成った。

この程度で、仕留めきれぬ訳がない。

回避は出来ずとも、相手は迎撃が出来るのだから。隙だらけの大振り、故に重い一撃をぶつけられ零落白夜の一部があつさりと砕け散った。

白式の腕が伝達した負荷にあらぬ方向へとねじ曲がる——寸前に、腕部から飛び出た黒檻が逆方向に伸び、突き立ち、抑えつける。

相手は斬れない。

でも追撃は切れる。

こちらが切られる流れをきる。

あのまま追い込まれ、切断される筋道は断きれるてる。

相手の方は威力で競り勝ったものの、激突の衝撃に跳ね飛ばされ——ぐると回転、着地。それも巨大化した零落白夜の刀身の上に。

鋼アブソリュートの獣が駆けてくる。

光を灯した四肢で光を蹴って、翔ける。大気を割いて、疾走し、間合いを切り裂く。刀身をまとめていたエネルギーをきった。空中分解した刀身が大小様々な破片となって周囲に飛び散る。だが足場の崩壊を意に介さず、アブソリュートは岩場を飛び移るかのような気軽さで間合いを裂ききって——0。

迎撃は、間に合った。

もう何度目とも知れぬ、防御不可能迎撃可能の光同士の衝突。ただ次撃、関節部の負荷で立ち上がりの遅れた白式の腕が一拍遅れ。右肩のちよつと下辺りを白い光が通り抜ける。

握った刀ごと、身体の右腕と機体の右腕が宙に放り出された。

回り込んだ黒檻が腕を拾い、先端の光刃で刺突。躲される。残った左腕で黒檻の根本を掴み、旋回。間合いと軌道を変化させた一撃が相手の白い装甲を抉り取る。

浅い。脚を一本完全にきるつもりだったのに、薄皮一枚削いだ程度に留まる。別の黒檻が先端から腕だけを取って戻ってきて、そのまま巻き付いて繋ぎ直す。

——手が足りない、というより。

最初に身体を繋ぎ直した時と同じ様に、身体と機体に巻きついた黒檻が溶ける。正確には欠損部分を埋めるために最適な物質へと変化して充填されていく。

身体の方の腕も、機体の方の腕もまとめて元の形に戻される。接合、修復、補強——三秒もかかる、この攻防においてそれは長すぎる

時間だ。

“がぎり”

先端の刀身が止まる——啞えられた。こちらは刀を抑えられれば刃を失う。けれども向こうは牙が塞がっても四肢の爪が残っている。

《雪原》出力最大。迸るほどの力場を纏った脚部をぶつけ——左脚だった部分が三つの破片に変わった。別の黒檻が腕の時と同じように繋ぎ直す。だが元通りに動かせるまで今度は四秒もかかる。四肢が二つ、黒檻二枚が塞がった。次撃は、もう来ている。

——刃が、足りない。

『零落白夜』

白式の単一仕様能力。ワンオフ・アビリティ

そう、白式の能力だ。

雪片式型の機能じゃない。

だから、お前自身も光れッ！

ばちんつと蹴り付けた脚部に光爪が食い込む——食い込んで、止まった。

黒いフレームの表面ではなく、その内側から。白い光刃が突き破るように吹き出ている。そこを支点に、繋ぎかけの右脚で——叩き蹴る。

装甲だけでなく、その下のフレームの残骸も飛び散らせながら、アブソリュートが落ちていく。わざと盛大に身を引かれ、位置をずらされた。それに黒檻二枚を補強に使ったとはいえ、直りきってない脚の蹴りだ。直撃してもどの道威力が足りてない。

追撃。

スラスター、力場、重力、総て用いて下方へ右腕の刀身を突き出す。こちらの着弾よりも速くアブソリュートが弾かれるように飛び上がり、躲される。位置が入れ替わり、今度は向こうが加速をかけて爪牙を降らせる。

上から下への攻撃が有利といわれるのは、上から下へと落ちる力が働いているからだ。上から下へは助けになるが、下から上へは枷となる。

ならそれを断つてしまえばいいだけだ。加速する一因は増えずとも、減速する一因が減った事で機体は滞りなく加速。

降った爪を右手の刀身が受け止める。続いて繰り出された爪に――左腕を向けた。指先から鉤爪のように突き出た光刃は指の数と同じで五。それを束ねて腕と同じ程度の太さの一へ。

足の爪先から同様に突き破るように白が生える。胴を狙った蹴りは虚空をきる、そこにあった大気を断つて、伝達されていた振動を一瞬だけ無に返しただけに終わる。

行き先は見えている。四肢が届かずとも黒檻は届く、その先端に光刃を灯した六枚がアブソリユートを追う。

絡め取るように回り込む黒檻に対し、アブソリユートはただ速く走る。檻が出来る前にその爪牙で持つて、間合いの外へと駆け抜ける。

出来損ないの檻が機体の周囲に戻るよりも速く。不可視の足場を数度蹴つて向きをねじ変えたアブソリユートが白式へと迫る。

攻撃の踏み込みの寸前で、その身体が沈む。断きられた空間が力場の形成を阻む。出来損ないの力場では、鋼の体軀を支えるには不十分。それでも完全に踏み外すことはなく、体勢がほんの僅かに歪む程度。即座に立て直したアブソリユートが飛び退くように跳躍。

その瞬間でも、致命的なのだ。

左腕の先の刃をほどき、数と長さを増やす。避ける先に黒檻を回り込ませる。行える流れの総てを断れるように組み立てた。四肢を塞ぐには十分な数。かつこちらは右腕も空いている。

アブソリユートが、その場に止まる。

愚策とも言える行動。虚空ではなく、本物の大地を踏みしめながら鋼の獣は天へと吠えた。爆裂する音。聴覚がオフになっているのに、咆哮したのだと認識出来るほどの圧が伝搬する。

そうして。

アブソリユートが身体中から生やした光の刃に、こちらの刃が総て

叩き落とされる。更にはそのまま突っ込んでくる。

右手の刀身、左手の鉤爪、両足の爪先——では足りない。少しでも鋭角な部位に、スラスターにも——いや機体の部分すべてに。光刃を装甲と見間違えるほどに纏って、こちらも突っ込む。

刃同士ではなく、機体の全てが激突する。

機体と、身体の奥で何かが軋む。いや軋み続けている。一撃ごとに、大きくなっていく。見えずとも聞こえずとも、警鐘は意識に届く。想定されていない挙動を求め続けた結果として。負荷を蓄え続けた結果として、機体が緩やかに致命的に壊れていく。機体が保たないのに、より柔い身体の方が保つわけもない。

だから、何だというのか。

まだ、足りないのに。

機体の速さも、刃の強さも、能力の精度も、何もかもが思い描く最適にまるで足りていない。だからまだ止めない。止められない。こんな程度ではまだ全然足りない。

もっと速く、

もっと強く、

もっと、もっと、

——心身が、“ぴしり”、“ばきり”と、ひび割れる。

▽▽▽

縦横無尽に暴れ狂う黒檻が、時折アリーナの壁面に突き刺さる時がある。移動の補助や外れた攻撃に見せかけられているが、本当の目的は『補給』である。

シャルルはそれを解ってはいなかった。ぼんやりと察してはいたが、確信は無かった。それにどういう目的での行動かはどうでもいい——重要なのは、白式が一部でもこちらに近づく瞬間があるという点。

だから、その瞬間に全てを賭けた。

万が一に備えて試合前に準備していた作戦の一つ、二人しか知らない



い切り札を切る。

結果として、シャルル・ルクレールは賭けに勝った。それまでと同じように黒檻が本体へと巻き戻される。ただし今度はその先端に異物を括り付けている。

「あと、は——ッ!!」

ラファールの全身各所に配置されたハードポイントに武装が出現する。両手には複数の武装を同時に運用するためのアダプター、背部のスラスタユニットは丸ごと砲と入れ替わる。脚部を始め空いたスペースにはミサイルポッド等々——とにかく同時運用可能な武装総てを出現させ、トリガー<sup>ぶっ放した</sup>。

狙いは付けない。付けられない。白式だけ避けるなど器用な真似はできない。当たるかもしれないという可能性を込みで、それでもシャルは引き金を引いた。

とにかく一発でも多く撃つことを優先したフルバースト。一瞬でも、刹那でも、それより短くとも、あの二機の攻防を『停める』必要があるからだ。

けれども二機ともミサイルどころか弾丸よりも速い。視界を埋め尽くすほどの弾幕の中、何事もなかったかのようにひたすらに切り結ぶ二機が見えた。

「だめ、か!?!」

『いや、十分だ』

焦燥するシャルに、誰かが通信で応えた。

一言も喋れなかったのではない。喋らなかったのだ。身動き一つできなかつたのではない。あえてしなかつたのだ。指先一つ動かす力をも——この瞬間に温存していた。

破片だけを纏った腕を上げ、その左目を眩いばかりに金色に輝かせ。

『捉えたぞ……!』

ラウラ・ボーデヴィツヒの放つ不可視の網が、アブソリュートの四肢に絡みついた。

恐らく維持ができて数瞬後に引き千切られただろう。だがそう

なる前にラウラの側が限界を迎えた。僅かに残っていたレーゲンの腕部装甲は火花を噴いてはじけ飛び、エネルギーを使い果たした事で消えていく。

ちなみに背負っていた人間の一部分が火を噴いた事で鈴の髪がちよつと焦げた。

「ウ熱ア——!？」

「借、り……かえ、し………」

悲鳴を上げて飛び跳ねる鈴の背で、ラウラは今度こそ本当に意識を手放した。

『停まった』のは一瞬を気が遠くなるほどに分割した一欠片の間。それだけでも、戦況を動かすには足りるのだ。

黒檻が巻き戻りつつ、白式の左腕に巻き付く。黒折が回収した物を巻き込むように。

先端の異物の正体は——ラファールのシールド。余分なパーツが、オレンジ色の装甲が、吹き飛ぶように剥ぎ取られた。

現れるのは回転式弾倉と杭を組み合わせた武装。六九口径パイルバンカー。第二代型最強と謳われた装備——名称を《灰色の鱗殻》<sup>グレイスケール</sup>。

黒檻が三枚巻き付いて腕と武装を結び付ける。物理的攻撃力しか持たぬ筈の杭はこの瞬間だけ防衛不可能の光刃と化した。

最大出力の雪原、溶け落ちるほどに出力の上がつたスラスタ、後先を考えぬ、自壊覚悟の最大加速の踏み込み。万全ではないにせよ体勢を戻しつつあったアブソリュートは、四肢の一つを繰り出した。これまでと同じなら、致命的な競り負けは起こさない。

同じ、ならば。  
激発。

黒檻で強制的に性能と速度を引き上げられたパイルバンカーが断末魔のような発射音を上げる。が、まだ機構は生きている。

光爪が競り負けて弾き飛ばされ、衝撃にアブソリュートが仰け反った。

そして。がら空きになった胴部に吸い込まれる様に光杭が叩き込まれる。

激発。

発射の衝撃に耐えられず、パイルバンカーが歪みながら砕けていく。

激発。

機構が死んでもなお黒檻が無理やり弾倉を回して発射させる。

激発。

外殻の大半が吹き飛び、骨組みだけになってもなお発射させる。

激発。

もはや杭が辛うじて残留しているだけ。杭の纏う光が一層と輝きを増す。ここにきて更に出力を上げ――

激発。

杭も、他も、腕部の大半を巻き込みながらパイルバンカーが砕け散って吹き飛んだ。

白式の腕が残骸になるほどの攻撃を余すこと無く叩き込まれ、アブソリュートも吹き飛んでいく。わざと引いたのではなく、純粹な破壊力の結果として。

アリーナの壁面に叩き付けられ、更に地を数度跳ね、転がり――爆発。真つ赤な炎が吹き上がる。

しん、と。

先程までの攻防が嘘のように静まり返る。アリーナの中では赤い炎が揺らめくのみで、他に動くものは何もない。

安堵の息を吐いたのはセシリアとシャル。他にも大半の人間が、これで終わったと思っていた――そう思いたかったのだ。これでも駄目だとしたら、本当にどうしようもないから。

だから、無意識の内に目を背けていたのだ。

赤い炎。

真つ赤な炎なんて、ありえないというのに。

――『零落白夜』と『獣王爪牙』は同類だ。

だからこそ、どちらかの一方的な圧倒はありえない。斬り合い、ぶつけ合い、削り合うほどに。互いの能力はより高く、強く、研ぎ澄ま

されていく。

零落白夜が刃の数を引き上げた直後に、獣王爪牙も刃の数を増やしたように。同じことが出来るのだから、どちらかの優れている点ももう片方へのヒントになりうるのだ。

赤い炎が舞っている。

ごうごうと不自然なまでに勢いを増していく。白い機体は既に炎の内にあって姿が見えない。

【量子転送要請承認】

零落白夜が他から持ってきた物で補ったという事は。その発想を獣王爪牙が得たという事でもある。使い方を知らなかった装備が持ち出される条件が整った。

【各部接続箇所解放、不要装甲強制排除、冷却機構全稼働、活動限界残百八十】

“ごおん”と地響きのような音がした。

一度だけでなく何度も、規則的に。それが足音だと気付けたのは果たして何人居たのか。揺らめく炎の——炎のように見えるエネルギーの中から。

赤が歩み出てくる。

“ ”  
言葉ではない、しかし音でもない。更に野太く、重く、強く、雄々しく、そして禍々しく。咆哮が周囲一体へと迸るように轟いた。

全身に赤い増加装甲を着込んだ事で、メインカラーを白から赤へと変え。更にその背には身の丈と同じかそれ以上の大刀が背負われている。

——エンゲージ——  
交戦開始——獣王爪牙・緋緋色金

シャルがへたりこんで、鈴はラウラを投げ捨てて中に戻ろうとして、セシリアは鈴を止めた。そして最も危機である織斑一夏は、



生まれて初めてだ——こんなに充実してるのは。

必要な力を生み出す腕がある。あらゆるものに食い込める刃がある。

だからこれまで届かなかった数多の物が思うとおりに両断できる。けれどもそれはただの当たり前でしかない。

こんなにも断ちづらいのは初めてだ。

鴨が葱を背負ってくる——いや狼が刃物を背負ってきた。

同じ武器、同じ特性——同類。これだけ良質な相手には初めて会った。ただ強いだけではない、ただ速いだけでもない。俺の唯一にして根底の分野において匹敵している。

最も断ちづらいという事は。

最も断ち甲斐があるという事に他ならない。

楽しい。

今この瞬間が、本当に楽しい。

相手がこっちの想定を上回る度に、こっちもそれを上回ろうと湧き出てくる。より速く、より強く、より巧く、より正確に、今まで押し込めていた奥底の衝動を存分に回せているという実感があつた。ずっと座っていた後に思いつき伸びをした時のような、ずっと付いていた重りを全部外した時のような——開放感と高揚感が抑えられないほどにある。

それはまだ終わらない。

今も続いているのだ。

アブソリュートが“抜刀”する。背負った大刀がレールに沿って展開され、啞えるようにマウントされる。次いで機体の周囲を揺らめいていた赤光が刀身へと集中する。燃え上がる刀身を構え——アブソリュートが駆ける。装甲を増したのに、段違いで速い。身体の各部から噴き出ている赤い光——スラスタ。

残った黒檻の総てを周囲に飛ばし、エネルギーをかき集める。それらを雪片式型に集中させて最硬度にして最大威力の刀身を作る。長さはさほど要らない。とにかく硬く堅牢になるように、塗り固めるように。瞬時加速、脚部の力場による炸裂、一挙手一投足毎に、何かが致命的に壊れていく。もうどうでもいい。

より強く、より速く——あれを断つ事だけに専念する。

俺は、そのために在る生き物だった。

激突はアリーナのちょうど中央付近。

真つ赤に燃え盛るような大刀と輝きを最大に増した白い光刃が接触する。

“ざん”

零落白夜の方が中ほどで断ち切られた。

握っていた筈の雪片式型の柄は、いつからかばらばらに砕け散っている。握る手ごと身体から落ちていく。半分以上が刃の通った胴体もずれ——る前に残った黒檻総てが身体に巻き付いて固定する。

総ての黒檻が塞がるという事は、外からエネルギーを引っ張ってくる手段が無くなったという事でもある。

もう刀は無い。スラスターも分断された。生きている機能は今度こそ本当に数えるほど。巻きついた黒檻は修復のためとはいえ、体の動きを阻害して拘束も同然になってしまった。

「うん。ここまでだね！ 十分だよ、むしろ不完全な機体と能力でここまでよく粘れたといえる！ がんばったで賞をあげちゃおう！」

「ごおん、ごおんと響かせながら遠ざかっていく。それはアブソリュートが切り抜けた後に走り去っていくことを意味していた。その道筋にオイルと思しき液体が大量に零れ落ちている。向こうも無傷ではない。」

「ちよっ待って、もう無理だつてば！ それ以上はだめ、ホワーツやべえ白式が完全に引っ張られてる、こっちじゃ制御が——……」

まだだ。

まだ試していない事がある。

まだやりたい事がある。

まだできる。

まだやれる、

まだ——続けたい。

光も音も声も痛みも苦しみも、何も感じない。感じるための部分をもうとつくに断ってしまった。ただ奥底からとめどなく溢れる欲求だけがあり、突き動かされる。僅かでも動けるのならば、止まらない。そのためだけに生きるのだ。

それが俺の最も相応しいあり方だ。ようやくわかった——思い出した。

何がどうなるうとも。

あれが断てればそれでいい。

「もういい」

半ば千切るように身を捻った先に、人が居た。

消えかけのセンサーが、それだけを伝えてくる。他は姿も、形も、声も、何もわからない。今必要無いから、断ってしまった。

「頼むから、もうやめてくれ」

でも何故か、本当に何故かはわからないのだけど。

きつとそれは千冬さんだった。

「あなたが、そこまで代わることはないんだ」

位置だけは拾っているから、彼女がこちらの顔へ手を伸ばしたのはわかる。けれどもどういう顔をしているかはわからないし、何か言っているのかわかってても、内容までは拾えない。

「頼むから………お願いだ………」

緩やかな動作で、彼女はこちらの頭を抱え込んだ。向こうは生身なのに、機体を着たこちらと高さには差がない——脚部が半ばから溶け落ちている。

全部断っているのだけど。

どうしてか、この人が酷く似つかわしくない事をしているような、気が、する。

「何も言わずに、行ってしまわない約束だっただろう……?」

聞こえないはずなのに。わからないはずなのに。それは諫めるためではなく、叱るためでもなく、止めるためでもなくて。すがりつくような、弱々しい、

まるで、泣きそうなの。

どう応えようにも、声は出ない、両腕も繋ぎ直してる途中で、動かない。いやそもそも——身体でもう動かせる部分が残っていないかった。

自分の状態を自覚してしまったことで、身体が最後の支えの糸を切られた。残った機体がばかばかと展開しながら排熱。またはその動作にすら耐えられず、がらがらと崩れ落ちていく。

崩壊に任せるまま傾いだ身体は、地面に落ちる前に受け止められ——じゃない。抱きとめられた………抱？ おい仕事しろ触覚。というか何で消えてんだよ。誰だこんな重要な感覚断つたの俺だったわ。

未だに何も見えない、何も聞こえない、何も感じない、互いの位置だけで、辛うじて状況を知っているだけなのに。何一つとして、受け取れていない筈なのに。

——どうしてこんなに、温かいんだろう

「っしやあ！ ナイスちーちゃん意識が逸れた強制オフ！ オフオフオフ全部オフ!! 今日にはもう店仕舞いでーす!!!」

いや。いやいやいや。待て待てちよつと待て。

本当の本当に今更なんだけど。マジで今まで気付かなかつたんだけど。

……誰これ？





目が覚めるといふことは、まだ続けているという事だ。  
だから、俺はまだ続けている。

こうして、目が覚めたんだから。

ところで目を覚ましたら真つ先に入ってくるのは何だろうか。

まあ大体天井だろう。大穴で床だったりする。基本的には見慣れた自室の内装の一部だろうか。『起きる場所』つてのは無意識の内に決まっているのか、寝床を移したりすると起きた後に脳内の予測光景と実際の光景が一致せずに混乱したりするのだ。

だがそれは完全に見知らぬ場所の話で。ある程度見知った場所ならば、すぐに補正される。

ちよくちよく世話になつてゐるせい、保健室の内装は見慣れている。どこか一部でも目に入れば、そこが保健室なのだと思える程度には。

だから大きな混乱は無い。

はずなのだが、正直超混乱してる。

そもそもここが保健室なのだと思えるまでに結構時間を要した。何故かといえば、視界が別のもので埋まっていたから。

銀、白、真つ赤ともう一色は無機質な金色。

その全ての色を携えている人間に一人だけ心当たりがある。今俺の視界を埋め尽くすほどに顔を近づけている人間がまさにそいつ——  
—ラウラ・ボーデヴィツヒ。

白い肌でない別の白が見えるのは、包帯や絆創膏だろうか。後半戦にはほとんど参加していないが、前半戦で十二分に戦っていたのだから無傷なはずもない。

どうでもいいが、俺はベッドに寝ている。ラウラの顔はその状態の俺の顔とまっすぐ向き合っていた。決してベッドの横から覗き込ん

でいるとかではない。

いわゆる馬乗りである。

おい待て。これ本当にどうでもよくねえぞ。完全にマウント取られてるじゃねーか。起きたら即詰んでる。違う、一番おかしいのは——ここまで近付かれて気がつけなかったことだ。今の俺が？

いきなりぐいと胸ぐらを掴まれてもろくな反応を返せなかった。抗うという選択肢そのものが、脳裏に浮かばない。頭の奥は、今もなお何の反応も示さない。

なので、そのまま。

されるがままに——唇を奪われた？

「……………」

本当にただ、唇同士を重ねているだけだった。

こいつは俺に敵意を持っていたはずなのに。舌を噛みちぎる訳でもなし、何か飲ませてくる訳でもない。そもそも不意打ちをするのならもつと確実に急所を狙ってくるはず。

本当に、何がしたいのか、わからない。

「お前を私の嫁にする。決定事項だ。異論は認めん」

「てめえ何語で喋っておられる……………」

体勢も行動意味不明だが、続くラウラの第一声も意味不明を極めに極めていた。俺の人生の中で最も意味の解らない言葉であるのは間違いない。

まず嫁じゃなくて婿だろうとか、色々と言いたいことがある。あまりすぎて、逆に何も出てこない。ツツコミが大渋滞を起こしている。玉突き事故かもしれない。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いたが、違うのか？」

「ああ、そっちの意味か。言い回し自体はそこまで間違ってるよ。だけどそれは好ましい相手への呼び方だ。俺相手には一番当てはまらねえし、あと行動の方は本当に全然関係ねえ」

「？ 間違っていないぞ。私はお前を好んでいる」

「……………はア？」

もしかして。

ちよつと強く殴りすぎてしまったのだろうか。

「それに口づけというのも求愛の行動なのだろうか？　ならばそちらも間違っていない。私はお前が好きだし、今後共に在る存在として欲しいと思っっている」

俺の上で、ラウラはさも当たり前のように語る。冗談とは無縁な性格という印象そのままに。語る様子は真剣そのもの。言葉に嘘は一切ない。たぶん。

だからこそ解せない。

確かにぶつかつた結果として、ある程度認め合つたといえなくもない。ラウラの俺への態度が軟化していても、おかしくはない。だが、だからって何故ここまで一気に進んでいる？　進み過ぎじゃない？　懐かれたってレベルぶつちぎってるんだけど純粹に何これ。

「ああ、だがこれだけは間違えてくれるなよ。私がお前の物になるのではなく——お前を私の物にすると言っているのだ」

ラウラの顔が再度近付いた。睨みつける寸前まで力が込められ、二色の眼が爛々と輝く。一步も譲らぬと代弁するかのよう。

「お前をもらう。私にない強さを持つお前を、私の欲しい強さを持つお前をもらう——その強さをもらう。そして私が最終的に上回る！

そのために織斑お一夏前の総てを余すこと無く私の物にする……!!」

激戦をくぐり抜けた後だから、身体には治療の痕跡である包帯や絆創膏だらけ。髪もぼさぼさで、服だっしてしわだらけ。

「いいか。私が上で！　お前が下だッ!!」

その程度はねのけると言わんばかりに。

気高さをそのままに、美しさに陰り無く。

とんでもなく獰猛に、ラウラ・ボーデヴィツヒは言い放つ。

「騒がしいから様子を見に来てみれば、今日くらいは大人しくできん

のか怪我人共が」

簀巻にしたラウラを担いで、千冬さんが呆れるように言い捨てた。ちなみにその簀巻っぷりは相当で、喋るところか身動きすら出来そうにない程にぐるぐる巻きの強制安静状態である。

「こいつは別の場所に寝かせておく……織斑、お前もしばらくは安静にしておけ。事情聴取は回復してからだ」

「あっちよ、千冬さ——行っちゃった」

呼び止める声が聞こえなかったのか、聞く気がなかったのか。すっかりいつもの調子で、普段通りな口調で——教師としての言葉だけ残して、千冬さんは出ていった。

なんだろう。

あれから何がどうなったとか、あの犬畜生はどこ行ったとか、そういえばラウラ一回溶けてたけど大丈夫なのかとか、他の連中は無事なのかとか、今学園はどういう状況なのかとか——あんだだけ盛大にダメージ負った俺は、本当に大丈夫なのかとか。

色々と考えたり確認しなきゃいけない事があるはずなのだが。何か、こう、起きてからの展開がジェットコースター過ぎて。色々吹っ飛んでしまった感が凄まじい。

「いやもう！ 呼ばれるまで寝てよ!!」

思考をぶん投げた。用がありや嫌でも起こされるだろう。何か問題が残っていたとしても、どの道体力は必要になる。休める時に休んでおく事は、最善でなくとも最悪ではないはず。たぶん。

改めてベッドに倒れ込——右手のガントレットが視界に入る。俺自身もだが、機体も結構損傷していたはずだ。あと何か生えてた。

機体を手元に在るということは、誰よりも知っているやつが居るということでもある。

「なあシロ、相当ぶん回したけど機体の方どうなってる？」

俺だけしか居ない保健室の中に、俺の声だけが響く。

頭の内からは、何も聞こえない。

「あれ、おーいシロってば」

声は返ってこなかった。

音声も返ってこなかった。  
何度呼びかけてみるも、結果は変わらない。

「……………え？」

応えは、ない。

▽▽▽

辺りはしんと、静まり返っている。

消灯時間は過ぎていない。が、教員は別として生徒は出歩くような時間帯ではない。寮から少し離れ、アリーナまでもまだ距離がある。舗装された道でもない。本当に何も無い場所。

そこに、彼女は立っていた。

人目を避けるようにこの場所へやってきてから、彼女はずっと佇んでいる。

その手には携帯電話が握られていた。後一操作で発信できる状態であるのに、未だその指先が動く気配は無い。視線は画面を見ているようで、実際は何も見っていない。

心ここにあらず、と言うべき状態であった。

“びりりりり”

音自体は、何の変哲もない着信音だ。

けれども唐突だった。前触れ無く鳴り出した電子音は彼女の精神を盛大に不意打つ。携帯を取り落としそうになりつつも何とか掴み直し、慌てて電話に出る。

動揺に思案はすっかり流されてしまっていたから。  
音が鳴らないはずの携帯が鳴った事に違和感を抱く事は無かった。

『紅椿が恋しくなった？』

核心を叩き付けられる。

何かを言うよりも、何かを考えるよりも早く——意識の空白に言葉がするりと潜り込む。

今度こそ篠ノ之箒の手から携帯が滑り落ちた。

がちやんと音を立てて携帯は地面に転がる。画面の明かりが消えていないから、壊れてはいないのだろう。けれども既に耳元には無い。漏れ出た音が僅かに聞こえる事はあっても、声を言葉して受け取るのは困難である。

そのはずなのに。

だというのに——通話相手の声は何の滞りなく箒の耳に届くのだ。まるで今も携帯が耳元にあるように、はつきりと聞こえてくる。

『うんうん、そうだよね。辛いよね。自分も居たのに、届く距離に居たのに、何も出来ずに蚊帳の外だったもんね。箒ちゃんは割って入れる方法を知っているのよね。』

——前に一度使っているから。

オンリーワンが欲しい。オルタナティブ・ゼロ代用なきものが。置いていかれないための最高性能にして規格外仕様。ハイエンド他の有象無象と違い、追いつくためではなく、白と並び立つために』

一方的に告げられる。

事実を確認させるように。言葉を染み込ませるように。箒自身気付かない——ようにしていた部分も含めて——自覚せるように。

『大丈夫、わたしは箒ちゃんの味方だよ』

優しい声だった。べたつくような甘さがあった。まとわりつくような粘度があった。捉えた相手をぐずぐずに溶かすような響きだった。

『ちやあんと、』

用意して、

あげる』

篠ノ之束は、笑う。

ながいながい道のりの最中において。

『神様』なんて居ないのだと、わたしは知ることになる。

だから

わたしは、

▽▼▽

脅威も去ったので明日から通常通りの授業です！

とはならない。

なんせアリーナを始めとしてあちこちベコンバコンである。

校舎方面はほぼ無事とはいえ、システムとかが万全でない状態で無理に通常授業に戻す訳にもいかないのだろう。たぶん。

だからIS学園は数日間休校となった。それでもさすがに普通の休日扱いではなく、外出禁止——まあ要は自宅待機みたいなアレ。

一方の俺は、山盛りの精密検査やらで休みどころかむしろ普段より忙しい。おかしい。学園の外どころか保健室の外にすら出られな——これ軟禁って言わねーか。

検査の合間は自由は自由なのだが、することがない。携帯もISも手元がないし、面会時間も一日に三十分。やっぱこれ軟禁じゃねーか。

昼間もひたすら寝ているのに、不思議と夜には寝れて朝に目が覚める。

今日も同じように、カーテン越しの薄っすらとした陽光の気配で目を覚ました。

「む、起きたか。いい朝だな嫁よ」

俺の上にラウラが乗ってた。

全裸で。

「着ろ」



正確には眼帯を付けているから全裸ではないのか。  
いや全裸だわこれ。

「着ろ!!」

混乱しすぎて同じツツコミを2回繰り返してしまった。

上のラウラを振り落とそうと体を全力で捻る。が、俺の体が一回転しただけに終わる。気が付けば、ラウラに完全に抑えつけられる体勢へと移行していた。

そうだこいつ素で強いんだった。

「マジで何してんだお前?!」

「ようやく怪我が治ったのでな。夜這い? とやらに來たのだが……い、イマイチよく判らなくてな。手間取っているうちに気が付けば朝になってしまった……」

「ヒイお前夜からずっと居たのかよ!」

やっぱり、おかしい。

ラウラの接近に気付けなかったのは、試合当日の夜と今朝。これで2回目。

疑念を確信に変えないといけない。

『今』の俺は勘が異常に鋭い。察知と着弾が同時とかの無茶な状況でなければ、奇襲が成立しない。俺が気付いてなくても、反射的に体が動くくらいには異様だ。

だからラウラがどれだけ上手く気配を殺しても、触れる直前で体が勝手に動いてでも反応する。そして勝手に動いた体で俺も接近に気付く。

だがならない。ならなかった。

転校初日の最初の衝突では察知できた。試合の時もいつもどおりだった。

だが、何故か、俺の察知を潜り抜けてくる時がある。  
違う。

今最優先なのはこのガッチリ捕獲されてる状況からどう脱出するかだよ。ええい、関節と骨をいくつか諦めれば何とかかなるか。

「組み技の訓練が足りていないのではないか?」

無理だった。  
やっべえどうしよう。

「仕事を増やすな」

偶然やって来た千冬さんに、シートでぐるぐる巻きのミノムシに縛り上げられたラウラが横の方にすんと立て掛けられた。

面会時間が限られているのは生徒であって、教員は出入り自由である。

「身動き一つ取れん。さすがは教官だ」

「お前それでいいのか？」

何でちよつと満足げな顔になってんだこいつ。

「あの、教官。お尋ねしたいことがあります」

ミノムシのまま真顔になるのやめてほしい。

せめて解いて——だめだあの下何も着てねえじゃん。つか全裸でここまで来たのか。だったらヤバさの桁が跳ね上がるんだけど。行動が読めなさすぎて戦慄以外に道がない。

と思ったらベッドの端に丁寧に畳まれた制服が置いてあった。セーフ。

「あの試合の日に、私に起こった変化についてです」

「あー、そういうえば何か途中で溶けかけてたなお前。アレ何だったんです？」

言われてみれば確かにそうだ。

丸ごと全部が正体不明な後半戦と違い、ラウラとの戦いは通常の規格での試合のはず。だというのに異常が紛れ込んでいた。しかもあれは他の異常と違い、外部からもたらされたものでない。ラウラの内側から発生している。

「あれは結果として起こらなかつたと判断されている。システムそのものも完全に破壊されてしまい、積み重なっていたと証明ができないからだ」

「ですが確かにあの時私は！」

千冬さんは答えないと答える、ラウラが食い下がる。

どうでもいいけどシステムって言っちゃってるじゃん。何かあったって言っちゃってるじゃんね。

「……………そうだな。では今からただの雑談をする。もし関わっていれば機密事項で話せないが、関わっていないのだから、ただの雑談として話すことに何も問題はない」

そこで千冬さんは一旦言葉を切る。

俺たち二人というよりは、主にラウラへと視線を向けて話し始めた。

「VTシステムは知っているな？」

何それ知らない。

超初耳。

「ヴァルキリー・トレースシステムの、事ですか。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステム……ですがあれは」

「そう。IS条約でどの国家・組織・企業においても研究・開発・仕様すべてが禁止されている。現在はどこにも存在しないはずのシステムだ」

「違います教官！ 私言いたいのはそうではなく！」

話が難しくなってきたぞ。

こんな時に横から入ってくる解説音声が、今は聞こえてこない。あの試合の途中から、もうずっとあの音声を俺は聞いていない。

たぶんすっげーハテナ顔してたからだと思う。千冬さんがラウラから俺へ視線を移した。

「VTシステムがトレースするのは、正確には動きだけではない。機体どころか搭乗者の形状のすべてもだ。そのため発動の際には使用した機体を、トレース対象に変化させる現象——擬似的な移行シフトのようなものが発生する」

「あーはいはい。つまり、いったん溶けるってことですか」

「そうだ。そして変化後は強制的に指定された動きを延々と繰り返さ

せられる。そこに搭乗者の耐久性は考慮されない。短期間の限定的な高性能の再現のために、操縦者を使い潰す事になる。故に禁止されている」

ここまでわかりやすくなれば、さすがの俺でも理解できる。

レーゲンに積んであったのはこれだ。

溶けたラウラと実際に相対した時に、俺は『逃がすか』と感じた。だから無理をしても追ったのだ。咄嗟にそう感じた事に、今特性を聞いて納得がいった。

あの時のラウラは別の何かが変わりかけていたのだから。

「しっかし誰か知らんが、めんどくさいタイミングでスイッチ入れてくれたもんだな」

「違う」

俺のぼやきに、ラウラが即座に否定を入れる。

「VTシステムは単純に起動させただけでは、発動しない。システムが搭載された機体の操縦者の精神状態が………特定の、状態になる必要がある」

「一番必要なのは『願望』だ。自分は要らない、心の底から誰かになりたいという。他人になりきるシステムだからな。自分を見失う程の未熟な精神の人間にしか使えない欠陥品なんだよ、あれは」

あえて条件をぼかしたラウラを切り捨てるように。

織斑千冬が事実を突きつける。

ラウラが困惑していたのは、禁止されたシステムが積んであったからではなく。それを自分が発動出来た事の方だったのだろう。

「私が、私になりたいと思ったからですね——貴女に」

ラウラの声が震えている。

怯えているのかもしれない。

ブリュンヒルデ

それでマジで今更気付いたけど、千冬さんもヴァルキリーの内の一人じゃん。対象じゃん。あれ放つといったらニセ千冬さんになったのかよ。マジか。やべえじゃん。変わる前に叩き潰しといて本当よかった。実際そんなの見てしまったら——ちよつと我慢できた自信がない。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。お前は誰だ？」

「……………私は、」

質問として成立していない。だってまず答えを言ってしまっている。

それでも織斑千冬の問いに、ラウラは答えられない。答えられるなら、事実を突きつけられた直後でお言い切れるだけの自己があるのなら。システムは発動していなかった。

答えられない事で、ラウラは今自分の未熟さを証明している。

他ならぬ、最も尊敬する人間に対して。

「負けた理由が、改めて理解できました。でもこれは単に私の未熟さゆえです。貴女へなりたいたいと思つた気持ちは、憧れは……決して間違いではない、はずです。それだけは間違いにしていけない。だって、そうでなければ！ 貴女が居なければ！ いつか『私』になれるかもしれない、今の私はここに居ない!!」

原因の憧れを捨てないとラウラは言う。

わざわざ口にする。口にしなければ否定は絶対に返つてこないのに。だからこれは意思表示だ。仮に否定が返つてきても、それでも絶対に譲らないという。

そう出来る時点で、ラウラにはもうちゃんと自分がある。大きすぎる憧れと釣り合いが取れない、小さなものでも。あると証明できている。

問いへの、今の答えとしては十分に及第点だろうよ。

「そうか。まあ死ぬまで時間はたっぷりある、がんばれよラウラ」

「あ……………、はい！ はい教官!!」

千冬ちゃんラウラに対してはデレのタイミングが完璧すぎない？

「それと。今の私は教官ではなく織斑先生、だ」

「は、はい織斑先生！」

丸く収まった、とはきつとこういう感じなんだろうな。

余計なことと言って空気を壊したくもないし、もうちよい黙っておこう。

「さて話は終わりだ、もう部屋に戻れボーデヴィツヒ」

「織斑先生！」

「なんだ？」

「動けません」

沈黙に場が支配された。

実はずっとミノムシだったラウラと千冬ちゃんはクソ真面目な顔で見つめ合ったままピクリともしない。

まさかとは思うけどこれ俺が空気変えないといけないの。ちよつと荷が重くねえか。

あと三秒このままだったら声をあげようと思っていたが、千冬さんが無言のままラウラを小脇に抱えてそのまま持っていた。

絵面が完全にコント。

「ああ、そうだ織斑」

何事もなく戻ってこないで欲しい。小脇に抱えられたラウラも真顔のまま微動だにしないのやめてほしい。もしかして俺もコントへの参加を求められているのか。

「伝え忘れていたことが2つある」

違った。

良かった。

「許可が出た。今日から自室に戻って構わない」

「えっマジすかやつとここから出られるんですか！」

純粹に嬉しい。

思わず両手を上げてバンザイみたいなリアクションをしてしまったくらいには。

「それと授業の再開は明日からだ」

「」

悲鳴のレベルが上がりすぎて声として成立しなかった。

肉体的には全快したけど、精神的には止め刺されたんですけど。



「退学の手続きが終わった？」

「うん。ちょうどいい機会だった」

久しぶりの自室で、久しぶりに会ったルームメイトは居なくなると告げる。

なるほど確かにタイミングとしては悪くない。

襲撃で負傷した事にでもして、本国に呼び戻された、とかで十分いける。

それに今回はこれまでの比じゃないくらいあちこちが大騒ぎとも聞く。すこぶる上手くいけばすっぱり有耶無耶に——はさすがに無理か。無理だな。無理だわ。

「それでね一夏、ちよつと時間あるかな？」

「食堂が開くまでなら」

「そう言うと思ったから帰ってきて直ぐ切り出したんだよー。じゃあちよつと待っててね」

——見せたいものがね、あるの。

そう言つて、シャルは浴室に引つ込んでしまった。

どうでもいいけどなぜ引つ込む前に入口の方のドアの鍵を念入りに確認していたのだろう。

別に他意はないが、非常口を確認——鍵はかかっているが、それだけ。封鎖はされていない。人間が素通りするには小さいが、ISの全速力で突つ込めば簡単にぶち破れる。よし何かあっても退路は確保できて、

「白式まだ戻ってきてねえじゃん……!」

なかった。

嫌な予感はない——脳にちらつきはない。なので生命の危険は無いと思いたい。

でもなあ浴室かあ。前に浴室から無人機がこんにちはーしてるからなあ。どうでもいいけど後で聞いた話だとあの無人機、ドロドロに

溶けて水道管伝ってシャワーから出てきたらしい。ホラーかよ。

「何してるの?」

このくらいの距離から助走付ければ生身でもいけるか……? 的な検証を慎重にしていたら、浴室から出てきたシャルに声をかけられた。

「いやちよつと準備体操を……——」

振り向くと同時に言葉を止めた。

正確には、そこで止めざるをえなかった。

発言するリソースを、すっかり取られてしまったから。

「ど、どうかな?」

別にとんでもない格好をしていた訳ではない。

むしろ完全に逆方向、今までで一番当たり前の格好といえる。

髪型も変わっていない。けれども髪をまとめているのは無機質な髪留めでなく、小さなリボン。

制服の上は偽装のためのパーツがすべて外され——というよりか、偽装をする機構がないただの制服。だから前面の布が、膨らみによって正当に押し上げられている。

最も変化の大きいのが下。男子用のズボンではなく、女子用のスカート。それも正規の女子用制服のものよりずっと短いタイプ。

「私、ちゃんと女の子に見える……?」

見慣れたシャルル・ルクレールではなくて。

見慣れないシャルロット・ルクレールがそこに居た。

「シャル、お前……」

シャルロットはそれ以上何も言わなかった。

頬を染めて微笑みながら、静かに俺の言葉を待っている。

「何で女装してんの?」

人間は驚きが一定値を超えるとバグる。



そういうふうに出て来ているのだ。きつと。たぶん。おそろく。

「待て。悪かった。今のは俺が悪かった。本当悪かった。だから真顔で首を絞めに来るのはやめろ、やめてくれください怖い!!」

真顔だった。

すべての感情が抜け落ちた完全なる真顔だった。

怒りの感情も無いように見えるが、見えるだけだ。圧がすごい。確実に激怒している。いやていうかももうシンプルに超怖い。鬼気迫るにも程つてものを考えて欲しい。

「……………シャルロット・デユノアちゃんだよ。よろしくね  
織斑一夏くん」

「ミノムシちゃんにしか見えないですけど……………」

頭以外をシートでぐるぐるにくるまったシャルがベッドの上に転がっている。

三十分休むことなく黙々と俺の首を狙い続けていたが、ようやく少しは落ち着いたらしい。

それにしてもまたミノムシかよ。何でだよ。流行ってんのかそれ。

「ちよつと待て、お前今デユノアだったか?」

それは、名乗れない筈の名だ。

この学園に来たのもその名を得るため、何より最後のつながりと縋っていたはずの名。

だというのにシャルは何でもないように名乗る。あんまりにも当たり前で、普通だったから、反応がワテンテンポ遅れるくらいには。

「事態が動いたのはわかるけど、どう動いたかさっぱりわからん。説明頼んでいいやつかそれ」

「もちろん。ええと、そうだね。まずこの数日で私が学園に寄越された経緯を説明され……………あ、それでゴタゴタしててお見舞い行けなかったんだ。ごめんね」

申し訳無いという気持ちがあるのならまずミノムシをやめろ。

ただ話を遮るのもアレなので黙っ——いや待てよミノムシのまま超真面目な話になるじゃねーか。やつば遮るべきだわ。

「今回の偽装問題——つまり『二人目の男性』については学園や委員会

の上層部はもちろん、フランスはじめ各国も全部最初から知ってんだって」

あつ話始まっちゃった。

「いや、まあ、そりゃそーつつうか。バレねえ方がおかしいからそれはおかしくねえんだけど。いやでもやっぱおかしいわ。何で途中で止めてねーんだ」

「順を追うね。まずは一年以上前に、デュノア社が乗っ取られた」

「……はア？」

「デュノア社を掌握した『何か』がやろうとした事は、でっち上げた男性操縦者をIS学園に送り込むこと。偽装も適当だから、気付く人間も怪しむ人間も当然居た。でも根が回っていた。適当な偽装を簡単には抑えられないくらいに、いつの間にかあちこちが変えられていた。だからあえて通した。この異常事態を通すシステム、通す人間を——毒が回っている部分を洗い出すために。私は全容がはつきりするまで、あえて泳がされたって事だね」

淡々と説明を続けていたけど。

何でも無いように振る舞っているけど。

それでも暗い感情が表情から滲んでいる。

いやミノムシの絵面で全部台無しになってるんだけどさ。

「終わったのは退学の手続きというより、その『処理』なんだろうね。加えて今の学園はかなり慌ただしくなっているから、『シャルル』はお役目御免ってわけ」

「なるほ……いやちよつと待った、お前の姓が変わるのと繋がんねーぞ。あ、でも乗っ取られてたなら取引そのものが狂ってんのか？ 元々受け入れる用意があつたって事か？ あれじゃあ何で新しい制服？ んん？」

よいしょ、と。シャルが体を起こした。

ミノムシ（横）からミノムシ（縦）。

「今回の件の担当の——フランス政府の窓口から提示された私の行き先は2つ。一つはこのまま密かに帰国して、匿名の被害者と徹底して一市民に戻る道。もう一つは——シャルロット・デュノアとして学園

に入り直す道」

「極端な二択だなおい……いや違うそこじゃねえな。もう一択になってんな。姓を変えるってことはお前残るつもりなのか、学園に。そもそも本当に通んのかそんな無理が」

「無理だよ。普通はね。ただ全員グルで後で第三者に総てなすりつけて、有耶無耶にする事まですべて決まっていたとしても。主犯を引き受けたフランス自体はデュノア社の損害や面子でダメージを負ってる。だから少しは無理を通せる。『国』が推すのだから、理由付けのためにも私は大企業の娘として扱われる。合法的にデュノアを名乗ることを許される。IS学園の在籍記録も残る。肩書き、経歴——ここに残れば私には得られる物がある」

脳の処理能力が不足してきた感が凄い。

でも話は飲み込めてる。たぶん。しかしその上でどうしても解せない点が一つある。

国が、ただの個人にそこまでしてやる義理はないはずだ。

「ああ、うん。言われたよ。そちらの道を選びたいなら条件があるって」

聞かずとも返答が来た。

表情か態度かは知らんが、俺の疑問は察知されたらしい。

「改めて、君に近付いて少しでも多くの情報を集めてこいってさ。今度は社じゃなくて国からの依頼になるね」

「……………それ俺にだけは言っちゃダメなやつじゃない？」

確かに言った。言ったよ、お前に隠し事は無理だつて！

だからって初手で全部ぶちまけてくるやつがあるかバカ!!

「おま、お前それ俺が知ってたら全部吹っ飛ぶだろうが成立しねえよバカ!!!」

「あ、大丈夫大丈夫。絶対に特別に深い関係になれって話じゃないんだよ。ただ近くに居ればいい。君の周囲は前例のない事態が起こり

続けてる。私が近くに居るだけで、国が関わるとっかかりになれる。それだけで十分に価値だからね」

「……いや。いやいやいや。だとしてもそれを相手に伝えてどーするつってんだ話だろうがよ！ お前警戒されるとか拒絶されるとか、そつちの危険性出てくるだろーが博打じゃねえんだぞ!？」

「だから、全部言ったんだよ。君は嘘や悪意が嫌いなんじゃなくて判るんだ。警戒するのは、相手の真意が掴めないから。なら隠す方がマインスでしょ、騙し合いとか嫌いなんだから。逆に単純なぶつかり合いならそんなに嫌いじゃないんだよね？」

合っている。

嘘や悪意——まで精度はない。だが大雑把でも『危機』が察知できる時もある。だから『今』の俺はそれを前提に行動している。

腹に何か抱えている相手にはまず距離を取る。だから目的が『近くに居続ける』事なら、確かに言ってしまった方がいい。

いや違う。それでも成立しない。普通だったら成立しない。他の大多数が同じ事をしてもしようはならない。それは遠ざけない理由であって、近付ける理由にはならないからだ。

これは、すでに、いつのまにか、すっかり、俺の近くに居座ってしまつたシャルロットだからこそ成立する。

「私はね、生きるよ。隠れて怯え過ぎすのではなく——ちゃんと生きるよ。流されたんじゃない。屈したのでもない。この先の私の人生を手に入れるために、ここに残るって決断をした」

いつかの問いへの答えとして、決心が語られる。

嘘偽りのないと確信できるほどに、それは心の通つた言葉だった。

だが、それだけではない。

偶然か故意かはわからない。

しかしただの事実として、示し方が、言葉の選び方が。

ことごとく、ことごとく！ 『今』の俺が無視できないよう、拒否できないよう、してはいけないように詰めてある!!

「私のこと、結構君に話したり見せたりしたけどさ。君も、結構私に色々見せてるんだよね」

故意だコイツ！

俺はさつきから言葉を発していない。シャルが一方的に喋っている。だというのに意思の疎通はきつとちゃんと成立している。

そのくらいには、見透かされている。

そして何より俺自身も、ここまで見透かされるだろうなと思えてしまう。気が付けば、それくらいには俺はもうこいつと知り合って、関わっている。

「ね、一夏」

未だにくるまっただままだったシーツをシャルはほどく。

けれども脱ぎ捨てるのではなく、前を開くだけに留めている。

これからの自分女子を見せつけながら、シャルは笑う。

作り物の笑顔ではなく。

イタズラを企む子供みたいな、憎たらしいと感じるほどに生き生きとした笑顔で。

「深入りしちやっただね？」

神様はいない。

機構はあつても意思がない。

中途半端に進んでしまって、わたしはそれがわかってしまった。

わたしの願いは届かない、叶わない、おこりえない、ありえない、

ゆるせない



授業の再開日、朝のHR。

事情を知らない大半の生徒にとつてはただの連休明け。

その緩みきっていた空気が、転校生またかの登場でもってぶち壊される。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

壇上のシャルがぺこりと頭を下げた。

女子の制服を纏う今のシャルを、男性に見間違う輩は間違いなく居ないだろう。

「ええと、デュノア君はデュノアさん、ということでした。はああ……また寮の部屋割を組み立て直す作業が始まります……」

横の山田先生がめっちゃげっそりしてる。

もしかして知らされてなかった上に素で気付いてなかったんじやねーのかこの先生。

「え？ デュノア君って女……？」

「美少年じゃなくて美少女だったってこと!?!」

「待つて待つて待つて！ 事態についていけないんだけど！」

「誰か説明してくれよお!!」

「あつ織斑君の反応が薄いぞ! 野郎知ってやがったな!!」

教室は一斉に喧騒に包まれ、騒がしきで溢れかえった。

俺としてはシャルに関してはまだ驚きポイントを底抜ける勢いで使い切っているのだ。今更フリですら驚く気にならない。ぼけーつとして騒ぎが収まるのを待つばかりである。

どうでもいいけどオルコットの顔がマジで面白い。フレーメン反応した時の猫みみたいな顔になってる。

とにかく騒ぎは一向に止む気配がなく。

教室はシャルの正体への驚き一色に染め上げられているのだつ、

「ツツツシヤオラアツ!!」

「ありがとうございます! ありがとうございます!」

いや一色じゃねえな。

なんかちよいちよいノイズ混じつ、

「私もうシャルル×一夏でネーム切っちゃったのに!？」

ノイズどころか音爆弾!

「おい待て今の誰だア!!」

反射的に立ち上がって教室を見渡すも——今はクラスのほぼ全員が騒いでいるのだ。そこから一人を絞り込むなど、森の中で落ち葉を一枚探すに等しい。

「まあまあ落ち着いて織斑くん。女子あるところにね、それは在ってしまうものなんだよ……」

隣の席からなだめるような声。突っ立っていても発言者が見つかる気配はなし、これ以上探す術もなし。不本意ながらも諦めて腰を下ろした。

「毎回俺が受けなの超納得がいかねえ……!」

「えっキレてるのそこ?」



「……………」

授業の再開から数日。

学園は施設的にもスケジュール的にもほぼ元の姿に戻りつつある。寮の部屋割りも新しく組み直され、俺は一人部屋に。女子にクラスチェンジしたシャルはラウラと一緒に部屋になつたらしい。

「返事は無し、か」

視線の先には『戻ってきたもの』がある。

それは俺の右腕にあるガントレット——白式の待機形態。

白式という機体はすっかり元に戻っている。スクラップ同然までぶつ壊れたとは信じられないくらい、完全に元の形に戻っている。

けれどもその内側に居た筈の存在が、戻っていない。

——シロは、未だに何も応えない。

振つたりつついたり電波が入りやすいように高い位置に上げてみたりしてみた。

ダメだった。

そりやそうだ。

「あ、いたいた。一夏ー」

廊下の曲がり角の向こうから、シャルがひよつこりと顔を出す。

シャルは特例揃いの今年の中でもトップクラスに捻じくれた入学をした訳だが、クラスにもうほぼ打ち解けている。シャル自身の社交力なのか、それとも一組が細かいこと気にしない猛者揃いなのか。

両方だ。たぶん。

「今度の週末空いてるかな？」

「生きるのに忙しい」

「はいはい。それでさ今度臨海学校があるでしょ。水着買いに行きたいんだけど、僕はこの辺のお店とか知らないからさ。付いてきてくれない？」

シャルの言う臨海学校とは——正確には校外特別なんかかかつか。まあ要するに校外実習。んでその三日間の日程のうち初日は完全に自由時間。海のそばで自由時間となれば、泳ぐ以外の発想をする方が難しい。

持参する水着には一切の指定が無いので、絶対に新調する必要はな



い。だがシャルはまず『男性』として入学している。女性用の水着はそりや買わねえとねえわな。

「えー、そーゆーのは鈴とかに頼めよ。俺服の良し悪しとか全然わかんねーもん」

「は？ 一夏にセンスを求めるほど自棄にはなってないよ」

何を当たり前な事をみたいいな顔が目の前にある。

もしかして俺は今ケンカを売られているのか。

「いや一夏と一緒にいくと交通費とか経費で落ちるんだよね」

「リアクションに困る理由やめろマジでおまえ」

ここまで露骨な財布扱いはさすがに生まれて初めてされた。

その切り出し方で承諾がもらえらると思っただのかこいつは。

「後で請求できるから好きなだけゴハンおごったげるって言っても？」

「オツケー今週の土曜でいいよな！」

▽▽▽

シヨツピングモール『レゾナンス』。

駅前を含んだ周囲の地下街すべてと繋がっているシヨツピングモールである。

食べ物は和洋中を問わず揃っており、衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅。その他にも各種レジャーも抜きかりなく、あらゆる客層のニーズに応えられる。

要するに『大体何でもある』のだ。

更には交通網の中心でもあるここは地下鉄、バス、タクシーとあらゆる移動手段も備えている。市の何処からでもアクセス可能であり、市の何処へでもアクセス可能。ここに来れば大抵の用事は済み、更に遠出するための中継地点としても優秀な施設である。

IS学園からも直で来ることができるとあるため、ここを利用する生徒は多い。休日に出かける上で最も手頃で堅実な選択肢といえよう。

「わたくしではなく、箒さんを誘えばよかったのでは？」

「誘ったんだけど断られたのよ。最近元氣ないっていかぼんやりし

てるから、気晴らしになると思ったんだけどねー」

「先日の襲撃がまだ尾を引いているのかもしれないわね。鈴さんと違つて繊細なのでしょう」

「明日アリーナ空いてるらしいわよ」

「返り討ちにしてさしあげますわ」

そのショッピングモール内を、並んで歩くのは鈴とセシリア。事前  
に計画しての外出ではない。暇を持って余した鈴が偶然通りかかった  
セシリアを引つ張つてきた突発的な外出である。

「……………ん、あれ？　なんか近くに一夏居ない？　居る感じす  
るんだけど」

「何を突然言い出すかと思えば」

脈絡の無さすぎる鈴の発言に、セシリアは呆れ顔になる。はあやれ  
やれ、みたいな感じで頭を振る——と。動かした視線が向こうの通り  
の織斑一夏をばっちり捉えてしまった。

「都合よく居るわけがな嘘でしょう!？」

「ほら居たじゃん。あ、デュノアと一緒だ。おーい……………」

思わず2度見するセシリアの横で、鈴は居て当たり前みたいな顔で  
ある。

鈴はそのまま一夏とシャルの方に駆け寄ろうと走り出——さない。  
やや前傾な姿勢のまままでびたりと停止した。

「どうかしまして?？」

「面白そうだから後をつけよう!」

「普通に合流しなさいな!」

噴き出す好奇心を制御する気0の鈴が、すこぶる邪悪な笑みを浮か  
べている。

「いやデュノアって男のフリしてたでしょ。んでそれを一夏は多分  
知ってたんでしょ」

「そう、らしいですわね」

「秘密を共有した男女が同じ部屋でしばらく生活してたのよ? ——  
何かあるでしょ、あの二人」

「なにか」

「下手したら付き合ってもおかしくないんじゃないかなーって。休日二人で出かけてるとか怪しくない？」

「つつ……!?!」

言葉を盛大につんのめらせて顔を赤く染め上げるセシリア。

セシリア・オルコットはISの操縦技術に関しても、オルコット家の当主としても年齢にそぐわぬ実力を持つ。だが色恋とかの領域では絶対的に経験値が足りていない、慣れていない、免疫がない。悪意や策略が混ざった男女関係では話が変わるが——同年代と語り合うような、ありふれた色恋に関してはずこぶる初心者<sup>ビギナー</sup>である。

「むっ見失う！ ほら行くわよセシリア!!」

「え、ちよ、ちよっと待……わ、わたくしはどうすれば……!?!」

シユバーと駆けていく鈴。

おろおろするセシリア。

別に織斑一夏とシャルロット・デュノアがどうなっていようと、セシリア・オルコットの知ったことでは無い。セシリアが織斑一夏へ抱く感情は戦友であり宿敵である。プライベートを詮索する理由も必要も欠片も無い。

だが、待て。

ここで知ったことではないと踵を返すのは簡単だ。しかしそれではあの好奇心の化身みたいな感じの小悪魔<sup>鳳鈴音</sup>を野放しにする事にはしないか。

鈴の馬力をセシリアは嫌というほど知っている。誰かが暴走しないよう監視し、有事の際には止めねばならないのではないか。その責任から逃げていいのか、セシリア・オルコットが。否。断じて否である。なのでセシリアは鈴を追うべきだ。

いや追わねばならないのだ!

「ま、待ちなさい鈴さん——!」

たっぷり数十秒かけて好奇心に屈したセシリアは、鈴の後を追って走り出した。



このショッピングモール、野生動物の気配がする。

口には出さない。だが注意はしておく。いつ背中に突撃が突き刺さってきてもおかしくない。いわばここはすでに山中なのだ。

「一夏は水着買わないの?」

「必要がねえんだよな。元々持つてるのあるし。学校指定のも買ってるし」

直近の目的は水着だが、今後を考えると必要になる生活雑貨類もレゾナンスなら一気に揃う。ここさえ教えとけば物資で困ることはまずないだろう。店全体の大まかな売り場の配置を教えながら進んでいく。

「もし買うんだったら私が選んだけよっか?」

「いや別に、そんなくらい自分で選ぶ。ああ着いた着いた」

当初の目的の水着売り場に到着。

ここから先は男性用と女性用で売り場が分かれている。俺は買う気がないので、その場で待機。シャルは売り場に向かって歩き出——急に立ち止まった。

「せっかくだから一夏、私の水着選んでみる?」

「あれだけボロクソ言っついてか? 正気か?」

「どれだけセンスがボロクソなのが地味に気になるんだよ」

「上等だてめえ!」

「じゃあ三十分後にここに集合ねー」

女性用水着売り場。

男のソロで挑む場合、無人機がみっちり詰まったアリーナよりも危険地帯であるといえよう。土の代わりに地雷が敷き詰められ、更に地雷が追い埋めされた地雷原に等しい。

だが虎穴に入らないと虎は倒せないのだ。

退きたくないなら進むしか無いのである……!」

「だめだ酔ったもうむり超むり……」

五分と保たなかった。

カラフル過ぎて目がチカチカする。前に口に出したら鈴にアツパーされたから二度と言わないけどぶっちゃけ下着と何が違うんだよ水着って。種類が多い色が多い、そしてそこまで無駄に多くなる理由が何よりもわからねえ……俺には、何もわからねえ……

「あれ、織斑くんじゃないですか」

「山田先生？ どうしたんですこんな所——いや女性が居てもおかしくない場所だった」

売り場の端つこにそそくさと避難してぐったりしていると、棚の向こうから山田先生に声をかけられた。

学校ではほぼ毎日顔を合わせているが、外で出会うのは地味に初めてである。

「どうして女性用の水着売り場に……？」

「ちようどよかった。この売場でバツゲームみたいな水着ってどこに置いてあるか知ってます？」

「!？」

青ざめてふらつくように後ずさった山田先生を、後ろからやってきた別の人間が受け止める。今度もよく見知った人、恐らくプライベートであるのにサマースーツ姿の千冬さん。

「千冬さんも来てたんですか」

「……………こんな所で何をしている？ 理由によっては休日だが指導になるぞ」

「いやちよつとケンカ売られて」

「解るように言え」

「あっはい」

かくかくしかじか。

しつちやかめつちやか。

「バカ者」

めちやくちや呆れられている。

乗るなそんな安い挑発にみたいな目をされている。

「まあ、休日だ。咎めはしないが羽目を外すのも程々にな。私はさっ

さと退散するが――」

言葉を途中で止めた千冬さんが手にした水着をじつと見ている。タイミング的に、千冬さんも山田先生も臨海学校用の水着を買いに来たのだろうか。

格好こそ普段と変わらないが、中身は割と休日モードだった千冬さんが珍しい表情をする。悪戯っぽい笑みというか、挑発するような表情。

「何だったら私の水着もお前が選ぶか？」

「え、っ」

「真に受けるな、冗談――」

俺の間抜け顔に満足したのか。

くくくと笑って、レジの方に向かおうとする千冬さん。

「ラウラ！ ラーウラー!! 行くぞ！ この店ひっくり返して吟味するぞ!!」

「応ッ!!」

突然呼ばれたにも関わらず柵2つを飛び越えて

学園からずつと付いてきてた  
出て来たのがラウラ。

飛んできたラウラをキャッチしてそのまま店の奥へ駆け出したのが俺。

「あたしもやるー!」

「ちよっ鈴さ……!」

実は居ましたーのカミングアウトなく当たり前みたいな顔して突っ込んでくる鈴。

正気かこいつらみたいな顔をしているのがオルコット。

「……………」

軽い悪戯が極大の混沌を招いてしまい、無表情になってるのが千冬ちゃん。



織斑千冬が無造作に一つの水着黒のビキニを掴む。

その瞬間に、勝敗が決した。

「イエ———イ!!」

一夏と鈴がハイジャンプからのハイタッチ。我らが勝利者であると叫んでいる。

唐突に始まった織斑千冬水着セレクト大会であるが、そこにルールはない。組んではいけないなどと、決められていないのだ。

千冬と付き合いの長い一夏と、純粹に女子力の高い鈴は勝つために速攻でタッグを組んだ。勝てばよかろうなのだ。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ!!」

シングル敗者、ラウラ・ボーデヴィツヒ。床に崩れ落ちながらの、振り絞るような慟哭だった。悔しみを練り込みに練り込んだ、血が流れているような慟哭だった。

「オルコットさんは参加しなくてよかったの?」

「……するわけがないでしょう。デュノアさんは今までどこに?」

観客に落ち着いていたセシリア。

その横にやってきたシャルは、返事代わりに持っていた買い物袋を掲げた。

「僕は水着の他にも色々買うものがあるからね。ほら、最初男扱いで来てるから女性用の物はほとんど持ち込めてないんだ。だから一夏に一式揃えられる場所の案内を頼んだんだよ」

「ああ、なるほどそういう……」

「どうかしたの?」

「なんでもありませんわ……」

勘違いに踊らされていたことを知り、セシリアは消え入りそうな声で呟いた。

「ああでも、そもそもデュノアさんが水着を選んでもらうはずだったのでは?」

「ふふふ。元々冗談半分だったし……選んでって言って素直に選ぶよな人でもないでしょ。それに、大体わかったから」

一夏と別れてからしばらく、シャルは水着を見ていなかった。見て

はいたが、それは自分の視線の先にあるものではない。一夏が無意識にどういう水着に視線をやったかを診ていた。

自分の意思がなければいけない。

相手の嗜好に合わせ切るだけではないけない。

自分が着て嬉しく、かつ相手が無意識にいいなと思える一着。

相手の嗜好と自分の趣味を一番上手く両立する水着が、今シャルの手元にあった。

▽▽▽

ラウラ・ボーデヴィツヒは挫けない。

分身寸前の高速反復横跳びをしながらさんつつざん煽ってきた一夏と鈴に、渾身の捨てセリフと共に敗走してから数十分。ラウラは水着売り場に舞い戻っていた。

自分が水着を持っていない事を思い出したのである。

『私だ』

ラウラが通信を飛ばした先は、ドイツ国内軍施設のIS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』——通称『黒ウサギ隊』。

眼帯をした黒ウサギが部隊章であるこの隊は、隊長のラウラを始め全員が肉眼へのIS用補佐ナノマシン移植者である。元々は劣等の証であったラウラの眼帯だが、現在では部隊の誇りとして隊の全員が装着するようになっていた。

何も知らない人間が見ればラウラ・ファンクラブに間違われるかもしれない。

『——受諾。クラリツサ・ハルフオーフ大尉です。ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、なにか問題が起きたのですか?』

ラウラの通信に応えたのは部隊の副隊長。

部隊内で最高齢である彼女は、厳しくも部隊を面倒見よく牽引しており全員から頼られている。隊長のラウラでさえ例外ではなく、何かを相談するならばまず彼女が真っ先に候補に上がる程だ。

『そうだ。極めて重大な問題が発生している』



『部隊を向かわせますか?』

『いや部隊は必要ない。軍事的な問題ではない』

ラウラの真剣な声にクラリツサは通信の向こうで背を正した。

通信の相手がラウラだと分かった他の隊員達も、作業の手を止めて事態を伺っている。

『実は今度臨海学校というものに行くことになったのだが……どのよ  
うな水着を選べば良いか選択基準がわからん。そちらの指示を仰ぎ  
たいのだ』

『了解しました。この黒ウサギ部隊は常に隊長と共にあります。ちな  
みに現在隊長が所有しておられる装備は?』

すっかり全隊員がやり取りに集中している。

本当にファンクラブなのかもしれない。

『学校指定の水着が一着のみだ』

『何をバカなことを!』

『そうだ。私は今戦力不足を痛感している』

『!?!』

ラウラ・ボーデヴィツヒは自身の戦闘機能に自信を持っている。

だがそれ以外の何もかもが未発達なのだ、思い知らされたばかり  
である。故にラウラ一人では可愛さのジャンルにおいて、絶対に正解  
に辿り着けない。

ならば最も女子力の高い(と思っている)クラリツサに総てを託す  
事こそが、最善であると判断した。

『クラリツサ、嫁というすばらしい概念を私に教えてくれたお前の知  
恵が頼りだ。今の私に相応しい最力ワな水着を提示してもらいたい  
……!』

単純な容姿では決してラウラは劣っていない。

けれども、織斑一夏の周りには色とりどりに輝く心が在るのだ。今  
のラウラにはそれが判る。戦闘機能を抜いてしまえば、ラウラは最も  
劣っているといっても過言ではない。

己が遅れを取っているという自覚はある。だが心が直ぐに育つか  
といえは否。だからといって諦める、負けるというのはさらに否!

『生半可な可愛さでは、勝てない……………ッ！』  
『お任せください、隊長……………！』

鳴った……………！

戦いのゴングが……………！

想いのままに  
怒りのままに  
ここに世界を解きましょう



「おー……」  
放課後のアリーナ。もうちよいで遮断シールドに引つかかる程度の高度にて。

視界いっぱい広がるのは雲ひとつ無い青空。そいつがなんとも実に爽快なもので。色んなことをすっかり忘れて、見入る。

「おー……」  
そもそも何で前面青空いっぱいになってるかつー話なんだけど。今まさに盛大にこれでもかと吹っ飛んでる最中だからなんだよね。自立飛行じゃ、ないんだよね。

「ああああああア———!？」  
ようさつきぶり、現実。

一瞬呆けた事で制動と受け身のタイミングを完全に逃した。  
ぎよるん！ みたいな捻れまくった軌道を描いた後に、頭から地面に墜落——いや違う突き刺さったわこれ。少なくとも首は完全に埋まってる。景色が滅茶苦茶に土の色。

どうでもいいけど俺なんか定期的に埋まってねーか。  
「うーわ鈍っ。まだどっか数値狂ってんじやない？」  
『つってもデータ上は完全に元通りなんだよ』  
「おっかしいわねー……？」

ふよふよ近付いてきたのは、ついさつき俺をホームランした鈴@甲龍。声はたっぷり困惑まじり。加えて眉根を寄せて首でも捻ってそ

うな感じ。

ただ、鈴の次の一言は打って変わって明るい声色だった。

「とりあえず半端もなんだし全部埋めとこつか!」

『何がとりあえず? おいやめろ本当に埋め——待て。待て待て待て甲龍のフルパワーで埋めにかかるのはマジでやめ土木作業みてーな音してんだけど! 嘘だろもう胴体まで埋まってんじゃねーか!』

「一夏はお城とトンネルどっちがすきー?」

『やめろオ!!』

言うまでもないが、俺はアリーナに埋まりに来た訳ではないし、埋められに来た訳でも無い。バカが考える現代アートみたいなオブジェにされに来たのでも断じて無い。

じゃあ何しにきたかって、要は白式の『試運転』である。

機体は直りましたと言われ、実際に展開したらピカピカ。あれこれ操作していて何かエラーが出ることもない。

——だが、シロが未だに応えない。

目に見える範囲に異常はないが、目に見えない部分にデカイ異常が残っている。

はたして今の白式はどういう状態なのか。確かめるためには実際に動かしてみたが早い。だから鈴に声かけてちよつと付き合ってもらった訳ね。

試した結果が、これだ。

「でも問題あんのはどう見たって機体側でしょ。あんたは反応できてるんだから」

『あーまあ、そうだけどさ。ちゃんと動くんだけど、前より明らかに追従が遅いんだよな。その辺のズレがでかくてトータルの動作がすげー鈍ってる感じ』

機体が操縦に付いてこない。

動作自体は完全でも、動作が反映されるのが遅い。

今まではほぼノータイム、違和感なんてかけらも無かったのに。そこが絶望的って言えるくらい悪化している。

近接装備オンリーかつ接近戦で真価を發揮する白式に、この不具合

はちよつと洒落になつていない。

あと通常動作もだが、特に雪原の反応の悪さがマジで深刻に超やばい。いやマジでヤバヤバのヤバ。語彙力が消えるくらいにダメ。通常機動の技量がそこまででもない俺でも、使わないほうが機動が安定するレベルでヤババのバ。

「とにかくちゃんとメーカーに言つて直してもらいなさいよ。ISつてのはあんたと違ってデリケートなんだから」

メーカー。メーカーねえ。

白式の場合担当メーカー＝製造元じゃねんだからややこしいんだよな。

色々あつて後回しにしてたが、結局白式は未だに誰が作ったか判つていない。

だから『急に喋らなくなつたんですけど……』つて言つても『え、前まで喋つてたんですか……?』としか返つてこねえのな。

頭の心配されるの今回で四回目なんだよこっちは。

でもよく考えるとシロの存在を知っているのは俺だけだ。あれ？

ほんとに幻覚だったのか？ シロが俺の空想上の存在だった可能性が微粒子レベルでは確かに存在している……?」

「さーつと。これ以上やんのも無駄だろうし、あたしは——」

俺が自己の内面と対話を始めた横で、鈴が声を上げた。確かにこの状態で続ける意味はないし、切り上げるのが得策だろう。ただ帰る前に俺を掘り起こしてほし、

「セシリア——！・戦ろ——！！！」

弾丸のように飛んでいく鈴。

余波で掘り起こされると言うか吹き飛ばされる俺。

ごろごろと転がる最中で、オルコットの悲鳴が聞こえた気がした。

「……………居たのかオルコット」

アリーナの壁にぶつかつてようやく止まる。

防御機構はしっかり機能しているので痛みは無い。とはいえ機体が本当に万全なら、ぶつかる前に体勢くらいは立て直せているのだが。

ふいに。

再度空で埋まっていた視界に、影が割り込む。

誰かが俺を見下ろしている、

「僕もずっと居ただけだね。全然気が付かなかったよね。別にいいんだけどね」

シャルだった。

満面の笑顔だった。

すつげえニコニコしながら、俺に手を差し出している。

しばし逡巡して、俺は機体を格納してから自力で立ち上がる。

「人の親切は素直に受けなよ」

「いやなんかシームレスに投げ技に移行しそうな気がして」

「……………」

「その手があつたかみたいなの顔やめろ」

企み顔からアリーナの中央方向に視線を変えると、レーザーと衝撃波がこれでもかと飛び交っていた。

やりあつてる二人の口元も忙しないから、口撃の方もさぞ飛び交っているのだろう。

「機体、どう？」

「全くダメじゃねーけど良くはねーな」

「見ててそんな感じだったね。しばらくは修復に専念した方がいいんじゃないかな。半端な状態で動かすのは機体に良くないし、何より危ないよ」

「そりゃそーなんだけどな……………」

一理ある。

というか百理くらいある。

ただ問題なのは、修復の方法に目処が立っていないということ。

今のままではこの先一生大人しくし続けることになりかねない。

「でも実際に動かして試したいとか、今日みたいに模擬戦する時は次から僕に声をかけて。いつでも付き合うからね」

「いや別にそこまで気使ってくれんでも。そりゃ空いてたら頼むかもしれんけど」

断る理由はない。しかし逆にわざわざシャルを指定して呼びつける理由もない。その時空にいる誰かに頼めばいいだけの話だ。

だがシャルはきよとんとした顔になった。そして、今まさに暴風雨みたいになっっているアリーナの中央——正確には、そこで争っている二人を指差した。

釣られて俺も二人を見た。

指が今度はシャルの顔を指す。

俺もシャルを見た。

「白式の不調を加味してうまく手加減できるの、私以外に居る？」

「……………」

俺、今たぶん、いや間違はなくめつちやくちやにしつぷい顔してる。沈黙したまま数秒経った。まずった。これ完全に失敗した。適当になんか返して茶化しとくべきだった。この場で無言は肯定になる。

「んんん」

俺が暗に認めてしまったのを見計らうように、満足げに笑う顔がそこにある。

▽▼▽

「さあて。どーしたもんかなー」

止む気配の無い嵐渦巻くアリーナを後にして、更衣室。

着替えながら、そんな眩きが漏れた。

「機体、機体の修理かー」

白式の不調は、一刻も早くなんとかする必要はある。

授業くらいなら大変でも十分こなせるだろう——が、授業以上の状況では詰む。絶対に詰む。今の白式ではアブソリユートどころか無人機相手でも秒で詰む。

それに、何より。

足踏みしている時間が惜しい。

俺自身の、残り時間がわからないというのに。

「当たり前は付いてんだけど、その先がなー」

目があるとすれば、白式を作った人間を頼る事。

ポイントなのは誰が作ったか『わからない』という点。

誰にも知られずISを作れるという時点で、まず相当絞り込める。

更に加えて、唯一の男性操縦者の機体を作ったという事実を明かさ  
ない——すなわち名声に興味がないということ。

この条件を満たせるって時点で、答えなんて出てるよーなもん。

それが誰かといえ——バガア！ と音を立てて天井の換気口の蓋  
が吹き飛んだ。

なんで？

「しまった！ もうほとんど着ているではないか!!」

「ウウワワ——!!」

目の前に。

急にラウラが。

垂れてきた。

なんつうかバカみみたいに単純に死ぬほどびっくりした。連動した  
リアクションも死ぬほど単調になった。マツハで襲ってくるホラー  
に人間は凝る事ができないのである。

「状況があー！ なんも！ わからん!!」

「うむ。これは信頼できる筋からの情報なのだが、なんでも裸の付き  
合い？ をすると仲がより深まると聞いてな。確実に衣服を脱いで  
いるであろうタイミン<sup>着替え中</sup>グを見計らって仕掛けたという訳だ」

「あーはいはい訂正にどこから手えつけていいかわかんねー！ あと  
せめてドアから来いや毎度毎度！ 一日に通るドアの数を縛って生  
きてんのかお前は!!」

「別件で出遅れたものでな。ちよつとショートカットした」

バカみたいに跳ねくるった鼓動を必死にだめながらの俺。

一方ラウラは完全ニユートラル。淡々と告げた後は、逆さまの宙ぶ



らりんから危なげなく地面へと着地した。

相変わらず、こいつ、マジで、まーじで、頭に引つかからん！

来るタイミングが一切わからないから、四割増しくらいでビビる羽目になる。

「いや。いやいやいや。待て待てなんで服を脱ぎ始める？」

「着衣状態をお前と揃えれば、脱いだ衣服分の効果が見込めると思ってたのだが」

「そーゆーシステムじゃねーよ」

「そうなのか。そうか、ならば仕方ない」

この後、寮への帰り道でしっかり訂正しておこう。でないと後がまづい。今後服を脱ぐタイミングでの奇襲に怯えながら生きていく羽目になる。

とにかく止まっていた着替えを再開し、

「改めて全部脱いでもらうとしようか」

残りの着替えを諦めて全速力で更衣室から飛び出した。

下は完全に着てつからちよつとくらい何とかかなんだろ！

▽▽▽

アリーナ男子更衣室襲撃からおよそ20分ほど経過した後。

ラウラ・ボーデヴィツヒは自室にて思いを馳せていた。

未だラウラに追跡されていると思いい現在進行系で逃げ続けている織斑一夏を、ではない。

近づく臨海学校に向け、先程クラリッサとの間で行われていた作戦会議の内容を思い返していたのである――

『まず水着の色ですが。隊長はご自分に似合いの色と言われ、思い当たる色がありますか』

『ふむ。そうだな――黒、赤、もしくは銀辺りだろうか』

『さすが隊長。私も完全に同意見です』

アドバイサーであるクラリッサとの意見の一致に、ラウラは満足気に頷く。

それに織斑先生とお揃いの色であるし。

『なので隊長には白の水着を着ていただきます』

『何故!?!』

突如背中から刺されたかのような衝撃。

ラウラは反射的な絶叫を抑えられなかった。

『隊長。決して私はふざけている訳ではありません。次に水着の形状、というよりは水着を着用した隊長が目指すスタイルですが』

『そ、そうだな……水着は最カワとしても、私自身はあくまで屹然としているというか、冷徹さを保つべきだと思う』

『さすが隊長。しっかりと自身に適した在り方を見据えておられる』

アドバイサーであるクラリツサとの意見の一致に、ラウラは満足気に頷く。

織斑教官のような在り方こそが目標にして到達点である。

『なので隊長には『きやるん』としていただきます』

『きやるん!?!』

真正面から顔面を金属バットでぶつ叩かれたかのような衝撃。

ラウラは己の声が裏返るのを抑えられなかった。

『どうしたクラリツサ?! クラリツサ?! 私が今話しているのは本当にあのクラリツサか?!』

『そのクラリツサです。落ちていくください隊長。いいですか——』

慌てふためくラウラと違い、クラリツサは落ち着いていた。

声にも感情にも一切の乱れはなく。とても冗談を言っているとは思えない。

未だ動揺を残しつつも、ラウラは次の言葉を待った。

『隊長は同年代の他の生徒たちよりも遥かに高い戦闘能力を有しておられます。しかしながら外見は遥かに幼い少女です。その幼さは決して弱点ではありません。むしろ武器となりましょう。その武器を最大限に活かすために、あえて白を用いるのです。更にワンポイントで紫を加え、微笑ましさに留めた『背伸び』感を演出します。何よりも白の映える少女性、いずれ至る女性という将来性を秘めた紫。この相乗効果により今の隊長の外見上の魅力は完璧なものとなるでしょう』

う。だが、まだです。そこできやるんとするのは。普段は質実剛健を体現する隊長が年頃の女の子らしくあろうとする。そのギャップには隊長が想像する以上の破壊力が生じます。完璧に出来る必要はありません。むしろ多少不完全な方が良いままであります。慣れぬ仕事に戸惑いながらも、振る舞う姿を相手の網膜に叩きつけるのです。隊長は少女としては未熟。しかし未熟とは可能性。故に隊長が少女であること、女の子であろうとする行いを止めることはこの世の誰にも叶いません。無論容易な事ではないでしょう。苦難もありましょう。羞恥もありましょう。戦いとは違う痛みもありましょう。それらすべて秘める必要はありません。動揺も恥じらいも痛みも好意も何もかも『貴方のためだけに生じた感情』として標的へまとめて叩きつけてやるのです」

ちなみに、黒ウサギ隊ドイツ側では。

直立不動で日本のラウラと作戦会議を続けるクラリツサを、周囲の隊員達が固唾を飲んで見守っていた。

『さすがは黒ウサギ部隊の副隊長……！』

『伊達に日本のマンガやアニメを愛好してはおられない……！』

『なんて冷静で的確な判断力なんだ……！』

ちなみに本当にどうでもいいことではあるが。

彼女達は勤務中であるので、今この瞬間にも給料が発生している。

『ハッ!?!』

『ふ、……』

『副隊長殿が……』

『『血を流しておられる……！』』

直立不動かつド真顔で、興奮しすぎて鼻血を流しながら作戦会議を続けるクラリツサの姿を、日本のラウラは知る由もなかった。

まあ見えてても感心するだけかもしれないが。

『こ、言葉の意味は全くわからんが……！……お前ほどの戦士が、そこま  
で言うならば。私も覚悟を決めよう……！』

『隊長……！』

『クラリツサ……！』

『ぐ』武運を……！』

『ああ……！』

「やはりクラリツサに相談したのは正解だったな……」

頼りになる副官とのやり取りに思いを馳せながら、ラウラは何度も頷く。

ただ思考より帰還し、目を開けたラウラに瞳に映るのは——辛い現実だった。

「フッフ……」

クラリツサに出来るサポートは水着の手配と振る舞いのアドバイス。

物理的な距離がある以上、それが限界なのだ。そう、届いた物資を用いた戦闘準備はラウラが単独で行わねばならない。

「ダメだ……ッ！」

姿見の前でラウラは崩れ落ちた。映るのはどう見ても結んだとは言えない、爆心地のような有様の髪型。一般的な女子的感性が低いラウラでも『あ、これはダメなやつだな』と判るくらいの完璧な失敗であった。

そう！

戦闘能力全振りのラウラには！

身だしなみや最低限のおしゃれが！

できないのである！！

「わ、私は……こんなにも……こんなにも、弱い……！ 私はいつもそうだ……失敗する……やりとげられない……誰も私を……誰も……」  
打ちひしがれた敗残兵の如きラウラが地べたで身悶えている。ただ髪を結ぶだけの行為に20回以上失敗し、ラウラのメンタルは限界を迎えていた。

さして。

この寮の一室はラウラ・ボーデヴィツヒに割り当てられた部屋である。

しかし一人部屋ではなく、ルームメイトが存在する。

(……………ええ、何これ)

ルームメイト——シャルロット・デュノアは無様に転がるラウラを眺めながら、死ぬほど困惑していた。シャルにとつてのラウラ・ボーデヴィツヒは好戦的な危険人物という印象が強い。実際にラウラが好戦的であつたし、危険な振る舞いもあつた。下手に干渉すれば噛みつかれるのでは、という懸念は決して間違いではない。

しかしながら今日の前にいるラウラは弱りきつていて。ならばその時点で、シャルロットの取る行動は決まっていたのだろう。

「——はい。できた。こんな感じでいいのかな?」

「お、おお……………」

鏡に映るラウラの髪型はシンプルなツインテールに変わっている。

先程までの元の容姿の良さでも相殺できない極限無様状態とは違い、シンプルに可愛いといえる仕上がりだ。

(一応恋敵になるんだけど……………ま、いいや)

経緯は一切不明なれど、ラウラは一夏への好意を示している。

そんな相手のおしやれの手伝いをするのは、賢いとは言えないのかもしれない。それでも鏡に映るラウラがあんまり目をキラキラさせているものだから。

「あ、あの……………他にも試してみたい髪型がいくつかあるのだが、た、頼んでもいいだろうか……………」

「い、いよ!」

鏡越しにそう問うてくるラウラに対して。シャルは笑顔で応える。

賢くなくとも、きつと間違つてはいないはずだと思う。

「すごいなお前は。まるで魔法のようだ。どこで研鑽を積んだのだ?」

「研鑽つてほどでもないけど。僕は子供の頃に……………お母さんが教えてくれたんだよ」

「……………そうか。母がいれば、教えてもらえる事なのだ、これは」  
シャルはラウラの出自を知らない。

けれども複雑な出自であることを今察した。故にそれ以上深入りはせず、銀の髪を扱うことに専念した。ラウラはシャルの心情を察したのか、気にしてすらいないのか。ただされるがままに髪を任せている。

違う方向性ながら、思いを馳せるのは互いに母という存在について。

静かな時間が、しばし流れた。

「シャルロット。お前に頼みがある」

「どうしたの、急に深刻そうな顔して」

ラウラが沈黙を破った。

その表情は先程までどうってかわって、まるで戦士のような顔つきだ。急な変化に戸惑うシャルに対して、ラウラはめっちゃめっちゃ深刻なトーンで告げた。

「私に女子力を教えてくれ」

「なんて？」



「あれ？…(どこどこ)？………………え、マジでどこどこ?!」

やべえ超迷った。

人間って本気で焦ると、思った以上に周囲が見えなくなるらしい。学園内の今まで来たこと無いエリアに迷い込んでしまったらしい。見覚えのある建物が一切ねーな。

ただ迷っただけならば、まだマシだったけどさ。

俺、着替え中に飛び出してきちゃったんだよね。

だからISスーツに制服のズボンっていうすげーちぐはぐな格好してんだよ。最初は上裸だったからスーツ出したんだけど、そう思うと以上にはズボンが浮く。

「まーしゃーねーな。誰かに道聞こーつと」

いざとなつたら、通信で知り合いの誰かに迎えに来てもらえばいいのだ。後でいじられたりデカめの借りにされたりしそうだから最終手段とするが。

「あれ、鍵かかってんな」

一番近くにあつた建物の入口にきたはいいが、横のパネルにロックを意味する表示が出ている。IS学園には一般生徒が入れない箇所も結構あると聞いてはいた。もしかしたらここら辺がそういうエリアなのかもしれない。

「入れなくてもいいんだけど中に誰か居ねえかな。インターホンとか付いてないのこれ？」

パネルを適当にペシペシする、と。

短い電子音と共に——ロックが解除された。

「え？」

目の前の扉が音もなく開く。

生徒なら入れる場所だったのだろうか。とりあえず誰か居ないかと中を覗き込んでみる。結構な広さのあるその場所は、作業場と研究室を足して4をかけたような様相。

要するに相当とっ散らかっている。何に使うのかさっぱりわからない工具や設備、辛うじてISの部品とわかるもの。

全体的に乱雑だが、少し奥には特に物が積まれ山のようになっている一角があつた。恐らく何らかのちゃんとした部品なのだろうが、知識のない俺には瓦礫の山にしか見えない。

「誰——と、考えるまでもなかったな。そのパス持ってるのは、僕以外には一人しか居ないんだ。君だよ、入ってくるのは」

瓦礫の山から、声がした。

周りを押しのけるようにして突き出た腕が、そのまま周囲の部品をかき分けるように押しのける。埋まっていた誰かが、ひよつこりと顔を出した。

唐突だが。

俺には特に親しい友人が二人いる。

一人は昔馴染みの凰鈴音。

そしてもう一人は、中学で知り合ったやつ。

「やあ一夏。久しぶり」

名前を藤倉統。

『今』の俺の、唯一の男友達がそこに居た。